
幻想幼女リリカルキャロPhantasm

もによ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想幼女リリカルキャロPhantasm

【Nコード】

N58100

【作者名】

もによ

【あらすじ】

ある日目覚めるとキャロに転生していた主人公。

努力空しく追放されてしまいましたが、リリカルマジカル、テキストに頑張ります。

これはネタ中心のゆるい作品……の筈でしたが、最近はシリアス風味です。

時間がかかっても完結させるつもりなので、温かく見守ってもらえると嬉しいです。

原作開始は37話から。60話以降はシリアス展開。予定では全8

3話＋、残り4話です。

プロローグ（前書き）

注意：Caution!!

本作品は「魔法少女リリカルなのはStrikers」ならびに上海アリス幻樂団「東方Project」の二次創作小説です。

本作には独自設定および独自解釈が多数存在しますが、それらは全て、原作とは一切関係ありません。

ブローグ

テンプレ、それは二次創作のお約束。

トラックに轢かれたり後ろから刺されたりして死亡した後チート能力を引っ提げて転生する、割とよくある話である。

これはそんなテンプレに巻き込まれた、ありふれた話のうちの1つである。

ブローグ 欲しくなかった物

い、今起こったことをありのままに話しますねっ！！

「普通に寝て起きたら、赤ん坊になっていた」

いきなり何言ってるんだと思うでしょうけど、私にも何が起きたかサッパリなのです。

転生トラックとか神様とか、そんなチャチな物では断じて無い、テンプレの恐ろしさを味わいました……。

へ？ 何が起きたか分からないとか言ってるくせにテンプレとか口走ってるじゃねーか、ですって？

……確かに言ってますね。自分で答え出してるのに無理にネタに

走ったせいで、無茶苦茶言ってますね私。

自覚症状無いけど相当テンパってるみたいです。おーけー。落ち着くんでちょっと待っててください。

幼女状況整理中……

はい、落ち着きました。もうアレですね、さっきまでの自分を殴ってやりたい気分です。

冷静になって考えると相当馬鹿なこと言ってましたね私。大体、テンプレとか転生とか、そんなファンタジーが実際に起こる訳無いですね。

ついさっきまで寝てたんだから、最初に夢の可能性を疑うべきでした。

そう、これは夢。覚めればまたいつもの日常が始まるっていうだけの話。だからこんな訳分からない夢、さっさとおさらばするのですよ。

というわけで、お休みなさいです。ぐう……

覚めない夢は現実と変わらない

どこかで聞いたことのある言葉を思い出しました。全く、縁起でもないですよ。

目も覚めたことですしさつさと朝食を作ろうと思い、立ち上がりあれ？ おかしいです、体が少しも動きません。マサカマサカマサカ

さっきまで一笑に付していた転生説が浮上してきたのを考えないようにし、辛うじて動く首を90度傾けます。

そこにあつたのは

触っただけでも壊れそうな、ぷにっぷにの自分の手でした。

まちですか……。

そうこうしているうちに、周りでは時間が経過していきます。今気付いたのですが、私はどうやら抱かれながらどこかに移動しているようです。

まだ満足に開かない目で周りを見ると、いくつかのテントと、民族衣装のようなローブを羽織った人が何人かいるのがうつすらと見えます。

話し声もぼつぼつ聞こえてきますね。何か英語っぽい言葉で話し

てます。詳しい内容までは分かりませんが、単語の拾い読みくらいならできます。

……「竜」とか「魔法」とか気になる単語があったけどとりあえずスルーで。

ここはアメリカ大陸の辺境で、ゲームや小説の話で盛り上がってる可能性だってあるのですから。

まだファンタジーな世界だと決まったわけではないですよ。

そうこうしている内に私を抱いていた人がテントの1つに入っていきます。

中には大人が数人と、「村長」とか「族長」といった言葉がすごく似合いそうなお爺さんが待っていました。

私を抱いてきた人と、お爺さんが何か話しています。

そういえば今まで気にしなかったけど、抱いてくれてる人って私のお母さんなのかな？ とか考えつつも2人の会話に耳を傾けます。

幼女聞取中 (Now listening) ……

流石に細かい所は分かりませんでした。どうやらこの村長（仮）が、私の名前を付けてくれるそうです。

まだこの世界で生きていく決心とか全然ないけど、どうせなら格

好よくて厨二つばくない名前にしてくださいよと願いながら、名前の告げられる瞬間を待ちます。

「Her name is……（この子の名前は……）」

ドキドキドキ……。

「Caro・（キャラだ）」

ナンデスト？

あーうん、今のナシ。多分聞き間違え「Caro, your name is Caro, Caro Rulushie・（キャラ、貴方の名前はキャラ、キャラ・ル・ルシエですよ）」現実逃避中に連呼して追い打ち掛けないでくださいお母さん（仮）！！

しかもご丁寧にファミリネームまで付け加えて!!ここまで聞いたら、リリなの世界で確定じゃないですか!!

ああ、さっきまで英語だと思っていたのはミッド語ですか!!
そんな所から伏線ありましたか!!

こうして私はキャラの名前を貰い、リリなの世界で生きていくことになりました。

あ、最後にコレだけは言わせて下さい。

追放フラグは要らないです――――――!!

ブログ（後書き）

初めまして、作者のものです。

とりあえずこんな感じで始めてみましたが、どうでしょうか？

一人でも読んでくれる人がいる限り投稿し続けたいと思うので、
これからよろしくおねがいします。

主人公、デバイス設定（前書き）

今作の主人公キャラと、所持デバイスの設定です。

多数のネタバレを含むので、全話読了していない人は自己責任で見てください。

主人公、デバイス設定

主人公設定（60話時点）

名前

キャロ・シエル

性別

女性

出身

第7管理世界アルザス

魔力量

AA+（霊力分も魔力として換算するとAAA、

妖力も足すとS）

所持デバイス

「夢幻珠」「ペスカトーガ」

呼び名

「桃髪の子鬼」「ランク詐欺」「見た目詐欺」等々……

人物紹介

キャロ・ル・ルシエに転生した本作の主人公。

アルザス追放の際、ル・ルシエ出身である事を隠す為、シエルの姓を名乗るようになった。

その名称にルシエの面影が残っているのは、彼女の無意識的な未練なのかもしれない。

性格は真面目で努力家。頭も回るが少し抜けており、うっかりミスをする事もある。

モチーフは風神録の早苗さん。だったのだが、裏社会に入った辺りから黒い一面が増え、むしろ永夜抄のてゐに似てきている。

行動原理は基本的に自分の欲求優先で、JS事件を乗り切って平

穩に暮らすのが目標。

全てをハッピーエンドにするなどという考えは持つておらず、スルーしたり干渉しないで見捨てる予定の事が多々ある。ひよっとすると冷たい人間なのかもしれない。

その反面、一度会ってちよつと話しただけの相手を助けようとする一面もある。追放された事がきっかけで「孤独」や「居場所」に過敏に反応しているのかもしれない。意外と寂しがりやなのかも。

また、虫が大嫌いであり、特にGに似た形態の者はサーチした瞬間にデストロイされる。

合言葉は「G・即・殺」。

藍や妹紅曰く妖怪らしい。

見た目は普通の子供だが、健康診断では赤字のオンパレードになった。

保有技能

竜召喚 A

竜を召喚し、己の僕として使役するレアスキル。

4歳の時点でヴォルテール召喚に成功しており、この時点で召喚技能自体は完成している。

運用効率と真の姿になっても小さいフリードがネックになっていたが、前者は訓練によって、後者は原作開始が近付くにつれて成長しており、これらの欠点はすでに解消されている。

ただ、召喚師バレを嫌うキャラがこれらを使うのは、余程差し迫った時だけだろう。

補助魔法 B+

ブースト系魔法による自己や他者への身体強化。

原作と同程度か少し高いくらいである。

身体強化は妖力であるのがメインとなったために使用頻度はそう高くない。哀れ。

グレイズ B +

弾幕を見切り、かすり、回避する能力。

このレベルになると、端からは体をすり抜けているように見え、チツ、チツ、チツと服をかする音が聞こえるようになる。

「空を飛ぶ程度の能力」や「狂気を操る程度の能力」との併用で、更にランクアップする。

太極拳 B +

モードちゅ……、「龍」で習得した近接戦闘技術。

ちなみにユニゾン時はA +。数年の鍛錬により、非ユニゾンで1ランクダウン程度に。それでも達人レベル。

魔導師社会のミッドチルダでは、ほぼ最強ランクかもしれない。海鳴に行くとその限りではないが。

剣術 B

剣を振る技術。流派は魂魄流の二刀流。

剣を使う形態が少なく、太極拳ほどは訓練しなかったためこうなつた。

一心スペルは一通り習得したが半霊が無いので、このままだと完全習得は不可能である。

うつかり C

思わぬ所でフラグを立ててしまう程度の能力。

デバイス設定

夢幻珠

分類 ユニゾンデバイス？

本作のキーアイテム。

108の珠からなる数珠で、その一つ一つにユニゾン形態が格納されている。管制人格は藍。

管理世界と幻想郷の技術の結晶とも言え、その製作には、紫と河童が深く関わっているらしい。

元々幻想郷の技術だけでも、能力付与して弾幕を張る、陰陽玉等のオプションは製作可能であり、そこにリンカーコアの解析式とデバイスの技術、サポートに付く妖怪の代わりの分霊体を混ぜ合わせた結果、無限珠が生まれた。

ユニゾンの効果は、形態に応じた基礎力の上昇、「〇〇程度の能力」の付与、格闘技や剣術といった技能の取得、スペルの使用などがある。

技能やスペルに関しては、ユニゾン時にしっかりと使い込めば習得可能で、別形態時にも応用できる。例えるなら、FF9のアビリティ習得システムに近い。

また、メインとして選んだ形態以外に一つだけサブ形態を選択することができる。その場合、能力のみが追加され、効果はメイン時の半分程度になる。

バリアジャケットはユニゾン形態分のバリエーションが存在するが、キャラはモード「萃」（伊吹萃香）のバリアジャケットを愛用し、他形態でもこれをデフォルト設定にしている。

ペスカトーガ (P e s c a T o g a)

分類 ブーストデバイス

キャロがマフィアの取引現場から「借りて」いったデバイス。当時の最先端の部品が使用されており、JS事件時でも十分一線で使えるレベル。

P e s c a はイタリア語で「桃」、T o g a は英語で「衣」である。

直訳すると「桃の衣」。桃でキャロを、衣で補助魔法を現している。

しかし、これにはもう一つ意味がある。

アルファベットを並べ替えると S c a p e g o a t となり、身代わりを意味するようになる。

これは「夢幻珠を隠すための身代わりに過ぎない」というキャロ流の皮肉である。

一応AIは搭載されているものの、知能はそれ程高くない。プログラムに応じて応答するだけで、人格等は存在しない。むしろ作中での扱いを考えると、人格が無い方が幸せである。デバイスの存在意義的な意味で。

実際、作中ではセットアップこそされるものの、ブーストデバイスとして使われていたのは108部隊にいた時くらいである。然もあらん。

主人公、デバイス設定（後書き）

設定は随時更新していきます。

ユニゾン形態の詳細等は、東方Wikiなどで元ネタを調べてみてください。

第1話 日常

第六管理世界アルザス

そこには「ルシエ」と呼ばれる少数民族が存在する。

「竜召喚」という異能を持ち、人里離れた山間部で守り竜と共に暮らす流浪の民である。

そのルシエの集落のテントの中で、少女は本を読んでいた。

近くを通りかかった大人が覗いてみると、本には色とりどりの植物の写真が載っており、それが図鑑であることがわかる。

（この子くらいの年なら絵本とかを読んでいるのが普通だろうに、将来は学者かな？）

等といったことを考えながら、大人はその場を去っていく。

まるで親の考えそうなことだが別に不自然ではない。

ルシエの民はその数の少なさ故に、皆が家族のような付き合いをしている。

少女にとっては部族の皆が自分の親で、皆にとっても、少女は傲慢の娘なのだから。

ただ、もし本のタイトルにまで目が行っていれば、もう少し違う感想を持っただろうが。

あれから早くも3年が経過しました。

転生当初は自分に起こった理不尽にパニックになって、色々周囲に八つ当たり（夜泣きの意味で）したりもしましたが、そんな事を繰り返しているうちに、自分に起きたことを冷静に受け止めるようになった。

あの時自分が不眠症にしまった数名には、今でも申し訳ない

気持ちで一杯です。

特に私の世話をメインでやってくれたお姉さんには、今でも頭が上がりません。

私のお母さんなのかな？と最初思ってたんですが、どうやら違ってみたいで、親について聞いても

「キャロちゃんにはちよつと早いかな」。

とか

「ごめんねー。いまちよつと用事があるからまた今度ねー。」

とか、上手い具合にはぐらかされてしまつて分かりませんでした。行方不明なのか死んだのかだけでも教えて欲しかったんですけどね。どっちにしろ3歳児に聞かせる内容じゃないから誤魔化してくれているんでしょうけど。

まあ、分からないことは後回しにして、今は自分に出来ることをするので。

そう、やがて訪れる追放の日のために！！

……なんかテンション下がってきました。

気を取り直してさっきまで読んでいた「食べられる野草図鑑」を手に取り、勉強再開です。

ん？そこ、「コイツ何やってんの？」みたいな目で見ないで下さい。

別にふざけてる訳じゃないのですよ。これは原作知識から導きだされた。ちゃんとした対策の1つなのですから。

追放フラグが立ってから、私は色々考えました。

まず最初に考えたのが、プランA

「フェイトに保護してもらう」

という、原作通りの展開です。

5秒で却下しました。

というのも理由があつて、原作では「キャラが管理局に保護されるまでの描写が一切無い」んです。

つまり、自分の機転だけでその展開を引き寄せる必要があるんです。

そこで、よく考えてみてください。

「4〜6歳程度の子供一人」「山奥で放り出され」「道中命の危険に会わず」「都合よく管理局に保護され」「さらにフェイトの目に留まる」、そんな確率を。

真面目に考えて有り得ないですよ。普通なら人里に着くまでにアウトです。野盗とか野生動物とかに襲われたら確実にピチユリますよ私。

フリード暴れさせてどうにかするにしても、数でこられたらどうなるか分からないですし。

運が良ければ会わないかもしれませんが、そんな運が私にあるとは思えません。幸運ランクは精々E〜D位でしょうね。そもそも運が良ければ追放フラグ自体立ってないでしょうし。

そして仮に、運良く人里に着いたとしましょう。

そこで管理局に保護してもらう訳ですが、ルシエの里から出た事の無い世間知らずな少女……

どう考えても悪い人に騙される絵しか思い浮かびません。

管理局員を語って近づいて来られたら、他に頼るものが無い私には信じるしか道がありません。

アタリを引ければ万々歳なのですが、もしそれが局員の振りをした偽者だった場合、

「薬物中毒END」「ロリコンの慰みものEND」「奴隷END」
e t c ……考えるに悲惨な未来こんにちは、ってことになりかねません。

またまた運良く管理局に保護されたとしましょう。

原作を思い出して下さい。管理局に保護された後、原作キャラは各部隊で持て余されました。

色々酷いですよね。何が酷いかって言うと、

「竜召喚のスキルがあるとはいえ、なんで小学生にもなっていない年の幼女を戦力として使うの前提で考えてるんだゴルァ!!」

ってのがもうね……

あの時の原作キャラの独白に「フェイトに保護されるまでは、やりたい事など考えた事が無かった」って内容のがあったことを考えるに、自ら局員に志願したとも考えられないですしね。

こういうケースって、リミッター掛けてから里親探したり、孤児院に入れたりするのが妥当じゃないの？って何度も考えました。

「敵陣中心に放り込んで暴れさせる位しか役に立たない」とか言ってた局員もいましたよね。全く、人の命を何だと思ってるのかって話ですよ。

とにかくこれもNG。ここまで来ておいて人間爆弾ENDとか嫌すぎる。

とまあ色々考えた結果、プランAは却下なのです。にしても原作キャラ、よくもまあフェイトルートまで辿りつけましたよね。悪運A+とか持つてるんじゃないだろうか。

次に考えたのがプランB

「能有る鷹は爪を隠す作戦」

その名の通り、竜使役の力を隠して目を付けられないようにする作戦です。

子供の身に余る力を持っていたから追放されるわけで、なら「無

力な子供の振りしてればいいんじゃない？」という、単純ながら理に適った作戦です。

プランAがBad End満載なのに比べて、こちらは普通に暮らしてればいいだけなのでお手軽。

外に出たいならちゃんとした大人になってからか、保護者同伴で行けば安全です。

特に問題も見当たらないので、最初はこのプランを採用して日常（赤ちゃん生活）をエンジョイしていました。

問題が出てきたのは1歳前後の時でした。

赤ちゃんの時は出来ることが少ないので、はつきり言って暇な事が多かったです。

食べると寝るだけじゃあ、暇で暇で堪りませんでした。

そんな私の数少ない暇潰しが、「魔力の運用」でした。

ある日、私はいつものように暇を持て余していると、ふと自分の中に、よく分からない力の流れ？みたいなのを感じました。

意識を集中させて注意深くその力の流れを追ってみると、丁度自分の心臓がある辺りに集まっていくなのを感じられました。

原作知識から魔力とリンカーコアについては知っていたので、きつとソレだろうとアタリを付けました。

それからというものの暇な時間が出来ると、まだ満足に立てない手足の代わりに、リンカーコアに蓄えられている

魔力をいろいろと動かしてみても遊ぶようになりません。

力付けるとまずいんじゃないかと考えつつも暇には勝てず、原作よりも力つかなければいいか、と自分に言い訳をしながら始めます。体外に出すと力が抜けていく感じがしたので、手足に循環させるように操作していきます。

傍目からは寝転がっているようにしか見えませんが、かなり集中して操作してます。それこそ、周りの音が耳に入らないくらいに。

……一度集中し過ぎておっぱい飲むのを忘れて、夜泣きして催促したことがあります。

言葉が話せたらマジで謝りたいと思いました。

とまあ、そんな調子で暇を潰してた訳なのですが、最初に言った通り1歳前後の頃、問題が発生しました。

いつものように暇潰しで体内の魔力をコネコネコネ、粘土みたいにこね回してたんですが、

「アクセルシューター1発くらいなら撃てるんじゃない？」

という思いつきで、まーたぶん無理だろうなーとか考えながら、ノリで指先に魔力を集中、固めるだけ固めてから、指先で打ち出すイメージを送る

ヒュン……ジュッ！！

マジで出ました。っていうか、テント焦がしながら貫通していき
ました・・・

それを見て、自分のやらかしたことに初めて気付きました。

そもそもミッド式魔法はデバイスを使って運用される物。

デバイスに複雑なプログラムを詠唱させ、術者が収束や拡散、誘
導などの制御を担当するのが普通なのです。

それをシューター1個だけとはいえ、「デバイス無し」で「無詠
唱」でやらかしてしまったのだからタチが悪い。

流石に術式の構成は無茶苦茶だったみたいで、1発撃っただけで
ガス欠状態になったけど、それを差っ引いても、原作キャラより力
があるのは考えるまでもないです。

まさか暇潰しにやっていた遊びがこんな結果を招くとは思っても
せず、プランBも泣く泣く諦めることになったのでした、まる。

そうやって辿り着いたプランC

「一人で生きていける力を身に付ける」

と言うか、もうコレしか選択肢がありません。

運命に流されるのも、運命から逃げるのも駄目なら、いつそ正面
からぶつかってやるうじやないかと、紆余曲折を経てようやく辿り
着きました。

……1年もかかるとか遅すぎる、とか言わないでくださいね。

普通に立って歩けるようになる前に気付けたのだからセーフなの
です。

まあそういうわけで、今はサバイバルに必要な知識を勉強中です。
動物狩るのは難易度高そうなので、とりあえず採取スキルだけで
も習得しておくのです。

さて、長々と説明していた間に粗方読み終えたので、勉強の時間はこの辺で終わりにします。

おやつまでまだ時間があるので、最近生まれたフリードと一緒に、魔力運用を兼ねた遊びをします。

力をつけると決めた以上、もう自重なんてしてません。

遊びの内容は「弾幕ごっこ」。私が威力を抑えたシューターをフリードに撃ち、それをフリードが避けます。

コレを始めた最初のうちは、すぐにフリードがピチュったり、私が魔力切れ起こしたりしていましたが、最近ではお互いすっかり慣れました。

私は1分くらいならシューターを打ち続けることが出来るようになり、フリードはフリードで、余裕をもって回避しながら、時折豆粒ほどのプレスで反撃してきます。

最近はお互いのおやつを賭けて遊んでますのでお互い真剣です。私に当てられればおやつが増えるので、結構本気で撃ってきます。被弾しすぎるとおやつ抜きなので、コレへの恐怖が原因かもしれません……

そうこうしているうちに1分経過、いい加減シューターを撃つ魔力も切れかかってきたので打ち止めです。

今日はお互いに被弾0だったので、おやつは二人で半分こなのです。

魔力切れによる心地良い疲労を感じながら、フリードを枕にして、おやつタイムまで一休みしました。　ぐう……

この後寝過ごしてしまった私は、おやつを食べることが出来ませんでした。

私の分まで食べたフリードには、次の日、散弾「スターボウブレイク Easy」を浴びせておやつ抜きにしてやりました。

まったく、いやしい竜なのですよ。

第1話 日常（後書き）

キャラの性格のイメージは東方風神録の早苗さん。

真面目で頑張りやだけど、どこか黒くて微妙に抜けてる感じ。

ネタが多いため、油断したらすぐに？化してしまう困った娘です。

第2話 1と99の境界

こんにちは。キャラ・ル・ルシエです。先日4歳になりました。今私は、自分の持ち物をまとめているところです。

ええ、アレです。追放イベントです。

長年立ちっぱなしだったフラグが消化されてしまったのです。

あ、今から回想入りますねー。

4歳の誕生日の日、私は大人達に呼び出され、竜召喚の儀式を受けることになりました。

立ち向かう決意は出来ていたけど、それはもう少し先、5、6歳くらいだと思っていたので大いに慌てました。

里を出るのは仕方がないとしても、こっちにも準備ってものが必要なのです。

追放されるとわかっていながら成功させるほど私は？ではないので、当然、ワザと失敗してやりました。

予想していたよりも早かったなと思いつつ、とりあえずはフラグ延期成功し、この日は終わったのでした。

次の日、私はまた呼び出しを受けました。

内容は昨日と同じで、竜召喚の儀式をさせるそうです。

この日もワザと失敗し、フラグ回避しましたけど、帰り際にこっちを見ていた大人達の視線が、なんだか気になりました。

そして次の日、2度あることは3度有ると言いますが、案の定、呼び出されて儀式をすることになりました。

すでに2度失敗してるっていうのに、大人達からは諦めムードは感じられません。むしろ期待に満ちた目で見てきます。なんか1人はこつちを見てサムズアップしてます。

流石におかしいと思ったので、思いきってサムズアップしてる人に聞いてみることにしました。

「あの、どうして何度も挑戦させるのですか？私にはまだ無理です、才能が無いんです。」

「キヤロ、そんなに弱気にならないで。あなたには才能がある。デバイス無しで魔法を使うなんて、この年の子供が出来ないことを平然とやってのける。そこに痺れ……とにかく、自信を持ちなさい。」

ナンデスト？

後半部分はとりあえずスルーして、私はその人から話を聞き出しました。

聞いたところによると、最初はたまたま通りかかった人が、私達のやっていた弾幕ごっこを見ていたそうで、それを他の人に言い回ったらしいです。

初めはみんな信じなかったらしいのですが、なら実際に見てみようという流れになり、交代で外から覗くようになったそうです。

そして室内で繰り広げられる弾幕の応酬。

噂はすぐに真実として広まり、知らぬは本人ばかりなりって状態になりましたとき。

マジですか。っていうか、気付く昨日までの私！！何調子に乗って「散弾「スターボウブレイク Easy」！！」とか「鷹作「殺人ドール」！！」とかかましてるんですか！！
過去に跳べるなら今すぐにでも自分にワンパン入れてやりたいです。

現実逃避タイムが終了し、私ははあ、と一つ大きなため息をつきます。

もう良いです。もし今日失敗したとしても、どうせ成功するまでエンドレスなのです。

ならせめて、最初の一步は自分から踏み出してやるのです。

半ばヤケクソ気味に体内の魔力を練り上げていき、召喚陣が形成されていきます。

同時に呪文の詠唱　今までワザと間違えていた部分も完璧にこなし、術式を制御します。

「竜魂召喚……。」

さあ、これが私の召喚士としての第一歩です。

「ヴォルテール！！」

あ、フリードで良かったんだっけ？間違えました。

そして魔法陣から呼び出される、全長15メートルにも及ぶ巨大な守り竜様。

私も見たのは初めてですけど、コレ竜というよりは巨大口ボですよね……。

周りの大人達は皆、ぽかんとした表情で見上げています。

そりゃ、いきなりこんなの出てきたらびっくりしますよね。

唯一違うのが族長様で、ブルブル震えながら、何やらブツブツ呟いています。

しばらくして震えが収まると、私を手招きしてきました。

「キャラロよ。」

「何ですか？」

「すまないが、この里から出て行ってもらおう。」

ですよねー！。

キャラロ はめのまえが まっくらになった！！

あ、違う、コレ魔力切……れ……。

回想終了です。まあこんな感じに、私は追放されることになったのでした。

……半分以上自業自得な気がしてきましたが、気にしないでおきましょう。

遅かれ早かれ追放されるんです。それがちょっと……結構早くないっただけの話です。

最低限の着替えと数日分の食料を袋に詰め込んだ私は、報告と、ついでに頼みごとをするために族長様のテントに向かいます。

「族長様、準備ができました。」

「そうか。」

「これでいつでも出発できます。」

「そうか。」

「族長様？」

「……。」

どうも様子がおかしいです。言いたい事があるのに躊躇っているような、そんなもどかしい感じですよ。

沈黙が数秒続いた後、族長様は一緒にいた大人達に合図して下が
らせます。テントの中は私と族長様の二人つきりになり、それから
ようやく、族長様とその重い口を開きました。

「キャロよ。お主には殺されても文句の言えない位、悪い事をした
と思っている。」

へ？

「追い出す当人であるワシが言っても信じて貰えないだろうが……
それでも覚えていて欲しい。
ルシエの者は皆、お前を娘のように思っていた。」

何を言ってるんですか、この人は？

そんな事・・・分かつてるに決まってるじゃないですか！！

目の前の族長様の顔は私に対する申し訳なさで一杯で、さっきの言葉が口からの出任せじゃないことを証明してくれています。

そんな顔を見てると思い出すのは、生まれてから今までの温かい日々。

赤ん坊の時から世話してくれたお姉さん。

仕事の合間に相手してくれたお兄さん。

滅多に会わないけど、会うと優しく声を掛けてくれた族長様。

家族のように接してくれていたみんな。

そんなみんなが、単に掟があるから、なんて理由で追い出すほど薄情じゃないのは、私にだって分かっています。

子供の身に余る大きな力、いつ暴走するかも分からないような力を持ってしまった私をこのまま置いておくのは、不発弾を抱えているようなものです。

部族のみんなに対して責任のある族長様からしてみれば、決して見逃すわけにはいきません。

「ちゃんと制御できるようになればいいじゃないか」と思う人もいるでしょう。原作でも同じようなことを言っていました。

なら、制御できるまでの間の安全保障は？万が一暴走した時、一体誰が抑えられますか？

多くの魔導師を抱える管理局なら、力の制御を教えられる人材もいるでしょうし、万が一の時に事態を収拾することも可能でしょう。だけどそれと同じ事を、人口100人にも満たないルシエの中で行うのは無理な話です。

私を含めた100を救おうとして、全員の命を危険に晒すような

危険な橋を、族長様が渡っていい訳がありません。

速やかに1を切り捨て、残りの99を守ることが、族長様が選べる中での最善だったんです。

その1が、今回はたまたま私だったってだけの話なのです。すぐ殺されないだけでも十分有難いのです。

だから私は

「族長様、気に病まないでください。」

「キャロ？」

「私もみんなの事が好きです。そんなみんなに迷惑がかかるのは、私も望んではいないのです。族長様はルシエを守った英雄なんですから、もっと胸を張ってください。」

大好きなみんなの為に、覚悟は出ています。

あ、頼み事あるの忘れてた。

第2話 1と99の境界（後書き）

キャラを追放したことで悪いイメージの多いルシエの一族ですが、あえて逆にしてみました。

族長のイメージは某弓兵が年老いた感じ。

冷静に1を捨てて99を救う思考を持ちながらも、その1が失われるのに心を痛める人格者。

族長としての責任とキャラへの愛情の板挟みで、心が磨耗しまくっています。

第3話 見つけたものは……

「よい……しょー!」

ガタガタッ……ドスン!!

「何が出るかな、何が出るかな。」

こんにちは。先日追放を言い渡されたキャロ・ル・ルシエ4歳です。

今私は、村の倉庫で探し物をしているところです。

あ、回想入ります。

「族長様、1つお願いがあるのですが、よろしいですか?」

「……何じゃ?」

「一人旅なので、自衛のためにもデバイスが欲しいんです。何とか都合できませんか?」

「デバイスのお……うむ。」

頼み事があるのを思い出した私は、しんみりした空気を半ば強引

に断ち切って族長様をお願いしました。

命に関わる事ですしね。空気読んでなんていられません。

一応、弾幕ごつことかの訓練はしてきましたけど、デバイス無しではまともに戦う事なんてできません。

弾幕ごつこでバカス力撃つてた弾は遊び用の殺傷力0なので、実戦なんてできません。

使用魔力を極限まで削り、ティッシュ1枚にすら弾かれる安全設計です。

実戦用にまともなシューターを作るとなると、たぶん5発ほどでガス欠になります。

細かい制御のサポートや術式の最適化によって燃費を抑えてくれるデバイスは、是非とも必要なのです。

「そうじゃのお……。」

そう言って族長様は、懷から鍵を1つ取り出します。

「村の宝物庫の鍵じゃ。あの中ならデバイスの一つか二つ、保管されてるかもしれん。……いや、デバイスだけとは言わん。役に立ちそうな物があつたら、遠慮無く持っていくといい。」

族長様マジで太っ腹です。そんな事言われたら、私自重しませんよ？ いいんですか？ いいんですね？

とまあそういう訳で、色々と漁っている最中なのです。

ここの鍵は族長しか持っておらず、基本的に入る事は許されていません。

宝物庫、と言っではいますが、村の備品保管庫みたいな物で、年に2度、収穫祭のときと年末の大掃除の時には開放されて、中を見る事ができます。

……まあどつちの場合でも「キャラちゃんはまだ小さいから、手伝いはしなくてもいいよ」と言われて無理でしたけどね。

なのでここに入るのは、実は初めてだったりします。

宝探してみたいですねー、なんてことを考えながら、RPGの勇者の如く、色々開けていきます。

あ、高そうな宝石発見です。キープキープ。

幼女物色中……

ふうー、なかなか有意義な時間でした。これで当分はお金に困りません。

粗方探し終わったところで、私は後回しにしておいた「いかにもデバイスが入っていそうな、機械の色々詰まった木箱」を下ろします。

え？ 何で最初からソレ調べなかったのか、ですって？
いやですねえ。私がここにいる目的は、デバイスを探すためなんですよ？

要するに……「見つけたら、そこで試合終了だよ」ってことなのです。

RPGのダンジョンに例えるなら、開けてない宝箱を残したまま、ボスを倒してしまうようなものです。

本筋は最後に回す方が効率的なのです。ほら、よく言うでしょ？ フェスティナ・レンテ（急がば回れ）って。

そういうわけで物色中です。

……これは思ったより期待薄ですね。

鉄くずとかネジとかばかりで、壊れた時計とかも入ってます。

もしデバイスがあっても壊れてるんじゃないだろうか。

確認したものを一々箱に戻すのも面倒なので、取り出したものはその辺に転がしつつ、ガラクタの山を発掘していきます。

根気よく続けているうちに量も段々減っていき、今や箱の中には鉄くずが数個転がっているだけです。

「騙された……。」

族長様は「あるかもしれない」って言ってました。つまり、宝物庫の中身を完全には把握していないと想像できます。

なので上の発言は言いがかりもいいところなのですが、頭で分かっている感情は別物なのです。

片付けのためには辺りに転がっている鉄くずを全て戻さなくてはならず、徒労に終わった事にイラついていた私は、つい鉄くずの1つを持って、叩きつけるように投げ入れました。

バキィッ!!

「やばー！！ 壊しちゃった！？」

恐る恐る箱の中を覗いてみると、投げ込まれたもののせいで、底部に穴が開いています。

「どうしよう…… って穴！？」

木箱は地面に下ろしてあるので、穴が開いているということは、投げたものが木板を貫通して地面にめり込んでいるということになります。

いくらなんでも有り得ないと思ったので、底に残っていた鉄くずを全て取り出し、底面を覗き込みます。

穴の下には数センチ程の隙間があり、その下には底板がもう1枚ありました。

「この箱、二重底だったんだ……。」

尖った部分が刺さらないように注意しながら、穴の部分を掴んで底板を取り除きます。中には小さい木箱が1つあり、それを開けると、古そうな装丁の本が入っていました。

「この本、何なんだろう…… っ！？」

表紙を見た私は驚きました。だってそこに書かれていたのは普段見慣れたミッド語ではなく、かつて私が慣れ親しんだ日本語だったんですから。

「幻想、縁起！?????」

「この本、何なんだろう？」

片付けを済ませて自分のテントに戻った私は、先ほど見つけた本とにらめっこしています。

「デバイスだったら嬉しいんだけどなあ。」

あんな風にわざわざ隠されている物が普通の本である訳がありません。

翻訳魔法があるので、文字が読めないから放置されていた、って線も薄いと思います。

夜天の書や蒼天の書のような例がある以上、本型のデバイスである可能性も十分にあります。

「だけど、うーん……。」

同時に、闇の書のように持ち主を喰らったり、書かれてる知識自体が毒になる魔道書のようなトンデモ本の可能性もあるので、どうしても慎重になってしまいます。

「どうしよっか……ふあ、ねむ……。」

読むかどうか悩んでいるうちに眠くなってきました。ああ、そうでした。明日は出発の日です。倉庫あさりで疲れていることだし、今日は早めに寝よう。

「明日、族長様に聞いてみよう。」

そう結論付け、本を荷物がまとめてある袋の中へと放り込みます。
私の推論が全部的外れでただの小説だったとしても、旅の途中の
暇潰しにはなるはずです。

「おやすみ、なさい……zzz。」

第3話 見つけたものは……（後書き）

謎アイテム発見の回。

幻想縁起です、幻想郷縁起じゃないです。誤字ではありません。

第4話 旅立ち

遂にやってきた運命の日、里から出て行く日がやってきました。私は倉庫の鍵の返却と最後の挨拶、あと昨日見つけたよく分からない本について聞くために、族長様のところへ向かいました。

「族長様、おはようございます。」

「む……キヤロか。」

「鍵をお返しします。あと、ちょっと転んで備品を壊してしまったんですが……。」

「そうか……怪我は無いか？」

「え、あ、はい、それは大丈夫です。それで……。」

「ならいいんじゃない。壊した物は後で確認して何とかするから、キヤロは気にせんでええ。」

てつきり怒られると思っていたのですが、逆に心配されてしまいました。やっぱり族長様はいい人です。

「あの、それですね、壊した時にコレを見つけたんですけど、コレが何だか分かりますか？」

そう言って私は、持っていた荷物からあの本を取り出します。

「何じゃ？……コ、コレはっ……！」

おお？何だか凄い物らしいです。やっぱり族長様は賢いお方。聞いて正解でした。

「分からのじゃ。」

ズコー！！

あまりに意表をつかれたので、私は為す術なくすっ転び、地面とキスする羽目になりました。

期待させてから落とすのは基本ですけどかなり効きました。ツッコミを自重した自分を褒めてやりたいです。

「スマン、言い方が悪かったな。分からないとは言っても、完全には、というだけの話じゃ。」

いきなりズツこけた私を起こしてくれながら、族長様は本について語ってくれました。

この本は、かつてこの村を訪れた魔導師が残していった物らしいです。

いきなり現れて宿と飯と酒を要求したその人は、代価としてこれを置いていき、こう言ったそうです。

「美味しい酒を振舞ってくれたお礼よ。コレはちょっとしたマジックアイテムなの。危険はないから安心してちょうだい。ただ、誰でも使えるという訳でも無いから、使える人がいたら譲ってあげて下さいな。」

自分の言いたい事だけ言い終わると、その人は見た事も無い転移魔法を使って消えたそうです。

……それ、食い逃げって言いませんか？

本を調べたところ、パスワードが設定されており、それが解かれない限りは内部へ直接ハッキングすることもできず、結局そのまま、文字通りお蔵入りとなったそうです。

「それにしても、宝物庫からソレを見つけ出すとはのう。さっき備品を壊したと言っていたのもその関係か？」

「はい。」

「とにかく、ワシが知っているのはそこまでじゃ。役に立てなくてすまないのう。」

いえ、そんな事はありません。

少なくとも危険は無いことと、パスワードさえ分かればどうになる事が分かりましたから。

これで言うべきことと聞きたいことは全て片付けました。あとはここから出て行くだけです。

「族長様、今までありがとうございました。」

最後になる言葉を口にして背を向けます。そのまま立ち去ろうとしたのですが

「……キャロ。」

族長様に呼ばれ、思わず足が止まりました。

「お前の家はそのままにしておく。他のだれも住ませたりはしないでおこう。」

え？

「それって、どういう……？」

聞いた言葉が信じられず、背を向けたまま聞き返します。だって、その言葉の意味するのは

「だから、1人前になれたら、いつでも帰ってくるといい。」

告げられた言葉は、私の心を乱すのに十分で

「ずるいです、族長様。」

「……………」

「そんな事言われると、私、期待しちゃいますよ？頑張って一人前になって、いつか戻ってきちゃいますよ？本当にいいんですか？」

「……………」ワシに出来るのはこの位が精々じゃ、その代わり今言った事を決して裏切らないと、ルシエの名の下に約束しよう。」

ルシエの名の下に、という言葉にさらに驚きました。

それは族長個人ではなく里全体の決定の時に使われる言葉。つまり、私が帰ってくるのを皆が賛成してくれたのと同じ意味で

帰っていい場所がある。

今はまだ無理だけど、それでも最善を尽くしてくれた族長様の言葉が嬉しすぎて

「いつて……きます。」

私は族長様に背を向けたまま、振り返る事なくその場を去ってきます。

最後に族長様の顔を見ておきたかったのですが、やめておきました。

だって

今私の顔は、とても別れの場には相応しくない位、悲しさと嬉しさでぐしゃぐしゃなんですから。

里を出る頃、ようやく落ち着いてきた私は。肩に乗っているフリードに話しかけます。

「ねえ、フリード。」

「キュル〜？」

「私ね、ずっと怖かったんだ。里を出て行くのはもちろんだけど、一番怖かったのは、それで里の皆との繋がりが無くなって一人ぼっ

ちになっちゃうこと。」

「キュル……。」

「でもね、帰ってきてても良いって言うてくれた。帰る場所も残してくれるって約束してくれた。フリードも傍にいてくれる。それだけで、私が頑張る理由は十分。」

「……。」

「これから一緒に頑張っていこうね、フリード。」

「キュクルー!!」

フリードの力強い返事を聞きながら、私は山道を歩いていきます。この先どうなるかは分からないけど、私は自分の足で、自分の意思で歩いていきます。

うん、きっと大丈夫。

耳元で鳴き続けるフリードがいい加減ウザくなってきたので、シート当てで黙らせてから、尻尾を掴んで引きずっていきます。意外と重いです。この子、何でこんな？に育っちゃったんでしょうか？

第4話 旅立ち（後書き）

たぶん唯一のシリアス回。

これからキャラを待ち受けるのは何なのか？

番外編　こんな〇〇はいやだ。（前書き）

注意：C a u t i o n ！！

今回の話は思いつきの1発ネタなので非常に短いです。

第4話のIFを語ったもので、本編には一切関係ありません。
とあるキャラがキャラ崩壊起こしていますが、本編には一切関係ありません。

大事なことなので2度言いました。

読了後に特定のキャラへのイメージが変わる可能性大ですが、一切責任は持ちません。

ストーリー上読まなくても問題ないので、4話の読了感を汚したくない人は、今すぐブラウザバックで戻ることをオススメします。

いいですか？いいですね？

では、いきますよ

番外編　こんな〇〇はいやだ。

番外編　こんな族長様はいやだ

「いつて……きます。」

私は族長様に背を向けたまま、振り返る事なくその場を去っていきます。

最後に族長様の顔を見ておきたかったです、やめておきました。

だから、族長様の僅かな変化に気付くことができませんでした。

口の端が僅かに釣り上がり、顔には笑顔が張り付いていることを。

あの子が特別なのは生まれた時から気付いていた。
小さい太陽かと見紛うほどの圧倒的な魔力量。

すぐに確信した。この子を放置していれば、いずれこの里に災い
が起きると。

すぐ始末する事を考えたが、問題があった。

このルシエの里にはまともな魔導師がいない。

いくら私がその危険性を説いたところで、本当の意味で理解して
くれる者はいないだろう。

最悪、老人の妄言かと思われたりしたら、ワシの立場が危うくな
ってしまう。それだけは避けねばならなかった。

独断で始末に踏み切ったりしたら皆の信用を失うことになり、こ
れも選べなかった。

結局、世話係の他に自分の息のかかった者を数名、本当の目的は
告げず、巫女の護衛として監視役に当てることにした。

そして1年後、驚くべき報告があった。なんと未熟ながらも、デ
バイス無しで魔法を使ったらしい。

予定では愛情を注ぎ込んで育て、間違っても復讐などされないよ
うにルシエへの従属意識を植え付けてから、6歳あたりで放り出す
つもりだったが、予定を変更しなければならぬかもしれない。

さらに3年後、4歳になったあの子は恐るべきレベルで魔法を使
いこなしている。監視役の者は関心していたが、ワシはいつその牙
がこちらへ向けられるのかと気が気でなかった。

ダメだ、もう待つことはできない。今すぐあの子を追放すべきだ。
あの子の才能を皆に広めるように指示して根回しを進める。これ
で竜召喚の儀式が繰り上がっても、誰も疑問を抱く事は無い。

竜召喚の儀式を行ってみたのだが、あの子は失敗した。

今までの不安は杞憂だったのかと一瞬思ったが、あの子の様子を
見てすぐにそれを否定した。

失敗したというのに残念そうな素振りを見せず、逆にどこか安心

したような顔を浮かべていたからだ。

間違いない。この子は、こちらの意図に気付いているッ！

いいだろう。そっちがそういつつもりなら、こっちにも考えがある！

そして次の日、再びキャロを呼んで儀式をさせた。これはこの子とワシの我慢比べだ。

そっちが逃げ切れると思っているなら、まずはそのふざけた幻想をぶち壊す！！

成功するまで何日でも粘ってやるつもりだったが、3日目である子は成功させてしまった。

なまじ頭のいい分、こっちの意図に気付いて逃げられないことを悟ったのだろう。

そして私はキャロを呼び寄せ、長年言いたくてたまらなかった台詞を目の前の子に告げる。

「すまないが、この里から出て行ってもらおう。」

この時のワシは、顔に出てくる嬉しさを隠すのに必死だった。

そして今、ついにこの子が里から去ろうとしている。

頭のいい子だからだろう。4年しか経っていないので不安だったが、刷り込みも上手くいったみたいだ。

この様子なら復讐など考えないだろうし、管理局に泣き付くこともしないだろう。育児放棄だの言われたら色々面倒だからの。

何度も誤算はあったが、結果だけ見れば予定よりも2年も早くこの子を追い出すことが出来た。

これでワシの地位を脅かす物は何も無い。族長としての輝かしい未来がワシを待っている。

全て……計画通り!!

番外編　こんな〇〇はいやだ。（後書き）

という訳で、新世界の神な真つ黒族長様でした。
しつこいようですが、これは本編とは一切関係ありません。
大事なことなので3度言いました。

第5話 幻想縁起

里を出てから数時間山道を歩いていたのですが。今更ながらに重大なことに気付きました。

アレ？結局デバイス無いからピンチじゃね？

なんということでしょう。族長様の言葉が嬉しくて、完全に忘れていました。

周りはもう日が落ち始めており、段々暗くなっていつてます。

これ以上歩き回るのは自殺行為なので、丁度近くにあった大樹の傍に荷物を下ろし、野宿の準備をします。

「デバイス無いけど、フリードがいるから大丈夫、かな？」

そういえば、私は今まで一度もフリードを竜魂召喚していないことに気付きました。

儀式のときは、間違えてヴォルテル喚んで即気絶したんだっけ。今日はもう食べて寝る以外に出来る事が無さそうなので、確認のためにフリードを召喚してみることにします。

ささやき、いのり、えいしょう

「竜魂召喚 フリードリヒ!!」

召喚陣が展開され光り輝くフリード。一際強い光が放たれ、私は思わず目を閉じます。

光が収まり、そこには真の姿を現した、いつもよりも一回り大きいフリードの姿が

「一回り、だけ？」

どう見ても一回りです。体長30センチくらいだったのが、40センチくらいになりました。

「フリード、私、詠唱間違っていないよね？」

言葉を理解したのか、フリードは首を縦に振ります。

「もしかしくなくても、それがフリードの真の姿？」

フリードはもう一度、首を縦に振ります。

どうしてこうなった……原作では、背中に人乗せて飛べるくらい大きかったっていうのに、これだと戦力としてはかなり微妙です。いや、落ち着け、C.O.O.になれキャロ・ル・ルシエ。まだ終わったわけじゃない。ここはまず冷静に、今の戦力を分析してみよう。

私 シューター5発くらいが限界。魔力切れ〃死亡フラグ

フリード 精々プレスでの支援程度。無双とか無理すぎる

ヴォルテール MP がたりない!!

あ、コレ詰んだ、かも……。こんな状態のフリードが最大戦力とか、もう色々終わってる。

がつくりとうなだれていた私の気持ちを察したのか、フリードが近づいてきて私の頬をぺロぺロと舐めてくれます。

励ましてくれてるんですね、ありがとうフリード。

でもそろそろ止めてください、涎でベチョベチョになってきましたから。

そろそろシューター浴びせてやろうかと考えていると、何かを思いついたようにフリードが離れ、荷物の方へ飛んでいきます。しばらくゴソゴソした後、あの本を口にくわえて戻ってきました。

おお！まだそれがありましたね。GJですフリード。

本当なら人里に下りてから、専門の人、例えばフリーのデバイスマイスターに依頼して解析してもらう予定（管理局や聖王教会に頼むと、ロストログアだ！とかいちゃもんつけられて没収されかねないのでNG）だったのですが、今やそんな悠長なことは言ってもらえません。族長様は安全だって言ってたので、駄目元で挑戦してみましよう。

そこまで考えて、私は本に付いていたフリードの唾液を拭き取ってから、ページを開きました。

この時私は重要な事を失念していました。

安全性と扱いやすさは、全く別物だということを。

本は最初のページに数行だけ文が書かれており、他のページをめぐってみると全て白紙でした。

白紙の部分は置いておいて、とりあえず最初のページに目を通します。

「なになに……」この書は幻想の力を封じしもの。封を解くことを望むなら、この問いに答え汝の知を示せ”ですか……。」

ダメだ、胡散臭すぎる。だってこの字……ゴシック体なんです。ええ、活字です。見た目古そうな本なのに中身活字なんです。そりゃ読める方が有難いけど、信憑性がマッハで下落していつてます。

内容から察するに、どうやらこの下に続いている問いの答えが、族長様が言っていたパスワードみたいですね。

もう期待はしてないんですが、一応続きを読んでみましょうか。

「えっと“幻想郷はすべてを受け入れる”？」

あやや、そりゃルシエの人には分からないのも仕方ないですね。
とにかくこれでこの本の正体が分かりました。

きつと、第97管理外世界のオタク文化にはまった人が、遊びで
書いたんでしょう。

よく見ると、タイトルがパチモノっぽいです。最初の文もどこか
厨二臭いです。

まあ、暇潰しにはなりました。さっさとパスワード言って内容確
認して寝ましょう。

それはそれは残酷な話ですわ

シーン……。

何も起こりませんね、ひょっとして本に直接書き込む方式なんで
しょうか？

ちよつと考えて、止めておくことにしました。

どうせ大したことは起こらないだろうし、書き込んだ所為で、コ
レ売るときに値切られたら困りますしね。

人里に着いたらデバイス関係の所に売ってしまおうと結論付け、
本を枕にして寝ることにします。

ちよつと肌寒いので、フリードを抱き枕にして早めの眠りにつき

ました。

さあ、明日からどうやって生き残っていこうか……。

そして、一人と一匹は完全に寝てしまったので

真夜中、本が僅かに発光したことには、誰も気付きませんでした。

第5話 幻想縁起（後書き）

繋ぎの回。言う事は特にありません。

第6話 スペルカード（前編）

数多の失敗を乗り越えて遂にここまで来ました。

残機は既に無し。ボムは1つ、残すスペルはあと1つ。

相手のスペル宣言の後、今までの中で最難関の弾幕が迫って来ます。

たった1回のミスで全てが終わる緊張感の中、迫ってくる弾幕を見切り、かすり、最小限の動きでかわしていく。

こちら弾幕で応戦しつつ避け続けていると、今までとは段違いの密度の一群が飛来して来ます。

少し厳しいが、回避不能なレベルではない。僅かな隙間を見つけてグレイズを開始して

ピチューン！！

「あああああああ！！ 抱え落ちiiiiiiii！！」

ボムは惜しむな、名言です。

「藍しゃまが倒せない……。」

コントローラーを置いて「うなだれている」私。

さっきまでは「それ」が私だったのに、いつの間にかその姿を客

観的に見ている自分がいることに気付きます。

「そっか。コレ、夢か。」

それにしても、昔の事を夢に見るのは久しぶりです。

毎日ゲームやって過ごしていた普通の学生だったので、コレといった凄いイベントも無かったせいか、あんまり思い出すこともありませんでした。

そうしているうちに場面は変化し、私がこっちで生まれた後のシーンが再生されます。

もうちよつと前の私を見ていたかった気がしますけど……まあゲームしてるだけだし別にいいか。

自分の記憶を元に構成されているからか、生まれる部分は飛ばされ名前を付けられるシーンから始まり、次々と思い出が再生されていき

「あ、ちょストップ!!」

制止しても止まることなく流れていきます。その過程で1歳の時のシューター発射、3歳の時の弾幕ごっこ、つい先日の子召喚儀式等、できれば忘れてしまいたい黒歴史も

「も、もつらめえええええええ!!」

舌足らずになりながら絶叫しても無駄で、昨日の時点の出来事まできっちり再生されてしまい、それからようやく、意識が浮上していききました。

おはようございます。キャロ・ル・ルシエです。朝っぱらからデ
ンション最悪です。ライフはもう0です。

さっきまでの夢のせいで軽い鬱状態です。死ぬまではいきません
が動きたくないです。

あと5分だけと自分に言い訳しながらフリードを抱き寄せて二度
寝に突入します。

でもこの時、顔にかかっていた部分の毛が私の鼻をくすぐり。

「ひっ……くし！」

小さいくしゃみが出てしまい、おかげで眠気が飛んでいきました。
しょうがないです。いい加減起き

アレ？なんでフリードに毛が生えて……

眠気なんか一瞬で消えたわたしは、驚いて飛び上がります。

「よっ。」

いまの誰ですか！？

冷静になって自分のいた所を見ると、そこには未だパニック中の
フリードと、枕代わりにしていたあの本、そして青色の導師服を着
た体長30センチ程度の、九本の尻尾がついた女性がいました。要
するに、ちっこい藍しゃまです。

「やっと起きたか。待ちくたびれたぞ。」

「へ？　へ？」

何でいるんですか、とか、何でちっこいんですか、とか聞きたい事は色々あるのに、混乱して上手く言葉になりません。

「とにかくお前も、あとその竜も……もう少し落ち着け。」

それからしばらくして、ようやく落ち着くことの出来た私は、藍しゃま（仮）と向かい合って座っています。フリードはいつまで経っても落ち着きそうになかったので、いつものように黙らせておきました。

「やっと落ち着いたか。まったく、私の封を解いたのがこんな子供だとはな。」

「それで、貴方は一体何なんですか？」

「そうだな。今から説明しよう。」

子供呼ばわりに一瞬噛み付きそうになったものの、事実だし話が進まなくなりそうなのでスルーしました。

「まず初めに、自己紹介からいこうか。私は藍、ユニゾンデバイスみたいなものだ。」

ユニゾンデバイス！？

外れ品どころか大当たりじゃないですか！！

それにしても、やっぱり名前は藍なんですね。作り手の趣味が透

けて見えます。

「私はキャロ・ル・ルシエです。あっちで伸びているのはフリードです。」

「キャロにフリードか。分かった。」

「それですね、藍さんは何者なんでしょうか？」

「さっきユニゾンデバイスみたいなものと説明したが？」

「いや、そうじゃなくて……。」

「???」

私が聞きたかったのは、封印されていた経緯とか細かい性能とかなんです、ひよっとして通じてない!?

「ククッ……。」

いや、こいつ笑ってる。絶対分かってやってるよ!!

即座に指先に魔力を集中してシューターを放つもひらりと避けられてしまい、ストレスが溜まる一方です。

「まあそう怒るな。ちゃんと説明してやるから落ち着け。」

「むー……。」

「まず最初に、私が何者であるかだな。そんなに大した話ではないんだが……」

私はこの本の内部に封印されているデバイス「夢幻珠」の管制人格だ。

ユニゾンデバイスみたいなものだといったが、厳密には微妙に違う。まあそれはおいおい語るとしよう。

「夢幻珠」は、とあるお方がデバイス製作の技術と、自身の持つている知識を組み合わせで作ったデバイスだ。

契約によって主を認証登録し、他の物には使う事はできない。

作られたのはごく最近で、ロストログアというわけではない、ざっとこんなところだな。」

みたいなもの、とか曖昧な表現が胡散臭いです。製作者が分からないのも気になります。

ただそれを差し引いても貴重なデバイスなのは確かなようです。売っ払うつもりだったのが嬉しい誤算です。

「えっとね藍さん、封印を解いたの私だから、私がマスターってことでいいのかな。」

「まあ、それが妥当だろうな。」

「じゃあ、さっそく契約「だが断る」ええっ！？ ちょっと、ソレどういう事ですか！？」

「確かにそれが筋だろうが、私とて力のない主に仕える気は無い。それに、私のようなデバイスを持っていたら、いずれ誰かに狙われる。」

悪い事は言わん、止めておけ。」

はつきり言われてしまいました。確かに今の私はただの4歳児です。力なんてあるはず無いですけど……。

「せっかく封印が解かれたんだ。私を使いこなしてくれそうない主を探しにいくか。」

「ま、待って!!」

そう言って立ち去ろうとする藍さんを私は必死になって止めますが、藍さんは腕の間をすり抜けて飛んでいきます。

急いで走って追いかけますが、引き離されはしませんが追い付くことも出来ません。

このままだと体力の問題から、いずれ逃げ切られてしまいます。何かいい手は

「藍さん、ちょっと待ってください!!」

何も思いつくことが出来ず、時間稼ぎのために必死で呼び続けます。

泣き声混じりで叫んだのが良かったのか、私の間合いの1歩外あたりで、藍さんは停止してくれました。

「……何だ？」

考えろ、キャロ・ル・ルシエ。多分これが最後のチャンス。

無理に捕まえても逃げられる。最悪返り討ちに遭う。

残されたのは何らかの方法で、私を主と認めさせること。

実力を証明し、なおかつ拒否権を与えない方法は

「あ、あつた。」

アレしか無い。この場で通用するかは分からないけど、やらないよりはずっとマシ!!

「話が無いなら立ち去らせてもらっぞ。」

「待って!!」

今にも飛んでいきそうな様子に慌て、私は懷から数枚の札を取り出します。

札には子供の落書きのような手書きの絵と、その下に文字が書いてます。

遊びで作ったものなんですが、人生何が役に立つのか分かりません。

藍さんを見ると、こちらの意図が伝わったのか、ほう、という視線をこちらに向けています。

どうやら通用するみたいですね。良かったです。

「それで、そんな紙切れで一体何をするつもりだ？」

藍さんはにやにやと笑みを浮かべて聞いてきます。

決まってるじゃないですか。

「スペルカードルールに従い、弾幕決闘を申し込みます。私が勝ったら、あなたには私のデバイスになってもらいます。まさか、逃げるなんて事しないですよね？」

「吠えたな小娘。良いだろう、その挑発乗ってやる。」

第6話 スペルカード（前編）（後書き）

次回、弾幕ごっこです。

ミッドにはスペルカードルールなんてありません。

藍しやま以外には通用しません。

なので、最初で最後の弾幕ごっこになる可能性大です。

第7話 スペルカード（後編）（前書き）

バトルは途中で切るのが難しいので、今回結構長いです。

第7話 スペルカード（後編）

前回までのあらすじ

藍しゃま が あらわれた！

ユニゾンデバイスキター「だが断る」ってええ！？

こうなったら、弾幕でOHANASHIさせてもらうの！！

対決する前に、藍さんとルールを確認します。

弾幕を打ち合うという共通点を除けば、スペルカードルールには様々な形態が存在します。

純粹に弾幕のみ、格闘戦アリ、他にも細かい差異は多数存在し、加えて私は、こちらの世界でのルールを全く知らず、常識の食い違いも発生し得ます。

確認という名の設定作業で、どれだけ自分に有利な条件を持ってこれるかはかなり重要なのです。

二人であーだこーだと言い合った結果、今回のルールは次のようになりました。

- ・スペルは3枚。全部使い切るか、スペル未使用時に被弾すると敗北
- ・スペル使用中はパターンを決めた弾幕のみ許可。アドリブは通常弾幕のみ

- ・スペル宣言から60秒経過するか、スペル中に被弾するとスペルブレイクとし、スペルを終了させる。任意の終了も可能

- ・弾幕は非殺傷

- ・霊撃、結界の類は禁止

・格闘戦も禁止

こんな所ですね。スペル枚数は、私が3枚しか持っていないので合わせてもらいました。

私は霊撃と結界使えないし、4歳児対体長30センチで格闘なんて無理なのを考えると、なかなか良い条件を引き当てました。

「そろそろ始めよう、準備はいいか？」

「はい、いつでも大丈夫です。」

そう言つて互いに10メートルほど離れて向き合います。

所定の位置に付くと、藍さんの方から魔法に似た力の流れを感じました。

何か？と考える暇もなく術式は完成し、周囲が少し暗くなり、半径10メートルの球状の空間に包まれました。

「これは……結界？」

「派手になるかも知れんからな。後はフィールド制限の意味もある。」

確かに無制限に逃げられると困りますしね。向こうが負担してくれるのなら、有難く受け取っておきましょう。

「では、始めようか。」

「ええ。」

二人の間に張りつめた空気が流れます。私が投げた小石が落ちると同時に、二人同時に開始の宣言をしました。

「Set Spell Card……」

「Attack!!」

開始と同時にお互い動き出します。

「まずは、こつちから!!」

シュータを5発生成し、時間差で打ち込みます。シューターには雀の涙程の魔力すら込められていませんが、当たりさえすればいいので問題無しです。

「その程度では、まだまだだな。」

言葉の通り、迫ってくるシューターをひょいと飛んで避けられます。っていうか、ちっこいから当てにくい！！

「まだまだっ！」

続いて5発、様子見で打ち込みます、こっちはバカス力撃てるほど魔力量が無いので、物量任せの戦法は無理です。

向こうのミスを誘って癖や隙を見抜いて一発。それ以外に勝利方法がありません。

次も微妙に速度を変えて撃ち込んだのに、取るに足らない感じで回避されました。隙、あるのかなあ？

「そろそろこっちからも、いかせてもらおうか！」

藍さんがそう言うと、その小さい体から圧倒的な魔力が発生しました。

私は恐怖で震える足をごまかしつつ、襲い来る弾幕に身構えます。

（ゲーム通りの弾幕を撃ってくるかは分からないけど、もしそんな対処法だって……。）

「いくぞ。」

そして放たれる、視界を埋め尽くすほどの圧倒的な弾幕。そこに込められた魔力量には恐怖しか感じませんでした。

（これで非殺傷！？冗談じゃないですよ！！）

SLB喰らった犠牲者達も同じ事考えたんだろうか、と現実逃避しかけた思考を無理矢理戻し、迫り来る弾幕を回避していきます。

弾幕のパターンは固定軌道の弾幕と、それに隠れるようにランダ

ムで弾がばら撒かれてきます。

パターンは分かったので、あとは回避すればいいだけなんです。

「どうした、反撃して来ないのか？」

「くっ!!」

弾幕1つ1つに込められている魔力を考えると、最小限の動きでグレイズし続けるなんてことは出来ず、どうしても回避動作が大振りになってしまい、シューターで反撃する余裕も無くなって来ます。

（スペルを使うしかないのかなあ）

そう考え、懷からカードを取り出し確認したのですが。

（あ、やば!コレ使えない）

そのうちの1枚が「ある条件」を満たさないと使えないことに今更
気付き、愕然とします。

「余所見とは余裕だな。」

「っ!やば!!」

油断を付かれ、藍さんの放つ弾幕がこちらに向かってきます。

避けきれないと判断したわたしは、手持ちの中から1枚を抜き出して宣言します。

「散弾「スターボウブレイク Easy」!!」

宣言と同時に弾幕を放ちますが、私のスペルは所詮本物を真似た二セモノ。

発動したからといって相手の弾幕を消す効果など無く、避け切れなかった1発が左肩に命中します。

「あうっ！！」

「これでまずは1枚目、だな。」

結局1発しか撃てないままスペルブレイクし、貴重なカードをただの身代わりとして使う羽目になってしまいました。でも、それよりも。

（痛い、痛い、痛い！！コレ本当に非殺傷設定なの！？）

自分の肩を見ると、特に外傷も焦げ跡もありません、でも感じる痛みは確かで、それが私の精神を侵食していきます。

「そら、次行くぞ。」

藍さんがそう言うのと先ほどと同じ弾幕がこっちへ向かってきます。もう同じ失敗を繰り返すわけにはいかない。痛いの嫌だし！！

迫り来る弾幕を避けながら、藍さんの動きを観察します。何とか隙を突かないと、私に勝ち目は無い。

でも現実是非情で、そんな隙などある訳無く

「どうした？動きが鈍ってきたぞ。息が上がってるんじゃないか？」

「うる……さいです。まだまだ……行けますよ。」

弾幕を回避し続けている体が、休息を求めて悲鳴を上げています。当たり前です、何せこっちはたった4歳の小娘なんですから。

加えて常時強大な魔力に晒されている精神的疲労。

正直、何でもまだ動けるのか自分でも不思議です。

だけど、そんな状態がいつまでも続く訳がなく

「あっ！」

私は足をもつれさせて転びました。目の前には弾幕1発。回避は間に合いません。

「贗作「殺人ドール」っああああ！！！」

辛うじて2枚目を宣言した直後、弾幕が右足に被弾し、1発の弾幕を撃つ余裕も無く、あっという間にブレイクしてしまいました。これで2枚目も、ただの身代わりとして消費されたことになります。残るスペルはあと1枚、でもそれは今はまだ

そう考えていると、藍さんが弾幕を止めてこちらへ飛んできました。

「なあ、キャロ。」

「……なんですか。」

「もう、止めにしないか？」

「……」

「お前じゃ私に敵わない。それは身をもって理解しただろう？この辺で手打ちにするべきだ。お前だってこれ以上痛い思いをするのは嫌だろう？」

その言葉は、現在進行形で痛い思いをしている私の中に、侵食するかのように入り込んできます。

もう良いじゃないか、よく頑張ったじゃないか。

そんな声が心の中から聞こえてくる気がして、そのまま倒れそうになります。

「今ならまだ決着が着いてないから、キャラは私の要求を聞く必要は無い。キャラにとっても悪くない話だと思うが。」

いいじゃないか。ここで諦める。

そんな思考が頭を占めていく中、どうしても聞く必要があったことを思い出しました。

「藍さん、1つ聞かせてもらっていいですか？私に勝った後は、どうするつもりなんですか？」

「さっきも言っただろう。私に相応しいマスターを探して、あちこち回るつもりさ。」

さも当たり前のように藍さんは笑顔で返してきました。それに私は。

「それ、嘘ですよね？」

確信をこめ、負けなくらいの笑顔で返してやりました。

「……どうして、そう思う。」

「あの、本の存在です。」

「……。」

「あのデバイスは、言ってみればあなたの本体そのもの。なのにあなたは、さっきここから立ち去ろうとする時に本を持って行かなかった。可能性は2つ。自力で持っていくのが不可能である場合と、最初から持っていく気が無かった場合。そのどちらの場合でも、新しいマスターを探しに行く、という発言はおかしいんです。話、聞かせてもらいますね。」

「……バレていたか。」

そう言うた藍さんは先程までの笑みを消して無表情で話し出しました。

「別に大したことじゃない。単に私の存在が、その本に縛られているというだけの話だ。」

「それって、どういう？」

「言葉通りの意味だ。その本から離れることが出来ず、封印に干渉するのも無理だということだ。」

「じゃあ、もし私が負けたら、本当はどうするつもりだったんですか？」

「別にどうもしないさ。契約失敗で書の中に逆戻り。新たにパスワードを解く者が現れるまで、書の中に封印されるだけの話だ。」

「藍さんは、それで良いんですか？」

「良いも悪いも無い。そういうものだ。」

ブチッ！！

その藍さんの物言いに、私は今まで我慢していたものが一気に噴き出すのを感じました。

「ふざけてるんじゃないですよ！！」

「き、キャロ！？」

藍さんが驚いていますが知ったこっちゃありません。私は魔力を

鍊って、強めのシューターを放ちます。

藍さんが避けたそれはそのまま飛んでいき、本のある辺りに着弾しました。

「そんな結末でいいわけ無いでしょう！もつと外の世界を見たいとか、いろんな経験をしてみたいって思うでしょう！そして何より、一人ぼっちなんて、絶対嫌でしょうー！」

これが私の怒った一番の理由。

里を出たばかりの自分にとって、今まさに孤独になろうとしている藍さんが、とても他人には思えなかったから。

「もう諦めたりしません。あなたが孤独になろうとするのなら、弾幕当てて無理矢理にでも連れ戻します。あなたの言い分なんて知ったこっちゃありません。あなたの為に、私はあなたを倒しますー！」

「……現実を見る、キャ口。既にスペルは2枚使用。足も被弾してまともに動かない。

そんな状況でどうやって勝つつもりだ？」

「そうですね。確かに今のままでは勝てませんね。」

「なら。」

「でも。」

藍さんの言葉を遮って、私は藍さんの後ろを指差します。

そこには、今さっきシューターを当てられて目を覚ましたフリードの姿が

「2対1なら、どうですか？」

「竜、だと!？」

これで3枚目の条件が揃った。少し休んだおかげで体も動く。それなら、迷う事は無い!!

「竜魂召喚…… スペルカード、召竜「フールドリヒ」!!」

正直、終わりだと思っていた。

そもそも、4歳の子供がここまで出来る事自体異常なのだ。初めは苦しませないように1発で終わらせるつもりだった。

2回のスペル宣言で被弾を相殺されたせいで、さらに痛い思いをさせることになった。

この子は優しい子だ。これ以上この子を傷つけない。そう思い、何とか降参してくれるように説得に乗り出した。

逃げ出すのが嘘だと見抜かれたのは焦ったが、これで納得してくれると思った。

なのに

「行って、フールド！」

今日の前で、キャラと竜の弾幕による波状攻撃が襲い掛かってくる。

竜が大量の弾をばら撒いてこちらの動きを制限し、そこをキャラが打ち抜いてくる。

弾幕決闘において、複数人というのは別に反則にはならない。

式神「橙」のように、サポートに付いた人がオブションとして弾幕を張るのは認められているのだ。

一人増えたことで確実に難易度を上げた弾幕は、私とさえど余裕をもって回避できるものではなく、お返しに打ち出す弾幕量も減ってしまった。

キャラの方をしてみると、たどたどしい動きながらも弾幕をグレイズしており、隙をみてはこっちに打ち込んでくる。

なまじ怪我をしてまともに動けない分、最小限の動きで避けているようだ。怪我の功名とはこのことか。

自身に迫る弾幕の威力に恐怖しながらも、決して止まろうとはしないキャラを見ていると

「どうして……どうしてお前はそこまで頑張る？ 私と契約なんかしても、ロクなことなんか無いぞ！ 私みたいなデバイス持っていたら、絶対誰かに狙われるぞ！ 辛いだろう？ 苦しいだろう？ 今すぐ諦めていいんだぞ！ 私みたいなデバイスの事なんか、放っておいてくれ！！」

思わず叫んでしまう。全く、私は何を言ってるんだ！？

なのに弾幕は止んだりしない。それどころか、より一層の激しさで私の方へ向かってくる。

「放っておける訳、無いじゃないですか！！」

なんで、なんでキャラはそこまで……。

「さつきも言いましたけどねえ、私は一人ぼっちになるのも、それを見るのも大っ嫌いなんですよ！！それに……。」

「そんな顔で泣いてる藍さんを見て、放っておける訳無いじゃないですか！！」

何！？わたしが、泣い、て……。

言われたことが信じられず、思わず目を擦る。
そして手に付いたものに吃驚し、正気に戻ったその時には、目の前に、桃色の弾幕が迫っていた。

避けなければいけない

そう思っても、体はピクリとも動いてくれなくて

ならばスペルで相殺しないと

手は震え、まともに札を持つこともできなくて

私はなす術もなく桃色の弾幕に被弾し、その少しも痛くない弾に彼女の優しさを感じながら

「キャロ、貴方の……勝ちだ」

視界の先で倒れていく少女に、この決闘の幕引きを宣言した。

第7話 スペルカード（後編）（後書き）

というわけで弾幕ごっこ終了。

現状、キャラと藍しやまの実力差は月とスッポン並です。

ルールに縛られた状態でようやく、3ボム使って1発当てる程度の差です。

ルール無しなら1秒持たずに瞬殺されます。

まあ、4歳児ですし。

第8話 夢幻珠

「ん……アレ？」

あれ？どうして私は、こんな所で寝てたんだっけ？

「フリード、どこ？」

「やっと起きたか。」

誰！？

驚いて振り向くと、そこにいたのはちっこい藍さん。

その姿を見て、私はさっきまで繰り広げられた弾幕決闘を思い出しました。

実を言うと、最後のスペルを宣言したあたりから記憶が曖昧なんです。

たぶん魔力切れでダウンしたんだろうけど……。

「竜なら食料を集めにその辺を飛び回っている。ん？どうかしたか？」

「藍さん……実は、さっきの決闘のことなんですが、私気絶して最後の方のことが記憶に無いんです。結局、どうなったんですか？」

正直辛いけど、これは聞いておかないといけません。

まあ、予想するまでも無く私の負けなんでしょうが。

最後の時点で私の残りスペルは1枚、藍さんは3枚。

仮に被弾しそうになっても、スベルで相殺されて終了。

偉そうに「助ける」なんて言っちゃったけれど、宣言の時点で既に詰んでいたわけで

「ごめん……なさい。」

「お、おい！？何で泣く！？」

「結局、私は口だけだった。思いを貫く力なんて持ってなかった。だから、ごめん……なさい……。」

自分が情けなくて涙が出てきます。そんな私を見て、藍さんは困ったように頭を掻いており……アレ？

「あの、藍さん？」

「ん、どうした？」

「どうして藍さんは、まだ封印されてないんですか？」

「……そうか。さっきの決闘のことを覚えてないのか。結論から言ってみれば、あの戦いはお前の勝利で、私が残っているのは契約のためだ。……どうかしたか？」

ナンデスト？

「私が、藍さんに勝った？」

「そつだ。」

「ミーが？」

「ユーが。ってなんでミッド語なんだ？」

「まぢですか？」

「マジだ。」

「リアリ」そろそろしつこいぞ「うつうつ……。」

本当、みたいですな。

「じゃあ、私と契約してくれるってことでいいのかな？」

「元より負けた身だ。拒否権など有りはしない。しかし、キャロは本当にいいのか？」

「へ？何が？」

「前にも言ったが、私みたいなデバイスを持っているのがバレたら、間違いなく有象無象に狙われるぞ。最悪命を落とすかもしれない。それでいいのか？私への同情だけで契約するのなら、考えた方がいい。」

それこそ愚問ですよ。だって

「私は知ってますから。運命からは逃げることもなんて出来ないって。」

こちらら追放フラグに4年間晒され続けたんです。実体験なめる

なです。

「だから、戦ってやります。待ち伏せされているのが分かってるなら、正面から叩き折ってやります。」

主にフラグ的な意味で。

「だから藍さん。私と一緒に、戦ってくれませんか。」

「キャラ……、いや、マスター。そこまで言ってくれるのなら、もう私から言う事は何も無い。では、早速契約を始めようか。」

あ、呼称変わりましたね。

では、早速契約です。

幻想縁起を持ってきて準備完了。細かいことは全て藍さんに丸投げです。

「では、始めるぞ。」

“珠は珠であり魂である。
珠は珠であり呪である。”

ここに、夢幻の呪となつて主と魂の契約を為す。

藍の名のもと、マスター、キャラ・ル・ルシエとの契約を承認する”」

藍さんがそう言い終わると、本が光り中から何か出てきて、それが私の手の中に落ちてきました。

宝石が連なつて輪っかになつてて……、数珠、でしょうか？

同時に本のページがすごい勢いでめくれていき、そこに次々と文字が書き足されていつています。

「これは、何が？」

「この本の本来の使い道に戻るだけだ。」

「本来、つて？」

「少々ややこしいんだが、この幻想縁起は、夢幻珠を格納して封印するためのストレージユニットであつて、デバイスではない。デバイスと言えるのはあくまで夢幻珠の方であつて、コレ自体はただの箱みたいなものなんだ。」

「ふむふむ。」

「それで、契約が為されて封印の意味が無くなると、情報ストレージとして夢幻珠に格納され、以降は夢幻珠のマニユアルとして使用されるんだ。」

「そーなのかー。」

言われて幻想縁起に目を通します。これは……かなり内容が多いです。後でじっくり読むことにしましょう。

「とにかくこれで契約は成立だ。……これからよろしく頼みます、マスター。」

あ、口調が変わりました。所謂ケジメという奴でしょうか？

「こちらこそ、よろしくお願いします。藍さん。」

「……えーつとだな、マスター。」

「何ですか？」

「マスターはあなたですから、敬語は要らないです。あと、さん付けも結構です。」

「分かったよ。よろしく、藍。」

こうしてこの日、私は自分のデバイスと、そして、新しい家族に出会うことができました。

「ねえ、藍。」

「はい、何でしょうか？」

「そういえば、1つ聞きたいことがあったんだけど、いいかな？」

「はい。何でも聞いて下さい。」

「私達が初めて会った時なんだけど、目が覚める時、顔に尻尾の感触があったんだ。」

アレ、どうということかな？」

「ギク!!そ、それは……。」

「人様の顔の上にケツ乗っけて、一体何をしてたんでしょうかねえ……。」

「すいませんすいません! 確認のため、ちょっと記憶を覗いてただけなんです!」

は? こいつ今何て言った?

ちよつと窺める程度で許そうかと思っていたのですが、新たに余罪を白状してきました。

これは詳しく聞く必要がありますね。

「記憶を覗くって、どうやって? 正直に話してね。」

「対象に夢を見させて、それを観測することで記憶を見るんですが……どうしました?」

ああ、成る程、今朝の悪夢は全部こいつのせいだったんですか……許さん!!

「藍、ちよつと、OHANASHIしようか?」

「ま、マスター!?アッ……。」

ピチューン!!

某所にて

「○○様。」

「あら、どうしたの?○○。」

「○○ですが、……されました。どうしますか?」

「あらあら、困った事になったわねえ。……なら、……。」

「いいんですか? 間違いなく……よ。どうするんですか?」

「……しないわね。今回の件、……。」

「分かりました。では、……。」

第8話 夢幻珠（後書き）

デバイス入手するだけで5話かかりました……。
簡単にチートさせるつもりは今までも、そして当分の間も無いです。

第？話 バカの恐怖（前書き）

最近真面目な話が多かったので、今回は一休みって感じですよ

第？話 バカの恐怖

第7管理世界アルザス山中にて

「はあっ……ふっ！」

まだ日も昇っていない夜明け前、山中に人の声が聞こえる。
声を発しているのは桃髪の少女。

少女はゆったりとした動きで移動、拳打、蹴りの動作を繰り返し、動きを体に覚えこませていく。

同時に、効率よく気を練るための呼吸法、気による身体強化を実行し、体の動きとすり合わせる。

「気を操る程度の能力」のおかげでスムーズに循環するのを感じながら鍛錬を続けていく。

「これで、ラスト！」

掛け声と共に中段突きを繰り出し、少女の鍛錬が終了した。

どーも。先日謎デバイスをゲットし、絶賛修行中のキャロ・ル・ルシエです。

「ふう。藍、ユニゾンアウト。」

「了解です。モード「龍」、ユニゾン・アウト。」

早朝訓練が終わり、私はユニゾンを解除します。

そこにはバリアジャケットを解除して元に戻った私がいきました。ちなみにバリアジャケットですが、袖の部分が破れたシャツに紫のスカート、要するに萃香の格好です。背格好が似ているせいか、これが一番動きやすかったんですね。

あの後幻想縁起を読んだのですが、もう何処から突っ込めば良いのやらって感じてました。

デバイス夢幻珠は、その珠1つ1つに、リンカーコアを持ったユニゾン形態が格納されており、状況によって融合対象を変えられるデバイスです。

珠の数を見たところ、ざっと108つ。この時点で十分反則です。珠の中に1つだけ大珠があり、それが藍の本体らしいです

藍の役目は、融合時に発生し得る様々なイレギュラーを防止するための安全装置で、外部から融合をサポートしてくれるみたいです。どうしてそんな面倒臭い方法にしたのか聞いたのですが

「ユニゾン対象であるモジュールと、制御装置である私を切り離すことで、万一の時のリスクを軽減してるんです。」

と説明してくれました。要するに、私と実際にユニゾンしているリンカーコアには藍ほどの知能を持たせていないので、万一融合事故を起こしても、自我の混濁などは発生しないのだそうです。

その代わり、藍が外で手綱を握り、ユニゾンを安定させているという訳です。

それで、このユニゾンですけど、これもかなりのチートです。

まずはユニゾン形態に対応する基礎力の上昇。

今ユニゾンしていたのはモード「龍」。

紅美鈴をモチーフにした形態で、物理攻撃と物理防御が上昇しま

す。

門番だからでしょうか？ 防御の方がやや多く上がってる気がします。

次に、形態に応じたレアスキルの付加。

「〇〇程度の能力」を完全再現できるのですが、大規模な能力、例えば時間を操るとかは現時点では無理でした。

次に、ユニゾン元となった人妖の技術。

例を挙げると、門番の太極拳とか、メイドのナイフ術とか。

これは能力では無いので、ユニゾン時にしっかり体に覚えこませれば、非ユニゾン時でも使える可能性があります。

今朝やっていた訓練は中国拳法の套路で、空手の型にあたるものです。

一朝一夕で修めるなんて芸当は無理でも、ユニゾンの影響で、覚えるというよりは馴染ませる感じで習得できます。

悪い癖が付かずに、効率よく学習できるのは有難いです。

そして、形態に応じたスペルの使用。

この辺は、普通のデバイスと変わらないですね。

ただ、能力頼りのスペルの中には、今は無理なものもあります。

また、スペルは魔法に限らず、霊力や妖力を消費して撃たれるものもありました。妖力は扱えないので、霊力Verにして使用しています。

あ、そうそう。私が今まで何気なく撃っていたシューターですが、藍によると

「魔力と霊力が半々くらい混じってますね。」

だそうで、今までどうやら、霊力と魔力をこっちゃんにして使っていたそうです。霊力の概念を知らなかったから、どっちも魔力だと思っていました。

最後に、メインとして選択した形態以外に1つだけサブを選択できます。

サブに選ばれた形態は、基礎力上昇やスペルには影響しませんが、代わりに能力が付与されます。

ただし、メイン時よりも効果は低く、精々50%が関の山です。これは、メインとの組み合わせ方が重要になってきそうですね。

とまあ、ざっと説明したわけなんですけど

「チート過ぎるだろう!!」

と思った方もいるでしょう。でも現実はそう甘くなかったのです。

今の私では、強力な、所謂大妖怪レベルのユニゾンが負担が大きいです。

ユニゾンの維持に精一杯で、まともに能力の発動も出来ません。唯一マシだったのがモード「境」(八雲紫の形態)だったのですが、これも、1分かけてスキマ1つ開くのが限界で、戦闘なんてとても無理でした。

藍曰く、「まだ運用効率が悪い」とのことなので、修行していつかりベンジしてやるです。

それ以下の能力の形態でも、能力の使用は慣れが必要で、ユニゾン出来るからといってホイホイ使えるわけではないのです。結局は、己の努力次第というわけです。

アレコレと手を付けても器用貧乏になるのは目に見えているので、とりあえずモード「龍」とモード「博麗」（博麗霊夢）の2形態に絞って修行中です。

両者ともに「気を操る程度の能力」と「霊力を操る程度の能力」を持つているので、運用効率の最適化を覚えるにはうってつけの形態だったりします。

近接と中々遠距離でバランスもいいですね。

「さてと、それじゃ、ご飯取りに行くよ、フリード。藍、モード「橙」、サブは「龍」で。」

「了解。モード「橙」セットアップ。」

モード「橙」

下位ランクの形態ですけど、敏捷性がアップします。

加えて、妖獣が元になっているおかげか、五感と反応速度も上昇します。

他形態でも有用な技能は無いので、鍛錬する意味は薄いのですが、

「……シャッ!」

動物ハントの時には大いに役立つ形態です。

「兎、とつたどー!!」

私の手には兎の尻尾が握られています。これで朝食ゲットです。

「藍、もついいよ。」

「そうか……モード「橙」、ユニゾンアウト。」

どこか物足りなさそうに藍が言います。他の形態ではそんな事無いんですが……

どうやらこっちの藍も橙が大好きみたいで、事ある毎に、「橙」のユニゾンを勧めてきます。

藍の要望を聞いてあげたいとは思っていますが、「ちえええええええええん！」と襲い掛かられるのも嫌なので、用が終わったらすぐ解除します。

「かーごめーかーごめ〜。」

歌いながら兎を捌いていきます。サバイバル訓練しておいてよかったです。

捌いた切り身を火で焼いて、私と藍とフリードで分けて食べます。兎肉おいしいです。

「はむ、はむ……。」

「マスター、塩をとってくれませんか？」

「ん。はむ、はむ……。」

「ありがとうございます。あむ……。」

「ガツガツガツガツ、キュクルー!!」

「「食事中は静かにしろ!!」」

ピチューン!!

さてと、食事が終わったわけですが……コレ、どうしましょ？

そこにあるのは残った兎肉。捨てるのは勿体無いけど、このままだと腐るし……あ、そうだ。

「藍、モード「氷」、サブは「博麗」で。」

「な!？」

チルノで冷凍保存して持っていくましよう。うん、我ながら名案です。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

「へ? うん、大丈夫大丈夫。」

藍の様子がおかしいですが、どうしたんでしょうか？

「わかりました。モード「氷」、セットアップ。」

そして私は、この時の選択を死ぬほど後悔することになりました。

2時間後

「マスター！！早く隠れますよ！！」

「どうしてこうなった……。」

藍の言葉に賛同して隠れる所を探しつつ、こうなった経緯を思い出していきます。

きっかけはあのユニゾンでした。

肉を凍らせることだけしか考えていなかった私は、幻想縁起の注意書きを完全に忘れていました。

曰く「ユニゾン中は融合対象の影響を受け、性格が若干変化する」今まで試した形態では変化が体感出来ず、あまり気にしていなかったのですが、今回それが裏目に出ました。

ええ、なっちゃったんです。完全な？に！！

ユニゾン後、肉を凍らせること自体は済ませたんですが。

「あたいつたらサイキョーね!!」

と何かみよんなテンションになり、周りのものを片っ端から凍らせていきました。

さらに、サブが「博麗」だったのも災いしました。

「空を飛ぶ程度の能力」のせいで縦横無尽に飛び回って被害を増やし、「霊力を操る程度の能力」のせいでなかなか霊力が切れず、1時間以上にわたって自然破壊を繰り返してしまいました。その結果が

「おい、そっちにいたか？」

「いねえ。そっちは？」

「こつちもだ。クソっ、あのチビどこに隠れやがった？」

遠くから男どもの野太い声が聞こえてきます。絶賛山狩り中です。

「どうしてこうなった……。」

「マスターの自業自得では？」

藍のもつともな指摘にさらに落ち込みつつ、私達は洞窟に身を潜め、「宵闇」形態で入り口を隠しながら一夜を凌ぎました。

「これからは、2度と「氷」は使わないようにしよう。」

「……。（凍ったままのフリード）」

第？話 バカの恐怖（後書き）

？降臨。

これが？話目になったのは全くの偶然で、作者自身驚いています。

第10話 ストライクアーツ（前書き）

ユニーク1万越え、だと!?

投稿できない間に、まさかこんな事になっているとは……、ありがとうございます!!

またしばらくは更新していけると思うので、これからもよろしくお願ひします。

第10話 ストライクアーツ

第7管理世界アルザスにて

「ふ、ふ、ふ……。」

管理世界同士の行き来というのは通常、ゲートポートと呼ばれる転送施設で行われており、それは辺境であるアルザスも例外ではない。

そこで桃髪の幼女が一人、不気味な笑い声を発していた。正直ちよつと、いや、かなり引く。

近くを通る人はさり気なく遠回りして回避していたが、そんなことは、当人には些細なことであつた。

「里を出て1ヶ月、やっと、やっと着きました！」

『おめでとうございます、マスター。』

お久しぶりです。先日 of 山狩りから無事生還できたキャロ・ル・ルシエです。

あの時は本当大変でした。日が昇り始めてから逃走再開したんですが、たまに聞こえてくる声が怖い of なの of 。

「悪い子はいねえがぁー！」とか

「ヒャッハー！ 山ごと消毒だー！」とか

「ちゃんとOHANASHIさせてもらうの！」とか

見つかったらどんな目に遭うか考えたくもないので、とにかく必死に逃げました。

特に最後の人、どう考えても白い魔王ですありがとうございます。

何でこんな所にまで出張ってきてるんですか！ そんなんだからワーカーホリックとか言われるんですよ！

飛行すると見つかるので、メインを「玉兎」、サブを「白狼」にして「狂気を操る程度の能力」と「千里先を見通す程度の能力」で相手の配置を確認しながら脱兎のごとく逃げました。

どっちも練習不足の能力だったので、隠れてはサーチ、移動、また隠れてサーチの繰り返しでかなり疲れました。

その過程で背後の森が次々と焦土に変わっていくのを見ていますと

（私がチルノで振り撒いた被害より大きいんじゃないかね？）

と、何だか理不尽な気持ちになりました。この砲撃魔め！

「あの時は死ぬかと思った……。」

『いつまぐれ当たりしてもおかしくなかったですからね。』

さて、気を取り直して転送ゲートに出発です。とりあえずはアルザスを出てクラナガンにでも行ってみようかと思っています。あそここの郊外には廃棄区画という捨てられた街がいくつかあるので、この年の子が一人で生きていくにはうってつけです。

幼女移動&転送中……

何だかあっという間でした。

クラナガンのゲートに降り立ったところで、私は近くにあったトイレに入りました。

「藍、もういいよ。」

「やっと出られました。」

夢幻珠から藍が出てきます。流石にこんな所にまでサーチャーあるとは思えないので、藍が出てても問題ありません。

「モード「境」サブは「博麗」フリードも出ておいでー。」

続いてスキマを開き、中に放り込んでおいたフリードを取り出します。スキマを開くのも多少は慣れたんですが、今の所サブを「博麗」にしてようやく5秒で1つ。実戦で使えるのはまだまだです。

「フリードー、あれ？」

呼びかけても返事がありません。どうしたんでしょうか？

「フリード？ あ……。」「

不審に思つてスキマの中を覗き込んでみると、そこには無数の目、目、目……。

そして、目を回しているフリードの姿が

「おそらくですが、目に驚いて気絶したのでは？」

「あーそうかも。じゃあフリードの分のご飯はいいか。2人で食べよ。」

「そうですね。」

最近、フリードの扱いが主人に似てきた藍であつた。

「腹ごしらえも済んだし、そろそろ行こつか。」

「早めに住むところを見つけないと、日が暮れてしまいますからね。」

「そうなんだけど、ちょっと寄りたい所があるんだ。そつちが先でいいかな？」

「どうぞ、マスターのご自由に。」

そう言つて、藍は夢幻珠の中に戻っていきます。私は早速、近くにあった案内板を見て、目当ての所に向かいます。

「ヤッ、ハアッ！」

「シッ！」

「オラオラオラオラアッ！！」

「無駄無駄無駄無駄アッ！！」

「おー、やってますねー。」

というわけで、クラナガンにあるスポーツセンターにやってきました。

ここでは、ストライクアーツの練習場が、比較的安価で提供されています。

ストライクアーツっていうのはミッドチルダで普及している総合格闘技のことで、射撃、シールド、バインド、フィニッシュアップロウ等の魔法を織り交ぜたド派手な戦いがウリです。

魔法戦を覚えるにはうってつけですし、練習相手がいるのも嬉しいです。

実戦でしか分からないこともありますしね。一人だと套路と脳内訓練くらいしかできません。

ひとまず初心者コースで登録し、入会金を払って簡単な手続きをします。

（名前は、えーと……。）

少し迷ってから「キャロ・シエル」と申し込み用紙に記入しまし

た。

ルシエ出身なんて情報、残しておいてもいい事ないですからね。適当に決めた名前ですけど、今後はコレで通しましょう。偽名いくつも作っても混乱するだけですし。

ちなみに保護者はラン・シエルです。男親の名前の方がいいかなとは思ったんですが、フリードの？顔が浮かんできたら、そんな気は失せました。

族長様の名前を使おうかなとも思ったんですけど、迷惑かける訳にはいかないのでからね。

登録を済ませたので、早速トレーニング開始です。といっても、まだここの勝手が分からないので、適当に優しそうな人を捕まえて色々聞くことにしました。

既にペアを組んでいる人は除外して周りを探していきます。

途中、まだオラ無駄ラツシュを繰り返している2人がいましたがこれも無視しました。こんなフラグ踏んでたまるか。

適当に見回っていると、明らかに周囲とはレベルの違う人を見つけました。

見た感じまだ小学校高学年から中学校くらいなのに、技の一つ一つが鋭く、拳や蹴りを繰り返す度に揺れる青い長髪が綺麗で

チヨットマテ、この人ギン姉じゃね？

その姿を見ていると、何故か先日魔王襲来が脳内再生されます。マズい。理由は分からないけど、このまま関わると何かのフラグが立つ予感がビンビンします。

逃げるんだ、キャラ・シエル。今ならまだ間に合

「あれ？　ねえ、きみ1人？　親はどうしたの？」

向こうから来る、だと！？

「何だか迷ってるみたいだけど、もしかしてここ初めてだったりする？ホラ、色々教えてあげるからコッチにおいで。」

ギンガさんは、まるで子供をあやすような声で自分の方へと手招きしてきます。まあ実際4歳児ですけどね！！

これからどうなるんだろう。ハア……。

第10話 ストライクアーツ（後書き）

フリードはスキマ送りにされました。
エサやり忘れて餓死とかありそうで怖い……。

第11話 ちょっと借りただけですよ(前書き)

今回ちょっと短いです。あと、繋ぎの回なので内容も薄いです

第11話 ちょっと借りただけですよ

「ん……こう、かな？」

「いいよ、その調子で。」

「こうやってこうやって……ああもう、面倒臭い!!」

「キャ、キャロ、落ち着いて!」

「バインドブレイクなんか、やってられるかあー!!」

「ああ、やっぱりこうなるんだ……。」

こんにちは。キャロ・ル・ルシエ改めキャロ・シエルです。名前については前回参照です。

あれからギンガさんに色々教えてもらっただけですけどね、本当、何でそこまでって位親切に教えてくれるんですよ。最初逃げようとしてマジごめんなさい。

今やっていたのはバインドブレイクの練習です。

ギンガさんにバインドを掛けてもらって、それに干渉、解除するんですが、これが結構難しいんです。

夢幻珠アリならパワー系の形態で力任せに脱出したり、モード「七曜」(パチュリー)か「人形」(アリス)で即座に解除したりできるんですけど、それだと他形態で応用できないですからね。今は地力を付けるのが第一目標なのです。

え?「霧雨」は、って?攻撃しかできない形態でどうしろと?パインドにマスバぶっ放せばブレイクできるだらうけど、そんな痛い

のは嫌です。

「まあ、キャラはまだ4歳なんだし、始めたばかりなんだから、ゆっくりやっていけばいいと思うよ。じゃあ、いつもみたいにラスト1本やって終わろうか。」

「はい！」

ラストはいつも、ギンガさんと実戦形式で打ち合います。

ちなみにユニゾンはしません。一応、非ユニゾン時でも、身体強化くらいなら

夢幻珠で行使できるので、ソレを頼りに戦います。

「いくよ、キャラ。」

「いつでもどうぞ、ギンガさん。」

そう言ってお互い構えます。こっちの戦いのベースは太極拳、向こうはローラーブーツを履いてのシューティングアーツ。自然と、突っ込んでくるギンガさんとカウンターで迎え撃つ私、という図式になります。

「はああああっ！」

「華符「破山砲」！」

とまあ、こんな感じの日々を過ごしていたんですが

「お金が無い、だと!？」

「このままだと、あと数日で底をつきますね。どうしますか、マスター？」

ルシエを出てから数ヶ月、宝物庫からお借りした宝石類、それを売って作ったお金が今にも無くなりそうです。

「どうしてこうなった……。」

「いや、収入が無い以上、いずれこうなるのは必然でしょう?」

藍のもつともな指摘に、ですよねー、と心のなかで返しながら対策を考えますが、なかなかいい案が思い浮かびません。

まともに考えて4歳児を雇ってくれるところなんて、ある訳無いです。あーでもないこーでもないと考えている間にも、時間は無情に過ぎていきます。

「考えても仕方ないか。藍、とりあえず出かけるよ。働き口が儲け話、どっちでもいいから探さないと。」

「ですね。」

そうしてクラナガンへと出かけた訳ですが、まあ予想通り、そう簡単に仕事が見つかる訳もなく

「これで20件目。当たり前っちゃあ当たり前なんだけど……。」

「元気出してください、マスター。」

求人広告を見て行つてはみるものの、就業年齢にすら達していない幼女が雇つて貰える筈も無く、面接すら受けさせてもらえませんでした。

こんな時、能力でササッと解決できればいいんですけど、LUKに關係する能力は今のところ役立たずです。

「運命を操る程度の能力」は規模が大きすぎて使えないし、「人を幸運にする程度の能力は」私自身を対象にすることが出来ませんでした。どうやら「人」っていうのは他人のことらしいです。

「これだけやって駄目なら、もうアレしか無いかなあ？」

「……！？マスター、何をするつもりですか！？」

「どうしたの、藍？」

「いえ、何でもありません。（何だか凄くイヤな予感がしたのだが……）」

数時間後……

「ふう、こんな所かな。」

「あああ、やっぱりこういうオチか……。」「

「文句言わないの。コレしか無かったんだから。」

「それは分かっています。ですけど、やっぱり盗みは……。」

「人聞きが悪いですねえ。「ちょっと借りた」だけです。出世できたら返します。」

（顔なんて覚えてないはずなのに……）

「ん、何か言った？」

「い、いえ、何でもありません。」

藍は複雑みたいです。まあ仕方無いですよ。

あれから街の人ごみに潜り込んだ私は、「千里先を見通す程度の能力」を利用し、隙の無さそうな人や取りにくい所に身につけている人以外で、すれ違った数名から財布をお借りしていきました。あくまで借りただけです。許可取ってないし、期間が無期限ですけど、借りたんです。

……ゴメンナサイ、やっぱり嘘です。藍ほどじゃ無いけど罪悪感感じてます。うん、コレは本当に切羽詰った時だけにしよう。

気を取り直して財布の中身を確認します。

「現金がちょっとと、他は……アレな店の会員証ばかりですね……。」

どうやら私がお借りした相手は、相当の紳士さんだったみたいで

す。何だかさつきまで感じていた罪悪感が薄れていくのを感じます。紳士なら構わないですよね。

「それにしてもロクな物入ってませんね。財布の中身まで見通しておいたほうがよかったなあ。ん？」

がっかりしながらサイフを振っていると、カード入れの隙間から紙切れが落ちてきました。

「これは、チケットですかね。なにに……『クラナガン地下秘密闘技場』？」

第11話 ちょっと借りただけですよ（後書き）

ちょっと借りていただけだぜ！（キリッ

リアルでやると捕まるので真似しないでくださいね。

第12話 幻想ふたり（前書き）

色々カオスです。こんなんでいいのかなあ？

第12話 幻想ふたり

クラナガン地下秘密闘技場

そこは、何らかの理由で表舞台に出られない者が集う戦いの場。表から追い出された元プロ選手、お尋ね者、単なる賞金目当ての者等、様々な目的を持った者が集う様は正にカオスである。しかし、今舞台上で戦っている二人は、そのカオスの中でもさらに異質であった。

「オラオラオラオラアッ！」

「ば、馬鹿な！！私の、拳法殺しの肉の壁が！！」

「トドメ！撃符「大鵬拳」！！」

「ひっ、ひでぶっ！！」

特徴的な断末魔を残して崩れ落ちたのは、身長3mはあろう大男。何を血迷ったのか、ツナギに上半身裸という、色々ありえないバリアジャケットを身に着けていた。

その大男を降したのは、その3分の1程度の身長しかない桃髪の少女、いや、幼女の方が正しいかもしれない、であった。

「しょ、勝者、キャロ・シエル！！」

大男のダウンを確認した審判が少女の勝利を宣告し、会場は大いに盛り上がる。

年端もいかない幼女が強者を倒していく様は、ここ最近の名物に

なっていた。

「藍、ユニゾンアウトよろ。」

「了解です。マスター、その言葉遣いはどうかと思いますよ。」

「藍はノリが悪いですねえ。」

こんにちは。キャロ・シエルです。つい先日5歳になりました。

あのチケットに儲け話の臭いを嗅ぎ取った私は、早速闘技場を探してみました。

一応住所自体はチケットに書いてあったんですけど、そこでも色々ありました。

あ、ここから回想入ります。

最初は下働きで雇って欲しいと交渉したんですけど、やっぱり取り合ってもらえませんでした。

裏っぽいところなら就業年齢どうにかなるんじゃないかね？と期待していたんですけど、そううまく行かなかったです。

ただ、ここで引き下がる訳にもいかず、必死にチンピラっぽい人に頭を下げたんですが

「嬢ちゃんみたいなチビには無理だっつーの。どうしても金が欲し

いんなら、俺が買ってやろうか？ギャハハハ！」

気が付いた時には、いつの間にか土下座をして命乞いをしているチンピラさんと、「龍」モードになってその頭を踏みにじっている私がいきました。

私的に、小さい呼ばわりは事実なので許せるんですけど、変態はNGなのです。ロリコン滅びろです。

「ごめんなさい、許して……ハア、ハア……。」

っていつかこのチンピラさん、命乞いに混じって、時々喘ぎ声みtainの発してるんですが……。

まさか、興奮してる！？しまった、こいつMなのか！？

土下座されてるのに何故か身の危険を感じるというレアな体験をしていると、騒ぎを聞きつけたのか、奥の方から黒のスーツに金のバッチをつけた、いかにも兄貴っぽい人が出てきました。

兄貴さん（仮）は私たちの姿を見てかなり驚いています。

まあそうですよね。就活オワタ（＾o＾）ノ

明日からどうしようかなーと半ば現実逃避しながら、さりげなくこの場を離れようとしたのですけど

「おい、ちょっと待ちな嬢ちゃん。」

兄貴さんに呼び止められました。

ハッ！ まさか、チンピラをボコったOTOSHIMAEつけろとか言い出すんじゃないでしょうね？

小指詰めるとか絶対嫌ですよ！！

「あんた、ココで戦ってみねえか？」

へ？

「実はさっきから話はこつそり聞いていたんだけど、嬢ちゃん働きの口が欲しいんだろ？ 見た感じ結構やるみたいだし、戦って勝てばファイトマネーも入る。悪い話じゃねえとは思ってたが。」

うーん、どうでしょうか？ 一見美味しい話に聞こえるけど…。

裏社会とはいえ、あまり注目されるのは不味いし、この話自体が何らかの詐欺の可能性もあります。

ただ、おそらくこれ以外には、この年でまともに金を得る手段はないでしょう。

結局、背に腹は替えられない訳で

「いいんですか？ やらせてください。ありがとございます!!」

まあ、深入りしすぎなければ大丈夫でしょう。あくまでまともな職を見つけるまでの繋ぎです。

とまあ、こんな訳で闘技場生活が始まりました。

ここに選手登録してからは、大体2、3日に1回の割合で試合が

組まれるようになりました。ファイトマネーおいしいです。

それと並行して普通の仕事も探しているのですが、年齢の壁は厚く、結局一年近く、朝は一人で訓練、昼はギンガさんとユニゾン無しで打ち合ったり、仕事を探したり、たまにフリードをスキマから出して暇潰ししてます。夜は寝るか、試合のある日はユニゾンして出場って感じの日々を過ごしていました。有名になってしまうのは考え物だけど、実戦経験積めるのはかなり有難いので複雑です。

「それにしてもさっきの人……。」

『どうしました、マスター？』

「い、いや、何でもないよ。……うん、きっと気のせい気のせい。」

さっきの試合で出てきた人がどう見てもハート様だったんですけど、多分他人の空似でしょう。

特技とか断末魔も一致してたのも多分偶然です。

それでなくともこの闘技場、モヒカンとかスキンヘッドとかの選手ばかりだっていうのに……

この闘技場はAランクからFランクまであって、今の私はCランク。FとかEの頃は比較的まともだったんですが、Dに入るあたりから、そういう世紀末な奴らが増えてきました。

魔法、バリアジャケットなにそれおいしいの？ ストライクアーツ（笑）。

そういえば、前に火炎放射器持っていた奴もいましたね。

消毒されるのは御免なので、放射してくる瞬間にそいつの周りに結界張って熱々のローストチキンにしてやりましたが。（殺してはいません。そもそも向こうの反則負けです）

Cランクでこれなら、BとかAはどうなるんでしょうね？拳王とか聖帝っぽいのが出てきたら勝てる気がしません。

小遣い稼ぎ目的なので、これ以上ランクは上げない方がいいですね。おお、こわいこわい。

「そろそろ帰ろうか？」

『ちよつと待つてください。今日はこの後「フェニックス」と「プリンセス」の試合があります。』

「あ、そうだった。」

この2人は、最近話題になっている闘士です。

同じ時期に現れて連戦連勝を繰り返し、一気にランクを上がっている期待の新人です。

今まで2人の試合を見た事は無かったですけど、いずれ当たるかもしれない相手なので、チェックしておきたいです。

……というか、名前からして何かのネタ的な雰囲気を感じるのでスルーしたら後々厄介なことになりそう、っていうのが一番の理由だったりします。

売店で買ってきたポップコーンを頬張りながら待っていると、試合開始の時間になりました。

（何が出てきても驚かないように……よし、大丈夫。某筋肉星の王子とか某聖闘士が出てても驚かないです！）

そして出てきたのは、白いシャツに赤いツナギのズボンを履いた白髪の女性。

（あー、そっちか。ってことはプリンセスは……）

反対側から出てきたのは、着物風の上着に赤いスカート、黒髪口

ングの、名前負けしないほどの美少女で

(てるも……)

「あら、今日の相手は貴方なの?」

「ふん、白々しい、知ってたくせに。」

「まあいいわ。つまりはいつも通りってことでしょう?」

「そうだな。お前の言葉に同意するのは嫌なんだが……いつも通りの「殺し合い」だ。」

「貴方を不死にした永遠の力、その身にとくと味わうがいい、蓬莱人!」

「お前を殺すために身に付けた炎、その身にしっかり味あわせてやる、月姫!」

そこからの事は正直あまり思い出したくないです。

2人の間で繰り広げられたのは問答無用の殺し合い。

非殺傷、何それ? 外人? 歌? って感じでした。

龍の顎の玉でもこたんが貫かれれば即リザレクション。

鳳翼天翔でぐーやが消し炭になったかと思えば即リザレクション。ルール上は相手を殺してしまつたら失格なんですけど、死んでも即生き返っているので審判は完全にパニックになっていました。ご愁傷様です。

その後も、刺殺、リザレクション、焼死、リザレクション、ミン

チ、リザレクション、バラバラ、リザレクション……。

延々20分近くスプラッタなシーンが続いた後、結局時間切れによりドローになりました。

観客席を見ると、こっちはこっちでカオスです。

あまりのグロさにリバスした人、もらいリバスしそうなのを必死に耐えている人、逆に大興奮しているアレな紳士と、こちらも散々なことになっていました。

多分このカードが組まれることは2度とないでしょうね。主にエチケツト袋的な意味で。

とりあえず酸っぱい臭いのする観客席を後にして、拠点としている廃屋に帰ってきました。

「殺し合い云々はともかくとして、戦闘技術においては見習う所の多い試合でしたね。……マスター、どうしました？」

冷静になって考えてみると、さっきの試合からどうしても気になることがありました。

「ねえ、藍。」

「はい？」

「幻想郷って、実在するの？」

「っ！ それは……。」

私の質問に驚いた藍を見て、疑問は確信に変わりました。藍は隠し事が下手ですねえ。

「そっか。やっぱりあるんだ。」

「……はい。」

私は今まで夢幻珠の事を、オタク文化にはまったマッドな科学者が作ったトンデモデバイスだと思っていました。でも、この世界に幻想郷があるのなら、このユニゾン形態のオリジナルである人妖が実在してるなら、色々話は変わってきます。

「藍、このデバイス、「夢幻珠」は、一体何なの？」

第12話 幻想ふたり（後書き）

今回の件で一番被害を被ったのは闘技場の清掃員。

汚物処理と臭い消しで徹夜仕事になったとか。

以降、闘技場の座席にはエチケット袋が常備されたいです。

第13話 油断大敵（前書き）

今回明らかになる設定ですが、独自解釈が多分に含まれています。

第13話 油断大敵

「ねえキャロ、最近様子がおかしいみたいだけど、何かあった？」

「え？いえ、何でも無いですよ。気にしないでください、ギンガさん。」

「ごめんなさい、思いつきり嘘です。」

あれから私は、藍に知っている限りのことを教えてもらいました。

「夢幻珠に格納されているユニゾン形態は、それぞれ「分霊体」という、魂のコピーをベースに、リンカーコアを付与して加工したものです。」

「コピー、ですか？」

「はい。マスターは不思議に思いませんでしたか？いかにユニゾンデバイスとはいえ、ユニゾンするだけでレアスキルが使用できることを。」

「いや、正直突っ込みどころが多すぎてスルーしてた。」

「……本来、能力というのは固有のものです。一人で複数の能力を持つていたり、後天的に習得したり変化することもあります。それでもその人だけのものです。また、転生してもなお「一度見た物

を忘れない程度の能力」を持ち続けた阿礼乙女の例を見るに、魂に由来するものだと考えられます。そこで、能力持ちの人妖の魂をベースにし、能力持ちのユニゾン形態を作り上げた。それがこの夢幻珠の正体です。だから、私もコピーなんですよ。」

最後にそう付け足して、藍の説明は終わりました。

「ねえ藍、どうして最初の時にそこまで説明してくれなかったの？」

「それは……。」

「別に責めている訳じゃないから、ね？」

「はい。もしこの事実が公になった時に起こりうる事態を考えると、一人でも知っている者が少ないほうが良いと判断し、今まで秘密にしていました。」

確かにとんでもない事です。もし管理局の手にこれが渡って幻想郷の存在が明るみに出してしまったら、下手すれば管理局と幻想郷の間で戦争が起こるかもしれないです。

「私のデータにある情報はここまでです。製作者についての情報も探してみたのですが、残念ながら存在しませんでした。どうしますか、マスター？」

藍の言葉には何となく、捨てるのなら今のうちだ、というニュアンスが含まれている気がしました。だから私は

「藍、私前に言ったよね。「運命からは逃げることなんて出来ない」、「待ち伏せされているのが分かっているなら、正面から叩き折って

やります」って。その思いは今も変わらないよ。」

今まで管理局の目に付かないようにしていたのは、竜召喚師であることがバレて、最高評議会やス力さんに目を付けられるのを避けるっていうのがメインでした。今回のことは、そこに夢幻珠の秘密が加わった、ってだけの話です。リスクは増えましたけど基本方針自体は今まで通りなので、今まで通りにやっていけばいいんです。

いいんですが

「はあ……。」

「キャラ、本当に大丈夫？」

「大丈夫ですから心配しないでください。じゃあ、ちょっと早いけど、今日はこの辺で上がります。また相手してくださいね。」

「あ、うん。さよなら、キャラ。」

管理局と幻想郷の戦争フラグが自分の手に有るとなるとプレッシャーがかかります。もしそうなると自分だけの問題じゃないので気が重いです。自分の中で結論は出ているんですけど、本当の意味で消化できるまでには、もう少しかかりそうです。

「とりあえず、今日は試合の日だからそっちに集中しないと。」

そんな風に余裕が無かったからでしょうか？

いつもなら気付けたはずのものを見逃してしまったのは

「キャロ、大丈夫かなあ？」

いつもやっているシューティングアーツの訓練を終えて家路につく途中、私は、ふとしたきっかけから出合った年下の友人のことを考えていた。

どう見ても悩み事がありそうなのに、それを隠そうとしている。出来ることなら力になってあげたいけど

「あ、あれ……キャロ？」

そんな事を考えていると、目の前にその本人が歩いているのを見かけ、驚きのあまり思わず隠れてしまった。彼女はこちらに気付かなかったみたいで、町外れの方へと歩いていった。

（そういえば、キャロってどこに住んでるんだっけ？ よく考えると、キャロの事何も知らないんだよね）

そんなことを考えている間にも、キャロはどんどん町外れの方へと歩いていく。一瞬どうするか迷ったけど、ギンガもまだ13歳の若者。湧き上がる興味を抑えることが出来ず、キャロの後を尾けていくことにしたのだった。

歩き続けること数十分、付かず離れず追いついて着いた先はクランガン郊外第2廃棄区画にある廃屋。

布団や家具が置いてあることから、ここでキャロが寝泊りしているのは、ギンガの目から見ても確定的に明らかであった。

「まさか、こんな所で暮らして!？」

そういえば、キャロからは学校に通っているといった様子は無かった。どうしてなのかは不思議に思っていたけど、まさかこんな所でホームレス同然の暮らしをしているのは予想外だった。

(どうしよう……)

図らずも知ってしまった友人の秘密に頭を悩ませていると、キャロが再びどこかへ歩き出した。

とりあえずはこの思考を隅に追いやり、ギンガも尾行を再開した。先程の衝撃映像のせいで、尾行への罪悪感は一時的に消えていた。さらに尾行を続けること1時間、再びクランガンに戻ってきたキャロは大通りをそれて路地裏へと入っていった。

(もう日が落ちる時間なのに、どこに行くんだろう?)

明らかに子供の出歩く時間ではなくなっている。それはギンガにも当てはまり、帰ったら父親からの説教確定なのだが、ここまで来て最後まで見ないわけにはいかない、と、何だかみよんな使命感に駆られていた。

やがてキャロは裏路地の一角で止まり、そこにある階段を下りていった。

それを追うため、自分も中に入ろうとしたのだが

「ここは嬢ちゃんみたいな子が入るような所じゃねえぞ。ガキはさつさと家に帰りな、ギャハハ！」

扉の前に立っているチンピラっぽい人に止められてしまった。

まさかキヤロを追っていただけでこんな目に遭うなんて予想してなかったので、思わず逃げ出したくなる。でも、キヤロのことを聞き出すまでは何としても帰るわけにはいかなかった。

「あの、人を探してるんですが、ここに桃色の髪の子が入ってきてませんでしたか？」

「ん？アンタ、あのガキの知り合いか？だとしても、客じゃねえ奴を勝手に入れる訳にはいかねえなあ。ホラ、商売の邪魔だから帰った帰った。」

そう言われて追い出されてしまう。どうやら今日はこれ以上調べるのは無理そうだ。

とりあえず今日知りえたことを整理してみる。

- 1・キヤロは廃棄都市に住んでいるらしい
- 2・クラナガンの裏路地にある、怪しい所と関わりがあるらしい

どちらも驚くべき事実だけど、今気にするべきは2だ。

商売、って言ってたから、何かの店であり、普通に考えると、キヤロはその客か、もしくは働いているものだと考えられる。

だけど、わざわざ扉の前に見張りを置いていたり、その見張りがどう見てもヤの付く人にしかみえなかったので、まともな店ではないであろう。

「ねえキャロ。私は、どうしたらいいんだろっ……。」

第13話 油断大敵（後書き）

というわけで、夢幻珠についての話でした。

要するに、珠と魂をかけた言葉遊びです。

8話あたりで言ってるので、勘のいい人は気付いてたかもしれないですね。

そしてギンガにバレてしまいました。どうなるんでしょうかね？

第14話 世の中結構狭いです

ナカジマ家にて

「ただいま、父さん。」

「遅い！ギンガ、てめえ今までどこほつつき歩いて……何かあったのか？」

何かあったか、ってレベルじゃない。

いつも一緒にトレーニングしているキャラ、その友人の信じられない実態を目の当たりにして、頭の中は混乱中で整理しきれてはいない。私一人で背負うには大きすぎる悩みであった。

「父さん、えつとね……。」

だから大人を頼る。父さんは一見怖いところもあるけど優しい人だ。きつと何かいい考えが出てくるだろう。

私は父さんに、友人がホームレス同然の暮らしをしているのを偶然見つけてしまったこと、よく分からない所に入ってしまった、恐らくはその客、もしくは働いているんじゃないかということを伝えた。

「ギンガ、その建物があった場所、案内できるか？」

「できるけど……父さん？」

「あまり大きな声では言えないが、ひよつとするとその施設、今ウチで扱っている件に関係してるかもしれない。」

「へ？」

「今まで噂程度の情報しかなかったんだが……その施設、ひよつとしたらひよつとするかもしれないねえ。」

「ちょ、ちよつと待って、父さん！」

自分の悩み相談がいつの間にか大事に発展しそうなのに気付いて慌てて止める。

父さんの仕事は管理局員、それに関係しているということは、あの施設は何らかの犯罪に関わっている。だとすると、このまま事が進んでしまえばキャロは

「心配すんな。あくまで、かもしれない、っただけの話だ。もしその施設がアタリだったとしても、オマエの友人、キャロ、だったな。その子は保護するように、コツチで通達しておいてやる。」

だから大丈夫だ、と父さんはフオーしてくれた。良かった、ちゃんとキャロのことを考えてくれている。

「ただな、万一このことが漏れるといけねえから、お前はこれから何日か、そのキャロって嬢ちゃんとは会わないでくれ。いいか？」

正直な所、この事をキャロだけには伝えておきたい。けど、事態はすでに私だけのものじゃなくなっている。後のことは大人たちに任せるのが正しいと思えるほどには、今の私は落ち着いていた。

「キャラの事お願いね、父さん。」

「おう。任せておけ。」

数日後、クラナガン秘密地下闘技場にて

『藍、今日の相手って誰だっけ?』

『えー、「ウイグル」です。鞭を使う大男らしいですよ。』

『獄長……。』

この地下闘技場、もう完全に世紀末です。最近は蓬莱人みたいな事もなく、ひたすらネタ系闘士ばかりです。リリカルマジカルyohはshock!です。

「じゃあ、そろそろ準備……アレ?」

『何か騒がしいですね。』

入り口の方が何か騒がしいです。何だかイヤな予感がマッハで上昇していきます。まさか

「管理局だー！！全員、非常口から非難しろ！」

「ああ、やっぱり……。」

ガサ入れ来ちゃいました。まあ、こんな裏の世界ですし、いつ来てもおかしく無いですからね。

ここで稼ぐのも潮時ってことですか。逃げろと言ってくれているので、さっさと逃げましょう。

「ダメだ！裏口の方にも局員が詰めてやがる。逃げられねえ！」

「腕利きを集めろ！全員で突破するぞ！」

あやややや、これはちょっとヤバイですねえ。さて、どうしまし
ようか？

報告書 陸士108部隊部長 ゲンヤ・ナカジマ

我々陸士108部隊は、○月○日19:00、情報リークのあった施設へと強制捜査を実行した。

捜査の結果、当該施設はストライクアーツの賭け試合の会場であり、オーナー初め経営に関わった者15名を書類送検、従業員、客、合わせて193名を賭博容疑の現行犯及び事情徴収のため確保した。確保の際、抵抗により局員が十数名負傷したが、怪我はいずれも軽傷で命に別状は無い。

また、容疑者のうち何名かの逃走を許してしまった。逃走した人数は現在のところ不明である。

押収した証拠物件については、別紙を参照されたい。

「こんなところか……。」

打ち終わった報告書をチェックしながら昨日の事を思い出す。

昨日の一斉摘発の際、ギンガの言っていた少女が発見されたという報告は無かった。

念のため現場の局員一人一人に聞いてはみたものの、該当する少女はいなかったらしい。

聞き込みの際、一部の局員が

「ハート様に血を見せてはいけない……。」

「獄長エ……。」

「消毒コワイ消毒コワイ消毒コワイ……。」

等のよくわからないことを口走っていたが、これは関係無いだろう。

「ただいま、父さん。」

「お、ギンガか。どうだった？」

「住んでるはずの所に行ってみただいなかったよ。キャロ、どこに行ったんだらう……。」

友人の心配をしている優しい娘を見ながら、押収した資料の一つに目を通す。コレはこの娘に言わないでおいの方が良いだろう。

同時刻、地下秘密闘技場にて

昨日の大捕り物から一夜明け、今現場には数名の局員を残すのみになっていた。その数名も、簡単な確認を終えて、徹夜空けの体を休めるべく家路についた。

そして誰もいなくなつた施設の片隅、選手控え室だった場所の空間に裂け目が走る。5秒ほどで裂け目は完全に開き、中から一人の少女が顔を出した。

「やっと出られましたねー。」

『間一髪でしたね。』

本当に危なかったです。局員が来る前にこの部屋に入り、何とか踏み込まれる直前でスキマに潜り込むことができました。

まだスキマ移動が出来ないので、入った所からしか出られません。なので結局、局員が全員いなくなる今の今まで、スキマ内でフリードと遊びながら時間を潰していました。

「これからどうしよつか、藍？」

「念のため、今まで住んでいた拠点は放棄した方がいいですね。そ

れと、ギンガさんに迷惑をかけるわけにもいきませんから、ほとぼりが冷めるまではスポーツセンターも無しですね。」

「だね。また別の拠点探して仕事見つけよっか。じゃあね、フリード。」

フリードを残してスキマから出ます。幸い、ファイトマネーは結構残っているので、暫くの間は大丈夫です。次の仕事はどうなるのかなー。

再び陸士108部隊

「ゲンヤ隊長ー、頼まれていた書類、終わりましたー。」

「おう、見せてみる……コレとコレ、あとコレもやり直し。あと追加でコレもやってくれ。」

「ひどっ！ゲンヤ隊長、いくら何でも人遣い荒すぎひんか？」

「これも勉強だ。つべこべ言わずにさっさとやりやがれ。」

「……了解ですー。ん？この書類って？」

「ああ、ちょっと前にウチの部隊で一斉検挙した時あったろ？あの関係だ。」

「そーなのかー……え、これホンマですか！？」

「俺もそれ見た時は驚いた。」

「キャラ・シエル、推定年齢5歳、闘士ランクC、色んな意味でデタラメやなあ……。」

少し後、某所にて

「久しぶりだねはやて。今日はどうしたの？」

「久しぶりやなフェイトちゃん。早速やけどコレ見てくれへんか？」

「何……コレは!？」

「ホントは捜査資料横流したらアカンのやけど、フェイトちゃん執務官やろ？執務官権限でフェイトちゃんの方から取り寄せたってことにしといてえな。」

「いいけど……、この資料、本当に？」

「正直私も半信半疑なんやわ。フェイトちゃんやったらその辺調べることも出来るやろ?。」

「うん。ありがとう、はやて。」

「ええてええて。私とフェイトちゃんの仲やろ?。」

「キャラ・シエルか……。もし昔の私みたいに苦しんでいるのなら、助けてあげなくちゃ!!」

さらにおまけ その頃2人

「あーもう、鬱陶しい!! あいつらどこまで追ってくるのよ!!」

「私が知るか!! ったく、とにかく逃げるぞ!!」

「そうね。それじゃ、あそこで二手に分かれるわよ。」

「テメー、そう言って私の方に全部押し付けるつもりだろう?」

「……チツ。」

「舌打ちしてんじゃねえ! やっぱりお前は信用ならねえ! 今すぐ消し炭にしてやるから覚悟しろ!」

「そこまでだ! こちらは時空管理局! もう逃げられんぞ。大人しく」

「「うるさい!!」」

「「うわらばっ!!」」

「何か逃げるのも面倒になってきたわ。こいつらまとめて吹っ飛ばした方が楽じゃない?」

「お前の言う事聞くのなんて非常に嫌なんだけど……それには同感だ。」

「ぜ、全員でコイツらを取り囲め！数で押して無力化させるぞ！」

「遅い！時効！月のいはかさの呪い！」

「これも喰らいなさい。難題「仏の御石の鉢　砕けぬ意思」！」

「「「「う、うわああああああ！」「」「」」」

ピチューン！！

この事件をきっかけに、賭博容疑、障害容疑、公務執行妨害etcで通称「フェニックス」と「プリンセス」が指名手配されたのだが、それはまた別の話である。

第14話 世の中結構狭いです（後書き）

ギンガ ゲンヤ はやて フェイトのコンボ
キャラがギンガと初めて会った時の予感ほコレだったのかも

第15話 知らないのか？運命からは逃げられない（前書き）

バトル描写難しいです

第15話 知らないのか？運命からは逃げられない

『B地区、異常ないか？』

『こちらB地区、異常ありません』

『なら良い、このまま監視を続ける。』

『了解です。』

皆さんこんばんは。先日ガサ入れから無事生還したキャロ・シエルです。

次の稼ぎはどうしようかと悩んでたんですけど、あれ以来、街中を歩いているとちよくちよく声をかけられて仕事を紹介してくれるようになりました。

どうやら闘技場での活躍が裏で広まっているようで、小さいくせにやたら強い魔導師として話題になっているそうです。

「子鬼」なんていう二つ名までついて……鬼って何ですか鬼って！「萃」や「乱神」は使った事無いのに！

ってな訳で仕事は入ってはくるんですけど……。

金バッチつけた人の護衛とか、用心棒だとか、ブラックな仕事ばかり来るんです。その中でもギリギリ法に触れなさそうなグレーゾーンの依頼だけ受けるようにして、今日まで何とか生きてきました。

今日受けている依頼はちょっと違って、最新デバイスの横流し取引現場の護衛です。

……真っ黒です。

普段なら受けないんですけど、報酬としてブーストデバイス1コ分けてくれるって言うんで、渋々ながら受けました。

こういう取引って、まだ市場に流れていない最新型を扱っているので、品質的には文句無しなのです。

いつまでも夢幻珠ばかり使っていたらどこかでバレるかもしれないですからね。ブースト魔法と射撃魔法くらいは普通のデバイスで使いたいです。

『こちらC地区。こちらにも異常ありません。』

『おお。もうすぐ取引だ。手前ら気い抜くんじゃねえぞ。』

『へえ兄貴。でも管理局なんて来るんですかねえ？ 取り越し苦労じゃねえっすか？』

おい下っ端A、フラグ立ててんじゃねえのです。

『氣い抜くんじゃねえって言っただろうが！ 来ないならそれに越した事はねえんだ。それにもし来たとしても子鬼のセンサーが何とかしてくれる。だから余計なことは考えず見張ってろ。』

『へ、へえ。』

兄貴の方もフラグ立ててんじゃねえのです。あと子鬼いうな。そんな事言っていると

「管理局だー！ 全員、A地区に集合しろー！」

はあ・・・やっぱり来たですね管理局。仕方ないです。報酬分の仕事くらいはしましょうか。

私が現場に駆けつけた時には、もう既に戦闘が始まっていました。こちらは10人前後。向こうは大体……30人!? 管理局は人手不足とか絶対嘘でしょ!?

「しょうがないですね。みなさんは下がってください。」

「せ、センサー、お願いします!!」

別にあなたのためにやってるんじゃないですよ下っ端B

「見てろよ管理局! 子鬼のセンサーが来たからには、手前らなんざ一捻りだぜ! ヒヤッハー!!」

うるさいですよ下っ端C。何かコイツらから先に片付けたくなくできます。

「新手か……撃てー!!」

局員が30人がかりで射撃魔法を撃ってきます。こっちは子供なのに容赦無いですねー。

さあ、仕事の時間です。

『藍、モード「博麗」サブは「龍」で』『夢符「封魔陣」!!』

即座に結界を出して、後ろの仲間を守る盾にします。射撃魔法を防げたのを確認してから、私は単独、局員の方へと突進していきま

す。

「結界だと！？ 全員、アイツを狙え！」

あやや、集中攻撃に切り替えられたみたいです。それじゃ、出来るだけ引つかき回してみますか。

後方の封魔陣を維持したまま、私は弾幕の雨に突っ込みます。少し数は多いけど、この程度なら

「な！？ どうして当たらないんだ！？」

「ひるむな！ 撃てー！」

グレイズグレイズグレイズグレイズ……。

迫りくる弾幕を、全て紙一重で避けて進みます。

ぶっちゃけ殆ど自機狙いなので、動き続ければ当たりません。

たまに狙いが狂った弾が飛んでくるのでそれに注意して接近し、一番近くにいた局員に拳を叩き込みました。

「ぐはっ！」

「一人目！」

即座に気絶した局員を別の局員に向けてブン投げて、それを盾にして接近。同じ要領で無力化していきます。

「龍」以外での接近戦はまだまだ修行中なんですけど……普通に通じてますね。

こんなにアッサリ行くと、管理局は何教えてるんだろって疑問になります。人材不足って、質の話だったみたいです。

半ば恐慌状態に陥った局員を殴っては投げ投げては殴って、を繰り返しているうちに、向こうは半数にまで減りました。これでコチラとほぼ同数。あとはもう数人無力化してから、結界解除して全員で畳み掛ければ

「!？」

そんなことを考えていると、突然、今まで感じたことも無いような強大な魔力を感じしました。

何でかは分からないけど、このままココに居るのは不味い。

本能に従って回避行動をとったその一瞬後、私のいた所を金色の閃光が通過していきました。

閃光はそのまま結界に直撃し、自分達は安全だと高をくくっていたチンピラさんを飲み込んでいきました。コレは……砲撃魔法!?

「新手だ!?! クソツ、残ってる奴らで何とかするぞ!!」

兄貴さんは無事だったらしいです。

でも今の一撃でこっちは私を含めて6人。今の砲撃を撃ってきた魔導師が合流してくると、どう考えても勝ち目はありません。

まあ既に15人ノシだし、少なくとも前金分の仕事はしましたよね。

成功報酬が貰えそうに無い以上、目を付けられる前にサッサと逃げましょう。

『藍、モード「鴉天狗」サブは「博麗」。』

最速の形態を選択。羽団扇を装備し、黒翼を展開して一瞬でその場を離脱します。

後ろの方から「センセええええええ！！」と悲痛な叫び声が聞こえてくるけど知ったこっちゃないです。

アーキコエナイキコエナイー。

そのまま逃げ切れると思ったんですけど

『こちらは時空管理局です。その子供、今すぐ停止して投降して下さい。』

「はあ、何でもよってフェイトさん……。」

現在海上でデッドヒート中です。さつきから金髪の執務官様がここに念話を送ってきます。

よりもよって管理局最速クラスのフェイトさんですか。逃げ切るの大変そうです。

『未成年の犯罪行為については情状酌量の余地がある。私も弁護してあげるから！ だから止まって、お話聞かせて！』

コッチが何も返事しないのに、フェイトさんは説得を諦める気配がありません。

その声から心底私のことを心配してくれてるのは分かるんですが……
今や私の逮捕は私だけの問題じゃないんです。

『残念ですけどそれは出来ません。あなた個人は信用出来るかも知れないですけど、上が真っ黒ですから。』

『っ！？ それ、どういうこと！？』

『子供の戯言です。気にしないでください。』

『……とにかく、停止しないというのなら、私は管理局執務官として貴方を止めます。』

『お断り、なのです。』

そう言つて、「風を操る程度の能力」を強化してさらに加速します。

今、私は能力を使って自分の周りの空気を操作して、音速以上の速度で飛行しています。

空気そのものが動いているので、私の周辺は無風状態で、少し離れてソニックブームが発生しています。飛行機の中で風を感じないのと同じ理屈です。

普通はコレで振り切れるはずなんですけど

後ろを見ると、さっきまでのバリアジャケットをパージし、局員としてそれはどうなんだ、というくらい際どい格好になったフェイトさんが、振り切られることなく付いて来ています。真・ソニックフォーム色んな意味でやばいです。

内心冷や汗を書いていると、後ろから魔力反応。一瞬後にフォトンランサーが1発、私をかすめて飛んでいきました。

『今のは警告です。このまま逃げ続けるなら、次は当てます。』

これは不味いです。

最高速度で振り切れない。

戦闘になったら経験と魔力量の差でこっちの負け。

逃げながら迎撃は、振り向かないと攻撃できない私に対し、追いながら撃ち続けられるフェイトさん。

ガン逃げした場合、私の魔力量はA〱AA程度、霊力を足してもAA+〱AAAの間。向こうは推定S〱S+。先にガス欠になるのはこっちです。

アレ？ コレ詰んだ？

第15話 知らないのか？運命からは逃げられない（後書き）

次回最終話

「キャロ・ル・ルシエは燃え尽きて」をお送りします

ごめんなさい、大嘘です

第16話 キャロは大変なものを盗んでいきました（前書き）

いつの間にかPV10万超えてました！
これからも頑張っていきます！

第16話 キャロは大変なものを盗んでいました

『今のは警告です。このまま逃げ続けるなら、次は当てます。』

そう言つて魔力スフィアを5つ、私の周囲に待機させていつでも発動できるようにする。

本当、どうしてこんな事になるんだろう。

キャロ・シエル

はやてからの情報提供で知った小さな女の子。

闘士として登録されていたという事を聞いて思い出すのは、母さんの命令でジュエルシードを集めていたかつての自分。

今思えば普通の子供らしい生活が出来なかった自分とダブってしまい、私はこの子を助けてあげたいと思った。

「でも、捜査資料持ち出して本当に良かったの？はやてが指揮官研修している部隊の部隊長、えーと、ナカジマさん、だっけ？その人に知られたらただじゃ済まないんじゃない？」

「まあ本当ならそんなんやけどなあ。これはゲンヤ隊長からの頼みでもあるんよ。」

「どついつこと?」

はやてが言うには、陸士108部隊としては、キャロの事は正直どうでもいいらしい。

あくまでこの事件のメインは闘技場の経営に関わっていた連中と、それらの所属している組織である。

逃げ出したと思われる客、従業員、闘士に回すだけの労力など存在せず、経営陣の洗い出しも済んでいる以上、この事件の捜査はほぼ終了しているようなものだ。

「というわけなんよ。」

「そうなんだ。でも、どうしても無いのに私に頼んできたんだろう?」

「その辺も聞いてみたんやけど、上手くはぐらかされてもうたわ。あくまで今回の件は、“不幸な境遇の子供を保護している若い執務官が、“たまたま”お蔵入りになりそうな資料を見つけた”ってことにするみたいや。」

「うーん、どうしてなんだろう?」

この二人はゲンヤの娘、ギンガがキャロの友人であることを知らない。

もし知っているのなら、組織だって動けない自分が、娘からの願いをどうにかして叶えようとした苦肉の策だと気付けたのかもしれない。

もし問い詰めたとしても、部隊長という私情で動くことが許されない立場にいるゲンヤは、決して認めようとはしないだろうけど。

とりとめの無い回想をしながら、私の前を飛んでいる少女に視線を向ける。

今日、とある組織の裏取引の検挙に助っ人として出勤した際、遠目に見たのは弾幕の雨をすり抜けて局員を次々と倒していく少女。その姿に心が痛むのを感じながらも、私は自分の仕事を果たした。長距離砲撃を打ち込んで目標を鎮圧。この時あの子が避けてくれたのは、正直少し嬉しかった。

後始末を他の局員に任せて、私は真っ先に逃げていった少女を追いかけた。

そして今、彼女は真・ソニックフォームの私とほぼ同じスピードで逃げ続けている。

自慢じゃないけど、私は自分のスピードには結構自身を持っている。なので、自分の三分の一も生きていない少女に並ばれているのは少しショックだ。

思考を断ち切り、私はランサーの照準をセットする。

いくら説得をしても受け入れてもらえなかった。少しでもお話して、まともな感情や常識があるのは分かったけど、それでも無理だった。こうなった以上、私は執務官として行動するしかない。

「本当に、世界はこんな筈じゃなかったことばかりだよ、お兄ちゃん。」

この速度で直接組み合うのはお互い危険なので、非殺傷魔法で撃墜するしかない。

幸いにも下は海だ。万が一回収が遅れて墜落しても、大事にはならないだろう。

「フォトンランサー、シュート！」

待機させてあったスフィアを全て発射する。どうやら着弾する直前にシールドを張ったらしく、着弾地点から爆煙が上がった。これで落ちたなら回収する。防げたとしても動きは鈍っているはずだから、バインドで拘束する。

煙が晴れるとそこには……誰もいなかった。

「いない！？ あの子は何处！？」

サー、対象の反応、後方3000、4000、5000……なおも離れていきます。

バルディッシュからの報告に驚きながら急いで反転しようとするけど、高速機動に入っていたので急には止まらない。反転機動を終えるまでの間にも距離はどんどん離れていき

サー、目標ロストしました。

「逃げ、られた!？」

まさか逃げ切られるなんて……そんな事を考えている間にも、事態は進んでいく。

『テストロッサ執務官、至急こちらに応援願う!!!』

『どうしましたか?』

『先程飛んでいった魔導師が戻ってきて……うわああああっ!!』

やられた

どうやったのかは分からないけど、あの子は私から逃げ切った。そして管理局側の最大戦力である私を置き去りにしたまま悠々と現場に戻ったのだ。

急いで現場に戻った私が見たのは、先程の戦闘に追加で3人、おそらくキャロに倒されたであろう局員であった。

「あの子は!？」

「逃げられました。」

辛うじて無事だった局員に聞いてみると、あの子は戻ってくるなり局員を撥ね飛ばしながら押収物へと直行、今日取引されていたデバイスを1つ取ると、来た時と同じように、高速飛行でどこかに飛んでいったらしい。

「それと、現場にこのような書き置きが。」

そう言つて局員が差し出してきたものを受け取る。まさか自分から手がかりを残すとは思えないけど

！
ブーストデバイス―基頂戴しました。あばよ、とつつぁーん！

これは知っている。昔なのはに見せてもらつたアニメだ。
成る程、要するに、私は毎回泥棒に逃げられる間抜けな刑事なんだという事ですか……。

『ふふふふふふ……バルディッシュ？』

『サ、サー！？』

『バルディッシュなら知つてると思うけど、私って意外と負けず嫌いなんだ。そんな私が、速度で並ばれ、振り切られて、まんまと出し抜かれて、あげくはこんな風にコケにされて、何も思わないと思

う？
』

『い、いえ。』

その底冷えする声に、バルディッシュはいつも以上に機械的な返答を返す。少しももったかかも知れないが許容範囲だろう。とにかく下手に刺激して八つ当たりされてはたまらない。

「キャロ・シエル……今度会ったら、絶対捕まえてやるんだから！
」

今のフェイトにとって、キャロは守るべき子供では無い。フェイトにとっての彼女は、いつか必ず自分が捕まえないといけない、かつての自分となのはのようなライバルに認定されてしまった。

「今、何か悪寒が……。」

「どうしましたか。マスター？」

「なんでもないよ。多分気のせいだから。にしても、さっきは危なかったですねえ。」

さっきの逃走劇を思い出すと肝が冷えます。さすがは高機動型のSランク魔導師。まさか「鴉天狗」に追いつけるとは思いませんでした。

ユニゾンの際に、半ば反射的にサブを「博麗」にしておいたのが幸いでした。

「空を飛ぶ程度の能力」っていうのは、言い換えると「あらゆる重圧を無効化する能力」です。

完全に習得すると、あらゆる攻撃に対して宙に浮くことで無敵状態になることも可能なんですが、今はそこまでは出来ません。

でも体にかかるGを消す位はできるので、「風を操る程度の能力」と併用して一瞬で停止、反転してシールドを展開し、ランサーの雨に突っ込み、後は爆風に紛れてフェイトさんの脇をすり抜け、反対方向に逃げ切りました。

途中、まだ報酬のデバイスを貰っていないのを思い出したので、押収品の中から1つガメて、お約束とばかりに書き置きを残して飛び去りました。その時局員を何人が轢いてしまったかもしれません。

思い出してみると、最後のあたりは余裕ブツこいてますね……。

「フェイトさんが来たのは誤算だったなあ。ほとぼりが冷めるまで、またしばらく休業しよっか。」

「そうですね。たまにはフリードと一緒に遊ぶのもいいでしょう。」

「あ、すっかり忘れてた。」

「マスター……。」

ひとまずは執務官のことを忘れて楽しいことを考えます。え？フラグ？ ああ？ 聞こえんなあー？

第16話 キヤロは大変なものを盗んでいきました（後書き）

フェイトは執務官からとつつあんにクラスチェンジした！

この書き置きを手がかりと考えたフェイトさんは、第97管理外世界を中心に捜査したとか。

何気に捜査攪乱成功してます。

次話以降、このスペースをQ&Aコーナーにしたいと思っています。感想で寄せられた質問について、可能な限り答えていくつもりです。

第17話 真っ白に燃え尽きて（前書き）

ユニークが2万突破しました。

読者のみなさんありがとうございます！

第17話 真っ白に燃え尽きて

「キャロ・シエル。今日こそ捕まえてあげます！」

「何というか、すっかり某刑事が板についてきましたねフェイトのとつつあん。でも、所詮私はただの雇われの護衛なんだし、放っておいて頭を抑えた方がいいですよ。」

「そつちには他の局員が向かっています。後はあなただけです。」

「仕方ないですねえ……なら、手加減してあげるから本気でかかってきて下さい。」

「っ！また馬鹿にして！！」

いえいえ、馬鹿になんて出来ません。戦ったら間違いなく負ける上に罪状追加されちゃいますからね。頭に血が上っているうちにさっさとトンスラしましょう。

『藍、モード「博麗」サブは「境」で』『神技「八方鬼縛陣」！』

「結界！？で」

結界で外と遮断されたせいか、フェイトさんの声が不自然なところまで途切れました。きつと今頃、結界破壊用の魔法を発動させているでしょう。

砲撃喰らうのは嫌なので、誰も見ていないうちにスキマを開いて逃げます。

最近はいつ開くのにも3秒、知っている所限定ですけどスキマ移動

も出来るようになりました。順調にタイムが縮まってきた何よりです。

そして私は、スキマが閉じる前にいつもの書き置きを残して立ち去りました。

対象、ロストしました。また逃げられましたね、サー。

「落ち込むから止めて、バルディシュ……。」

あの事件以来、キャロに逃げられる度にお馴染みとなってしまうたやりとりだ。

バルディツシュが記録していたあの日の映像を見た私は、驚きで一杯になった。

あの時は分からなかったけど、あの子は着弾する直前に反転、私の脇をすり抜けて反対方向に飛んでいった。

私にはあんな芸当は出来ない。

あれから何度か試してみたけど、あのレベルの速度になると、どうしても体にかかるGのせいで大回りになってしまった。無理すれば、きっと内臓が破裂してしまうだろう。

あの後も何度か会うことがあったけど、その度にあのデタラメな機動で振り切られて逃がしてしまった。

最近は何れを張られて、それを破壊する頃にはなぜか消えてしまっているという、不可思議極まりないことになっている。

結界を張っている以上向こうも動けず、転移魔法を使った形跡も無いのに、どうなっているのか訳が分からない。そして今日もままと逃げられてしまった。

毎度のお約束となっている書き置きを見つけたので、またからかわれるんだろな、と思いながら手に取って読む。分かっているのだから読まないでおきたいのだけど、貴重な手がかりかもしれないのでスルーするわけにもいかない。

今回の文面は

私にばかり構ってないで、“いい人”でも探したらどうですか？
小さな子供ばかり構っているせいで、「行き遅れ」とか「未婚の母」とか言われるようになってもしっかりませんか？

186

「はっ！」

サ、サー！？

心にクリティカルダメージを受けて、危うくバルディッシュを落としそうになる。キャロの置き手紙を見た時はいつもこんな感じだ。

「そりゃあ、付き合ってる人なんていないけど、でも執務官の仕事をするとソレどころじゃないし……。それに、なのはとはやでもないから、私だけじゃないもん……。」

よく分かりませんが、元気を出してください。サー。

すっかりいじけてしまった主人に対して、バルディッシュは懸命にフォローを試みる。

バルディッシュも二次被害的な意味で、キャロの犠牲者なのかもしれない。

「キャロ・シエル、今度こそ、今度こそ捕まえてやるんだから！」

こんにちは、キャロ・シエルです。

あの倉庫街での一件以来、何故か2、3回に1回くらいの確率でフェイトのとつつぁんとエンカウントするようになりました。

戦ったところでメリットが無いので、出てきたらいつもサッサと逃げています。最近はスキマ移動も出来るようになったので、より確実に逃走できるようになりました。

「とはいっても、そろそろ潮時かなあ？」

「これ以上裏社会で動くのも限界ですし、何かしらの方法で罪状をリセットしないといけないですね」

藍の言う事はもっともです。でも、ス力さんと最高評議会がねえ……。

「とりあえずは現状を整理してみては？何かいい案が浮かぶかもしれませんよ？」

そうですね。どこかに保護されるにしろこのまま裏で生活するにしろ、何かしらの抜け道を探さないといけないです。

今の私の状況は

？お金はそこそこある。全て食料に回すと約半年分くらいは保つだろう

？フエイトのつつあんの包囲網がそろそろヤバイ

？これ以上裏で有名になるのも問題

？賭け試合は違法だけど、私は戦ってファイトマネーをもらっただけなので、賭博に直接は関わっておらず、罪はそう重くない・・・筈

？他の仕事は護衛ばかり受けてきた。いくらなんでもマフィアを護衛したら有罪、なんて事にはならないだろう

？明確に罪に問われそうなのは倉庫街の一件で局員を怪我させた事による障害と公務執行妨害。デバイスは元々自分の取り分だったと主張すればいいだろう

？竜召喚は使っておらずル・ルシエの名前も出していないので、召喚師だとバレる心配は薄い

？むしろ夢幻珠がヤバイ。保護の際に没収されてしまったら、ロストロギア認定＋幻想郷との戦争フラグに
？バカ

こんな所ですか。え？　？　……キンスンナ。

「なるべくブラックな仕事を避けていたのは良かったですね。倉庫街の一件がネックですけど、情状酌量の余地は十分ありますよ。」

「やっぱり保護ルートかなあ？　でもそうなると夢幻珠が……。」

「そこなんですよね。」

「まず没収されるだろうし、どうしょ？」

「やはり手放してしまった方が良いのでは。」

「あのね藍、冗談でもそんな事言っちゃ……。」

ん？ 待てよ？

「手放す、ですか……使えるかも。」

「ま、マスター！？」

「ねえ藍、こついつのはどうだろう？」

幼女相談中……

「今問題なのはコレだから、こつすれば……。」

「成る程。ですが後で困りませんか？」

「そこは……すればどうでしょう？」

「ああ、そういう事ですか。」

「なので、そっちは任せますよ。」

「はい、分かりました。」

ふう、相談終了です。

冷静に考えてみると、何とかなりそうです。じゃあ、早速行動に移しますか。

「藍、モード「境」お願い。」

「境界を操る程度の能力」でスキマを開き、今まで行ったことのある場所に移動します。

移動先はアルザス山中の洞窟。異変で山狩りに遭った際に一晩を過ごした思い出の場所です。

「よししょと。フリードも出ておいで。」

「キュクルー！！！！！！！！！！」

久しぶりに外に出られるのが嬉しいのか、フリード大はしゃぎです。

最近は真の姿の時の体も大きくなり、たまにスキマを覗くと元気に飛んでいるのが目につきます。それでも外はまた別物なのか、興奮しつ放しです。

「このままだと話が進みませんね。結界「夢と現の呪」！」

ピチューン!!

「じゃあこれから暫く会えなくなるけど、その間フリードをよろしくね。」

「分かりました。マスターもどうかご無事で。」

「あとコレも渡しておくね。野生動物狩るのもいいけど、目立つ様ならアウトフレーム使ってコレで普通に買い物してね。私の分を考えなくていいから1、2年は保つはずだよ。」

藍に持ち金の殆どを渡し、夢幻珠をフリードの首に掛けます。

落ちないか心配だったけど、自然にぴったりのサイズになってくれたので良かったです。

続いて藍がスキマを開いてくれて、帰り道への扉が出来ました。

オリジナルの藍が主人の能力の一部を行使できる様に、こっちの藍も「境」形態の力を借りてスキマを開くことができます。とはいってもユニゾン時にはそちらの制御で手一杯なので、こんな時にしか使いどころがありませんが。

「じゃあ、行ってきます。」

「マスター。私は……いつまでも待ってますからね!」

「嬉しい事言ってくれますねえ。」

藍の言葉を受けながら、私はスキマを抜けました。

そしてひとり拠点へと戻ってきた私は、早速次の行動に移ります。

「えーっと確かこの辺に……あつた！」

もう大分前にもらったギンガさんのアドレスを引っ張り出してきます。

通信デバイスを持っていないので使う機会はないと思っていたんですが、世の中どこで役に立つかわからないものです。

保護を受けるといっても、私はフェイトさんの連絡先なんて知らないですからね。管理局に関係ありそうな知り合いなんてギンガさん以外いないのです。

さっきも言った通り通信デバイスを持っていないので、街中に行つて、公衆電話？みたいな機器に、僅かに残していた小銭を入れて連絡します。いつの時代になっても、どんな世界でも、こういうものは無くないものです。

「あ、ギンガさんですか？私です。キャラです。実はですね……。」

おまけ 数日後

「はやて、久しぶり。」

「久しぶりやねフェイトちゃん。最近そっちの調子はどつや？」

「執務官として勉強する事は多いけど、何とかやっていけるよ。」

（いやいや、何がどうなってるの！？ついこの間まで「保護はお断り」とか言ってたのに！それがいつの間にかゲンヤさんの所でお世話になってるって！？もう訳が分からないよ！！）

「は、はははははhahahahahaha……、化かされた……。」

「ちょっ！？フェイトちゃんが真っ白に燃え尽きとる！？お願いやから戻ってきてー！！」

第17話 真っ白に燃え尽きて（後書き）

燃え尽きたのはフェイトのつつあんでした。
フェイトいじりが楽し過ぎて困りますw

以下Q&Aコーナーです。本編の補足、製作裏話、あと感想で寄せられた質問に答えていきます。

Q・なぜにナカジマ家ルート？

A・当初は一匹狼ルートの予定でした。

でも感想で「ゲンヤさんの所で保護してもらっては？」というのを見た瞬間、ギンガとキャラの友情とか、キャラに懷かれてツンデレるゲンヤさんとか、キャラを取られて絶望するフェイトさんを幻視してしまい「これだ！！」と思いました。

感想が作品のクオリティを上げてくれた貴重な出来事です。

Q・鴉天狗の文の速さはフェイトよりも早い気がするのですが、これはキャラが使いこなせていないからですか？

A・それもありますし、「空を飛ぶ程度の能力」がサブなのも影響しています。

これは独自考察ですが、文が高速移動できるのは、能力に加えてGをもろともしない強靱な妖怪の肉体あつてのものだと考えられます。なのでキャラが同じことをする場合、「空を飛ぶ程度の能力」との併用が必須なんですけど、「サブにするとメイン時の50%程度になる」という設定（？話参照）により、G軽減は今より少し上くらいが限界です。

それでもマッハの速度で急停止、急加速が可能なのは十分チートな

んですけどね。

Q・ナカジマ家ルートに入ったのならエリオはどうなる？

どっちみちキャラと出会うのは六課発足以降なので、扱いはそう変わらないはずです。

まあそれも、キャラが素直に六課入りすれば、の話ですが。この辺未定です。

では今回はこの辺で

第18話 空港火災（前書き）

最近感想くれる人が増えてきてくれて有頂天の作者です
今回の内容は比較的あっさりめです

第18話 空港火災

「キャラ、準備はできた？」

「あ、はい。今行きますー。」

お久しぶりです。キャラ・シエル、先日6歳になりました。

あの後半年振りくらいにギンガさんと再会したのですが

「キャラ、もう、本当に心配したんだから!!」

と、会うなり涙混じりの声で抱きしめられてしまいました、こっちも混乱してしまいました。

後ろに控えていたゲンヤさんが場を仕切ってくれなかったら、どうなっていたことが分かりません。

落ちて着いたギンガさんから、話を聞いてみると、半年前の闘技場の一斉捜査は、ギンガさんがたまたま闘技場に入っていく私を発見したのがきっかけだったらしいです。

「あの事件以来キャラと会えなくなっちゃって、ずっと私のせいだっと思って考えちゃって……。」

「えーっと、ギンガさんは私のために動いてくれただけでしょ？それに私はこうして無事だった訳なんですし、気にしないでください。」

今思えば、たぶん闘技場の件を回避できたとしても、どこかで必ず破綻してた気がしますからね。過ぎたことをいちいち気にしてられないです。

「嬢ちゃん、そろそろいいか？ほらギンガ、ここからは大人の話だ。お前はもう帰ってろ。」

「……うん。父さん、キャロをお願いね。」

ギンガさんも大分落ち着いてきたみたいなので、私はゲンヤさんと一緒に、本局へ出頭しました。

……ていうか、私も子供なんですけど。

本局に到着してから、私は持ち物全てを預けて取調べを受ける事になりました。

といっても、持っていたのは僅かばかりのお金と、倉庫街の件で手にいれたデバイスだけです。

今まで散々魔法を使っていたので、デバイス持っていないと逆に疑われますからね。このデバイスには夢幻珠のスケープゴートになつてもらいました。

取調べの担当はなぜかゲンヤさんで、たまにフェイトさんもやつてきました。

「久しぶりだね、キャロ。」

「お久しぶりですフェイトのとつつあん。あれから“いい人”は見つかりました？」

「お願いだからそれ止めて。あと、今日は一応仕事で来てるから、

聞いたことには真面目に答えてね。」

「一応なんですね！？本命はやっぱり幼女の体目当てなんですね！この変態が！」

「言葉尻を取らないで……って、どこでそんな事覚えたの！？」

「尻なんて取りませんよ。とつつあんじゃあるまいし。」

「はあ、もういいです……。」

再開した時は大体こんな感じでした。以来、フェイトさんは取調べ期間のストレス解消手段として、大いに有効活用させてもらいました。

それ以外の時はゲンヤさんが担当してくれて、この時は真面目に受け答えしました。

ある程度自由に動けるフェイトさんはともかく、ゲンヤさんは部隊長としての仕事とかもあるだろうに大丈夫なんでしょうか？

聞いてみたところ、“相手は子供で、警戒心を持たれない人の方が取調べに向いている”っていう理屈で、自ら立候補したらしいです。

本局としても、私は犯罪者としては重要度の低い部類に入るので、取調べを代行してくれるのなら願ったり叶ったり、というわけです。

「私は助かりましたけど、本当、管理局って身内に甘い体質ですよねえ。」

「それは事実だが……5歳の子供が吐く台詞じゃないぞ。」

それで取調べですけど、結果は殆ど予想通りでした。

「ちよつと借りた」件については、バレてないのでそのままスル
！。

闘技場の件は、闘士としてファイトマネーを貰っていただけで、
賭けは一度もやっていないと説明。

他に受けた仕事は護衛任務だけで、相手を殺してはならず、正当
防衛に当たると主張。

倉庫街の一件で局員を傷つけた事は正当化できないけど、怪我は
いずれも軽症で、大した罪にはならなかった事。

それに加えて、この年ではまともな職にありつくことが出来ず、
生きるために仕方なくやっていた所を主張して、同情を引きました。

「最近になって生活が苦しくなって、もう一人で生きていくのも限
界だと思って……。だから出頭したんです。」

出頭時に僅かな金しか持っていなかったことも、この証言を後押
ししてくれました。実際は監にお金を預けてあるだけなんですけど
ね。

唯一冷や汗をかいたのが、とつつあんが来た時に

「今本局で預かってるデバイスは、キャラがいつも使っていたデバ
イスなんだよね？じゃあ、私と会った時に持っていたデバイスは
どうしたの？」

と聞かれた時です。

「試作品なので故障が多くて使い物にならなかったんです。だから、質に出して換金してしまいました。なので手元には無いんです。フエイトのつつあん。」

「そうなんだ。だから、つつあんは止めてって……。」

「アーキコエナイキコエナイー。」

咄嗟に嘘を吐きつつ誤魔化してその場をしのぎました。さすがフエイトのつつあん鋭いです。下手するとここで夢幻珠のことを喋らないといけなくなる所でした。

そんな感じで、取調べは進んでいきました。

結果、生きるために仕方なかったこと、まだ5歳の子供だったことが情状酌量され、予想通り保護観察処分に落ち着きました。

当初、裁判とかで半年か1年はかかるだろうと覚悟していたんですけど、裁判所も忙しいみたいで、略式で簡単に処理され、取調べ含めて2ヶ月しかかかりませんでした。

……それでいいのか管理局。

その後は保護観察官との面会だったのですが

「俺が担当することになった。まあ、お互い知らない間柄でもないんだし、気楽にやっていこうや。」

フエイトさんかと思いきやゲンヤさんでした。しかも

「おめえ住む所ねえんだろ？ だったらウチに来い。一人分位はどうかなるさ。（それに、ギンガも喜ぶからな）」

と、マジで至れり尽くせりです。

保護観察で釈放されたといっても、このままだとまた以前の二の舞になるだけなので、どこかに引き取られる必要があったんですが、そこでもゲンヤさんが立候補してくれました。本局側としても、保護観察官と対象者が同じ所で生活するのは監視の面で好ましい事なので、簡単に承認されたいらしいです。

保護から取り調べ、観察官に住む所まで……もうゲンヤさんには一生頭が上がらないです。

「これからは、おとーさん、って呼んだ方がいいですか？」

「馬鹿な事言ってんじゃねえ。ほら、さっさと行くぞ。」

ぶつきらばうな返事をしながらも、ゲンヤさんは手をこつちに差し出してくれます。

私はその手を握り返し、藍と離れて以来の温かい気持ちを感じながら、ゲンヤさんの家へと歩き出しました。

それから、私のナカジマ家での生活が始まりました。

GINGAさんとゲンヤさんに加えて、スバルさん。

初対面の際はGINGAさんの影に隠れたりして、「へ？何このかわい生き物」とか思っちゃいました。

昔のスバルさんは弱気で泣き虫だったっていうのは知ってましたけど、ここまでとは……

「ほら、スバル、今日から一緒に暮らすことになったキャラだ。ちゃんと挨拶しろ。」

「え、えっと……。」

「初めまして、キャロ・シエルといいます。これからよろしく願いますね、スバルお姉ちゃん。」

「お姉、ちゃん？」

「お前の方が年上だからな。しっかり面倒見てやるんだぞ。」

「あ、うん。初めまして、スバル・ナカジマです。これからよろしくね。」

「ふふふつ。」

お姉ちゃん、という言葉に何か感じたらしいスバルさんと、それを微笑ましそうな顔で見ているギンガさん。そんな感じで、私たちの対面は終わりました。

「今思うと、本当にラッキーだったよねえ。」

「キャロ、何か言った？」

「いいえ。何でもないですよ。」

今日はギンガさんとスバルさんと一緒に、ゲンヤさんの働いている陸士108部隊に見学に行くことになっています。

本来私はメンバーに組み込まれてはいなかったんですけど、保護観察中の人間が一人で留守番っていうのは不味いみたいで、監視も兼ねて一緒に行く事になりました。

陸士部隊へ行くのにはゲートポートを使うがあるので、3人でミッド臨海空港へと移動。そしてあとは迎えを待つだけ、という所だったんですけど、その時それは起きました。

ドオオオオオオオオン！！

「何だ、今の音は！？」

「うわあああああつ、あつちを見ろ！！燃えてるぞ！！」

「みんな、逃げろー！！」

爆音とともに燃え上がる炎、それを見てパニックになった人がひしめき合い、空港は一瞬にしてその機能を失いました。

「ギンガさん！スバルさん！」

「お姉ちゃん！キャロ！」

「スバル！キャロ！」

人の波に押され、3人共が別々の場所へと流されていくのを、私はただ見ているだけしかできませんでした。ようやく人波が引いて自由に動けるようになった時には、自分がどこにいるのかも把握出

来ず、さらに辺りにも火の手が回ってきていました。色々ヤバいです。

「空港火災事件って今日だったんだ。」

最近はナカジマ家でまったり生活していたので、そんな事すっかり忘れていました。このままここに居ても状況は変わらないので、とにかく火の気の少ない所に移動します。

「とりあえず勘で動いてるけど、これってヤバいかなあ？」

気が付くと辺りには人影が無くなっていました。ルートを間違えたかもしれないと思いましたけど、後ろには火の手。キャロ・シエルに後退の二文字はありません。

「何か、どんどん奥に向かってる気がする……。」

それでも前進しか選択肢の無い私は、そのまま進んでいきます。内心の不安を押し殺しながら歩いていくと、開けた部屋と、一人の人影を見つけました。

良かった。これで避難経路が分かる、脱出出来る。

絶望が希望に変わったのを感じながら、私は通路の向こうにいる人影に声をかけました。

「すみませーん。私、ここで迷ってしまったんで……。」

そこまで言いかけて止まってしまいました。

なぜならそこにいたのは、ケースを小脇に抱えて、ぴっちぴちのボディースーツの上にロングコートを羽織り、顔に眼帯を付けた、隻眼銀髪の少女だったのですから。

「む、子供か？どうしたのか……。」

な、何でチンクさんがいるんですかあああああー！？

第18話 空港火災（後書き）

保護されて安心かと思いきや即死亡フラグ。それがキャラクオリティーです。

以下Q&Aです

Q・今回は一気に空港火災まで行ってしまうのですか？

それともスバルとのギンガ争奪戦（スバルの一方的な）でも繰り広げるのでしょうか？

A・行っちゃいました。

スバルについては、新しい家族が出来て必死にお姉さんぶるキャラにさせてもらいました。

Q・無事に足を洗えたようですが、珍し過ぎるユニゾンデバイス（多くの形態変化機能を有する）を使い始めたら、興味を持たれて勝手に調べられ、ロストログア認定で没収とならないといいのですが

A・そうならないよう色々手を尽くしますが、うっかりミスでバレルかもしれないです

Q・生まれたときから一緒にいるのだからもう少しフリードにかまおうよ

A・あれはキャラなりの愛情表現です。好きな子ほどいじめるというやつです。

フリードなら何しても大丈夫、ていう甘えもあります。

フリードが餓死していない事から、何だかんだ言ってちゃんと世話

してるんでしょね

Q・そろそろ、ティード殉職とヴァイスの狙撃ミスの時期ですが関わるのでしょうか？

A・保護観察中なので正直厳しいです
時期や発生場所など、圧倒的に情報不足なのです

Q・出来たらで良いのでユニゾンデバイスの方で幽香さんを出して欲しいと言う希望は大丈夫ですか？

A・元々出すつもりでしたが、あの形態は難易度が高いので当分先です

それでは、また次話で

第1?話 バカと機人とすれ違い（前書き）

書きたい事詰め込みすぎて全部書ききれませんでした。
そのせいでキャラ視点以外の描写が薄いですが、原作通りと思って
ください。

第1?話 バカと機人とすれ違い

「む、子供か?どうしたものか……。」

それはこっちの台詞ですチンクさん。

まさかこんな所でエンカウントするなんて、夢にも思っていないでした。

夢幻珠はおるか、普通のデバイスすら持っていない今の私は、少しグレイズが上手いだけの幼女でしかありません。

加えて相手はチンクさん。基本的にグレイズで攻撃を回避する私にとって、いつ爆発するか分からないナイフを使ってくるチンクさんは天敵ともいえる存在です。

どうやってここから逃げようかと考えながらじりじりと後退していると、チンクさんは困ったような顔をして

「ああすまん。怖がらせてしまったか?ほら、そっちは危ないからこっちに来い。」

へ?ひょつとして、始末されないで済むんですか?

そういえば、チンクさんってナンバーズの中では良識派でした。もしかすると、無益な殺生は避けてくれるかもしれません。

いやいや、油断させておいて、っていうのも考えられます。どうしましょう……

うーん……、決めた!

「わたし、ここがどこなのかもわからなくて、こわくて……グスッ。」

「泣くな泣くな。ほら、ちゃんと外まで送ってやるから。」

どっちみち戦っても勝てないんですから、泣きついて利用しましょう。

「ほんとうにたすかりました。ありがとう、おねえちゃん。」

「……チンクだ。礼なんていいから、さっさと行くぞ。（おねえちゃん、か……）」

「わたしはキャラです。わかりましたチンクおねえちゃん。」

「……。 （ああもう可愛いなあ！！）」

幼女分を演出するために舌つ足らず気味に喋っていたら、チンクさんが黙ってしまいました。どうしたんでしょうか？

どうやら油断させて後から、っていうのは無かったみたいで、普通に案内してくれます。チンクさんマジいい人です。疑ってゴメンナサイ。

今私は、チンクさんに手を引かれながら廊下を走っています。チンクさんは左手に何かのケース、右手は私の手を握って、私のペー

スに合わせて走ってくれています。

……というか、左手に持っているのって明らかにレリックですよ？ああ成る程、ここに居た目的は火事場泥棒ですか。

追求したいのはやまやまですが、身の危険になりそうなのでスル―します。こんな状況でフラグ増やしたら本当に死んでしまいます。

「この区画を抜けたらもうすぐだ。まだ頑張れるか？」

「はい、だいじょうぶです。」

返事を返しながら、チンクさんと一緒に走っていきます。さっきまでは大丈夫だったこの辺りも、火の手が出てきて如々にヤバくなつてきています。そんな時、それは起こりました。

ドオオオオオオオッ！！

「へ？」

「何！？」

突如轟音が響いたかと思うと、天井の一部が崩れました。崩れた瓦礫はそのまま落下し、一部が私達の所にも

「くっ！キャロ！」

「へ？わわわわわ！？」

落ちてくる瞬間、チンクさんに強く引つ張られた私は、そのまま遠くに投げ飛ばされました。

その一瞬後、さっきまで私達のいた所に瓦礫の雨が降り注ぎました。

「痛たたたた……、チンクさんは大丈夫ですかー？」

辺りを見回したのですが、チンクさんはどこにも「ここだ、キャロ」っ！？

声がした方を見ると、そこには倒れて炎に包まれるチンクさんの姿が

「チンクさん！！」

「キャロ……無事だったか？」

「私の心配してる場合じゃないでしょう！チンクさんこそ大丈夫な

んですか!？」

「私のことなら大丈夫だから気にするな。ほら、もう出口はすぐだ。またさつきみたいな事になる前にさっさと行け」

絶対嘘でしょ!？大丈夫だと言いたいんでしょうけど、足がない方向に折れてますよ!生き埋めは免れたみたいですけど、そのままなら脱出なんて無理ですよ!

「ボサボサしているとお前も火に巻き込まれる。私一人なら何とか出来るから、キャロは先に行っていてく……れ……。」

チンクさんの言葉に呼応するように、辺りの火の手が強くなります。

そうです。私にとって、ここは逃げるのが最善です。

チンクさんとは今日が初対面。いずれは敵対するだろう相手です。予想外のハプニングでレリック一個とナンバーズ一人をリタイア出来るんですから、むしろ儲けものです。

なのに

「そんな事……出来ませんよ!!」

思い出すのは、さっきまで繋いでいた手の温もり。

戦闘機人といっても普通の人間と変わらないそれは、ギンガさん達とはぐれて不安になっていた心を慰めてくれました。あの温もりを知ってしまった以上、見捨てることなんて出来ません。

それに、チンクさんがこうなったのは私のせいです。

一人ならもっと早く脱出できただろうし、私を庇う必要も無かったです。

これから自分が行う事へのリスクを覚悟しつつ、私はチンクさんに話しかけます。

「チンクさん、これからあなたを助けます。だから、これから起ることは決して口外しないと誓ってください。」

チンクさんから返事はありません。どうやら気絶してるみたいですね。なら、好都合!

「竜魂召喚……、来て、フリード!!」

竜召喚を発動。召喚陣から、アルザスに待機させておいたフリードがその姿を現しました。

私は即座にフリードの首に掛けておいた夢幻珠を取って、自身の腕に装着します。

『ま、マスター!?!』

『藍、早速で悪いけど、モード「氷」、サブ「博麗」でお願い。』

『は、はい！』

ユニゾンを完了した私は、氷翼を展開しながらこおりパワーをチャージします。

「チンクさんに当たらないようにして……凍符「パーフェクトフリーズ」！！」

スペル宣言と同時に、大量の氷弾が辺りにばら撒かれ、氷弾は火の手に着弾し、辺りを消火していきました。約30秒の間、氷弾をばら撒いて消火した後、私は急いでチンクさんに駆け寄りました。

「チンクさん、大丈夫ですか！？」

近くで見た様子はやっぱり酷い有様で、足の骨が数箇所折れてしまっています。

命に別状はないみたいですけど……

「藍、モード「境」。このままスカさんの所に返すわけにもいかなしいし、管理局に引き渡しても厄介な事になりそうだから、しょうがないよね。」

スキマを開いて、フリードと一緒にチンクさんとレリックを放り込みます。チンクさんの目が覚めたら、今後の事について話し合いましょう。

「とりあえずはこんな所だね。藍、そろそろ脱出するよ。」

「何がどうなっているのか分かりませんが……了解しました。」

その頃

「くっ！ あの子は、キャロはどこにいるの！？」

落ち着いてください、サー。

落ち着いてなんかいられない。
さっき助けたギンガちゃんの話思い出す。

「妹さん、名前は？どっちに行つたかとか、分かる？」

「あの、エントランスホールの方ではぐれてしまつて。名前は、スバル・ナカジマ、11歳です。」

こちら通信本部。スバル・ナカジマ、11歳の女の子、すでに救

出されています。救出者は高町教導官です。怪我もありません。

「スバル……良かった。」

「了解、こっちは今、お姉さんを保護。名前は？」

「ギンガ・ナカジマです。あの、キャラはどうなったか分かりませんか？」

へ？

キャラ、ですか……救助者リストには載っていません。

「そんな、キャラ……。」

聞き間違いじゃない！キャラがここに居る！？

「ねえ、そのキャラって子の特徴は？」

「桃色の髪をした、6歳の女の子です。大丈夫かなあ……。」

間違いない！あのキャラだ！

言われてみればナカジマという姓にも思い当たることがある。キャラの保護観察官をしているゲンヤさんの姓だ。

こうして言われるまでギンガちゃんや娘さんである事にすら気付かなかった私は、よっぽどキャラ以外目に入っていなかったんだなあと自嘲しながら、ギンガちゃんを送り届けてキャラの搜索へと飛び立った。

「ここにもいない……。」

後は一番奥の区画のみです。

「あのキャラなら滅多な事でも無い限り大丈夫だと思うけど……行くよ、バルディッシュ！」

イエス・サー。

バルディッシュの頼もしい返事を聞きながら、私は最深部へと飛翔していく。

辺りはすでに火が燃え盛っており、瓦礫が崩れ、まさに地獄のような状態になっている。そのせいか通信機の感度もあまり良くなく、本部との連絡も上手く取れない。

でも、だからといって立ち止まる訳には行かない。きっとあの子は私を待っている。

だから絶対助ける。そしてその後、今までうやむやになっていた決着を付けるんだ！！

「キャラ、大丈夫かなあ？」

「大丈夫やってギンガちゃん。今フェイトちゃんが探してる。きっと見つけてくれるって。」

「そうなのです。だから安心して待ってるといいですよ。」

そう言うってはやてさんとリンさんが励ましてくれます。そうですね、きっと大丈夫です。

「それにキャロちゃんって、殺しても死なへんようなエエ性格してるやろ。案外一人で脱出するかもしれへんな。」

「それ、少し酷くないですか？一人で脱出っていうのは当たってますけど。」

「日頃の行いや。」

「あの、はやてさん？」

「ん、何や、ギンガちゃん？」

「私、今何も言ってなかったんですけど……。」

「へ？じゃあ誰が？」

「いくら私の背が低いからって、無視は酷くないですか？」

へ？

驚いて声が出た方を向いてみると、そこには数時間前に分かれた私の家族の姿が

「きゃ、キャロ、無事だったの！？」

「うわ、ホンマに脱出しとった！」

「キャロちゃん、無事だったです！」

はやてさん、さつきから色々酷いです。でも、本当に良かった！

「これでも元犯罪者ですからね。逃げたりするのは得意なんです。でも、いいんですか？」

「ん、何がや？」

安心していた所に、そんな事を言われる。ん？キャロも無事だし、他に何かあったっけ？

「私はここにいるんだから、フェイトさん呼び戻した方がいいんじゃないですか？」

あ

「ああああああ、そやったー！リン、至急フェイトちゃんに連絡や！」

「駄目です！奥の方に行ったせいか、通信が途絶えてしまってます！」

「なら念話や念話！とにかく早う教えてあげんと、フエイトちゃんが物理的に燃え尽きてまう！」

キャロの指摘を受けて、はやてさんとリインさんは大慌てです。そんな二人には悪いけど、キャロが無事であることが私には嬉しすぎて

「おかえり、キャロ。」

「ただいまです。ギンガおねえちゃん。」

慌ててる二人をバックに思いっきり抱き合って、無事を確かめ合いました。

第1?話 バカと機人とすれ違い（後書き）

個人的には色々反省点の多い回

早く展開進めたいがために、色々雑にしてみました

これからは、焦らずにやっつけていこうと思います

以下Q&Aです

Q・藍とは連絡を取る方法はあるのですか？

A・17話でフリードの首に掛けておいたので、召喚を利用していつでも手元に戻せるようになってました。

今までは保護観察中なので自重してましたが、空港火災のドサクサを利用して呼び戻しました。

Q・「氷」形態なのに割と普通じゃね？

A・いくら？でも、命がかかった状態では遊びません

Q・スバルはどこ？

A・一足先に検査のために病院送りです。ギンガもキャロの無事を確認した後、二人で病院に行きました

Q・フエイトそん……

A・物理的には燃え尽きなかったみたいです。
でもリンからの念話を聞いた後、数秒の間、精神的に燃え尽きたらしいです。

第20話 家族（前書き）

前回の反響の多さに吹きました。みんなフェイトさん大好きなんですね。

今回は繋ぎの話なので短いです。

第20話 家族

「ん？ここは？」

目を覚ますと、私は不思議な空間にいた。

上下左右が定まっておらず、何色なのかも分からない空間、そしていたる所に目が浮いており、こちらを覗きこんでいる。

その異様さに混乱しながらも、ここに来るまでのことについて順を追って思い出していく。

任務で訪れていたミッド臨海空港、手違いによって暴走させてしまったレリック、トラブルに見舞われながらもレリックを確保し、持ち帰る途中で出会った少女、そして

「そうか。私達は……死んだんだな。」

そう言いながら、目の前にいたキャロに声をかける。戦闘機人にも死後の世界はあるのだな、等と考えていると、キャロは困ったような顔をして

「えーつとですね。チンクさん、私達、まだ死んでませんよ。」

「む、本当か？」

「今からその辺のことについて説明しますから、お話聞いてもらえますか？」

幼女説明中……

「要するに、ここはキャロがレアスキルで作った空間で、私たちは死んでない？」

「はい。それですね、この秘密を知られた以上、チンクさんには選んでもらわないといけません。」

キャロにとっては、この能力が管理局などに発覚することが好ましくないらしい。

それはそうだろう。こんな空間を作るレアスキルなんて聞いたことが無い。ドクターなら何か知っているかも知れないが、それでも全次元世界を通して珍しいのには変わりない。隠しておきたいというキャロの気持ちはもつともだ。

キャロから与えられた選択肢は3つ

- 1・キャロに関する記憶を消去した上で元いた場所に戻る
- 2・管理局に保護してもらい、その後キャロと生活する
- 3・発信機を埋め込んでから管理外世界で生活する

「ちなみに私的オススメは2番です。管理局ならその体も修理してくれますからね。1は記憶消去の際にリスクが伴います。3の場合は修理する設備が無いので、車椅子での生活になっちゃいますね。」

ここまでの話から分かるように、キャロは私が戦闘機人であることを知っていた。

怪我した足から骨格フレームが覗いたのを見て確信したんだそう
だ。

戦闘機人についての情報を知っていたのには驚きだが、今重要な
のはそれではなく、私がどの選択肢を選ぶかだ。

悩んだ末、私が出した結論は

「1で頼む。姉や妹達がいるんでな、帰ってやらないと心配する。」

「やっぱりそうなっちゃいましたか、残念です。一緒に暮らしたか
つたなあ。」

「ならお前が私たちの所に来るか？レアスキル持ちなら歓迎するぞ。」

「その提案も魅力的ですけど、お断りさせていただきます。私にも家
族がいますから。」

「そうか、本当に残念だ。」

「ありがとうございます。では、早速ですけど記憶消去に入ります。
藍、モード「白沢」。」

キャラロがそう言うと、手に付けていた腕輪から30センチほどの

小人が出てきた。

ユニゾンデバイス！？キャロには驚かされてばかりだな。
そんなことを考えながら、私の意識は再び闇に落ちていった。

空港火災の翌日にチンクさんと相談した結果、記憶を封印してからスカさんの所へ送り返すことになりました。

モード「白沢」の「歴史を食べる程度の能力」で私と出会った歴史をなかったことにして、細かい記憶の辻褄合わせは藍にお願いしました。一応食べた歴史はそのまま保管してあるので、JS事件が終わったら戻してみるのもいいかもしれませんね。

処理が終わってからスキマを使って空港近くに移動、人目のつかない所にチンクさんとレリックを置いていきました。

本当はレリックは手元に置いておきたかったですけど、それだとチンクさんが任務失敗した事になって、ウーノさん辺りが疑念を抱きそうですからね。

……チンクさんに情が移ったのは否定しませんけど。

それからスキマを通って元いた病院へ帰って、色々検査を受けました。

へ？何でそんな所にいるのかですって？

事件の直後、私とギンガさんは病院に担ぎこまれて、先に行っていたスバルさん共々、検査入院することになったんです。私は特に怪我も無いのですが、煙を吸い込んだりすると危険だと言われて、念のために検査を受けることになりました。幸い三人とも異常は見つからず、当日に退院できたのは良かったです。

それからしばらくの間、ナカジマ家で保護観察という名のNEETを満喫していたんですが

「旅行、ですか？」

「おう。お前さん、あと数日で保護観察が終わるだろう？その祝いに思ってたな。」

「へー、いいですねえ。それで、行き先は決まってるんですか？」

「ああ、キャラは知らないかも知れないが……第97管理外世界だ。」

へ？

「俺のご先祖さまが住んでいた世界だ。墓参りついでに観光しようと思ってたな。嫌か？」

（後、スバルにせがまれたっていうのもあるんだが、それは言わないでも良いだろう）

「いえいえいえ！嫌なんかじゃないですよ！」

「そうか、なら良かった。出発は保護観察が終わる週の土日だから、用意しておくんだぞ。」

「はい！」

元気に返事をしながら、私は自分にあてがわれた部屋へと引きこもります。鍵を掛けて、カーテンを閉めて、サーチャーの反応が無

いことを確認してから、ポケットに隠していた夢幻珠から藍を呼び出しました。

「藍、聞いた？第97管理外世界だって！」

「随分テンションが高いですね、マスター。」

「当たり前です！ああ、今からしなきゃいけない事リストアップしとかなきゃ！」

「……こんなノリノリのマスターを見たのは初めてです。」

「藍はノリが悪いですねえ。そんな子には、例え旅行先が日本だったとしても、油揚げを買ってあげませんよ。」

「っ！すいませんでしたー！」

反射的に土下座をする藍を見ながら、私は旅行の計画を練っていきます。

ああ、早く保護観察解けないかなあ。

第20話 家族（後書き）

という訳で始まった旅行編ですが、多分キンクリ入ります

以下Q&Aです

Q・キャラが夢幻珠を身につけていない間も夢幻珠は起動し続けたようですけど維持用の魔力はどうやって供給していたのだろうか。

A・夢幻珠のユニゾン形態にはリンカーコアがあります（13話参照）。藍にもこれは当てはまるので、自家発電可能です。

Q・チンクさんはどうするのでしょうか？なんだかチンクさんにもおねえちゃんフラグを立てている気がします

A・結果は今話の通り。フラグは辛うじて残ってます。さてどうなることやら

Q・チンクか、満月ならけーねで歴史改善できないかな。

A・そうか、その手があったか！月樹さんありがとうございます。

Q・誰にも喋らないでほしいとお願いしても、絶対ドクターには話が行きそうだな。まあ、スキマ内で目が醒めればの話だが。

A・スキマ内で起こしたのは逃走のリスクを考えてのことです。あと、外に出しておくとし力さん側に探知される可能性があったからです。逃げ場を塞いで交渉するのは基本です。

では、今回はこの辺で

第21話 小旅行（前書き）

予告通りキンクリ入ります

第21話 小旅行

「という訳で、やって来ました第97管理外世界！」

「ねえギン姉、キャラ誰と話してるんだろ？」

「え、えっと……。」

「あかんでスバルちゃん。ああいうのはスルーしてあげるのがお約束や。」

「何漫才してるんだお前らは……ほら、さっさと行くぞ。」

はあ……せつかく分かりやすく状況説明してあげたのに、周囲の反応が冷たいです。

あれから数日後、無事に保護観察処分が解けた私はかねての予定通り、ナカジマ家＋で家族旅行に行く事になりました。

メンバーはナカジマ家の面々に加えて、研修時代のよしみで連れて来られたはやてさん。生憎スケジュールの都合上、ヴォルケンズは不参加です。本来ならはやてさんも来れないはずだったんですけど、ゲンヤさん自身は今までは第97管理外に来た事が無く、案内役としてどうしても来て欲しかったので、半ば無理矢理スケジュールを合わせたそうです。

はやてさんに割り振られていた仕事はリインが代行してるんでしようね……乙。

そして、はやてさんの案内で連れてこられたのは日本の海鳴市。霊能力者や超能力者、メカに戦闘民族がひしめく魔窟です。

はやてさん案内って時点で予想出来ましたが、これは微妙にピッチです。

とらハ世界では魔力の存在は認知されてないので大丈夫だと思いますけど、問題なのは霊力です。

霊力の存在を自覚し、魔力と同じように鍛えている私の霊力量は、当然普通の人よりも多いです。まだまだ修行中ですけど、霊力の概念自体存在しないミッドでは、ひよっとすると最高クラスかもしれません。

それでもバレないから良いんですけど、今いるのは幻想郷の存在する世界の海鳴市。もし退魔業をしている人なんかとエンカウントしたら、余計なトラブルに巻き込まれる可能性大です。

「それで、はやてさん。これからどこに行くんですか？」

内心の不安を出さないようにしてはやてさんに聞いてみます。出来ればフラグ立たないような所お願いしますと祈りながら。

「すぐ観光、っていうのもええんやけど、みんなそろそろお腹空いとるやろ？ この辺に翠屋つちゅう喫茶店があるから、まずはそこでお昼にしか。ゲンヤさん、ええですか？」

あああああやっぱいいいいいい！ いきなり戦闘民族フラグキター！

「士郎さん、桃子さん、お久しぶりです。」

「あら、久しぶりね、はやてちゃん。」

「久しぶり、はやてちゃん。今日はなのは達と一緒にじゃないのかい？」

「二人とは仕事の都合が合わんかって、私一人なんです。その代わり、管理世界からお客さん連れて来ました。」

「おいおい、俺達は代用品か？そんな生意気な事言うんなら、研修時代の恥ずかしい思い出、この人達に話してやってもいいんだぞ。」

「ちょ、それは卑怯ですって!？」

「あらあら、二人とも仲が良いのね。」

「まだまだ未熟な子狸なんで、仕方なく世話してやってるっただけですけどね。」

「だから、狸言わんといってくださいよー！」

「あー……、後ろの3人が固まっているんだが……。」

「「「あ。」」」

やっとこつちに注目してくれましたね。全く、長かったです。ギンガさんとスバルさんなんかポカーンと口開けてますよ。

にしてもはやてさん、いきなりギャグ時空を展開するとか予想外でした。まさか私を除け者にして発動するとは、さすがは関西娘です。これからは師匠って呼んだ方がいいでしょうか？

「そっぴや、まだ自己紹介してなかったな。俺はゲンヤ・ナカジマ

だ。ほら、お前らも挨拶しろ。」

「初めまして、ギンガ・ナカジマと申します。」

「えっと、スバル・ナカジマです。」

「キャロ・シエルです。」

「初めまして。私は高町士郎、このマスターをしている。こっちは家内の桃子だ。」

「桃子です。よろしくね、ギンガちゃん、スバルちゃん、キャロちゃん。」

やっと会話に参加できました。どうやら恭也さんや美由希さんは居ないみたいです。とりあえず、とらハフラグは立たないみたいなので良かったです。

「今日のご飯食べに寄らせてもらいました。何か適当に摘める物お願いします。」

「分かったよはやてちゃん。」

そう言っ、士郎さんは奥の方へ引っ込んで行きます。私達は桃子さんに案内されて席に着きました。

席に着くと、スバルさんが何やらそわそわしています。どうしたんでしょうか？

「お姉ちゃん、トイレですか？」

「違うよキャラ！ えっと、はやてさん。ここって、ひよっとして高町教導官の？」

「ええ所に気付いたなスバルちゃん。実はここ、なのはちゃんの実家やねん。」

「ほ、本当ですか！？」

「嘘やないって。ほら、良く言うやろ、関西人は嘘つかへんって」

スバルさん大興奮です。まあ、気持ちは分かりますけどね。

空港火災の件でなのはさんに助けられて以来、すっかり信者になってしまったスバルさん。雑誌の記事を集めたり、ファンクラブに登録したりと、立派な追っかけになってしまっています。

それだけじゃなく、たまに私とギンガさんでやってる訓練に参加してくるようになりました。今まで敬遠していたシューティングアーツに真面目に取り組んでいます。災害救助隊に入るのを目指しているらしく、一生懸命に頑張っている姿には少し感動を覚えました。

そんなスバルさんの気持ちに伝えるべく、体術のみの模擬戦の時は全力で相手してフルボッコにしています。初めて戦った時には

「な、何でそんなに強い……の……。」

「スバル、キャラに常識は通用しないんだよ。」

なんて事をギンガさんに言われちゃいました。確かに魔法無しで条件ならギンガさんも倒せるけど、それは言いすぎじゃないですか？

昼食が終わり、平日なので客がまばらなのもあってか、そのまま士郎さん達と雑談タイムに移行しました。ゲンヤさんは父親どうし息があつたのか、士郎さんと談笑、そこにはやてさんも加わってます。

スバルさんとギンガさんは桃子さんから、なのはさんの話を色々聞いてます。特にスバルさんの目がやばいです。こんな話聞ける機会そうそう無いんで、気持ちは分かりますけどね。

さてと私はどうしたものの、と視線を巡らせてみると、店の片隅にあつた「あるもの」が目に入りました。

「あの、あれは？」

「どうしたキャラちゃん？ああ、あれか。お客さんからの要望で、1台だけだが導入したんだ。気になるかい？」

「はい。ちょっと触ってみてもいいですか？」

「ああ。分からない所があつたら聞いてくれ。」

許可を貰ってさっそく件の物　PCの前に座って情報収集を開始します。ミッドにあるコンピュータとは微妙に違うものの、私は転生者。むしろこっちのPCの方が得意です。

（えーっと、調べる単語は、東方、幻想郷、神主、それと博麗神社……）

検索エンジンに単語を放り込んで結果を見ます。幻想郷が実在している事は知っているけど

（東方、幻想郷、神主についての情報は無い、か……）

どうやらゲーム化はしていないようです。出来ればマイナーな掲示板も覗きたいんですけど、そこまで時間は無いです。

（後は博麗神社だけ……ヒット！）

半ば諦めていた所に、博麗神社の情報が舞い込んできました。

調べた所、〇〇県の隅の方に存在する神社らしいです。

それなりに歴史のある神社らしいのですが、今は神主不在、巫女不在で誰も住んでおらず、なのに殆ど荒れていない事と、参拝に行った人が神隠しに遭ったという噂から、ミステリースポットとして有名だそうです。

間違いない、「外」の博麗神社です。

幻想郷側の博麗神社と繋がっているのなら、向こう側で掃除した結果、こっち側も掃除されて荒れていないことに説明がつきますし、神隠しの件はそのまんま幻想入りしたんでしょう。

サイトに載っているアドレスをメモしながら、この情報について考えます。

幻想郷について知りたいなら行ってみるのもアリですけど、今の私は魔法少女。下手に近づくとか幻想側に引き込まれて戻れない可能性だってあります。とりあえずはスルーしておきましょう。

調べ物が終わったので周りを見てみると、そっちでも話が終わったのか、すでに店を出ようとしているはやてさんにゲンヤさん、

遅れてギンガさんとスバルさんがいました。

「ん？ そっちはもういいのか？ そろそろ出るからお前も準備しろ。」

「は、はい！」

急いで鞆を持って店を出ます。ただ、よっぽど慌てていたのか、入店してくる人に気付かず、そのままぶつかってしまいました。

「はうつ！ す、すみません！」

「あらあら。私は気にしてないから、今すぐ家族の所に行つてあげなさいな。待たせると怒られるわよ。」

すぐに頭を下げると幸いにも許してもらえたので、そのままぶつかった相手の顔を確認する暇も無く、ギンガさん達の待っている方へ走り出しました。

こっちで調べたいことも大体終わったので、後は思いっきり遊びましょう！

キング・クリムゾン！！ 旅行の時間を吹き飛ばすッ！！

旅行が終わって、スキマ内にて

「やば……。」

「どう……しました？ マス……ター？」

「フェイトさんのお土産買ったの忘れた……。」

これはマジでやばいです。フェイトさんとは会えばからかうような関係ですけど、さすがにお土産無しなんて鬼畜な所業は出来ません。

「ああもう、どうしよう!？」

「落ち……ついて……ください。」

藍も暢気にお稲荷さん食べながら喋ってるんじゃないですよ！
とにかく何か探さないと……っ！

「藍、これは？」

「それ……ですか？ 先日……スキマ内に……落ちてきたものです。」

決して食べる手を止めようとしない藍の忠誠心に感動しつつ、私は「それ」を手に取ります。

「フェイトさんのお土産はこれにしましょう。一応、第97管理外世界のものだから大丈夫だね。」

「良かった……ですね。マス……ター。」

だから藍よ、いい加減お稲荷さんモツキュモツキュするのやめね。

おまけ

「おい、フェイトちゃん。」

「久しぶり、はやて。旅行どうだった？」

（仕事があつたのだから仕方ないんだけど、本当は私もキャラと旅行に行ってみたかったなあ。）

「楽しかったよ。んで、フェイトちゃんにお土産。翠屋のシュークリームや。」

「わあ！　ありがとう、はやて。」

「ええてええて。結構入ってるから、なのはちゃんやエリオ君にも分けてやってな。」

「うん。」

「それとな、あとキャラからもお土産があるんよ。」

「へ、本当？」

（キャラから私に！？　でもどうしてだろう？　あの書き置きの時みたいな予感がするのは）

「何が入ってるかは私も知らんのやけど……コレや。」

そう言うてはやては大きな包みを取り出す。開けてみると、そこにあったのは茶色いコートと……帽子？

「何なんだろ……？」

「ん？ここにカードがあるなあ。なにに『銭形のコスプレセツト。これであなとも銭型警部』……ってフェイトちゃん！？」

「うん、やっぱりそういうオチなんだよね。いいんだ、分かったことだから……。」

「フェイトちゃん、そんなにいじけんといで。ってコレ手錠に十手に……拳銃！？しかも何か本物っぽい！質量兵器持ち込むとか、あの幼女はナニ考えとるんやあああああああ！」

第21話 小旅行（後書き）

旅行の内容も書きたかったのですが、文書量が多い上にグダグダなので泣く泣くカットしました。以下Q&Aです。

Q・足を骨折していて空港から離れていたところにいればあのマッドドクターが疑問に思いそうな気がします
その気になって調べればチンクの記憶が改竄された事にマッドドクターなら分かると思います

A・ウーノあたりが疑問に思つかもしれませんが、何も手掛かりが出てこないので無問題です

Q・旅行はどうなった？

A・あの後観光、ショッピング、墓参りをして帰りました。
キャロの小遣いは全て油揚げ関係に消えました。

油揚げ関係はスキマに放り込み、今まで隠してた夢幻珠を買ったことにしてカモフラージュしています。

これにより夢幻珠は「管理外世界で買ったアクセサリ」として認知されました。

Q・銭型セット……

A・異世界からの漂流物です。ルパンも幻想入りしたんでしょうか？

第22話 陸士108部隊（前書き）

繋ぎの回です。長さはいつもと同じくらいです

第22話 陸士108部隊

「ボス、こつちにも局員が！」

「焦るんじゃないねえ！戦力はこつちが上だ、持ちこたえろ！」

部下に檄を飛ばしながら指示を出していく。

俺の名はボム。とあるマフィアの幹部だ。

デバイス関係の密輸でここまでノシ上がったんだが、今日に限ってケチがついちまった。

子分の一人がヘマをやらかしたせいで、取引現場に局員が待ち伏せ、現在絶賛戦闘中だ。

とは言っても、こんな時のための準備は欠かしていない。

Dランクとばらつきはあるものの、そこそ可使える部下が10人に、Aランクオーバーの腕利きの護衛が5人、管理局といえど、1部隊程度なら軽くあしらえる戦力だ。

だというのに

「駄目です！突破されます！うわああああ！」

蓋を空けてみればこの有様だ。すでに部下は全滅し、残すは護衛の5人だけ。

やたらと強い近代ベルカ式の使い手はもちろんの事、他の局員も、到底雑魚とは思えない実力だ。

そのタネはおそらくアイツ、後方に待機している桃髪のガキ。局員の強化は、あいつがブーストしているからに違いない。

「あいつだ！あの青髪の局員を集中攻撃しろ！」

部下達に前衛の足止めを指示して、俺は気付かれないよう遮蔽物に隠れながらあのガキへ接近する。

すでにあのガキは射程内。接近戦なら簡単に倒せるだろう。

「死ねよやあああああ！」

これで俺達の勝ち。後は弱体化した奴らをフルボッコにするだけだ。

「……霊撃！！」

「なああああ！？」

ガキが懷から何かを取り出した瞬間、俺は空中に放り出された。吹き飛ばされたみたいだが、ダメージは無い。そんな一時しのぎ、通じるものか！

着地に備えて体勢を立て直していると、不意に落下が止まり

「な？バインドだと！？」

空中に固定されて動くことが出来ない。必死にブレイクを試みていると、目の前のガキが話しかけてきた。

「ねえ、こんな言葉知ってます？（藍、モード「霧雨」）」

「な、なん、なん、だよ!？」

おおそ戦場には似合わない子供の声、でも、そいつが取り出した箱状のデバイスにチャージされていく魔力を見ていると、齒の根が合わず、まともに喋れなくなる。

「弾幕は、パワーです。恋符「マスタースパーク」!！」

「あ、あああああああ!！」

桃色の砲撃魔法に意識を刈り取られながら、俺はこの世の理不尽について愚痴を零した。

（なんでガキがこんなに強いんだよ……ん？桃髪？……ああ！コイツ、「桃髪の子鬼」！なんでセンサーが管理局にいやがるんだよ……）

「うつうつうつ……。」「

「で、キャラ。何か言うことは?」

「私的には、なるべく沢山巻き込んだ方がいいかなって……。」

「確かにそれは一理ある。でも、敵を巻き込むのはともかく、建造

物壊すのはやりすぎだ。」

「父さん、その辺にしてあげたら？」

ゲンヤさんに拳骨を喰らった頭を抑えながら、私は涙目で説教を聞いています。

旅行から暫く経って年が明け、ギンガさんは陸士108部隊へ、スバルさんは訓練校へと行くことになりました。

それを見て、私もいつまでもNEET生活してる場合じゃないと思い、ゲンヤさんの108部隊に民間協力者として参加することになりました。実戦経験積んでおきたいっていう邪な気持ちもあるんですけどね。

ゲンヤさんは反対しましたが、働いて恩を返したいという思いと、アウトロー時代の経歴を持ち出して、必ず役に立つから、と押し切りました。その際「基本的には」フルバックスで支援に徹すること「危なくなったらすぐ逃げることを約束させられちゃいましたけどね。」

「ちょっと加減間違えただけじゃないですかあ……。」

「まだ反省が足りないみたいだな。もう一発いくか？」

「スイマセンでしたー！」

あの拳骨はもう勘弁なのですよ！

「なら良い、報告書は俺がやっておくから、お前は始末書提出だ。」

「はiiiiiiiiiii……。」

「キャラ、頑張つて。」

始末書兼反省文を書きながら、さっきの事を思い出します。

正直言つて、オーバーキルするつもりは全くありませんでした。

実は、民間協力者としてテロリストやらマフィアやらをボコリ初めてから、微妙に力が上がってる感じがします。そのせいで手加減をミスることが出てきました。特に今回の場合、予想より2割から3割増しくらい威力が上乘せされて発射されました。もう誤差の範囲を超えています。

霊力や魔力は変化してないはずなのに、どうしてなんだろう？

「おい、手が止まつてるぞ。やっぱり反省が足りていないみたいだな。」

「だ、大丈夫ですから。」

ちよつと考え事していると即座にゲンヤさんが注意してきます。公私をきつちり分けて、仕事は妥協しないっていうのは良いことだと思います。ただ、その矛先が自分に向かっていいると話とは別です。ゲンヤさんマジ厳しいです。

「大丈夫、キャラ？それでも飲んで頑張つて。」

そう言つて、ギンガさんがお茶を出してくれました。自分にも仕事があるだろうに、本当にギンガさんの優しさは天井知らずです。

108部隊が上手く動いているのは、ゲンヤさんの鞭とギンガさんの飴のおかげなのかもしれませんね。

「おい、また手が止まってるぞ。」

「はっ！大丈夫です！すぐ書きますから！」

だから、拳骨は嫌なですよー！

「ゲンヤ隊長、始末書書き終わりました。」

「おう、今忙しいからその辺に置いておいてくれ。」

ようやく書き終わった始末書を持ってゲンヤさんのデスクに持っていくと、画面と睨めっこしながらウンウン唸ってます。

「どうしたんですか？」

「キャラには関係無……ってこら、押し掛かってくるな！」

ゲンヤさんの背中におんぶしてもらいながら画面を覗き込みます。
これは

「指名手配者のリスト、ですか？」

「ああ。」

「へえー、一杯いますね。あ、コレ兄貴さんにハート様だ。懐かしいなあ。」

「知り合いか？」

「昔仕事で一緒だったり、闘技場でボコったりしただけですよ。」

本当に懐かしいです。あの世紀末な世界も、今ではいい思い出です。

「なあ、いい加減どいてくれ。仕事ができん。」

「あの、もうちょっとだけ……っ！」

もう少し見てみたかったので次のページを開けてみると、そこにいたのは

「ん？お前、こいつらとも知り合いなのか。」

「二人ともどうしたの？この二人は……コードネーム「フェニックス」と「プリンセス」だね。」

「知っているんですかGINGAさん？」

たまたま近くを通りかかったGINGAさんが説明してくれました。とりあえずゲンヤさんの背中から降りて話を聞いてみます。

「私もあまり詳しくはないんだけど……。」

そう前置きしてギンガさんが話してくれました。

曰く、たまに街中で騒ぎを起こしては、駆けつけた局員を悉く返り討ちにして逃走するそうです。凶悪犯罪を犯したという訳ではないものの、そうやって局員が撃退されていくうちに、「正体不明の危険人物」として、公務執行妨害等で手配されているそうです。ギンガさんが知っていたのは、闘技場の件で私に關係する情報を集めている最中に、たまたま見つけたからだそうです。

……何やってるんですか蓬萊人。

「そうか、キャラは「あの」闘技場にいたんだっとな。なら話は早いか。」

へ？ひょっとして、さっきまでゲンヤさんが唸っていた原因ってコイツら？

「こいつらの逮捕だが、ウチの担当になった。」

「え、ええええええええ！」

「キャラ、キャラ！？」

「冗談じゃないですよ！殺しても死なないような奴らとどう戦えと？

「後で言おうと思つてたんだが……奴らの発見場所のデータからシミュレーションした結果、そろそろ俺達の担当地域に来る可能性が高い。もし何か騒ぎがあつたら、出動することになるだろうな。」

「応援を呼んだりとかは出来ないの？」

「本局に要請したけど無理だった。「重要度が低いから」だそうだから悩んでる。」

確かに困りました。

街中で騒ぎを起こされれば見逃す訳にはいかないだろうし、かといつて出動すれば全員返り討ち。

……これ何て天災？

「えっと、騒ぎを起こさずに素通りしている地区も何箇所があるんだよね。なら必ずしも戦闘するってわけじゃないでしょ？」

あ、ちょ、ギンガさん、それフラグ！そんな事言つてると

「ゲンヤ隊長！C-4地区で魔導師2人による戦闘が発生、至急対応願うとの事です！」

ああああ、やっぱりきたああああああ！

第22話 陸士108部隊（後書き）

次回、あの二人です。以下Q&A

Q・マフィアのボスの名前って？

A・アルファベットにして後ろから読んでください。つまりはそういうことです。

Q・キャラに物騒な二つ名がW

A・裏社会では既にそこそ有名です。他の二つ名は「桃髪のセンセー」「撲殺幼女」「見た目詐欺」などなど

では、また次話で

第23話 理不尽（前書き）

いつの間にかPV20万、ユニーク3万達成していました。
コレを読んでくれている読者の皆さんに感謝です。

第23話 理不尽

基本的に、私は負ける戦いはしない人間です。

闘技場に通っていた時も、わざとランクを抑えて確実に勝てるラインで稼いでましたし、フェイトさんとエンカウントした時も、速攻トンスラしてともに戦闘しませんでした。

民間協力者として働き初めてからも格下ばかりですし、自分より強い人と戦った経験なんて、藍の時の弾幕ごっこくらいです。なのに

「いきなりあの二人とか、ハードル高すぎますよ……。」

「ん、何か言った？」

「いえいえ、何でもないですよ。」

今、ギンガさんと一緒に、輸送車で現場まで移動中です。あの二人相手に数を揃えても無駄なので、今回に限っては私とギンガさんの二人だけです。

すでに通報があつた地域の避難は済んでいるらしく、道路には車一台見当たりません。

そのまま進んでいくと、やがて聞こえてくる戦闘音。二つの影から凄まじい数の弾幕が発射され、それに合わせるようにして爆発音が響いてきます。ひよっとして

「あれ？「フェニックス」と「プリンセス」が戦闘してる？」

「やっぱりそう見えますよね。ギンガさん、音声拾えますか？」

「ちょっと待ってね、やってみる。運転手さん、車両をこの付近に

待機させてください。」

一旦車両を止めて、サーチャーをいくつか出して様子を伺います。初めは爆発音しか聞こえなかったけど、サーチャーが近付くにつれて音声が聞こえてきます、えーっと

「……たく、あのねえ、いつまで怒ってるのよ？ いい加減止めない？」

「誰が止めるかつ！ 大体、原因はオマエの方だろ！」

「そんな昔の事なんて忘れたわ。過去の事なんてどうでもいいと思わない？」

「私が取っておいた食料食べておいて、よくもそんな事言えるな！」

「別にいいじゃないの。私達なら餓死してもリザレクションするんだし。」

「だから、食った本人がそんな事言ってんじゃないねー！ 滅罪「正直者の死」！」

「ちよつ、大人気ないっつーの！ 難題「火鼠の皮衣 - 焦れぬ心 -」！」

「……。」

「……。」

「あの、GINGAさん。」

「何？」

「ひょっとしてこの人たちが暴れてるのって、いつもこんな理由なんでしょうか？」

「……。」

「……。」

出撃時の張り詰めた雰囲気はどこへやら、車両内が何とも言えない空気に包まれました。

「GINGAさん、帰っていいですか？」

「駄目だって！と、とにかく、こつやって被害が出ている以上は何とかしなくちゃ。」

「ですよ。ちょっと試みてみたただけです。」

「とにかく、これ以上有益な情報は得られそうにないから、そろそろ行こう。」

「あの、もう少しだけ待ちませんか？今同士討ちみたいになっ

てますし、疲弊した所で叩いた方がいいんじゃないですか？」

蓬萊人は不死ですけど、再生を繰り返しているとバテますからね。ある程度リザレクション使わせてからの方が勝算が増えます。

「キャラ、大事な事を忘れてるよ。」

「へ？」

「容疑者の逮捕も重要だけど、それよりも街の安全が先。だから、局員としてはなるべく早く事態を収拾しないといけないんだよ。」

要するに、身を挺してあの喧嘩止めてこいと。

「これがお役所仕事の辛さなんですね。」

「愚痴なら後で聞いてあげるから。行くよ、キャラ。」

「はい。「ペスカトーガ」セツトアップ。」『藍、モード「博麗」サブは「玉兔」。』

そう言つて、左手に付けたブーストデバイスを起動させるのと同じ時に、念話で夢幻珠の起動を指示します。

このデバイスはあの倉庫街の一件で手に入れたやつで、保護観察が終わる時に私の手元に戻ってきました。ブースト系の魔法と夢幻珠の身代わりをやってもらっています。それにしても、我ながら皮肉な名前をつけたものです。

お馴染みとなった萃香タイプのバリアジャケットを装着して準備OK。ギンガさんも、ローラーブーツを履いてリボルバーナックル

を装備して準備完了です。

さあ、逝ってきます！

「その二人、こちらは時空管理局です。今すぐ戦闘を中止してこちらの指示に従ってください」

ギンガさんが二人に対して警告し、私も一緒に接近していきます。本当は奇襲したいんですけど、お役所仕事は面倒です。向こうもそれに気付き、戦闘を止めてこっちを見ってきます。

「ちっ、またあいつらかよ。」

「いくら追い払っても沸いてくる。本当しつこいわね。」

いや、貴方達が街中で殺し合いしてるからです。お願いですから常識を持ってください。

「仕方がないわねえ、いつも通り追い払うわよ。」

「はあ、腹が減ってイライラしてるってのに……。」

それ思いつきり八つ当たりですよね！

直後、二人から恐ろしい量の弾幕が発射されてこちらに向かってきました。

私は「狂気を操る程度の能力」をソナー代わりにして視界外の弾

幕を感知しつつ、「空を飛ぶ程度の能力」で弾幕をグレイズしていきます。

『GINGAさん、GINGAさんは大丈夫ですか？』

『遮蔽物と障壁で何とか凌いでる。にしても、あの二人何者？少なめに見積もってもSランク級の実力とかデタラメすぎる！』

そりゃ、月の姫様と千年以上生きてる不死人ですからね。存在自体が理不尽です。

『GINGAさんはそこでじっとしててください。いくらフロントアタッカーでも、あの弾幕を正面から受けると無事じゃ済まないですから。』

『でも、それだとキャラが！』

『私の回避能力知ってるでしょ？せいぜい足掻いて勝算を見つけてきます。』

GINGAさんにそう言い残して、私は弾幕の雨に突っ込んでいきます。

さすがに二人分の弾幕は密度が桁違いで隙間を見つけるのも大変ですが、パターンを読みながら慎重に、時には大胆にグレイズして回避に専念します。

それからある程度粘っていると、急に弾幕が消えて向こう側が見えました。何か驚いてるみたいですけど、どうしたんでしょうか？

「お、まだ立ってる奴がいるみたいだぞ。」

「子供なのになかなかやるわね。」

ひょっとして褒められてるんでようか？

とにかく二人の気が変わらないうちに、接近して話し合いに持ち込みます。二人の気分次第で、再びあの地獄が再開されるので内心ビクビクです。

「あの、いい加減この辺で止めませんか？街の被害もシャレにならなくなってきましたし。」

私がそう言っていると、妹紅さんはばつが悪そうに、反対に輝夜さんは「それが？」って感じでシレっとしてました。

「それに関しては悪かったとは思ってる。でも、こっちだって捕まるわけにはいかないからな。」

「そうなのよね。だから、戦うしか無いの。」

そう言って妹紅さんは複雑そうに、輝夜さんは嬉しそうに靈力をチャージしていきます。ってかあんたら！仲良いのか悪いのかはつきりしろ！いや、現実逃避している場合じゃない。何か手は

「だったら、見なかったことにするんでさっさと逃げてくれませんか？」

『ちょ、キャロ！』

咄嗟に思いついた選択肢の中で、最も無難っぽいのを選びました。ギンガさんごめんなさい。私にはコレをどうにかするなんて出来ません。目の前の二人を見ると、チャージしていた霊力を霧散させています。信じてもらえたみたいですね。

「へえ、「かんりきよく」の奴等にしては話が分かるな。」

「私は民間協力者ですからね。正直言って我が身の安全の方が何倍も大切です。」

「自分本位なのね。」

「貴方に言われたくないですよ。」

すっかり戦闘モードじゃなくなったのに安心して、私はバリアジヤケットを解除しながら、飛んでいこうとする二人に声をかけました。

「こっちは適当に処理しておくんで安心してください。てか、こっちで騒ぎ起こすくらいなら、さっさと幻想郷に帰ってください。」

さつてと、すぐに帰って始末書書かなき「待て」っ！

いきなり肩を掴まれたのに驚き後ろを見ると、そこにはさつき飛んでいったはずの妹紅さんがいました。

「お前、さつき何て言った？」

「えっと、「適当に処理しておくから安心して下さい」って。」

「違う、その後。」

その後ですか？えーっと……。

「「騒ぎ起こすくらいならさっさと幻想郷に戻って下さい」って……あ！」

「何でお前はあそこの事知ってるんだ？」

「え、えーっと……。」

「おい輝夜、こいつ連れて行くぞ。何か知ってるかもしれん。」

「そうね。いい加減二人だけっていうのも飽きてきたし別にいいわよ。」

「なら決まりだな。よっと。」

「わ、わわわわわ！」

いきなり妹紅さんは私を抱えて、その場から飛んでいきます。ちよ、いきなり誘拐とか理不尽すぎる！？

となると黙ってないのが私の姉兼親友であるギンガさん。ウイングロードでこちらに突撃してきました。

「キャラを放せ！うおおおおお！」

「おい、輝夜！」

「指図しないで。難題「仏の御石の鉢 - 碎けぬ意思 - 」。」

「へ？きゃあああああ！」

弾幕の雨にシールドを張って突っ込んでいったギンガさんですが、耐えられずにシールドを抜かれ、ウインググロードから落ちていきます。

「ギンガさん！」

「大丈夫よ、手加減したから。」

「そんな問題じゃないです！放してください！」

「人の腕の中で暴れるな！ああ、しょうがない！」

妹紅さんがそう言ったと同時に首の後ろに衝撃が走って、私の意識が闇に沈んでいきます。その間際、ギンガさんの絶叫が聞こえた気がしましたが、私にはどうすることもできませんでした。

第23話 理不尽（後書き）

アレ？何でキャラ攫われてるんだ？

もこたんが勝手に攫ってしまいました。自作品のキャラを制御出来ない作者です。

以下Q&Aです

Q・今回出てきたデバイスについて教えてください。

A・ブーストデバイス「ペスカトーガ」、綴りはP e s c a t o g a。

P e s c aはイタリア語で桃の意味。魚釣りとか福引って意味もあります。ここでは桃です。

t o g aは英語で外衣、古代ローマあたりの絵に描いてあるような衣です。

P a s c a t o g aで「桃の衣」です。桃でキャラを、衣で強化系のブーストを表しています。

と、ここまでは表向きの意味で、実際は違います。

P e s c a t o g aを並び替えるとS c a p e g o a t、スケープゴート、要するに夢幻珠の身代わりです。本編中でキャラが「皮肉な名前」って言ったのはこれです。

Q・ゲンヤさんがキャラに厳しいのは同じような事を繰り返しているからでしょうか

A・ゲンヤさんとギンガさんはキャラの秘密に薄々気付いています。なのでなるべく目立たないようにしてもらいたいです。フルバックスに任命してるのもこれが理由。

そうやって色々気を回しているのに、当の本人が自重しないで砲撃かましてたら、そりゃ怒りますよねw

Q・ゲンヤさんはキャラが近接格闘系の魔導師だと知っていたのに、砲撃とかブーストとか明らかに別方向の魔法を使っていることに疑いを持たないのでしょいか。

A・ギンガ共々、薄々気付いているけど知らない振りです。幸い民間協力者なので報告書はある程度誤魔化せますが、始末書レベルになると厳しいです。中間管理職は大変なんです。

Q・モード変更時のバリアジャケットの変更機能は今は停止しているのでしょうか。

A・これは説明不足でしたね。キャラは基本的に萃香のバリアジャケットを愛用しています。（？話参照）「鴉天狗」や「氷」の場合は、その上に翼が展開されます。

バリアジャケットに対する描写が無い場合は、萃香の格好なんだと思ってください。

では次話で。これから先の展開どうしよう……。

第24話 さらわれて

「え？キャラが誘拐された！？」

仕事が一段落し、そろそろ帰ろうかと思っていた矢先、そんな知らせが飛んできた。

「ああ、ギンガと二人で任務に出てもらったんだがな、その途中で犯人グループに攫われちゃった。」

ウィンドウに写っているのはゲンヤさん、現在のキャラの保護者だ。

初めはいつものようにキャラに騙されてるのかと思ったけど、ゲンヤさんはそういう質の悪い冗談はつかない。だとすると、本当に攫われたんだろう。キャラなら大抵のことは大丈夫だと思うけど

「しかもその犯人は「フェニックス」と「プリンセス」だ。」

「なっ！」

その二人の情報は私も知っている。

幾度も破壊行為を繰り返し、その度に現場に駆けつけた局員を全滅させて逃走する、正体不明の高ランク魔導師。

地上部隊の間では災害に近いものとして扱われ、大まかな位置は捕捉してもそこに人員を差し向けることは無く、現地の職員は、ただ無事に通り過ぎるのを待つのみという恐怖の存在である。キャラは、そんなとんでもない奴等に捕まってしまったのだ。

「大まかな場所は掴めたんだが、既に俺達の管轄外だな。しかも、

対抗できる戦力がいないんだ。」

「そうですか……。」

ゲンヤさんは悔しそうに唇を噛んでいる。気持ちは分かる。私も同じだから。

「ん？ちよつと待ってくれ。ギンガ、いいぞ。」

「フェイトさん！キャロを助けてあげてください。キャロが攫われたのは私のせいなんです！私がつまんとしっかりしてれば……。」

ゲンヤさんの後ろから出てきたのは、キャロのお姉ちゃん的存在のギンガ。足を怪我をしたのか杖をついており、顔には涙の痕があった。

「キャロが様子を見ようって言ったのに、私が行くって決断したから。だから……。」

「お前は悪くねえよギンガ。お前は局員として正しい判断をしただけだ。悪いのは、二人に押し付けたこのオレだ。」

ゲンヤさんがフォローをしても、ギンガは納得していない。だから

「分かりました。私がキャロを取り返してきます。」

「フェイトさん？」

「必ず取り返してくるから、ゲンヤさんとギンガさんは安心して待っていてください。」

「すまん。あんたも忙しいだろうに。」

「好きでやることだから気にしないでください。それでは。」

通信を切った後、急いでオフィスから出て、私の相棒に声をかける、

「バルディッシュ。」

飛行許可の取得及び、対象のサーチ結果の問い合わせ、すでに完了しています。

「そっか、ありがとう。」

それが私の役目ですから。

頼りになる相棒に感謝しつつ、一気に飛翔して目的地へと向かう。サーチ結果は予測に基づくものなので、時間が経てば経つほどその信頼性は薄くなる。無駄な時間をかけてはいられない。

「待っててね、絶対助けるから。」

決意を胸に少女は夜空を駆け抜けていく。

しかし、彼女は気付いていない。

自分のポジションが、いつぞやの火災の時と同じになっていることに。

「ん……あれ？」

目が覚めると、そこは暗い洞窟の中でした。あれ？何で私こんな所にいるんだろう？

「お、やっと目が覚めたか。」

頭の上から声が聞こえたのでそちらに顔を向けると、そこにいたのは白髪の少女 妹紅さんでした。そこで初めて、私の頭が妹紅さんの太股の上に乗っていて、所謂膝枕の状態になっているのに気がきました。

「へ？へ？」

いきなりの事に頭が上手く回りません。落ち着くんだ、キヤロ・シエル。とにかくこうなった経緯を思い出そう。えーっと、ギンガさんと任務に出て、そこで戦って……あ！

「って、何人のことを浚ってくれやがったんですか！」

ようやく現状を思い出した私は、とりあえず起き上がってから文句を言うことにしました。

「それは悪かったと思ってるよ。ただ、どうしても聞きたい事があるてな。お前、幻想郷について何か知ってるのか？」

「!？」

「やっぱり何か知ってるな。ほら、正直に話せ。隠すためににならないぞ。」

そうでした。私が浚われたきっかけって、二人の前ですっかり漏らしたせいだった。ここはどう誤魔化すか

「喋る気が無いのなら、焼き鳥にしても構わないんだぞ。」

「喋ります、喋りますから！」

だから、お札をしまってくださいー！

「要するに、ここは幻想郷のある世界とは全く違う所で、お前が色々知っているのは、たまたま日本に旅行した時に知っただけだけだっただけか？」

「そうなのですよ。次元世界って言って、世界はいくつかあるんで

す。そちら風に言うと、天界とか魔界みたいな感じですね。それはそうと、どうして貴方達がこんな所に？」

それを聞くと、妹紅さんは急に渋い顔になりました。アレ、地雷踏んだ？

「正直思い出したいんだけど……。」

そう前置きして妹紅さんは話してくれました。

話によると、二人の殺し合いによる迷いの竹林の自然破壊が深刻な問題となり、てゐさんを初めとする妖怪兎達が永琳さんに直訴したそうです。

どうしたものと頭を悩ませる永琳さんでしたが、丁度そこにスキマ妖怪が訪問して

「なら、二人つきりで旅行でもさせれば、少しは仲良くなるんじゃない？」

当初はその言葉に裏があるんじゃないかと疑っていた永琳さんも、姫の良い暇潰しになるだろうと思ってこれを承諾。めでたく二人揃ってスキマ送りにされましたさ。

何で妹紅さんが裏事情まで知っているかというと、スキマ妖怪直々に説明してもらったからだそうです。「そんな訳だから、仲良くなるまで帰さないわよ」という捨て台詞とともに。

そして飛ばされた先は、外は外でもミッドチルダ。あとは知つての通り、金稼ぎのために闘技場に出場、それが原因で指名手配、喧嘩の度に来る局員を蹴散らしながら、旅を続けてるらしいです。

「なんというか、苦勞してるんですね。」

「言うな。かえって落ち込む。」

どこかの誰かさんの台詞じゃないですけど、本当に世界はこんな筈じゃなかった事ばかりですね。ん？待てよ？

「てことは、二人がちゃんと仲良くしてれば帰れるんじゃない？」

「誰がアイツなんかと仲良くできるか！……とにかく、そういう訳で私達は旅をしながら帰る手段を探してるんだよ。お前何か知らないか？」

「うーん……。」

有力な情報はあると言えばあるんですが、どうしようか？……
…そうだ！

「できれば教えてあげたいんですけど、問題が……。」

「何だ？」

「スキマ妖怪さんは、「仲良くなるまで帰さない」って言ったんですよ？なら、ひよっとすると今も監視されてるんじゃないですか？」

「ん？今まで気にしてなかったけど、言われてみればそうかもな。」

「だったら、私が余計な事を教えてしまうと、どんな目に遭うか分かったもんじゃないですよ？」

「……あー、言われてみれば、そうかも……。」

私の指摘に、妹紅さんは頭を抱えています。誘拐されてしまいましたけど、私の事を心配してくれてる辺り、基本的には良い人なんでしょうね。そこにつけこむのは悪い気がしますけど

「あ、誤解しないでくださいね、別に話さないって訳じゃないんですよ。ただ、危険を冒す以上、何か見返りが無いと割りに合わないなあって。」

「……金なら持ってないぞ。あるなら食料を買ってる。」

そんな悲しいこと暴露しないでください妹紅さん。

「いえいえ、別に大したことじゃありませんから。……私を、鍛えてくれませんか？」

今までは生き残ることを最優先にして、格上の敵には即逃走しました。それでもJS事件はどうにかなるかなって思ってたけど、今日の出会いでそれが甘い考えだと気付かされました。

夢幻珠ナシの今の私の実力は精々A〓Aランク。チートっぽいデバイスを持っているだけでは、圧倒的な地力の差は埋められません。だから

「二人を見て、自分の修行不足を実感しました。私を鍛えてくれるなら、「外」の博麗神社のある所まで案内してあげます。」

「な？本当か!？」

「嘘は言いませんよ。どうします?？」

「ちょっと待て、輝夜と相談してみる。」

あれ？そう言えば見当たりませんね。どうしたんでしょうか？

「アイツなら外にいる。どれ、様子でも見に行くか。」

私と妹紅さんは二人で洞窟から出て行きます。辺りはもうすっかり夜。その月明かりに照らされながら、輝夜さんが立っていました。

「あら、その子起きたの。」

「ああ。で、相談したいことがあるんだが。」

少女相談中……

「私は別にいいわよ。今すぐ帰るっていうのもつまらないし、良い暇潰しになりそうね。」

「って事らしい。その代わり。」

「はい。約束は守りますよ。」

やった。これで師匠ゲットです！

「じゃあ、今日はもう遅いからそろそろ寝ましょうか。」

「私、さっきまで気絶してたんですけど。」

「子供なんだから大丈夫だろ。ほら、行くぞ。」

そう言って三人で再び洞窟の中に入っていきます。やがてさっきの空間まで辿り着き、そこで寝る事になりました。野宿なんて久しぶりです。

「うつつ、布団で寝たいです……。」

岩がゴツゴツしていて頭が痛いです。昔はフリードを枕にしてたんですけど

「仕様がないな。ほら、こっちに来い。」

胡坐をかいた妹紅さんが、自分の膝を叩きながら手招きしてきました。私はそれに感謝しながら、妹紅さんの太股の温かさを感じつつ、眠りの世界に入っていました。

「やっと寝たか……何だよ、輝夜？」

「いえいえ、何でもないわよ。ただ、随分可愛がつてるなあって。竹林に引き籠もってた貴方がそんなに他人と関わるなんて、どういった風の吹き回しかしら？」

「引き籠もりはお前も同じだろうに。……別に、ただの気まぐれだ。」

「気まぐれ、ねえ。まあ、そういう事においてあげる。じゃ、私も寝るから。」

そう言っ
て輝夜も睡眠に入る。蓬萊人といつても眠い時は眠いだ。
だ。

（まあ、面白い子っていうのは確かなんだけどな。まさかまだ「外」の世界で妖怪が生きてるなんて、長生きはしてみるもんだ）

第24話 さらわれて（後書き）

ストックが、無くなっただんだけ……

今まで毎日投稿していましたが、実は数日前からストックを切らしてしまっていました。

このまま一時しのぎみたいに投稿していくのもクオリティー的にアレなので、一度これからのプロットを組み直してから投稿再開したいと思っています。

出来れば毎日投稿したいんですけどね。

18時になっても更新が無かったら、「アイツ落としやがった」と思ってください。以下Q&Aです

Q・不死二人、戦闘騒ぎと局員への暴行などに誘拐罪も加えて結構の罪ではないでしょうか？

A・賭博容疑、器物破損、騒乱罪、傷害罪、公務執行妨害、未成年略取、市街地での無許可魔法行使あたりでしょうか。

捕まるとほぼ豚箱入りですね。でも二人が捕まる未来なんて想像できません。

では、また次回。できれば明日にはアップしたいです。

第25話 キャロ・シエルの神隠し

フェイト・Tハラオウンは混乱していた。

昨晚ゲンヤから寄せられた「キャロ誘拐」の報。それを聞くなりバルディツシュを片手に持って、探索へと飛び立った。

予測に基づくサーチは予想範囲が曖昧で、フェイトは夜通し飛び回って対象エリアをしらみつぶしに探し回った。

そして太陽が昇るころ、その努力は身を結ぶ。サーチャーから魔力反応が検出されたのだ。

すぐにでも現場に急行したいのだが、夜通しの飛行は彼女から体力と魔力を奪っており、その状態でSランク相当の相手とやり合うのは無謀である。かといって放置していればみすみす逃がすことになるので、これも選ぶことができなかった。そして結局、彼女は行くことにした。

（正面から挑むのは無謀だけど、隙を見てキャロだけでも救出すれば……。）

決死の覚悟を胸に、彼女は反応のあった地点へと向かう。そこで彼女が見たものは

「ふうん、イナバの肉って食べたこと無かったけど、結構いけるのね。」

「ってこら輝夜、それ私の肉だ！勝手に取ってるんじゃないー！」

「いちいち細かいわねえ。そんなに嫌なら、名前でも書いておきなさいな。」

「あなたは子供ですか輝夜さん。ほら妹紅さん、こっち焼きましたよ。」

「お、ありがとうキャロ。あむ……。」

「妹紅、子供に食べさせてもらって、恥ずかしいと思わない？」

「あんたが言うな。」

「ふあんははひふな。（あんたが言うな）」

「あ、フェイトさん、おはようございます。フェイトさんも食べますか？」

野生の兎で焼肉をしている、すっかり馴染んだ感じの三人の姿であった。

みなさんおはようございます。キャロ・シエルです。三人で朝ご飯を食べていたら、フェイトさんがやってきました。

「うん、やっぱりこうなるよね……いいんだ、分かってたから。」

サー、元気を出してください。

こっちを見るなりその場にへたり込んでブツブツ言い出しました。

正直怖いです。

「おいキャラ、こいつ知り合いか？」

「はい。一応友人……かな？とにかく、悪い人じゃないですよ。で、フェイトさん、こんな朝っぱらからどうしたんですか？」

私の言葉に反応したのか、ようやく起き上がってくれたフェイトさん。何だかプルプル震えて……アレ？フェイトさん怒ってる？

「どうしたもこうしたも無いよ！キャラが誘拐されたって聞いて、ずっと探してたんだから！」

「あ。」

そつえば私誘拐されてたんでしたね。すっかり忘れていました。

「ゲンヤさんとギンガも心配してたよ。酷い目に遭ってなければいいのにつて。さあ帰ろう。」

それを言われると心が痛みます。でも

「すみませんフェイトさん。ちょっとやらなきゃいけない事が出来たので帰れなくなりました。」

「へ？」

そして私はフェイトさんに事情を話しました。あの二人は次元漂流者で、今までの犯罪は生きるために仕方無かったこと、そして私が帰る手段を用意してあげる代わりに修行をつけてもらうこと。も

ちろん幻想郷のことはばかして話しました。それを聞いたフェイトさんの反応は

「つて、そんな事許せる訳ないでしょう!」

「駄目ですか?」

「当たり前だよ!次元漂流者ならちゃんと事情を説明して管理局に出頭させないと。帰る手段を見つけるのは私達の仕事。キャラがする事じゃないんだよ!」

「確かにそうですけど……。」

管理局に幻想郷の存在がバレるのは不味いですし、保護の際に二人の体を調べられたらこれも不味いです。でもフェイトさんにこの事を説明する訳にはいきません。こうなったら

「フェイトさん、駄目ですか?」『藍、モード「境」』

フェイトさんにしがみつकिながら、上目遣いをお願いしてみます。と同時に、フェイトさんに見えないように、フェイトさんの背後にスキマを開きます。

「これが執務官の仕事だから。強くなりたいのなら私が訓練をつけてあげる。だから帰ろう。」

「そうですか。……ゴメンナサイ!」

「へ?きゃああああ!」

私に突き飛ばされたフェイトさんは、そのままスキマ内に落ちていきました。移動先は昔暮らしていた廃棄都市の拠点。誰にも見られないのは確認済みです。

「さつてと、フェイトさんが戻ってくる前に移動しましょうか。…どうしました？」

後ろを見てみると、妹紅さんと輝夜さんが驚いた顔で見てきます。どうしたんでしょうか？

「今のつてスキマだよな？」

「あなた、スキマ妖怪だったのね。」

あ、そういえば、まだ説明してませんでした。

「藍、説明ヨロ。」

「私に丸投げですか？まあいいですけど。」

「八雲の式！？それにしては」

「ちっこいわね。」

藍に説明を任せている間に、私はいつも書き置きに使っていたメモ帳を取り出しました。えーっと

ゲンヤさん、ギンガお姉ちゃん、スバルお姉ちゃんへ

私は無事なので心配しないでください。

しばらく旅に出てきます。週に一回は連絡を入れるようにするので安心してください。

適当にふらついて飽きたら帰るつもりです。それでは、また。

キャロ・シエル

「こんな所でいいかな。」

書き終わったそれを、フェイトさんが落ちていったスキマに放り込みました。藍の方はそろそろ説明終了したかな？

「マジックアイテムね……こっちの科学は進んでるんだな。」

「とりあえずは、それで納得してあげるわ。」

終わったみたいですね。それじゃ、そろそろ移動しますか。いつまでもここにいと、またフェイトさんが戻ってくるかもしれないですし。

「とりあえず、こことは別の世界に移動しますよ。」

フェイトさんの所に繋がっているスキマを閉じて、新たに一つ開きます。

行き先はアルザス山中。自然豊かで隠れるにはうってつけの場所

です。

開いたスキマに私が入ります。次に妹紅さん、最後に輝夜さんが入り、スキマは完全に閉じました。

「ここは？」

「私の故郷です。ここなら管理局も追ってこないと思いますよ。騒ぎさえ起こさなければ。」

「妖怪の山に似てるわね。」

「殆ど手付かずのまま放置されてますからね。」

そう言ってから、私は二人の前に立って頭を下げます。こういったことは最初が肝心ですからね。

「これから宜しく願います。お師匠様。」

第25話 キャロ・シエルの神隠し（後書き）

何とか投稿できました。以下Q&Aです。

Q・幻想郷との戦争の引き金になりかねないって自分で言ってるのに何で管理局の前で幻想郷の名前を出すの？

A・付近にいたのはキャロ一人で、公式な記録には残ってません。そもそも記録に残っているなら、二人を見逃す発言の時点でアウトです。ギンガが聞いているかもしれないので、軽率っちゃ軽率なんですけど。そのギンガも直後のキャロ誘拐でそんな細かい事は忘れているので、結果オーライでした。

では、また次話で

第26話 修行

「きゃあああああ！って、あれ？」

いきなりキャロに突き飛ばされたかと思うと、そこはもう、さっきまでいた場所ではなくなっていた。窓は割れ、カーテンも破れている廃ビルの一室。付近に人の気配は無く、すでに太陽が昇っているのいうのに辺りの雰囲気はどこか薄暗い。

「バルディツシュ、現在の位置情報の取得を。」

イエス、サー……コンプリート。クラナガン郊外の廃棄都市です。

「はあ……これって、きっとキャロのせいだよね……。」

そうとしか考えられない。転送魔法の形跡は無かったけど、たぶん巧妙に隠していたんだろう。おそらく指名手配時代に使っていたのと同じ方法だ。

当時と同じように出し抜かれてしまったことに落ち込んでいると、頭上からヒラヒラと紙切れが落ちてきた。私は酷いデジャブを感じながらも、それを手に取った。

ゲンヤさん、ギンガお姉ちゃん、スバルお姉ちゃんへ

私は無事なので心配しないでください。

しばらく旅に出てきます。週に一回は連絡を入れるようにするの
で安心してください。

適当にふらついて飽きたら帰るつもりです。それでは、また。

キャロ・シエル

「え？コレ、本気で！？」

いや、キャロの事だから本気なんだろう。本人的には、ちょっとした旅行気分には違いない。指名手配犯と一緒にするのは心配だけど、キャロがあれだけ懐いているのだから、おそらくは良い人達なんだろう。

問題はそこではない。肝心なのは、この手紙を「私が」受け取ってしまったという事だ。つまり、今もキャロを心配しているナカジマ家にこの手紙を届ける義務が発生し、そこでの混乱に巻き込まれる事が確定したわけで

「ねえ、バルディッシュ。」

どうしました？

「本当に、世界はこんな筈じゃなかった事ばかりだね……。」

いつかいい事ありますよ。サー。

第7管理世界 アルザス山中

「よし、今日も始めるぞ。」

「はい。お願いします、妹紅師匠。」

アルザス山中に移動して一週間、今日もいつものように稽古をつけてもらっています。

内容は霊力と魔力の操作、飛行訓練、弾幕での模擬戦など、結構基礎的な事ばかりです。応用は夢幻珠があればいくらかでも効くのでとにかく地力を上げる事を優先でやっています。

ただし、デバイス無しで。訓練初日に取り上げられてしまったんですよね。

「じゃあ、今日から私達がお前の師匠だ。言う事はちゃんと聞いてもらうからな。準備はいいか？」

「はい。よろしくお願いします！ 藍、モード「博麗」サブはつてちよっ！」

夢幻珠を起動させて準備をしていると、妹紅さんがこっちに近付いて来て夢幻珠とペスカトールガを取り上げてしまいました。

「妹紅さん！？ 何するんですか！」

「師匠と呼べ。何って没収だ没収。こんな便利道具に頼ってたら強くなれないぞ。輝夜、コレ預かっておいてくれ。」

そう言っで、夢幻珠とペスカトーガを放り投げます。せめてペスカトーガは残しておいて欲しかったです。

「じゃあ、最初は飛行から始めるぞ。ん、どうした？」

師匠、それは嫌がらせですか？嫌がらせですね？

「あの一、夢幻珠が無いと飛べないんですけど……。」

私がそう言っで、妹紅さんは困ったように頭を抱え、輝夜さんはそんな私達の様子を見て笑っています。おのれ、他人事だと思っで

「マジか？そこから教える必要があるのか……。仕方無い。約束したからには、出来るようになるまで教えてやる。」

「うっっ……ごめんなさいです。」

とまあ、そんな感じで修行が開始されたわけだ。

飛行については、初日を丸ごと使っで指導してもらった結果、ようやく低空に浮いてふよふよ動けるくらいになりました。たぶんゆうかりんより遅いです。いつも何気なく使っでいた「鴉天狗」や「

博麗」の凄さを、今更ながらに思い知りました。

「おい、集中が乱れているぞ。もう一回だ。」

「は、はい！」

おっと、そういえば今は修行中でしたね。

今やっているのは霊力、魔力、それに妖力の弾幕を同時に生成し、それを三つとも同じ大きさに維持する訓練です。

……ええ、妖力です。私も初めてコレ聞いた時に耳を疑いました。妹紅さんによると

「たぶん、お前は妖力を使うのがいちばん向いてる。」

だそうで、そんなの使った事が無いって言うと、また呆れられました。

それから妹紅さんに妖力を流してもらって妖力の存在を自覚するところから始まり、霊力や魔力等と同じように運用していく事になりました。

人間に妖力があるのか疑問でしたけど、こうやって使える以上はあるんでしょうね。現に目の前にいる妹紅さんも妖術使って戦いますし。

「また妖力が大きくなってるぞ。ちゃんと制御しろ。」

「あーうー……。」

「よし、今日はここまでだ。明日はもう少しマシになってくれよ。」

「ありがとうございます……。」「

はあ……。まだまだ先は長いです。

訓練が終わって汗を拭いていると、輝夜師匠が結界を解いてこっちに歩いてきました。

輝夜師匠は、基本的には訓練中の結界役を担当してくれています。一度教えてもらった日もあったのですが

「輝夜、お前はキャラに教えるの禁止。」

「えー……。何ですよ?」

「何でもなにも……。ほら。」

妹紅さんが指差した先には、「難題「火鼠の皮衣 焦れぬ心」」を撃たれてピチュった私があります。服には所々に焦げ跡が付いて、見た目的に結構やばいです。

これにより、輝夜師匠が手加減が下手なことが発覚。以降は結界役に専念してもらってます。

「お疲れ様。早速だけど今日もよろしくね。」

そう言つて輝夜さんは夢幻珠を渡してくれます。

「藍、モード「橙」サブは「白狼」。」

ハンティング用形態になつて狩りに出発です。いつもは夢幻珠は没収されてますけど、この時だけは返してもらえます。

師匠達、長年生きてる癖にサバイバル知識があんまり無いんですよ。姫様である輝夜師匠はともかく、妹紅師匠まで無いのは予想外でした。そんなので今までどうしていたのか聞いてみたら

「飢えても毒喰らつても死なないからな。そりや美味しいもの食べられればそれに越したことは無いけど、そこまで必要に感じなかった。」

だそうで。さすがは蓬萊人、私達に出来ない事を平然とやってのけるッ！憧れたくはないですけど。

二人ともそんな調子だから道中ロクなものにありつけず、輝夜師匠が盗み食いしているのが発覚した際には喧嘩になり、それが原因で管理局を呼び寄せた事も何度かあったそうです。

「にしても、自分達の食料が懸かつてると夢幻珠を使つてもいいなんて、二人とも現金ですよー。」

二人に聞こえない距離まで離れてから、一言ばやいて狩りに入ります。訓練後で疲れてるし三人分は結構多いけど、日が暮れる前に集めないかね。

「行つたか。」

「みたいね。で、あの子の事どう思つ？」

「正直驚いてる。最初は呆れたけど、その後は一日もかからないうちに飛行に成功してるし、今日だって初歩とはいえ霊力、魔力、妖力を三つ同時に制御してた。あんなの私だって出来ないっていうのに。」

妹紅は嬉しそうに話している。全く、本人がいないとベタ褒めなんだから。

「それ、キャラの前で言つてあげたらどう？きつと喜ぶわよ。」

「言つたら調子に乗るからな。お前も言つんじゃねえぞ。」

「はいはい、分かりました。」

妹紅との会話が終わつてする事の無くなった私は、さつきキャラが付けていった数珠、「夢幻珠」について考える。

「○○程度の能力」が使えるようになるんじゃないマジックアイテム。

ではいす？、とかゆにぞん？についてはよく分からないけど、肝心なのはそこではない。

「いつ」「どこで」「誰が」それを作つたかだ。

八雲の式の複製品の話によると、分霊体を元に構築されているらしい。それはつまり、私達の魂のサンプルが、いつの間にか勝手に取られていたという事だ。

製作者についての情報はナシ。本当なら持ち帰って永琳に色々調

べさせたい所だけど、これはキャラの物だし、帰る手段が恐らくはスキマ移動だということを考えると、幻想郷に帰るためにはキャラに返さないといけない。

「幻想郷に帰ったら色々調べる必要があるわね。とりあえずは河童あたりかしら？」

「輝夜、何か言ったか？」

「いーえ、何も。ほら、キャラが帰ってきたわよ。」

思考を切ってこれからの夕食のことを考える。大切なのは今なのだ。幻想郷に帰ってからの事は、また後で考える事にしよう。

（まあ、あれの製作者に弾幕を浴びせるのは確定なんだけどね）

第26話 修行（後書き）

もこたんの師匠イメージは史上最強の弟子ケンイチの逆鬼師匠。一見厳しく見えるけど、実際はかなり優しいです。むしろ過保護。対する輝夜の師匠イメージは初期のアパチャイ。手加減？何それおいしいの？です。

以下Q&Aです

Q・キャラは犯罪者の逃亡加担で罪に問われませんか？

A・フェイトが揉み消すでしょう。というか、そう仕向けるキャラが黒いです。

アルザス山中にいる以上、局員に発見される事はないので、フェイトさんが黙ってれば無問題です。転送施設を使っていない以上、指名手配の範囲はミッドチルダ内だけになっていますし。

では、また次話で。

第27話　そして二人いなくなった

みなさんこんにちは。相変わらず修行中のキャロ・シエルです。修行開始してから今日で一ヶ月。いつものように飛行訓練、霊、魔、妖力の制御訓練をこなしてから、妹紅師匠との実戦訓練に入りました。

「行くぞ、キャロ。いつも通り、私に一発当てるか気絶するまで続けるからな。」

「はい。今日こそ一発当ててやります。」

「やれるもんなら……やってみな！　蓬萊「凱風快晴　フジヤマヴォルケイノ」！」

スperl宣言と同時にこちらに向かって妖力弾が発射されたので、急いで回避して距離を取ります。その数瞬後、私のいた地点で妖力弾が爆発。回避できたことに安心する暇も無く、速度の速い通常弾幕と妖力爆弾が次々に撃ち込まれてきます。

私は大きく移動してそれらを回避。回避ルート上にも低速弾が撒かれていますので、うっかり当たらないように注意して回避に専念します。

「相変わらず避けるのだけは上手いな。けど、それだけじゃいつまで経っても終わらないぞ！」

そう言うってから、さらに数と速度を増やした弾幕が私の方に向かってきます。

（回避ルートは……不味い！！）

移動先が弾幕で埋まっっていて移動できません。これが通り過ぎるのを待っていたら、やられる！！

「クツ……霊撃！！」

一瞬の判断の後、懷から霊撃札を取り出して発動。衝撃波で移動先の弾幕を吹き飛ばし、急いでそのスペースに潜り込みます。直後、さつきまで居た地点で大爆発。その威力は、まさに噴火の名を冠するに相応しいもので

「へえ、今のも避けたか。」

「って、ちよつと妹紅師匠！今の思いっきり殺傷設定じゃないですか！私は蓬莱人じゃないんですよ！」

今までちゃんと非殺傷だったのに！うっかりで殺そうとしないでください！

「ああ、スマンスマン。でも、キャラなら大丈夫だろ？殺しても大丈夫そうだし。」

「何が大丈夫なもんですか！前に私が輝夜さんにピチュラされた事忘れたんですか！？」

「ほら、いつまでも無駄話しないで次行くぞ。」

「え？ちよ」

まだ軽いパニック状態の私の前に、さっきとほぼ同じ規模の弾幕が飛来してきます。相変わらず殺傷設定なそれを回避しながら考えることは一つ。

（何とか一撃当てて終了させないと、人生が終了してしまう！）

そこまで考えた私は、早速生き残るための行動を開始します。妖力爆弾を後ろに下がって回避。爆発の瞬間、爆風に紛れさせて妖力弾幕を妹紅師匠のところに発射します。

不意打ち気味に放たれたそれに妹紅師匠は一瞬驚いた顔をしますが、横方向に移動してそれを回避しました。でも

「そこ！」

「何！」

妖力弾を発射した直後、霊力弾幕と魔力弾幕を時間差で発射。爆風を迂回して進んだそれが、左右から襲い掛かります。逃げ場は……ありません！

「チッ……、霊撃！」

でも、妹紅師匠の出した霊撃札の効果で弾幕は相殺。攻撃は不発に終わりました。

「今のは中々良かったけど、……ッ！」

気配を感知した妹紅師匠が、背後に回りこんでいた私の方へ振り向きます。

そう、妖力弾幕はフェイク。霊力弾幕と魔力弾幕は霊撃を使わせる囷。本命は……接近戦！

いつもなら霊撃一発で仕切り直されて終了ですけど、今は弾幕相殺に使用した直後。これで決める！

「華符「破山砲」！！」

ピチューン！！

「あーうー……、あんなの反則ですよー。」

「反則なんかじゃない。立派な戦術だ。」

「あんなのが出来るのなんて師匠達だけですよ……。」

零距离で妖力爆弾炸裂させての自爆テロなんて出来るのは蓬萊人だけです。全身黒焦げ状態なのに一瞬でリザレクションとか理不尽

すぎます。私なんて、ピチュってから復活する頃には夜中になってたつていうのに！それに加えて、目を覚ました瞬間「じゃあ今日も食料お願いね」と輝夜さん。確かに食事担当は私ですけど、非道すぎませんか？

「でも、正直言つて、あそこまで出来るとは思ってなかったよ。これならもういいかもな。輝夜、どう思う？」

「ふあふあひはひほほふはよ（私は良いと思うわよ）。」

「口に物入れて話さないくださいお姫様。で、何がいいんですか？」

「お前の修行についてだよ。そろそろ実力も付いてきたみたいだしな。」

「おお！？ついに奥義伝承イベントですか？知らないうちに、もうそこまで行っちゃってたんですか！？

「今日で終わりだ。」

へ？

「え、ええええええええええ！？」

「食事中につるさいぞ。」

「ふあふあーふあふあつふえいふあひはへ（マナーがなっていないわね）。」

「あなたに言われたくないです輝夜師匠！　って、どうして終了なんですか！？　まだ基礎しか教えてもらってませんよ！？」

「だからだよ。基本的な事はもう出来るようになったし、鍛錬の方法も教えたからな。あと足りないのは経験くらいだ。」

「そこから先は自分でやっていくしか無いのよ。だから、私達が教える事はもう無いの。」

「そう、ですか……。じゃあ、もうお別れなんですね。」

「そついう約束だったからな。」

修行開始してからの一ヶ月、苦しいことも多かったけど、終わってみると何だか悲しいものです。せつかく仲良くなれたのに、残念です。

今日はもう遅いので、出発は明日の朝ということになりました。後は寝るだけになり、ここでの暮らしも最後なんだな、と考えながら、いつも寝ている所ではなく、妹紅師匠の所へと移動します。

「ん、どうした？　キャロ。」

「妹紅師匠、一緒に寝ていいですか？」

最後の日くらい甘えさせてください。

「ガキかお前は！……って、ガキだったな。……今日だけだぞ。」

文句を言いながらもスペースを空けてくれた妹紅師匠の隣に潜り

込み、私は温かい体温を感じながら眠りにつきました。

「……何だよ輝夜。ニヤニヤして気持ち悪い。」

「失礼ね。にしても、随分懐かれちゃってるわねえ。あなただけでもこっちに残った方が良くないんじゃない？」

「それはできない。私が帰らないと、心配するやつがいるからな。」

「あのワーハクタクね。なら、この子を幻想郷に持って帰るっていうのは？」

「それはキャラが決めることだ。私達が勝手に決める事じゃない。あの子を浚った私達が言う事じゃないけどな。」

「……ま、それでもいいか。なかなか良い暇潰しにはなったし。」

「それに、二度と会えなくなるってわけじゃないからな。」

「そうね。私達は永遠の民。この子もあと数百年経ったら「コツチ側」に来るかもね。」

「そうかもな。じゃあ、私はもう寝るぞ。」

「私も寝るわ。お休みなさい。」

一晩経って朝になり、いよいよ別れの時になりました。

「妹紅師匠、輝夜師匠、今までありがとうございました。」

「いいよ別に、大した事はしてないから。あと、もう師匠って付けなくていいからな。」

師弟関係じゃ無くなるのは悲しいですけど、それって対等に見てくれるって事ですよね？

「はい。ありがとうございます、妹紅さん、輝夜さん。藍、モード「因幡」。」

「はい。モード「因幡」セッティングアップ。」

輝夜さんに返してもらった夢幻珠を発動。「人を幸運にする程度の能力」を二人にかけます。

「次はモード「境」お願いね。」

続いて「境界を操る程度の能力」スキマを開きます。おお、一瞬で開きました！修行の成果が出てますね！。

「「外」の博麗神社の付近にスキマを繋げたので、そこから徒歩で向かって下さい。飛行したら駄目ですよ。あと、これは地図です。二人を幸運にしておいたので迷う事は無いと思いますけど、念のためです。」

ペスカトーガの格納領域から地図を出して二人に渡します。出来れば現地で案内したいんですけど、私が幻想入りするのは困りますからね。運が上がっていればトラブル自体来ないでしょうし、これで大丈夫です。

「キャロ、私がいなかったら鍛錬サボるんじゃないぞ。」

「なかなか楽しかったわよ。それじゃあね。」

二人はそれぞれ一言だけ発するとスキマ内に入っていました。別れてこんなにあっさりしてるものなのかと考えましたが、あの二人は蓬莱人。きっと出会いも別れも沢山経験してるせいなのでしょうね。

「行ってしまったね。」

「そうだね。じゃあ、私達も帰ろうか。」

「ですね。少し心配ですけど、まあ大丈夫でしょう。」

へ？

「藍、心配って？」

「……元々マスターは誘拐されたのですよ。それがいつの間にか勝手に旅行してその辺ぶらついてると知ってナカジマ家の皆さんがどう思うか、考えれば分かるでしょう？」

えーっと……

ギンガさん 多分すごい心配してる。帰ったらきっと大泣きされる。

スバルさん 知っていれば心配するだろうけど、今は訓練校。口止めされて知らない可能性が高い。

ゲンヤさん 絶対怒ってる。帰ったら100%折檻される。

「ねえ、藍。」

「何ですか？」

「もうちょっとだけ、旅行続けてもいいかなあ？」

「……マスター、それは逃げですよ。」

「分かってます！でも……でも！」

痛いのは嫌なんです！

「あとちよつとの間だけだから。覚悟完了したら帰るから。」

だから、あと少しだけ時間が欲しいです！

第27話　そして二人いなくなった（後書き）

というわけで、さっくり修行終わらせました。
次話からは、再びリリなのメインに戻ります。

以下Q&Aです

Q・妹紅が殺傷設定で撃ってきたのは何故？

A・もこたんの卒業試験です。あと、キャラに本気を出させるため。
殺傷設定とはいえ、気絶で済むレベルを見極めてるのがタチ悪いです。

では、また次話で。

第28話 烈火の剣精

「ギンガ、こっちの書類も処理しておいてくれ。」

「はい、ゲンヤ部隊長。」

陸士部隊所属といっても、戦ってばかりじゃない。

出勤が無い日の方が圧倒的に多いし、非番の日も訓練だけしていれば良いというものでもない。

今日は書類仕事の日。報告書、始末書、経費清算等を、事務担当の局員に混じって片付けていく。仕事を始めてから一時間ほど経過して、そろそろ集中力が切れかけていた時に、通信用デバイスからピロリンツ、という電子音が鳴った。

「メール？……キャロからだ。」

最近お馴染みになったキャロからのメールだ。

私の目の前で浚われた時には、後悔が止まらなかった。

自分のせいだって何度も漏らして、まともに仕事も出来ず、フェイトさんが手紙を持ってくるまでそれは続いた。

初めはあの二人に無理矢理書かされたんじゃないかって疑っていたけど、フェイトさんの話によると、三人で仲良くやっていたらしい。きつと今頃、気ままに旅行しているんだろう。今日の文面は

ナカジマ家の皆さんへ

元気にしてますか？私は元気にやっています。
そろそろ旅行も終わらせて、近いうちにそちらに帰ろうと思います。

帰る時にはまた連絡しますね。

キャロ・シエル

P・S

ゲンヤさん怒ってますよね……。

ギンガお姉ちゃん、お願いですからゲンヤさんを止めてください。
切実をお願いします。

「おいギンガ、頼んでた書類、終わったか？」

「へ？と、父さん！？」

「勤務中は隊長と呼べって言ってるだろうが。随分集中してたみたいだが、仕事中にそれは感心しないぞ。で、どうした？」

「ごめんなさい。えっと、キャロからメールが来てて。」

キャロ、の言葉を聞いた瞬間、父さんの顔がぴくつと反応した。

「そうか。で、何て？」

「元気にやってるらしいよ。それと、近いうちに帰るんだって。」

「……全く、アイツは人に心配ばかりかけやがって。帰ってきたら、どれだけ俺達に迷惑かけたかきっちり教えてやらんとな。」

そう言つて拳を鳴らす父さん。今父さんの頭は、キャロにどうお仕置きするかで一杯なんだろう。

「ごめん、キャロ。私には、これは止められないよ。でも、悪いのはキャロだからね。」

それに、私だつて一応少しは怒ってるんだから、ちよつとくらいお仕置きされないと気が済まないよ。こんな時だけお姉ちゃん呼ばわりしても、無駄なんだからね。

「今、何か悪寒が……。」

「大方、ゲンヤさん辺りがお仕置きプランを考えてるんじゃないですか？」

藍、たぶんそれ当たりだろうけど言わないで。

「で、マスター、今日はどうするつもりで？」

「いつも通りだよ。」

いつも通りっていうのは、特に目的地を決めないで、ランダム転送で適当に移動することを言います。

「目的が無いなら、そろそろ帰ったらどうですか？修行が終わってから、もう一月以上経ちましたよ。」

「分かってます、分かってます。けど、もう少しだけ……。」

「……分かりました。でも、早く帰らないと、辛くなるのはマスターですよ。モード「境」セツトアップ。」

モード「境」で適当にスキマを開いた後、潜り込んで移動します。今日は何かあるかなー？

生まれた時のことなんて覚えてはいない。
人間でいう親　マイスターが誰かという事も私は知らない。
ただ静かに、随分の間眠ってただけ。

気が付けば、白い部屋で実験動物。
自分が何のために生まれたのが分かっていただけに、辛かった。
生まれた意味を何一つ果たせないまま、死ぬ自由すら無く、苦し
いまま。

ずっとそんな日常が続いて、いつか、心と体が壊れて終わるんだ
って思ってた。
思っていたけど

「えーっと、大丈夫？」

炎に包まれた建物。研究員は逃げ出して周囲は無人。なのに私は
拘束されて動けない。

そうか、今日で終わりなんだと諦めた時に現れたのは、年端もいない桃髪の少女だった。

「えーっと、大丈夫？」

拘束されたまま放置されていたアギトちゃん（仮）を解放しながら、私はこうなった経緯を思い出す。

いつものようにスキマ移動をした直後、私の目に入ったのは真っ赤に燃える建物でした。

「千里先を見通す程度の能力」と「狂気を操る程度の能力」でサーチした結果見たのは、血まみれで倒れた白衣の研究者達、そして、槍を振るって研究員を殺害し、機械を破壊し回っている壮年の男性と、その傍にちょこんと立っている紫の髪の、私と同年くらいの女の子でした。

「あれって、ゼストさんとルーテシアちゃん！？てことは……やっぱり！」

集中して再度サーチすると、奥の区画に拘束台があり、そこに身長30センチ程度の赤い髪の少女が、服も着せられずに捕らえられていました。

「まさか、適当に移動してこの場面に居合わせる事になるとはねー。

どうしょ?」

いつものように脳内会議の時間です。

ゼストやルーテシアと一緒に行動 スカさんに目を付けられるのでNG。エンカウントするだけでも危険。

ルーテシアとアギトだけでもこっち側に引き込む 目的があるので厳しい。しかも、ルーテシアは既にレリックを埋められてる可能性アリ。

このままアギト（仮）が連れて行かれて向こうに強化フラグが立つのは不味い。逆にこの時点でこっちに引き入れれば、シグナム強化フラグ成立するので何とか確保したい。

以上から導き出される結論は

「藍、モード「玉兎」サブは「日」で。あの二人に気付かれないうちにアギトちゃんを確保して脱出するよ。」

「分かりました。モード「玉兎」セットアップ。」

ユニゾンを終えた私は、すぐに施設へと侵入。「狂気を操る程度の能力」で周囲をサーチしながら自分の魔力反応を隠し、「光の屈折を操る程度の能力」で姿を消して進入しました。

施設を破壊しながら進んでいくゼストさん達と、目標目がけて最短距離で突っ込んだ私。結果的に、私の方が先にアギトちゃん（仮）に会うことが出来ました。

「……誰？それに、それは？」

「聞きたいこととか色々あると思うけど、とりあえずここから脱出するよ。藍、お願い。」

一旦ユニゾンを解除、モード「境」に変更してスキマを開きます。藍とスキマを見られるのは少し不味いですけど、すぐそこまであの二人が来ていますから、それしか方法がありません。どっちみち次元移動する時にバレるんだし、後でしっかり口止めしておきましょう。研究材料として扱われていた経験上、こういう事には口が堅いでしょうしね。

「早くこっちに。じゃないと、もうすぐここを襲った人たちが来ちゃうよ。」

「あ、ああ。」

スキマを通ってさっきまでいた世界に戻った私は、ようやくそこで一息つきました。

アギトちゃん（仮）は十分疲れていたみたいで、その後すぐに気絶。一晩経って夜が明けた頃、ようやく目を覚ましました。

「……ん？」

「あ、起きた？」

「えっと……。ここは？」

「覚えてない？私が研究所から連れ出してここに移動した後、気絶しちゃったんだよ。」

「へ？……ッ！！」

研究所、という言葉に反応したのか、アギトちゃん（仮）は、体を震わせながらこっちを警戒し出しました。

「大丈夫だよ。ここにはあなたを苛める人はいないから。……出てきて、藍。」

「へ？お前、あの時の融合騎！？」

「はい。マスターは融合騎に酷い扱いをする人ではありません。だから、安心していいですよ。」

藍、グッジョブです。後で油揚げ買ってあげます。
しばらくして落ち着いたのを見計らって、私はアギトちゃん（仮）に話しかけます。

「じゃあ、改めて自己紹介するね。私の名前はキャロ・シエル。こっちは相棒の藍です。」

「藍と言います。マスター、古代ベルカではロードでしたね、の融合騎です。」

「私は……。」

そう言いかけて口をつぐんでしまいました。まだ名前が無いのは

知っているので、意地悪はしないでおきましょう。

「名前が無いなら私がつけてあげるね。……アギトっていうのはどうかな？ロードの敵を砕く牙って意味だよ。」

「アギト……ト？」

「そう、アギト。駄目かな？嫌なら別のを考えるけど。」

「……それで良い。うん。私はアギト。烈火の剣精アギトだ！」

めでたく（仮）が取れたアギトちゃんが、自分の名前を何度も呼んでいます。うん、いい事した。

……レヴァンティン繋がりでフランって名付るのを自重した自分を褒めてやりたいです。

「じゃあ、これから宜しくね、アギト。」

「うん。宜しく、キャラ。」

「なあ、キャラ。」

「何、アギト？」

「キャラは何で旅なんかしてるんだ？」

「それはですね「家に帰ってお仕置きされるのが怖くて逃げてるん

です。「ってちょっと藍!」

「事実でしょう?」

「それでも言っている事と悪い事があるよ!ほら、アギトが呆然としてるじゃない!」

「……キャロ。」

「……何かな、アギト?」

「私も帰った方がいいと思う。」

「うわーーーーん!」

アギトの裏切りものーーーー!!

第28話 烈火の剣精（後書き）

ゼストとルールニアミスの回。以下Q&Aです。

Q・アギトに色々バレたけど、大丈夫なの？

A・どっちみちスキマはバレるし、藍もアギトの警戒心を解く為と、あとアギトへの牽制に出しました。

「私は既に藍と契約してるので、あなたのロードにはなれません。でも、代わりにいい人紹介してあげます。シグナムって言って……」
てな感じで。

「特別」な者がどう扱われるか知っているアギトがこれを漏らす確率は、きっとキャラのうっかりより低いです。

Q・神埼や魅魔といった旧作キャラの能力も使えるんですか？

A・設定上は使えます。でも作者が旧作あんまり知らないので、現状だと難しいです。どっかに旧作のプレイ動画転がってませんか？

では、また次話で。

第2?話 狸と兎

時空管理局 本局にて

本局内にいくつかあるオフィスルームの一角で、ひとりの少女が作業をしていた。

すでに就業時間は終了しており、外はすっかり暗くなっている。廊下からは誰の足音も聞こえないような時間になっても作業を続けている少女を心配して、その周りを飛び回って手伝いをしていた少女が声をかけた。

「はやてちゃん、はやてちゃん。今日はそろそろ終わりにしませんか？」

「ん?もうそんな時間かいな。ちょっと待って、コレで最後にするから。」

作業をしている少女は「最後の夜天の主」八神はやて、その近くを飛び回っているのは、彼女のユニゾンデバイス「祝福の風」リインフォース?である。こうやって二人が残業をする光景は、最近ではあまり珍しくない。

「毎日毎日こんな時間まで……はやてちゃんは働きすぎです。」

「そうか?でも、コレ厳密には仕事と違うしなあ。」

そう。二人がこんな時間まで残業しているのは、別に局員としての業務が滞っている訳ではない。

空港火災をきっかけに生まれた、はやての「自分の部隊を持ちた

い」という思い。それから少し後、姉貴分的存在である騎士カリムから聞かされた予言の内容。

レアスキル「預言者の著書」によって導き出された、地上本部の壊滅と管理局システムの崩壊というシナリオに対処するため、はやては部隊立ち上げを決意した。

今やっている残業もそのためのもの。さすがに就業時間中に行う訳にもいかず、そのため、最近はいつも帰りが遅くなっていた。

「そういう事を言ってるんじゃないのです。はやてちゃんはもっと休むべきです。」

「心配してくれてるんか？ありがとうな、リイン。でも、もうちょっとだけな。」

明日は休日やし、ちょっとばつかし遅くなってもええやろ？」

「むう……はやてちゃんがそう言うなら……。」

そう言って再び仕事に戻ろうとした時、はやての持っていた通信用デバイスが音を鳴らし、着信があることを伝えてきた。

「ん？こんな時間に誰や？って、ホンマに？……もしもーし、はやてです。」

ディスプレイに表示された意外な人名に驚きながらも、はやては電話に出た。

『お久しぶりですはやてさん。キャロです。』

「久しぶりやなあキャロちゃん。ゲンヤさんから聞いたで。あっちこっちフラフラしてるらしいやんか。」

ゲンヤ曰く「任務で行方不明になったかと思ったら、いつの間にか旅行を始めてやがった」らしい。聞いてて訳が分からないけど、それが事実らしいので何も言えない。

そんな破天荒な友人が、今日は一体何の用だろうか？

『あはははは。で、今お時間大丈夫ですか？』

「大丈夫や。で、どうしたん？ゲンヤさんから匿って欲しいとかやつたらお断りやで。」

『そんなんじゃないですよ。……明日、真面目な話があるので、お時間作ってもらえませんか？』

「別にええけど、何で？」

『それも含めて明日お話しします。待ち合わせの時間と場所は後で連絡しますから、それじゃあ。』

「へ？ちょ！……切れてもた。」

「はやてちゃん、キヤロちゃん何て言っていました？」

「明日相談したい事があるから時間作ってくれへんか？やって。でもなあ……。」

「？」

「何か厄介事の予感がするんよ。今日は早めに帰った方がいいかもしれへんな。」

翌日

みなさん、こんにちは。キャラ・シエルです。

私は今、クラナガンの都市部ではやてさんを待っています。そろそろ来ると思うんですけど

「キャラちゃん久しぶりー。遅うなっでごめんなあー。」

そうは言いますが、実際は5分前だったりします。

「大丈夫ですよ。全然待つてませんから。って言えばいいんですか？」

「グッジョブやでキャラちゃん。家出したって聞いたけど、相変わらずで安心したわ。」

「あはははは……。とにかく、今日は来てくれてありがとうございます。リンちゃんも来てくれたんだ。」

「はい。はやてちゃんの護衛なのですよ。」

「ええてええて。んで、今日はどうしたん？話があるって言うってたけど。」

「ああ、そうでしたね。こんな所で話すような内容じゃないので……
…付いてきてください。」

はやてさんとリインちゃんが付いてくるのを確認してから歩き出します。30分ほど歩いた後、都市部から外れた路地裏へと入っていきます。

「なあ、どこまで連れて行く気や？」

「何だか、ちよつと怖いですー。」

「もうちよつとですから。ほら、あそこです。」

私が指差した先にあるのは寂れたバー。かつて賞金首時代に何度か訪れて顔馴染みになった店です。

「こんにちはー。マスターいる？」

「誰だこんな昼間から……って、子鬼の嬢ちゃんじゃねえか。まだ生きてたんだな。」

「勝手に殺すな。あと子鬼止める。今日はちよつと場所借りに来ただけだから。」

そう言つて、私はマスターにチップを渡して一部屋貸し切りにしてもらいます。

「毎度。これで俺は嬢ちゃん達の事なんて見てもいねえし覚えてもいねえ。好きにしな。」

「じゃあ、行きますよ、はやてさん、リインちゃん。……どうしました？」

「へ？……う、うん。ほな行こか。（こんな所にも知り合いがいるとか、ホンマに何者やる……）」

何だかボーっとしていたはやてさん達と一緒に、用意された個室へと入ります。ここならサーチャーもありませんからね。念のために遮音結界と認識阻害結界も張って準備OKです。

「で、キャロちゃん、こんな所まで連れてきて話さないかん相談事って何や。」

「それは今から説明しますね。……アギト、もう出てきて良いよ。」

私がそう言うと、持っていた鞆がもぞもぞと動き、中から体長30センチ程の小人 アギトが出てきました。

「古代ベルカ純正のユニゾンデバイス、アギトちゃんです。ほらアギト、挨拶して。」

「初めまして、アギトです。」

「へ？へ？ユニゾンデバイスやて！？しかも純正！？」

「私以外のユニゾンデバイスなんて初めて見ました！」

予想通りパニックです。気持ちは分かりますけどね。にしても、緊張してるアギトは可愛いですねー。写真に撮っておきたいです。

「今から詳しく話しますので、落ち着いて聞いてくださいね。」

それから私は、はやてさん達に事情を説明しました。

旅行中、偶然訪れた施設に捕らえられていた事。

その施設は研究所で、実験動物扱いされていた事。

施設自体は謎の二人組に襲撃されて壊滅した事。
ゼストとルル

たまたま居合わせた私がこの子を救出した事。

「ユニゾンデバイスで実験やて？……ふざけるなや！」

「ひどいです……。」

全てを聞き終わったはやてさんは、怒りに顔を歪めています。リインちゃんという家族がいる彼女にとっては、他人事に思えないんでしょうね。リインちゃんも悲しそうな顔をしています。

「とにかく、話は以上です。それで、はやてさんに、この子の保護をお願いしたいんです。」

「わかったでキャロちゃん。私に任せとき。この子はウチでしっかり面倒見たる。」

「あと、アギトちゃんが二度とこういった目に遭わないように、対策をお願い出来ますか？具体的には、聖王教会に働きかけて、アギトちゃんの後ろ盾になつてもらいたいんです。」

聖王教会からしてみれば、古代ベルカの純正融合騎は是非とも身内に組み込んでおきたいですからね。カリム経由なら二つ返事で〇

Kされる筈です。

「……私に話したのは、そこまで考えての事やったんか。分かったで。聖王教会に知り合いがいるから、何とかしてみるわ。」

「だって。良かったね、アギト。」

「キャラ、私は……。」

「この人達なら大丈夫だって説明したでしょ？大丈夫だよ。みんな優しいし、私ともいつでも会えるから。」

そうは言ってもまだ不安がっているアギトに、こっそり念話で話しかけます。

『いざとなったらスキマ使って助けてあげるから、ね？その代わり、藍やスキマのことは絶対話さないようにね。』

『……うん。』

不安は残っているものの、とりあえず納得してもらえたようです。

「じゃあ、今日からアギトちゃんもうちの家族やな。初めまして。八神はやてって言います。」

「私はリインフォース？です。よろしくです。」

「何だ？このバツテンチビ？」

ああ、やっぱりそれ言うんだねアギト。

「リインはバッテンチビじゃないです！それを言うならアギトちゃんだってチビじゃないですかー！」

「何だと！？やるのか！？」

「上等です！最新型の力、見せてやるですよ！」

そう言つて、二人で取っ組み合いを始めてしまったので、私とはやてさんは何ともいえない空気になりました。

「じゃあ、私の用は済んだので、そろそろ帰りますね。」

「ちょ！？キャロちゃん、私にアレ押し付ける気かいな！？」

「家族の喧嘩に他人は口出ししないのですよー。会計は済ませておきますから、ゆっくりして行ってね！」

「っ！この裏切り者ー！！」

はやてさんの悲鳴をバツクに、私は結界を解除して部屋を後にします。そのまま出て行こうとしたのですが

「へぶっ！」

ドアを出たところで、誰かとぶつかってしまいました。

「いめんなさ……ッ！」

謝ろうと思つて相手の方を見た時、私の体はビシッ、と停止しま

した。

そこにいたのは 阿修羅でした。

「久しぶりだな、キャロ。」

「ゲ、ゲゲゲゲゲ、ゲンヤさん！？ どうしてここに！」

「お前がここにいて連絡があつてな。」

「ちょっと、一体誰が！？」

混乱していると、突然の事態に喧嘩を止めてこっちを見ていたりインが手を上げました。

「私が連絡しておいたです。キャロちゃんも家族に会えるとうれしいかなと思ったです。」

リインちゃんは「ダメでしたか？」とでも言いたげに首を傾げています。

「ちょ、リイン、それ大きなお世話！」

「にしても、何でもここまで！？マスターに通さないよう言っておいたのに！？」

「アイツとは俺も顔見知りだからな。保護者やつてると言ったら簡単に通してくれたぞ。」

「ええええええ！！そんなの知らないですよ！！！」

ならどうやって結界を越えて……って、私が自分で解除しちゃっ

たんだああああ!!

「……さて、キャロ。」

「ヒッ!」

ゲンヤさんの声が低くなり、周囲の温度が何度か下がった気がします。はやてさん、リインちゃん、アギトも動く事が出来ずに震えだしました。

「行方不明になったと思ったら、こっちに帰りもせずフラフラして……どれだけ皆を心配させたと思ってる?」

「え……と……。」

何か話さないといけないと思いつつも、恐怖でまともな思考が働きません。

状況的に詰んでるので、何を考えても無駄なんですけど。

「家に帰るぞ。それからきつちりOHANASHIだ。」

「い、いやあああああああ!!」

私は首根っこを捕まれて、ゲンヤさんに連行されていきます。その姿は、端から見ると猟師に耳を掴まれてゲットされた兎のように写っているんでしょうね……。

「キャロ……乙。」

はやてさん、こんな時にネタされても笑えません。

ナカジマ家

幼女尻叩かれ中……

ピシッ！ピシッ！

「キャロ、反省したか？」

「反省しましたようー。だから許して「ピシッ！」はうっ！」

「二度とバカな真似はしないか？」「ピシッ！」

「もう、「ピシッ！」しない、「ピシッ！」ですから「ピシッ！」はうっ！」

現在、既に100回以上はお尻をひっぱたかれており、ヒリヒリと痛いです。

きつと、大きな椀が出来てます。もみもみなんてしたら確実に激痛が走ります。

「……今余計な事考えてただろ。」

「ギクツ、そんな事「ピシッ！」はうつ！」

「まだ反省が足りないみたいだな。バカは叩かないと直らないか。」

「バ、バカじゃないもん！」「ピシッ！」「ビシッ！」「ッ！私がバカでしたー！バカでごめんなさい！」

だから、もう許してくださいーいー！！

第2?話 狸と兎(後書き)

一分前に書き終わった……ギリギリです。
なので今回はQ&A無しです。

第30話 スカウト

幻想郷、迷いの竹林にて

「ほら、着いたぞ。」

「ようやく帰ってこれたわね。」

「じゃあ、私も帰るからな。全く、お前もここの住人なら、竹林の歩き方くらい覚えろっての。」

「はいはい。それじゃあね。」

「ああ、じゃあな。」

私をここまで送ってくれた妹紅は、そう言い残して去っていった。旅行？前よりも若干態度が柔らかくなったと感ずるのは、決して気のせいじゃないだろう。

あの子は父親の敵として私を恨んでるけど、私はあの子に負の感情を持っていないから、友人として付き合い合うのも悪くないと思ってる。今のような殺し合いの日常も、それはそれで楽しいんだけどね。

「何だかんだで旅行の効果はあったのかもね。」

誰に聞かれるとも無いひとり言を呟いてから、私は自分の屋敷永遠亭へと入っていく。廊下を歩いていると、向こう側から妖怪鬼が一匹歩いてきた。

「へ？ 姫様じゃないですか！？ お帰りになられたんですか？ いやー、姫様がいなくなつたと聞いて心配してたんですよ。」

そうやって調子のいい事を言つて近付いてくるのは、地上の兎のまとめ役、因幡てゐである。

「ふふつ、ありがとう。でも、私がスキマから聞いた話だと、そもその原因は貴方達の訴えだつたらしいじゃない？」

「ギクツ！ いや、確かに代表は私でしたけど、言い出したのは別の兎ですからね。鈴仙とか鈴仙とか鈴仙とか……。」

凶星を突かれながらも即座に仲間を売る兎詐欺を見てみると、帰つてきたんだなあとと思う。とりあえず、この嘘は見逃してあげよう。何故なら、その方が面白いから。

「そう。教えてくれてありがとう。」

「いえいえ。私はいつでも人の言う事を良く聞く、幻想郷で最も賢くて可愛い兎ですからね。当然のことをしたまでですよ。」

歩いて行くてゐを見ながら、これからの暇潰しについて考える。

（とりあえず、騙された振りをして鈴仙をお仕置き。てゐは永琳の薬の実験台でいいかしらね。）

そんな事を考えながら廊下を歩いていると、いつの間にか目的地永琳の部屋に辿り着いていた。

「永琳、今帰つたわよ。」

「あら、お帰りなさい姫様。」

二年間屋敷を空けていたというのに、帰ってきた返事はそれだけの軽いものである。永遠を生きる私達にとっては、二年とはその程度のものなのだ。

「随分早いお帰りでしたね。旅行は楽しめましたか？」

「最初は異世界なんてどうかと思ったけど、それなりに楽しめたわよ。月からの追っ手も心配しなくていいから気楽だったわ。」

「それは何よりです。私も賛成した甲斐がありました。」

「それでね、旅行先で面白い物を見つけたんだけど……。」

そう前置きして、私は永琳に旅先で出会った面白い子供の話をする。

初めは相槌を打っていただけだった永琳も、その子が持っていたマジックアイテム、「夢幻珠」の話になると、途端に食いついてきた。「月の頭脳」は伊達じゃない。

「成る程……、それは中々興味深いですね。」

「でしょ？ で、それを聞いた永琳はどうする？」

「おそらく姫様が考えていることと同じですよ。……うどんげ。」

永琳の決して大きくない呼びかけに応えて向こうから走ってくるのは、鈴仙・優曇華院・イナバ。ここ永遠亭の妖怪兔の中で、唯一

の玉兔だ。

「呼びましたか、師匠…… っ て姫様！？ お帰りになられていたんですね！」

「いいえね。」

「うどんげ、貴方にお使いをお願いしたいの。行ってくれる？」

そうやって、永琳は鈴仙に詳細を話し始めた。鈴仙は良く分かっているみたいだけど、使いの役割くらいは果たすだろう。

「じゃあ、お願いね。」

「はい。行ってきます。」

「あ、ちよつと待つて。」

出かけようとしている鈴仙を見て思い出したことがあったので、声をかけて止める。急ぐような用事じゃないし、今暇潰しをしても問題無いわよね。

「さつきてゐに会つて聞いたんだけど、
兔達が直訴してしたきつか
けて、貴方だったのね。」

「へ？ えええええええええ！」

「いつも言う事を聞いてくれるから安心してたけど、内心じゃそんな事を考えてたなんてねえ。」

「そ、そんな訳無いじゃないですか！ てゐは嘘をついてるんです！ 信じて下さい！」

私の目の前にいるのは、赤い目に涙を滲ませながら必死に無罪を主張している哀れな兎。

永琳は全てを察して傍観姿勢。その目は「戯れもほどほどに」と語りかけてきた。

そして、部屋の外からいつの間にかこちらを覗きこんでいるのは、鈴仙を陥れた張本人のてゐ。

大方、鈴仙がどんな目に遭うのか見に来たんだろうけど、その後自分に降りかかる運命には気付いていなさそう。

「嘘つきは嫌いよ。鈴仙、ちょっとOHANASHIしようか？」

「あ……、あ……、あああああ……！」

ピチューン……！！

陸士108部隊オフィスにて

「ゲンヤ隊長、書類整理終わりました。」

「おう。んじゃ、次コレ頼むわ。」

「はい。って多ー！ これ全部ですか！？」

「提出期限は今日中だ。じゃ、頼むぞ。」

「はい……。」

皆さんこんにちは、キャラ・シエルです。

ゲンヤさんに強制送還された私が受けたのは、「尻叩きの刑」でした。

100発で終わらず、200発が終わってもまだゲンヤさんのタイン。300を数えたあたりで、ようやく開放されました。

それから一週間くらいの間は、お尻がヒリヒリしてまともにお風呂に浸かれませんでした。

仕事の方は、今まで通り民間協力者として働くことになったんですけど……。

「ただいま、キャラ。……凄い仕事量だね。」

「お帰りなさいギンガさん。そう思っのなら手伝ってくれませんか？」

「あははは……、ごめんね。父さんから止められてるから。」

「分かってますよ……。言っただけです。」

出勤から帰ってくるギンガさんに、それを迎える私という構図も、最近ではお馴染みです。

事件以降、ゲンヤさんに。

「しっかり反省して責任を取るまでは出勤禁止な。」

と言われてペスカトーガを取り上げられ、延々と書類を処理する毎日です。

幸い夢幻珠はデバイスと思われて無いので取り上げられませんでしたが。

これとマルチタスクを利用して、仮想空間での戦闘シミュレーション（対戦相手は師匠達のデータ）を仕事中にしているのは内緒です。

そして、今日も書類の山に頭を悩ませるのかと思っていたんですけど

『こんにちは、キャロ。』

「あれ、フェイトさんですか？ 久しぶりですね。」

『うん。ちょっと今日はキャロに用事があったね。時間、いいかな？』

フェイトさんから連絡がありました。一体何の用ですかね？

私は思わず自分のデスクに目を向けます。これは……マズいかな？

「ちょっと待ってくださいね。ゲンヤ隊長と相談してきます。」

「と、いうわけなんですよ。」

「……お前、今度は何やった？」

「ひどっ！ 私ってそんなに信用無いですか？ ……とにかく、そういう訳なので、渡された書類を処理しきれないんです。」

（出来るなら、代わりに処理してください！）

「しょうがないな。分かったよ。明日までに延期してやる。」

（反省用にさせてるだけの書類だから、本当は期限なんて無いしな）

「ありがとうございます。それでは、今からフェイトさんの所に行ってきます。」

（やっぱし、そう上手くはいかないか。はあ……。）

フェイトさんは本局にいるとの事なので、その食堂で会うことになりました。

食堂に到着して辺りを見回すと、端の方に座っていたフェイトさ

んが見えたので、私もそこに移動して座りました。

「こんにちは、フェイトさん。こうやって会うのは久しぶりですね。」

「そうだね。はやてから色々聞いてるよ。」

「あはははは……。」

色々、というのは次元世界ぶらり一人旅の事だったり、アギト救出だったりします。アギトの事はまだ後始末が完全には済んでいないので、口に出すのは少々不味いです。フェイトさんが色々、とぼかしたのも、その辺が理由だったりします。

「相変わらず元気にやってるみたいだけど、みんなに心配かけないようにね。」

「分かってますよ。」

もうこれ以上無い位に分かりました。尻叩きは二度とコメンです。

「それで、今日はどうしたんですか？」

「あ、そうだったね。それは今から話すよ。……キャロ、私達と一緒に働いてみる気は無い？」

「へ？」

「えっとね……。」

フェイトさんの話によると、はやてさんが自分の部隊を持つために色々動き回っているそうです。

空港火災の時に感じた初動の遅さ、それを解消するための部隊を作り上げるのが目標で、今は構想の段階。フェイトさんはメンバー集めを手伝っているそうです。

これって、六課の事ですよね……。

「キャロには、その部隊のフォワードメンバーになって欲しいんだ。厳しい仕事にはなると思うけど、経験は積めるし、給与とかの待遇も今よりは上がると思う。どうかな？」

「……それって、管理局入りしないと駄目ですか？正直、民間協力者の方が色々身軽なんですけど。」

「出来ない事は無いと思うけど、それだと給与はあんまり変わらないかも。」

「そうですか……。」

「うーん……、どうしましょうか？元々JS事件には対応するつもりでしたけど……。」

目の前にいるのは、返事を待っているフェイトさん。今か今かと答えを待っています。

考えた末、私が出した結論は

「すいません。お断りします。」

第30話 スカウト（後書き）

だが断る（キリッ

断っちゃいました。どうするつもりなんでしょうこの子w

以下はQ&Aです。

Q・てゐはどうなった？

A・鈴仙お仕置きの際の流れ弾（故意）により気絶。そのままえーりんの薬の実験台になりました。

Q・フェイトはキャラの入局に反対じゃないの？

A・フェイトの中でのキャラは、辛うじて守るべき対象ではあるけどか弱い子供ではありません。六課に誘った理由の一つに、いつでも模擬線できるから、っていうのもあるかもしれませんね。

Q・お仕置きするとき、キャラはお尻を出されたのですかそれともスカートをはいたままですか

A・ダイレクトアタックです。

Q・キャラはアギトを助けるためだとか適当に嘘をつけないのでしょうか

A・キャラ自身、悪い事をした自覚があるので、連行にも抵抗せず、甘んじて罰を受けました。

Q・まあ、散々心配させたのだからお仕置きぐらいは甘んじて受けるべきですね。

A・同感です。

罰つていうのは、ある意味許しを得るための儀式ですからね。お互いのわだかまりを無くす為にも、きっちり受けた方がいいです。

では、また次話で。

第31話 脱二ト計画

「そっか。駄目ってか……。」

「うん。ごめんね、はやて。」

交渉をお願いした友人によると、キヤロは新部隊への参加を断つたらしい。

交渉が失敗した責任を感じているのか、通信機の方このフェイトちゃんは申し訳無さそうに謝っている。まあ、相手は「あの」キヤロやし、一筋縄ではいかんやるなあ。

「ええよええよ、フェイトちゃんが悪い訳やないし。んで、何であかんかったん？」

「うーん……、それがね、「今の話だけだと詳細が分からないのでだつて。」

「そっか……、フェイトちゃんはどの辺まで話したん？」

「はやてが部隊メンバーを集めている事と、後は参加した際の待遇、かな。」

「うーん……。フェイトちゃん、キヤロは私に任せてくれへんか？細かいことの説明とか私にしか出来へん事もあるし。」

「助かるけど……、大丈夫？」

「ええてええて。人材集めは元々私の仕事で、それをフェイトちゃんに丸投げしてたようなもんやしな。むしろ感謝するのはこっちの方やで。」

『ありがとう、はやて。』

「私に任しとき。んじゃ、またなー。」

フェイトちゃんとの通信が終わった私は、早速ゲンヤさんに連絡を入れる。

機動六課にはレリック事件に対応できるように、一部隊としては過剰ともいえる戦力を集める必要がある。

リミッターによる裏技、伸びしろのある新人の採用など、それこそあらゆる手を使ってでも。

あの年で豊富な実戦経験を持ち、アウトロー時代にはフェイトちゃんを何度も出し抜いた逸材であるキャロは、是非身内に入れておきたい。

もしゲンヤさんの賛成が貰えたら、目的の半分は達成できたようなものや。

フェイトちゃんは良くも悪くもまっすぐやし、性格上、こういう外堀から埋める真似は出来へんからなあ。

「あ、ゲンヤさんですか？ 私です、はやてです。実は……。」

翌日 陸士108部隊オフィスにて

「という話が、昨日子狸からあった。」

「断ったのは昨日なのに、行動早いですねー。で、ゲンヤさんは何て？」

もしゲンヤさんに賛成されたら厳しいですからね。それでも突っぱねるつもりですけど。

「「キャラの好きにさせる」と言っておいてやったよ。俺は強制しないからな。」

「そうですか。ありがとうございます、お父さん。」

「こんな時だけ調子のいい事言いやがって。で、何で断ったんだ？」

「それは……。」

「俺達に遠慮して、とかなら、別に気にしなくてもいいんだぞ。」

「そういう訳じゃないんですけど……。」

「ごめんなさい。言えない事が多すぎます。」

「……まあいい。それで、あの子狸が直接話をしたいそうだ。そこでもう一度しっかり考えて返事をしろ。」

「はい。分かりました。」

「っと、話は以上だ。今日はコレ全部な。」

そう言つて渡されたのは紙の束。最近すっかりお馴染みとなった光景です。

「提出期限は今日中だ。がんばれよ。」

「はい……。」

数日後

はやてさんからの呼び出しで、もう一度話をする事になりました。場所は前に使ったバーの一室。既に場所は教えてあるので、先に行つて待つことにしました。

「マスター、おひさー。」

「ん？ 子鬼の嬢ちゃんか？ この前は驚いたぜ、ゲンヤさん所の子だつたんだな。」

「私も驚きましたよ。まさかマスターがゲンヤさんと知り合いだとは思いませんでしたから。」

「お互い様、ってか？ で、今日はどうした？ 家追い出されたのなら、仕事紹介してやるぞ。」

「そんなんじゃないですよ。今日も一部屋お願いします。前に私が連れてきた人が来たら通してあげてください。」

「おう、毎度。注文はどうする？」

「連れが来たら注文しますので、その時お願いします。」

マスターに案内されて、この前話し合いに使った部屋へと移動しました。

そこで30分ほど適当に時間を潰していると、マスターがはやてさんを連れて入ってきました。

「こんにちはー、キャロちゃん。今日はわざわざありがとうなー。」

「こんにちは、はやてさん。」

一緒に来てくれたマスターに飲み物を注文し、それが運ばれてきた後、遮音結界と認識障害結界を張って準備完了です。それから本題に入るまでのしばらくの間、お互いの近況を話し合いました。

「……で、アギトちゃんの事やけどなあ、今はウチで仲良くやってるよ。まあラインとは喧嘩ばっかしやけど。」

「喧嘩するほど仲が良いとも言いますからね。元気でやってるなら嬉しいです。」

「つと、今日はその話をしに来たんとは違うんや。……キャロちゃん、ここに部隊の詳しい資料がある。これ見てもう一度考えてくれへんかな？」

そう言って渡された資料に目を通します。発足目的と、メンバー表と……、これだけ材料があるなら、突っ込んでも不審に思われなさそうですね。

「はやてさん、いくつか質問いいですか？」

「ええで、どんと来いや。」

「それでは……、このメンバー表だと、エース・オブ・エースにフイトさんに、八神家の皆さん、フォワードメンバーは未定みたいですけど……。一部隊としてはかなりの戦力だと思うんですけど、大丈夫なんですか？ 主に保有制限とか他部署からの反発とか。」

私の発言に不意を突かれたのか、思わず息を呑むはやてさんがいました。大方、待遇面の質問が飛んで来ると高をくくってたんでしょうね。

「キヤロちゃん、保有制限とか良う知ってたな。そこは裏技使ったのかできるんや。他の部署との調整は、頼りになる推薦者もいるし大丈夫や。」

（いきなりその質問来るかあ……。やっぱ侮れへんなあ）

「裏技、ですか？ 具体的には？」

「隊長と副隊長にリミッターをかけて、枠内に収まるようにするんですよ。苦肉の策やけどな。」

ああ、やっぱりそうなんですな……。

「じゃあ、次の質問、いいですか？」

覚悟してくださいね、はやてさん。

「推薦者の欄ですけど、リンディー提督にレティ提督、聖王教会の騎士カリム、そうそうたるメンバーですね。」

極めつけは、これに加えて三提督ですからね。

「そうやる？ 後ろ盾ならちゃんとしてるから安心しい。」

「そうですね。正直言って、一部隊に対する後ろ盾とは思えない位に。あと、地上の人間が推薦人に入っていないのも気になります。」

……何か、裏があるんじゃないですか？」

「……………」

「はやてさん、もし隠していることがあるのなら、正直に話してくださいませんか？ じゃないと、私も腹を割って話せませんから。」

私が確信を持って問いかけると、はやてさんは考え込んでしまいました。恐らくは、話していいものか迷ってるんでしょうね。

「キャロちゃん、今から話す事、誰にも話さへんって約束できるか？」

「大丈夫ですよ。裏社会にいた事のある人間っていうのは、大抵口

が堅いですから。」

例外はいますけどね。

そう前置きして話してくれたのは、新部隊発足の真の目的。騎士カリムの予言に出た地上本部壊滅と管理局崩壊のシナリオ。それに対応するための戦力の確保と育成。

「地上のお偉いさんに、この手のレアスキルがお嫌いな人がおつてな。私ら海の人間でどうにかするしかないんや」

「私、今地上部隊所属なんですけど……。」

「それでも民間協力者やったら、組織に捕らわれず動けるやろ？だから、もう一回考えてくれへんか？ キャロちゃんの力は、これから先絶対必要になると思うんや。」

はやてさんが真剣な顔で頼んできます。私はそれに頷き

「だが断る。」

「へ？ …… ちょおおおおおおお！！」

一瞬、鳩が豆鉄砲喰らったような顔になったはやてさん。それでもすぐに突っ込んでくる辺り流石です。

「私めっちゃシリアスしてたやん！ 今の明らかにOKしてくれる場面やん！ 空気読んでえな！」

私の最も好きな事の一つは、明らかにOKしそうな場面でNOと言ってやることなんです。

「まあまあ、落ち着いてくださいはやてさん。」

「これが落ち着いてられるかつちゅーねん！ 冗談で言ったのなら怒るで！」

「別に冗談で言ったわけじゃないですから、落ち着いてください。はやてさんがそこまで話してくれた以上、私も正直に話しますから」

全部は言いませんけどね。嘘も混ぜますし。

「はやてさん、今から私が話す事、全部誰にも話さないって誓えますか？」

「ええで。二人だけの秘密や。」

驚くでしょうね、はやてさん。

「実ははやてさんよりも先にその情報を掴んでた、って言うたらどうします?」

「へ? ちよ、それホンマか!？」

「話は最後まで聞いてくださいね。去年あった空港火災、覚えてます。」

「うん。私が部隊作るきっかけになった事件やからな。」

「じゃあその原因が、ロストログア「レリック」と、それを持ち出そうとした戦闘機人によるものっていうのは知ってました?」

「な!!」

「あの時、私は偶然その犯人と会ってしまったんですよ。幸い、こっちが子供だと油断してくれたので、不意について気絶させて記憶を覗きました。アシがつくといけないので、その人はそのまま記憶処理して帰しましたけどね。」

本当は原作知識なんですけど、チンクさんを利用しましょう。

「あの時、そんな事があったんか……。」

「この件は本当に秘密にしてくださいね。「向こう側」に情報が漏れるのは嫌ですし、なにより、ゲンヤさんが心配しますから。……」

で、ここからが本題です。はやてさん、貴方の目的は、「レリック事件とそれに付随する予言に対応できる戦力を集める事」でいいんですよね？」

「うん。そうや。」

「だったら、私の事は捜査協力っていう名目で、貸し出しとかで済ませればリミッターにお得なんじゃないですか？」

「あ。」

そう一言だけ発して、はやてさんフリーズしてしまいました。

「ひょっとして、その方法は気付いてなかったりします？」

「へ？ そんな訳ないやろ。ちゃんと考えとつたよ。わはははは……。」

これは、絶対気付いてませんでしたね……。

要するに、私のポジションは原作におけるギンガさんと同じという事です。

「私の場合、既にある程度鍛えられてますから教導受ける意味は薄いですし、戦闘能力もどつちかという個人戦向きですからね。チームに入るのには向きません。」

さらに言うと、私がいることでティアナさんのコンプレックスを

余計に刺激する事になりますからね。和解イベントが起きるまでは、あまり関わらない方がいいでしょう。

「言われてみればそうやけど……、だとすると、空いた分はどうやって補うか……。」

「そこで話は変わるんですけど、アギトちゃんって、もう魔導師登録させていますか？」

「へ？ それは、まだやけど……、まさかキャラ！？」

「あくまでもアギトちゃんの意味優先ですけどね。あの子ああ見えて補助タイプの魔法得意だし、役立つと思いますよ。私の代わりに考えてみたらどうですか？」

「そうやな。あの子が賛成してくれるんやったら早速魔導師登録して「ストップ！」へ？」

「魔導師登録はしないで良いです。その代わりデバイスとして登録して、空いた分の保有枠で、アギトちゃんと最もユニゾン相性が良い人をリミッター無しで動けるようにしてあげて下さい。自由に動けるSランカー一人いるだけでも、かなり変わりますからね。」

シグナムさんの事ですけどね。

あの人原作だとニートなんていう不名誉なあだ名つけられましたからね。

持ち腐れは勿体無いです。

「キャラ……。」

「ん？ どうしました？」

はやてさんの様子がおかしいです。どうしたんでしょうか？

「アンタ……、天才やー！」

「へ？ ちょ、はやてさん！？ ああああああー！」

いきなりはやてさんが肩を揺らしてきました。興奮してるのか止めるように言っても聞いてもらえず、数分して落ち着いた頃によりやく開放されました。

「いやー、最初はどうかやってキャロちゃん取り込もうか考えてたけど、言われてみると、そっちの方が戦力的には凄い事になりそうやなあー。ありがとな。」

「やっぱりそうでしたか……。じゃあ、その線をお願いしますね。」

「任しとき！ 最初の目的とは全然違う結果になったけど、私的には大満足や！」

そう言い残して、はやてさんは意気揚々と帰っていきました。

「とりあえずは、これで大丈夫かな。」

『ですね。私達も帰りましょうか。』

既に会計は済ませてあるので、そのまま帰ります。

「原作開始まであと二年。ワンマンアーミー宣言した以上、それまでにきっちり実力をつけないとね。」

『そうですね。頑張りましょう。』

さあ、まずは書類仕事だ！！……、はあ……。

第31話 脱二一ト計画（後書き）

誘いを断りつつアンチにしないのは骨が折れました。

キャラ不在の間の戦力低下は、シグナ無双で何とかしてもらいます。
……ゼストさん、ごめんなさい。主に死亡フラグ的な意味で。

以下Q&Aです。

Q・はやてに一部バラしたけど、大丈夫なの？

A・物的証拠が無いので、いくらでも知らんぷりできます。はやてもそれを理解しているので、あえてスルーしてます。

Q・六課入りを断った一番の理由は？

A・ティアナ暴走を促進するリスクがやばいからです。当初六課ルートを考えてたんですけど、ティアナが自主練する辺りで

スバル「妹のキャラはあんなに強いのに、私は……。」

エリオ「同年代のキャラはあんなに強いのに、僕は……。」

と、三人揃ってティアナと同じ状態になって収集がつかなくなりまして。

キャラも同じ結果をシミュレートしたので、回避のために拒否しました。

Q・フェイトもいきなりキャラじゃなく普通は保護者役のゲンヤさ

んに話しを通してからではないでしょうか

A・外堀から埋めることになる恐れがあったので、キャラの了解を得てから話すつもりでした。この場合、どっちが正しいんでしょうね？

Q・幻想郷のほうは、どこまで異変が終わってるんですか？

A・とりあえずは星まで終わってる、という事にします。今の所異変を絡める気は無いので、あまり重要ではないかもです。

では、また次話で。そろそろ本編かな？

第32話 久しぶり

「ゲンヤ隊長、ただいま戻りましたー。」

「おう。どうだった？」

「テロリストさん達は全員捕獲、後の手続きはギンガさんに任せました。」

「ご苦労だったな。」

「いえいえ、好きでやっている事ですから。」

皆さん、お久しぶりです。キャロ・シエル、ついこの間8歳になりました。

あの交渉の後、私の提案通りアギトをフォワードの一人に任命、決定時期がエリオよりも早かったので、ライトニング3になりました。

それに伴い、彼女とのユニゾン相性が高いシグナムをリミット無しで保有するようになったと、はやてさんが嬉しそうに話してくれました。はやてさんとはあれ以来、ちよくちよく会って話す仲です。内容は主になのはさん達に言えないようなブラックな話。あの人、私を何だと思ってるんでしょうね？

私の周りはというと、反省開始から一月後、やっとゲンヤさんから許しが貰えてギンガさんと一緒に出撃できるようになりました。マフィアへの捜査とか、テロリストへの実力行使等で実戦経験を積む毎日です。

なんですけど……。

「ゲンヤさん。」

「何だ？」

「前衛に回してくれませんか？」

私に割り当てられたポジションはフルバックス。ぶっちゃけ、ブリストかけてから敵弾を回避、隙を見て射撃くらいしかする事が無いので、接近戦とかの経験値が積みません。ギンガさんや他の隊員とチームでやっている以上、それが効果的なのは確かなんですけど、前衛の修行が仮想トレーニングだけというのは不味いです。

「後衛ばかりだと経験が偏るんです。何とかありませんか？」

「そうは言っても、ウチにお前の代わりが出来る奴がいねえからなあ……。うーん……。」

無茶振りなのは分かってますが、こっちも切実なんです。

「……やっぱり駄目だ。お前一人の我侭で、部隊に迷惑をかける訳にはいかん。」

「そうです「だが」へ？」

「要は強くなればいいんだろ？ちょっと待ってる。」

そう言うと、ゲンヤさんは通信用デバイスを取り出して、どこかに連絡を始めました。ウィンドウが開いた先にいたのは、いつも一

緒に悪巧みをしている友人の姿でした。

『ゲンヤさんやないですか、ご無沙汰してますー。』

「おう。いつもうちのガキが世話になってるな。ちょっと頼みてえ事があるんだが、いいか？」

「へ？ 何ですか？」

「ちょっとコイツ貸すから鍛えてくれ。いずれそつちと一緒に戦うかもしれないからな。」

そう言つて、ゲンヤさんは私の肩を叩きました。

あの会談の後、私はゲンヤさんに、はやてさん達がレリック事件を追っている事、自分もいずれ捜査協力という名目で参加したいという事を伝えました。その際、

「……ま、お前が色々隠してるのは、今に始まった事じゃないからな。」

なんて言われちゃいました。ひよつとすると色々バレてるのかもしれないけど、ゲンヤさんならうっかり漏らす事も無いだろうし、追求されるまではスルーしておきます。

本当はゼスト隊の真実も教えてあげたいんですけどね。ままならないです。

「そうですね……、分かりました。私もキャラちゃんがどれだけ出来るか知っておきたいし、任せといてください。」

それから二人で、私の処遇についての相談が始まりました。

「……なら、私の騎士に教官資格持つてる子が一人いるんで、その子に任せてみます。今は色んな所回って教官してるんで、そこに混ぜてもらえるようにします。」

「おう、それで頼む。じゃあな。」

「いえいえ、お互い様です。」

話が終わったみたいです。明日から訓練生に混じって訓練ですか……。

しかし、ヴォルケンスに教官資格持つてる子なんていましたっけ？

次の日

「うーん、誰だったっけ……。」

迎えに来てくれるという話なので、私は今、陸士108部隊のオフィスでお茶を飲みながらのんびり待っています。あ、このお茶渋くて美味しいです。さすがははやてさん、日本人の心が分かってま

すねー。

「ゲンヤ隊長、八神ヴィータ三等空尉が到着しました。」

「おう。こっちに通してくれ。」

あ、そうそうヴィータさん。そういえば教官だったんですね。すっかり忘れてました。

しばらくしてオフィスに入ってきたのは、私と同じくらいの背の赤髪の少女。そのまま真っ直ぐゲンヤさんの所へと歩いてきます。背筋を張って堂々としている様は、さすがに騎士といった所ですね。

「本局航空隊1321部隊所属の八神ヴィータ三等空尉です。マスターはやてがいつもお世話になっています。」

「よく来てくれたな。ま、楽にしてくれや。」

「はい。それで、鍛えて欲しい人材がいる、という話でしたが……。」

「ああ……、キャロ！」

お？ 呼ばれましたね。

「はい。何ですか？」

「今日からお前が世話になるヴィータ三等空尉だ。挨拶しておけ。」

「はい。初めましてヴィータさん。キャロ・シエルです。ここ陸士

108部隊で、民間協力者としてお手伝いさせてもらってます。」

そう、ヴィータさんとは何気に初対面なんですよね。

はやてさんとは何度か会う機会はあるのに、ヴォルケンズの皆さんとは、今まで縁が無かったりします。

「じゃ、後は任せたからな。」

「はい。ほら、行くぞ。」

ヴィータさんに連れられて、私達はオフィスを後にしました。しばらく歩いていると、ヴィータさんの方から声を掛けてきました。

「キャロ、だったな。」

「は、はい。ヴィータ教官。」

「はやてからお前の实力を見て欲しいって頼まれたんだけど……、ランクは？」

ランクですか？ えーっと……。

「魔導師ランクは認定試験を受けてないので詳しくは分からないですけど、魔力量はC程度です。」

「Cか……、うーん……。」

ヴィータさん悩んでいます。まあ、嘘なんですけどね。

師匠二人による修行により運用効率が大いに上がった結果、最近

ようやく「境界を操る程度の能力」でスキマ以外の使い方が出来るようになってきました。

それを使って魔力と霊力の境界を操作し、魔力を霊力に変換して溜め込んでいます。

リミッターだとバレるけど、これなら簡単に魔力量誤魔化せますからね。

ただ、今の所効果が及ぶのは自分のみ。他人に使えば一気に魔力切れにできるんですけど、そう上手くはいかないです。

実際の魔力量はA⁺。霊力や妖力も足すとSランク手前のA A A⁺。

やっとここまで来れたかと思うと同時に、魔力のみでS超えしている三人娘の恐ろしさを再確認しました。能力使えば互角程度に戦えるとは思うんですけど、地力の差は重要です。

「仕様が無い。はやてからの頼みだし、それなりに出来るくらいには鍛えてやる。」

（Cか……。はやてが戦力として期待してるらしいけど、大丈夫なのか？フェイトから何度も逃げ切ったっていう話も怪しく思えてきたぞ。）

「ありがとうございます。それで、今日はどちらへ？」

「今日はいつもとは少し違ってな。陸士の訓練校で一日だけ教える事になってるんだ。」

そーなのかー。ん？ 訓練校？ まさか

数時間後

「本日お前らを教えることになった戦技教官のヴィータだ。ビシビシ指導していくから覚悟しろ。」

「「「「はい！」「」「」」」

「それと、コイツもお前らと一緒に訓練受けるから、面倒見てやってくれ。」

「はい。陸士部隊で民間協力者をしているキャロ・シエルです。今日は宜しくお願いします。」

そう言つて頭を下げます。

目の前にいるのは、今年卒業予定の訓練生達。それに混じって青髪ショートの私の家族 スバルお姉ちゃんが、驚いた顔でこっちを見てきます。隣のツインテはティアナさんですかね？

「へ？キャ、キャロ！？何で！？！？？」

スバルお姉ちゃん、気持ちは分かるけど静かにしてください。

第32話 久しぶり（後書き）

久しぶりなのは長期休暇にしか会わないスバルの事でした。
以下Q&Aです。

Q・ゲンヤさん、「ウチにお前の代わりが出来る奴がいねえからなあ」なんて言っておきながら、キャラを預けるのは矛盾してませんか？

A・矛盾してますね。

本音を言っと、キャラが後衛なのは、色々目立たないようにするための配慮です。キャラ無しでも部隊は機能します。じゃないとキャラ反省の間、仕事になりませんし。

はやてに預けたのは、どっちみちある程度バレルのを想定しての事です。

Q・スバルはキャラの事どこまで知ってるの？

A・元犯罪者で保護観察だった事、今はギンガと一緒に働いてる事、そして自分より強い事ですな。

チート技能に関しては、考えるのを止めて「まあ、キャラだし」で納得しています。

第33話 リトルデューパー（前書き）

今回はスバル視点メインです。

第33話 リトルデューパー

「へ？キャ、キャロ！？何で！????？」

いきなりの出来事に理解が追いつかず、私は思わず声を上げてしまった。

私が所属しているのは陸戦魔導師の訓練校。たまに本職の教官が来て指導してくれる日があり、今日はそれだ。

今日来てくれるのは、雑誌でも取り上げられている有名人、ヴォルケンリッターのひとり、ヴィータ教官だ。そんな人が来てくれると知って驚いたけど、なぜかその隣に私の妹分がいるのを見て、さらに驚いてしまった。

「ちよつとスバル、静かにしなさい。」

「へ？ あ！ごめん、ティア。」

ティアの注意でようやく現実に戻ってこれたけど時すでに遅し。同級生の注目を集めてしまっていた。ヴィータ教官はこっち睨んでるし、キャロはいつもの笑顔を浮かべていた。アレは内心呆れてるか大爆笑のどっちかなんだろうなあ……。

「……、ゴホン！それではヴィータ教官、今日はこいつらをお願いします。それと、キャロ君だったね。君は生徒達に混じって訓練を受けてください。」

担当教官が場を仕切ってくれたおかげで、やっと視線から開放された。

うつ、恥ずかしかった……。

「で、何でキャラがここに？」

「いや、実力付けたいってお願いしたら、いつの間にかこうなっていました。」

「何というか……、変わってないみたいで安心したよ。」

「それって、どういう意味ですか？」

担当教官の話が終わると、キャラがこっちにトコトコと歩いてやってきた。

話によると、悪戯目的で来たわけではなさそうだけど……。

「スバル、この子が前に話していた、あなたの妹分？」

「あ、ごめんティア。うん、そうだよ。」

「ふーん……。初めまして、私はティアナ・ランスターよ。」

「ティアナさんですね、初めまして。いつもスバルさんから話は伺ってます。なんでもツンデレさんとか。」

「ちょ、キャラ！？」

「スバル！アンタは余計な事ばかり言って！」

「ご、誤解だよー！だから梅干しは駄目えー！ー！ー！ー！」

ティアナに頭をグリグリされながらキャロの方を見てみると、そこには真っ黒な笑みを浮かべた私の妹分。今日も絶好調みたいでなによりだ。はあ……。

「それじゃ、私は行くから。」

「アレ？ティアナさんは一緒にやらないんですか？」

「近接型と後衛型でカリキュラムが違うのよ。一緒にする訓練もあるけど、今からするのは別々なの。」

「そうなんですか。」

「で、アンタはどっちなの？」

「うーん……、じゃあ、今日は近接で。」

「「今日は」って……。」

（まだ自分のタイプも決まってる？まあこの年じゃ仕方ないか。）

キャロの一見適当にも聞こえる発言に、ティアは顔をしかめてしまった。

……違うんだよティア。その子本当に万能型なんだよ。

キャロも気付いてるのに訂正する気無いし。この子誤解されてるのを利用して遊ぶからなあ……。

「……、まあいいわ。スバル、私は行くから、アンタが責任もってこの子の面倒見てあげなさい。」

そう言つて、ティアは私にキャラを任せて後衛チームの方に行つてしまった。

私達二人も、前衛チームに合流して準備に入る。

「へえ、スバルの妹さんなんだ。」

「義理ですけどね。それで、これから何をするんですか？」

「ミット打ちだよ。片方が攻撃役、片方がマツトを構えて防御役。防御役は吹き飛ばされないように踏ん張るんだ。」

「へえ、面白そうですね。」

キャラはというと、早速同級生達と打ち解けているみたいだ。本性知らないと、ただの可愛い子供だしなあ……。

「スバルお姉ちゃん、一緒にやりませんか？」

「へ？……いや、遠慮しておくよ。折角だから、今日始めて会った人と一緒にした方がいいんじゃない？」

「それもそうですね。……チツ。」

危ない危ない、もう少しでフラグが立つ所だった。油断してたらコレだもんなあ……。

訓練に使うマットを用意して、私達は外に出る。

訓練を開始すると、私のペアをしてくれてる同級生が話しかけてきた。

「なあナカジマ、さっきのはちょっと冷たかったんじゃないか？」

「へ？何の事？」

「妹さんの事だよ。あの子、お前とやりたがってたんじゃないか？」

そう言いながら指差した先にいるのは私の妹分。どうやら攻撃役みたいだ。

「そうは言ってもねえ……、あの子の力を見たら、そんな気起きなくなるよ。」

「は？お前なに言ってる」

ドゴオオオオオオオオン！！

轟音により、台詞が不自然な所で途切れてしまった。

音のする方向にいたのは案の定、マットの下敷きになって目を回しているクラスメイトと、それを見下ろしているキャロだった。

周りのチームメイトはまさか子供がそんな事をしたとは思えず

「あれ？コイツ転んだのか？」

「相手が子供だから踏ん張る力加減間違えたんじゃないか？」

等と言っている。近くで様子を見ていたヴィータ教官は気付いたみたいだけど、それでも認められないのか首をブンブン振っている。

「へ？今のつて？」

「さっき言い忘れてたけど、あの子、私の師匠的存在でもあるんだよね。」

「はあ？それ嘘」

ドゴオオオオオオオン！！

あ、二人目吹っ飛ばされた。

「嘘に聞こえるだろうけど本当の話だよ。魔力量はCランクなんだけど、格闘戦能力はギン姉より上。もう一人の、私の超えたい目標なんだ。」

「……マジか？」

「マジです。」

「本気でいきますね。『藍、モード「龍」』」「撃符「大鵬拳」！」

ドゴオオオオオオオン！！

あ、ヴィータ教官が吹っ飛ばされた。

「それでは、今から合同訓練に入る。今日の内容はCだ。」

「えええええええ！」

正午の休憩を挟んで午後の訓練が始まるうとしてただけど、担当教官の発言により、クラスメイトの半数近くから非難の声が上がった。

「スバルお姉ちゃん、こつて何ですか？」

「こつていうのは、たまにしかやらない特別訓練だよ。おおかたヴイータ教官が来たから張り切ってるんだろぅね。」

通称「合法リンチ」。射撃班と近接班に分かれて、射撃班はひた

すら射撃、近接班はひたすら防御か回避を繰り返す訓練。

射撃班にとっては動く的を狙うだけの訓練だけど、近接班にとっては魔力切れになるまで凌ぎ続けるというハードな訓練だ。

「へえ、そうなんですか。」

「うん。それで、キャラはどうするの？」

しかも、今日はキャラがいる。もしキャラが射撃班に回ったとしたら……、考えたくない。

「……そうですね。今日は近接系の訓練がしたいので、近接班に入ります。」

ほっ……。

そして訓練が開始される。

射撃班から打ち込まれる魔力弾を、私はローラーブーツとウィングロードを利用して大きく回避。避けきれないのはシールドで防いでいく。たまに「ローラーってずるくね？」って言うてくる人がいるけど、これが私のスタイルだ。

さて、キャラはどうしてるかな？

キャラの方を見ると、最小限の動きで回避し続ける妹分の姿があった。

当たったかと思うけど当たっておらず。精々バリアジャケットにかすってチツ、チツ、という音が鳴っているくらいだ。

「グレイズ」っていう技術らしいけど、そんなのどこで覚えたんだろう？

開始から数分経っても一度も被弾しておらず、最初は遠慮していた射撃班の面々もキャロに向ける魔力弾の数を増やしていった。それでも涼しい顔で回避し続けるキャロは、ここで特大の爆弾を投下した。

「この程度ですか？ Easyモードが許されるのは小学生までですよ。」

（これなら師匠単体の方がよっぽど脅威ですよ……。）

この発言にプライドを刺激された射撃班は何としても一発当てるため、他の人を狙っていたチームメイトを巻き込んで一致団結し、キャロに向けて射撃を始めた。多数の魔力弾が殺到していく様は、まさに弾幕というに相応しい。でも

30分後

「な、何で一発も当たらないのよ……。」

「まさか俺たちの方が先に息切れするなんて……。」

私達の目の前にいるのは、魔力切れでへたり込んだ、ティアを初めとする射撃班。

この訓練は近接班の全員リタイアで終了するのが普通であり、射撃班が根を上げるのは前代未問である。そのキャラはというと

「良くやった、嬢ちゃん！」

「わわわわわ！下ろしてくださいー！」

近接チームに胴上げされていた。

途中からキャラロに向かって攻撃が集中したため、こっちは殆ど疲労していない。

いつものにされるだけだった私達にとって、今日のキャラロは救世主的存在だ。

さっき吹っ飛ばされた人達には悪いけど、本当に助かったよ……。

こうして今日の訓練は終了した。

この事が刺激になったのか、それから近接班、射撃班ともに、より訓練に励むようになった。

その原因となったキャラは、被害にあった人達をメインに「見た目詐欺」「ランク詐欺」「リトルデューパー（小さな詐欺師）」という呼称が広まり、一種の伝説になってしまった。

特に射撃班の成長は進化といってもいい位で、今までは唯の誘導弾だったのが、チーム単位で計画的に弾幕を張ってくるようになり、ほぼ回避不能になってしまった。

私達近接班は回避も出来ず、シールドを切らした瞬間に気絶の運命が待ち構えている。

キャラの置き土産がこんな事になるなんて……、はあ……。

おまけ 八神家

「ただいま、はやて。」

「お帰りヴィータ。で、キャラはどうやった？戦力として使えそうやった？」

「……んだよ。」

「へ？」

「何なんだよアイツは！？接近戦ではパンチ一発で私を吹っ飛ばすし、数十人相手の射撃魔法を30分回避し続けたぞ！！あれでランクとか絶対嘘だろ！」

「ちょ、ちよつとヴィータ落ち着いて……。とにかく、戦力として

は期待できるんやな？」

（ヴィータにここまで言わせるとは……いったい何があったんやろ？）

「……ああ。それは間違い無い、と思う。」

「そっか。じゃあ、これからも頼むな。」

「へ？」

「へ？ってヴィータ、前に説明したやろ？あの子しばらくの間ヴィータに任せるって。」

「……そうだった。……なあ、はやて。シャルはもう帰ってる？」

「今日はまだみたいやけど……、何か用でもあるんか？」

「胃薬処方してほしい。」

「……。」

「……。」

「……、がんばれ、ヴィータ。」

「うわああああああんー！」

第33話 リトルデューパー（後書き）

訓練校でやりたい放題暴れたキャラ。

本当はヴィータとの模擬戦も入れたかったんですけど、後に回しました。

ヴィータの受難はまだ続きます。

以下Q&Aです。

Q・今回の事で、ティアナはキャラにどんな印象を持ちましたか？

A・近接訓練は見えていないので、回避能力だけで判断しました。

キャラはCランクを自称していたので、「私でも努力すればここまで行けるかな？」とプラスに働きました。

あと射撃に関して、命中精度、誘導精度が上がりました。

Q・スバルが原作より賢く見えるんだけど？

A・キャラにはめられ、からかわれ続けた結果、疑う事を覚えたようです。

では、また次話で。

第34話 幼女大戦 〽 桃髪幼女 V S 鉄槌幼女(前書き)

ついに50万PV突破しました！

ありがとうございます！

第34話 幼女大戦 〽 桃髪幼女 vs 鉄槌幼女

「今日の訓練はここまでだ。問題点と反省点まとめて今日中に提出な。」

「…………はい!」

今日も今日とて、ヴィータさんと一緒に訓練の毎日です。

陸士訓練校の一件以来、私達二人で部隊を渡り歩いています。私の仕事はヴィータさんのアシスタントで、訓練中は雑用だったり、シュートイベ이션の時の射撃役をしています。ヴィータさん曰く「お前はあそこに混ざっても訓練にならない」だそうです。

「終わりましたね。じゃあ、今日もお願いします。」

「……分かったよ。手加減は無しだからな。」

なので、ヴィータさんと模擬戦をするようになりました。皆の訓練が終わって訓練場が空いてからが、私の訓練の始まりです。

「準備はいいな? ……アイゼン、セットアップ!」

J a w o h l .

「いつでもどうぞ。……ペスカトーガ、セットアップ! 『藍、モード博麗。サブは「龍」で』」

A l l r i g h t .

『了解です。』

バリアジャケットを展開してお互い空中に飛び出します。一定距離離れた所でお互い停止し、模擬戦が始まりました。

「行くぞ。……アイゼン！」

Schwalbefliegen.

先手を取ったのはヴィータさん。誘導性能のある鉄球が三発、こっちに向かって飛んできます。

私は直前まで引き付けてそれをちょん避け。戻ってくる可能性もあるので、ヴィータさん本体を注意しつつ、そっちも警戒します。

「次は私です。霊符「夢想妙珠」！」

回避でできた隙にお返しのスぺル宣言。スイカほどの大きさの霊力弾が六発、ヴィータさんの方へと向かっていきます。

「チッ、アイゼン！」

Panzerhinder nis.

それに対してヴィータさんは全周囲防御魔法を発動。直後、夢想妙珠が着弾し、ヴィータさんを中心に爆煙が上がります。夢想妙珠は誘導弾なので、ヴィータさんの判断は大正解です。

「おおおおおおー！」

追撃のスぺルを用意しようかと思っていると、煙の中からヴィー

タさんがラケーテンハンマーで突っ込んできました。

「なら……！？くっ！！」

そこで、正面から向かってくるヴィータさんとは別に、さっきから警戒していた鉄球が横から飛んできます。障壁の維持のために三発中二発の制御は手放したみたいですけど、残る一発を利用して、十字砲火を仕掛けてきました。

「でも、返り討ちです！
……霊撃！」

「チツ！」

回避も可能でしたけど、私が選んだのは迎撃。鉄球を吹き飛ばしつつ、ヴィータさんの体勢を崩します。ここでバインドを決めれば

「何度も何度もその手にかかるか！ アイゼン、カートリッジロード！」

Explosion.

ヴィータさんはそこでカートリッジをロード。

ラケーテンの噴射を利用してバインドに捕まる前に離脱し、そのまま私のほうに突っ込んできました。

「これで終わりだ！　ぶち抜けえええええ！」

魔王「天地魔闘」

「封魔陣！」

靈力結界でアイゼンを止める。この強度じゃ抜かれるのは時間の問題だけど

「破山砲！」

その一瞬の隙について妖力を込めた右拳一閃。カウンター気味に腹部に刺さり、ヴィータさんが吹っ飛んでいきます。

「『藍、モード霧雨』……、マスタースパーク！」

即座にユニゾン形態を変更してトドメの魔力砲撃。ヴィータさんは為す術もなく、それに飲み込まれていきました。

「うー……。」

「あのー、ヴィータさん？」

「何だよ、キャラ。」

「そろそろ機嫌直してくれませんか？」

「べ、別に怒ってねーよ！ 帰るぞ、キャラ。」

そう言いながらも明らかに不機嫌なヴィータさん。模擬戦終わった後はいつもこんな感じです。

初めてヴィータさんと戦った時は、突進してきた所を霊撃 バインド 夢想封印でアツサリ決着。

二回目は射撃に専念してきたので全部グレイズして、向こうの魔力が切れてきたあたりで夢想妙珠連発。回避不能なので防御するしなく、魔力切れとともに全弾着弾でピチユりました。

以降も近付けば霊撃、離ればグレイズと誘導弾で、私が勝ちを重ねてきました。

今日はわざとこっちに霊撃を撃たせてから、カートリッジロードして再突撃されました。だんだん対応されてきています。おかげで今まで使わないでおいたネタスペルを使う羽目になりました。コレまだ未完成なだけだなあ……。

「まあまあ、そのうち勝てるようになりますから。」

「慰めんな！ 余計ム力つく！」

その夜、八神家

「……、ただいま、はやて。」

「お帰り、ヴィータ。……今日はどうやった？」

「……。」

「あー、負けたんか……。よしよし、大丈夫やから。ヴィータは強い子やから。」

私はそう言つて、涙目になっているヴィータの頭を撫でてあげる。そんな光景が、ここ最近ではお馴染みやったりする。

「それにしても、ヴィータをここまで追い詰めるとは……。そのキヤロとかいう子供は相当強いんだな。」

「私の恩人だからな。」

「あの見た目からは想像できません。」

そこに声を掛けてきたのはシグナムとアギト、リインの三人。シヤマルとザフィーラはまだ帰ってきていない。

「そうみたいやねえ。戦つてる所はアイゼンの記録映像でした見たことないんやけど、かなり出来るみたいやなあ。」

うーん……。そうや！

「なあ、シグナムとアギトは今度の非番っていつ？」

「私は……三日後ですね。」

「私もシグナムと一緒にだぞ。何でだ？」

おお、グッドタイミングや！

「その日私とリインも有給取るさかい、一緒にヴィータのところに見学に行かんか？前からヴィータの教官っぷりは見てみたかったし、キャラの戦い方もナマで見たいしな。アギトもキャラに会いたいやろ？」

「へ？はやて！？」

「成る程、それはいいですね。」

「私も賛成だ。キャラに会うのも久しぶりだしな。」

「私も会いたいです。」

私の発言にヴィータは驚き、残りの三人は賛成してくれた。後でザフィーラとシャマルにも聞いとかなとな。

「じゃあ、それで決定な。いやー、今から楽しみやなー。」

三日後

「あのー、ヴィータさん？」

「……なんだよ？」

「何で八神家の皆さんが勢揃いしてるんですか？」

「……気が付いたら、いつの間にかこうなってた。」

「そうなんですか……。」

「今日は私ら見学や。よろしく頼むな。」

「シグナムだ。主はやてやヴィータから話は聞いているが、会つのは初めてだな。まあ、宜しく頼む。」

「シャルです。キャラちゃん、今日はよろしくね。」

「……、ザフィーラだ。」

いつものようにヴィータさんと待ち合わせしていると、なぜかはやてさん＋ヴォルケンス＋アギトのフルメンバーでやってきました。これって、何というか

「授業参観？」

「私もそんな気がしてきた。はあ……。」

第34話 幼女大戦 〽 桃髪幼女 vs 鉄槌幼女（後書き）

オリジナルスペカを出したいと思った結果がこれだよー！

……ウィータ乙です。キミの不幸はたぶんコレで終わり、の筈です。
以下Q&Aです。

Q・今回のスペカの詳細を教えてください。

A・魔王「天地魔闘」。

キャラが某魔王を参考に編み出したネタスペル。

霊力、魔力、妖力の同時制御を利用し、攻撃、防御、魔法をワン
アクションで叩き込むカウンター技。

ただし、現状だと非ユニゾン時にも使用できるのが「龍」のスペ
ルくらいなので形態変化の際に若干のタイムラグが発生し、完全な
三連撃ではないです。

では、また次話で。

第35話 授業参観？

前回までのあらすじ

今日もいつものようにヴィータさんの訓練の手伝いをするつもりだったのですが、なぜか八神家総出で見学にやってきました、まる。

「で、どうするんですか？ヴィータさん？」

「……別に、いつも通りすればいいだけだ。」

「って言いますけどねえ……。」

ちらつと訓練場の隅っこを見てみると、そこにいるのははやてさんを始めとする八神家の皆さん。全員が揃っているのはなかなか壮観です。

次に中央に目を向けると、そこには戸惑った様子の部隊員たち。

「おい、何で俺たちの訓練に、あれだけのメンバーがいるんだよ？」

「俺が知るか。でも、ひょっとすると俺達期待されてるのか？」

「いや、それは無いだろう。」

など、いろんな憶測が飛び交っています。

「テメーら静かにしろ！ んじゃ、今から訓練を始めるからな。」

そこにヴィータさんが一括。強引に場を纏めて訓練に入りました。
この辺の手際は流石ですね。

数時間後

「それじゃあ、訓練はこれで終了だ。……反省点はたっぷりあるだろうから、最低一万字以上書いて今日中に提出な。」

「……はい……。」「……」

訓練が終わって、がつくりとうなだれたまま隊舎へ歩いていく部隊の皆さんと、どこか疲れた目をしたヴィータさん。ご愁傷様です。

今日の訓練、ヴィータさんはいつも以上に張り切って指導していました。大きな声で檄を飛ばし、悪い所があったら即座に注意。常から結構厳しめの指導をしていますけど、今日は輪をかけてハードでした。

それを受けた部隊の皆さんはというと、どこか動きがぎこちなく、連携ミスなどの細かいミスを連発し、その度にヴィータさんに怒られていました。

おかげでヴィータさんもヒートアップ、部隊の皆さんはそれに萎縮してしまってさらにミス連発という悪循環に陥ってしまい、訓練はHardを通りこしてLunaticになっていました。

「あんな大勢、しかも有名人に見られていると思うと、緊張する気持ちは分かるんですけどね。」

「情けねえ。それ位で浮き足立つのは、たるんでる証拠だ。」

「そんな事言つて。ヴィータさんだって、今日はいつもより張り切つてたじゃないですか。」

「べ、別にそんな事ねーよ！ ほら、アイツら帰ったから今度はお前の番だ。さつさと用意しろ！」

「隠してるのがバレバレですよ。ペスカトーガ、セットアップ。『藍、モード「博麗」サブは「龍」で』」

「うるせー！ 今日こそ勝つてやる！ 行くぞ、アイゼン！」

「おー。ナマで見るのは初めてやけど、ホンマに強いなあ。」

「キャラちゃん、凄いです。」

八神家の目の前で繰り広げられているキャラとヴィータの模擬戦。ヴィータはシュワルベフリーゲンで牽制しながら隙を伺い、キャラは涼しい顔で回避しながら弾幕で応戦している。

「ヴィータの射撃は完全に見切られているな。あれでは当たり前そうも無い。しかし、何故ヴィータは接近戦を仕掛けないのだ？」

ザフィーラが疑問に思うのももつともである。ヴィータはオールラウンダー寄りではあるが、歴としたベルカの騎士。接近戦が本領なのである。

「そういや、ザフィーラは記録映像見たこと無いんやったな。」

「??」

「じきにわかるよ。ほら。」

丁度その時、遠距離戦では埒があかないと思ったのが、ヴィータが突撃を敢行。カートリッジをロードし、ラケーテンフォームで突っ込んでいく。瞬く間に二人の距離はゼロになり

「ぶち抜けええええ!!」

「そんな大振り、当たりません！ 神技「天覇風神脚」!!」

ハンマーの間合いのさらに内側、ヴィータの懷まで入り込んでスベルが発動される。強化された蹴りが計5発、ヴィータの体へと突き刺さる。急所は外したものの意識を奪うには十分で、ヴィータはそのまま墜落する所を、キャロに受け止められた。

「ちくしょー、何で勝てねえんだよー!」

「まあまあ、いつか勝てるようになりますよ。」

「だから、上から目線で言うなって言ってるだろ！ 余計ム力つく！」

「落ち着いてくださいヴィータさん。ほら、みんな見てますよ。」

模擬戦が終わったので、八神家の皆さんの方へと歩いていきます。未だ興奮冷めやらぬヴィータさんをなだめるのは大変です。

「キャラは随分強いんだな。今日は休暇なので無理だが、また今度、私とも戦ってくれないか？」

「私は別に構いませんけど……、やっぱりシグナムさんって噂通りの人なんですね。」

「む、それはどういう意味だ？」

バトルマニアとかバトルマニアとかバトルマニアですよ。態々言いませんけどね。

「気にしないでください。……、はやてさん、どうしました？」

はやてさんの方を見ると、難しい顔でこっちを見えます。これってやっぱり

「キャラちゃん。ちょっと聞きたい事があるんやけど、この後ちょっとだけ時間貰えへんかな？」

「構いませんよ。私もいくつか話しておきたい事がありますし。」

八神家

「お邪魔します。」

「キャラちゃんいらっしやい。自分の家やと思って、遠慮なくしてつてな。」

話がある、と言われて連れて来られたのは、はやてさん達がミッドに構えている自宅でした。

てつきりいつもの店かなと思っていたんですけど、

「この人数やとあそこは厳しいやろ？ゲンヤさんには私が言っておくさかい、今日はウチで食べていつてえな。」

との事で、私も特に断る理由は無いのでOKしました。美味しいと評判のはやてさんの料理、楽しみです。

夕食までにはまだ時間があるので、リビングに集まって話をする事になりました。私とはやてさん、ヴィータさんとシグナムさん、シヤマルさんはテーブルを挟んでソファーに座り、リンちゃんはやてさんの肩に。アギトは私の頭の上に乗っています。ザフィーラさんはわんこフォームで床です。

「アギト、重い。あとアホ毛引っ張るな。」

「えー、別にいいだろ？気にするなつて。」

『……頭冷やそうか？パーフェクトフリース的な意味で。』

『ゴメンナサイ。』

説得した結果、やっとアホ毛を離してくれました。でも、頭の上には乗ったままなんですね……。

「相変わらず仲ええなあ。それじゃ、そろそろええかな？」

「あ、はい。大丈夫です。」

「今日模擬戦見せてもろたけど、本当に強かったなあ。ヴィータがあんなになるとは思わなかったわ。」

「いえいえ、私なんかまだまだですよ。」

「謙遜せんでもええと思うよ。本当に強いと思うし。……あれでCランクとは思えんくらいに。」

「……。」

「今日の訓練中、シャマルに頼んでデータ取ってもらたんやけど、色々気になる所が出てきてな。」

「……。」

「無理にとは言わんけど、できたら教えてくれへんかな？」

「……、良いですよ。私も、皆さんには話しておこうかと思っただ所ですから。」

全部は話しませんけどね。

第35話 授業参観? (後書き)

長くなりそうなのでここで切らせてもらいました。
以下Q&Aです。

Q バトルマニアフラグが……。

A 真のバトルマニアは万全の状態で戦うものです。

Q キャロ霊力とか使いまくっているけど、誰も突っ込まないの？

A 次回、ある程度説明します。苦しい言い訳になるかもしれませんが。

では、また次話で。

第36話 八神家

「それで、何から話しましょうか？」

「そやなあ……、シャルル、さっきの模擬戦のデータ表示して。」

「あ、はい。お願い、クラーヴイント。」

シャルルさんが自分のデバイスに指示すると、虚空にウィンドウが出現し、画面の左半分にさっきの模擬戦の映像が表示されました。いっぽう右半分にはいくつかの数字の羅列があり、それが刻々と変化しています。

「こつちの数値が二人の魔力量。他の数字にも意味はあるんだけど、とりあえずこれに注目してください。」

そう説明して、シャルルさんは映像を一時停止させました。

「この時のキャラちゃんの魔力量の数値がコレ。それで……。」

再生再開。数秒後、私が弾幕を撃った所で再び止まりました。

「この時の魔力量はコレなんだけど……。」

「殆ど変わっていないな。」

シグナムさんの指摘の通り、弾幕を放つ前と後で、殆ど変化していません。その量も誤差、と言ってしまえばそれで納得できる量です。

「実際戦った感じだと、あの魔法、CとBランクくらいの威力だった。これで魔力量Cランクってのは、私もずっと気にはなってたんだ。」

そこでヴィータさんが、実体験に基づいた補足をしてきました。やっぱり気付かれてましたよね。

「最初に私らが聞きたいのはコレ。一体どういうカラクリなん？」

はやてさんは軽い調子で訪ねてきましたが、目は真剣です。ヴォルケنزの皆さんも同様に、こっちに注目してきます。

今回の目的は、いずれバレるであろう事情を今のうちに出しておくことで、不信心を持たれないようにする事、加えて、事情を理解してもらおう事で、隠し事に協力してもらおう事です。なので、なるべく嘘はつきません。これだけ人数がいると、嘘ついた瞬間にバレそうですし。

かと言って全部バカ正直に話すのは論外。この辺の匙加減が重要です。

『キャラ、キャラ。』

『アギト？』

『私は何も話してないから。』

『そっか。ありがと。』

アギトからの念話を聞いて、少しだけ気が楽になりました。内容自体よりも、私側に立ってくれてるっていう気持ち嬉しいです。

それじゃあ、始めますか。

「口で話すよりも見たほうが早いですね。ほら。」

私は右手の人差し指を立てて、指先に霊力スフィアを生成しました。

「シャルさん。このスフィアの魔力量、測定してみてください。」

「え、ええ。……アレ？」

「どうした、シャル？」

「ちょ、ちょっと待って……、故障？」

「いえ、別に故障じゃないと思いますよ。はやてさんもスフィアを一つ出してくれませんか？」

「ええよ。はい。」

はやてさんの指先に、魔力スフィアが生成されます。

「シャルさん。はやてさんのスフィアの魔力量は測定できました？」

「ええ。でも、キャラちゃんのは測定できないのよ。どうしてかしら？」

「そついう事です。今から詳しく説明しますね。」

そして私は、霊力の存在について話しました。霊力とは明言せず、魔力と似た力があって、私はそれを使用しているという話に、ヴォルケンスの皆さんは半信半疑でしたが、さっき実際に見せたおかげで、頭から否定されずには済みました。

「この力」と魔力は、いわば灯油とガソリンみたいな関係ですね。得意な用途は違いますけど、燃料という点では共通ですから。」

「成る程なあ。んじゃ、次の質問ええかな？ その力やけど、どうやって手に入れたん？ ひょっとして、レアスキルとかか？」

「普通はそう思いますよね。でも、レアスキルじゃないんです。去年くらいに、私が旅行に行ってた時ありましたよね？」

「ああ、アギトちゃん連れてきて、その後ゲンヤさんにお尻叩かれたヤツやろ？ しっかり覚えてるで。」

「……、その旅行についてですけど、はやてさんはどこまで知ってますか？」

（しまった、墓穴掘った……。）

「えーっと、ゲンヤさんから「任務で行方不明になったかと思ったら、いつの間にか旅行を始めてやがった」って聞いたわ。」

「何だよそれ……。」

「冗談では？」

「えーっと、笑う所？」

「……正気か？」

「良く分からないけど凄いです。」

上からヴィータさん、シグナムさん、シャマルさん、ザファイラさん、リインちゃんです。冗談みたいですけど本当の話なんですよ。にしてもリインちゃんは大丈夫なんでしょうか？将来が心配です。

「それで旅行の間ですけど、しばらくの間、「フェニックス」さんと「プリンセス」さんの二人と一緒にいた事があって、その時教えてもらったんです。」

「「フェニックス」に「プリンセス」……、まさか、あの！？」

「どれを言ってるのか分かりですけど、強い人ならそれで合ってます。」

「はやてちゃん、「フェニックス」と「プリンセス」って誰ですか？」

「えっとなリイン、三年前位から出てきた犯罪者で、二人組の凄腕の魔導師なんよ。何度も局員を返り討ちにしてるせいで、当時は一種の天災扱いされたもんや。でも最近は聞かへんから、リインが知らんのも仕方無いかもしれんな。」

はやてさん、説明乙です。

そして私は、師匠二人に修行をつけてもらった事を話しました。食うのに困っていたので食事の世話をしあげたと言うと、リビングは微妙な空気になりました。

「暴れる原因が食料の取り合いとか……、キャロちゃんの周りってそういう人が集まるんやろか？」

「類友とでも言いたいんですかはやてさん？ それなら皆さんも同類ですよ？ とにかく、レアスキルなんかじゃないので、勝手に申請とかしないでくださいね。それで、後聞きたい事ってありますか？」

「わかったよ。えーつと……。」

「その力、レアスキルじゃねえんだよな？ なら、訓練次第で誰でも使えるのか？」

ヴィータさんの発言に、シグナムさん、ザフィーラさんも反応しました。自分も使えるかもしれないとなると、興味が向くのは当然ですね。

「魔力量と同じで人によって大小の差はありますが、不可能では無いです。」

「なら」

「でも、私はこの情報を他人に漏らすつもりはありません。」

「な！ どうしてだよ！？」

「ちょっとヴィータ、落ち着きい！ ……キャロちゃん、理由聞かせてもらえるか？」

「理由はいくつかありますけど……、魔導師ランク主義の管理世界にとって、「この力」は毒になるからです。質量兵器を禁止し、武力を魔力のみに頼っている。「この力」はそんな社会構造を根底から覆しかねない存在です。最悪、魔力に恵まれた人との間で戦争になる可能性だってあります。私はそんな責任負えないし、負いたくもありません。勿論戦争は最悪のケースです。でも、もしそこまでならなかったとしても、間違いなく社会は混乱します。魔法と同じような法律が出来るまでの間、凶悪犯罪の増加等のデメリットは避けられません。レリック事件の対応に加えて、そんな事態になったらどうしようもなくなりますよ。」

ミッドチルダにはベルカとの戦争っていう前歴がありますからね。魔法文化同士ですら争うっていうのに、ここで霊力なんて出したら絶対受け入れられません。」

あと個人的な理由は、今のタイミングで広まってしまったら、スカさんが何かやらかしそうな予感がするから。霊力対応VerのAMFとか、霊力持ちの戦闘機人とか作りそうで怖い。

「そういう訳なので、私はこれを漏らす事は絶対にしません。むしろ、秘密を守るために、皆さんに協力して欲しいくらいです。」

「そっか。しゃあないな……。」

何とか納得してもらえたみたいです。ヴィータさんとシグナムさんは残念そうな顔をしています。ザフィーラさんは表情が良く分かりませんでしたけど、たぶん同じでしょうね。

「私の能力と、その理由についてはこんな所ですね。」

「そっか。今日はありがとうな。」

「いえいえ、いつか話さないと思って思っていましたし、丁度良かったです。」

「なら、難しい話はこれで終いな。今からご飯作ってくるからちょっと待っててな。」

「はやてちゃん、私も手伝います。」

そう言いながら、はやてさんとシャルルさんはキッチンへと向かっていきました。

それを見送っていると、アギトが念話でこっそり話かけてきました。

『なあキヤロ、藍さんの事とか言わなくて良かったのか？』

『アギトも知ってるでしょ？ さすがにアレをバラすのは不味いからね。さっきも言ったけど、私は戦争の責任なんて負う気無いんだから。』

私はそこで念話を切って、アギトで遊びながら、ご飯が出来るのを待つことにしました。

とりあえず難しい話は終わったので、後は思いっきり楽しみましよう！

その夜

「はやてちゃん、キャラちゃん寝ちゃったみたいですよ。」

「そつか。じゃあ私はもうちょつとする事あるさかい、シャルはもう寝てええよ。」

「遅くならないようにしてくださいね。それじゃあ、また明日。」

シャルが出て行って一人になった部屋で、私は今日キャラから聞いたことについて考える。

魔力と似て非なる別の力。正直信じ難いけど、実際に見せられた以上は信じるしかあらへん。

キャラの話が確かなら、それは魔力と同様に、誰もが大小は持っている力であるという。

「正直言つと、教えてもらって戦力アップしたかったんやけど……。」

争いの火種になりうるという指摘は最もやし、レリック事件に集中したい今、想定外の事態は避けるに越した事はない。キャラの言ってる事に間違いは無い。

「無いんやけど……。」

そこで私は、デバイスを操作して記録映像を表示させる。ウィンドウに移ったのは高速飛行で逃げ続けている桃髪の少女の姿があった。フェイトちゃんから貰った映像だ。これを見るに、キャラは5歳の頃には、既にCランク以上の実力があつた事になる。

「今日話してくれた内容に嘘は無いと思うんやけど……、まだ隠し事ありそうやな。」

今日の話し合いであえて指摘しなかったのは、一度に全て聞けるとは思っていなかったから。それと

「一緒に戦ってくれる相手を疑うっていうのもイヤな話やしな。」

だから、いつかちゃんと自分の口から話してな？

第36話 八神家（後書き）

難産でした。しかも説明不足だし……いままでのツケを払わされた気分です。

以下Q&Aです。主に本編で書けなかったことの補足です。

Q・霊力とかが周囲にバレる可能性は？

A・今のところ、大っぴらに魔力以外を使ったのはヴィータとの模擬戦のみ。

ほかの場合は身体強化とかにしか使っていないので、デバイスで測定しない限り分かりません。

陸士108部隊の時はほとんど後衛でブースト魔法ですし、マスパぶっ放した一件は、ゲンヤさんが頑張ってくれました。

キャラの戦闘記録が残ってるのは、陸士108部隊と、八神家、フェイトのデバイス内です。なので関係者巻き込んで口裏合わせてもらえば、漏れる危険は薄いです。

苦しい言い訳なのは否定しません……。

では、また次話で。

第37話 ようやくはじまる物語

幻想郷にて

幻想郷の南部に、「迷いの竹林」と呼ばれる場所がある。

成長する竹によって日々その姿を変えるせいで、普通の人間が対策も無しに入った場合、まず迷ってしまうのが、その名前の由来である。

もし迷わない人間がいるのなら、その人は余程運がいいか、勘がいいか、もしくはそこに住んでいて竹林のことを知り尽くしているかのどれかである。

今竹林を歩いているのはその三番目。竹林在住の不死人、藤原妹紅その人である。

「お、あつたあつた。」

そう言いながら竹の根元にしゃがみ込み、枯れ葉をどかしていく。するとそこには、生えたての筍があつた。

妹紅はそれを抜くと、背負っていた箆の中に放り込んでいく。箆の中は既に筍で一杯だった。

「大漁大漁、と。たまには雨も良いもんだな。そろそろ帰るか。」

これ以上は箆に入らないので、一旦家に帰ることにする。採った筍は数本だけ残して、後は人里で売ってしまおうと皮算用していると、突如突風が発生した。

「あー！ 見つけましたよー！」

妹紅が声のする方を見ると、そこにいたのは黒い羽を生やした記者風の少女。

それに加えて頭巾や高下駄、羽団扇などのパーツが、彼女が天狗だと主張している。

鴉天狗の射命丸文、その人だ。

「おはようございます、妹紅さん。」

「ブン屋か。生憎、新聞なら間に合ってるぞ。」

「いえいえ、今日は勧誘に来たわけではないんですよ。ちょっと取材したい事がありまして。」

「は？ 何で私に？ 神社に行った方がまだマシだぞ。さっさと帰れ。」

異変を起こすのも解決するのも一切関係の無い話だし、記事にするほどの生活もしていない。妹紅はそう言って追い払おうとしたのだが

「ふっふっふ……、そんな事言っつて、もうネタは上がってるんですよ！」

「はあ？」

「何でも外の世界に行つてたらしいじゃないですか？ その辺の話、聞かせてください。」

「……ああ、アレか。」

「って、何でそんなにどうしても良さげなんですか!？」

「とは言っても、もう結構前の話だし。」

そう。妹紅が幻想郷に帰ってから、既に二年以上が経過している。妹紅にとっては、既に過去の出来事なのだ。

「それにしても、遅すぎないか？」

「仕様がでないじゃないですか。山は情報が遅いんです。それにあなた達の場合、帰ってきてても竹林の中に籠っているの、見つけるのが大変なんですよ。私だって、河童が噂しているのを聞いて初めて知ったくらいなんですから。」

「ふーん……、って、何で河童が知ってるんだ？」

「永遠亭の兎がそう話してたそうです。最近ちよくちよく河童の所に顔を出しているみたいですよ。」

「……。」

「まあそういう訳なので、旅行中の話とか色々聞かせてください。」

「何が「そういう訳」だよ。……、少しだけだぞ。」

「ありがとうございます！　まずですね……。」

それから文の密着取材が始まった。少しだけ、と言っていたのに微に入り細に渡る部分まで聞いてくる文に対し、妹紅は辟易しながら

らそれに答えていった。何だかんだでしっかり答える辺り、妹紅も相当なお人よしである。結局取材は数時間に渡って続けられ、妹紅が開放される頃には既に太陽が高く昇っていた。

「ご協力ありがとうございました。おかげで良い記事が書けそうです！」

「そうか。じゃあ、もう帰ってくれ。」

「そうですね。今すぐこれを記事に纏めないといけないですからね。そうだ！妹紅さんもこの機会に購読始めてみませんか？今なら安くしておきますよ。」

「帰れって言ってるだろ。焼き鳥にされたいか？」

「あやややや、仕方ないですね。では、さようならー。」

文の声と共に、来た時と同じような突風が巻き起こり、辺りには木の葉が舞い上がった。思わず目を瞑ってしまった妹紅が目を開けた時には、そこには誰もいなかった。

「……。私も帰るか。」

妹紅はそう言って、下ろしておいた籠を再び背負う。すでに時間は昼。人里に売りに行くのなら、急がないといけない。

再び歩き出そうとした妹紅であったが、そこで背中に違和感を感じた。

（何か、妙に軽いような……！！まさか！？）

違和感の正体を確かめるため、もう一度下ろして籠の中を覗き込む。籠一杯にあるはずの筈が目減りして七割程度になっているのを見て、妹紅の思考回路は一瞬で答えを弾き出した。

「あの天狗、筈盗っていきやがった……。」

おそらくは帰る瞬間、風を使って文字通り巻き上げていったのだろう。すでに天狗の姿は無く、今から追っても徒労に終わる可能性が高い。

「今度会ったら、絶対焼き鳥にしてやる。」

妹紅は決意を新たにして自宅へと歩いていく。鴉天狗の運命がどうなるのか、今は誰にも分からない。

（にしても、久しぶりにキャラの事思い出したな。あいつ、今どこで何やってるんだろ？）

陸士108部隊

「ひつ……、くし!!」

「キャラ、大丈夫？」

「大丈夫ですよ。誰か噂でもしてるんですかねえ？」

「心当たりは？」

「割と一杯。」

「……。」

「何ですか！ その哀れむような目は？」

「キャロ……頑張れ。」

「ナニ想像したんですかギンガお姉ちゃああああん！！」

最近ギンガさんが私のあしらい方を覚えてきました。純粹だった頃のギンガさんが懐かしいです。

今日は二人とも非番なので、オフィスで仕事です。ただ、いつもと少し違うのは

「これだけ騒いだのに、ゲンヤさん反応しませんね。あ、コレ美味しい。」

「仕様がないう。だって、今日はスバルのBランク認定試験の日だからね。」

そうなんです。私がこっちで生まれてから九年。ようやく記念すべき第一話が始まりました。とはいっても、別に私が試験を受ける訳ではないので、こっちで煎餅でも齧って茶でもすすりながら、合否の知らせを待っています。

ゲンヤさんの様子はというと、一応通常通りに仕事をしてはいるものの、心ここにあらずといった感じで、時折通信デバイスに視線を送っているのが見えます。

「コレ録画して、後でスバルお姉ちゃんに見せてみましょうか？」

「私は止めないよ。」

「……やっぱ止めときます。」

「よろしい。」

ギンガさんと漫才をしつつ待っていると、デバイスから発信音が鳴り

ちよ、ゲンヤさん。鳴ってから出るまでに0・5秒かかってないとか、どんだけ急いでるんですか！！

幸い、こういう時によくある間違い電話オチではなく、相手はスバルさんでした。

「というわけで、試験自体は不合格だけど、講習を受けて再試験でできるようしてくれるって。」

「そうか。不合格なのは残念だが、良くやったな。」

スバルお姉ちゃんの相手をしているゲンヤさんは既に正常モード。切り替え早いです。

にしても、やっぱりスバルお姉ちゃん不合格でしたか。知識として知っていたとはいえ、残念です。

このまま行くとスバルお姉ちゃんは六課入り。六課メンバーは私

の代わりにアギトがいて、さらにリミッター無しのシグナムがいる。私とギンガお姉ちゃんも、近いうちに捜査協力の名目で潜り込むことになるでしょう。

『ここからが正念場ですね。』

『藍？ …… そうだね。やる事はやってきたし、後は全力でぶつかるだけ。これが終わったら平和な暮らしが出来るはずだから、頑張ろうね。』

『はい、マスター。』

これからの事に思いを馳せつつ、私は決意を新たにします。全ては私自身の平穩のために！！

にしても、この煎餅美味しいですね。もう一枚いきましよう。

第37話 ようやくはじまる物語（後書き）

始まると言いながら半分が幻想郷サイド、しかもスバティアの試験は全スルー。

今後也多分こんな感じで進んでいきます。
以下Q&Aです。

Q・文はあの後どうなった？

A・鳳翼天翔、フェニックスの尾、フジヤマヴォルケイノなど、お好みの焼き加減でどうぞ。

では、また次話で。

第38話 機動六課

機動六課

「ま、長い挨拶は嫌われるんで、以上、ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした。」

そう締めくくって、はやての挨拶は終了した。ロビーには隊長陣、フォワード、バックヤードスタッフが全員集合しており、機動六課の発足式が行われていた。

次に隊長陣の挨拶、フォワードメンバーとバックヤードスタッフの紹介と続き、式はつつがなく終了した。

その後、スバル、ティアナ、エリオ、アギトのフォワードメンバーはなのは主導の元、早速訓練を開始した。

それを少し離れた所で見つめる人影が一人。そこに、もう一人近付いてきた。

「ヴィータ、ここにいたか。」

「シグナム。」

「新人達は早速やつてるようだな。」

「ああ。」

「お前は参加しないのか？」

「四人ともまだヨチヨチ歩きのヒヨっ子だ。私が教導を手伝うのはもうちょっと先だな。」

眼下に見えるフォワード陣は、互いに己のスキルを確認し合いながら準備を進めていく。その様子は、頼もしさよりも初々しさを感じさせるものであった。

「そうか。」

「それに自分の訓練もしたいしさ。……同じ分隊だからな。私が空でなのは守ってやらなきゃいけない。」

「……頼むぞ。」

その言葉に込められた意味に当然気付いているシグナムであったが、あえてほじくり返すようなことはしなかった。これはヴィータが自分で解決すべき問題だからだ。

「うん。」

「お、間に合ったみたいですね!。」

「「!?!?」」

いきなり背後から声をかけられ、二人揃って不意を突かれてしまった。二人が振り向くと、そこには自分達の知り合いが立っていた。

「「!?!?」」

いつの間にか背後にいた私に驚いたのか、二人揃って同じ反応を返してくれました。

「きゃ、キャロ！？何でデメーがここにいる？」

「いや、お姉ちゃん達の雄姿を拝んでおこうかと。」

「そうじゃなくて……、お前六課メンバーじゃないだろ！」

あれ？聞いてませんか？

「捜査協力って名目で、出入りの許可は貰ってあるんですよ。嘘だと思ふのなら、はやてさん辺りに聞いてください。」

捜査協力って言っても、基本的には勝手に動きますけどね。

にしても、ヴィータさんが知らなかったということは、他のメンバーも知らなかったりするんでしょうか？ それは困……らないです。むしろそれを利用して楽しめそうです。

「あ、悪夢だ……。」

さっきまでのシリアスは何処に行ったのか、どこか疲れたような顔をしているヴィータさん。

失礼ですね。私が何をしたって言うんでしょうか？

「ヴィータ、キャロ、始まるみたいだぞ。」

ヴィータさんがヒートアップしたせいか、シグナムさんはわりと落ち着いています。シグナムさんの言った通り、フォワード陣は準備完了。今から開始みたいです。

そして訓練が始まったのですが……。

訓練内容は、逃走するガジェットの撃墜。全部で8体、全て撃破するのが条件です。

最初にスバルお姉ちゃんとエリオ君で攻撃を仕掛けたけど、ガジェットはアツサリ回避。続いてティアナさんが射撃するも、全てAMFで無効化されました。その後、スバルお姉ちゃんがウィングロードでガジェットを追っていったのですけど

「へ？うわあああああ！！」

案の上AMFでウィングロードを消されて転落。ビルの側面にガラスを突き破りながら突っ込んでいきました。シミュレーターだから。ガラスが刺さるとかは無いはずですよ。それにしても

「お姉ちゃん……ここまでバカだったなんて。」

「……ここ、笑うところか？」

「止めておけ。」

そんな事を言ってる間にも、訓練は進んでいきます。

なのはさんからAMFの説明を聞いた4人はそれぞれ打開策を模索。

「ストラーダ！」

Explosion.

先行して回り込んでいたエリオ君がストラダにカートリッジをロード。ガジェットの進路上の橋を破壊し、ガジェットのうち三体がそれに巻き込まれ、辛うじて免れた残りの機体は瓦礫の迂回するように移動しました。

「にしても、建造物壊すのはアリなんですかねえ？」

「お前がいうな。」

「それ、どういう意味ですか？」

次に、進路を限定された所にスバルお姉ちゃんが突進。

「うおおおおおりゃあああああ！！」

ガジェットのマウントを取り、ゼロ距離からのリボルバーナックルで仕留めました。

……お姉ちゃん、ソレ一步間違えればゼロ距離からレーザー撃たれてますよ。

「ヴィータさん、後でお姉ちゃんにちゃんとやっておいってください。」

「……分かった。」

続いてティアナさんがヴァリアブルシユートを発動。多重弾殻のそれはAMFを貫通し、二体のガジェットを打ち抜きました。

でも、一発撃っただけなのに肩で息をしており、今にも倒れそうです。クロスミラージュじゃないので、消費が激しいんでしょうね。

これで残り二体となつたわけですが

「ブレネン・クリューガー!!!」

アギトの叫びとともに炎弾が撃ち込まれ、残りのガジェットが炎上しました。AMFでは魔法によつて発生した現象までは無効化できませんからね。ちゃんと役に立ててゐたいで何よりです。

にしても、最初からアギトがやれば簡単だったと思うのは私だけでしょうか？ それだと訓練にならないので、なのはさんかはやてさん辺りに指示されていた可能性もありそうですね。

とにかくこれで初訓練は終了。フォワードメンバーは隊舎へ戻つていきました。

「最初はこんなものですかねえ？」

「まだまだヒヨつ子だからな。」

「これから期待、といった感じが。」

正直今のままだと厳しいですからね。

「それじゃ、私はそろそろ帰りますね。」

「ん？スバル達には会つていかねーのか？」

「私がいるっていうのは知りませんからね。ヴィータさん達も言つたら駄目ですよ。」

「どうしてだ？」

「だって、その方が面白いじゃないですか。」

「……。」

「……。」

「じゃあ、さようならです。」

何故か黙ってしまった二人を置いて、私は隊舎へと戻ります。そして人目の付かない場所を探してスキマ移動し、我が家へと帰りました。実は行きの時もスキマを使っているので、あの二人以外は私の訪問を知らなかったりします。

「ただいまー。っと、誰もいないですね。」

『まだ昼前ですからね。GINGAさんとGENYAさんはまだ仕事です。』

「そう言えばそうでしたね。」

民間協力者として六課に潜り込むことになったので、陸士108部隊で書類仕事を手伝うことも無くなりました。ぶっちゃけ暇です。

「まあいいか。藍、モード「境」。スキマ内で修行するよ。」

『はい。マスター。』

暇つぶしの手段が修行とか突っ込み所満載ですけど、時間があるならやっておきたいですからね。

「キュクルー……。もつずっと構ってもらってない……」

第38話 機動六課（後書き）

キャラ傍観するの回。フェイトとニアミス。なのはとはまだ出会っていません。

以下Q&Aです。

Q・キャラは妖夢の剣術、半霊を使う物はできるのだろうか？

A・「半」形態になっても半霊はついてこないの、そのままでは不可能です。

まあ分身したけりゃフォーオブアカインド使えばいいので、そこまですらないんですけどね。

では、また次話で。

第3?話 黒歴史(前書き)

投稿遅れてすいませんでした。

今回の内容ですが、いつも以上にカオスです。

何があっても受け入れる覚悟がある人は続きをどうぞ。

第3?話 黒歴史

「ズズズズズ……、ふう。」

皆さんこんにちは。キャロ・シエルです。つい先日、機動六課の様子を見に行つてからというもの、ずっと暇で困ってます。

私の立場は民間協力者。しかも、ある意味秘密兵器的な扱いなので、出勤が無い限りはやる事がありませんし、出勤があつても私の出番が来ない事もあります。

つい先日、フォワードメンバーの初出撃があつたのですけど、空中をなのはさんとフェイトさんが担当。電車内を片方がフォワード4人、もう片方をヴィータさんが担当して、アツサリ制圧してしまいました。

私には出撃命令は無かつたのですが、念のため近くの森に待機してました。もしエリオ君が墜落してきたら御柱でホームランするつもりだったので残念です。エリオ&アギトにチーム分けされてたら確実に出来た筈なのに……、チツ。

そつという訳で私の出番はゼロ。作戦成功を遠目に見ながら、こっそりスキマで帰りました。

六課に行つても他の人の仕事の邪魔ですし、訓練を受ける必要も無し。この時期から民間協力者になつたのは早まつたかもしれない。こんな事なら、まだ陸士108部隊でギンガさんと一緒にテロリストボコつての方が良かったです。

「暇ですねえ……。」

「ですね。」

今私は、藍とフリード一緒に、スキマ内でコタツに入りつつ、お茶を啜りながら煎餅を齧っています。

藍は対面で同じようにお茶を飲み、フリードはコタツの中でぬくぬくしています。

お茶と煎餅は自宅から持ち込み。コタツはスキマ内にいつの間にかありました。

ついこの間までは自宅で暇してたんですけど、スキマ内で修行する事が増えたので、最近はゲンヤさん達が帰ってくるまではコッチにいる事が増えています。こっちなら藍も堂々と出られますから、空間内に浮かんでいる目に慣れてしまえさえすれば快適です。

「やっぱし訓練くらいしかする事無いかあ。今日はどうしようかな？」

「博麗」と「龍」の技能はほぼ習得できた（夢想天生はまだ無理）ので、それに釣られて他形態の習熟度もかなり上がってきています。既に低く中ランクのユニゾンなら普通にこなせるし、それ以上となると純粹にMP不足だけなんですよね。

なので、現在訓練しているのは、中ランクのユニゾンの中でも癖があつたり特殊な戦い方をする物がメインです。

「どれにしようかなあ……。」「七曜」はまだ賢者の石が勿体無いし……。」

賢者の石、使えはするんですけど、練習で使用するのには憚られます。

というのも、事前にカートリッジみたいに魔力を溜めておいて、

後はスペル宣言した後に制御するだけ、という方式を取っているからです。

自分の魔力を使わないで良いのは利点なんですけど、チャージに結構時間がかかるので、なるべくなら温存しておきたい代物です。

「となると、「人形」かなあ？ ……よし、フリード、今から遊ぶよ。」

「！！ キュ、キュー！？」

内容が決まったので、コタツから出て準備をします。それと同時に、訓練相手のフリードをコタツから引きずり出しました。

「フリード、今から弾幕ごっこするよ。回避しきれたら、明日のおやつ増やしてあげるから。」

「！！ キュクルー！！」

私の言葉に、どこか不機嫌そうだったフリードが嬉しそうに返事します。扱い易いパートナーって素敵です。それじゃ、始めましようか。

「藍、モード「人形」、サブは「境」で。」

「はい。」

モード「人形」。

そう言っておきながら、付与される能力は「主に魔法を扱う程度の能力」という詐欺形態。

人形操作は、太極拳と同じ技能に分類されます。

それでも、ユニゾンによる基礎力増加の恩恵で精密操作が得意になっているので、マルチタスクとの併用で操作自体は問題無くできます。

サブを「境」にした理由は、普段はスキマ内に保管してある人形を取り出すためです。

今の場合だと、スキマ内でスキマを開く事になりますけど、実際出来てるので疑問に思わない事にしました。

「行くよ、フリード！」

「キュクルー！」

フリードの返事を聞き、スペルを発動させます。オリジナルスぺル第2号！

「魔法少女「全力全壊の生首人形」！」

スペル宣言と同時に、スキマ内から私の作った人形が出てきます。そこから出てきたのは

「「ゆつくりしていつてね！！」」

「おーーーーーっばい！！」

うざったい声を上げて私の周りをふよふよ浮遊する生首、所謂「ゆっくり」です。

栗色の髪をツインテールにした生首がゆっくりなのは、物騒な事を言いながら髪のをうねうね動かして鎌を持っている金髪がゆっくりふえいと、乳に対する思いをぶちまけているショートカットの狸っぱいのがゆっくりはやてです。

……いや、最初はちゃんとした人形作るつもりだったんですよ？でも、最初に作ったフェイトさん顔部分が終わったあたりで早くも面倒臭くなり、最低限鎌を振れるようにした所、髪のを使って鎌を振るゆっくりふえいとが完成してしまいました。

これで開き直った結果、続くなのはさんとはやてさんの人形作成時には、最初から胴体無しで生首だけ作成する事にしました。この二体は魔力弾撃つだけなので胴体は無くても困りません。胴体なんて飾りです。偉い人にはそれが分かりますよ。

そうして完成したのがゆっくり三人娘。この頃にはもう私のテンションがおかしくなっており、ゆっくり特有のうざったい話し方を再現するボイスパッチを実装しました。隣で見守ってくれていた藍の視線が痛かったです。

「どう見ても黒歴史人形だよね……。」

『まあまあ、そのうち作り直しましょう。とにかく今は訓練です。』

そっいえば、フリードを待たせてましたね。じゃあ、行きますか。

「「ゆっくりしんでね!!」」

「ばいんばいん!!」

私の操作に従って三体の生首が飛行し、ゆっくりとは思えない素早い速度でフリードを包囲します。そして

「あくせる・しゅーと!!!!」

「ふおとんらんさー!!!!」

「もみじもみもみ!!」

三体の口から弾幕が放たれ、真っ直ぐフリードの方に向かって行きます。

フリードは素早く飛翔し、弾幕が迫る前に離脱しました。その結果

「ゆでぶ!?!」

「あ、やっちゃった。」

ゆっくりふえいと放った弾幕が、反対側にいたゆっくりなのはにヒットしました。

「ゆあああああ、いじやいよおおおお!!」

「あたったよー! つよくつてごめんね」

「ひんにゅーはすてーたすー」

ゆっくりなのはダメージ時に設定されている音声で、ゆっくりふえいとはヒット時に設定されている音声で、ゆっくりはやてはランダム音声でそれぞれ喚いています。なかなかカオスです。なの

はさん人形が泣いてる光景を見ても心が痛まないのは、人形をゆっくりにした唯一の利点かもしれません。

「やっぱり連携も絡めると操作が難しいなあ。慣れるしか無いか。」

気を取り直して操作再開。今度は同士討ちしないように気を付けながらフリードを追い詰めていきます。でも

「キョクルー!!」

「こっちは三体だっていうのに……。」

フリードも流石なもので、三対一だっていうのに全く苦にしません。今まで私にピチュラされてきた経験に比べると、操作に慣れていない連携はずっと楽みたいです。時折プレスで反撃して来るので、こっちも焼き饅頭が出来ないように必死に操作します。

このままだとフリードの勝ち。……仕方無いですね。

「ふえいと、バインド!!」

「ゆっくりそにつくつむーぶするよっ!」

ゆっくりなのはとゆっくりはやてに弾幕を撃たせつつ、ゆっくりふえいとをフリードに突進させます。

「キョ!?!」

「りゅーさんはふえいとにあまあまちょうだい!　たくさんでいいよ!」

そしてゆっくりふえいと物理バインド抱きつきでフリードを拘束します。そこに

「でいばいん・ばすたー!!!」

「でもみさまのさくにゆうならみたいかもー!!!」

ゆっくりなのはとゆっくりはやてからの砲撃魔法が炸裂。フリード撃墜に成功しました。

「キュー……。」

「もっと、ゆっくり……した……かつ……た……。」

フリードが落ちた地点には、気絶して目を回しているフリードと、焦げ臭い臭いがするゆっくりふえいとが転がっていました。

「今日の訓練はここまでつと。藍、そろそろゲンヤさんが戻って来るし帰ろうか。」

「はい。マスター。」

私はそのままゆっくりふえいとを回収。フリードはまだ気絶しているの、そのままにしておきました。

「おーーーーーっばい!!」

それにしてもゆっくりはやて、さっきからまともな事喋ってませんね。ボイスパッチがバグってるんでしょうか？

第3?話 黒歴史(後書き)

?話をギャグ回にした結果がこれだよ!!

色んな意味で反響が怖いです。

以下、お知らせとQ&Aです。

お知らせ

諸事情により、20日と21日は更新できません。22日は更新する予定です。

また、それ以降の年末年始にかけて、不定期更新になる可能性が高いです。

連載停止は考えていません。

Q&A

Q・何でファーストアラートのメンバーが変わっているの？

A・原作通りだとエリオ&アギトになってしまったので、戦力不足だからです。

エリオ+アギトでユニゾンしても、エリオが近接メインなのでAMFで蹴散らされると判断されました。

Q・フリード……。

A・この後ゆっくりふえいと修理代のため、負けを理由に数日間おやつ抜きだったそうです。彼は出番が無い方が幸せなのかもしれません。

第40話 ホテル・アグスタ（前編）（前書き）

数日振りの更新だつて言うのに文字数少ないです。
時間が、欲しいです……。

第40話 ホテル・アグスタ（前編）

ミッドチルダ首都南東地区の上空に、一機のヘリが飛んでいる。
「JF704式」と呼ばれるそれは、機動六課が所有しているものだ。

ヘリの人員は全部で10名と1匹。隊長陣3人にフォワード4人、ヴォルケنزのシャマル、リイン、ザフィーラ、それとヘリパイロットのヴァイスだ。機内では目的地に向かうまでの間、ブリーフィングが行われていた。

今日の任務内容はホテル・アグスタで行われる骨董品オークションの警備である。出品物をレリックと誤認したガジェットが来るかもしれない、というのがその理由だ。

「現場には昨夜からシグナム副隊長とヴィータ副隊長、「他数名」が張ってくれてる。」

「私たちは建物の中の警備に回るから、前線は副隊長達の指示に従ってね。」

上からはやて、なのはの順で方針が指示されて、ブリーフィングは終了した。もしここに純真無垢な桃髪幼女がいたらシャマルの持っているケースについて質問したかもしれないが、それはことは別の世界の話である。

どーもこんにちは。「他数名」の一人、キャロ・シエルです。
いい加減出勤も無くて毎日暇をしていた所に、ようやくこの任務

が舞い込んできました。

とはいっても、私の任務は他のメンバーだけでは手が足りない時のための非常戦力。正直言ってヴィータさんとシグナムさんで対応できない事態なんてまず起こらないので、実質は待機とそんなに変わらなかったりします。

「やっと出番があると思ってたのにね。ズズズッ……。」

「仕方ないですよ。あむ……。」

監視任務だけならスキマ内でも出来るので、藍とのんびりお茶を啜りつつ周囲の状況をモニターしています。ヴィータさん辺りに見つかればキレられる事間違いないですけど、絶対見つからないので問題ありません。

『キャラ、そっちはどうだ？』

『！？……、特に以上ありません。』

『そうか。引き続き頼むぞ。』

不意打ちの念話に驚きながらも、平静を装って返答します。このタイミングで本人来るとか……。

「心臓に悪いです。」

「そう思つのは、内心後ろ暗いからでは？」

「うっ……。」

藍のもつともな指摘が心に刺さったので、気を取り直して真面目に監視することにします。そろそろガジェットが来そうですね。

でも藍よ。お前も同類じゃないですか？

それから数時間後、クラールヴィントのセンサーがガジェットを捕らえ。続いてロングアーチスタッフが詰めている作戦室でも、ガジェットの出現を感知しました。私の「狂気を操る程度の能力」のセンサーにも同数の反応がありました。

ガジェット出現の報を受け、シグナムさんとヴィータさんが前線に、フォワードメンバーはホテル周辺で防衛の指示が出て、副隊長の二人がガジェットに向けて飛んでいきます。アギトはフォワード側にいるみたいです。

「新人どもの防衛ラインまでは、一機たりとも通さねえ。速攻でぶっ潰す。」

「お前も案外、過保護だな。」

『ですよねえ。ワザと何体か通した方が、いい経験になるとおもいますよ。』

「うつせーよ。あとキャロ、さり気の問題発言してんじゃねー。」

『大丈夫ですよ。記録には残ってません。』

こらないって時点でおかしいので、あえて突っ込まないことにしました。

二人はそのまま順調にガジェットを撃破。特にリミッター無しのシグナムさんの勢いは凄まじく、正に無双状態でした。ここは放っておいても良さそうですね。

「となると後は……、藍、モード「白狼」」

スキマを開いてサーチャーの死角に出て、「千里先を見通す程度の能力」で目標を探します。

（「狂気を操る程度の能力」のセンサーには反応無かったけど、これなら……、ヒット！）

私の視線の先にいるのはどこか疲れた顔をした壮年の男性と、フードを被った紫の髪の、私と同じくらいの背丈の女の子。ゼストさんとルーテシアちゃんです。まだ私以外には気付かれてないみたいです。

二人はウィンドウを開いて誰かと会話、スカさんでしょうか？をしていましたが、話が終わったみたいでウィンドウが閉じられました。ルーテシアちゃんの方はコートを脱いでゼストさんに預けてから、召喚魔法の準備に入りました。

『クラールヴィントのセンサーに反応。これは、召喚！？ でも、この魔力反応って……』

『お、大きい！？』

その反応をキャッチしたシャルさんと、それに続いて反応を補

足したシャーリーさんから、動揺している様子が伝わってきました。

うーん、私はどう動くべきでしょうか？ 一応は待機を命じられていますが、いざとなれば好き勝手に行動するつもりです。

このまま行くと、おそらくルーテシアちゃんの力でガジェットがフォワードメンバーの所に転移、それに引き付けられている間に、ガリユースを使って目的のロストログアを奪われてしまいます。

私の取り得る選択肢は

- 1 ・このまま何もせず傍観。
- 2 ・スキマ内から長距離射撃に徹する。
- 3 ・フォワードメンバーの所に行って手伝う。
- 4 ・ガリユースを待ち伏せしてボコる。
- 5 ・ゼストとルーテシアの所に行って以下略。

この五つくらいですかね。さて、どれにしましょうか？

幼女思考中……。

マルチタスクも動員し、一分ほど考えて出た結論は

第40話 ホテル・アグスタ（前編）（後書き）

こんな引き方しておいて何ですけど、明日はたぶん更新できません。明後日も微妙です。仕事さえ無ければ……。

以下Q&Aです。

Q・フリードが久々に登場でかなり強くなっている感じがするのですが

これは藍やキャロによりフリードもチート化してしまっているのでしょうか

A・そもそも昔が弱すぎました。なのでその比較で強く見えるかもしれませんが、チートには程遠いです。

一応回避技術だけは原作よりも成長しています。大回りして回避するタイプなので、 그레이ズのレベルはE〜Dくらいですけど。

では、また次話で。できれば明後日には更新したいです。

第41話 ホテル・アグスタ（後編）（前書き）

前話が過去ワースト2の長さだったのに、今回は過去最長……。明らかに前後編の切り方ミスりました。

第41話 ホテル・アグスタ（後編）

「何だコイツら？ 急に動きが良くなった！？」

ホテル・アグスタ周辺の森で、ヴィータとシグナムはガジェット
の迎撃に当たっていた。

シグナムが大型を担当し、ヴィータが小型を潰す。順調に撃墜数
を稼いでいた二人であったが、そこに変化が生じた。

これまで唯の動的程度でしか無かったガジェットの動きが急に
良くなり、シグナムは剣をアームで受けられ、ヴィータはシュワル
ベフリーゲンを回避されてしまった。異変を感じた二人は一旦上空
で合流し、対応を考えることにした。

「自動機械の動きじゃないな。」

『有人操作に切り替わった？』

『それがさっきの召喚師の魔法？』

そこにシャマルとシャーリーからの予測がもたらされる。先ほど
の魔力反応を見る限り、そうとしか思えない。

「これは不味いな……、キャロ、いるか？ ……キャロ？」

このままだと召喚によって新人達の方に回り込まれるかもしれな
い。そう考えたシグナムは、新人達のフォローを任せるべく、キャ
ロに念話を送る。しかし

「キャロ？ ……、シャマル。」

『何、シグナム？』

「キャラが念話に应答しない。お前の方から繋げてくれるか？」

『分かったわ。』

そう言つて、キャラをサーチするシャルであったが、

『……、そんな！？』

「どうした、シャル。」

『ホテル周囲をサーチしたんだけど、キャラちゃんの反応が見つからないの。さっきまでは確かにいたのに……。』

「はあ？ どうなつてんだよ！？」

シャルからの報告に、ヴィータが思わず声を上げた。その時

『ホテル周辺に魔力反応！ 転送、来ます。』

シャーリーの報告の直後、フォワードメンバーの近くに召喚魔法陣が発生し、全部で11機のガジェットが転送されてきた。

「ヴィータ、ここは私が叩くから、お前は新人達の方に向かってくれ。」

キャラが应答しない以上、自分達のうちの一人が新人のフォローに回った方が良い。どちらかが残るのならリミッターの無い自分の

方が良い。そう考えた末の判断である。

「分かった。ここは任せたからな。」

シグナムの意図を理解したヴィータは二つ返事でそれを了承し、すぐさま新人達の方へと飛んでいく。話し合う時間すら惜しいのは、ヴィータにも良く分かってるからだ。

（にしても、キャロの奴どこほつつき歩いてるんだよ……。）

ヴィータが新人達のフォローに向かう同時刻、リインは魔力反応のあった所へと飛んでいた。

「強力な召喚師、私一人じゃ叩けないまでも、せめて姿だけでも……。」

ユニゾンデバイスであるリイン単独の実力はA+であるが、相手は召喚師。数の暴力で来られた場合、ユニゾン無しだと対処は難しい。ならば偵察の役目くらいは果たそうと、反応があった場所へ向かっていった。

その時、前方にいくつかの小さな影が見えた。そのままこっちに向かってきて

「ッ！ ……キャッ！」

リインへと襲い掛かる。すんでの所で身を擦って回避したが、1つだけ回避しきれず、脇腹のバリアジャケットが切り裂かれ、切り

傷を負ってしまった。

影はそのまま反転し、再びリインを襲おうと飛行してくる。リインはそれに背を向けて逃走。振り向いてその姿を確認した。

「銀色の……虫？」

『リイン曹長、召喚師の方向に、その虫が多数出てきています。』

『一人で行くのは無理よ。退避して新人達と合流して。』

「はいです……。」

たった数体でこれなら、もしこのまま群れに突っ込んだらどうなるか？　それが分かってしまったリインは素直に命令を聞こうとした。しかし、そこで彼女は一人の少女を思い出した。

「あの、キャラちゃんはどうしてますか？　可能なら合流した後、再突入したいです。」

キャラなら召喚虫ごとき容易いだろうし、うまく行けば召喚師の確保も出来る。そう考えての提案であった。しかし

『それが、キャラちゃんとは連絡取れなくて、今どこで何してるか分からないの。』

「……、そうですか……。」

キャラ不在により、その提案は水泡に帰することになった。そうなった以上自分出来ることは、一刻も早くこの虫を振り切り、新人達と合流することだ。

（それにしても、キャロちゃん、どこで何してるんでしょうね？）

「ドクターの探し物、見つけた。」

リンが撤退するのと同じくして、偵察に出しておいた小型の虫、インゼクトから、ルーテシアに目標発見の情報が届けられる。

「ガリユー、ちょっとお願いしていい？ 邪魔な子は、インゼクト達が引き付けてくれてる。荷物を確保して。……うん。気をつけて行つてらっしゃい。」

ルーテシアが言い終わると同時に、彼女のデバイス「アスクレピオス」から、黒味がかつた紫色の光が放出された。光は真っ直ぐにホテルの方へと向かつていき、目標地点で召喚魔法陣を形成。中から召喚虫、ガリユーがその姿を現した。

後はガリユーに任せるだけで、目標の物は確保出来る。そう考えた矢先の事だった。

「……見つけた。」

「管理局か？」

「違うみたい。でも、魔導師かも。」

ガリユーからの情報によると、目標地点に人影が一人いるらしい。一瞬どうしようか迷ったルーテシアであったが

「ガリユー、それ、やっつけて。」

見られた所で目的は変わらない、ならば障害は排除するだけ。
そう結論付けて、ルーテシアがガリユーに攻撃指示を出す。少し
イレギュラーが発生したけど、これでお仕事はおしまい。そんな風
に考えていた時だった。

「……ッ！ ガリユー！！ ガリユー！！」

「どうした、ルーテシア！？」

「ガリユーが……ああああ！！」

日頃の様子からは考えられない程の動揺を見せるルーテシア。そ
れに気付いたゼストが問いかけるも、要領の得ない答えしか帰って
こなかった。

それもその筈である。

ルーテシアがガリユーから送られてくる情報によると

現在進行形で八つ裂きにされている最中なのだから。

少し遡り、ホテル・アグスタ地下にて

「よいしょっと。まだガリユーは来てないみたいですね。」

『そうですね。』

結局私が選んだ選択肢は4番の「ガリユーを待ち伏せしてボコる」でした。

フォワードメンバーの所に行ったり援護したりした場合、みんなの経験を奪う事になるからNG。

このケースだとティアナさんのミスショットが怖いので、万が一を考えて、アギトに気を付けるように念話を送っておきました。多分ヴィータさんが防いだらうけど、念のための保険です。

フォワード陣の対応をアギトに任せた私は、スキマ移動で現場に先回り。移動手段が見つかるのは駄目なので、サーチから隠れて念話の回線も切りました。

『マスター、前方20メートルに魔力反応です。恐らくは召喚魔法陣かと。』

「みたいですね。行くよ、藍。モード「橙」、サブは「龍」で。」

室内戦＋格闘戦になる事を想定して、スピード重視の格闘形態を選択しました。その直後、召喚魔法陣から、ガリユーと思われる虫

が召喚されて……って

「「きもっ……！」」

そのあまりの容姿に、思わず私と藍がシンクロしました。

黒い外見、虫特有の外骨格、ぎよろつとこちらを見てくる複眼……

…それらを総合した結果、私の目の前にいるのは

「人型Gじゃないですかコイツ……！」

アニメで見ていた時は「少しカッコイイかも」なんて思ってたけど、リアルガリューがここまで虫っぽいとは……うねうね動く尻尾も気持ち悪いです。ワンポイントの赤いマフラーが逆にムカつきます。

「ねえ、藍……。」

『何でしょうか？』

「最初は少し痛めつけて帰すだけのつもりだったんだけど、アレ消しても良い？」

『マスター……、私も同意見です。Gは駆除すべきです。』

「決まりだね。虫は決して猫に勝てないって教えてあげないと……、破っ……！」

「……！！！」

ガリューの方を見ると、こちらを排除対象と認識したのか、

一直線で向かってきました。

虫特有のしなやかな筋肉によって爆発的な速度で向かってきたそれに対し、私が選んだのはカウンター。突き出される拳を紙一重で回避し、がら空きの胴体にお返しを

『マスター！！』

「っ！！」

藍からの叫びに近い念話に、半ば無意識にその場から退避します。
直後

ドンッ！！

私のいた辺りで何かが叩きつけられた音がしました。その正体は

『尻尾ですね。』

「回避して正解でしたね。アレ貰ったら冗談抜きで危なかったかも。」

私の素の防御力はそんなに高くありません。不意打ちされて障壁が張れなかった場合、一撃でやられる事だつて有り得ます。今はサブを「龍」にしている恩恵で、いつもよりも身体強化系の効果が高いですけど、それでも避けるに越したことは有りません。

『あの尻尾は厄介ですね。どうしますか？』

「そんなの、決まっていますよ。」

としますが、どうしても片腕ではカバーし切ることは出来ず、全身に10、20、……と、切り傷が増えていきます。

「粘りますね……、けど、「霊撃」!!」

懐に潜り込んでから零距离での霊撃。衝撃波によって壁に叩きつけられ、一瞬の、それでいて致命的な隙が生まれる。

「これで、……終わり!!」

そこに私は一切の躊躇無く、心臓目がけて爪を突き刺した。

ガキイイイイイイ!!

「あれ？」

筈だったのですが、聞こえてきたのは爪が心臓を貫く音ではなく、甲高い金属音。目の前にはガリユーの姿は無く、代わりに壁に突き刺さった私の腕がありました。これって

『マスター、直前で召喚魔法陣の反応を確認しました。恐らくは送り還されたものと。』

「そっか。」

やっぱりそうでしたか。出来ればここで完全に駆除しておきたかったです。

『仕留め切れなかったのは残念ですが、あの様子だと当分は戦闘不能でしょうね。』

「うーん……、ならいいか。それよりも……。」

終わった事を気にしても仕方無いので、気持ちを切り替える。切り替えた先は

「あの人達の探してたロストロギアって何だったんだろう？」

原作だと、レリックじゃ無い、スカさんの個人的な要望ってくらいしか情報がないんですよね。

「折角守り通したんだから、ちょっと見るくらい大丈夫だよね。」

そう自分に言い訳しつつ、私は目標の物が置いてあるトラックの荷台に侵入し、中の木箱を漁っていきます。何だかル・ルシエの里で倉の搜索をしたのを思い出します。

幼女物色中……

「色々珍しい者は有りますけど、どれが目標だったんですかね？あ、これキープキープ。」

『ちょ、マスター！？』

「冗談ですよ。さすがにそんな事はしません。さてと、次で最後です。……ちょ、これって！！」

『！？』

最後の一箱に入ってた物を見て、わたしは思わず声を上げました。藍も息を飲んでいます。

「藍、前言撤回。コレちょっと「借りていく」よ。」

『その方がいいでしょうね。』

藍も同意してくれたので、私は「それ」を手にとってスキマ内に放り込みます。ひょっとすると盗難防止のセンサーとかが付いてるかもしれないけど、スキマ内なら問題無しです。

「でもそうすると、「これ」が無くなったって騒ぎになりそうだし……、そうだ！」

どうやって誤魔化そうかと考えていた所に良い案が浮かんだので、それを実行すべく、今まで切っていた念話の回線を繋ぎ、シャマルさん呼び出しました。

『シャマルさん、聞こえますか？ キヤロです。』

『キヤロちゃん！？ 今までどこ行ってたの？』

驚き半分、心配半分といった様子でシャマルさんが聞いてきます。
そこで、

『ホテル地下に魔力反応が有ったので急行した所、召喚魔法陣と黒い人型の影を見つけました。恐らくは向こうの召喚師のものだと思います。今周辺を探していたんですけど、オークション品を積んだトラックが荒らされています。』

召喚陣は過去形、トラックは現在形なのがポイントです。嘘はついてませんよ。

『そんな！？ こっちのセンサーには反応無かったわ！』

『ガジェットや小型の召喚虫に注意が引かれてましたから、そのせいかもしれませんが。とにかく、調査の為に、こっちにも人手を回してくれませんか？』

『分かったわ。キヤロちゃんはそこで待機していて頂戴。後で説明をお願いすることになると思うから。』

『了解です。』

シャマルさんとの念話を切ってから数分後、現場検証のために数

名の局員が訪れました。私は軽く状況を説明した後解放されて、ここでようやく、私のお仕事が終わりました。

「それにしても、何でこんな物があるんだろうね？」

「ひょっとすると、結界が弱まっているのかもしれないね。」

第41話 ホテル・アグスタ（後編）（後書き）

外道幼女降臨の回。色々とやらかしてくれました。

ガリユーをボロボロにされた拳句オークション品盗難疑惑の掛けられたルールー、マジ可哀相です。

以下Q&Aです。

Q・「橙」のくせに強すぎじゃね？

A・キャラの地力が上がっているおかげです。

あと忘れてしまいがちですが、彼女は立派なEX中ボスです。

それに加えてフィールドも有利に働きました。室内戦限定でなら、壁を足場にして三次元的な機動が出来ますから。

Q・キャラが色々漁ったみたいだけど、指紋とか大丈夫なの？

A・ペスカトーガがグローブ型なので大丈夫です。証拠を残すようなヘマはしません。

Q・キャラが「借りていった」物は？

A・次回解答編です。

では、また次話で。

第42話 天狗と河童（前書き）

今回は全て幻想郷サイドです。

第42話 天狗と河童

「うーん……。」

幻想郷の北部、迷いの竹林から人里を挟んだ反対側に、妖怪の山と呼ばれる場所がある。

その名の通り様々な妖怪がここで暮らしており、中でも天狗、河童といった種族は集団で一つの社会を形成している。数年前からはここに二柱の神様と一人の現人神も加わり、幻想郷のパワーバランスの一角を担っている。

その山の一角にある家の中で天狗が一人、机に座ってうんうん唸っている。右手には筆を持っており、卓上に広げられた紙には、右の方々に文々。新聞と書かれていた。ここまで言えば分かるであろう。その天狗の名前は射命丸文、今は先日行った妹紅への取材内容を纏めている最中である。

「不死人帰還、じゃ少し弱いかな？ 蓬莱人の異世界珍道中……駄目ね、ガセだと思われそう。」

いざ新聞に纏める段階で、文はその難しさにようやく思い至った。彼女は嘘は書かないが、本当であれば何でも書くという訳ではない。あくまで基本は面白さ優先である。

その点からすると、妹紅がしてきた体験は十分に合格なのだが、いかんせんその内容が突飛すぎた。

外の世界とは異なったさらに別の世界。その存在を知っているのは当事者の二人と、二人を送り出した妖怪の賢者、それと、その式くらいだろう。ひよっとすると月の頭脳も含まれるかもしれないが、それでも少数であり、文々。新聞の購読者の大半はその存在を眉唾ものとして受け取るだろう。誰も信じてくれない記事には意味が無

いのだ。

「せめて永遠亭の姫にも取材出来たら良かったんだけど……。何が金閣寺よ、あんな弾幕避けられる訳無いじゃない。」

妹紅への取材が終わった後、文は永遠亭の方にも足を運んでいた。取材の旨を伝えるとアッサリと輝夜の部屋へと通されたが、

「取材ね……別に良いわよ。」

「本当ですか？　ありがとうございま「その代わり」す？」

「タダで教えるっていうのもねえ？　今少し暇なのよ。暇潰しに付き合ってくれたら教えてあげる。」

そう言って輝夜が取り出したのは「新難題「金閣寺の一枚天井」」と書かれたスペルカードだった。

後は想像の通りである。鬼畜スペル、トラウマスペルと名高いそれに文はピチュってしまい、取材は失敗に終わった。その終わり際に

「またいらっしやいな。挑戦はいつでも受け付けるわよ。」

とのお言葉を頂いた。いつでも通してくれはするものの、話を聞くにはあのスペルを攻略する必要がある。文も自分の記者魂にかけてその後数度に渡って挑戦を繰り返したが、未だに攻略はできていなかった。

「おーっす。文、いる？」

このまま記事にしてしまうか、何とかしてあのスペルを攻略する

か、文が悩み始めた時、玄関から声がした。声の主はそのままノック無しで、文の部屋に入ってきた。

「って、何だ、居るじゃん。居るのなら返事くらいしてよ。」

「今忙しいのよ。で、にとり、今日は何の用？」

「いや、別に用って程の事は無いよ。暇だから遊びに来ただけ。文は新聞？」

にとり、と呼ばれた少女は悪びれもせず、勝手に自分の分のお茶を酌んでいる。青い髪のを左右二つに縛り、髪のとと同じ色のレインコート風の服を着ている彼女も立派な妖怪である。本人曰く河童であるらしいのだが、皿があるかは不明である。部屋の中でも決して脱ごうとしない帽子に隠された頭部を見たものは誰もいない。にとりは背負っていたリュックを下ろして文の対面に座り、ずず、とお茶を飲んでいる。こうやって家に遊びに来るは程度には二人の仲は良好である。そんな相手だからこそ、文も取材時の慇懃無礼な口調を止めて、本来の喋り方で対応する。

「そうよ。でも、最近良いネタが無くて困ってるのよ。何か良いネタ持ってるない？」

「そうだねえ。うーん……。」

そうは言いつつも、文はそれ程期待はしてなかったりする。もしネタがあったりしたら、自分はこうやって二年前に帰ってきていた不死人の事など記事にしないのだから。

「最近の話だと、いつも通りの事ばかりだよ。霊夢が妖精の悪戯に

引つかかって、その妖精を追い回していたとか、魔理沙が紅魔館に泥棒に入ったとか、？が大ガマに飲み込まれたとか。」

「いつも通りね。繰り返しは読者も飽きるから使えないわね。」

「でしょ？ あとは……命蓮寺にいる毘沙門天の代理がまた宝塔を無くしたっていう話もあったけど、これはとくに記事になってるしねえ。」

「へ？」

にとりが何気なく言った内容を聞いた文は、一瞬呆気を取られてしまった。なぜなら

「ちょ、それ何？ 私そんなの知らないわよ！？」

「へ？ 文、知らなかったの？ 他の新聞には結構取り上げられてるくらい有名な事件だよ。」

そういえば、文々。新聞には載ってなかったね、と言っているにとりを見目に、文は読み終わった新聞 文以外の鴉天狗の書いた新聞 が積んである山へと向かう。昨日、一昨日と確認していき、三日前の新聞を開いた時、そこに写っていたのは、必死に土下座をして謝っている毘沙門天の代理、寅丸星と、土下座をされて苦笑している命蓮寺の僧侶、聖白蓮だった。

「し、しまったあああああ！！」

なぜ文がこんな面白そうなネタを見逃してしまったのかというと、それは今取材している不死人のうちの一人が原因だったりする。何

とか取材をするために連日に渡って永遠亭を訪問、開いた時間をス
ペル攻略のための考察に費やした結果、他に対する注意が薄れて、
仲間の新聞も口々に読まずに放置してしまったのである。

「にとり、私ちよつと用事が出来たから出かけてくるね。好きに寛
いでて良いから、帰る時は戸締りして行ってね。じゃ。」

「ちょ、文！？……行っちゃった。」

にとりが止める間も無く、文は大急ぎで家を出ていずこかへと飛
んで行ってしまった。数秒もしない内に文の姿は完全に見えなくな
り、部屋にはにとり一人が残された。

「全く、文ったら……。コレ飲み終わったら私も帰ろう。」

自分しかいなくなった部屋でちびちびとお茶を飲んでいるにとり。
対面にいるはずのこの主は不在で、代わりに書きかけの記事が置
いてあった。にとりは暇潰しに、と、それを自分の方に向けて読ん
でみる事にした。

「何々……ふーん、永遠亭のお姫様、帰って来てたんだ。鈴仙が来
るようになったのもその関係かな？」

にとりは輝夜と直接会った事は殆ど無い。霊夢や魔理沙の主催す
る宴会に顔を出した際、たまにちらつと見かける程度で、直接会話
した事などは殆ど無い。

それでもこうして気に留めるようになった原因は、最近ちよくち
よく来るようになった鈴仙である。

最初は永遠亭からの使いとして、

「最近、核エネルギー以外で、新技術を手に入れたりしていませんか？」

と聞いてきた。

にとりにはその心当たりはあった。きつと先日もたらされた「あれ」の事だろう。今までの発明品がオモチャに見える程に高度で複雑な技術に、河童一同は大喜びで食いついた。

しかし、提供者から条件として、この技術を河童以外に話さない事、提供者の情報についても同じである事が提示された。その位なら、と河童一同でこれを了承し、今、河童内では、核に続く技術革新に大いに沸き立っている。

そうだった理由から、その日は適当に誤魔化して帰って貰った。しかしそれからというもの、数日おきに来訪して来るようになり、今ではすっかり顔馴染みになっていた。

「っと、いけない。つい長居しちゃったな。そろそろ帰ろう。」

にとりはいつの間にか空になっていた湯呑みを流しで洗ってから、下ろしていたリュックを背負って文の家を後にする。玄関に隠してある鍵で施錠をした後、自分の住んでいる集落へと飛行していった。

「そついや、今日あたり鈴仙が来る日か。丁度宴会の予定もあるし、楽しみだね。」

第42話 天狗と河童（後書き）

という訳で、正解は宝塔でした。
次回も幻想郷サイドのお話です。

以下Q&Aです。

Q・【蟲を操る程度の能力】で、情報収集&ルールの虫全部手駒にしたら？

A・実は、キャラは虫嫌いだったりします。Gに似たガリユーを八つ裂きにしようとした事からも分かるように、特にGっぽい虫は即殺されます。なので、モード「蟲」はお蔵入りの可能性が高いです。

ちなみに罪悪感はありません。彼女のには、それこそ蚊やハエを潰すのと同じ感覚なので。

Q・私東方良く知らないんだけど、金閣寺って？

A・東方文花帖で登場した高難度スペルです。以下はニコニコ辞典より引用。

レベル9のシーン6で挑むことが出来る。クリア枚数は7枚。

黄金の天井を思わせる横一列の弾に、ランダム性と密度の高いばら撒き弾と一緒に放ってくる。

残り枚数が少なくなるにつれ、次第にばら撒き弾の密度が増してゆくため、フィルムのチャージが追い付かずに被弾したり、撮影の為に潜り抜けるうちに追い詰められ被弾したりと、難易度の高い文花帖の中でもその難易度は群を抜いており、ルナシューターといわ

れる熟練プレイヤーと言えども、成功まで3桁費やすといわれている。

もちろん、普通のプレイヤーではそれ以上費やすのは言うまでも無い。

しかしその余りの難易度に取り付かれ、このスペルに魅せられた人も少なくはない。

彼らの合言葉はただ一つ…「漢は黙って金閣寺」

では、また次話で。

第43話 河童と月（前書き）

前回から結構日が経ってしまいました。仕事がかがか……。
今回も幻想郷サイドです。

次回からは通常営業に戻ります。
そろそろ「東方でやれ」って言われそうなんで。

第43話 河童と月

幻想郷 人里にて

「えーっと、包帯が一つに、後は……風邪薬と傷薬が少し減ってる、
っと。他は大丈夫ね。」

とある民家の一角に、薬箱を開けてガサゴソと中身を確認している少女がいた。

この幻想郷では珍しいブレザーに身を包み、頭部にある兎の耳は、
彼女が妖怪であることを分かりやすく示している。

「狂気の月の兎」鈴仙・優曇華院・イナバその人？ である。

「今回のお代は……はい、はい。それでは、今後ともご贖員に。」

箱に薬を補充した後、使われていた分の代金を貰って民家を後に
する。時々人里に顔を出しては、置き薬のチェックをするのが彼女の
仕事である。

「今の家で最後ね。後は……、山か。……遅くなりそうね。」

朝早くから永遠亭を出て仕事に取り掛かっていた鈴仙だが、たった
一人で一軒一軒回っていたので、全て回るのに時間がかかってしま
っていた。既に日は傾いており、すぐに帰らないと日が暮れてしま
う。

しかし、彼女にはまだ仕事が残っていた。姫様が帰ってきた時に
言い渡された師匠からの指令「河童が手に入れた新技術を調査せよ」
に、今日も赴く予定だからだ。

最初、鈴仙はこれを聞いた時、簡単なお使いだと思っていた。

基本的に、河童は自分達の発明品についてはオープンだ。何か開発した場合、それを秘密にするよりかは、人に見せて自慢したり、それで感心されて喜ぶような気質の者が多いのである。非想天則が良い例だ。

しかし、鈴仙が河童の集落に置き薬を置きに行った際にさり気なく聞いてみた結果は、全員が全員

「無いよ、そんな物。」

であつた。

鈴仙は、集団で口裏を合わせて嘘を付いている可能性、本当に無い可能性など、色々な憶測を考えたが、結局判断が付かなかったのだ、事実をそのまま永琳に報告した。極力自分の考えや憶測を混ぜずに話した結果、それを聞いた永琳の次の指令は「引き続き調査を続行せよ」であつた。

以来、鈴仙は人里に加えて妖怪の山へも定期的に顔を出すようになった。

とはいふものの、妖怪は人間と違ってあまり薬を必要としないので、人里に比べると訪問する頻度はそんなに多くない。あくまで建前は「置き薬の販売」なのである。

そして今日は不幸なことに、人里へ行く日と山へ行く日が被ってしまった。妖怪の山は永遠亭から人里を挟んで反対側にある。素早く用事を済ませたとしても、帰る頃には深夜になっているだろう。

「はあ……、てゐや他の兎達が、もう少し働いてくれたらなあ……。」

「
同僚の兎に愚痴を零しながら、鈴仙は妖怪の山へと飛んでいく。
すでに太陽は赤く染まり、今の鈴仙の気持ちを代弁するかの如く、
段々と沈んでいった。」

「お、鈴仙じゃない。いい所に来たね。」

「へ？ 何？」

「何って、宴会だよ、宴会。鈴仙も混ざってくかい？」

河童の集落に辿り着いた鈴仙が見たのは、酒や料理を持ち寄って
宴会の準備をしている河童の集団であった。その中の一人であるに
とりに声をかけられて、鈴仙は状況を理解した。

「悪いけど、今日は仕事で来てるの。手が開いてるのなら案内して
くれる？」

「ちえつ。付き合い悪いなあ。」

「仕様がなくてしょ。仕事なんだか……、ちょっと待って。」

「鈴仙？」

「帰りが遅くなるので断ろうとした鈴仙だったが、ここで自分に与
えられた指令を思い出した。」

（宴会ね……、チャンスかも。酔っ払ってれば、ついぼろつと秘密を洩らすかもしれないわね。それを抜きにしても河童と仲良くなっておいて損は無い、か。）

「気が変わったわ。やっぱりお邪魔して良い？」

「お、本当かい？」

「本当よ。だから、早く案内してくれないかしら？ 先に仕事を終わらせないと。」

「そうだね。それに、仕事が終わる頃にはこっちの準備も出来てるだろうし、丁度いいや。」

そう言っで、にとりは薬箱の置いてある所へと案内していく。

人里と違い、河童の里では一軒一軒薬箱を置いていく、などということはしていない。妖怪は人間と違い丈夫である。ちょっとした傷なら勝手に治るので、置いてある薬は非常用の物が数点のみである。それも滅多に使われる事が無いので、薬箱が置いているのは河童の長の家に一つだけだったりする。

にとりに案内されて長の家にお邪魔した鈴仙は、慣れた様子で薬を点検していく。今回は何も使用されていなかったなので、古くなっていた薬品をいくつか交換しただけで仕事が終わった。

「お、終わった？ それじゃあ行こっか。」

「あ、ちょ！ 分かったから、そんなに急がなくても！」

「何言ってるのさ？ もうみんな始めてるんだよ。早く行かないと

遅れちゃうつて。」

鈴仙はにとりに引つ張られながら宴会へと向かっていく。前方には酒を酌み交わしている河童の集団があり、何人かは既にでき上がっていた。

（見ててくださいね師匠。ここで必ず手がかりを手に入れて帰りますから！！）

こうして腹に一物を抱えながら、鈴仙は酒盛りに合流した。

しかし、彼女は一つ失念していたことがある。

河童は鬼や天狗と同じ位、酒に強い種族であることを。その結果

永遠亭にて

「すいませーん。誰かいませんかー。」

草木も眠る深夜、永遠亭に、来客を告げる声が玄関から聞こえて

きた。その時、たまたま外に出ていた永琳が玄関に出ると、そこにいたのは一匹の河童であった。

「河童がこんな時間に何の用かしら？ 診療時間はとくに過ぎてるわよ。」

「えつとですねえ……」「ししょ、たらいまもどりまひたあ。」
と、いうわけなんですよ。」

河童 にとりが説明しようとすると同時に、その後ろから別の声がした。暗くて良く見えなかったが、にとりは何かを背負っているらしい。何かと思ってよく見てみると、そこに居たのは頬を上気させ、耳を真つ赤にしている鈴仙だった。

「私らの宴会に誘ったんですけど、この通りでね？ 歩くのも危なっかしかったんで、竹林の案内だけお願いして、こうやって連れてきたんですよ。」

「そうだったの……、ウチの弟子が苦勞をかけたわね。」

「いやいや、コッチも私たちペースに合わせて飲ませすぎましたから。おあいこですよ。それじゃ、私は帰りますね。」

「ありがとうね……てゐ。」

永琳の呼びかけからしばらくすると、廊下の向こう側から、てゐがお供の兎を引き連れてぴよこぴよこと跳ねて飛んできた。寝起きだったのか、その表情はやや不満そうである。

「ふあーあ……何ですか、お師匠様？」

「うどんげを部屋まで運んで頂戴。それと、お客様がちゃんと帰れるように、兎を一匹付けてあげて。」

「はい。……つて、酒臭っ!!」

「あれ〜？ てゐがさんにんにみえる〜。のうりよくつかってないのにらんれらろ〜？」

「はあ、何で私がこんな事……。」

てゐはそのまま、完全に酩酊した状態の鈴仙を背負って廊下を歩いていき、にとりはお供に付けられた兎に案内されて、永遠亭を後にした。永琳は誰もいなくなった玄関を後にして、永遠亭の奥にある一室へと足を運んだ。

「姫様、うどんげが帰ってきました。」

永琳の呼びかけに振り向いたのはこの部屋の主、輝夜である。既に夜も更けていたが、彼女はまだ起きていた。その理由は

「そつ。で、結果は？」

結果は？ とは勿論、鈴仙のお使いの事である。元々は彼女の指示である以上、気にするのは当然のことである。それに対し、永琳は

「河童に酔っ払わされてダウンしています。」

事実そのままに伝えることにした。その結果

「……やっぱり失敗しちゃったのねえ。大方、「酒に酔わせて聞き出そう」とか考えたんでしょうけど、河童に飲み比べで勝てる訳無いじゃない。」

任務は失敗したというのに、輝夜は楽しそうにニヤニヤと笑う。そんな主の様子を見て、永琳も上機嫌である。

「にしても、本当に失敗続きね。いつそのこと貴方が直接行った方がいいのかも。」

「あら、いいんですか？ 私はなるべく姫様の意に沿うように動いたつもりだったのに。」

「冗談よ。貴方が行けばすぐに聞き出せるかもしれない。でも、それじゃあつまらないもの。」

輝夜にとって、この調査はそんなに急を要する類の物ではない。夢幻珠の作成と、それに伴う自分達の魂のサンプルの収集。それらは既に果たされてしまった過去の事であり、今すぐに何かする必要があるような緊急性は無い。

故に、輝夜は態と回りくどい道を選ぶ事にした。

その意図を察した永琳はあえて事情を理解していない鈴仙に役目を譲り、自分はその報告を待つのに留まった。その結果、鈴仙は河童と交流を持つ事になり、今日のように宴会に誘われる程度には仲良くなっている。ひよつとすると、他人との交流が少ない弟子のことを考えて、というのも理由にあるのかもしれないが、その心は永琳本人にしか分からない。

「それで、どうします。まだ続けますか？」

「そうねえ……。鈴仙の報告は色々楽しめたし、そろそろいいかしら。……見てるんでしょ？ 八雲紫。」

二人しかいないはずの空間に輝夜は呼びかけた。その数秒後

「あらあら、気付いてましたの？」

何も無い所から声がしたかと思うと、その空間が縦に裂けた。裂けた空間の内部からは無数の目が見えて、こちら側をギョロリ、と見ている。キャロがいつも使っているスキマ、そのオリジナルである。

スキマは更に広がっていき、やがて一人一人分が通れる大きさになり、そこから金髪の女性が歩いて出てきた。「幻想の境界」「妖怪の賢者」八雲紫である。

「当たり前でしょ？ 月の姫をナメないでもらいたいわね。で、いくつか聞きたいことがあるんだけど？」

「あら、何かしら？ この私に質問なんて。今暇潰しで忙しいみたいだけど、そっちはもう良いのかしら？」

「二年も潰せば十分よ。それで、単刀直入に聞くけど、貴方、夢幻珠の作成に一枚噛んでるでしょ？」

「……あら？ 何ですか、それは？」

輝夜の問いかけに、紫はいつもの胡散臭い笑みのまま答える。その表情から何を考えているかを読み取るのは不可能に近いだろう。

「しらはつくれないで良いわよ。ネタは上がってるんだから。」

「……。」

「夢幻珠は私達幻想郷の住民の能力と、外の世界のテクノロジーが合わさって出来ている。そんな物を作るような可能性なんて二つしかない。一つは幻想郷に住んでる河童が、自力で技術革新したケース。でも、鈴仙の調査で「少なくとも河童だけで作ったという事は無い」っていうのは分かってる。だとすると、残っているのはあと一つ。」

「へえ。で、それは何かしら？」

「幻想郷の事を知りつつ、こつちと外とを行き来できる存在が一枚噛んでいる場合。つまり、貴方のことよ、八雲紫。」

「……。」

「そう考えると、私達があの世界に飛ばされたのも引つかかるのよねえ。夢幻珠を持っていたキャラっていう子。あの子についても何か知ってるんじゃない？」

確信を持って問いかけてくる輝夜に対して、紫は未だに胡散臭い笑みを保ったままであった。しばらくして

「……そうね。まずは、どこから話しましょうか？」

「どこからでも良いわよ。時間が足りないのなら、私の能力で須臾を永遠にしても良いんだから。」

そして月明かりの元、輝夜と永琳、そして紫、三人だけの秘密の話が行われた。まだ夜は始まったばかりである。

第43話 河童と月（後書き）

伏線回収の回。正解は殆どの方の予想通り、ゆかりんでした。

第44話 とあるマッドと召喚少女（前書き）

タイトル名変更しました。

いくら何でも詐欺すぎたので。

第44話 とあるマッドと召喚幼女

スカリエッツィの研究施設にて

人口の光が照らす、どこか薄暗く陰気な名感じのする地下施設。その一角に、一人の少女が立っていた。

視線の先には医療用のポットが二つ。一つには妙齡の女性が、もう一つには人間そっくりな姿をした虫が入っており、いくつものコードによって別の機械に繋がれていた。

女性の名はメガーヌ・アルピーノ、虫の名はガリユー。ポットを見ている少女、ルーテシアの母と召喚蟲にあたる存在である。

「お母さん……、ガリユー……。」

ルーテシアはずっと無表情のままであったが、その声は若干沈んでいるように聞こえる。特に、視線がガリユーの右腕が「あった」場所に向いた時、それはより顕著になった。

「……それじゃ、また来るからね。」

しばらくの間ポットを眺めていたルーテシアだったが、そう言い残して部屋を去って行った。そのまま歩いていった先は、二人の治療を担当しているドクターがいる部屋だった。ルーテシアが入室すると、そこには大きなスクリーンに何かを映しながら、手元のパネルで何かを操作している白衣の青年がいた。「無限の欲望」ジェイル・スカリエッツィである。

「おや、帰って来ていたのかい、ルーテシア。」

「お母さんとガリユーの容態は？」

振り向く事無く、パネルを操作しながら問いかけるスカリエッテ
イに対し、ルーテシアは気にする様子もなく、こちらも前振り無し
で本題に入った。どちらも社交辞令や礼儀とは無縁な人種故、逆に
こういったやりとりの方が楽なのだ。

「母親の方はいつも通りだよ。良く言えば安定してる、悪く言うな
ら、目覚める様子は見られない。」

「そう。……ガリユーは？」

「あちらに関しては問題無いよ。傷の治療ももうすぐ終わるだろう
から、あと数日もすれば目覚めるだろう。」

「そう。」

「ただ、切り落とされた右腕に関しては、そうはいかないね。再生
させるにしても、義手を付けるにしても、どちらも時間が必要だ。」

ガリユーの無事を聞いて安心したルーテシアであったが、腕の話
を聞いた所で再び沈んでしまった。

それと同時に思い出したのは、ガリユーから送られてきた情報。
自身が切り刻まれるという情報に混じって送られてきた敵対者、
「桃色の髪をした少女」についての情報を思い出し、ルーテシアは
自分の体が熱くなるのを感じた。

（私には心は無いけど、これを言葉で表すなら、怒り、が一番近い
のかな？）

そんな風にとりとめのないことを考えながら、ルーテシアはスカリエッティの方へと目を向ける。視線の先には、相変わらず忙しうにパネルを操作しながら、次々と切り替わる画面をにらめっこをしているスカリエッティがいた。

「ドクターは何をやってるの？」

「気になるかい？ 私のオモチャの動作テストだよ。破壊されるまでのデータが欲しくてねえ。」

「壊されちゃうの？」

「私はあの鉄屑に、直接戦力は期待していないんだよ。私の作品達がより輝くために、デコイとして使うガラクタさ。」

「そう……、レリックは関係無いんだ。」

「レリックなら真っ先に君に教えているよ。で、どうする？ 見ていくかい？」

「……そうする。今日はここに泊まる予定だったから。」

「そうか。では、後でウーノにでも案内させよう。」

そう言い残し、スカリエッティは動作テストの方に集中し出した。ルーテシアは近くにあった椅子に座り、寝るまでの間のちよつとした暇潰し、そんな軽い気持ちでぼうつとスクリーンを眺めていた。

それと同じ頃、機動六課にもガジェット出現の報は届いていた。部隊長であるはやてが作戦室に到着した時には、既にロングアーチ隊員は配置に付き、ガジェットの情報を集めている最中であった。

「航空？型、四機編隊が三隊、十二機編隊が一隊。」

「発見時から変わらず、それぞれ別の底円機動で旋回飛行中です。」

「場所は何にも無い海上……。レリックの反応も無ければ、付近には海上施設も船も無い。」

「まるで、打ち落としに來いと誘っているような……。」

「そうやね……。」

シャーリーとルキノの報告を聞いたはやては即座に状況判断を始める。補佐に付いているグリフィスが自身の感想を述べると、はやてもそれに同意した。それから考えを纏めるにあたって、はやては別角度からの意見を聞くことにした。

「テストロッサ・ハラOWN執務官、どう見る？」

「犯人がスカリエッティなら、こちらの動きとか、航空戦力を探りたいんだと思う。」

「この状況なら、こっちは超長距離砲撃を撃ちこめば済むわけやし……。」

「一撃でクリアですよー！」

フェイトがスカリエツィサイドの意図を考察し、はやてもそれについて考える。ラインが調子に乗っているが、ここはスルーしてあげるのが優しさだろう。

「うん。でも、だからこそ、奥の手は見せない方がいいかなって。」

「まあ実際、この程度の事で、隊長達のリミッター解除って訳にもいかへんしな。高町教導官はどうやる？」

フェイトはラインの提案をやりわりと否定。はやてもそれに同意する。はやての言う通り、この程度の事態でリミッター解除なんかしてられない。一旦解除したら、再び許可を取るのに複雑な手続きやら何やらで時間がかかるからだ。

「こっちの戦力調査が目的なら、なるべく新しい情報を出さずに、今までと同じやり方で片付けちゃう、かな？」

「それで行こ。」

二人の提案になのはも同意。作戦の目処が立った所で、全員が動きだそうとしている、そんな時であった。

「あのー、ちょっといいですか？」

「………!?!?」「……」

作戦室の後方に立っていたのはとフェイト、その更に後方から、不意に声が掛けられた。

いきなりの事に驚いた六課メンバーが振り向いた先にいたのは、

桃色の髪の毛の、10歳前後の少女であった。

第44話 とあるマッドと召喚少女（後書き）

何とか……書き上げたんだ……ぜ……。

これで年内の投稿は最後になります。以下Q&Aです。

Q・まさかリインフォースが幻想入りしたのか？

じゃないとユニゾンデバイスは作れないと思う！

A・無限珠は厳密にはユニゾンデバイスではありません（六話、十三話参照）。

元々幻想郷の技術だけでも、能力付与して弾幕を張る、陰陽玉とかのオプションは製作可能でした（東方地霊殿より）。

そこにリンカーコアの解析式とデバイスの技術、サポートに付く妖怪の代わりの分霊体を混ぜ合わせた結果が無限珠です。

以上、設定に追加しておきます。

それでは皆さん、良い年末を。

第45話 お節介は魔王と凡人のために（前書き）

ちょっと長くなりそうだったので、今話を次話と分割して中編的な話にしました。

それに伴い、44話のタイトルも変更しました。

第45話 お節介は魔王と凡人のために

「あのー、ちよつといいですか？」

「「「「「！？」」「」「」」

いきなりの後ろから声をかけられて驚いたのか、六課メンバー全員がこつちに振り向きしました。

なのはさん、フェイトさん、はやてさん、リンちゃん、シャーリーさん、ルキノさん、みんな大小なりとも混乱しているみたいです。

「キヤ、キヤロ！？ 何でここに？」

「フェイトさん、肩揺らさないでください。一応、民間協力者ですからね。」

「……そういえば、そうだったね。」

「……ひよつとして、忘れてました？」

「……ごめん。」

今まで殆ど六課に寄り付かなかったせいか、私が民間協力者だつて知ってる人が結構少ないんですね。フェイトさんもその中に入る筈なのに、こうやって忘れられていました。

フェイトさんは外回りがメインなので更に接点が無かった、っていうのもあるんですけど。ティアナイイベントが終わるまではあまり関わらない方針だったので仕方ないんですが、これは地味に効きま

す。うつつ……。

「えーっと、キャラちゃん、でいいのかな？」

「あ、はい。民間協力者として六課に出向しているキャラです。初めまして。」

フェイトさんから開放された所でのなのはさんが訪ねてきたので挨拶しました。？異変の時を除けば、何気になのはさんとは初対面だったりします。

「陸士108部隊から貸し出して事で来てもらっとなるよ。で、キャラちゃん、どうしたん？」

「えっとですね、今回の出勤ですけど、私もメンバーに入れてもらえませんか？ 私、まだガジェットとの戦闘経験が無いので、そろそろ戦っておきたいんです。」

「こつちとしては、あんまし切り札見せたくはないんやけど……。」

「そこを何とか。いざという時に役立たない切り札なんて、意味ないでしょ？ それに私なら、リミッター外す必要も無いですし。」

「……分かった。キャラちゃん、お願い出来るか？」

「了解です。」

機動六課 ヘリポートにて

真夜中のヘリポートの下、スターズ分隊とライティング分隊が集合している。その中には、今日の昼間、なのはとの模擬戦で撃墜されたらしいティアナの姿もあった。ヘリは既にエンジンがかかっており、いつでも出発できるようになっていた。

「今回は空戦だから、出撃はフェイト隊長とヴィータ副隊長の二人ね。」

「そっちの指揮はなのはとシグナムだ。留守を頼むぞ。」

「……はい!」「……はい……。」

ヴィータの言葉に、新人達が返事をする。ティアナはまだ元気が無いみたいだけど……。

「それからね、フォワードの皆に、私から話があるの。待機の間、時間いいかな?」

「……はい……?」「……」

話があると言ったなのはに戸惑い混じりで返答する新人達。昼の件が関係しているのには、薄々気付いてるみたいだ。

「ヴァイス、もう出られるな?」

「乗り込んで戴けりゃ、すぐにでも!」

シグナムとヴァイスに促されて、私とヴィータはヘリに乗り込む

ことにした。まず最初にヴィータが乗り込み、次に私だ。

「それじゃ、行ってくるから、留守はお願いね。」

『頑張つてね、なのは。』

「行つてらっしゃい、フェイト隊長。」

『ありがとう、フェイトちゃん。』

こつそり念話でなのはを応援して、私はへりの中へと入っていった。

「それじゃ、行きますぜ！」

ヴァイスの声とともにプロペラが回りだし、へりは空中へと飛んでいく。なのは達の姿がどんどん小さくなっていき、やがて夜の闇に隠れて見えなくなった。

「……もう良いですか？」

「へ……、つて、キャロ！？」

「お前、そんな所に隠れてたのか。」

「仕方ないじゃないですか、ここ位しか無かつたんですから。」

そう言つてへりの隅っこにある収納スペースから出てきたのはキヤロだ。服に埃が付いたのを気にしてるらしく、体に付いた埃を見ては手で払っている。

「にしても、時間かかりましたねえ。ひよつとして、ティアナさん

が暴走して、シグナムさんに殴られたとかありました？」

「別にそんな事起こってねえよ。打ち合わせどおりにしたさ。」

「なら良いんですけどね。」

そう言つて、キャロは埃を払うのを止めてヴィータの隣に座った。私の隣に座つて欲しかった、というのは秘密だ。

打ち合わせつていうのは、キャロの出撃が許可された後、キャロが

「私の代わりに、なのはさんに待機してもらつようにはできませんか？」

と発言したのがきっかけで起こつた物だ。最初はその意図が分からなかつたけど、聞いてみると成程と思つた。

「その時間を使つて、ティアナさんとじっくり話をして欲しいんです。余計なお節介だつていうのは分かっていますけど、このままだといけないと思つんです。」

っ！ と息を飲んだ声がなのはの方から聞こえた気がした。今は出勤によつて棚上げされている問題だったけど、いずれ解決すべきであるのは明らかだ。

「はやてさん、どうですか？」

「そうやなあ……、なら、それで行こか。戦力的には三人いれば十分やし。なのはちゃんもええか？」

「……うん。そうだね、ちゃんと話してみるよ。ありがとうね、キャロ。」

「……唯のお節介焼きですよ。余計なお世話だったかもって、今でも思ってますから。」

なのはに感謝されたのが以外だったか、キャロはそっぽを向きながら返事した。今まで見た事が無いキャロの反応に、わたしは少しだけ得した気分になった。

その後、キャロから追加で提案があった。まとめると

- ・ ティアナに出動待機から外れて貰うことは知らせない。今の精神状態だと、切り捨てられたように受け取られるから。どのみち話をするのでどっちだろうと関係無い。
- ・ 話はフォワードメンバー全員と一緒にすること。これは全員に知ってほしいっていうのと、ティアナに疎外感を感じさせないため
- ・ キャロの存在は今は秘密。理由はティアナのコンプレックスを刺激する原因になるから。

の三つだ。自分は経験が積める、自分の参戦によって出来た余裕で、今まで棚上げにしていた問題を片付けられる。それに加え、「お話」を利用して、ティアナが出動待機から外れた事を知らせずに、それと同じ状態に出来る。一石三鳥だと締めくくって、キャロの提案は終了した。特に問題も見当たらなかったもので、これらはそのまま採用される事になった。その後、キャロはフォワードの皆に気付かれないために、先回りしてヘリの中に隠れていた、というわけだ。

……正直言って、私よりも六課の事を見ているんじゃないかと思っただ。

ちょっと気になったのでキャロに聞いてみた所、今まであまり六課に関わらずに影みたいに動いていたのは、ティアナのコンプレックスを気にしていたのも原因らしい。つまり、六課の発足当時からそれに気付いてたって事になる。私、忙しいのを理由に、ちゃんと皆の事見てなかったのかな……。

「はあ……。」

「どうしたんですか、フェイトさん？」

「へ？ 私、何か声に出してた？」

「思いつきりため息ついてたぞ。そろそろ出撃だけど、大丈夫か？」

「うん、大丈夫。」

「そろそろ目標地点です。ハッチを空けますんで、出撃準備お願いしやす。」

「了解。」

キャロとヴィータ、それにヴァイスから声を掛けられ、私は思考をシフトさせる。敵情報、バルディッシュと作戦室間の情報リンク等、必要な事を確認していると、キャロの方から話しかけてきた。

「フェイトさん。」

「どうしたの、キャロ？ 何か問題でもあった？」

「いえ、そうじゃ無くて。こうしてフェイトさんと一緒に戦う事に

なるのって、何だか不思議な気がして。」

「……そう、だね。」

そう言われて思い出すのはかつての記憶。かつて追う者と追われる者という立場だった時、何度も出会って、そして

「あれ？ フェイトさん？」

「何でも無いよ。大丈夫、大丈夫だから。」

何度も逃げられて、その度にかかわれた記憶が再生される。どうしよう、今から出撃だっていうのに、ちよっと鬱になってきた。

「フェイト、キャロ、そろそろ行くぞ。」

「あ、はい。」

「うん、分かった。」

沈みかけた気持ちを奮い立たせて、ヘリのハッチの開いた部分から外を見る。周囲はすっかり暗闇だけど、ガジェットであるう影が飛び回っているのが見えた。

「それじゃあお三方、気を付けて。」

「おう、……アイゼン！」

「うん。……バルディッシュ！」

「はい。……ペスカトーガ!」 『藍、モード「七曜」サブは「白狼」で。』
『了解です。』

さあ、戦闘開始だ。

第45話 お節介は魔王と凡人のために（後書き）

今回は出撃直前まで。バトルを期待していた方はゴメンナサイ。
以下Q&Aです。

Q・ルーテシアはキャラに対してどんな感情を抱いているのか少し
分かりにくいですね

A・ルーテシア自身良く分かっていないと思います。自分には心が
無いつて思い込んでいるせいで、自覚しようとしなから。

Q・現時点でキャラの事を知っている六課メンバーは？

A・顔見知りには八神家とフェイト、それからヴァイス。ヴァイスと
は、キャラが悪戯を仕掛けたのを切欠に、度々自販機のジュースを
たかる程度の仲です。フォワードメンバーはアギト以外は知りませ
ん。

なのはとロングアーチスタッフについては、書類上は知っている、
という程度です。なので、今話が初対面です。

では、また次話で。

第46話 風神幼女（前書き）

いつの間にか総合PV100万突破、ユニーク10万突破していました。

いつも読んでくださっている皆さん、ありがとうございます。

今回の文章量が過去最高に。やっぱりバトルがあると長くなります。

第46話 風神幼女

「スターズ2、ライトニング1、及びエキストラ1、全員出動しました。」

「敵集団接触まであと距離5000。増援の反応はありません。」

機動六課の作戦室にアルトとルキノの声が響く。ディスプレイにはヴィータ、フェイト、キャロが飛行している姿と、ガジエットの姿がそれぞれ映っており、はやてとグリフィスがそれを見守っている。シャーリーはここにはいない。なのはやフォワードメンバーの事が気になるからと、はやてに許可も貰ってから話し合いに参加することにした。きつと今頃、不器用な皆の緩衝材として頑張っているだろう。

ちなみに、エキストラ1というのはキャロの作戦コードである。初めは「子鬼」からオーガ1になりそうだったのを、キャロが猛反対した結果これに落ち着いた。

「距離3000……2000……1000……エンゲージ！」

「頼むで……三人とも。」

私達三人はヘリから降下した後、バリアジャケットを展開し、目標地点まで飛行していきます。やがて前方に、ガジエット？型の編隊が見えてみました。

「居やがるな……。キャロ、オメーはどうする？」

「今回はなのはさんの代わりなので、後衛に回ります。フェイトさんもそれで良いですか？」

「そうだね。私とヴィータはどつちかと言うと前衛寄りだから、そっちの方が助かるかも。でも、大丈夫？」

「何がですか？」

「AMF。接近戦ならともかく、遠距離からだと敵しくない？」

「大丈夫です。ちゃんと対策は考えてます。」

「そつか。じゃ、お願いね。」

「はい。……こちらエキストラ1。中距離火砲支援、いきまーす！」

私はガジェットから少し離れた所で停止。真っ直ぐ切り込んでいく二人の位置を確認しつつ、スペルを発動させました。

「火符「アグニシャイン」！」

宣言と同時に、「火水木金土日月を操る程度の能力」によって変換された炎の弾幕が、一番前に出ていたガジェット四機編隊へと向かっていきます。

それに対して、ガジェットは回避行動をとりつつAMFを展開しましたが、炎弾は勢いを衰える事無くガジェットに殺到。四機の内二機を火達磨にしました。

AMFが無効化できるのは魔力結合だけですからね。こうやって

変換してしまえば、その効果は意味ありません。

辛うじて回避に成功した二機は、そのまま弾幕の隙間を縫って脱出に成功しましたが

「はあああああつ！」

「うおおおおおっ！」

そこにフェイトさんとヴィータさんが突撃。片方は真つ二つに、もう片方はボディをくの字にひしゃげさせて落下していきました。

「ふむ、なかなか興味深いね。」

ガジェットから送信されてくる映像を見ながらそう漏らしたのはスカリエッティ。送られてくるデータと照らし合わせつつ、戦況を見つめている。

「さっきの攻撃、一見回避できた様に見えたけど、どっちかと言うと「させられた」みたいだね。連携も考えて回避プログラムを修正するとなると、色々難しそうだ。」

別ウィンドウには、先ほどキャラロが放った弾幕を遠距離から見た物が映っている。よく見ると弾幕には穴があり、それが一本の道のようになっていた。それを辿って回避した結果が、残りの二人に待ち伏せされて落とされた二機である。

スカリエッティが感心している間にも戦闘は進んで行く。次に接

敵した四機編隊も同様の手口で落とされた。但し今度は、炎弾ではなく水の槍でだ。

「炎に、水、それに金属か。六課にこんな人材がいたとはね。」

スカリエッティが注目した少女は現在、最も規模の大きいガジェット編隊を相手に鋼の刃を撃ち続けている。十二機いたガジェットはその数を減らし、数体を残すのみとなっていた。このままだとあと少しもしないうちにこの編隊は壊滅し、最後に残った四機編隊も同じ目に遭うだろう。

「このまま終わるといふのもつまらないね。……そうだ。」

何か思いついたのか、スカリエッティは手元のパネルを操作し出した。それと同時に、ウィンドウには警告を示すサインが出たが、スカリエッティは何の躊躇も無く実行を選択した。

「これは私からのプレゼントだ。さて、君達は喜んでくれるかな？」

最初の編隊を撃破した後、私達は残りの編隊への対処に当たりました。

私は属性変換がAMFに有効かを一通り試すため、次に当たった四機編隊に対しては水符「プリンセスウンディネ」で水の槍を、その次の十二機編隊には金符「メタルファティーグ」で鋼の刃をぶつけて、その効果を確認しました。

「サンダーレイジ！」

「アイゼン！」

Schwalbefliegen.

私が撃ち漏らした、というか態と隙間を開けて誘い込んだガジェットをフェイトさんとヴィータさんに片付けてもらっています。即席の連携ですけど、思いの他有効です。

そうこうしているうちに、十二機編隊も全て撃破。あと残っているのは、一番後方に位置していた四機編隊だけです。

「これでラストですね。行きますよ、フェイトさん、ヴィータさん。」

「うん。いつでも。」

「おう。」

「土符「レイジトリリトン」！」

土属性のスペルを発動。尖った石槍が一旦左右に分かれて打ち出され、その後お互いに交差するようにガジェットの集団へと向かっていきます。今までに比べると遥かに回避困難な弾幕。仮に回避できても、フェイトさんとヴィータさんが待ち構えています。

（これで終わりですか……。出来るなら全属性試しておきたかったなあ。）

そんな事を考えているうちに、弾幕がガジェットに向かって

「ええ！？」

「な!？」

「こいつら、急に動きが!？」

このまま終わるのかと思っていた矢先、ガジェットが急加速。弾幕をスピードで無理矢理振り切りました。突然のことにフェイトさんとヴィータさんの反応も遅れて、結局一機も落ちることはありませんでした。

そして、ガジェットはそのスピードを落とす事無くこちらに光線を撃ってきます。私とフェイトさんはそれを回避、ヴィータさんは障壁と回避を使い分けてそれを凌いでいます。

『どうする？ あの時さだとちよつと面倒だぞ。』

『ですねえ。どうして急に速くなったのかは置いておくとして、これだと当てるのも大変ですし。』

『見た感じ、リミッターを外したみたいだね。それこそ、お互いにクラッシュしてもおかしくなくくらいに。』

それは……、不味いですね。

ただ速くなったただけならともかく、それでお互いにぶつかってしまつと、大量の破片が辺りに撒き散らされる事になります。ここは海上ですけど、岸からそう遠くありません。万が一破片が岸まで届いたら、余計な被害が生まれます。

『……ヴィータ、キャロ、結界をお願いできる？ それと、はやて部隊長、リミッター解除申請を。』

『フェイト？』

『フェイトさん？』

『フェイト隊長！？』

『結界張って破片の飛散を抑えてから叩く。私なら、あの速度にも対応できるから。』

確かに、被害を抑えるならそれがベストです。でも

『おい、フェイト！ それだと』

『うん。リミッター解除して真・ソニックフォームで決める。大丈夫、これなら直ぐ終わる。』

『そうじゃなくて！ こんな所でリミッター解除する気か！？』

『本当なら使わないでいたいけど、後悔はしたくないから。』

やっぱりそうなりますよね。あの速度だとリミッター解除しないとキツイですから。だけど

『駄目です、フェイトさん。』

『キャロ？』

『出撃前に、なるべく奥の手は見せないように、って言ってたでしょ？ それに、一度リミッターを解除すると、再申請に時間がかかるの知ってるんですから。』

『私も反対。こんな所で使って、肝心な時に動けへんのは嫌や。』

『でも、そうでもしないと……。』

分かってます。だから

『私にやらせてくれませんか？』

『キャロ？』

『フエイトさんとヴィータさんで結界を張ってください。私ならリミッター解除無しで何とかできます。はやて部隊長、いいですか？』

『……キャロちゃん、大丈夫なんやな？』

『はい。』

『分かった。部隊長より通達。ライトニング1とスターズ2は結界を、エキストラ1は結界内のガジェットの撃墜を。』

『おう。』

『……了解。』

『了解です。』

「アイゼン、封鎖領域。」

Gefangnis der Magie .

「バルディッシュ、結界のサポート、お願い。」

Yes Sir .

ヴィータが結界を展開し、中にガジェットを閉じ込める。私はサポートとして、一緒に結界の維持に当たる。ミッド式とベルカ式の違いがあるので、「無いよりマシ」程度にしかないんだけど。

上空には相変わらず超高速で飛行しているガジェットの一群。既に何度かニアミスを繰り返しており、いつ衝突してもおかしくない。ここだけの話、結界を張って同士討ちするまで放置という手もあるのだけど、それだといつになるのか分からない。周囲の安全と安心のためにも、いち早くこれらを撃破する必要がある。

「キャロ。」

「何ですか、フェイトさん？」

「本当に大丈夫？」

「心配性ですねえ。ま、見ててください。」『藍、モード「鴉天狗」、サブは「博麗」。』

「あ、それって!？」

「そういう事です。じゃあ」

行ってきます、と言い残し、キャロはガジェットの方へと飛行していく。その背中には、かつて見た黒翼が展開されていた。

「行きますよ。」

幻想風靡

そこからは、まさに一方的だった。

気付いた時にはガジェットのうちの一機の翼が折られ、その部分から煙が出ていた。

それに驚く暇も無く、そのガジェットを中心に何本もの線が走り、一本走る度にガジェットのボディが削られていく。秒間5〜6回のペースでボディを削られたガジェットは、最後にはボディの中心に大きな風穴を開けて墜落した。

『え！？ 今、何が起こったん！？』

『ちょっと待って下さい、今スローで再生しま……嘘！？』

『マジかよ……。』

スロー映像を見た全員が信じられない、といった顔をしている。

そこには、ガジェットに向かって超高速での突撃を繰り返している
キャラの姿が映っていた。私は辛うじて目で追う事が出来たけど、
それでも驚きだ。

はやて達が映像を見ている間にも、キャラの攻撃は続いていく。
音速並の速度で突撃してくるキャラ相手に残りのガジェットも回避
行動を取ろうとしたけど、それらは一切無駄に終わり、ボディのあ
ちこちから煙を上げて墜落していった。

『エキストラ1、ガジェットを全機撃破。周囲に敵影はありません。』

『……よっしゃ、三人とも疲れ様。まだ現場検証とか残ってるけど、とりあえず三人は結界解いて戻って来てええよ。』

驚きの反動か、すっかり静かになってしまった作戦室に、ルキノ
が状況を報告した。それを聞いてこっち側に戻ってきたはやてから、
作戦終了が告げられた。

「……とりあえず、帰るか。」

「そうだね。キャラ、帰るよ。……キャラ？」

キャラに声を掛けて帰ろうとしたんだけど、何故か返事が無い。
キャラの方を見ると、フラフラな機動でこっちに飛んで来るの
が見えて

「ど、どうしたの！？ 大丈夫！？」

まさか、さっきの戦闘で体を壊したとか？

「……した。」

「へ？」

「ちょっと……酔い……ました……。」

ええええええええええええっ！？

説明しよう！

「酔い」というものは、三半規管からの情報と、視覚からの情報の食い違いによって発生するものである。

車酔いを例にとると、三半規管は車の振動を感知しているのに、視覚は常に同じ風景だったりすると、かなり酔いやすくなる。車内で本を読むと酔いやすいというのはこの為である。反対に、酔った時は外の景色を見るのが良いというのは、動いている景色を見る事で、三半規管と視覚の情報を統一させるからである。

逆に、視界が動いているのに三半規管は何も感知していない、という場合でも酔ってしまう。俗に言う3D酔いがこれにあたる。

今回の場合、キャラは超高速での機動により、視界がめまぐるしく変化した。だというのに、キャラの体には「空を飛ぶ程度の能力」によって全くGがかからなかった。そのため、3D酔いと同じ状態になってしまったのだ。

「あーうー、気持ち悪い……。」

「自業自得だ。」

「頑張つて、キャラ。もう少しでヘリだから。」

私の背中に負われているキャラを励ましながら、私達はヘリへと飛行していく。キャラがまともに飛行できない状態だったので、私がこうしておんぶして連れていっている。ウィータは相変わらず辛口だけど、何となく心配している様子が伝わってきた。

にしても、本当に軽いなあ。こんな小さな体で頑張ってくれたんだよね。……お疲れ様。

「もう……無理。」

「へ？　キャラ？」

「駄目……。吐く……。」

ちよ、それって！？

さっきも言ったけど、今キャラは私が背負っている。まともに飛行できない以上、ヘリに着くまで下ろす事は出来ない。つまり、この状態でリバースされたら私の後頭部に

「キャラ、あとちょっとだから！！　もうちょっとだけ我慢して！！」

「フェイトさん……。ゴメン……。なさい……。」

い、嫌あああああああ！！

同時刻 スカリエッツィのラボにて

「ふ、ふふふふふふふ……。素晴らしい、実に素晴らしい！！」

温かみを感じさせない研究室にスカリエッツィの笑い声が響き渡る。眼前のディスプレイには先程の戦闘の映像が映し出されていた。

「これは思ってもいない収穫だ！！ まさか機動六課にあのようなサンプルがいたとは、実に興味深い！！」

喜びの感情を隠そうとせず、スカリエッツィは笑い続ける。それを同時に手元のパネルを操作して、自身の秘書を呼び寄せた。それから少しして部屋のドアが開き、スカリエッツィの秘書、ウーノが姿を現した。

「どうしました、ドクター？」

「やあウーノ。早速で悪いんだが、この魔導師のデータを集めてくれないかな？ 中々に興味深いサンプルなんだ。」

「分かりました。」

「それと、ルーテシアがここに泊まるのでね、部屋に案内してやってくれ。」

ウーノに背を向けてモニターと睨めっこしたまま、スカリエッティは用件を簡潔に伝えた。これで用は終わった、とばかりにスカリエッティは再びモニターに集中し出したので、ウーノは指示に従って動き始めた。

（まずはルーテシアお嬢様から。それが終わったら調査開始ね。）

自身の予定を確認しつつ、ウーノはルーテシアの方へと歩いていた。

「ルーテシアお嬢様、私について来てください。……ルーテシアお嬢様？」

ルーテシアに声をかけたウーノだったが、返事が無いのを怪訝に思い聞き直してみた。ルーテシアの口数はそう多くはないが、返事くらいはいつも普通に返しているからだ。

ルーテシアの様子はというと、表面上は特に変わったところは見られない。顔もいつもの無表情のままだ。ただし、その視線は真っ直ぐにモニターの方に、もっと詳しく言つと、キャロの戦闘映像に注がれていた。

「……タ。」

「あの、ルーテシアお嬢様？」

「ミツケタ。」

第46話 風神幼女（後書き）

まさかのリバースオチ。フェイト……乙。

この後キャラは医務室に、フェイトはシャワールームに、残るヴィータは一人ではやての所に報告に行きました。

でも一番の被害者はやて。今回の件の報告書作成に四苦八苦し、ゲンヤさんの気持ちが理解できたとか。

以下、Q&Aです。

Q・ガジェットがリミッターとかw

A・思いつきり独自設定です。あのマッドならそれくらい普通に付けてそう。勿論自爆装置とセットで。

実際は作中でも言われた通り、発動させたら勝手に同士討ちするような欠陥機能です。

Q・「七曜」と「白狼」ということは、遠距離からの魔法戦かな？

A・大正解です。属性変換でAMFを無効化しました。

「火水木金土日月を操る程度の能力」って、言ってみれば魔力変換資質×7ですからね。チートです。

さらにサブが「白狼」なので単独で精密射撃可能。ロングアーチスタッフ涙目です。

では、また次話で。

第47話 丸投げの結果（前書き）

祝、お気に入り1000件突破！！
これからも頑張りますので、宜しくお願いします。

第47話 丸投げの結果

「……………」

ん……誰？

「……………」

何を……言ってるの？

「……………」さくら、桜。

さくら？ 違う、私は

「ん……………」

「あ、キャロちゃん、目が覚めたのね。」

目が覚めたら、そこは知らない天井、などではなく六課の医務室で、近くにいたらしいシャルさんが、ベッドで寝ていた私の顔を覗き込んできました。

「えっと……、シャルさん？」

「そうよ。キャロちゃん、ここに来るまでの事、覚えてる？」

えーっと……、確か、ガジェットが出て、出撃して、それから…
…。

「あー、シャルルさん。」

「どうしたの？」

「フェイトさん、怒ってませんでしたか？」

幻想風靡でガジェットを全滅させたは良いものの、そのせいで酔ってしまい、おんぶしてくれたフェイトさんにリバーズしてしまっただですよ…。もし私が逆の立場だったら、やられる前に海に落としてたのは間違いないです。

「うーん、特に怒ってるって感じはしなかったわ。むしろ心配してたかも。」

「そうですか。でも、後でちゃんと謝っておきます。」

「それが良いわね。」

いくら私でも、あんな事しておいて謝らないほど外道じゃないですからね。

「シャルルさん、もう大丈夫みたいなので、ベッドから出て良いですか？」

「そうね。軽く検査してみたけど、特に異常は無かったし。どこか具合の悪い所は無い？」

「そうですね……。強いて言えば、お腹が空きました。」

「……。」

「何ですか、その目は？……良いじゃないですか、胃の中空っぽなんですよ。」

「……戻した直後なんだしもう夜も遅いんだから、少しだけにしなさいね。」

「分かってますよ。それじゃ。」

お母さんみたいな事を言ってくるシャルさんから逃げるため、私は食堂に行くことにしました。服装を整えてベッドから降り、医務室を出ようとした所で

「あ、そういえば、一つ言い忘れていた事があったわ。」

「何ですか？ 今何食べるか考えるので非常に忙しいんですけど。」

「別に大した事じゃないから。キャロちゃん、ここに来てからまだ健康診断受けてないでしょ？ 近いうちにすると思うから、そのつもりでいてね。」

それは困……らないですね。

私の体を調べられても童召喚師だっていうのはバレないだろうし、夢幻珠が調べられない限りは無問題です。むしろ、タダでやってくれるのなら有難く受けておきましょう。

「分かりました。それじゃ。」

シャルさんと別れた私は、その足で食堂へと向かいます。

（にしても、さっきの夢って何だったんだろう？）

さくら、なんて名前には心当たりがありません。

知り合いにはそんな人いませんし、転生前の人間関係の中にも、そんな人はいませんでした。

昔、藍によって見せられたトラウマ映像（6話参照）にもいませんでしたから、忘れてるって訳でもないんでしょうけど何故か気になります。

「ま、今はいいか。」

気にはなりますけど、分からない事を考えても仕方ないですからね。それよりも、これから食べるメニューの方が大切です。

「消化に良い物となると……やっぱりうどんかなあ？」

『本当ですか！？ 当然きつねうどんですよ？ ですよね？』

『藍、ちょっと落ち着いて。ちゃんと半分残してあげるから。』

きつねうどんから油揚げを連想してテンションが上がった藍を落ち着かせながら食堂に向かいます。既に夜も遅いですけど、食堂にはまだ灯りが点つています。幸いにもまだ営業中なのを確認し、私は食堂へと入っていききました。

「あれ？ スバルお姉ちゃんと……、皆さんお揃いで、どうしたんですか？」

「へ？ キャロ、どうしてここに？」

食堂に入ったところで、スバルさんを始めとするフォワードメンバーとなのはさん、シャーリーさん、シグナムさんが固まって座っているのが見えました。スバルお姉ちゃんが驚いた様子で声を掛けられます。

「いや、お腹が空いたので、夜食でもと。」

「そーなのかー。」

「そーなんですよ。」

「……じゃなくて！ 何でキャロが六課にいるのさ！？」

「へ？ そこですか？」

「……そういえばまだ言ってますでしたね。」

よく見てみると、ティアナさんとエリオ君も驚いています。特にエリオ君は、「誰？」ってな感じで見てきます。……コツチミンナ。

幼女説明中……。

「とまあそういう訳で、今まで影ながら動いてたんですよ。ズズツ……。あ、このうどん美味しい。」

「全然気付かなかったわ……。」

「僕もです。」

「何というか、キャラらしいというか……。」

「私は知ってたけどな。」

「実際の所、こいつが六課に顔を出す事は殆ど無かったからな。知らなくても仕方が無い。」

上から、私、ティアナさん、エリオ君、スバルお姉ちゃん、アギト、シグナムさんです。

私は注文したきつねうどんを啜りながら、今までの経緯を説明しました。リニアレールやアグスタの時にも出勤していた、という話をする、フォワード三人に驚かれました。

「ごちそうさまです。それで、皆さんは何をしてたんですか？ 大体想像はつきますけど。」

「えっとね……。」

なのはさんの話によると、あれからフォワードメンバーときっちり話し合ったそうです。

最初のうちはなのはさんの方から一方的に話してしまい、納得で

きないティアナさんが噛み付く場面も多かったものの、途中から参加したシャーリーさんが二人の間に立って色々取り成したおかげで、最終的にはお互い納得できたそうです。後、気になることといえば……。

『なのはさん。』

『どうしたのキャラちゃん？ わざわざ念話でなんて。』

『もしかして、8年前の事話しました？』

もし話していないと藪蛇になるので、念話でこっそり聞く事になりました。

『にゃ！？ 何でキャラちゃんがそれ知ってるの！？』

『何で、って言われても、結構有名ですよそれ。』

という事におきましよう。

『そうなんだ……。うにゃあ……。』

『で、どうなんですか？』

『あのね、最初は話さないでおこうかと思ったんだけど、ティアナがどうしても納得してくれなくて……。』

『で、話したと。』

『……………うん。』

やっぱり、あの話無しで説得するのは無理でしたか。なのはさんが自分から話したらいいですけど、この場合、自分の知らないうちにバラされるのどっちが恥ずかしいんでしょうね？

「高町にキャラ、いきなり黙り込んで、どうした。」

「にゃ！？ な、何でもないの！」

なのはさん、それじゃ何かあったって言うてるみたいなのですよ。

「いえ、眠くなったので、少しうとうととしてました。そろそろ遅いので、私はこれで失礼しますね。それじゃ、お休みなさい。スバルお姉ちゃん、ティアナさん、エリオ君、明日からよろしくです。」

「あ、うん。お休み、キャラ。」

「お休みなさい。」

「は、はい！」

なのはさんがボ口を出すまえに撤退することにしましょう。にしても、エリオ君の態度が堅いです。完全に初対面なので、仕方ないと言えば仕方ないんですけど。

『とは言ったものの、さっきまで寝てたからなあ……。藍、何か暇

潰しできる物ある？ …… 藍？』

六課メンバーと別れて廊下を歩きながら、念話で藍に問いかけます。だけど、藍から返事がありません。

『藍、どうしたの？ …… 藍？』

『……油揚げ。』

あ。

『半分こって約束してたのに、マスターは一人で全部……。』

『ちょ、ちょっと待ってよ藍！ あの状況じゃ仕方ないでしょ！』

一人だけならともかく、みんなに見られてる状況じゃ無理ですよ！ スキマに放り込むのだって不可能なのに！

『……ぐすつ。』

『ちょ、マジ泣き！？ そこまで食べたかったの！？ 今度はちゃんとあげるから、だから泣き止んでー！！』

第47話 丸投げの結果（後書き）

なのはサイド報告の回。内容薄くてすいません。

次回からは、何話か日常編を挟んでから原作10話に入ります。

今回は投稿が遅れたので、Q & Aはありません。……ゴメンナさい。

第48話 機動六課の日常 部隊長の受難 (前書き)

日常編その1。今回はタイトルにもあるようにはやてメインです。

第48話 機動六課の日常 部隊長の受難

「うーん……。」

「どうしたんですかはやてちゃん？ さっきからずっとウンウン言ってるです。」

ここは機動六課部隊長室。部隊長の椅子に座り、頭を抱えながら書類と睨めっこをしているはやての隣で、リインも一緒に仕事をしていた。

「いやな、リイン、コレなんやけどな。」

そう言って、はやてはリインの端末にデータを送った。数秒もしないうちにリインの方にデータが届き、リインはそれを確認した。

「これは……報告書、ですか。」

「そつなんよ。前回の出撃のやつや。」

「前回って言うと、キャロちゃんが頑張ってくれた時ですよね？ キャロちゃん、凄かったです。」

「それが問題なんよ。」

「???」

「えっとな……。」

そう、今はやてが悩んでいるのは前回の出撃の事後処理である。キャロの活躍によってリミッター解除無しでガジェットを撃破できた、それ自体は非常に良い事である。

しかし、この場合、「じゃあどうやって撃破したんだ？」という事になる。もしここで、正直にキャロの事を報告したとしよう。

「ウチのに助っ人に来ている民間協力者（Ｃランク）が、音速並の速度で飛行してガジェットを撃破しました。」

……間違いなく突っ込まれる。はやて自身、もし自分が逆の立場だったら、間違いなく突っ込んでいると思う。タダでさえ六課の存在は色々危ういバランスで立っているのに、これ以上の爆弾を抱えるのは自殺行為にしかない。

「何とかキャロの事をばかしたまま報告したいんやけどなあ……。」

「うーん……、そうだ！ はやてちゃん、良い事思いつきました！」

「お、何や、リイン？」

「ゲンヤさんに相談してみるですよ！ これなら大丈夫です！」

はやての説明を聞いて一緒に考えていたリインであったが、名案を思いついた、とばかりにはやてに提案してみる。実際の内容は丸投げ同然なのだが、リインは気付いていない。

しかし、これを聞いたはやての顔はまだ晴れなかった。

「あー……、リイン、ゴメンな。それ、もうやったんよ。」

「へ？ そうなのですか？ それで、何て言われたんですか？」

「それがな……。」

注意：C a u t i o n !!

ここから先ははやての回想です。
はやての脳内フィルターにより、会話内容に「若干の」補正がかかっています。

「っていう訳なんですよ。ゲンヤさんの場合はどうしてました？」

『……だ。』

「へ？」

『気合だ。』

「き、気合、ですか？」

『そうだ。気合で何とかするんだ。俺もそうした。』

「そーなのかー。……って、それ何のヒントでも無いじゃないですか！ もっと具体的に教えて下さいよ！」

『甘ったれてんじゃない！』

「逆ギレ！？」

『何でも教えて貰えるかと思ったら大間違いだ！ 一人前になりた
いんなら自分で考えろ！』

「でも言ってることはすごい正しい！？ …… いや、でも、こんな
の今のままじゃ、絶対無理ですって！」

『……諦めんなよ。』

「へ？」

『諦めんなよ、お前！！ どうしてそこで止めるんだ！？ そこで
！！ もう少し頑張ってみろよ！！』

「いや、でも……。」

『ダメダメダメ諦めたら。周りのこと考えよ！ 六課の皆の事
思ってみろって！！ あともうちよつところなんだから。俺だ
ってアイツが砲撃かました時、寝る間も惜しんで頑張ったんだよ！
頑張ってみろ！ 必ずできる！』

「皆の事……。」

『世間はさあ、冷てえよなあ。みんな、オマエの思いを感じてくれ
ねえんだよ。どんなにがんばってもさ、何で分かってくれねえんだ
って思うときがあるのよね。俺だってそうだ。気持ちを伝えようと
思っても、顔が怖いって逃げられた事もあったんだよ。でも大丈夫、

分かってくれる人はいる！ オマエの下には、六課の皆がいるんだろ？ そいつらの為にももうちょっとだけ頑張ってみるよ！』

「……そうや、六課は私だけやない、皆の夢や！ その夢の為にも、私はもつと頑張らないかんのや！」

『そうだ！ がんばれがんばれできるだけ絶対できるがんばれもつとやれるって！！ やれる気持ちの問題だがんばれがんばれ！ 諦めんな絶対にがんばれ積極的にポジティブにがんばれがんばれ！』

「よっしゃ、分かったで！ しゅ……ゲンヤさん、相談乗ってくれてありがとうな！」

『おう！ はやて、本気になって、頑張っていけ！！』

「……ってなやりとりがあつたんよ。」

「ほへー。ゲンヤさん、熱いです！」

「アレ聞いた直後は絶対出来るって思ってたんやけどなあ……。アレは一種の洗脳やった。」

ゲンヤに励まされた後、はやてはみよんにヒートアップしたテンションで報告書へと格闘を始めた。しかし、5分、10分と経過して熱が冷めていくにつれ、結局何のヒントも貰っていない事に気付いてしまった。ゲンヤとの会話は、要約すると「がんばれ」の四

文字で片付いてしまうのだ。

「そろそろ上に提出せんと不味いし、ホンマどないしょ……。」

「はやてちゃん、頑張るですよ。リインも手伝うです。」

「ありがとうな、リイン。よっしゃ、コレ飲んでからもう一回頑張るわ。」

「ソレ、何ですか？」

はやては長時間のデスクワークの際、食事の手間を省く為に栄養ドリンクを飲む時がある。それはリインも知っている事であり、主に健康面の問題から、過去にそれを注意したことも何度があった。

しかし、今はやてが飲んでいる物は、今まで見たことが無い物だった。透明のビンに緑色の液体が入っており、隅っこに張つてあるラベルには「国土無双の薬」と書かれていた。

「キャラから貰ったんよ。最初は疑ってたんやけど、試しに一瓶飲んでみたら、疲労回復の効果が凄くてな！。それで、何本かおすそ分けして貰ったんや。リインもどうや？」

「いいですか？ ……うわ！ 本当に凄いです！ 飲んですぐに効果が出たです！」

「やる？ ほな、頑張ろうか！」

「はいです！」

キャラから貰った薬の効果で回復した二人はそのまま作業を再開

した。この日、機動六課の部隊長室にはいつまでも明かりが点っており、この二人が徹夜で仕事をした事を示していた。

ドオオオオオオオン！！

「にゃ！？」

「何！？」

「ふえ！？」

「今のは……部隊長室！？」

「zzzzzzzz……。」

次の日、まだ日も昇っていない明け方の六課に、突如として爆音が響き渡る。それを聞いた者の反応は様々であった。

夢の中にいた者は目を醒まし、すでに起きていた者はその音の発生源に顔を青くする。未だに寝ている者は誰なのかは、本人の名誉の為に言及しないでおこう。

（まさか……主はやてを狙った爆破テロ！？ クツ、私達がついていながら……！）

そして、起きていた者の一人であるシグナムが部隊長室へと急行する。その道中で、起きてきたらしいのはとフェイト、シャルも加えて、シグナムは部隊長室のドアを開けた。

「大丈夫ですか、主はやて？ ……ッ！」

「はやてちゃん！ リイン！」

「はやて！ リイン！」

そして三人が見たのは隊長の椅子から転がり落ちて目を回しているはやてと、その腕の下敷きになりながら、同じく気絶しているリインであった。

「主はやて…！」

「シ、シグナムさん、落ち着いて…！」

「ちょっと待つて、見てみるから……うーん、気絶してるだけみたいね。特に異常は無いわ。」

「ほ、本当かシャル！？」

「ええ。これなら動かしても大丈夫そうね。シグナム、はやてちゃんを医務室までお願いできる？」

「分かった。」

シャルの言葉に安心したシグナムが、気絶しているはやてを抱

えて部屋を出て、リインを抱えたシヤマルがそれに続く。

なのはも二人の事が心配なので付いて行く事にしたが、フェイトの動く気配が無いのに気付いて立ち止まった。

「どうしたの？ フェイトちゃん？」

「あ、なのは。私はちょっと調べ物があるから、なのはは先に行つてきて。」

その一言に、はやての無事が確認できて油断していたなのはの顔が引き締まる。幸いはやての命に別状は無かったが、これは立派な事件だからだ。

「フェイトちゃん、無理だけはしないでね。」

「うん、大丈夫。そっちははやてをお願いね。」

「分かったの。」

フェイトとの会話を終わらせたなのはそのまま医務室へと歩いていき、フェイトはそれを見送ってから、部屋の捜査を開始した。

少女捜査中……

「駄目、何も出てこない……。」

捜査を開始してから一時間が経過したが、フェイトの目に留まるような怪しい物はコレと言って無かった。

部隊長室にあったのは散乱した書類。それと携帯用の食料が少しと、空になった栄養ドリンクのビンが四本だけだった。

「やっぱり、はやてに直接聞いてみるしかないか……。」

これといった手がかりが無い以上ここにおいても仕方が無い。そう結論付けたフェイトは、はやてから直接事情を聞くために医務室へと行くことにする。

散乱していた書類を一つに纏めて机の上に戻してから、フェイトは部屋を後にした。

そして誰もいなくなってから数秒後、部隊長の部屋の空間に亀裂が走り、中から一人の人影が出てきた。人影はそのまま空の瓶へと向かい、それを回収する。四つ全てを集めた後、人影は亀裂の中へと戻っていき、部隊長室は再び無人となった。

「ふう、やっと回収できました。」

そう言ってスキマ内でため息を漏らしていたのは、やはりいうか何というか、キャロである。その手には、先程回収した瓶がある。

「というか、やっぱり四本飲むと爆発するんですねー。」

キャラは手元持っている薬のラベルを見ながらしみじみと呟く。そこには、「国土無双の薬」と書かれており、隅の方に小さく「試作品」とあった。

「でもまあ、はやてさんのおかげで色々良いデータが取れました。モル……協力者になってくれたはやてさんには、後日お礼をしないとですね。藍、モード「八意」。」

「はい。モード「八意」、セットアップ。」

「あらゆる薬を作る程度の能力」を使える形態を選択し、キャラはスキマ内にある工房へと向かって行く。今回入手したデータを元に完全版を作るため、キャラは研究を再開した。

なお、キャラは瓶は回収したものの、はやて達への記憶操作などは一切しなかった。なので後日復帰したはやてからこってり絞られる事になるが、それはまた別の話である。

第48話 機動六課の日常 部隊長の受難（後書き）

久しぶりに、この作品らしいギャグ回を書いた気がします。
次回も日常編。その次くらいから原作に戻ります。

以下、Q & Aです。

Q・東方良く分らないんだけど、今回出てきた薬って何？

A・「国土無双の薬」。元ネタは東方緋想天。

原作では、使うと攻撃力、防御力が上昇し、複数回使うと効果が累積されます。

ただし、四本目を使用すると自爆してしまい、それまでかかって
いた効果も全て消えてしまいます。

今作品内の効果は、「体力と魔力、霊力、妖力の回復」。

はやてに渡したのは試作品で、効果は体力回復のみ。自爆効果も
残っていたようです。

Q・質問です。文の能力と霊夢の能力を合わせて飛行能力の強化
に使ったりしてますが、他でも補強する関係の能力ってできるん
でしょうか？

A・弱点を補う組み合わせや、特性をさらに強化する組み合わせ
があります。

登場予定の組み合わせも既に幾つか……。詳しくはネタバレにな
るので言えませんが。

では、また次話で。

第4?話 機動六課の日常 訓練風景 (前書き)

投稿遅れてスイマセン。休日出勤なんて……大っ嫌いだー!!
愚痴はこの辺にして本編どうぞ。

第4？話 機動六課の日常 訓練風景

キヤロが本格的に六課入りしてから数日後、今日も六課の訓練場では、朝早くから早朝訓練が行われていた。

フォワードの四名はガジェットのデータを模したターゲットとの模擬戦を通して、お互いの連携を確認したり、新しい作戦を試したりして己のスキルを高めていった。それも一段落がついたので、なのはは早朝訓練の締めに入ることにした。

「はい、せいれーっ！」

「……はい！」「……」

「それじゃ、本日の早朝訓練ラスト一本。シュートイベイションをやるよ。準備して。」

「……はい！」「……」

なのはからの指示に従って、三人はそれぞれのデバイスを持ち直して戦闘準備へと入る。アギトもエリオとユニゾンをし、準備は万全である。

しかし、対するなのはそこに立っているまま。いつもならシューターを待機させている筈なのに、と皆が疑問に思った。

「アレ？　なのはさん、何で準備しないんですか？」

「それはね……。」

「ふああああ……、まだ眠いです。」

「「「「!?!?!」」」」

なのは何か言い出そうとした時、四人の後ろから眠そうな声が聞こえてきた。振り向くとそこには、欠伸を噛み殺しながら目をこしこし擦っている桃髪の少女がいた。

「ごめんね、わざわざ来てもらって。」

「いえいえ、最近暇だったので丁度良かったです。」

「そう？ それじゃ、お任せして良いかな？」

「はい。」

「あの、なのはさん？ これは？」

キャロとなのはが会話を始めたので、フォワード四名は置いてけぼりをくらう形になった。その中からティアナが代表で、なのはに事情を聞くことにした。

「えっとね、今日のシュートイベションは、私の代わりに、キャロにやってもらおうかなって。」

「そうですか。でも、どうして？」

「いつも私ばかりだと、悪い意味で慣れてしまっただけ。だから、たまにこうやって参加してくれるようにお願いしたんだ。」

確かに、とティアナは思った。

毎日のように訓練をしていると、少しずつだけ癖、というものがお互い分かってくる。勿論相手の癖を突くのは立派な戦略であるのだけど、それは初見の相手には効かない。それを抜きにしても、色々なタイプの相手とやり合うのは、決して無駄ではない。

「とまあ、そういう訳なのですよ。」

キャロの方はというと、既に準備は完了しており、袖部分が破れた感じになっているシャツに紫色のロングスカート、頭に大きなリボンをあしらったいつものバリアジャケット姿になっていた。

「ルールはいつもと同じ。被弾無しで5分間回避しきるか、一撃当てればクリアね。誰か一人でも被弾したら、最初からやり直しだよ。」

「あのー、なのはさん？」

「何、キャロ？」

「私の方から殴りに行くのはアリですか？」

「そうだねえ……、うん、良いよ。でもその場合、しっかり直撃させないと被弾扱いにはしないって事で。」

「了解です。……それじゃ皆さん、準備は良いですか？」

「うん。」

「いつでもいいわよ。」

「はい！」

『おう！』

なのはに格闘の許可を取ったキャラは、そのままフォワードメンバーの方へと向き直り、空中に浮かんで開始の確認をする。その際、まだ敬語が抜けないエリオに、エリオを除く全員が苦笑を浮かべた。

「行きますよ。『藍、モード「氷」、サブは「八意」。』氷符「アイシクルフォール」！」

宣言と共に、キャラは背中に氷翼を展開。続いて何本もの氷弾が一旦キャラの左右へと展開し、フォワードメンバーの方へと飛んで行った。

「スバル！」

「分かった！」

「ストラーダ！」

それに対し、スバルはウィングロードを発動し、ティアナを抱えて弾幕地帯から脱出。遮蔽物の多いビルに入るとそこでティアナを下ろした。エリオもストラーダの噴射を利用して弾幕を回避。この状態だと細かい機動は無理なので、ユニゾンしているアギトが炎弾を発射して進路上の氷弾を溶かしていった。

『で、どうする、ティアナ？』

どうする？ とは、逃げ切るか、一発当てるか、そのどちらを選

ぶかという意味だ。

『一発当てる方に決まってる。エリオとアギトもそれで良いわね?』

『はい!』

『おう!』

負けん気と向上心の塊であるティアナは当然前者を選択。エリオとアギトもそれに賛成し、方針が固まった。

『それで、どうやって攻めますか? ティアナさん。』

『そうね……。』

そこでティアナはキャロの方をちらり、と見る。キャロの周りには氷の弾幕が吹き荒れており、一種の防壁と化していた。

『と言うか、あの子氷結魔法も使えたのね。』

『みたいだね。私も知らなかったよ。』

『マジで?』

『マジで。』

『……。』

「相談はそろそろ終わりましたか? そろそろ密度を上げますよ。」

『『『『！？』』』』

そこに、未だに会議が終了していない四人に対し、密度を増した氷の弾幕が襲い掛かる。

ティアナは遮蔽物を使いながらこれを回避。エリオも持ち前のスピードで弾幕を振り切るが、スバルだけはそうはいかなかった。ウイングロードの線路上に弾幕を配置され、回避することが出来ずに障壁で受け止める。氷弾が障壁に当たり、パリン、と氷が碎ける音がした。

「スバルお姉ちゃん、被弾ですねー。それじゃ、5分のカウントはリセットです。」

『ご、ゴメン、ティアナ。』

『いいのよ。最初から回避しきれるなんて思っていないし、一発当てるって決めてたんだし。』

とは言つものの、どうすれば良いのだろうか、とティアナは考える。

ティアナはキャラの戦闘能力をまだ良く知らない。知っているのは訓練校時代に見た驚異的な回避力と、スバルから聞いた話、それと、前回の時の映像記録だけだ。

（遠距離射撃はまず当たらない。となると近距離戦だけど、スバルの話によると、それも相当な技量らしいし……。）

スバル曰く、「常識が通用しない強さ」らしい。実際に見たことが無いのでどの程度かは分からないけど、スバルやエリオを迂闊に突っ込ませても、振り返ちになるのは間違い無いだろう。なら

『スバル、エリオ、アギト、……、出来る？』

『うん、分かったよ。』

『了解です。』

『おう、任せとけ！』

ティアナは現状取りうる中で最善と判断したものを三人に通達。そして四人は、キャロに一撃入れるために動き出した。

「ほらほら、そんな調子だと、いつまで経っても終わりませんよー。」

私は空中に浮かびながら、「冷気を操る程度の能力」で変換した氷弾を、眼前のスバルお姉ちゃんとエリオ君へと撃つていきます。ティアナさんはビルの中にいて、遮蔽物を利用しながら巧みに避けてくるので、取りあえず後回しです。

「エリオ君は、直線的で機動が単純。」

「うわっ！！」

スピード自体は凄いけど、ストラーダによる飛行は前進のみ。方向転換の際には一瞬だけと止まる必要がある。そこを狙っていけば狙うのは容易い。最も、アギトが迎撃するからそう簡単には当たらず

ないんだけど。

「スバルお姉ちゃんは移動先がバレバレです。」

私の背後にウィングロードが出来たのに気づき、飛行してそこから退避。上から突進してくるスバルさん向かって氷弾を打ち込み

「幻影？」

氷弾がそのまますり抜けていきました。となると

「うおおおおおおっ！！」

スバルお姉ちゃんの掛け声と同時にウィングロードがもう一本、私にクロスするように伸びてきました。

「けど……ッ！」

回避しようとした私の傍に、ティアナさんから放たれた魔力弾が降り注ぎます。被弾こそしなかったもののそれに動きを制限されたせいで、スバルお姉ちゃんの突撃を回避するのは間に合いそうにありません。

「マッハキャリバー！」

L o a d C a r t r i d g e .

眼前には、カートリッジロードし、リボルバーナックルを回転させて突撃してきたスバルお姉ちゃん。回避できないのなら、返り討ちです！

魔王「天地魔闘 氷」

「フリーズタッチミー。」

「くっ……、コレ!？」

「冷気を操る程度の能力」と霊力障壁を纏わせた左手で、スバルお姉ちゃんの拳を受け止める。拮抗は暫く続いたけど、次第にスバルお姉ちゃんの方に変化が訪れる。拳を起点として流し込まれた冷気が、スバルお姉ちゃんの体の自由を奪っていきます。

「ソードフリーザー。」

「ぐっ!!」

その隙を逃がす事無く、私は右手に妖力で氷剣を生成。訓練用なので刃は作らず、鉄パイプみたいになっているそれを、スバルお姉ちゃんの横っ腹に叩き込みました。

「フローズン冷凍法。」

そしてラスト。横方向に吹き飛ばされたスバルお姉ちゃんの周りの冷気を操作し、氷の檻に閉じ込めました。

「まだ……ッ!」

まだまだですね、と言おうとした矢先、背後に魔力反応を感知しました。振り向くと、そこにはアギトの力で炎をまとったストラーダを構え、進路上の氷弾を溶かしながら凄まじい速度で突進してくるエリオ君がいました。

ドオオオオオオオオン！！

そして激突。私が咄嗟に張った障壁とストラーダがぶつかり合い、魔力による轟音と爆煙が上がりました。

「やった？」

ティアナさん、それフラグですよ。でもまあ

「いやー、やられちゃいました。」

煙が晴れ、そこにいるのはカウンターを喰らって気絶しているエリオ君と、それを抱えている私。

でも、カウンターの際、頭に付けていたリボンに槍が引っかかり、ひらひらと落ちながら魔力結合が解かれて霧散していきました。

「これでも一撃は一撃ですからね。これにて終了です。」

さつてと、スバルお姉ちゃんの氷を溶かさないと。

「それじゃ、私はこれで。暇な時はいつでも呼んでくれていいですからね。」

「うん。ありがとうね、キャラ。それじゃ、他の皆は今日の反省ね。」

手伝ってくれたキャラを帰してから、私はフォワードの皆の方に向き直る。キャラのおかげで、今日はいつもよりも有意義な時間になりそうなの。

「まず、スバル。」

「はい！」

「スバルはウイングロードの展開をもう少し直前まで引き付ける事がある意味「これからここを通ります」って宣言してるような物だから、反応の良い相手には簡単に見切られるよ。」

「はい！」

スバルはさっきキャラに冷やされたせいで、まだ少し震えている。それでも元気一杯に返事してくれているから、心配はいらないかな？

「次にティアナね。」

「はい。」

「個人スキルについては特に言う事は無いよ。ただ、あの作戦は問題アリかも。もしアレが実戦だったら、スバルが真つ二つになってもおかしくないんだよ。」

「はい……。今度はもつと良い作戦を考えます。」

私の指摘に、ティアナは悔しそうに答えた。

とは言っても、実を言うとティアナの指揮はそう間違っではないんだよね。

射撃は全て避けられ、かと言って格闘戦を挑むと強力なカウンタ―で迎撃される。そんな相手と戦う場合、幻影で攪乱しつつ射撃で足止め、前衛で連続攻撃というのは限りなくベストに近い選択。多分私も、それと同じ選択をする。それであの結果になったのは、単にキヤロの技量がずば抜けているから。

それでもティアナを成長させる為に、私はあえて問題アリと言った。ひよつとするとティアナなら、これ以上の指揮ができるようになるかもしれないから。ティアナも諦めてはいないみたいだし、これなら大丈夫そう。

「最後に、エリオとアギトね。」

「「はい！」」

「アギトの方は特に問題無し。サポートお疲れ様。」

「おう！……、はい！」

「エリオは空中機動が課題だね。いくら速くても、直線だけだと今

日みたいに簡単に当てられちゃうよ。」

「はい！」

「それと、槍の扱いもまだまだ振り回されてる感じがな？ これについては私からは教えられないけど、聖王教会の方に槍に長けた人がいないか、はやて隊長に相談してみるね。」

「はい！」

実は、これはキャロから聞いた事だったりする。

最後の突撃の時、エリオの突撃とキャロの障壁が一瞬だけ拮抗し、その隙にキャロがカウンターを入れたんだけど、本当なら拮抗なんてせずに一瞬で障壁を抜かれて一撃を入られた筈みたい。

なのに拮抗したのは、エリオの槍捌きが未熟だから。自分の体重や全身の力を効率良く伝達する事が出来ていないので力が分散してしまっている、らしいの。

「それじゃ、早朝訓練はこれで終わり。いつも通り休憩を挟んでから訓練再開だから、時間になったら集合ね。」

「……はい！」「……」

こうして、今日の訓練は終わり、フォワードの皆は隊舎へと入って行く。

私はそれを見ながら今日の訓練の成果を纏めるため、訓練場の端末へと歩きだした。

（それにしても、キャロちゃん、やっぱり凄かったの……。）

その途中に思い出すのはさっきの訓練風景。あの年であれ程の戦闘能力、もしかしくなくても9歳の頃の私よりも上だろう。

（強いつていうのは良い事なんだけど……。大丈夫かな？）

でも、それと同時に不安もある。

9歳の頃の私はジュエルシード事件や闇の書事件に立ち向かうために無茶ばかりやっていた。そのせいで体を壊し、果てには撃墜されてしまった。

確かにキヤロは強い。でも、あれだけの強さを手に入れるためにどれだけの無茶をしたのか、そして、それだけ無茶をしないといけない事情が過去にあったのか、私はそれがとっても心配。

（私、まだキヤロちゃんの事全然知らないんだよね……。うん、決めた！）

これからはもっとお話をしてみよう。折角同じ職場で働いてるんだから、もっと色んな事を知って、仲良しになれたら良いな。

（アレ？ そういえば、キヤロちゃんって昔どこかで会ったような……。まあいいや。多分気のせいなの。）

第4?話 機動六課の日常 訓練風景 (後書き)

?話なのにギャグが無い……話数調整ミスりました。

以下Q&Aです。

Q・どうしてサブを「八意」に？

A・?化防止のためです。今作品では、「あらゆる薬を作る程度の能力」を、「あらゆる薬を調合するための知能と技術」と定義しました。

戦闘知識と調合知識は違いますが、元々キャラ自身が戦闘知識を持っているので、知能さえ強化できれば?化は防止できます。

Q・なのは(アレ? そっいえば、キャラちゃんって昔どこかで会ったような……。)

A・?話、10話参照です。なのはが気付く日は来るんでしょうか？

では、また次話で。

第50話 放置プレイ（前書き）

投稿遅れた……。せめて週二回は投稿したいです。

第50話 放置プレイ

「シャマルさん、やっぱり駄目ですって。こんな太いの無理ですよ……。」

「大丈夫よ。痛いのは最初だけだから。」

「……優しくしてくださいね。」

「はいはい。それじゃ、力を抜いてね。」

「……、アッーーーーー!!!」

「はい、採血終了。」

「あつまつまつ……。」「

「それにしても注射が怖いなんて、キヤロちゃんにそんな弱点があったなんて知らなかったわ。」

「仕様がないじゃないですか。怖い物は怖いですよ……。」

上のセリフでよからぬ想像をした人は焼き土下座の刑です。

私は半ば涙目になりながら、注射針を差された腕を見ます。血は殆ど止まっていますが、消毒のためにエタノールを染み込ませた脱脂綿が、テープで貼られています。

今日は以前言われていた健康診断の日。身長、体重から始まり、視力、聴力、血圧等を測定していきました。

そして最後に待っていたのが血液検査。実は注射嫌いな私でした。が拒否できる訳もなく、こうして一発抜かれてしまいました。

「とりあえずこれで全部終わりね。お疲れ様。」

「ありがとうございます。」

私はシャルマルさんに礼を言って、医務室から出ていきました。

「もうこんな時間かあ。結構長引きましたねー。」

『ですね。そろそろお昼にしますか？』

「そうだね。今日は血を抜かれたから、肉でも食べようかな。」

廊下にかかっている時計を確認すると正午少し前。ちょっと速いですけど、この時間なら食堂も開いてるでしょう。

藍と念話で雑談しながら歩いていると、あっという間に食堂に到着。入ると、そこには既に先客がいました。

「お、キャラちゃんこんにちはー。もう健康診断終わったん？」

「こんにちですはやてさん。健康診断ならついさっき終わりました。もう少ししたらシャルさんも来ると思いますよ。にしても……。」

私ははやてさんの隣に座りながら、他のメンバーに視線を送ります。そこにははやてさん以外なのはさんとフェイトさん、ヴィータさん、シグナムさんがいました。あとザフィーラさんは床です。

「なのはさん達までどうしたんですか？ 今の時間って、まだ訓練時間中の筈じゃ？」

「……そういえば、まだキャラには伝えてなかったね。」

「へ？」

「今日は訓練はお休みだ。」

そーなのかー、ってことは!？

「あの、フォーワードのみんなは？」

「あいつらなら全員でクラナガンの方に出かけていったぞ。今日一日羽を伸ばすんだとよ。」

ああああ、やっぱり！ って

「何で私に言ってくれなかったんですか!？」

知ってれば絶対参加してたのに！！

「いやー、ゴメンなー。ウチから口止めしてって皆に頼んだんよ。」

「はやてさん、それどういう意味ですか？ 事と次第によっては怒りますよ?。」

ゴメンと言いながらもあまり申し訳なさそうに見えないはやてさん。これでふざけた理由なら許しません。

「いや、だってな、キャラちゃんがこの事知ったら、絶対付いていくやろ?。」

「当たり前ですよ。そんな楽しそうな事、放っておける訳無いです。」

「健康診断の予定あったけど、それもスツぽかすやろなあ?。」

「当たり前です……あ。」

気付いた時には時すでに遅し。食堂にいるメンバー+遅れてやってきたシヤマルさんがこつちを見えています。目は口ほどに物を言うって、こんな時に使うんですね。

「やっぱりしな。私の思った通りだ。」

「やろ? やっぱり言わんで正解やったわ。」

「にやはははは……。」

「キャロ……。」

「キャロちゃん、サボりはいけないと思うのです。」

「……。（こればかりは庇いきれんな）」

「……。（堂々とサボリ宣言されると結構クルわね……）」

口に出すか黙っているかの違いはあれど、全員が全員、私を呆れた目で見てきます。と言うか、はやてさんとヴィータさんのドヤ顔がム力つきます。ザフィーラさんがガン無視でドッグフード頼張ってるのも、それはそれでム力つきます。

「嫌ですねえ、冗談ですよ。大体、本当に実行する訳無いじゃないですか。」

「ま、そういう事にしておいてあげるわ。」

このまま続けても不利なのはこっちなので、こっちから折れて話を終わらせます。

と言うか、はやてさん意地悪です。私、何か恨みを買ったような事しましたっけ？

私はそのまま皆の席から一旦離れて、昼食を注文しに行きました。定食を注文し、それをトレイに載せて席に戻ると、皆は備え付けであるテレビを見ていました。

『昨日、ミッドチルダ管理局地上中央本部において、来年度予算会議が行われました。……当日は、レジアス・ゲイズ中將による防衛思想についての表明も行われました。』

『魔法の技術の進歩と進化。素晴らしいものではあるが、しかし！それが故に我々を襲う危機や災害も、十年前とは比べ物にならないくらいに危険度を増している。兵器運用の強化は、進化する世界の平和を守るためである！』

テレビを見てみると、そこに映っていたのはいかにも悪役っぽい顔をした中年のオッサン、レジアス・ゲイズ中將です。この人絶対、顔のせいで人生何割か損してますよね。

「このオッサンは、まだこんな事言ってるのな。」

「レジアス中將は、古くから武闘派だからな。」

ヴィータさんは呆れてるように、シグナムさんは興味なさそうにしています。他の皆さんも大体同じ感じです。

「あ、キャロちゃんお帰り〜。今ニュース見とったんよ。」

「質量兵器、ですか……。」

「そうなんよ。物騒な時代になったもんやで。」

そう言って、はやてさんはため息をつきました。まあ、はやてさんの気持ちも理解できます。

ちなみに私個人の意見としては、質量兵器が採用されようと禁止されようと、どっちでも良かったりします。

仮に採用されたとしても、戦力の維持は大変です。拳銃レベルならともかく、大砲とかの維持には多くの資金が必要ですし、それな

ら砲撃の撃てる高ランク魔導師一人雇った方が遥かに安上がりです。高ランク魔導師が優遇される現状は、そんなに変わらないでしょうね。

となると、実際に採用されるのは低ランク局員用のちょっとした武器程度、護身用の拳銃くらいでしょう。高ランク魔導師の障壁を抜くのは難しくても、普通の犯罪者相手なら十分です。

まあそれを実行するにしても、所持に関して厳しい規定を課す必要もありますし、ちゃんとした制度が整うまで何年かかるかわかりませんけどね。

以上を纏めると、「別に採用するのは構わないけど、するならばでしっかりしてほしい」って事です。

「でも、こうして見ると、普通の老人会だ。」

「駄目だよ、ヴィータ。偉大な方達だよ。」

私がそんな事を考えている間に、いつの間にか三提督の話へと話題が変わっていました。今更蒸し返すのもアレなので、態々言うのは止めておきましょう。

それから私は軽い雑談を交えながら、メニューを平らげていきます。粗方食べ終わった所で、先に食べ終わっていたはやてさんが声をかけてきました。

「キャラちゃん、この後ちょっと付き合ってくれへん？」

「いいですけど……何ですか？」

「ええからええから。ほな、ソレ食べ終わったら部隊長室に来てな。」

「???」

一体何なんでしょうか？

部隊長室にて

ぺたん、ぺらっ、ぺたん、ぺらっ、ぺたん……。

私とはやてさん、そしてリインちゃんがいる室内に、紙のめくれる音と判子を押す音が響きます。

「あの、はやてさん？」

「ああ、その書類は全部目を通してあるから、後は判子押すだけで大丈夫やで。」

「そうですか……じゃなくて、何で私がこんな事しなくちゃいけないんですか！」

現在私は右手に判子、左手に決算書類を持って延々と判子を押し続けています。左手側には書類の山があり、はやてさんによって現在進行形で追加されていってます。

「仕様が無いやん。これだけ溜まってる誰かに手伝ってもらわなアカンし、なのはちゃん達は待機とはいえ自分の仕事があるさかいな。」

「キャラちゃん、リインも一緒に頑張るのです。だから、ファイト、
なのですよ。」

とは言われても、そうそう納得できない私はつい愚痴を零してしまします。

「はあ……、というか、こんなに溜め込んでいる事自体が問題じゃないですか？」

「……ふふふふふふふふ。一体誰のせいなんやろなあ？」

「はやてさん？」

何でか分からないけど、はやてさんの様子がおかしいです。アレ？ ひょっとして地雷踏んだ？

「『誰かさん』が無茶苦茶した後始末に頑張ってたら、何故か『誰かさん』に貰った薬の効果で爆発して……、ようやく復帰したらこんなに仕事溜まってるし……。」

あー……、もしかしなくても、私のせい？

「あの、何と言うか……、ゴメンナサイ。」

「ええてええて。これが私の仕事なんやし。……ただ、ちょっとでも悪い思とののなら、手伝って欲しいなあ。」

「……はい。」

はあ……、自業自得だった訳ですか。
仕様がないです。「協力」してもらいましたし、その恩返しくらいはしましょう。それに

「（ボソッ）どうせ、もうすぐヴィヴィオとレリック発見の報告が来ますからね。」

「キャロちゃん、今何か言ったのですか？」

「ううん。何でもありませんよ。」

クラナガン郊外にて

昼間だというのにどこか薄暗く、人通りも無い路地裏に一人の少女が倒れていた。

少女の服装はボロきれのような服が一枚。両足は鎖に繋がれ、その片方の先には大きなケースが繋がれていた。もう片方の鎖は途中で切れており、この先にケースが繋がれていたものだと推測できる。少女の名はヴィヴィオ。トラックによってどこか、恐らくはスカリエッティと関連した施設、に移送されている最中、彼女自身の力の暴走によってトラックは大破。それに乗じて脱出した彼女であったが、ここで力尽きて倒れてしまった。

ヴィヴィオの状態は、多少衰弱しているものの命に別状は無い。本来の歴史なら、このタイミングでエリオとキャロに発見されるのだが

「スバルさん、ティアナさん、今日は誘ってくださってありがとうございます

「ごじます。」

「そんな堅苦しくしなくてもいいわよ。別に嫌じゃないんだし。」

「そうそう。今日はお姉ちゃん達が案内してあげるから、めいいっぱい楽しもう！」

「……はい！」

「キャラが来れなかったのは残念だけどな。健康診断なら仕方ないか。」

「そうね。でもまあ、また今度休みがあったらその時誘えばいいわよ。別にこれが最後って訳じゃないんだし。」

「そうだな。じゃ、私も思いっきり遊ぶぞー！」

「アギトは目立つから、程々にね……。」

当のエリオはスバル、ティアナ、アギトと一緒に行動。そして

「これで……あと100枚です！」

「キャラちゃん、こいつら確認終わったから判子お願いな。」

ドサッ……

「……マジですか？」

「マジや。」

キヤロははやて、リインと共に、終わりが見えない書類と格闘中である。

「……………」。（誰か……………」

ヴィヴィオが倒れてる現場には、まだ誰も来ない。
果たしてヴィヴィオの運命やいかに？

第50話 放置プレイ（後書き）

キャラの健康診断を挟んだ結果、ヴィヴィオ放置プレイ状態に。
ヴィヴィオいじめるつもりは全く無かったのに、どうしてこうな
ったw

以下、Q & Aです。

Q・はやて、かなり苦労してる？

A・後始末+倒れていた間の仕事で、かなりヤバいです。
加えて今回の事件。彼女の仕事が増えるのは間違いないって
いう……。

では、また次話で。

第51話 右腕（前書き）

最近スランプ気味です。

プロット（と言う名の脳内妄想）は最終話まで完成してるのに…

…。

気を取り直して本編どうぞ。

第51話 右腕

ぺたん、ぺらっ、ぺたん、ぺらっ、ぺたん……。

機動六課部隊長室で、三名の人物が書類と格闘している。

はやてが最初に目を通し、許可できるものは纏めてからキャロに渡されて判子を押され、そうでないものはラインに渡され、修正、却下、処分のいずれかで処理される。

キャロの仕事はこの中でも一番楽ではあるが、ずっと同じ事を繰り返すというのも精神的に辛いものがある。

「はあ……、まだですかねえ？」

繰り返しに飽きたのか、キャロがぼやき始める。この言葉には二つの意味があつたが、はやてはその片方のみを受け取って答えた。

「そうやねえ……、あと半分って所やな。」

「そうですか……。」

しかし、はやてから返ってきたのは残酷な現実であつた。こうした以上、キャロはもう片方、つまり、ヴィヴィオとレリック発見の報によつてこの状態から脱出することに賭けるしか無くなつた。そんなキャロの思いが天に通じたのか

『はやて部隊長！』

「シャーリー？ 何かあつたんか？」

『沿岸部にガジェット出現です！ 至急、作戦室へ！』

「了解や。私がそっち行くまでの間に、状況確認お願いな。」

シャーリーからの報告が入り、それまで疲れ気味だった三人の顔が引き締まる。頭は既に、書類モードから任務モードへと切り替わっていた。

「とりあえず、残りはお預けや。ほな、行くで。」

「了解。」

「了解です。（やっと開放されました。でも……。）」

キヤロははやて、リインとともに部隊長室を出て作戦室へと移動する。しかしその間ずっと、何か考えこんでいた。

「お待たせや。状況は？」

「海上沿岸部にガジェット12機編隊が5、さらに廃棄区画の地下に複数、少なくとも20機以上の反応があります。付近で演習に参加していたヴィータ副隊長も、こっちに急行するそうです。」

私とはやてさん、リインちゃんが作戦室に着いた時には、既に状況は始まっていました。

ウィンドウには地下を進んでいる？型に空中を飛行している？型、それと、スバルお姉ちゃん達フォワードメンバーの姿がありました。

「レリックのサーチは？」

「今やってます！」

そして、今の所まだレリックは発見出来ていません。これはちょっと不味いです。

レリックはともかく、それと一緒にいるだろう「あの子」は、絶対にキープしないといけません。

ここは、ある程度手札を晒してでも取りにいかないといいけなすね……。

「はやてさん、私も行きます。」『藍、モード「境」。』

「頼むで。シャーリー、飛行許可は？」

「隊長達の分を含め、既に取得済みです。」

「よっしゃ。なら、キャロちゃんのはちゃん達と一緒に空の方に……、つて!？」

私の方に振り向いた途端に驚き出すはやてさん。まあ、気持ちばかりですけどね。

何も知らない状態で、「目の前の空間が裂けて、その中に無数の目がある」光景なんて見たら驚くに決まっています。

「な、何やコレ!？」

「転移魔法みたいな物です。それじゃ、先に行ってますね。」

「ちょ、待」

はやてさんが何か言っていますが、今は緊急事態なのであえて無視。スキマを使い、一瞬で現場近くの廃ビル、昔私が使っていた拠点の屋上に移動しました。

「藍、モード「白狼」、サブは「八意」。」

それから「千里先を見通す程度の能力」を全開にして広域サーチ。路地裏を中心に、目当ての物を探し始めました。でも

「くっ……やっぱり、ちよっときつい……かも。」

「千里先を見通す程度の能力」によって距離と障害物関係無くサーチできるのは良いんですけど、その分処理する情報も非常に多く、脳に負担がかかります。「八意」でブーストしているのに、それでも頭が痛くなってきました。

「ここにはいない……ここでもない……違う……ハズレ……..
あゝ、頭痛い………いた！」

いい加減頭の痛みがやばくなってきた辺りで、ようやく倒れている女の子と、それに繋がれているレリックを発見出来ました。付近の様子を見るに、ガジェットはまだみたいです。

「藍、モード「境」。」

既に目標は目に見えているので、スキマ移動で一瞬で到着。倒れている女の子、ヴィヴィオと、ケースの中身を確認しながら、ロングアーチとの回線を繋ぎました。

『はやて隊長、聞こえますか？　こちら、エキストラ1。レリックを確保しました。』

『キャロちゃん！？　アンタどこに……ってマジかいな！？』

『マジです。それと、事件に関係ありそうな子が倒れていたの、レリックと一緒に送ります。』

『分かつ（ドサツ！）何！？　シャマル、大至急こつち来てー！！』

ヴィヴィオちゃんの足元にスキマを開き、レリックと一緒に作戦室に送ります。向こうは何だかバタバタしてるみたいですけど、まあ大丈夫でしょう。

『私はこれから地下の方に向かいます。それじゃ、後はよろしくです。』

『地下の方はフォワード四人。それと、108部隊からギンガが向かってるから、撃破しつつ合流してな。』

『了解です。』

キャロが地下に進入するのと同じ頃、なのはとフェイト、そしてヴィータとリインはガジェット二型を相手に空戦を行っていた。既に二小隊の撃破に成功しており、戦果は上々である。

「おし、いい感じだ。」

「リインも絶好量です！」

「ガンガン行くぞ。サッサと片付けて、他のフォローに回らねーと。」

「はいです！……あれは？」

「？」

最初に異変に気付いたのはリインであった。水平線の向こう、遠方から、ガジェットの影が見えた。

それなら、唯の増援として片付ければ良いだけの話だが

「航空反応増大。……コレ、嘘でしょ！？」

作戦室でオペレートをしていたアルトが思わず悲鳴を上げる。

それもその筈だ。ガジェットの反応が、一瞬で三倍以上に増加したのだから。

「波形チェック！ 誤認じゃないの？」

「問題、出ません。そのチェックも実機としか！」

「なのはさん達も、目視で確認できるって！」

「……。」

「はやて部隊長？」

（いきなり増えるなんてありえへん以上、これは多分幻影。いくら幻影を増やしても実機の数はいくらから、結局は時間稼ぎにしかならん。となると、こっちは陽動で、本命は地下？　なら……。）

『部隊長より隊長達へ。スターズ2、ライトニング1はフォワード達の方に合流してください。』

『はやて（ちゃん）！？』

『スターズ1はそっちに残って防衛を。』

『はやて、それだとなのはが！』

『心配いらへん。私もそっちに向かって、なのはちゃんと一緒に撃破に向かうから。』

『『『了解。』』』

フェイトはなのは一人に負担がかかるのを心配していたが、はやてと二人なら、と納得した。むしろ広域型のはやてが出てくるのなら、接近戦メインの自分やヴィータはかえって邪魔になる可能性が高い。ロングアーチのサポートがあるとはいえ、はやては細かく狙いをつけるタイプの魔導師ではないからだ。

「なのは、無理しないでね。」

「絶対無理するんじゃないぞ。」

「分かってるよ。フェイトちゃんとヴィータちゃんも気をつけてね。」

フェイトとヴィータは、そう言い残して市街地の方へと飛んでいく。二人ともが釘を刺すあたり、なのはがどう思われているかがよく分かる。

「それじゃ、私も出てくるさかい。シャマル、その子の事お願いな。」

「分かったわ。任せてちょうだい。」

私はヴィヴィオちゃんが出てきたマンホールの穴から地下へ進入。別方向から進入しているティアナさんに念話の回線を繋げました。

「ティアナさん、そちらの状況は？」

「私、スバル、エリオ、アギトと一緒に、レリック反応のあった所へ向かってる。あと、ギンガさんと合流予定。今からそっちに座標送るから。」

「了解です。」

クロスミラージュからペスカトーガへと、地下のスクラン図、合流座標が送られてきました。

ここからだと、ちよつと回り道しないといけませんね……。そんな事を考えながら、地下道を走っている。

「マスター、前方にガジェットです。」

偶然か待ち伏せか、ガジェット？型が六機、こちらへと向かってきます。

レリックとは逆方向ですし、おそらく前者でしょう。

室内戦、相手はA M F持ちのガジェット、なら

『行くよ、藍。モード「半」サブは「龍」。』

『了解です。モード「半」、セツトアップ。』

ユニゾンと同時に日本刀が大小二本、私の腰に装着されます。

短い方が白楼剣、長い方が楼観剣、そのレプリカです。

こちらに気付いたガジェットは、ふわふわ浮きながら、レーザーを撃って来ましたが

「反射下界斬！」

ドドドドドドオンッ！！

左手で白楼剣を抜いて前方に一振り。射撃を跳ね返す壁を生成します。

私を狙ったレーザーは跳ね返され、運悪くそれに当たってしまったガジェットが一機、ジジッ……と音を立てて機能停止しました。

「今度は……こっちです！」

射撃が止んだ所で、私は右手に楼観剣を抜刀。霊力を込めた二振りを前方にクロスさせ

「結跏趺斬！」
けっかふざん

内側から外側へと薙ぎ払って剣気を射出しました。

Xの形で打ち出された剣気はそのままガジェットの方へと向かっていき、回避が遅れた二機のボディを切り裂きました。

私はそれを盾にしながら、白楼剣を納刀しつつダッシュで残りの三機に接近し

「人符「現世斬」！！」

突進しながら楼観権を横に一閃。直線上にいたガジェットはそのボディを上下真つ二つに切り裂かれ、その機能を停止しました。

私はそれを態々確認せず、突進の勢いそのままに地下道を駆け抜け

『マスター、新たに10機、こちらに向かってきています。』

『人気者は辛いですね。行くよ、藍。』

そう簡単にはいかないみたいですね。はあ……。

「ティアナ、キャラから連絡は？」

「駄目ね。戦闘中なのか、念話に応じないわ。」

キャラが激戦を繰り広げている頃、ティアナ達は既に目標地点へと到達。ギンガとも合流していた。

後はキャラ口だけなのだが、そのキャラ口と念話が繋がらない。

（キャラ口の事だから大丈夫だとは思っけど、これ以上は待つてられないわね……。）

「……残念だけど、これ以上待つのは無理よ。今いるメンバーでレリックに向かうわ。」

「……了解。」「」「」

待つのを限界と判断したティアナ達は、キャラ口を置いて先に行くことに決定した。

合流地点の変更をペスカトーガへと送信した後、ギンガを加えた5人はレリック反応のあった地点へと向かう。

幸いにも道中ガジェットに出会う事も無く、一行は目標へと辿り着く事が出来た。

5人はそれぞれ分担して、レリックを探す事に。それからしばらくして

「ティアナさん、目標のケース、発見しました！」

「でかした、エリオ！」

エリオが地下水道に浮かんでいるケースを発見し、ティアナに報告する。

エリオはそのままケースを脇に抱えてティアナ達の方へと向かう。その時だった。

シュッ！ シュッ！ シュッ！ ギューーーーー……！！

「「「「「!?」「」「」

誰もいない筈の地下道に響く風切り音と機械音に、5人は警戒を強める。

音は次第に大きくなり

「くっ……、うわあああああっ!!」

エリオに向かって黒い影が襲いかかった。

咄嗟に応戦しようとしたエリオであったが、レリックを抱えている状態ではストラダを振るう事も出来ず、腹部に衝撃を感じたと思った瞬間には、体ごと吹き飛ばされて壁へと叩き付けられた。

ドオオオオオンッ!!

「エリオ!？」

「大……丈夫……です。ケースは……、守りました……。」

「馬鹿! それよりも、自分の心配をしなさい!」

「ギン姉、あれって……。」

「人型の……虫? でも、あれは」

スバルとギンガの視線の先にいるのは、先程エリオを吹き飛ばした張本人、ガリユーである。

ガリユーはフォワードメンバーの方に振り向くと、大きく羽を広げて威嚇する。

突如現れた強敵に、ティアナを始めとしたメンバーは警戒を強め

る。そんな時だった。

「……魔力反応!？」

「あの魔法陣、この前の!？」

「あの時の、召喚師!？」

ガリユーの背後に紫色の召喚陣が現れて、そこから人影が出てくる。

紫色の髪に感情の見えない瞳。ガリユーの主、ルーテシアだ。

ルーテシアはフォワードメンバーへと向き直り

「そのレリックは、私が貰う。……ガリユー、邪魔な子達は、みんなやつつけていいから。」

「……。」

ギューーーーーー……!!

ルーテシアの命令にガリユーは頷き、地下道に再び機械音が響き渡る。

音源はガリユーの右手。かつてキャロによって失われたそこには今、機械製のドリルアームが付けられている。

ルーテシアが桃髪の少女への復讐を誓い、ドクターに頼んで付けてもらった力。

新たな獲物を求め、ドリルは再び高速回転を始めた。

第51話 右腕（後書き）

ガリユーさんが天元突破なされました。

腕を失うのは、むしろ強化フラグだと思っている作者です。

以下、Q & Aです。

Q・ヴィヴィオ救出、やけにアツサリしてたような……。

A・元々都市部の路地裏って情報はありましたし、廃棄区画ならスキマ移動可能なので、キャラも大して問題にしませんでした。じゃないと書類仕事断ってでも探しにいきます。

では、また次話で。

第52話 桜色マスターパーク（前書き）

最近、場面確認のためにSTSアニメ見直しました。

……何だこのキャラは？

ウチのキャラとのあまりの違いに、それといつの間にかこっちのキャラをデフォルトで考えていた自分にと、二度驚くことに。どうしてこうなったw

気を取り直して本編どうぞ。

第52話 桜色マスタースパーク

バシュッ！ バシュッ！ ……ザンッ！！

「あー、もう！ こいつらどれだけいやがるんですか！」

切っても切っても沸いてくるガジェットを相手にしながら、私は地下道を進んでいきます。

背後にはガジェットの残骸がゴロゴロ転がっています。20機を越えたくらいから数えるのを止めたので、細かい数は覚えていません。

『マスター、ティアナさんからペスカトーガに連絡がありました。先に目標に向かうので、そちらで合流を、との事です。』

「あー、間に合わなかったかー。 ……断命剣「冥想斬」！！」

藍との会話中にもガジェットが襲ってきたので、レーザーを避けながら接近。

楼観剣に靈力を込め、袈裟懸けに切り裂きました。

「今の奴で最後みたいだね。それじゃ、急いでティアナさん達のところに行くよ。」

『……マスター、新たに6機、こちらに接近中です。』

「マジですか……。面倒です……。」

コレどう考えても足止め目的です。早く行かないといけないって

のに……。

キャラがガジェットと戦闘を繰り返している時、フォワードメンバー達もまた、戦闘を開始していた。

「ブリッツキャリバー!!」

Load cartridge .

「……!!」

ウィングロードを使い、ギンガがガリューに突進する。
カートリッジロードされたリボルバーナックルが回転を始め、ギンガはそれを、ガリュー目掛けて突き出した。

「おおおおおおっ!!」

「……!!」

ギイイイイイインッ!!

それに対し、ガリューも右腕のドリルを高速回転させてギンガへと突き出す。

拳に纏わせている障壁同士が干渉し合って、押し合い、破り合いの膠着状態になる。そこに

『スバル、今!!!』

『オーケー、ギン姉。』『うおおおおおっ!!!!!!!!!!』

「……!?!」

スバルが時間差で突撃。ガリユーの側面に回りこんで攻撃を仕掛けようとしたのだが

「!?! スバル、危ない!!!」

「!?!」

P r o t e c t i o n .

ガキイイイイツ!!

「くっ……。」

ギンガの警告とほぼ同時に、スバルの体に衝撃が走る。マツハキヤリバーが咄嗟に展開したオートガードのおかげで大した怪我はしなかったものの、攻撃は失敗に終わってしまった。

ガリユーの方はというと、スバルの突撃を利用して膠着状態を脱し、ギンガとスバルへと視線を向けている。その背中には、先程スバルを攻撃した尻尾がゆらゆらと揺れていた。

「今のは……。」

「尻尾も武器みたい。どうやら、簡単に行かせてはくれそうにないわね。」

スバルとギンガはガリユートの相手を。一方

「……邪魔。」

（誘導弾、直射弾、属性弾、打ち落とす必要のあるものとそうでないもの。一瞬で判断して……迎撃！）

「シューーートー!!」

パンッ！　パンッ！

ティアナはルーテシアが撃ってくるシューターを迎撃する。

その背後には、先程の襲撃から未だに目を覚まさないエリオと、エリオに対して呼びかけを続けているアギトがいた。

『アギト、エリオの状態は？』

『特に怪我も無いし、気を失ってるだけみてーだ。』

『OK。アギトはそのままエリオに呼びかけ続けて。それまでは、私が何とか抑えるから。』

『了解。……ほら、さっさと起きろ!』

現状では戦況は膠着しているが、エリオが復帰すればその天秤はこっちに傾く。

もしエリオが起きなかったとしても、フェイト隊長とヴィータ副

隊長がこちらに向かっている。

時間が経てば経つほど有利になるのを理解しているティアナは、現状維持を選択した。

「さあ、来なさいチビっ子。センター“ガード”の意地にかけて、アンタの攻撃は絶対に通さない！」

廃棄都市のとある一角、廃ビルの屋上に二人の人影があつた。人影はどちらも女性で、二人ともが水着のようなボディスーツに身を包んでいる。

戦闘機人NO・4、クアットロと、NO・10、ディエチだ。クアットロの眼前には複数のウィンドウが展開されており、それぞれに六課メンバーの戦闘の様子が映し出されていた。

「あらあらあ、これはちょーつとばかり不味いですわねえ。」

「どうしたの、クアットロ？」

独り言とも取れるクアットロの呟きに、自身の固有武装「イノーメスカノン」のチェックをしていたディエチが律儀に反応する。

「ルーテシアお嬢様の所が押されてるみたい。隊長クラスも向かってるみたいだし、このままだと不味いわねえ。」

不味い、と言いながらも、少しも困った風には見えないクアット口。ディエチの目には、むしろ楽しんでいる風にも見えた。

クアット口は数秒考え込む仕草を見せた後、おもむろに手元のパネルを操作した。新しいウィンドウが開き、そこには彼女達と同じようなボディースーツを着た少女が映っている。戦闘機人NO・6、セインである。

ん？ クア姉、どうしたの？

「セインちゃん。ちょっとお願いがあるんだけど、頼まれてくれるかしら？」

「……行つて。」

「くっ……、シュート!!」

パンッ！ パンッ！

ルーテシアが放った弾幕を、ティアナが必死にさばき続ける。ガリューは二人と戦闘中。インゼクトを出してもシューターで落とされる。室内空間では地雷王や白天王は使えない。接近戦の技能を持たないルーテシアに可能なのは、射撃とバインドによる攻撃だ

けであつた。

一方のティアナは背後にいるエリオを気にして動くことが出来ず、また時間稼ぎに徹すれば良い状況なので自ら討って出ようとせず、戦況は完全に膠着していた。

ルーテシアへと通信が届いたのは、そんな時だった。

『聞こえますか、お嬢様？』

『……クアットロ？』

『はい。お嬢様がお困りのようなので、助けてあげようと思ひましてえ。』

『……分かった。私はどうすれば良い？』

『話が早くて助かります。ではですねえ、……。』

クアットロの指示は簡単なものであつた。

合図に従つて、ガリユーに指示するだけ。ただそれだけである。ルーテシアは相変わらぬのポーカーフェイスのまま、ティアナへと攻撃を続ける。

5秒、10秒と経過し、やがて、その時が来た。

『今ですわ。』

『……ガリユー、“撃つて”。』

『……！』

ギューーーーーーッ！！

ルーテシアの指示に従い、ガリユーの右腕のドリルが高速回転を始める。そして

バシユウウツッ!!

「「「「!?!?!」」」」

ガリユーの右手の肘から先、ドリルアームになっている部分が切り離されて射出された。

遠距離攻撃手段を持たないガリユーの弱点を解消するために付けられた、アームの隠し機能である。

ドリルは高速回転しながら目標 ティアナの方へと向かっていく。

「チツ!!」

一瞬のフリーズの後すぐに復帰したティアナは、迫り来るドリルに対して回避行動を取り始める。

簡単に人を殺せる螺旋の暴力に対し、強固な障壁を持たないティアナに出来るのは回避行動のみであった。

(意表は突かれたけど、これ位なら回避でき……!?!?!?)

迫り来るドリルを避けようとしたティアナであったが、何故か右足がつんのめって動かない。

残った左足で踏ん張ることで、ティアナは何とか転倒はしないで持ちこたえた。

一体何があったのかと思いきやティアナは右足を見ると、そこにあったのは……、手であった。

人の手が一本、地面から生えており、それがティアナの足首を掴

んでいた。そしてそれが、ティアナの命運を分けることになる。

（床から手！？ ……不味い！！）

ギューーーーーー！！！！！！！！

ティアナの眼前にあるのは、高速回転を続け、自らの存在を主張しながら迫るドリルアーム。

回避が無理と判断したティアナは防御魔法に切り替えようとするが、今のタイミングだとまず間に合わない。

そして、スバルとギンガはガリユーと交戦中。

エリオは未だ目を覚まさず、アギトの位置はティアナの背後で、そこからだとティアナの背が邪魔して援護することが出来ない。

今この場においてティアナを助けられる人物は……、誰もいなかった。

「くっ！！」

「ティアアアアアアアアア！！」

スバルの叫びをBGMに、ドリルはティアナに吸い込まれるかのように向かっていく。

その場にいた誰もがティアナの“死”を確信したその時

ドオオオオオオオオオ！！

桜色の極光が、迫り来る死を薙ぎ払った。

『藍。まだ終わらないんですか？』

『……マスター、新たに五体、右側の通路から来ます。』

何で私の方にばかり来やがりますか！？ もうお代わりは沢山ですよ！

藍の言葉を裏付けるように出てきたガジェットを両断しながら、私は目的地へと急ぎます。

私の背後には、上下真つ二つに泣き別れたガジェットを筆頭に、レンズを撃ち抜かれて機能停止したもの、アームを微塵切りにされたもの、爆散してスクラップになったものが死屍累々と転がっており、おそらくその数は100を超えます。

「人符「現世斬」！！」

すれ違い様に楼観剣を一閃。新たに3機、スクラップが増えました。さつきからずっとこんな感じです。

強さ自体は大したことないけど、こうやって足止めされているせいではなかなか目的地に着けません。

……仕方ないですね。

『藍、モード「霧雨」、サブは「白狼」。壁抜き砲撃で一掃するよ。』

『了解です。』

私は藍にモード変更を指示。一旦融合解除の手順を踏んだ後、形態が変更されます。

即座に「千里先を見通す程度の能力」でエリアサーチを実行。目標地点の戦況と、残りのガジェット的位置を確認します。

……丁度射線上ですね。ラッキーです。

「それじゃ……、一発派手にいきますか！」

私はミニ八卦炉（偽）を取り出し、そこに霊、魔、妖力を込めていきます。

チャージされた力は八卦炉の持つ増幅作用によって荒れ狂い、気を抜くとすぐにでも開放されそうです。

『藍、照準サポートお願い。ちょっと制御で手一杯みたい。』

『了解です。』

細かい制御を藍に任せ、私はさらに力を込めていく。
数秒後、私の手元には臨界に達し、開放の時を今かと待っている

八卦炉がありました。

キイイイイイイインツ！！

『マスター、今です！』

行きます！　これが私の全力全壊！！

「魔砲「ファイナルスパーク」！！」

ドオオオオオオオオオオン！！

スperl宣言とともに放たれたのは、私の魔力光と同じ桜色の極光。

魔砲は眼前の壁を容易く貫通し、その先に位置していたガジェツトを根こそぎ飲み込み、目標地点までの壁を悉く貫通し、ついではガリユーから撃たれた黒っぽい何か（小型Gとかでしょうか？）を吹き飛ばしていきました。

第52話 桜色マスターパーク（後書き）

繋ぎの回。決着は後編で。

以下Q&Aです。

Q・ガリューよ、ドリル発射すんなw

A・奇襲用の隠し武装です。

今回みたいに意表を突いたり、密着してから零距离で撃って障壁抜いたり、何気に用途は多かったり。

でも一度撃つと戻ってこないの、以後は片腕で戦うことに。ロマン技です。

Q・まさかのガリューがドリルを装備とはロマンですね

A・44話のスカさんのセリフ「再生させるにしても、義手を付けるにしても……」がフラグでした。

洗脳したギンガに付ける予定のアームがあったので、それをそのまま流用した、という裏設定もあったりします。

Q・質問ですが、妹紅のモードでは死んだらリザレクションするのでしょうか？

A・能力は魂に依存する、というのがここでの設定です。

その肝心の分霊体が所詮欠片に過ぎないので、死亡のち完全復活とまでは行かず、怪我の治療速度を早める程度です。

自動回復だけで十分便利なんです。

第53話 幼女を見た子鬼の恐怖（前書き）

今回はルーテシア視点メインです。

第53話 幼女の見た子鬼の恐怖

ある日突然、お母さんがいなくなつた。

いつもの時間になつても帰つて来なくて、その日、私は一人でベツドに入つた。

次の日も、その次の日も、お母さんは帰つて来なかつた。

どうして帰つて来ないの？ という疑問に答えてくれる人は誰もいなくて。今よりももっと小さな子供だった私には、どうしたら良いのかなんて全然分からなかつた。

さらに次の日、コン、コンと、玄関をノックする音が聞こえた。

お母さんが帰つてきたと思つた私は、相手の確認もしないでドアを開ける。そこにいたのは、私の知らない大人だった。

その人は私を迎えに来たと言う。お母さんもそこにいるから、とこれ以上一人ぼっちでいるのが嫌だった私は、その人に言われるがまま付いていくことにした。

その人に連れられ、私はお母さんと再会した。

だけど、お母さんは液体の詰まつた筒の中に入っていて、ずっと眠つたままだつた。

ドクターっていう人によると、死んではいないんだけど、目を覚ますにはレリックっていうものが必要で、それも、11番のじゃないといけないらしい。

この日から、私の長い旅は始まつた。

ゼストと一緒に、レリックを求めて色んな世界を歩いた。

その途中でドクターの願いを聞いてあげたり、ゼストが戦う時にお手伝いした事もあったけど、結局、レリックは見つからなかった。

もしお母さんが目覚めなかったら、私は一人ぼっち。そんなの嫌だから、私はレリックを探し続けた。

そんな時、それは起こった。

いつものように旅をしていたある日、ドクターから通信が入った。近くで開かれているオークションの為に運び込まれた物の中に、ドクターの欲しがっている物があるらしい。

それくらいなら簡単だと思った私は、ガリユーにお願いして取ってきてもらう事にした。

その途中、ガリユーが私と同年位の魔導師を見つけたらしいけど、その程度の相手にガリユーが負ける筈が無い。

私はガリユーに、その子をやつつけるように命令した。

なんで？ どうして？

送還術式によってこちらへと戻したガリユーを見た時、私はそれ以外考えられなかった。

戦闘の結果、全身を痛めつけられ、危うく死ぬ所だったガリユー。爪で切り裂かれたような傷が全身に出来ていて、そこから血が流れていつている。その数は100や20じゃ済まない。50、いや、ひよっとすると100以上あるかもしれない。

そして、一番酷かったのは右腕。肘から先が完全に無くなっていた。

「今すぐスカリエッティの所に行くぞ。」と言ってガリユーを背負ってくれたゼストと一緒に、私はドクターの所へと急いで向かうことにした。

ドクターの所に着くと、すぐに治療が始まった。

ガリユーはお母さんと同じ治療ポッドに入れられ、お母さんの隣で眠りながら、その体を治している。ドクターによると、あと数日で目を覚ますみたい。

私の目の前には、私の大切な家族が二人。
右側にお母さん。左側にガリユー。

お母さんが眠って、私はずっと一人だと思っていた。
ガリユーはずっといてくれたけど、それはガリユーが私の召喚蟲だからで、当たり前的事だと思っていた。

だけど、それは唯の勘違いだった。

絶対なんて無い。当たり前だなんて事無い。現にガリユーは、こうやって死にかけた。

いなくなるかもって思った時、私は初めて、この当たり前がどれだけ大切なのか分かった。それと一緒に、今までずっと一人ぼっちなんかじゃなかった事によやく気付けた。

ゼスト、ガリユー、インゼクト、地雷王、白天王。

ゼスト以外は人間じゃないんだけど、そんなのは些細な事なんだ

と思う。皆、私の大事な友達。

そんな事を考えながら、私はもう一度ガリユーの方へと向き直る。そこには、肘の先に何も無いガリユーの右腕があつて。

二度とこんな事が起きませんように、と思いながら、私は部屋を後にした。

「ミツケタ。」

その子を見た時、私は思わずそう言ってしまった。

モニターに映っているのは、空を飛び回り、ドクターのおもちやを叩き落としている女の子。

私と同じ位の背丈に桃色の髪の毛。間違い無い、ガリユーをあんな目に遭わせた奴だ。

ドクターにその子の事を聞いてみると、どうやら機動六課っていう所にいるらしい。

そこも私のようにレリックを追っていて、ドクターと敵対している。

私がレリックを探している以上、戦う事になるのは間違い無い、というか、既に何度か交戦している相手がそこらしい。

レリック以外に興味が無かったから、そんな事は全然覚えていなかった。

私はドクターをお願いして、ガリユーの腕を強化してもらう事にした。

再生治療は時間がかかるので義手を付ける事になり、ドクターが

持っていた義手の中で最も戦いに向いたものが、ガリユー用に調整されて付けられた。

これでガリユーは大丈夫。もう、あの時みたいな事は嫌だから。もし今度アイツに会っても、私の大事な物は傷つけさせない。逆にこつちがやつつけてやる。

そして今日、ドクターから連絡があった。

レリックが見つかって、機動六課が向かっている、と。それを聞いた私は早速行動する。

お母さんの為に、レリックを手に入れる。

そして、ガリユーの為に、私はアイツをやつつける。

レリックの所に向かった時、そこには既に先客がいた。

私はガリユーと一緒に、レリックを奪う為に戦い始める。

アイツはいないみたいで、前衛の二人をガリユーが、後衛の二人を私が相手する。ガリユーの奇襲で一人リタイアさせられたのは運が良かった。

そして始まった戦いだけど、これが長引いてしまった。

一人一人の実力はとにかく、数が多いのでなかなか手こずる。

どうしようかと考えていると、クアットロから連絡が来て、私はクアットロの言うとおり、ガリユーに指示を出した。

その結果、向こうのうち一人が足を掴まれて動けなくなって、そこにガリユーの腕が飛んでいく。

これであの人はおしまい。そう思った時だった。

桃色の暴力が、ガリユーの腕を薙ぎ払った。

壁を貫通して飛んできた砲撃が、ガリユーの腕を飲み込んでいく。
桃色の光？ ガリユーの腕？ ……まさか！？

それは勘で、根拠なんか全然無いんだけど。

私の頭に浮かぶのは、あの日の記憶。

ガリユーを通して見た少女の姿と、ボロボロになったガリユーが
再生され、私の心はあの日に戻ってしまった。

また、私は大切な物を失うの？

今度こそ、本当に一人ぼっちになってしまうの？

そこまで考えて怖くなってしまい、そして私は

「逃げた、ですか？」

「ええ。砲撃が止んだ瞬間に、召喚蟲もろとも転移魔法で逃げたわ。」

「そうですね……。転移の足跡は？」

「今ロングアーチに調べてもらってる。そう遠くには行っていない筈だけど……。あ、そうそう。さっきは助かったわ。ありがとね。」

ミシッ……。

「いえいえ、とティアナさんとの会話を打ち切って、私はエリオ君の方へと歩いていきます。」

にしても、逃げられちゃいましたか。

出来るなら、ここで仕留めておきたかったですけど。残念です。

気を取り直してエリオ君の様子を見ると、ケースを抱えたまま気絶しています。

奇襲に対応できなかったのはNGですけど、ケースを放さなかったのは立派です。

「アギト、エリオ君の様子は？」

「まだ起きねえ。怪我は無いんだけど「うつつ……」お、起きたか。」

「えっと、アギトに……、キャロ？」

「そうですね。お寝坊さんのエリオ君。寝ていた間の事は、アギトにでも聞いてください。」

「うつつ……。」

ミシッ……。

エリオ君が悔しさ半分、情けなさ半分といった表情でこっちを見えます。

私は褒める事なんてありません。エリオ君は踏まれて伸びるタイプだと思うので、こうやってからかい半分に厳しく接するのが本人の為です。

まあそれは建前で、実際はエリオ君いじりが楽しいからなんです。

アギトに説明を任せた私は、そのままレリックのケースの所へ。ケースを開けると、そこには赤色の宝石型のロストロギア、レリックが入っていました。

さて、“仕込む”としましょうか。

ミシッ、ミシッ……。

「はあ、はあ、はあ……。」

別に走った訳でもないのに、私の息は荒い。さっきから、心臓の音がうるさくてたまらない。

あの光を見た瞬間、私は逃げる事しか考えられなくなった。咄嗟にガリューを送還し、私も転移魔法でここまで逃げてきた。それがほんの数秒前の出来事で、まだドキドキが止まらない。

『お嬢様、ご無事ですか？』

「クアツ……トロ？」

通信してきたのはクアツトロ。近くで皆の様子を見ているらしいんだけど……。

『お嬢様、無事だったんですね。良かったです……。……でもお、困った事になりましたねえ。』

「……？」

『レリックですよ。このままだと、取られちゃいますよ？ お嬢様は、それで良いんですか？』

「それ、は……。」

良い訳が無い。

私が欲しいのは11番のレリックで他はどうでも良いんだけど、アレが何番か分からない。分からない以上、何としても手に入れない。

でもあれを奪うということは、あの人達と戦う必要がある訳で。となると当然、アイツとも戦わないといけないという訳で。

……怖い。

今度は右手じゃ済まないかもしれない。最悪、ガリユーが殺されるかもしれない。

やっつける、なんて考えはあの砲撃で文字通り吹き飛んでしまい、私にとって、アイツの存在は恐怖そのものになった。

「クアツトロ。私、戦いたくない。……怖い。」

『……。』

「これ以上、ガリユーが傷つくのは嫌。これ以上、大事なものが傷つくのは嫌だから。」

だから、もう

『……はあ。お嬢様、それじゃあ駄目ですよ。』

へ？

『お嬢様は、お母様を目覚めさせたいんでしょう？　そのために、今までずっと頑張ってきたんでしょう？』

「う、うん。」

『でも、そうなると間違いなく機動六課とぶつかる事になる。今日逃げたとしても、いつか必ず当たる事になりますの。』

「うん……。」

『いつか絶対に逃げられない時が来ます。でもこのままだと、お嬢様は「また」守れない。』

「！？」

……嫌だ。もうガリユーを失うのは、もう一人になるのは嫌だ。だけど

「だったら、どうすればいいの？」

分からない。私には何も

『そんなの、簡単ですわよ。』

え？

『お嬢様の邪魔をする人達なんて、みんな“潰しちゃえばいいんですよ”。』

……。

『お嬢様の大切なものに手を出す奴なんて“潰しちゃえばいいんです”。お嬢様にはそれだけの力があるんですから。』

…… ああ、そっか。それなら簡単だ。

「……ありがとう、クアットロ。」

『いえいえ。どういたしまして。』

クアットロとの通信を切って、私は早速行動に移す。
本当、何でもっと早くに思いつかなかっただろう。

「……召喚。来て、「地雷王」。」

ドシイイイイイインッ！

召喚に応じて私の召喚蟲のうちの一体、地雷王が呼び出される。呼び出した場所は廃棄都市の一角。丁度アイツ達がいる所の真上。

地雷王の能力は生体電流による放電。それと

「地雷王、あなたの下にあるもの、……全部潰して。」

「……！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……。

私の命令を受けて、地雷王のもう一つ的能力 魔力による振動波が発動される。

振動を受けた大地は大きく揺れて、そして

ドオオオオオオオオオオッ！！

地雷王のいた地盤が、振動に耐え切れずに崩れ去った。

第53話 幼女の見た子鬼の恐怖（後書き）

ルーテシア視点だとキャロマジで鬼です。

以下、Q & Aです。

Q・ルーテシアよ、地盤崩すのは良いが、レリック回収どうするの？

A・原作でも崩してます。

後からガジェットに探させるつもりなのでしょう。行き当たりばったりです。

まあそれを言うのなら、間接的に指示したクアットロのせいなんです。

では、また次話で。

第54話 怒心地の有頂天（前書き）

今話で終わらせたかったけど、長くなりそうなので分割しました。
あと今話のポイントですが、読む前に前話を見直してルーテシア
に感情移入しておくにより楽しめます。
では、本文どうぞ。

第54話 怒心地の有頂天

ドオオオオオオオオオン！！

地雷王の振動波によって廃棄区画の地盤が崩れ去る。

丁度フォワードメンバーのいる辺りが崩落していく様子が、サーチャーを通して作戦室にも中継されていた。

「敵召喚蟲により、地盤が崩壊！」

「皆の反応は？」

「今、サーチしています！」

ロングアーチスタッフは、残りのサーチャーからの情報を頼りにフォワードメンバーの安否を確認しており、その情報は、未だにガジェット？型と戦闘中のなのははやてにも入っていた。

「皆！ ……くっ！」

「なのはちゃん。気持ちは分かるけど、今はこっちが優先や。」

「はやてちゃん……。」

「私の事、冷たい奴やと思うか？」

「……ううん。ごめんね、はやてちゃん。」

二人は今、リミッター解除無しでガジェット？型と戦闘している。

クアットロのシルバーカーテンによる幻影の混じった部隊。ガジェット如きに遅れを取る二人ではなかったが、広域攻撃が使えない現状では、どうしても撃破に時間がかかる。

それも含めてはやての読み通りであり、フォワードメンバーのフオローにはフェイトとヴィータが向かっている。現状、なのはとはやてがするべきは、ガジェットの迎撃のみである。

なのはもそれは理解しているが、それでも助けにいつてあげたいという思いは消えず、理性と感情の間で板挟みになっていた。

それに対し、はやては部隊長として、あえて突き放す言い方をした。

なのはもそれに気付いたので、それ以上は何も言わずにガジェット撃破に意識を戻した。

「ま、心配せんでも大丈夫やろ。なのはちゃんに鍛えられた子たちがこの程度でやられる訳が無いし、キャラもいるしな。」

「……………」

空中に浮かんでいるルーテシアの眼下で、地雷王によって地盤が崩壊していく。

それをどこか他人事のように見ていた彼女であったが

「そっいえば、レリックもあそこにあっただっけ。」

キャラを排除するためとはいえ、一時的にだけ目的を忘れてしまっていた事に気付いた。

埋まってしまったのなら自分一人で探すのは面倒だから、ドクターのおもちゃにでも探させよう。

そう考えて、クアットロに回線を繋げようとした時であった。

キイイイイン……。

ルーテシアの耳に入ってきたのは金属の摩擦音。この音は

次にルーテシアが見たのは光の帯。丁度地雷王のいた辺りから左右に二本、こちらに向かって延びて来ており、片方にはギンガ、もう片方にはティアナを背負ったスバルが、ローラーブーツを回転させてこちらに向かって来ていた。

それに対し、ルーテシアは自身の周りに魔力付与をしたダガー、トードス・デルヒを召喚して射出する。それと同時に、現状では的にしかない地雷王を送還しようとしたのだが

「……ッ！ バインド!?」

地雷王の周りに魔法陣が発生し、そこから出てきた鎖で地雷王が拘束される。

こうなってしまうては、バインドが解けるまで送還することができない。

「はああああっ!」

「おおおおおっ!」

そして、ギンガとスバルはダガーを物ともせずはこちらに向かつてくる。

ルーテシアは、自分の周囲に残ってあった残りのダガーを射出しながら後退していったが、そこにエリオも参戦してくる。

ソニックムーブで先回りされ、着地と同時に槍の穂先を向けられて身動きが取れなくなる。そして

「……!？」

「子供相手にこんな事したくねーんだが……。建造物破壊、公務執行妨害、その他諸々で、話を聞かせてもらおうか？」

駄目押しとばかりに、ルーテシアはヴィータのバインドによって拘束される。

なのはとはやてにガジェットを任せたヴィータとフェイトだったが、既にキャロが地下に入っている事もあって、地上での索敵に集中していた。

幻影でガジェットの数を水増しさせている相手、要するにクアットロ、を探していた二人であったが、その最中に起きた地雷王召喚。直後に出てきたルーテシアを発見した二人のうち、フェイトは引き続きサーチを続行。そしてヴィータがルーテシアの対処に当たった。と言っても、フォワード陣の働きのおかげで、実質やったのはバインドのみであったが。

拘束されたルーテシアの周りに集まってくるフォワード陣とヴィータ。

バインドに何か特殊な仕掛けでもあるのか、召喚が使えない。ブレイクしようにも、この状態だと向こうの方が対応が早い。

ルーテシアの状況は、完全に詰みであった。

「あらあらあ、お嬢様、捕まっちゃいましたねえ。」

相変わらず、全く危機感を感じていない声でクアットロが喋る。
彼女の目には拘束されたルーテシアの周りに集まる六課メンバーと、
空中でこちらを探しているフェイトが映っていた。

「どうする、クアットロ？」

その傍でイノームスカノンの整備をしていたディエチが問いかけ
てくる。既にメンテナンスは済んでおり、いつでも発射可能な状態
であった。

「そうねえ……、セインちゃん。」

『はいよー。何、クア姉？』

「今からお嬢様に隙を作って貰うから、私が合図したらお嬢様とレ
リック、お願いできる。」

『了解、お安い御用だよ。』

「セインちゃんが回収終了した後、ディエチちゃんの砲撃。これであいつらは一網打尽。」

「うん、分かった。」

クアットロの作戦に従って、ディエチは発射準備を始める。

彼女達の元々の役目は遠距離砲撃によるヴィヴィオの確保とレリックの確保、邪魔者の排除であったが、一つ目は既に転送魔法でも使われたのか、付近に反応が無い。

となると、残りはレリックの確保と六課メンバーの撃破。

ディエチの砲撃による一掃を狙ったクアットロは態とルーテシアを支援せず、六課メンバーを集める囿として利用した。

後はルーテシアを通してヴィータのトラウマでも刺激すれば隙ができる。それを実行に移そうとした時であった。

「……あれ？」

「どうしたの、ディエチちゃん？」

「向こう、一人足りない。」

ディエチの指摘を聞いて、クアットロもルーテシアの周囲の状況を確認する。

そこにいたのは、ルーテシア、スバル、ティアナ、エリオ、アギト、ヴィータ、ギンガの7人で

「あの子がいない！？ 一体どこに？」

「……あそこ！！」

要注意人物の不在に慌てるクアットロの横で、デイエチが肉眼で目標を見つけた。

遠距離射撃タイプとして調整された彼女の視力は並の人間を遥かに凌ぐ。

その強化された視覚が捕らえたのは、黒翼を生やして上空に浮かび、翼以上に黒い笑みを浮かべている幼女であった。

「ふふふふふふふふふ……。」

ティアナさん達と合流した直後、私達を襲ったのは天井の落盤。それに対してスバルさんとギンガさんがウイングロードで道を作り、落盤が始まる前に天井を粉砕。空いた穴から皆で脱出していました。レリックのケースを持ち出そうとしていた私を放置して……。

いや、信頼してくれてるっていうのは分かりますけど、酷くありません？

結局、脱出が遅れた私は崩落に巻き込まれる事に。崩落してくる一瞬、メイン「鴉天狗」サブ「博麗」で振ってくる瓦礫をグレイズして脱出しました。生き埋めとかシャレにならない。

そして今、私の眼下にいるのは、その元凶ともいえる存在。アルケミックチェーンで拘束され、足を力サカサ動かそうとしている巨大甲虫。……どう考えてもGです。

地雷王の……いや、

「G雷王の分際で！ 藍、モード「天」、サブは「境」！」

「はい！」

今や私の怒りは有頂天。ユニゾンを一旦解除して変更。「大地を操る程度の能力」を持つ天人の形態を選択し、私の足元にスキマを開く。数秒後、私は地雷王よりも一回り大きな岩の上に立っていた。

「押し潰せ!!」

要石「天地開闢プレス」

召喚が終了した要石は、私を上に乗せたまま重力に従って落下していきます。

バインドで動けないG雷王に、これを避ける術は無く

「か！ な！ め！ い！ し！
だあああああ！！！！！！」

要石は、そのままG雷王の背中に落下する。

G 雷王は圧倒的質量に押し潰されて、自身が陥没させた地下へと落ちていきます。そして

「地雷王——！！！！！！！！！！」

ルーテシアちゃんの絶叫が、周囲に木霊しました。

第54話 怒心地の有頂天（後書き）

地雷王エ……。

ゴメンよ……。でも、キミの運命は連載開始時から決まっていたんだ。

このSS書こうと思ったきっかけの一つが、「地雷王に天地開闢プレスやりてえ」である以上、この運命は確定してました。

……どSですね、私。

では、また次話で。……どん引きしないでくださいね？

第55話 間抜け者の死（前書き）

物騒なタイトルですけど、誰も死にません。

第55話 間抜け者の死

「地雷王——！！！！！！！！！！」

天地開闢プレスにより、地盤が轟音を立てて崩壊していきます。
それ以上に大きな絶叫が木霊した所で、私はようやく頭が冷えてきました。

『マスター。』

『……何かな、藍？』

『いくら何でもやりすぎでは？』

『うつ……。』

ルーテシアちゃんの絶叫で少なからず罪悪感を刺激されている所に藍の追い討ち。ジト目でこっちを見る藍の姿が幻視できます。

『いや、でも見た目ほど酷い事にはなっていないよ！？ あの虫も上手い事地下に落ちたから潰れてないし！ それに、もし本気で潰すつもりなら追撃で天狗のマクロバースト撃ってるから！』

『それでも、です。 あんな子にトラウマ作ってどうするんですか！』

『えーっと……、ゴメンナサイ。』

『全くです。余計な恨みを買って損するのはマスターなんですから、その辺自重してください。』

『つて、そつち!?!』

『当たり前です。』

さすが藍、私最優先の良い子です。

けど、どこか間違ってると思うのは気のせいでしょうか？

『じゃあ、そろそろ皆と合流しようか?』

『ですね。……、マスター!!』

『分かつてる! 藍、モード「鴉天狗」!!』

藍の叫ぶような念話とほぼ同時に感じたのは魔力反応。

視線の先はビルの屋上。そこにいる二人のうちの一人、ディエチさんが大砲を構え、フォワードメンバーに狙いを付けていました。

キヤロの天地開闢プレスにより衝撃を受けたのは、何もルーテシアのみではなかった。

いきなり目の前で起きた事態に対し、空いた口が塞がらない者、「えええええええ!?!」と驚愕を表す者、ルーテシアに同情すること現実逃避をする者。

誰しもが程度の差はあれ驚愕し、しばしの間思考停止状態に陥った。

そんな中いち早く復帰したのは……、以外にもクアットロであった。

戦闘慣れしていないクアットロが真っ先に動けるようになったのには、いくつか理由がある。

一つ、遠目で見ていたので余り現実味が沸かなかった事。

一つ、地雷王の事などどうでも良いと考えている事。

一つ、ルーテシアに対して一切同情の念が沸かなかった事。

「くだらないもの」にとられない彼女はこれを好機と見て、待機していたセインに指示を出した。

『セインちゃん!』

『へ? ……わ、分かった!』

「なっ!? しまった!」

クアットロの指示を受け、ようやく現実に戻ってきたセインがルーテシア救出へと動き出す。

ルーテシアの真下に移動したセインは手だけを地面から出してルーテシアの足を掴み、そのまま地面へ引きずりこんでいく。

すぐ隣にいたヴィータが阻止すべく手を伸ばすも、その手はむなしく空を切った。そして

「ディエチちゃん、やっちゃって!」

「分かった。ファイアリングブロック解除。「ヘヴィバレル」、発動。」

クアットロはルーテシアとセインの離脱を確認した後、かねての予定通りディエチに砲撃を指示した。

いくらシルバーカーテンの効果があってもSランク砲撃相当の魔

力を隠す事は出来ないので、ディエチは指示を受けてから大急ぎでチャージする。

砲身の先にはフォワードメンバー+ヴィータ。一連の出来事のせいで良い感じに混乱している。このまま撃ちこめば、文字通り一網打尽に出来るだろう。

「3……、2……、1……。」

カウントが進むに従い、イノメスカノンに魔力が充填されていく。

ディエチはチャージが完了し、臨界にまで達した事を確認した事を確認してから、引き金に手をかけた。

「0。ヘヴィバレル、シュート。」

無表情のままに引き金を引こうとするディエチの後ろで、それを見ているクアットロ。

多少の誤算はあったが、それすらも自らの作戦に取り込んで利用出来た。

すでに勝利は約束されたも同然。数秒先の未来を思い、クアットロは笑みを浮かべた。

そんな彼女に誤算があったとするのなら、それは

J e t Z a m b e r .

ドオオオオオオオオオオン！！

ヘヴィバレルが発射されるまでのコンマ数秒の時間、そこに割り込んだのは金の閃光。

クアットロはそれに気付いた時には、その体は衝撃波で大きく吹き飛ばされていた。

「くっ！　一体何が……。」

不幸中の幸いか負傷は無かったので、クアットロは吹き飛ばされながらも、何とか空中で体勢を立て直す事に成功した。

何があつたのかとつい先程まで自分のいた所に視線を戻すが、爆煙のせいで各種センサーが上手く利かない。

周囲を警戒しながら現状把握に努めること数秒。ようやく煙が晴れて、向こう側が見えるようになった。

最初に目についたのは、ビルを横断するかのようにつけられた斬撃の跡。そして

「ありがとう、バルディッシュ。」

どういたしまして。

「とりあえず一人目、っと。メガネは仕留め損ねましたか。」

『すぐ近くにいます。さっさとやっちゃいましょう。』

真つ二つに切断されたイノーマスカノンの隣にいるのは、大剣を手にした管理局最速の金の閃光。

うつ伏せに倒れ付したデイエチの横に立っているのは、葉団扇を手にしたもう一人の管理局最速。

二人の手によって、デイエチは完全に無力化されてしまった。

（冗談じゃない！「シルバーカーテン」！）

目の前の現実に対しクアットロは即座に行動、即ち、デイエチを切り捨てて逃走する選択肢を選んだ。

デイエチが無力化された今、クアットロに許されたのは逃走のみ。今や彼女の頭の中は、自分の安全で一杯になっている。それに比べれば、任務の事や数秒前に見捨てた姉妹なんかは「どうでもいい事」だ。

幸いにも、彼女のISは逃走にも役に立つ。視覚とレーダーを誤魔化せば、直接戦闘せずとも離脱可能なのである。

（とにかくここから……ッ！？）

「逃げられると思ってるんですか？」

そう、彼女さえいなければ。

ふう……。にしても、さっきのは少し危なかったです。

魔力反応を確認してからすぐに飛んだものの、その先にいたのは既に引き金に手をかけたディエチさん。私はタッチの差で間に合いませんでした。

それでもこの結果になったのは、空中で待機していたフェイトさんが割り込んでくれたおかげ。

間一髪の所でフェイトさんが砲身を切断し、その隙に私がディエチさんの懷に潜り込んで鳩尾に掌底一閃。問答無用で気絶させました。

本当なら警告のち捕縛っていう手順を踏まないといけないんですけど……。まあ、緊急事態だったという事で。

「逃げられると思ってるんですか？」

そして今、私の前にいるのは残りの一人、クアットロ。ISを発動しているみたいで目には見えないんですけど、「狂気を操る程度の能力」がその存在の波長を捕らえています。

「嘘！？ まさか、こっちの事が見えて！？」

「さあ、どうでしょうねえ？ どっちにしても、見破られたからといって声を上げたりするのはどうかと思いますよ。」

「う、うるさい！！ 余計なお世話よ！！」

「そうですね。今はそんな話してる時じゃないですね。……覚悟

は良いですか？」

「ヒッ!？」

「罪状云々は全部挙げるとキリが無いので省略で。じゃあ、さっさと捕まってください。」

「じよ、冗談じゃないですわ!!」

そう言うやいなや、クアットロは180度転進。こちらに背を向けて逃走していきます。

どうして背を向けているのが分かるのかと言えば、彼女がISを解除したからだったりします。

無駄だと悟ったから? いや、違う。さっき指摘したばかりなのにそんな凡ミスをするなんて事はありません。だとすると、おそらくこれは

思考を纏めている間にも、私とクアットロの距離は詰まっています。「狂気を操る程度の能力」を使う必要が無くなったので再び「鴉天狗」に戻し、そのスピードで一気に接近して葉団扇を一閃。スペルを発動させました。

「風符「天狗道の開風」!!」

ドオオオオオオオオオン!!

圧縮された風弾が目標の先にあったビルに衝突。周囲が爆煙に包まれて、一時的に視界が塞がれてしまいました。

『やった!』

『ビンゴ!』

その様子はサーチャーを通して作戦室にも伝わっており、ロングアーチスタッフからは歓声が聞こえました。でも

「ごめんなさい。逃げられたみたいです。」

『『へ?』』

煙が晴れた先に本来倒れている筈の人影は無く、所々に瓦礫が散乱している道路があるだけでした。

「どうやら、まだ仲間がいたみたいです。それと」

『『それと?』』

「ケース、奪われちゃいました。てへっ。」

『『え、えええええええっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!?』』

そう言った私の左手にはさっきまで持っていたケースが無く、代わりに手の甲が赤く腫れていました。

スペルを発動してからコンマ数秒後の、風弾がビルに着弾したとほぼ同時。突如やってきた襲撃者に対し、技後硬直によってまともな対応をする事が出来なかった私に出来たのは自らの身を守る事だけ。

結果、私自身は軽い打撲で済んだんですけど、その代償としてケースを持っていかれました。

『じゃあ、そろそろ戻ろつか、藍。』

『ですね。皆さんに事情を話さないといけませんし。』

けど、私は別に後悔していません。何故なら

『私は「レリックを持っていかれた」とは一言も言っていないから
ね。』

スカリエツティアジト、地下通路にて

「はあ、やっと戻ってこれましたわ。トーレ姉さま、ありがとうございます
ございます。」

「お前達だけでは頼りないと思って付いてきてみれば……。今度あ
のような体たらくを晒したらその時は容赦無く見捨てるからな。」

「は、はい……。」

敬愛するトーレからの叱責に肩を落とすクアットロ。それに加え
てセインとルーテシアの合計4名が基地の廊下を歩いている。

あの時、クアットロの危機に対して動いたのはトーレであった。
逃走するクアットロに対してISの解除と逃走ルートを示し、
自分が待機している場所へと誘導した。

後は向こうの攻撃に紛れ、自身のIS「ライドインパルス」を発

動。機械の体だからこそ可能な超高速移動によってクアットロを救出した。それだけに留まらず、技後硬直の一瞬を突いてキャロからケースを奪取したのは流石だといえる。

「ディエチがやられてしまった事が痛いな。この事、ドクターにどう報告した物か……。」

「あううう……。」

あの場における指揮官はクアットロであり、当然、ディエチの事も彼女の責任になる。

トーレからの更なる追撃で、クアットロのライフはガリガリ削れていった。

「でもでも、ほら、レリックは無事確保できましたよ。」

そんな二人を見かねて間に入ってきたのはセインである。

現在ケースはセインが預かっており、それをトーレに見せながら二人の仲裁に入った。

「そういえば、中身の確認がまだだったな。セイン。」

「はいよ。」

『ふう、助かったわ、セインちゃん。』

『どういたしまして。』

何とか話題を逸らす事に成功したセインは、その足で近くにあった台にケースを置いた。

魔力を込めて特定の部分をなぞると、ガコツという音とともに口ツクが解除され、蓋が浮き上がる。

セインは両手で蓋を持つと、何の迷いも無くその蓋を持ち上げた。

「じゃじゃーん……お？」

そこにあったのはレリックではなく……生首であった。

「ゆっくりしてってね……！」

「うわ、何コレ!？」

「どういう事だ、クアットロ!？」

「わ、私にも何が何だか……。」

「……。(ケースに書かれている刻印は6番……。11番じゃないならどうでも良いか。)」

予想外の物体に驚くセイン、クアットロに追求するトーレ、さっきの事をまだ引きずっており、涙目混じりで言い訳を始めるクアットロと、場は一気に混乱し出した。冷静に刻印を確認したルーテシアが、この中では一番の大物かもしれない。

しかし、この生首が見せる本当の恐怖は、生憎とそんな生易しい物ではなかった。

「ゆ……。」

「「「「……?」」」」

「ゆつくりしねー!」

「「「「.....!!!?!」」」」

魔符「アーティフルサクリファイス」

ウーノからスカリエツティへの報告書より抜粋

ナンバーズ3、トーレ

爆発の瞬間にISを発動。一番近くにいたクアットロと共に離脱に成功。

ナンバーズ4、クアットロ

トーレに抱えられ離脱に成功。

ナンバーズ6、セイン

至近距離で爆発に飲み込まれ、重症。命の危険は無いが、治療に多大な時間が必要に。

彼女のISは突然変異タイプなので、メモリだけ抜き出して別ボディに移植するという方法は断念。治療ポッドで回復に専念とする。実質的リタイア。

ルーテシア

爆発に巻き込まれたが、セインが盾になったおかげで吹き飛ばされるだけで済んだ。

打ち身、切り傷等の全治2〜3日程度の軽症。治療魔法によって

当日中に回復。

第55話 間抜け者の死（後書き）

リバースカードオープン、「ブービートラップ」。この効果により、相手モンスター一体を破壊する！！

あのケースに罠仕込みたいと考えたのは私だけではないはず。

いきなり二人リタイア。ここからどうなる事やら。

次話からはしばらく日常編。5、6話ほどやってから地上本部襲撃に入ります。

以下、Q&Aです。

Q・地雷王エ……。

A・ギリギリ死んでません。今話でキャラが言ったように、空洞に潜り込んで九死に一生を得ました。

Q・ディエチが捕まったみたいだけど、そこから情報は引き出せる？

A・戦闘要員なので大した情報は持ってないです。ヴィヴィオが重要人物って事くらい。強いて言うならアジトの情報ですけど、当然引越します。

Q・スペカもちゃんと非殺傷設定にできるのかな？

もろに殺傷設定そうな『天地開闢プレス』が出たので疑問が…

殺傷設定だったら不味くないかな、管理局的に

A・大事なのは非殺傷設定ではなく非殺傷です。

どう考えても非殺傷設定が存在しないレバ剣とか、岩石落としまくるスターダストフォールとかがOKなのに、石を落とすだけの魔法がNGなのは可笑しいし、殺傷禁止が人間以外に適用されるかも

謎。

とまあこんな風に、法律自体がザルなのでいくらでも言い訳できます。

では、また次話で。

第56話 トカゲの尻尾は彼女なのか？

「すみませんシグナムさん。車出してもらっちゃって……。」

「何、車はテストロッサからの借り物だし、向こうにはシスター・シャツハがいらっしゃる。私が仲介した方がいいだろう。」

「はい。」

「そうですよ。あんまり気にしない方がいいのです。」

「キャロ、お前はもう少し気にしろ。」

むう……、理不尽です。

今私はなのはさん、シグナムさんと一緒に、聖王教会系列の病院に向かっている最中です。

フェイトさんの車を借りて、運転席にシグナムさん、助手席になのはさん、そして後部座席に私が座っています。

今回の目的は、先日六課で保護した子供、ヴィヴィオちゃんに会いに行く事です。

「でもごめんね、手間取らせちゃって。」

「いえいえ、私から立候補したんですから気にしないでください。それに、歳の近い子供がいた方が何かと便利でしょ？」

当初はなのはさんとシグナムさんで行く予定だったんですけど、そこに私が割り込みました。

今言った通り、これは純粹な善意で

「騙されるな、高町。」

「ちょ!？」

「シグナムさん？」

「こいつは主はやてに書類仕事を手伝わされるのが嫌だから逃げる口実が欲しかっただけだ。早い話、私達を利用したんだ。」

「にやははは……。」

シグナムさんが言ったような事情は関係無いんです。……無いんです。

「とにかくだ、ついてきたのは仕方がないが、向こうに着いたら大人しくしているよ?」

「むう、それじゃ私がしょっちゅうトラブル起こしてるみたいじゃないですか。酷いと思いませんか?　なのはさん。」

「えーっと……、元気があるのは良い事だと思うよ。」

「そう言ってくれるのはなのはさん位です。」

奥歯に物が挟まったような言い方なのはこの際スルーで。なのはさんの氣遣いに泣けてきます。

これ以上言い合ってもこっちが不利なだけなので、私は大人しく藍と念話をしながら久し振りのドライブを楽しむ事にしました。

『生まれてからこの方、車なんで殆ど乗ってませんからね。にしてもフェイトさん、良い車をお持ちで。』

『徒歩や飛行ばかりでしたからね。最近は専らスキマ移動ですし。』

『スキマ便利だからね。そういえば最近フリード見かけていないけど、元気にしてる？』

『ええ。元気に飛び回ってますよ。でもそう思ふのなら、ちゃんと毎日会ってあげてください。』

そんな感じで軽く雑談をしながら数分。そろそろ目的地かな、と思った所で、それは起こりました。

騎士シグナム、聖王教会、シャツハ・ヌエラです。

「どうされました？」

すみません。こちらの不手際がありまして。検査の合間に、あの子が姿を消してしまいました。

……そう言えば、そんなイベントもありましたっけ。

「査察の日程は決まったのか？」

「人員は確保しました。週明け早々に行きます。」

地上本部のビルの一角にあるロビーに、二人の男女が立っていた。周囲に他の人間はおらず、がらんとした空間に二人の声が響き渡る。

「連中が何を企んでいるや知らんが、土に塗れ、地上の平和を守ってきたのは我々だ。それを軽んじる海の連中や、蒙昧な教会連中に良いようにされてたまるものか。元より、最高評議会が私の味方だ。そうだろう、オーリス？」

「はい。」

「公開陳述会も近い。査察では、教会や本局を叩けそうな材料を探してこい。」

「その件ですが……、機動六課について事前調査をしましたが、あれは中々巧妙に出来ています。」

「どういう事だ？」

レジアスの問いかけに対し、オーリスは手元の端末を操作する。するとレジアスの前にウィンドウが浮かび、そこに六課のメンバーが映し出されていた。

「さしてる経歴も無い若い隊長を頭に据え、主力二名を移籍ではなく、本局からの貸し出し扱い。部隊長の身内である固有戦力を除けば、後は皆新人ばかり。そして何より、期間限定の実験部隊扱い。」

「フン……。つまりは使い捨てか。」

「本局に問題提起があるようなトラブルがあれば、簡単に切り捨てるでしょう。そういう編成です。」

「小娘は生贄か。元犯罪者にはうってつけの役割だ。」

「……まあ、彼女にはそれさえ、望んで選んだ道でしょうけど。」

「何か言ったか？」

「いえ。それとも一つ。事前調査の結果、叩けそうな材料を見つけたのですが……。」

「ほう……。」

「これです。」

ピッ、とオーリス端末のボタンを押すと、ウィンドウの画面が変化する。

隊長陣や前線メンバーの隅っこに申し訳程度にある多数のその他局員の顔写真。そのうちの一つが拡大された。

「……この子供は？」

「キャロ・シエル。陸士108部隊からの貸し出し扱いになっている魔導師で、ランクは推定C+です。」

「ふむ。で、この小娘がどうかしたのか？」

「これを……。」

ピッ、ピッという電子音とともに新たなウィンドウが開かれる。そこにはガジェット二型を相手に火炎弾を撒き散らしているキャラの姿が映っていた。

再生時間にして一分程度。それを見終えたレジアスの感想は

「これでC+だと!? 冗談を言うのも大概にしろ!!」

「その通りです。ですが、魔力測定の結果はC+を計測しています。この件に関しては私も念入りに調査しましたので、まず間違い無いかと。」

「……つまり、何かカラクリがあると見ている訳か。」

「はい。」

ふむ、とレジアスは考える。確かにこれは良い材料になりそうではある。だが

「さっきお前は何か言い澁んでいたな。何か問題でもあるのか。」

「はい。この魔導師ですが、階級は持つておらず、民間協力者として六課に入っています。」

「……そういう事か。」

「はい。もしもこちらがその事を追求すれば」

「切り捨てる、っていう選択肢も、あるにはあるんよ。」

「そんな！？ 駄目ですよ、はやてちゃん！？」

心底嫌そうな顔で言うはやてと、それを駄目だと言うリイン。

どうしてこんな会話をしているかというところ、それは数分前に遡る。二人は隊長室で山のような書類仕事をこなしていた。山のようなというのはあくまで比喻で、実際は大量のデータとの格闘な訳だがまあそれは置いておいて。

二人が忙しそうにしている原因は、先日発生した、レリックを巡るナンバーズとの戦闘が原因である。

結果だけを見ればレリックを守りきり、さらにはナンバーズのうち一人を確保と、100点満点の出来をつけても良いくらいであった。

だけどその裏にあるのは、キャロのやらかした数々の戦果。スキマ移動に始まり、推定60〜70機に及ぶガジェット？型の撃破（近接のみ）、直後の壁抜き砲撃、そして締めは地雷王への天地開闢プレス。馬鹿正直に報告するわけにもいかず、はやては頭を抱えていた。

それを見かねたリインが「何か手っ取り早く解決できる方法は無いですか？」と聞いてみた結果、冒頭の発言に繋がった訳である。

「あー、誤解せんというや。あくまで、そういう方法もあるってだ

けの話やから。」

「むうー……、「冗談でも言っただけの事と悪い事があると思うです。」

「分かってる分かってる。私からキャロちゃんがいなくなるの嫌やもん。だから今こうして、他の方法考えとる訳やし。」

なら良いです、と言ってリインは仕事に戻っていく。

その背中を見つめながら、はやてはさっき自分が言っただけについて考えていた。

（今まで考えた事無かったけど、本局にとって私ら六課がトカゲの尻尾やって言うんやったら、私ら六課にとって、民間協力者であるキャロちゃんも似たようなものなんよなあ……。そういえば、最初に民間協力者扱いにして欲しいって言ってきたのはキャロちゃんの方やった。ひょっとしてキャロはこういう展開になるのを予想して、民間協力者なんてポジションになったんやろか？）

何気なく浮かんだ疑問であつたが、そう考えると色々辻褄が合う。

あえて六課という枠組みから外れた所に身を置く事で六課へのダメージを軽減する。いくら問題が発生しても六課のダメージになりにくく、地上の人間がキャロを材料に六課を攻撃するメリットは薄い。加えて地上部隊所属という経歴から、逆に手痛いしっぺ返しを喰らう可能性だってある。

（そう考えると、今のキャロちゃんの立場って絶妙なバランスの上に成立してるんやなあ。）

今までは単に戦力面の問題から民間協力者というポジションにな

ったとばかり思っていたが、そういう思惑もあったのか、とはやてはキャロに感心する。でも

「でも、何か気に入らへんなあ……何でやる？」

「へ、何がですか？」

「あ、ごめんなリイン、何でもあらへんよ。」

いけないいけない、声に出してしまっていたようだ、と、はやてはリインに謝ってから仕事に戻る事にした。

（まあ何やかんや考えたけど、全部私の想像でしかあらへん訳やし。今はとりあえず、どうやって報告しようか考えんとな。キャロちゃんは何考えてるかなんて分からへんけど、私は部隊長として、あの子を守ってあげるだけや。）

「シグナムか、どないしたん？　へ？　シャツハが吹っ飛んだ！？　いやいや訳分からへんて、最初から順を追って……、うんうん……、キャロが……、オンバシラで……、ホームラン！？　いや、だから何でそんな事になってんの！？　あの幼女、今度は何やらかしたんやーーーーー！！？」

数分後かかってきたシグナムからの連絡に、早くも守る気が失せてきたはやてであった。

第56話 トカゲの尻尾は彼女なのか？（後書き）

原作13話終了。こんなんで良いのだろうか……。

はやては何が気に入らなかったのか？ コレ後で結構影響します。

では、また次話で。次も日常編。幻想郷ちょっと入る予定です。

第57話 難題「魔法の国の少女」（前書き）

投稿遅れてすみませんでした。

地震の影響とかそういうのは全く関係無く、単に作者が遅筆なだけ
けです。

では、本編をどうぞ。

第57話 難題「魔法の国の幼女」

「はあっ、はあっ、はあっ……。」

私は一体、どこで間違えたんだろう？

「それで終わりですか？ こっちはまだまだ余裕ですよ。」

「うっ……、さい。まだまだ行けるわよ。そらっ!!」

「おっと、最後の悪足掻きですか。おお、怖い怖い。」

私は目の前の敵に対し、もう何度目になるか分からない攻撃を仕掛ける。

右手を掲げて部屋ひとつ分を占領する程に巨大な板を召喚し、思いつきり投げつける。

それと同時に、残りの左手で弾幕を発射。狙いなどつけず、ランダムにばら撒かれたそれが、板の隙間を縫うように進んでいく。

弾幕を発射し終えたら、再び右手に板を召喚。さっきからずっと繰り返している事だ。だけど

「……、あっ!!」

投げつける際に右手が滑り、板があらぬ方へと飛んでいく。これにより、相手は完全にフリーの状態になってしまった。

当然、そんな隙がみすみす見逃される訳が無く

「今です!! 風符「天狗道の開風」!!」

「きゃっ!!」

技後硬直で動けない私に対して、高速の風弾が撃ち込まれた。

「挑戦を始めてはや数ヶ月……、挑戦回数はこれで丁度20回……、やっとなんとクリア出来ました!!」

「はあっ、はあっ、はあっ……。」

未だに息を切らし、四つん這いになっている私の横で、拳を握り締めて勝利の喜びに震えているのは射命丸文。

取材の為に私の出した難題に立ち向かい、20回目の挑戦にして打ち破ってみせた。それは良い。良いんだけど

「はあ……、はあ……、えーりん、水もってきて……。」

「あやややや？ 輝夜さん、まだお疲れですか？」

「仕様がないでしょ……。誰のせいだって思ってるのよ……。あ、ありがと、永淋。」

す、と出された湯呑みを取って水を飲む。

カラカラになっていた喉が潤されるのを感じながら、私はさっきの忌々しい記憶を思い出していた。

19回の失敗によって、この天狗が辿り着いた結論は「持久戦」。難題として使ったスペル「金閣寺の一枚天井」は、その名の通り

天井に使われるような板を撃ち出すスペルなんだけど、このスペル、天井を模した弾幕などではなく、本当に板をブン投げていたりする。私や永淋、ついでに妹紅のような蓬莱人は、どんな大怪我をしても決して死ぬ事はない。のだけど、体力や精神力が無限にあるという訳ではないので、激しい運動をすれば当然疲れる。

この天狗はそこを突いた。距離を取り、こちらの疲労が溜まるまで回避に専念。ひたすら天板を投げ続けていた私だったけど、一分を超えたあたりから疲れのせいでペースが落ちてきてしまった。

普通の弾幕決闘なら、自分からスペルブレイクして次のスペルに入ったりして対処するんだけど、今回のカードはこれ一枚。ブレイクは即敗北なので、途中で止める事無くさらにそこから数分間、私は天板を投げ続ける羽目になってしまった。

このスペルを難題にしたのは間違いだったかしら……。

「姫様、大丈夫ですか？」

「大丈夫なものですか。腕がパンパンよ、もう……。」

もう二度と、妖怪相手に体力勝負は仕掛けないわよ……。

「いやー、中々に興味深い話が聞けて大満足です。ありがとうございました、輝夜さん。」

「ま、そういう約束だったしね。そろそろこの暇潰しにも飽きてきたし、丁度良かったわ。」

「新聞の見出しはどうしましょうかね？」 “実録、異世界ミッドチルダ！！” とか……、いや、ここは“外に残る幻想、次元世界見聞録”で……。」

「聞いちゃいないわねこの天狗……。」

あれから少し休憩を挟み、私はこの天狗にあの旅であった事を話してあげた。

スキマに放り出された所から始まり、闘技場生活、お尋ね者生活、そして最後にあつた面白い出会い。話しているうちに色々思い出し、てきて、最後は結構ノリノリで話していたと自分でも思う。

あ、食料云々の事は話してないわよ。みつともないし、それにどうせ、妹紅が愚痴混じりに漏らしてるだろうから、って、私は誰に言い訳しているのかしら……。

そして全てを話し終えた今、私の目の前には新聞の構成を考える天狗。

自分の世界に入っているみたいで、こつちの事は意識に入っていないらしい。

……あ、やっと戻ってきた。

「あやややや、私としたことが取材対象を置き去りにしてしまうとは……。では、私はこの辺で失礼させていただきますね。早くこの内容を記事にまとめたいので。」

「完成したらこつちにも一部回して頂戴。変な事書いてたら抗議し

てあげる。」

「毎度ありー。あ、そうそう。これを起に、永遠亭でも定期購読初めてみてはいかかでしょうか？ 今なら安くしておきますよ？」

ちゃっかりしてるわねこの天狗。……あ、そうだ。

「そういえば、まだこの新聞も定期購読してなかったわね。」

「おおー！ それは好都合「でも」へ？」

「天狗の新聞は誇張や捏造が多いからね。しばらくは様子見させてもらっわ。」

「ちょ、それは言いがかりですよ輝夜さん！ この清く正しい射命丸、嘘なんて書いたことありません！」

私の発言に誇りが刺激されたのか、即座に抗議してくる天狗。でも

「河童のクーデター疑惑。」

「あや！？」

「あと亡霊姫の食人疑惑にPAD疑惑。古いのだと、八雲の式の隠し子疑惑なんていうのもあったわね。」

「あややややや！？」

「確かに「疑惑」な訳で事実とは一言も言っていないんだけど、ねえ

？」

私が挙げたこれらの事件、その全てがかつて文々。新聞に掲載されていた記事だったりする。

ちなみに事実関係は全てシロで、その度この天狗は弾幕やナイフの餌食になったとか。然もあらん。

「な、何で輝夜さんがそれ知ってるんですか！？ 新聞取ってないでしょう！？」

「イナバって噂好きの奴が多いのよ。何もしなくても勝手に情報が手に入るから便利だわ。」

「えっと……………。私、用事があったの思い出しました！ それじゃ、また！」

あ、逃げた。

自らの不利を悟ったのか、あの天狗は話を途中で無理矢理切って、部屋の窓から飛んで行った。

幻想郷最速を自称している事だけあり、その背中は今も見えなくなってしまった。

さっきの意趣返しとはいえ、少し意地悪し過ぎたかしら……？

「はあ、せめて玄関から出て行って欲しかったわ。…………で、どうしたの、永琳？」

「姫様、良かったですか？」

さっきの会話の際にも、私に水を差し出した後は会話に参加しな

いであつと傍に控えていた私の従者がそう問いかけてきた。

「あのくらいなら別に構わないわよ。私は「旅の思い出」を話しただけ。約束は破つてないわ。永琳だってそう思ったから、何も口出ししなかつたんでしょ？」

「物は言い様。姫様もあの天狗の事言えませんね。」

「私はいいのよ、自覚しているから。それに、分かつてて止めない永琳も同じじゃない？」

「私は姫様の従者ですから。」

「ツーと言えばカー。永琳は私の意図を100%理解してくれているので、話が早くて良い。」

さりげなく従者の立場を強調して、何かあった時の責任をなするのは黒いけど……。

「ま、この話はこの辺でいいわ。永琳、何か適当に摘める物持ってきて。運動したらお腹空いてきちゃった。」

「後でイナバに持って来させます。間食は程々にしてくださいね。」

では、と言ひ残して、永琳が私の部屋から退出していく。

私はそれを見送ってから、さっきの事とその話題の中心である少女の事を考えた。

「あの天狗は真実に辿り着けるかしら？ まあヒントもあげた事だし、暇潰し程度には期待できるかもね。「実物」がない以上、推測を重ねる事しか出来ないんだけど。……そういえば、「実物」は

どうしてるのかしら？ 早く幻想入りして欲しいわね。主に暇潰しの意味で。」

「食事なう。」

「へ？ いきなりどうしたの、キャロ？」

「いや、何だか言わないといけないような気がする。」

「何よソレ……。」

皆さんこんにちは、キャロ・シエルです。

ナンバースとの戦闘から数日経ち、今こちらでは比較的平穏な日常が続いています。

変わった事といえば、ギンガお姉ちゃんが六課に出向してきた事、それと

「はい。良く噛んで食べてね。」

「うん!!」

フェイトさんとなのはさんに囲まれながら満面の笑顔でオムライスにパクついているのはヴィヴィオちゃん。治療と検査が終わった

所で、六課で預かる事になりました。

保護責任者と後見人は、予想通りなのはさんとフェイトさんで、今や六課のマスコットと化しています。

「スバルのちっちゃい頃も、あんなだったわよね。」

「へ？　そ、そうかな……／＼／」

「リインちゃんも。」

「へ？　リインは初めから割と大人でしたー！！」

「嘘をつけ。」

「体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃねーか。」

「むう……。はやてちゃん、違いますよね？」

「ふふっ、どやろっな？」

子供の頃ですか……。まあ私は現在進行形で子供な訳ですけど、昔は……。

ヒヤッハー、汚物は消毒「夢符「封魔陣」！！」あべしっ！！

ば、馬鹿な！？　私の、拳法殺しの肉の壁があっ！？　「撃符「大鵬拳」！！」ひでぶっ！！

見てろよ管理局！！ 子鬼のセンサーが来たからには、手前らなんざ一捻りだぜ！！ ヒャッハー！！

何この撲殺幼女……。4、5歳の時からこんなのか、今思い返すとカオスすぎる。

というか、何で裏社会が世紀末風味だったのか、未だに訳が分からないです。

っと、そんな事を考えてても仕方ないですね。ご飯、ご飯、と。

「あ、ヴィヴィオ、駄目だよ。ピーマン残しちゃ。」

「うゝ、苦いの嫌い。」

「えゝ？ 美味しいよ？」

「しっかり食べないとおつきくなれないんだから。」

「うゝ……。」「

「そやねえ。好き嫌いして食べないと、ママ達みたいな美人にならないよ。」

「そうそう。大体、食べる物があるっただけで贅沢なんですから、ワガママ言うのは駄目ですよ。」

「キャロ、良い事言ってるように聞こえるんだけど、それ僕のオカズ……。」

「アーアーキコエナイキコエナイー。そういえば、最近狩りやって

ないなあ。今度兎でもハントしよ。」

『……ねえ、ギン姉。』

『……気持ちはわかるけど、スルーした方がいいと思う。』

「ヴィヴィオ、あのお姉ちゃんの真似はせんでええからな。」

「あい。」

「にやはははは……。」

「……。 (何故俺には台詞が無いんだ!!) 」

第57話 難題「魔法の国の幼女」(後書き)

伏線撒きの回。

最初は次の話と合わせて一つだったんですけど、文章量や話数調整の都合でこうなりました。情報量の少なさと、展開の進まなさっぷりはこれが原因。最後の沈黙が誰なのかは想像に任せます。

では、また次話で。次は今週中に書き上げる予定です。

第58話 秘密（前書き）

前話で今週中って言ってたくせにもう次の週の後半。自分の意思の弱さが嫌になります。こんな作者ですが、今後ともよろしく願います。

書きたい事詰め込んだら過去最長に。これでもカットしたんですが……。
では、本編どうぞ。

第58話 秘密

「再検査、ですか？」

「ええ。ちょっと、コレ見てくれる？」

そうやって、シャルさんは自分のデスクから一枚の紙を取り出しました。

そこに書かれていたのは私の名前と、身長、体重などのデータ。早い話、先日行われた健康診断の結果が載っていました。

「えーっと……。は？」

そこにあつたのは……「赤」でした。

[illegible]

身長、体重などのcmやkgが単位でない数値、つまり血中コレステロールや赤血球濃度といった項目が悉く赤字で表記されており、それらが基準値を大きく外れていることを示していました。

「ちょ、コレ何なんですか！？ 私そんな不摂生した覚え無いですよー！」

確かに昔は色々荒れてましたけど、今はすっかり三食食べて運動もしてる、普通に健康的な生活の筈です。なのにこんな結果が出たら、さすがに焦ります。

「待てよ、最近肉食べ過ぎてたよう……。体重変わらないから油断してたけど、まさか見えないところで……？」

「キヤロちゃん、話聞いてくれる？」

「……ふえ？」

「いくら何でもこれだけの項目が外れるっていうのは考えにくいから、たぶん装置の故障だと思うのよ。だからもう一回検査して、それで判断するわ。いい？」

「あ、はい。」

……ですよね。いくら何でもありませんよね。

機動六課 部隊長室

カタツ、カタカタカタツ……。
ぺらっ、ばん、ぺらっ……。

部隊長室には今日も変わらず、最近すっかりお馴染みになった音が上がっていた。

カタカタという音を発しているのは一基の端末。
それをタイピングしているのはこの部屋の主のはやてである。彼女は目の前のウィンドウに表示された報告書を完成させるべく、指を動かしてタイピングを続けていた。

その合間に聞こえるばん、ばんという音の正体は、一つの判子。それを持っているのはリインフォースである。自分の体から見れば大きいそれを、物体操作の魔法を使用して書類へと押して行く。

体を大きくして仕事をするという手もあったが、物体操作魔法とアウトフレーム維持にかかる魔力、その消費を比べた結果、こちらに落ち着いたのであった。

それらの光景はいつまでも続くかと思われたが

「以上、機動六課部隊長、八神はやて。……お、終わったー！ー！ー！」

「3、2、1……、0！ はやてちゃん、ラインも終わりましたー！ー！」

そう言うやいなや、二人は大きく息を吐いてぐてーっと机に突っ伏してしまった。

良く見ると二人の目にはクマが出来ており、せつかくの美少女顔が台無しになっている。というか、仕事が終わった嬉しさのせいか、生気を失った顔で口だけがヒクヒク動いているのを見るとちよつと引く。

「あの量の仕事が一気に来た時はどうなるもんか思たけど……。」

「人間やれば出来るものですね。ラインはデバイスですけど……」

「もう当分、書類は見たくないわ……。」

先日の事件から既に半月。はやてとラインは今日ようやく、溜まっていた仕事を全て消化することが出来た。

事件に関しての報告自体は一週間程度で片付ける事が出来た。しかし、はやてはそれと並行して通常時の仕事、聖王教会との各種情報交換や調整といった事もこなしていた。

到底一人でこなせる量ではなかったので、通常勤務はラインに、聖王教会関係はシグナムに、どうしても自分の判断が必要な案件以外は周りの手を借りて、はやては仕事をこなしていった。そして半月が経過した今、はやては全ての仕事を消化する事が出来たのであった。

「とはいえ、いつまでもこうしてる訳にもいかんし……、ライン。」

「はいです。」

「お茶とお菓子の用意お願いな。ちょっと休憩してから仕事に戻るで。」

「分かりました。ちょっと待っててくださいです。」

はやての命令を受けたラインは給湯室へ向かうべく、部隊長室の出口へと向かって飛んでいき

「わわわわっ!?!」

出て行こうとした矢先、目の前のドアが勝手に開き、中に入ってきたシャマルとぶつかってしまった。悲しいほどの体格差のせいで、ラインは呆気なく弾き飛ばされてしまった。

「きゃっ!?! 大丈夫、ラインちゃん?」

「だ、大丈夫れすう。じゃ、行ってくるです。」

心配しなくても良いと伝えてから、ラインはフラフラと部屋を出ていった。

シャルはリインの様子を心配そうに見ていたが、扉が閉まると自分が来た理由を思い出したのか、はやての方へと歩いていった。

「はやてちゃん、ちょっと良い？」

「今丁度仕事片付いた所やし、丁度良かったわ。で、どないしたん？」

「コレなんだけど……。」

そう言つて、シャルは一枚の紙を取り出した。その紙には数字が羅列されており、その半分程が赤字で表記されていた。

スカリエッティ 新アジトにて

先日のディエチ捕獲の影響により、スカリエッティ達はその拠点を移動させていた。

ナンバーズ内でも決して前線に出ないウーノにしか知らされていなかった非常用の拠点。その位置を全員に通達した後、引越しが開始された。

メガーヌやセインの入った治療ポッドを始めとする必要な者だけを持ち去るようにし、ガジェットは地下道を利用して輸送した。残った設備は必要なデータを吸い出した後、チンクのランブルデトネイター（ナイフ爆弾）で物理的に破壊された。キャロのアーティフルサクリファイス（ゆっくり爆弾）によって既に脆くなっていた地盤はそれに耐え切れず、旧アジトは地中にその姿を隠してしまった。

現在、新アジトはようやく旧アジトと同レベルの設備を取り戻し、活動再開の目処が立った所である。とはいえ、研究フロアはまだロクに整頓されていないので、雑多な機器が所狭しと並んでいる状態ではあるが。

そんなフロアの片隅で、スカリエッティが端末を操作していた。ウィンドウに映っているのは先日の戦闘であり、彼は興味深そうにその映像を眺めていた。

「ドクター、よろしいでしょうか？」

「おや、ウーノか。どうしたんだい？」

「施設の復興状況について報告を。それと、先日依頼されていた「キャロ・シエル」についてのデータをお持ちしました。」

「おお、待っていたよウーノ。早速、見せてくれるかね。」

どちらを、等は言われなくても分かる。今やドクターの目は「無限の欲望」を体现するかのごとくキラキラと輝いている。ウーノは懐から情報ストレージを取り出すと、近くにあった端末へと差し込んだ。

「……………以上です。」

「成る程、生まれについての情報は不明。その名が初めて世に出たのは5歳の時。以来「桃髪の子鬼」の異名と共に、裏社会でその名を上げていく。そしてその一年後、管理局へ自ら出頭。以後は民間協力者として管理局に勤める……と。」

「はい。5歳以前の足取りについても調査してみましたが、何も出てきませんでした。」

申し訳御座いません、とウーノは頭を下げた。

調査を始めてすぐ、ウーノは割とあっさりと、キャラのデータを集める事が出来た。

所詮は階級も持たない一般人の民間協力者。個人情報へのセキュリティも甘く、管理局のデータベースを調べるだけでデータが入手出来た。

これに気を良くしたウーノは、彼女の前科に注目。裏社会での評判を聞き、その事実関係を確認する事にした。

「相手を一睨みで昏倒させた」だの「拳のみで海を割った」だの「数十人がかりの弾幕を魔法無しで回避した」といった荒唐無稽な情報は削除して調査した結果、少なくとも5歳の時点で局員10名近くを倒した事は、疑い様の無い事実である事が分かった。

そして「5歳の時でコレなら、秘密はその以前にある」と考えたウーノは、調査を続行した。

しかし、そこで行き詰ってしまった。

入局後と裏社会での事は簡単に調べられたウーノであったが、それ以前の事となると完全にお手上げ状態。管理局のデータベース、

裏社会での情報網、そのどちらにも全くヒットが無かった。

ガセの情報すら無い、まさに収獲ゼロであった。

「成る程成る程……。ありがとう、ウーノ。下がっていいよ。」

「はい。」

「……、フフフフフ、面白いじゃあないか。」

だというのに、スカリエッティには少しも残念そうなそぶりが見られなかった。むしろ嬉しそうである。

実際、スカリエッティは楽しんでた。

全部が全部分かってしまうのはつまらない。与えられたピースおそらく数が足りておらず、そのままでは完成する事はない。を見ながら完成形を予想する推理ゲーム。新しいおもちゃを与えられた子供のように、スカリエッティは問題へと取り組む事にした。

まず手始めにと、スカリエッティは端末へと向き直る。そのウィンドウには先程からずっと、戦闘映像が流れ続けていた。

「キミの正体は一体何なのだろうね？ 今の所第一位は「戦闘機人の失敗作」説なんだけど……。」

スカリエッティは誰に聞かれるともなくそう呟いた。

そう考える根拠は、キャラの使った戦闘技術。

高速機動はトーレのIS「ライドインパルス」に、人形型爆弾はチンクのIS「ランブルデトネーター」に似ていた。魔法無しでのあの格闘能力も、戦闘機人としてのスペックがあれば不可能ではない。「失敗作」というのは高速機動の後にリバーシたからである。自らのISに振り回されるような機体は、決して完成品とは言えない。

とはいえ、この推測には大きな穴が二つある。

ひとつはISの複数所持。将来的には可能になるのかもしれないが、今はIS自体研究段階。もしそんな事が出来る研究者がいるのなら、自分とはつくにお払い箱になっている。

もうひとつは情報漏洩。戦闘機人の基礎理論以外、つまりISのデータは今の所門外不出。「振動破砕」等といった、管理局にサンプルのあるISならともかく、自分が嚴重に管理している「ライドインパルス」や「ランブルデトネイター」のデータが流出したというのは考え辛かった。

「可能性は低いけど、まるきり有り得ない話でも無い。結局はそんなレベル……おや？」

そんなふうを考え事をしながら映像を見ていたスカリエッティであったが、ふとある点が気になって、映像を一時停止させた。そのウィンドウには地雷王が映っており、丁度鎖で捕獲された所であった。

「今まで気にもしていなかったけど、これはこれは……。」

鎖は地面にある魔法陣から伸びていた。魔法陣は中心に一つの小さな円と、その四方を囲む四つの小さな円。そしてそれらを結んで出来た正方形で構成されていた。

「ミッド式魔法陣と混合されているようだけど……。」

この形はスカリエッティも良く知っている形だった。それもその筈、彼のサンプルの一つが、これを得意としていたのだから。

「そうか、まだ疑問は数多く残るが……、キミの正体のうちの一つ、それが「召喚師」だというのは確実みたいだね。」

「ひつくし!!」

「マスター!？」

「大丈夫だよ藍。にしても、最近こんなの多いなあ。また誰かが噂しているんじゃないか？」

「どうなのでしょう？ それより、不味い事になりましたね。」

「へ？」

「いや、へ？ って……。健康診断の件ですよ。流石にマスターが半妖だっていうのはバレないと思いますけど、色々勘ぐられるのは面倒ですから。」

「は？ 今コイツ何て言った？」

「ら、藍、今何て？」

「ですから、色々調べられるのは面倒だという話です。」

「じゃなくて！ その前その前！」

「噂の件ですか？ 正直心当たりが有り過ぎて私には分かりません。」

戻りすぎ！
そうじゃなくて……、
ああもう！！

「じゃなくて、私が半妖ってどういう事なの!？」

⌈
^
?
⌋

何を今更、とても言いたげな表情で、藍はこっちを見ってきます。
いや、そんな目されても困るんだけど。というか、つまりそれは冗談じゃないという事で……。

「え？ ええええええええええええええええ！！！！！！！！！！？」

「ちょ、どうしたんですかマスター!？」

「どうしたもこうしたもないですよ！！いきなりそんな事聞かされたら、誰だって驚くでしょう!？」

「す、すいません!! ……というか、何でマスターが気付いてないんですか? 自分の事でしよう? 妖氣使ってる時点でとくに気付いてる物だと思ってましたよ。」

「そんなの分かる訳無いじゃないですよ！！ それに妖氣っていうなら妹紅さんだって使ってたじゃないですか！？」

「あの人は特別です。普通の人間は妖力なんてこれっぽっちも持ってません。輝夜さんだって持って無かったでしょう？」

「あ。」

「マスター。気が動転しているのは分かりますけど、少し落ち着いてください。」

「あー……、うん。」

藍の言葉で少しだけ冷静になった私は、これまでの事を思い出していきます。

私だって妖力が使えると知った時、妖怪説はちょっとだけ考えた事があります。

でもその時丁度、身近で妹紅さんが妖力を使っているのを見て、「人間でも妖力って使えるんだ」という結論に達しました。少しして自分でも使えるようになったので、その件はそれでお終い。ミッドの人が使えないのは訓練不足、輝夜さんが使えないのは「穢れ」が無いからだと結論付けて、以来この事は深く考えませんでした。

たぶん、お前は妖力を使うのがいちばん向いてる。

というか、妹紅さんは知ってたんですね。言ってくれば良かったのに。

藍と同じで、自分で気付いてると思われてたんでしょうね。にしても、半妖かあ……。

「マスター？」

「藍、ごめん、ちょっとだけ一人にして。」

「……はい。」

私の言葉を受けて、藍は夢幻珠とともにスキマに入っていきました。

私はそれを見送った後、大きくため息をつきました。

「こんなに悩むのって、夢幻珠の秘密を知った時以来だね……。結局どうしようもないんだから、何も変わらないっていうのは分かっているんだけど……。」

あと少しだけ落ち着いたら、今日はもう寝よう。きっと明日には、ケロっとしている筈だから。

「はあ、さっきは失敗だったな。」

スキマに入り、コタツの上に乗った所で、私は一人ごちる。視線の先にはフリードが能天気飛んでいる。今日も元気そうだ。

「にしても、マスター、いや、あの子が気付いていないのは以外だったな。てっきり自覚しているものだとばかり思っていたが。」

そう、私にとっては知らない方が意外であつた。

現実逃避ではなく本気で気付いていなかった。妖力を使っているというのに、全く気付いてなかったのだ。(キャラは妖怪を見た事が無いのでこれも仕方ないのかもしれないが、藍は気付いていない)

「この調子だと、能力についても気付いていなさそうだな。まあ知らないのなら知らないで、その方が良いのかも知れないが。」

というか、まず気付いていないだろう。

もし気付いていたのなら積極的に使っているだろうし、私の負担も減っている。あの子が気付いていないのは明らかである。

それに、その方が都合が良い。

あの子の能力は非常にデリケートだ。もし下手に制御しようとして暴走させてしまった場合、あの子の命自体が危うくなってしまう。無意識の状態で安定している以上、下手に干渉するのは下策である。「自覚させて制御訓練をするにしろ、今取り組んでいる事件が終わってからゆつくり取り組めば良い。それまで戦闘中の能力行使は私がサポートする。それが、私が夢幻珠に宿っている理由だからな。」

それが私と主の間で交わされた命令。だけどそれを抜きにしても、私はこの子を守るつもりだ。

この子が無事、一人前になりますように

そして願わくば、「真実」を知っても私達の事を嫌いになりませんように

「このバカ竜、人がマジメに考え事してるっていうのに……。式輝
「狐狸妖怪レーザー」……！」

「……………キュ!？」

ピチューン!!

第58話 秘密（後書き）

キャラの秘密と藍しやまの秘密、ダブルミーニングでした。

はやてサイドは疑念拡大、ス力さんがちよつとだけ秘密に気付いたようです。天地開闢プレスの陰に隠れていましたが、アルケミックチェーンがフラグでした。気付いてくれてましたでしょうか？

Q・藍しやまはキャラが妖怪だつて気付いてないの？

A・本人も気付いてると思つてたので放置しました。

どっちもどっち。ボケボケ主従ですwww

次話の予定は4月1日。5？話で4月1日、マトモな話になる訳がないですw

……つて何自分からハードル上げてるんだよおおおおお！？
しかも4月1日つて明日じゃねえかあああああ！！ まだ一文字も書いてないんだぞ。どうするよ俺ええええええええええ！！

ほんと、どうしましょう？ 明日更新される可能性は50%程度、もし2日になったら、四月馬鹿じゃなくてただの馬鹿ですよねw

では、また次話で。明日会える事を祈っています。

第5?話 ストライカーズ(前書き)

何とか間に合ったんだぜ……。

文章量が昨日よりもさらに増加し過去最高に。

俺、コレ投稿したら思いっきり休むんだ……。

C a u t i o n ! ! C a u t i o n ! ! C a u t i o n ! !

この話には「タイトル詐欺」が含まれています。

本文に入る前に詐欺の内容を予想することで、二度楽しむ事が出来ます。

では、本編どうぞ。

第5？話 ストライカーズ

「が……、はっ！！」

これでもう、何度目になっただろう？

私の体は呆気なく吹き飛ばされ、地面へと投げ出されていく。

不幸中の幸いか、地面はあまり固くないので、打撲等といったダメージは無い。

自分の体の状態のチェックを終えた私はその場に立ち上がり、仲間達に声をかけた。

「スバル、エリオ、アギト、ギンガさん、まだ大丈夫？」

「僕はまだやれます。」

『私も平気だ。』

「私も平気。でも、スバルが……。」

「……大、丈夫。まだまだ、やれるって……。」

そう言いながら、ボロボロになったスバルが立ち上がる。

その状態は端から見ても決して大丈夫と言える物ではなく、満身創痍と言って差し支え無かった。無理も無い。スバルのポジションはその役割上、最も向こうの攻撃に晒されるのだから。

「ほらほら、ここで終わりですか？」

「おい、いつまでも休んでるんじゃないぞ。」

そんな時だった。向こう側から二人の少女が歩いてきた。

背筋を張り、自信に溢れたその姿はボロボロになっている私達とはどこまでも対称的で、自分達が勝者でお前達が敗者なんだと言われているような気がしてくる。

「このままだと完全敗北ですよ。それで良いんですか？」

少女の一人、キャラがこちらを挑発するような事を言ってくる。

これが私達にやる気を出させる為の演技だという事は分かっている。けどそれを抜きにしても、この二人に一矢報いたいという気持ちには、私達共通だった。

「良い訳無いでしょ。絶対一泡吹かせてやります。みんな、準備は良い？」

「はい！」

『おう！』

「OK！」

「スバル、きつくなったら私が交代するから、いつでも言うて。」

「ありがとギン姉。でも、もう少しだけ頑張ってみる！」

仲間達からの力強い返事を聞いて、私は気合を入れなおす。

まだ私達は負けていない。なら、出来る事をするだけだ！

「それじゃ、今度はそっちからですね。」

私達が位置に付いたのを見て、キャロは自分の足元にあった物をこちらに向けて蹴り飛ばした。

ぽん、と蹴られたそれは綺麗な放物線を描き、私の足元に落ちてきた。

それは、白と黒の球体であり、私達をボロボロにした実行犯。

だけど今この場においては、キャロやヴィータ副隊長を倒すため、私達にもたらされた剣である。

「行くわよ、みんな。」

「……はい（おう）！」「……」

ピッ、という音と主に、私はその球体を蹴る。

それと同時に、このフィールドのオペレートをしているシャーリからアナウンスが聞こえた。

「さあ、チームフォワードメンバーのボールでキックオフです！！」

1時間前

「あれ、ヴィータ副隊長？　なのはさんはどうしたんですか？」

私達、フォワード4名にギンガさんを加えた5人がいつものように訓練場に向かうと、そこにいたのはヴィータさん一人であった。今までのパターンで言うと、私達よりも先に来て待っているのはなのはさんとヴィータ副隊長の二人、もしくはなのはさん一人だけの二通りが主なパターンで、そのどちらの場合にもなのはさんがいた（キヤロは大抵ちよつと遅れて来る）。つまり、ヴィータ副隊長一人だけというのは初めてのパターンだったりする。

「ああ、なのはやフェイト、それにはやては聖王教会の方に用事があつてな。今日は私と。」

「私が教官役です。」

「あ、キヤロ、おはよ。」

「はあ……、最初の頃が懐かしいです。」

「そりゃ、あれだけされればねえ。」

いきなり後ろからかけられた声に対し、私達はいつものように挨拶をする。

キヤロはよくこうやって、前触れも無しに現れては皆を脅かしたりする。

とはいえ最近はみんな慣れてしまったので、いきなり声をかけられても普通に対応している。

最初の頃は転移魔法の形跡も無いのにどうやったのが気になって、四六時中気を張ってみたり、直接本人に聞いてみようとした。だけど、前者は何度かやられているうちに気配くらいは分かるようにはなったけど、肝心の力ラクリまでは分からなかったし、後者は聞くとしてもはぐらかされたり、いつの間にか違う話題になったりで上手く聞き出せなかった。

スバルやギンガさん辺りは「キャラだから」で納得してるみたいだけど……。

「……ア、ティア!!」

「……スバル？」

「どうしたのティア？ さっきからばーっとして？」

いけないいけない。つい考え事に没頭していたみたいだ。折角マルチタスクなんて技術があるのに、これじゃ宝の持ち腐れだ。

「ごめん、ちょっと話聞いてなかった。で、今どこまで話が進んでいるの？」

「えっと、キャラがね。「今日は息抜きも兼ねて、ちょっと趣向を変えた訓練をする」なんだって？」

「息抜き？」

「うん。最近ずっと訓練漬けだったでしょ？ だから休暇とまではいかないけど、今日は軽めに動かすだけにするんだって。」

「……、まあ、その方がいいかもね。どっちみちなのはさんが居ないのならいつもの訓練は難しいし、それなら体調を整えて明日以降に備える、って所かしら。」

「うん。ヴィータ副隊長もそう言ってたよ。」

こう思えるようになったのは、なのはさんから「無茶をすると危ない」っていう事に気付かせてもらったからだと思う。

きつと以前の私なら、ムキになって個人訓練を始めてた筈。けど今は、息抜きならしっかり息抜きしようって考えられるようになった。これは余裕が出てきたって言うのかしら。

「大体分かったわ、ありがと、スバル。で、息抜きって何をするの？」

「えっと、アレ。」

そう言ってスバルが指差した先にいるのは、端末の前に立って操作しているシャーリーと、それを横から覗き込んでいる二人だった。

「シャーリーさん、お願いしていたブツは完成してますか？」

「大丈夫だよ、各種パラメータを変更するだけの仕事だったから。システム弄る必要無いから楽だったよ。では、とくにご覧あれ！」

ピッ、とシャーリーが端末のボタンを押すと、浮き島にある訓練システムが作動し出した。

仮想的とはいえ、市街地や森林といった様々なフィールドを生

成し、ガジェットなどの仮想敵までも生み出す、六課の誇る最新システム。

けど、今日それが生み出すのは

「うわあ……。」

と思わずため息が出してしまった。

それは、市街地フィールドのような瓦礫やビルは存在せず、どこまでも広大な平原だった。そして森林フィールドのように植物が生えているものの、それらは全て同じ高さに切りそろえられており、そのフィールドを区切るように白いラインが引かれ、東西の端にそれぞれ一つずつ、金属製のパイプで作られた箱が存在していた。

いや、もう態々回りくどく言うのは止めよう。これは

「サッカーフィールド？」

「うん。今日はフォワード対ヴィータ副隊長&キャロでサッカーをするんだって。……どうしたの？」

どうしたもこうしたも無いわよ……。何でアンタは疑問に思わないのよ。

流石にこれは予想外すぎる。「訓練スペース使ってまでする事か！」とか「5人对2人とかサッカーじゃ無いでしょ！」とかいろんなツッコミが出てくる。

でも、皆がやる気になってる以上、反対するのも空気読めないって思われるだろうし……。

……まあ、適当に頑張ろう。

「……で、足りない人数はガジェットで補うんだって。ティア、聞いている？」

「うん、聞いてる聞いてる。大丈夫大丈夫。」

「あと、「魔法及びデバイスの使用アリ」だって。何だか面白そうだよな。」

「あー、うん。そうね。」

「あ、そうそう、私からの忠告ですけど、キーパーは防御得意な人にしてもらった方がいいですよ。」

「だってさ。じゃあ私がキーパーするよ。ティアもそれで良い？」

「あー、うん。それでいいわ。」

既にやる気は最底辺。私はスバルの話を適当に聞き流しながら、フィールドへと歩いていった。

今思えば、この時点で気付くべきだったのだ。

あのキャラがまともな遊びを提案する訳が無い事を。そして

「魔法及びデバイスの使用アリ」というルールが何をもたらすのかという事を。

「恋符「マスタースパーク」!!」

「へ？ うわああああああ!!」

スバルくん ふっとんだ！

「……は?」

えーっと、今何があった？

確か、キャロのボールで試合が始まって、そのままペナルティエリアまで切り込まれて……。

そうだ、確かシュートの寸前でボールをバウンドさせて、自分の胸辺りまで浮かせたんだ。そして、箱型のデバイスを取り出して

「って今の思いっきり砲撃魔法じゃない!! 何でアレが反則にならないのよ!? とうかアレだけの砲撃を受けてボールとネットが無傷とが、絶対可笑しいでしょ!？」

「おおう、怒涛のツツコミありがとうございますティアナさん。まあ、そんな風に言われても、「ルールだから」としか言えないんですけど。」

「は? あんな砲撃がOKになるルールがどこに……。」

そこまで言いかけて、私はスバルとの会話を思い出した。

あと、「魔法及びデバイスの使用アリ」だって。何だか面白そうだね

あと、「魔法及びデバイスの使用アリ」だって。

魔法及びデバイスの使用アリ

「そういう意味かあああああ!!」

「やっと気付いたみたいですね。じゃ、そろそろ始めますよ。今度はそっちボールです。」

ぼん、とキャロがボールを蹴ると、それが私の足元に転がってき
た。

私はそれを受け止めてから、チームメンバーへと念話を送った。

『スバル、大丈夫？』

『大丈夫。まだまだやれるよ。』

『みんなも良い？ さっきので分かったと思うけど、これは決して
息抜きなんかじゃないわ。このまま行くと、私達はキャロやヴィー
タ副隊長のサンドバッグ。そうならない為に、全力で戦うわよ！！』

『はい（おう）！！』

「あ、ちなみにボールやゴールが壊れないのは、ガジェットと同じ
で仮想上の物体だからだよ。Sランク砲撃でも壊れない設定にし
てあるから、斬るなり突くなりしても大丈夫だよ。」

ああ、だから態々訓練スペース使ってるのね。……ってか、何と
いう技術の無駄遣い……。

以下ダイジェストでお送りします

「エリオ、お願い！」

「はい！ ストラダー！」

S o n i c m o v e .

「甘い!! あなたがどんなドリブルをしても関係の無いタックルを思いつきました。奇術「ミステイレクション」!!」

「うわああ!!」

エリオくん ふっとんだ!

「エリオ!」

「余裕ですね。そっちを気にしてる余裕がありますか?」

「ッ!!」 『ギンガさん、ガジェットを二体付けます。何とかキヤ口を止めて下さい!!』

『了解。』 「うおおおおっ!! リボルバー・キャノン!!」

「弾幕!? なら、風符「天狗報即日限」!!」

「ッ、速い!?!」

「ゴメン、スバル、あとお願い!」

「任せて! マッハキャリバー!」

P r o t e c t i o n .

「無駄無駄無駄アッ!!」 「ロビングシュート」!!」

「ボールが……分身！？ 本物は！？」

「スバル、下！！」

「かかったなアホが！！ シュートは力の強いものだけとは限らないですよ。」

『キャロくんのロビングシュート、フォワードチームのゴールに突き刺さったー！』

「う、ごめんティアー。」

「まだ大丈夫よ。それに今は1対1にさせた私達も悪かったんだし。さあ、取り返すわよ！！」

『ティアナくんのキックオフで試合再開です。』

「GINGAさん、お願いします。」『エリオはそのまま前線に。』

「了解。……行くよ、ブリッツキャリバー。ウイングロード！！」

『おおっと、GINGAくん、ウイングロードでガジェットの群れをすり抜けていく！！』

「させませんよ、GINGAさん。これで終わりです。気符「地龍天龍脚」！！」

「……かかったね？」

「何！？」

「エリオ、パス!!」

「何ですって!?!」

「私の役目はアシスト。本命は……エリオ!!」

「アギト!!」

『おう!! 烈火……一閃!!』

「これで、まず一点!!」

「くっ、私としたことが……。」

「なんて、言っていました?」

「へ?」

「ヴィータさん、今!!」

「ッ!? エリオ、早く撃って!!」

「遅い!! アイゼン!!」

Explosion.

「ラケーテン・ハンマー!!」

「うわあああああ!!」

エリオくん ふつとんだ!!

「これで再びこっちボールです!! ガジェット2番、ここに回して!!」

「不味い、カウンターになってるわよ!!」

「キャロ、私に回せ。」

「ヴィータさん？」

「良いのを思いついた。ぜってー決めてきてやる。」

「はい。……「マジックミサイル」!!」

「パス!? ギンガさん。カットお願い!!」

「OK。ウィングロード!!」

「よし。これでルートは塞いだ」

くによっ。

「な!? 曲がった!？」

「あ、良く見たら、ボールの表面が魔力で覆われてる!？」

『誘導弾の応用ね。というか、なんという魔法の無駄遣い。』

「シャーリーさんも人の事言えませんよ。……って、そうじゃなくて!」

「よっしゃ、ここで決めてやる。ためーら覚悟しろ。……アイゼン!」

Explosion.

ガシヨツ、ガシヨツ、ガシヨツ!!

「まとめて……、ぶち抜けー!!」

Komet fliegen.

「くっ!! ブリッツキャリバー!!」

Protection.

「キャアアアアッ!!」

ギンガくん ふつとんだ!!

「私だって、威力を削ぐくらいなら……。」

ティアナくん ふつとんだ!!

「駄目でしたー!!」

「ティアアアアアアッ、こうなったら！！ マッハキヤリバー！！」

Load cartridge .

「ディバイン・バスタアアアアアッ！」

スバルくん ふっとんだ！！

「カートリッジ3発分とか防げる訳ないってばあー！！」

とまあこんな感じで、私達はあの二人にフルボッコにされた訳。途中からはキャロがGKに入ったため攻守ともに穴がなくなってしまう、攻守に渡ってヴィータ副隊長が大暴れする事になってしまった。

というかヴィータさん、ハンマー振り回してタックルしてくるの止めてください。

今やこちらは全員が満身創痍。正直言って立って走るのだって辛い。けど、ここまで好き勝手されたままで終わるのは、私の意地が許さない。他の皆もそれは同じだ。

だから、何としても一点入れてやる！！

「さあ、どこからでも来なさい！！」

「6番、8番、ティアナさんにタツクル。」

キャロの命令を受けたガジェットが二機、私からボールを奪わんとタツクルを仕掛けてくる。けど

「クロスミラージュ!!」

All right . Fake Silhouette .

「幻術!?!」

フェイクシルエットにより、私の周囲に5体の幻影が出てくる。ガジェットのタツクルで2体が消滅したけど、私を含めてまだ4体が生き残っている。

「4番、5番。」

続いて二体切り込んでくるもそれも空振り。よし、抜けた!

「ここで! エリオ、ギンガさん!」

「はい!」

「おおおおっ!!」

そこで当初の作戦通り、両サイドから上がってきた二人が上空へと飛び上がる。

空中でなら、ガジェットの妨害は無い!

「ヴァリアブル・シュート!!」

私はボールを手元まで浮かせてから、クロスミラーシュでそれを打ち抜く。

魔弾と化したボールはそのまま、パスを待っているエリオの方へと伸びていき

「ヴィータさん!!」

「おう!! ラケーテン・ハンマー!!」

エリオの方へと一直線に、鉄の弾丸が飛んでいく。このスピードだと、エリオのシュートよりも早く打ち落とされるのは明らかで

「残念だったな。落ちろ!!」

「残念なのは、そっちです!!」「曲がれ」!!」

「何!?!」

ヴィータ副隊長に叩き落とされる寸前、ボールは突如としてその機動を曲げ、明後日の方へと飛んでいく。

これはさっきキャロがやっていた事。

ヴァリアブルシュートは本来誘導性能なんて無いけど、それは戦闘用の破壊力を維持したままでの話。パスに破壊力が必要無いので、その分のリソースを誘導性能の追加に費やした。洗練されてないから荒いけど、既存のプログラムの組み合わせで実現可能だったのはラッキーだ。

そして、飛んでいったボールの行き先は

「ギンガさん!!」

「これで決める!! ブリッツキャリバー!!」

Load cartridge .

ゴール前、完全フリーな状態でギンガさんがパスを受ける。
おそらくこれが唯一にして最大のチャンス。

「面白い……勝負です、ギンガお姉ちゃん!!」

そう言つて、キャロは右手を前に、左手を腰のあたりに構えた。
あの構えが何を意味するか、それはギンガさんを含めた全員が理解している。

だけど、ギンガさんは止まらない。一矢報いる。その一念で

「決める!! リボルバー・キャノン!!」

「とめる!! 天地魔闘!!」

ドオオオオオオオン!!

瞬間、ゴールを中心に爆煙が上がった。そして

「キャッ!!」

ギンガくん ふつとんだ!!

「ギンガさん!!」

私は中心から吹き飛ばされたギンガさんを見て、急いで駆け寄った。

見たところ、怪我はしていないみたいだけど。

「大丈夫ですか？」

「うん。何とか、ね。」

「良かった……。それで、ゴールは？」

と聞いてはみたものの、こうして吹き飛ばされている以上、結果は分かっている。

私達の努力は。

「ティアナ、顔に出てるよ。」

「あ、ゴメンなさ「それに」い？」

「私は駄目だったとは、一言も言っていないよ？」

へ？ とギンガさんに問いかけるより早く、煙がすうつと晴れていく。ゴールには相変わらず無傷で、涼しい顔をして立っているキヤロ。そして

「いやー、押し込まれちゃいました。失敗失敗。」

その「後ろ」に転がっているのは白黒のボール。そう、私達は一矢報いる事に成功したのだった。

『はい、ここでタイムアップ。5 - 1で少女チームの勝利です。』

そして審判兼実況兼解説兼オペレーターであるシャーリーのアナウンスとともに、この試合は終わりを告げたのであった。

後日

「へえ、私達がない間にそんな事があつたんだ。」

「大変な目に遭いました。下手するといつもの訓練よりもハードでしたし。」

「……使えるかも。ティアナ。」

「は、はい!!」

「その訓練、取り入れてみようと思うの。」

「へ？　ちょ、何言ってるんですかなのはさん!!　あんなのやってたら体が保ちませんよ!!」

「形こそスポーツだけど、11対11というチーム戦である以上、指揮能力が必要になる訳で、ティアナの指揮能力を考えると、伸ばさない手は無いと思うの。」

「いや、確かにそうですけど、それなら普通に多人数の戦闘訓練で良いじゃないですか!？」

「じゃあ、試していからあと何回かやってから判断しようか？これはあくまで皆の教官としての意見であって、私自身が一回やってみたいとか、そんな事は無いの。」

「話聞いてない？　というか、そっちが本音ですか、なのはさああああああん!！」

『……マスター。』

「……何かな、藍？」

『どうして態々こんな事を?』

「説明した通り、皆の息抜きとチーム戦の訓練ですよ。」

『……本音は?』

「東方サッカーがやってみたかった。後悔はしていない。」

『だと思いましたよ……。』

第5?話 ストライカーズ(後書き)

東方サッカーネタがやりたいと思った結果がコレだよ!!

皆立派なストライカーズでした。嘘はついてませんw

出オチ臭パネエ。

しかもいつも書いてるバトルパートよりも展開が熱かった気がする。

(?????)わけがわからないよ。

では、また次話で。

第60話 嵐の前（前書き）

今回、特に目立った動きはありません。あとギャグも。

第60話 嵐の前

新暦75年9月12日 12:00 地上本部にて

「スバル、そっちは何かあった？」

「ううん。特に異常は無し。」

「エリオ達は？」

「異常ありません。」

「こっちもだ。」

「分かった。じゃあ、ヴィータ副隊長に伝えておくわね。」

私達六課メンバーは今、地上本部で警備任務を行っている。

今から一時間後に開始される公開意見陳述会。

陸と海、双方の重要人物が一同に会する一大イベントであり、それを狙ったテロに対応するため、私を始めとしたフォワード4人にヴィータ副隊長、なのはさんの計6名は前日の夜から現場に入り、交代で警備を務めていた。

「あふ……。」

「ん？ エリオ、ひよつとして眠い？」

「少しだけ……。でも、まだまだ大丈夫です。」

「徹夜だったからね。私やティアは平気だけど、二人はきついんじゃないかな？」

スバルに言われ、エリオの様子をしてみる。
表情は元気だし、気力は十分に感じられる。のだけど、目の下にあるクマがそれを台無しにしていた。

「そうね。……エリオ、アギト。」

「ティアナさん？」

「何だ？」

「まだ始まるまで時間があるから、ちょっと仮眠取ってきなさい。何かあったら連絡するから。」

「で、でも……。」

「だってよ。行くぞ、エリオ！」

「ちょ、ちよつと、アギト!？」

「折角休んでも良いって言うてくれてんだ。言葉に甘えておけよ。肝心な時に動けなくなったら元も子も無いだろ？」

「わ、分かったから、放してってば!」

休んでも良い、という私の指示に、エリオは言葉を濁らせた。大方、迷惑をかけるんじゃないか、とか思ってるんでしょうけど。アギトがフォローしてくれて助かったわ……。

アギトはエリオの服を掴み、そのままエリオを引っ張っていく。そして後に残されたのは、私とスバルの二人だけになった。

「全く。まだ子供なんだから遠慮なんて似合わないっての。」

「まあまあ、それがエリオの良い所じゃない。」

「ま、そうなんだけどね。あんまり自由にし過ぎてキャラみたいになられてもこっちが困るし。」

「あはははは……。」

私がキャラの名前を出すと、スバルが乾いた笑みを浮かべた。姉貴分として否定しようとはするものの、否定できる材料が無くて困っている。そんな感じだ。

先日のサッカー事件に代表されるように、キャラはかなり好き放題振舞っている。しかもちゃんと成果を挙げていたり、大義名文を確保した上での行動だったりするのだから余計に質が悪い。

今日のこの警備任務だって、本来なら私達と一緒に行動する筈だったのだ。

でもあの子は民間協力者としての立場を利用して、周辺での遊撃に当たる事になった。多分この辺りにいるとは思っただけど、どこにいるのかは分からない。

「本当、あの子どこで何やってるのかしら？ サボってたらタダじゃおかしいわよ。」

「ひつくしゅんー!」

「マスター？」

「ただの噂だよ、藍。……ティアナさん、後でシメる。」

私はチリ紙を取り出して鼻を噛みながら、数キロ先にいるティアナさんを見てそう呟きました。

「それじゃ、続きを始めようか、藍。」

「はい。」

現在、私がいるのは地上本部周辺にあるビルの一つ、その屋上です。

「狂気を操る程度の能力」で自分の魔力反応を隠しながら、「千里先を見通す程度の能力」と併用し、周辺のサーチを行っていきます。

「えーっと……、今の所、反応無し、と。そろそろゼストさん辺り、引つかかっても良さそうなモンなんですけどねえ……。」

「……マスター。」

「どうしたの、藍？」

「本当にいいんですか？」

「何の話？」

「とばけないで下さい。今回の作戦についてです。」

「……。」

「この方法だとリスクが大きいです。私としては、今からでも安全策にシフトするべきだと思います。」

藍の言わんとする事は分かる。今回起こる地上本部襲撃テロ、それに対する私の計画について、その危険性を心配してくれています。確かに私の立てた計画はリスクが大きいです。でも

「ごめん、藍。それは出来ないよ。」

「……。」

けど、その分メリットも大きい。

上手く行けばゆりかごを起動させる事なくJS事件を終了させられるし、私が抱える秘密だって全て守れる。全部を上手く行かせようとするれば、この作戦以外には残っていなかった。

「私の目的はJS事件を解決するだけじゃない。もし解決できたとしても、以前と同じような生活に戻れなかったら意味が無いんです。」

「……。」

「大丈夫だよ。きっと上手く行くから。だから、頼りにしてるよ、藍。」

「……分かりました。」

渋々、といった感じではあるものの、藍は了承してくれました。実際問題、藍に拒否されると私は夢幻珠を使えないので、内心かなりホッとしています。

公開意見陳述会まであと二時間。おそらく襲撃はその4時間後。私の人生を左右する大一番が、すぐそこへと迫ってきていました。

「……、あ、フェイトのつつあんじゃないですか。どうしました？」

同時刻 地上本部内部にて

「……、以上だ。今の所、外は特に異常無し。エリオとアギトは今休憩中で、ティアナとスバルが警備に当たってる。」

「そっか。ありがと、ヴィータちゃん。」

『どういたしまして、だ。じゃあ切るぞ。』

うん、と私が返事をするより早く、ヴィータちゃんは念話の回線を切ってしまった。

「なのは、ヴィータは何て？」

「「異常無し」だって。今の所は大丈夫みたい。そっちはどうだった？」

私がヴィータちゃんと念話をしている間、フェイトちゃんはキャラちゃんと念話をしていた。聞いた話だと、この周辺で警備してくれてるらしいけど……。

「……、異常無し、だってさ。」

「フェイトちゃん、またからかわれたの？」

「うつつ……。」

顔を真っ赤にさせて唸るフェイトちゃんを見て、私は自分の予想が間違っていなかった事を理解する。

キャラちゃん、意地悪は良くないと思うの。

「と、とにかくこっちも異常は無いみたいだから。」

「そっか。じゃあ、こっちの警備に集中しようか。」

「そうだね。」

この状態のフェイトちゃんをもう少しだけ見てみたいと思ったけど、今はお仕事中。ちゃんと警備しないとね。

「……ねえ、なのは。」

「なあに、フェイトちゃん？」

「みんな、大丈夫かな？」

と、フェイトちゃんはさっきまで赤面していたのが嘘のように、心配そうな顔で私に問いかけてきました。

「大丈夫だよ。信じてあげよう、みんなの事。あっちにはヴィータちゃんとキャロちゃんが居るんだし、大抵の事は何とかしてくれるよ。」

「……うん、そうだね。ごめん、なのは。ちょっと弱気出ちゃった。」

「にはははは……。」

とはいえ、フェイトちゃんが心配する気持ちは私も分かる。

今回の任務、カリムさん達の予想が正しければ十中八九「預言」絡み。

はやてちゃん、フェイトちゃんと一緒に聖王教会に訪問した時に聞いた「預言」。

カリムさんのレアスキル「預言者の著書」によって出てきたのは、地上本部の崩壊と、そこから派生する管理局というシステム自体の崩壊。

「預言」は古代ベルカ文字で表記されており解釈が難しく、もしかすると唯の見当違いだっていう可能性もある。だけど、そんな風に樂觀視するには、この「預言」は重過ぎる。

少なくともあんな風な文言から良い風に解釈するのは、私には無理。

えーっと、どんな文章だったっけ？ 確か

古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よ
りかの翼が蘇る。

死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、幻想
の欠片、法の守護者に牙を剥く。

かの翼天の頂に上りし時、天空に、地獄の焰が舞い踊る。

第60話 嵐の前（後書き）

難産でした。ギャグ無いと途端に文章埋めるのがキツくなる作者です。

前話ではっちゃけすぎて、もうネタが切れたんだぜ……。

今回で起承転結の「承」の部分まで終了です。

ここから急展開です。シリアスの予定です。6？話どうしよう……。

キャラの作戦は？ 六課は、地上本部はどうなるのか？
では、また次話で。

第61話 その日、機動六課(1) -魔王降臨- (前書き)

今回はまさかのノーヴェ視点です。

第61話 その日、機動六課(1) - 魔王降臨 -

新暦75年9月12日 18:10 地上本部地下

『さあ、始めよう!!』

ドクターの宣言、それがこの作戦の始まりの合図だった。

手始めに、クア姉のIS「シルバーカーテン」による、地上本部のシステム掌握。

本来ならそのタイミングでセイン姉が管制室に侵入して局員を無力化させる筈だったんだけど、そのセイン姉はあの事件で受けたダメージが回復しておらず、作戦に参加できなくなってしまった。

なので、クア姉が隔壁を操作して閉じ込める。この場合、クア姉がシステムを監視し続ける必要があるけど、どの道クア姉は戦闘に参加しないので、作戦全体に影響は無い。

「ノーヴェ。そろそろ私達も行くつすよ。」

「ああ。」

パートナーであるウェンディに返事をしてから私も動き出す。

今回の作戦目的はタイプゼロ、タイプゼロ・セカンド、そして聖王の確保。

私達の担当は、その内のタイプゼロとタイプゼロ・セカンドだ。

「ウェンディ、反応は?」

「セカンドがこっちに接近中。ファーストの所にはチンク姉が向かってるつす。」

「了解。ならさっさと片付けて、チンク姉の所に」

その必要はありませんよ。境符「波と粒の境界」

「ッ!？」

いきなり背後からかけられた声に振り向くと、そこにあっただのは無数の弾、弾、弾……。

視界を埋め尽くす程の馬鹿げた数のシューターがこっちに向かって殺到してきた。

それに対し、私は咄嗟に障壁を展開させる。

「くそっ!! 何なんだよ!？」

さっきまで、自分達の周囲には何の反応も無かった。

生体反応、魔力反応共にゼロだったし、転移魔法の形跡だって無かった。

油断していたのは事実だけど、不意を突かれるような要素は無かった筈。

なのに、こうやって攻撃に晒されている。

……いや、今はこんな事を考えている場合じゃない。

未だパニックになっている頭を戦闘用にシフトさせる。

事実として、今自分達は襲撃を受けている。なら、やるべきは原因究明ではなく……、対処！！

「おおおおっ！！」

障壁を維持しながらローラーブレードを加速させ、弾幕に対して直角に動いて物陰へと移動する。

「くっ！！」

障壁は前面に集中して張っているので側面は脆い。

そのせいで移動の際何発かもらってしまったけど、あの場に留まっているよりはよっぽどマシ！

私が物陰に隠れて数秒後、通路に降り注いでいた弾幕は止み、辺りは再び静寂に包まれた。

「……！！　そうだ、ウエンディは？」

「あれ？　一人仕留め損ねました？」

「！？？」

冷静になった所で、私はようやくパートナーの事に気が回るようになった。

ウエンディの安否を確かめようとした矢先、聞こえてきたのは子供の声。

「まあ良いです。どうせ直ぐに片付きますから。……そこにいましたか。」

声の方を見てみれば、そこにいたのは声のイメージにぴったり合致した子供。

そして、真つ二つにされた上で氷付けになっているライディングボードと、全身を鎖で拘束されて気を失っているウエンディがいた。見た所酷い外傷は見当たらないけど、固有武装が完全にイカれている以上、戦線復帰は絶望的だ。

「ウエンディをやったのはお前か……。」

「全く、余計な手間取らせないでくださいよ。こっちはさっさと片付けたいんですから。」

「誰だてめえ……。」

そう言いつつも、私はドクターや皆に与えられた情報から、その答えを想像できていた。

なのにこうやって聞いたのは認めたくなかったから。

10歳程度の幼い容姿、桃色の髪の毛、頭のリボンと袖の破れたシャツという特徴的なバリアジャケット。

それらから導き出される答えは

「民間協力者のキャロ・シエルです。とりあえず……、やられちゃってください。」

ドクターに「最大の不確定要素にして最大の障害」とまで言われた少女が、私の前に立ちはだかった。

数日前

「以上が当日のプランよ。分かった。」

「あ、ウーノ姉、ちょっと質問いっすか？」

「何？」

「このキャロってガキなんですけど、何で「最大の不確定要素にして最大の障害」なんすか？ はつきり言って、こんなCランクのガキよりも、隊長陣の方がやっかいじゃ？」

「……ウェンディ、お前、ちゃんと話聞いてなかったろ？」

「見かけこそ子供だが、この前の戦闘記録を見るに実際の实力はA A A Sはある。書類上ではCランクだが、アテにはできない。クアットロ、お前はと思う？」

「そうねえ、私のシルバーカーテンを見破った辺り、普通じゃないと思うわよ。」

「……マジっすか。」

「加えて、コイツは正規の局員じゃなくて民間協力者。作戦ではガジェットのアMF展開で隊長クラスを無力化する予定だが、コイツは自分の判断で勝手に動くから動きが読めない。」

「だから「最大の不確定要素」って事っすか。じゃあ、もしコイツと会ってしまったら、どうすれば良いっすか？」

「それもさっき説明したんだけど……。もう一回だけ言ってあげるから、今度は忘れないように。他の皆も念のため、もう一回聞いておきなさい。いい？」

「出会った場合、相手をせずにやり過ぎず、ないしは複数で足止めして時間稼ぎするように。戦闘機人最強のトーレはともかく、それ以外の皆は間違っても一人で倒そうなんて考えないで。」

（くそっ！ よりにもよって私の所かよ！）

ウーノ姉からの忠告を思い出し、私は内心でそう毒づく。
決して楽な任務とは思っていなかった。

だけどそれ以上に、私は戦闘機人としての自分の性能を信じている。タイプゼロにだって負けるつもりは無い。

チーム戦になっても、こっちにはウエンディやチンク姉がいる。だから、何があっても大丈夫の筈だった。

筈だったのに、たった一人のイレギュラーが、それをめちゃくちやにしまった。

既にウエンディは無力化されている以上、私が取るべき行動は一つ。

「一旦離脱してチンク姉と合流」、それしか無い。

私は目の前にいる子供の様子を見ながら、同時に周囲をサーチして逃走経路を模索する。

後は、一瞬でも隙が出来れば

「アレ？ 逃げるつもりなんですか？」

「!？」

見透かされてる？

いや、例えそうだとしても、するべき事は変わらない。

向こうが暢気に会話してくるのなら都合だ。何とか隙を見つけて

「この子置いてっちゃうんですか？ あのメガネといい、戦闘機人って、薄情なんですねえ。」

「てめえ……ッ!!」

その物言いに頭が沸騰しそうになるのを、理性を総動員して必死に抑える。

……ああ、そうだ。今までできるだけ考えないようにしていたけ

ど、仲間がやられてそのまま逃げる、なんてとてもじゃないけど許せない。出来ることなら今すぐテメエをぶん殴りたい。

けど、今は作戦中。私一人のミスが全体に影響する。だからこそ、この衝動は抑えないといけない。

冷静に、指示の通りに動かないと

「「デープダイバー」が使えない以上、ここで放置したらまず管理局に捕まりますよ？ それでも良いんですか？」

……は？ 今コイツ何て言った？

「テメエ、何で……。」

「あ、やっとまともに会話してくれましたね。それで、何でついうのは何に対してですか？ 私がISの事を知っている事？ それとも」

そこで目の前にいる子供は一旦言葉を切る。

そして、いかにも楽しそうに笑いながら、続きの言葉を発した。

「何でセインさんが爆破された事を知っているか、ですか？」

「……」

それを聞いた瞬間、私は理解する。

ああ、アレをやったのはコイツなんだと。

レリックのケースに爆弾を入れるなんていう外道の所業をしてお

きながら、コイツは笑っているのだ。

「出会った場合、相手をせずにやり過ごす、ないしは複数で足止めして時間稼ぎするように。戦闘機人最強のトーレはとにかく、それ以外の皆は間違っても一人で倒そうなんて考えないで。」

ウーノ姉の忠告が再び頭をよぎる。でも

「そんな事、出来る訳無えだろ！！ ジェットエッジ！！」

A i r l i n e r .

堪忍袋の緒が切れる、っていうのは、きっと今の私の事を言うんだろう。

自分の姉や妹を傷つけた張本人が目の前にいる。そんな事

「許せねえに決まってるだろおおおお！！」

そつだ、私は何を恐れていたんだ？

目の前にいるのはたかが子供。魔力だつてそんなに多くない。

この足で蹴り飛ばしてやれば、それで終わりなんだから。

エアライナーで目標までのレールを引き、それに乗って一気に接近。

同時にカートリッジをロード。

ジェットエッジに魔力が充填され、開放の時を今かと待っていた。

「リボルバー・スパイク!!」

そして、私は目標のこめかみへ向かって回し蹴りを叩き込んだ。

「残念でした。魔王「天地魔闘 極」。」

地は防御

「霊撃!!」

「なっ!？」

蹴りが当たると思われた寸前、奴は懷から何かを取り出すと、私の体に全身を何かに殴られたような衝撃が走る。

そのまま吹き飛んでいくかと思ったけど

「アルケミックチェーン。」

その動きは途中で止まる。足元を見てみれば、地面から鎖が生えてきており、それが私に巻きついて拘束する。

天は攻撃

「華符「破山砲」!!」

「が、あつ……。」

がら空きになっていた腹部に、奴の拳が突き刺さる。

魔力も籠っていない筈のそれは、ミシミシという嫌な音を立てながら、私のボディを蹂躪して

そして魔は魔力の使用

「鳳翼天翔!!」

「あ、あ、……。」

腹部に負ったダメージのせいでまともに喋れない所に飛んできたのは、炎を纏った巨大な鳳凰。

それが自分に向かって飛んでくる光景を最後に、私は意識を手放した。

「ふう、取りあえず、これで片付いたかな。」

私の足元に倒れているのはノーヴェさんにウエンディさん。
ウエンディさんは開幕奇襲で瞬殺。ノーヴェさんは挑発してから
天地魔闘で返り討ちにしました。

「あとは……。藍、モード「萃」。」

『了解です。』

「酔符「鬼縛りの術」。」

気絶している二人を鎖で拘束。同時に「密と疎を操る程度の能力」
を発動させて、二人の魔力と体力、あと念のために霊力を片っ端か
ら霧散させていく。

これで万一意識を取り戻したとしても、まともに体を動かす事す
ら出来なくなり、完全に無力化できます。後は縛ってその辺に放置
しておけば、ここを通るスバルさん達が確保してくれるという寸法
です。

「よし、これで終わりつと。藍、次行こうか。」

「はい、マスター。」

私はスバルさん達の魔力反応を確認しながらも、あえてそれとは合流せず、スキマを開いて次の目的地に向かいます。

時間は有限。こんな所でのんびりしてられないです。だって

「「戦闘タイプのナンバーズの全滅」が目的ですから。さ、次行きますか。」

第61話 その日、機動六課(1) - 魔王降臨 - (後書き)

勇者ノーヴェVS魔王キャロの回。受けてみて、天地魔闘のバリエーション!!

霊撃 バインドは凶悪コンボ。対策無しに突っ込むと今回のように一瞬でピチユリます。

のっけからナンバーズ二人リタイア。幼女自重してください。とりあえず、見せ場無しに終わったウェンディは泣いても良いと思うよ？

以下Q&Aです。

Q・エアライナー？ ノーヴェのISってブレイクライナーじゃ？

A・IS名のブレイクライナーは格闘技術や攻撃魔法も合わせた総称で、ウィングロード(偽)単体での名前はエアライナーです。作者も知りませんでした。直前にwiki見ておいて良かった…。

Q・システム乗っ取られるの知りながら、キャロがメガネを放置した理由は？

A・その方が都合がいいから。
システムダウン 記録に残らない 全力で戦える、という三段論法。

メガネさんはキャロのリミッターを外してしまったようです。

Q・時間が無いといいつつ、キャロがノーヴェを挑発した理由は？
ぶっちゃけ最初の奇襲で二人とも倒せるんじゃない？

A・セインの状態を確認するためです。

彼女がいると仲間を回収されてしまうので、挑発して情報を引き出しました。

もし彼女が健在の場合は、倒したナンバーズはスキマ送りにするつもりでした。

ただその場合だと記憶操作とか色々面倒なので、可能ならスバルや他の局員達に確保させたい、というのが本音です。

Q・今話で萃香ともこたんのスベル使ってるけど、まだ使えない筈じゃ？

A・鳳翼天翔ですが、実はこれは名前だけ。実際はモード「七曜」で再現しています。魔力で構成するので、ぱっちゃんさんの能力の方が適していました。

密度操作の方は非戦闘時＋鎖を併用してようやくといった所です。足を止めて集中して、なおかつ道具を使ってギリギリなので、これで戦闘とかは無理です。

では、また次話で。

第62話 その日、機動六課(2) - 桜 - (前書き)

そういえば、最近PVとか見てなかったな……。

PV 2688395

ユニーク 340363

……まぢですか？

この数字は、この作品を読んでくれる読者様のおかげです。
色々と勉強中の作者ではありますが、これを読んで「面白い」と
思ってくれる人が一人でもいる限り、精進していきたいと思っ
ています。

では、本編どうぞ。

今回はシリアス風味。加えて過去最長です。

第62話 その日、機動六課(2) - 桜 -

数分前

「それじゃ、最後にもう一度だけ確認しておくね。」

「はい、マスター。」

地上本部周辺にあるビルの一つ、その屋上で、私と藍は付近の地図を広げて最終確認を行っていました。

「最初、あのメガネが本局のシステムに侵入してくると思うけど、これはスルーね。」

「こちらも全力で戦えるように、ですね？」

「うん。態々向こうがやってくれるんだから、利用しない手はないです。」

作戦その1、クアットロの完全無視。

このメガネを放置しておく、地上本部のシステム掌握、AMFによる地上本部内部にいる魔導師の無力化、それに付随した隊長陣の参戦の遅れ、等様々なデメリットがありますが、今回はあえてそれをスルーします。

その第一の理由は、私、というか夢幻珠の事を出来るだけ秘密にしておきたいという事情です。

仮にシステム掌握の妨害に成功したとしましょう。その場合、隊長陣を始めとする強力な味方の参戦、指揮系統の早期復旧等様々な

メリットがあります。

けれど、それは同時にミッドに張り巡らされている定点サーチャーの作動も意味します。

ナンバーズ達との決戦が予想される以上、私は手加減なんてするつもりはありません。今までだって要石とか色々やってました（はやてさんが必死に後始末してました）けど、それ以上の事だってやらざるを得ない状況になる事だって十分考えられます。

けれど、全力戦闘の様子が記録に残ってしまうのは色々和不味いです。

私の目的はJS事件を乗り切ってからテキトーに人生を楽しむ事なので管理局やその他の組織に追い回されそうなフラグを立てるなんていう事は全力で避けるべきです。

まあ、定点サーチャーが機能していなくてもナンバーズ達やガジエットの記録に残る可能性はありますが、それはそれ。しなくても良い後始末まで増やしたくない、という事です。

「で、まずはノーヴェ&ウェンディのコンビをチンクさんに合流される前に撃破。次にチンクさんをギンガさんと二対一で。その次がトーレ&セツテの所。エリオ君やフェイトさんが居れば理想なんだけど、そこは状況次第ね。で、最後に六課のオットー、デイド、ルーテシアちゃん。ゼストさんは前に言った通りスルーで行くよ。」

作戦その2、戦闘タイプのナンバーズの全員撃破。

今回の地上本部襲撃の真の狙いは、聖王のクローンであるヴィヴィオちゃんです。

当初、私は「ヴィヴィオちゃんだけスキマに放り込んでおけば解決するんじゃない？」と考えました。

けれど冷静に考えてみると、ス力さんが一回や二回襲撃失敗した位で諦める訳が無いことに気付きました。

飯にスキマを使って今回の難を逃れたとしてもヴィヴィオちゃんに向こうにとつての鍵である以上、必ず第二、第三の襲撃が起こります。

今回は原作知識という情報のおかげでこうやって事前に先回りできていますけど、流石にいつ来るか分からない襲撃者に対して毎日警戒し続けるというのは、そういう事に慣れていない自分にとつては、あまり有難くない事態です。あと、長引くと折角リタイアさせた(筈の)セインさんが復帰してくる可能性も出てきます。そうすると、ヴィヴィオちゃん防衛の難易度が更に跳ね上がってしまいます。

そう言った理由がある以上守りの戦略は不利。攻める必要があるのです。

そこで、話が冒頭に戻ります。

攻め、と言っても何をすれば良いか？

こちらの勝利条件としては、スカさん側がどうやってもヴィヴィオちゃんを誘拐できないような状態にしたい訳です。

となると一番手っ取り早いのが、その実行手段、つまり、主力となる戦闘機人の全滅。それが最善にして最良です。

その視点で考えてみると、今回の襲撃はチャンスともいえます。

何せ戦闘タイプの戦闘機人が全機出撃してくれる訳ですから。探す手間が省けるってものです。

この場を利用して全滅させてしまえばゆりかごの浮上を防げますし、その間にフェイトさんやロッサさん辺りがスカさんのアジトを見つけてくれば、そこに居るのは非戦闘タイプの戦闘機人のみ。

JS事件、アツサリ解決です。

で、それを確実にする為の最後の一押し、それが

作戦その3、ヴィヴィオ囹作戦

とまあ、仰々しく言いましたけど、実際は何もせずに六課に放置してるだけ、っていう話です。

向こうの作戦目的がヴィヴィオちゃんである以上、確実におびき寄せる為には、彼女の所在が向こうに割れていないといけないという事になります。

さっきも言いましたけど、もしスキマ等で隠してしまった場合、ス力さんサイドにとっては作戦失敗を意味します。

となると当然、襲撃チームは撤退してしまい撃ち漏らしが発生します。

六課にいるナンバーズを最後に回しているのもそれが理由。

オットー&デイドのコンビを倒した辺りで、トーレさんのチームは撤退しそうですからね。

「でも、本当に良いんですか？」

「藍、それ30分前にも言ってたかったわけ？」

「ですが、やはりマスターの負担を考えると……。」

こうやって藍が心配してくるのは、もう何度目になるか分からないです。

作戦を決めた時には了承してくれたものの、こうやって30分おき位に心配そうに訪ねてきます。

藍が心配しているのは、この作戦における私の負担。

「ナンバーズの全撃破」なんて目標である以上、当然、連戦する必要があります。

非ナンバーズであるルーテシアちゃんを含めると、その数、合計8人。ガリユを足すと9人？です（当初はゼストさんも相手にす

る予定でしたけど、放置していても大勢に影響が無く、むしろ相手にした場合、フルドライブで沈められる危険性まであるので、結局放置に決定しました。チンクさんやトーレさんの時みたいに複数で当たれる局面もありますけど、それでも負担が大きいです。

「ま、仕方無いよ。こうやって色々知ってるのが私と藍だけなんだから、私達で何とかするしか無いんだし」

それに、と言葉を続けながら、私は先日の事を思い出していきま
す。

「考えてみれば、一人の方が色々都合だしね。ほら、この前の事
とかもあるし。」

「そうでしたね……。」

この前、という言葉に思い当たったのか、藍がため息をつきました。

この前、っていうのは、先日に行われた健康診断の事です。
あの一面真っ赤のカルテが原因で、私〃半妖っていうのに気付く
きっかけになった事件。

結局あの後藍と色々相談した所、藍の協力で「ちよつと不健康な
子供」程度に見えるように、再検査の結果を誤魔化す事にしました。
検査自体はそれで通り、事無きを得た筈だったんですが……。

まあ半ば予想通り、その日を境にシヤマルさん、あとはやてさん
が、何かを聞いたそうな顔をしてチラチラとこっちを見てくるよう
になりました。

以前、私が霊力について話をした時も同じような事があったんで

すけど、今回ののはその時よりも長いです。

シャルさんなんかは「最近悩み事とかない？」って感じで聞いてくるんですよね。しかも口だけじゃなくて心から心配してくれているみたいで。

多分、悩んでいる内容よりも悩んでいるっていう事自体を心配してくれてるんでしょうけど。

内容が内容である以上喋れないのは確定なんですけど、そうやって善意100%で来られるとこっちの良心にズキズキ来る訳で。

結局適当に誤魔化したり、話をそらしたり、逃げたりしてその場を凌いでましたけど、色々疑われている状況は一切変化無し、という訳です。

「大丈夫だつて。ちゃんとナンバーズ全員の対策も考えてあるんだから。……つと、そろそろ時間だね。行くよ、藍。」

「……はい、マスター。」

「んくっ、んくっ……。ぷはーっ！」

ウェンディさんとノーヴェさんの撃破に成功した私は、スキマ移動によって次の交戦地点の少し手前に降り立ちました。

手に持っているのは国土無双の薬。霊、魔、妖力を回復する効果

のあるそれを、一気に喉に流し込んでいきます。

さっきの戦闘は比較的想定通りに事を運べました。

閉鎖空間で、いきなり何の前触れも無い状態からの飽和射撃。

熟練の魔導師でも不意を突かれるであろう攻撃に、ナンバーズの二人は足を止めてしまいました。

いきなり狩る側から狩られる側に回った動揺もあったんでしょけど、後期型のナンバーズの弱点は実戦経験の不足、という仮説は当たりでした。

まず不意についてウェンディさんを襲撃。その戦闘力のキーであるライディングボードを真つ二つにして冷凍した後、本人に接近して拳一閃。ウェンディさんは何が起きたか分からないといった表情のまま倒れていきました。

それと同時に、ノーヴェさんが逃げていくのを確認。この時点でノーヴェさんに追撃を加えるのも可能でしたけど、あえてそれをスルー。その後挑発を混ぜながら、セインさんの情報を聞き出す事に成功しました（ちなみに最初の襲撃でノーヴェさんの方を残したのは、挑発に乗りやすそうな性格だから）。

「波と粒の境界」で結構霊力を喰いました（直後の天地魔闘で、防御の部分を霊撃とバインドにしたのはこれが理由）けど、それも想定内。ここまでは100点満点といえる出来です。

「よっし、回復！！ んじゃ、次行きますか。」

薬の効果はすぐに発揮され、先の戦闘で消費した分のエネルギーは回復。何だか色々漲ってくる感覚がしてきます。

まずはこれで一本目。

色々実験してはみたものの、一定量以上飲むと自爆する、という欠点はついに解消される事は無いまま、今日という日を迎えてしまいました。

自爆のボーダーラインともいえる容量、一瓶につき、その三分の一の量が詰めてあります。

つまり、回復できるのはあと二本分。そうそう無駄遣いは出来ません。

私は地下通路を走って、目標の所へと急ぎます。

すぐ近くにスキマを開いた事もあってか、その数秒後には、目標の地点へと到達しました。

そこでは既に戦闘が始まっており、所々から爆音が聞こえてきます。

「なら……。シュート!!」

私はギンガさんの姿を確認した後、相對している相手に向かって牽制用の弾幕を発射。その隙にギンガさんと合流しました。

「ギンガさん、大丈夫ですか？」

「キャロ!? どうして?」

「細かい事はとりあえず後で。今は」

「む、新手か?」

「……あの人をどうにかしないとです。」

弾幕を放った向こうから聞こえてきた声に、私とギンガさんは身構えます。

弾幕のせいで舞い上がった煙の向こうから歩いてきたのは、かつて私に優しくしてくれた人。

戦闘機人NO5、チンクさんが、こちらを鋭い眼光で見つめてきました。

「はっ！！」

かけ声とともに放たれた8本のナイフ、それが飛んでくるのを切っ掛けに、戦闘が再開されました。

ギンガさんはそれに対して垂直に移動。

私はそれをグレイズ……なんていう事はせずに、ギンガさんの反対側にダッシュしました。

そして、ナイフが私達の居た地点を通過して

ボンッ！！

いきなり白熱化したかと思ったら、次の瞬間には爆発。それにより発生した爆風が、私の頬を撫でていきました。

これがチンクさんのIS「ランブルデトネーター」。

攻撃をグレイズで回避する事を基本戦術にしている私にとって、「ナイフを爆発させる」という、正に天敵ともいえる能力です。

色々と誤解されていそうですが、私の防御力はそんなに高くありません。

3種類の力を使える、というのが私の強みですけど、一つ一つを取ってみるとA A A A Aの間くらい。最高出力に関して言えば、魔力のみでSを超えている隊長クラスやヴォルケンスの皆さんには及びません。

それを補うために身に付けたのが、遠距離攻撃を凌ぐためのグレイズ、近距離戦を拒否するための霊撃、大威力攻撃を一瞬だけ耐えてカウンターで潰す天地魔闘です。

つまり、何が言いたいのかというと、グレイズ不可であるランブルデトネーターは、私とは相性最悪、という訳です。

『ギンガさん、まだ動けますか?』

『うん。大丈夫。』

『じゃあ私が何とか隙を作りますので、合図したら突っ込んでくれますか?』

『分かった、了解。』

迫り来るナイフの雨をモード「橙」で大きく回避しながら、ギンガさんと念話で簡単な打ち合わせをします。

確かに、現状では私は不利。けどそれをひっくり返すための手札は、既に私の手の中にあります。

『藍、モード「白沢」』

『了解です。』

ナイフ爆弾を回避しつつモード変更。「歴史を食べる程度の能力」を持った形態に切り替えます。

私は以前の空港火災の時、チンクさんを逃がす代わりに、「私と会ってからの歴史」を食べる事によって、チンクさんから記憶を奪っています。

では、ここで問題。その歴史を戻せばどうなるのか？

失われた筈の歴史と、それに伴う記憶の復活。それはチンクさんの頭に、一種のフラッシュバックを発生させる事になります。

そして、それによって発生するであろう「思考の空白」は、戦闘中においては致命的な隙になり、そこを突けばアッサリ撃破可能、という寸法です。

……正直言うと、あの歴史をこんな目的に使うなんていうのは、私だって嫌です。

でもなるべく消費を抑えつつチンクさんを下そうと思うと、それ位しか方法が無いのも事実な訳で……。

……うん、JS事件が解決したら、チンクさんには思いっきり謝ろう。

『ギンガさん、そろそろ行きます。』

『了解。』

ギンガさんに念話をしながら、私達はナイフを凌ぎ続ける。そして

「歴史還^{がえ}し。」

その一言をきっかけに、私は失われた歴史を元に戻しました。

じゃあ、桜、っていうのはどうかしら

え？

桜、ですか？

なに、これ？

そう、桜。この子の髪の毛って綺麗な桜色だから

あれは……藍？ それと……。

私は○○、あなたは○○、あの子は○○。なら、この子も色にちなんだ名前の方が「らしい」と思わない？

じゃあ、このひとは……。

そうですね。それに、桃だと語呂が悪いですし

ううん、ちよつとまっつて。

やくも もも、ね。……それでも良いかも

わたし、こんなのしらない。

絶対後で恨まれますよ、それ

いや、ほんとうにしらない？

ふふ、冗談よ。じゃあ決まりね

ううん、そうじゃない。

いい？ 貴方の名前は

これは、あのときの

八雲 桜よ

「キャロ、危ない!!」

「!?!」

アレ? 今、何を……ッ!!

ギンガさんの声に、私は戦闘中であることを思い出す。
とにかく今やるべき現状把握、状況確認をしようとしたのですが

「あ。」

詰んだ。未だに戦闘モードになりきれていない頭の片隅で、どこか冷静な自分がそう呟いた。

目の前にあるのは無数のナイフ。それらが私の回避方向の全てを潰すかのように飛来してきています。

スキマを開いて回避?

無理。形態変更している間に被弾する。

グレイズ?

駄目。爆発に巻き込まれるだけ。

霊撃?

札を出すまでのタイムラグが致命的。間に合わない。

障壁張って耐える？

現状取りうる選択肢の中では最善。

けど、ナイフの量、爆発の規模から計算すると、まず耐え切れない。

（それでも、何も出来ずに死ぬよりは――！）

一瞬で思考を終えた私は、せめて生き残るだけでもという思いから障壁を展開する。その0.0コンマ数秒後

ドオオオオオオオオオオオオン――！！

私のいる地点を中心に、大爆発が巻き起こりました。

「大丈夫、キャロ？」

「へ？　ギンガ、さん？」

半ば死を覚悟した数瞬後、私の目の前にはギンガさんの顔がありました。

「大丈夫だよ。まだ生きてる。」

その顔は笑顔で、私を安心させようという気持ちが読み取れます。

「でも、ちよつとごめん。」

そう言つて寄りかかつてくるギンガさんを、私は受け止める。

でも、その腕を触った時に感じた感触。

金属を彷彿させるそれは、ギンガさんの骨格フレームが剥き出しになっている事を示していて。

「ちよつとだけ、休ませて。」

その言葉を最後に、ギンガさんは目を閉じました。

「ギンガさん!？」

『マスター!! 大丈夫です、気絶しているだけです!!』

藍の声に我を取り戻した私は、急いでギンガさんの様子を見る。
気は失っているものの、呼吸はしっかりしている。藍の言った通り、命に別状は無さそうです。

それを見てようやく落ち着けた私は、現状の把握に入りました。

『藍、何があつたの?』

『マスターが歴史を還した瞬間、確かに向こうの動きは停止しました。ですがそれと同じくして、マスターも動きを停止しました。そして、先に復帰したのが』

『チンクさんの方、という訳ですか。』

藍から説明を受けた私は、現状を完全に理解しました。

……私のせいだ。

私が隙を晒したせいで、ギンガさんが傷ついてしまった。

私がする筈だった合図が無いせいで、ギンガさんはチンクさんの隙を突けなかった。

それどころか、ただの的になっていた私を守るために、こうやって我が身を盾にしてくれた。

全部、私が招いた結果だ。

「キャロ、か？」

向こうからかけられた声に、私は顔を上げる。

そうだ、まだ戦いは終わってなんかいない。

「はい。久し振りです。チンクさん。」

「全部思い出したよ。あの時は世話になったな。」

「いえ、どういたしまして。」

「だが、私にもやらねばならぬ事があるのでな。悪いとは思っが」

「気にしないでください。今すっごい自己嫌悪中なんです。悪いですけど、八つ当たりにつき合ってくださいますか？」

「仕方無いか……、行くぞ！」

その掛け声と共に、先程と同じようにナイフの雨が降り注ぐ。私はそれを

「藍、モード「龍」。」

身体強化と障壁をかけて、真正面から突っ込んだ。

ドオオオオオオン！！

障壁に当たったナイフが片っ端から爆発する。

鼓膜が破れそうな爆音が耳元で聞こえるけど、それを無視。障壁の強度のみに注意しつつ、私は突進を続ける。

「な！？ くっ！！」

私の取った行動に驚愕するチンクさん。でもそれも一瞬の事。すぐさまナイフを取り出し、先程の倍の量を投擲してきました。

ドン！！ ドン！！ ドン！！

「かつ……、あああああ！！」

それを始まりとして、連続して飛来してくるナイフ爆弾。

そのうちの一本が障壁を貫いて、私の懷で爆発する。

「気を操る程度の能力」の恩恵で防御力が上昇しているとはいえ、元々防御が不得手な私は、それだけで意識が飛びそうになります。

けど、それがどうしたっていいんですか？

ギンガさんが傷ついたのは、私が魔力節約のための作戦を実行したからだ。

我が身可愛さが招いたミス。

そんな事をやっておきながら平気でいられる程、私は強くない。

既に霊力障壁は半壊しており、ナイフ爆弾の数本が素通りしてくるのを身体強化で無理矢理耐える。

切れそうになる意識を必死に繋ぎとめながら、それでもその足を止める事なく

無限に思えるような時間が過ぎて、私は

「霊撃！！」

「ガッ……ッ！！」

チンクさんの懷に潜り込んだ私は、即座に霊撃札を取り出して発動させる。

チンクさんが着ているジャケットはある程度の防御効果があるんだけど、質量保存の法則には逆らえない。衝撃を叩きつけられた体はそのまま吹き飛んでいく。

零距离霊撃で吹き飛ばされたチンクさんは、そのまま壁に叩き付けられ

「恋符「マスタースパーク」！！」

それを追うように放たれた桜色の砲撃が、その意識を刈り取りました。

「はあっ、はあっ……。」

戦闘が終わり、私は肩で息をしながらギンガさんの方へと向かっていく。

「どれだけ効くか分からないけど……。」

そして気絶しているギンガさんの口に、国士無双の薬、二本あるそのストックのうちの一本分を流し込んでいく。

さすがに一本全部は飲みきれなかったみたいで、瓶には半分程度残っています。

それでも回復効果はあったみたいで、顔色がさっきよりも良くなっています。

うん、これなら大丈夫そう。

私は残りの分（一瓶と半分）の薬を飲んで、ほぼ空になっている力を回復させる。

それと同時に、チンクさんをさつきノーヴェさん達にやったのと同じ方法で無力化させていきます。

「次、行かないと。」

私はスキマを開いて、次の戦場へと移動する。

回復した私の力は、全快時の7割程度。

予定外のアクシデントのせいで、頼りにしていた国土無双の薬は、もうそのストックがありません。

しかも、ここでの戦闘が長引いたせいで予定が押している。

全滅が当初の目標だったけど、修正する必要があるそうです。

「でも、やらなきゃ。」

そう呟いて、私は決意を新たにします。

全ては平穩のために。

ここさえ凌げば、それが手に入る筈だから……。

第62話 その日、機動六課(2) - 桜 - (後書き)

これでフラグはほぼ放出完了。後はクライマックスまで走るのみです。

……バレバレです。今までもバレバレでしたが、今回ののはほぼ答えです。

伏字意味無えwww

地上本部襲撃はあと二話くらい続きます。

次回の主役は皆さん大好きなあのお方です。

今回はQ&A無しです。では、また次話で。

第63話 その日、機動六課(3) - 天元突破 - (前書き)

C a u t i o n ! ! C a u t i o n ! !

今話では、とあるキャラがキャラ崩壊を起こしています。

原作ファンの方は、ネタだと思ってスルーしてあげてください。

第63話 その日、機動六課(3) - 天元突破 -

「エリオ、アギト、ちゃんと付いて来れている？」

「はい、大丈夫です。」

『これくらいならまだ平気だ。』

「そう。なら、もう少しペースを上げるよ。いい？」

「了解。』」

すでに日は落ち、夜中と言ってもいい時間帯。

すっかり暗くなったミッド沿岸部の上空で、私とエリオ、それにアギトの3人は、六課へ向かって飛行していた。エリオは既に、アギトとユニゾン済みだ。

こうなつた経緯は30分ほど前まで遡る。

公開意見陳述会も終盤にさしかかった頃、突如として現れたガジェットの集団は瞬く間に地上本部の周りを取り囲み、AMFによって中にいる魔導師を無力化させた。

私となのはの二人は、エレベーターの昇降路を通つて予め集合場所に決めておいたポイントに移動。そこでフォワードの皆と合流してデバイスを受け取つた。

ここに着くまでの途中、フォワードの皆はガジェットとの戦闘があつたらしいけど、特に危なげもなく撃破したらしい。魔力、体力ともにまだまだ余裕がありそうだ。

それよりも驚いたのは、スバルが背負っていた二人の事だった。戦闘機人である事を分かりやすく表す、水着のようなボディース

「ッに身を包んだ女の子。それが気絶した状態で、鎖でぐるぐる巻きにされていた。」

「ティアナ達が言うには、自分達が到着した時には既にこの状態で通路に放置されていたらしい。」

「こんな事が出来るのは……。」

「多分、ですけどキャロじゃないかと。」

「かもね。そう言えば、キャロとの連絡は？」

「それが……！？ ギン姉！？」

「スバル？」

「今、ギン姉から念話が……。今戦闘機人と交戦中。キャロも一緒だって……！」

「……なのは。」

「うん。」

「スバルに届いた念話を受けて、私達は動き出す。」

「私達を追ってきたシスター・シャッハに、はやて達のデバイスと戦闘機人二名の身柄を預ける。」

「そして、そのやりとりの途中に届いた六課襲撃の報。それにも対応するため、私達は二手に別れることになった。」

「飛行手段を持たないスバルとティアナがいるので、スターズはギンガとキャロの援護に、エリオはアギトとストラーダのおかげで限定的にだけ飛行が可能なことから、ライトニングは六課へと急行する事になった。」

『まったく、留守を襲うなんて汚え奴らだ。そんな奴ら、このアギト様がぎったんぎったんに……ッ!!』

「!!」

アギトの声が不自然に途切れた瞬間、私はエリオの前に出てディフェンサーを発動させる。その直後、ディフェンサーに魔力弾が当たり、ギギギギ、と障壁と競り合った。

幸い魔力弾はそれ一発のみだったので、私の防御力でも耐え切れた。

攻撃を凌いだ後、私の前にいたのは

「戦闘……機人!!」

前の戦闘の時に見た長身の戦闘機人と大きな剣を腕に付けている戦闘機人の二人が、私達の前に立ち塞がった。

(どうする?)

ここを出てきた以上、目的は私達の足止め、それは間違い無い。なら、私達のやるべき事は

『エリ『フェイトさん!!』!?!』

エリオに指示を出そうとした所に割り込むように、私に念話が届く。

この声は

『キャロ?』

『はい！ 今行きます！』

その声に応えるように、遠くの方から一筋の光が飛んでくる。いつものように凄まじい速度で飛んできている。この調子だと数秒後には合流できるだろう。

当初は私一人でここを抑えてエリオ達を先行させるつもりだったが、キャロがいるのならここで二人を撃破してから六課に向かうことも可能。

ここにきて、私は運が向いてきているのを感じた。

戦闘機人の二人も気付いたのか、こちらに向かってくる光に対して身構える。

その数秒後、キャロはその速度を全く落とさずこちらに接近し、

そのまま私達の所を通過していった。

『フェイトさん、そっちはお願いします！！』

「え、ええええええええ！？」

あまりにも予想外な事に、私は思わず声を上げてしまった。いや、理屈としては理解できる。

元々、足止め役と六課に向かう役とで分けるつもりだった。

その点で言えば、即断即決で迷わず六課に向かったキャロの行動は、間違いなくベストに近い。

なのに、何でだろう？

『何でこんなに泣きたくなってくるんだろうね?』

『フェイトさん!?!』

『私達の事を信じてくれてるからだって!!多分。』

『あーうん、そうだよね.....。』

アギトのフォローを聞いて、私はそう思う事にする。
と言うか、そう思わないとやってられない。

今の状況が、賞金首時代とか空港火災の時に似ているなんていう
事は無いったら無い。

.....無いんだってばあ.....。

「はあ.....、行くよ。エリオ、アギト。」

「りよ、了解。」

『お、おう!』

とりあえず気を取り直して、目の前の相手に向き直る。
キャロが向かった以上、きっと六課は大丈夫だろう。
なら、私達はここで頑張るだけだ。

「行くよ、バルディッシュ。」

Yes sir.

「ザフィーラ、今!!」

「おおおおおおっ!!」

隊長陣不在の六課に突如として襲来したガジェットの大群。それを食い止めているのは、シャマルとザフィーラであった。シャマルが障壁でガジェットのレーザーを防ぎつつ、隙を見てバインドを放つ。

拘束されたガジェットはザフィーラの爪と牙によって、そのボディを破壊された。

時にはザフィーラも守備に回り、防衛メインでガジェットの群れをさばっていく。

戦闘開始からまだあまり時間が経過していないので、二人は体力、魔力ともにまだまだ余裕があった。

『今こっちに皆が向かってきてくれる。それまで何とか耐えるわよ。』

『……分かった。』

そんな一人と一匹の様子を上空から見ている者がいた。

戦闘機人ナンバー8、オットー。ナンバー12、デイド。そして

「……まだなの？」

「お嬢様、今ガジェットに波状攻撃を仕掛けさせています。向こうの消耗を考えると、突破は時間の問題かと。」

そう、とそっけなく返事をして少女、ルーテシアはしばらくの間、何かを考えるように黙り込んだ。やがて

「私も手伝う。」

「良いのですか？」

「……早く終わらせたいから。」

オットーの返事を待たないうちに、ルーテシアはアスクレピオスを起動させる。

喚びだすのは、己の最も信頼する相棒であり、母親と同じくらい大切に思っている友達。

「ガリユー、全部、「貫いて」。」

数日前

「何、義手を替えたい、だって？」

「うん。」

六課襲撃より少し前、私はドクターに相談を持ちかけていた。内容は、ガリユーに取り付けられたドリルを、何とか他の義手と交換できないか？ という話だ。

私から見ても、この武器は欠陥品も良い所であった。

まず、音がうるさい。

回転の時の機械音のせいで、相手からはこちらの居場所がバレバレになってしまう。

この前の戦闘では、この音のせいで襲撃を察知され、奇襲に失敗してしまった。

いくら破壊力があっても、当たらなければ全く意味がない。

それともう一つは、この義手に備えつけられている機能。

義手のギミックによってドリルを射出できるんだけど、一旦射出してしまうと、それからは片手で戦闘しなくてはいけなくなる。

一応、私は義手のスピアをいくつか持ってるから、召喚を使って義手を持つてくることは出来る。

でも、取り付ける時には、ガリユーは私の所まで戻ってくる必要がある。

戦闘中にそんな余裕があるとはとても思えない。

「成る程、確かにそうだね。」

「うん。」

「よし、分かった。今すぐ改良を始めるから、ちょっと待ってくれたまえ。」

「え？」

でも、私のお願いはドクターにはちゃんと伝わらなかったらしい。機械の前に立って改良を始めたドクターは、あくまでドリルに拘っているみたい。」

「ドクター。」

「何だい、ルーテシア？」

「何で、そこまでドリルに拘るの？」

「ふむ……。そうだね……。技術者の、いや、漢の浪漫、かな？」

「浪漫？」

「そう、浪漫だ。分からないのなら、これでも見てみると良い。」

そう言つと、ドクターは自分のデスクから記録用デバイスを取り出した。

それを私に渡した後、ドクターは再び作業に戻っていった。

「何だろ、これ？」

そして特にする事の無くなった私は、近くにあったコンピュータにデバイスを差し込んだ。

なんて世間知らずだったんだろう。

数日前、ドリルは役立たずなんて考えていた私を思い出すと、そんな感想しか出てこない。

ドクターが渡してくれた映像は私にとって驚きの連続で、それはドリルという物の可能性を、これでもかという位私に見せてくれた。あらゆる物を貫く貫通力！ 二重螺旋に込められた可能性！ 天も次元も突破するエネルギー！

それに比べれば、静音性やリスクなんていうデメリットは無いも同然。

あれを見て確信した。ガリユーの武器はドリル以外に有り得ないって。

『……………』

『うん。……………もう少し奥。……………うん、そこ。準備は良い？ ……じやあ、お願い。』

私は自分の目で見た情報を元に、ガリユーに指示を出す。
やがて、ガリユーの位置がピッタリになった所で、私はガリユーに作戦を実行させた。

キューーーーー……。――

「！？」

最初にその音に気付いたのは、狼型の使い魔の方だった。
耳を立てて警戒し、緊張した様子で周囲を警戒する。

どんどん大きくなっていく音に何か気付いたのか、ガジェットとの戦闘を中断して緑色の魔導師の所へと飛んでくる。でも、そんなの無駄。

『……行つて。』

ズガアーーーーン！！

「!?!」

緑色の魔導師の足元が爆発。そこから飛び出してきたガリユーが右手のドリルを回転させて、緑色の魔導師へと遅いかかる。ドリルはただの武器なんかじゃない。こうやって、地下を掘り進む事だつて出来る。

いくら強固な障壁で隊舎を守るうが、それは地表に限定した話。こうやって地下から侵入すれば、簡単に抜ける。

下から上へ。天へと向けられたドリルが、緑色の魔導師へと襲い掛かる。

「シャマル!!」

「きゃっ!!」

ガリユーが目標に到達する瞬間、間に割り込んできた狼型の使い魔が、緑色の魔導師を突き飛ばす。けど

『そのままやっちゃって。』

別に、魔導師の方から先に落とさないといけない理由はない。

この狼型の使い魔が庇ったのなら、こっちから先に片付けるだけの話だ。

……そう言えば、クアットロが言ってたっけ。「こういう風に庇いあうのが弱点」だって。

「……!!」

「おおおおおお!!」

キイイイイイイイイン!!

ガリユーのドリルと向こうの障壁がぶつかり合って拮抗したまま、二人？ は真っ直ぐに上昇していく。下から突き上げるガリユーと上から障壁で防御する向こう。

どうやら防御には自信があるらしく、ガリユーのドリルはその障壁を突破できないでいた。

けどそんなのは問題無い。

一回せば、少しだけ前に進む。

キイイイイン……。

未だに拮抗を続けている二人。その間で回転しているドリルの速度が、ほんの少しだけ落ちた。

パワー切れ？ ううん、そうじゃない。

良く見るとドリルの先端、数ミリにもならない僅かな長さだけど、それが向こうの障壁にめり込んでいる。そうならば、後はこっちの物だ。

二つ回せばさらにその先。

キイイイイン……！！

「何！？」

向こうは驚いているみたいだけど、もう遅い。

僅かにめり込んだ先端を起点に、激しい回転で障壁を突き進む。やがてドリルの先端からピツ、と障壁に亀裂が走り、瞬く間に全体へと広がっていく。

この結果は必然。だって

ガリユーのドリルは、天を突くドリルなんだから！

パリーーーーーン！！

「……！！」

「があああああ！！」

障壁を突き破ったガリユーのドリルに攻撃されて、狼型の使い魔は地面へと落下する。

直前で体を逸らしたせいとお腹に風穴が空く事は無かったけど、それでも重症には変わらない。それでもう、まともに戦う事は出来ないだろう。

「これで、良いかな？」

「ありがとうございます、お嬢様。」

これで、向こうの戦力はあの緑色の魔導師一人だけ。後は私達とガリユーの4人でかかればあつという間。中にまだいるかもしれないけど、それはその時に考えよう。とりあえず

「ガリユー、こっちに戻って」

行きますよ。「幻想風靡」

え？

何、今の声？

なんで、あの子の音がするの？

なんで

ガリユーがお手玉みたいに、空中をポンポン飛んでいるの？

空中に赤い線が通過する。その度、その線上にいるガリユーが、車に撥ねられたように吹き飛ぶ。

それも一度や二度じゃない。

一秒あたり5回、6回。そんな馬鹿げたペースで撥ね続けられて、ガリユーの体はあっという間にボロ雑巾みたいに変わっていく。

その時間は、たぶん数秒だったんだろうけど、私には永遠に近い時間を感じられた。

そして、終わりの時がやってくる。

赤い線がガリユーの頭上へと引かれて点になり、その正体、桃色の髪をした子供の姿が現れる。

その手には扇のようなものが握られており

「突符「天狗のマクロバースト」！！」

扇を振り下ろした瞬間、そこから巨大な嵐が巻き起こる。

既にボロ雑巾のようになっていているガリユーはそれに逆らえず、真つ逆さまに落下していき、さっきガリユーがやつつけた狼型の使い

魔と同じように地面に叩きつけられて。

「ガリユーーーーー!?!」

「ふー、ギリギリセーフ。危なかったあー……。」

「!?!」

ガリユーの方へ行こうと思った瞬間、不意に聞こえてきた声に足を止める。

そこにいたのは桃色の髪をした子供。

ガリユーを、地雷王を傷つけた。そして今日もまた、こうやってガリユーをボロボロにした実行犯。

「こつちもあんまり余裕が無いので手短に言います。さっさとやられちゃってください。」

キャロ・シエル。

大切な者を傷つける、最大の敵で恐怖の象徴である存在が、私の前に立っていた。

おまけその1 今話を4行でまとめてみた

ルールー「ガリユウのドリルは、天を突くドリ」

キャロ「その幻想をぶち壊す!!」

ガリユウ「そげぶ!!」

ルールー「ガリユウウウウウ!?!」

大体あつてる?

おまけその2 わかりやすいガリユウさんの被害報告(突っ込み禁止)

幻想風靡のダメージを物理的に計算してみる。

幻想風靡中の速度を音速である340m/s、キャロの体重を30kgとする。

(本当はもっと細かいんですけど、計算の簡略化のために大雑把にしています。)

これに運動エネルギーの公式を当てはめると

$$E = \frac{1}{2} \times M V^2 = \frac{1}{2} \times 30 \times 340^2 = 1734000 \text{ (J) となります。 (Jはジュール)}$$

このままだとピンと来ないでしょうが、これを時速100km/hの物体で再現しようとした場合

$$M = \frac{2 \times E}{V^2} = \frac{2 \times 1734000}{(100 \times 1000 / 3600)^2} = 4500 \text{ (kg)}$$

となり、実に100キロで爆走している4トントラックと同じエネルギーだという事が判明してしまいました。計算してみた作者自

身びつくりですw

しかもそれが何十ヒット。ガリユーさんよく生きてましたね……。

第63話 その日、機動六課(3) - 天元突破 - (後書き)

ガリユーエ……。

今話の主人公！ と思いきやこんな事に。

どうしてこうなったのか作者にも分からないです。

以下、Q & Aです

Q・キャラが直接六課に行かなかった理由は？

A・トール達の状況を確認するためです。フェイトとエリオがいたのでそのまま任せました。

あわよくば奇襲でセツテ辺りを落とすつもりでしたが、気付かれていたのでスルーしました。

では、また次話で。次で六課襲撃はお終いです。

第64話 その日、機動六課(4) - Happily ever after

タイトルがネタバレ。今回は詐欺無しです。

「くっ!!」

強い。

それが、目の前にいる二人に対して私が抱いた感想だ。

セツテと名乗った戦闘機人はその行動に無駄が無い。

機械であるが故の長所である正確性。常にローリスクハイリタインの選択を続ける立ち回りで、アギトとユニゾンしたエリオと渡り合っている。

でも、対処法が無い訳では無い。

その正確さは脅威だけど、逆に言えばワンパターン。なら、そこを突けば良い。即ち、向こうの行動を一点読みした上でのカウンタ

エリオもそれには気付いていてタイミングを読んでいるんだけど、今一步踏み込めないでいた。

一点読みというのは、外した時のリスクが大きい。

確かに、うまく決まれば勝利は間違いない。けどもし外した場合
はカウンターをカウンターされる事になってしまう。

エリオもそれを理解しているので、ワンチャンスを伺いながら低
リスクな立ち回りを心がけ、戦いは膠着状態になっていた。

そしてもう一人、トーレと名乗った戦闘機人は純粹に強い。

高速機動からの格闘戦という、どこか私と似ている戦闘スタイル
の彼女は、その身体的スペックもさる事ながら、細かな駆け引きに
おいても戦闘慣れしている事を伺わせる。

例えばそれは何気ない視線だったり、仕草だったり、そういった
さりげない動作で、こっちの動きを牽制してくる。

拮抗を崩すため、隙についてエリオの援護をしようとした事も何度かあったけど、その度に妨害に遭い、未だに攻略の糸口を見つけられないでいた。

通信妨害のせいではやてやクロノ、カリムと連絡をとれないのが痛い。

リミッター解除さえできれば……。

『うっん、無い物ねだりしてる場合じゃない。今できる事をやらな
いと。そっだよね?』

Yes sir.

エリオとセツテ、それにトーレ。

3者を視界に入れながら、私はバルディッシュを握り直す。
そんな時だった。

ドオオオオオオオン!!

「「「「!?!?!」」」」

突如鳴り響いた轟音の直後、大気全体が振動している感覚が伝わってくる。

何事か、と足を止めたのは、向こうの二人も同じだった。

続いて感じたのは何者かの魔力。それが六課の方から感知できた。
でも、こんなに離れた所まで影響を及ぼすなんて普通じゃない!

「……ッ!?!」

最初に動いたのはセツテだった。
今まで戦闘していたエリオに背を向け、六課の方へと一直線に飛んでいく。

当然、私がそんな事を許す訳が無く、移動先に割り込んで妨害しようと思ったんだけど

「させるか!!」

「くっ!!」『エリオ、今すぐあの戦闘機人を追いかけて!!』

それを読んだトーレに妨害される。

私はエリオに追いかけるように指示しつつ、目の前にいる敵の相手に専念する事にした。

それにしても、さっきの魔力……。

恐らく発生源は六課だろう。付近で大規模な戦闘をしているのは、そこしかない。

でも、こんな離れた所まではっきりと伝わるなんて絶対異常だ。一体、六課で何が起きてるって言うの!?

こんなものですか。

それが、目の前にいる二人に対して私が抱いた感想でした。

まずオットーさんですけど、この人は脅威でも何でもありません。彼女のIS「レイストーム」は手から光線を発射するスキルで、まあ早い話がビームです。

拡散や誘導が可能で威力も高い、となかなか強力なISなんです。

「……！？ 何で当たらない！？」

私のいる位置から数十センチ横を光線が過ぎていきます。

BJの端がかすってチツ、チツ、と音を立てているけど、当たらない事を確信している私は、そんな事を気にせずにグレイズを続けます。

拡散性能と誘導性能を持つこの光線は、一見回避困難に見えます。けど、それを撃っているのはあくまで一人。

視線と手の動きからレーザーの軌道を予測。そのデータを元に安全地帯を割り出して、そこに体を移動させる。

数センチ先でどんな威力の攻撃が通り過ぎようと気にしない。1歳の時から弾幕を避けていた私にとって、この程度ならまだEasyモードです。

そもそも、指揮官兼遠距離支援役のオットーさんがこうやって前線にいる事自体が間違いなんですけどね。

そのまま私はグレイズを続け

ガキイイイイイン！！

「ちいっ！！」

「バレバレです。」

後ろから双剣をクロスさせて切りかかってきたデイドさんに対し、その手元を蹴り飛ばしながら勢いを利用して離脱。直後、私のいた地点を光線が通り過ぎました。

デイドさんのISはツインブレイズ。

瞬間加速によって背後を取り、双剣一撃で叩き落とす戦闘スタイルの総称です。

……、言っでは何ですけど、このISを設計したス力さんは何考えてるんでしょうね？

と思うのもこのIS、技能と武器がかみ合っていないんです。

双剣という武器の最大の利点はその手数にあります。

一撃の威力こそ他の武器に劣るものの、片手毎に攻撃、防御を割り振る事が出来、小回りを生かして常にアドバンテージを取っているのがその特徴です。

なのに、このISの基本思想は奇襲からの一撃必殺。……解せぬ。さっきだって双剣をクロスさせて攻撃してきましたけど、それは二刀であるメリットを自ら放棄する行為。

確かに威力は上がるかもしれないですけど、それなら最初から両手持ちの武器を使えって話です。

奇襲失敗の保険として双剣にしたのかもしれませんが、それでもそこで態々双剣をチョイスした理由が分かりません。

『藍、モード「半」。』

そこで私もモード変更。白楼剣と楼観剣を抜いて、デイドさんへと突進します。

「ふっ！！」

ギン！ ギン！

肩口目がけて楼観剣を振り下ろす。それに対し、向こうは片方の剣でそれをガードしながらもう片方の剣で胴を狙ってきます。私は白楼剣でそれを受け止め、罅迫り合いになる前に離脱……、と見せかけて、フェイントをかけて再接近。接近戦の状態を維持します。この状態ならお得意の高速機動も無効化でき、なおかつオットーさんの横槍を気にしなくて良いです。

でも、それも少しの間。

二合、三合と打ち合っているうちに戦闘パターンが分かってきました。

機械故のワンパターン戦法というのが戦闘機人の弱点ですけど、デイドさんは訓練期間が短いせいか、それが最も顕著です。

こう来ればこう、という決められた行動を、愚直なまでに繰り返してきます。

……そろそろ終わらせますか。

既に4度目になるデイドさんへの突撃。

振り下ろされた剣に対して、デイドさんは先程までと寸分違う防御行動を見せます。

……かかりましたね？

『藍、モードリリース！！』

「！？」

剣同士がぶつかり合う刹那、突如として楼観剣が消える。

これを予定調和として知っている私は、即座に右手を腰溜めに握り直す。そして

「華符「破山砲」！！」

驚愕で目を見開いているデイドさんのお腹目がけて妖力全開の拳を叩き込んだ。

「デイド！？ くっ！！」

それを遠くから見ていたオットーさんがこちらに手を向ける。
デイドさんが倒れた事で邪魔が入らずに打ち抜けると考えたからでしょうか？
でも

「そおおおおおいつ！！」 『藍、モード「博麗」』

私は既に気絶しているデイドさんの体を掴んで、オットーさんの方へブン投げる。

このままだと味方を撃ってしまう事になるオットーさんは、射撃をキャンセルしてデイドさんを受け止める。そこに

「霊符「夢想封印」！！」

サッカーボール大の大威力誘導弾を7発、容赦無く撃ち込んだ。

『ふう……。シャマルさん、そっちはどうなりましたか？』

『こつちも何とか。今はザフィーラを治療中。でも本当に助かったわ、ありがとう。』

私がナンバーズ二人と戦闘している最中、シャルさんはザフィラさんを守りながらガジェットを食い止めていました。

撃墜数こそさほど多くないものの、未だに一体も六課に通していないというのは流石です。

『いえいえ。じゃあ、私もあと一仕事終わらせてからそつちに……ッ！！』

シャルさんとの念話の最中、唐突に感じた強大な魔力。私が振り向いた先にいたのは、先程の戦闘には参加していなかったルーテシアちゃんでした。

近くには私が墜としたガリューが倒れており、さっきの戦闘が始まった時からずっと、ガリューの傍に駆け寄ってうずくまっています。戦闘に参加する素振りも無かったので、今まで後回しにして放置していました。

「……んで。」

「？」

「なんで……、あなたは、私の大事なものを傷つけるの？」

「！？」

「おかあさんも、ガリューも、地雷王も。私の大切な家族はみんな傷つけられてボロボロになっちゃった。」

そう話すルーテシアちゃんの顔は相変わらずの無表情。

でも、その目からは大粒の涙がボロボロ流れていて、その悲しみがこっちまで伝わってきます。

その原因の一端になったのは間違いなく私。

本当はそんな話に耳を貸さずに無力化させるべきなんだろうけど、私の足はピクリとも動かない。

「なんで、私ばかりこんな目に遭うの？」

「私はおかあさんやガリユー達といっしょに暮らせればそれだけで良かったのに。本当に、それだけなのに。何で、それだけの事が叶わないの？」

その問いに、私は答える事が出来ない。

だって、私の願いも同じだから。

ただ平穏に生きたいだけ。そんなさやかな願いだけど、痛い位に理解出来るから。

今まで私は、自分のために動いていた。そのせいで傷ついていく人たちの事を無視したまま。

それに気付いてなお、自分の願いを通すために平気で他人を蹴落とす事が出来る程、私は強くなかない。

「あなたがいるから、ガリユーは大怪我をした！ あなたがいるから、地雷王も死にかけた！ あなたなんか……、いなくなっちゃえば良いんだ！！」

「！？」

ルーテシアちゃんの悲鳴にも近い絶叫。それを聞いて、私はようやく体の自由を取り戻す。

泣きながら絶叫するルーテシアちゃんの後方、そこにあつたは直径十数メートルもの召喚魔法陣。

「ッ!!」

それが何を意味するのか、瞬時に悟った私は全速力でルーテシアちゃんへと突進する。

一秒も経たないうちに懷に潜り込んだ私は右拳一閃。ルーテシアちゃんの意識を刈り取った。
でも

「白……天……王……。」

「あ、あああああ……。」

ルーテシアちゃんの最後の呟きに呼応するかのように魔法陣から出てきたのは10メートルを超える巨大な甲虫。

二足歩行の人型甲虫。硬質な外骨格と強靱な筋肉さらには腹部に魔力砲を持った超希少種。

「GYAAAAAAAAAAAA!!」

白天王は悲鳴のような咆哮を上げる。その目には狂気が宿っていて、暴走状態にあることを分かりやすく示している。

生物兵器と言っても過言ではない超生物が、氣絶した主の制御を離れて暴走状態に陥ってしまう。

考えるまでも無い、最悪の事態。

「……!!」

「……不味い!!」

白天王の腹部の水晶が輝いて、そこに魔力が集まっていく。

私は気絶したルーテシアちゃんを抱えて飛翔し、発射を妨害しようと弾幕を浴びせる。

魔力砲を受け止めるなんていう馬鹿げた真似ができない以上、こうやって発動前に潰すしかない。

でも、私の放った弾幕は白天皇に次々と着弾するものの、これといったダメージを与えられない。

私の火力は精々が対人レベル。最大火力に難のある私では、白天王にダメージを与える事すら出来ない。もし連戦による消耗が無かったとしても、それは同じ。

やがて、その時が来る。

魔力チャージを終えた白天王は、理性を失ったままめちやくちゃんに狙いをつける。

私の妨害なんて全くの意味を為さず、魔力砲は発射される。

射線上にいたガジェットを巻き込みながら、魔力砲は進んでいく。そして

その先にあつた訓練スペースに直撃して、跡形も無く消し去りました。

「あ、ああ……。」

目の前の現実には、頭が追いつかない。

今すぐ現実逃避してこれ無かった事にしてしまいたい。でも

行くわよ、キャロ。今日こそ一本取ってみせる！
威勢は認めますけどね。やれるもんならやってみるです。

まだまだ……ッ！！

ストラダー！！

行っけーーーー！！

甘い！！ 天地魔闘！！

恋符「マスタースパーク」！！

へ？ うわあああああ！？

日常の訓練やこの前やったサッカー。その記憶を次々と思い出す。
機動六課での沢山の思い出。それを生んでくれた場所が失われて
しまった事を、嫌でも理解させられる。

何で…… どうしてこんな事になってしまったんだろう？

うっん、そんなのもう分かってる。

私のせいだ。

だって、そうでしょう？

ルーテシアちゃんをここまで追い詰めたのは私。

召喚師にとって召喚獣や召喚虫がどれほど大切なものなのか知っ
ているくせに、ルーテシアちゃんの痛みを考えず、ガリユーや地雷

王を傷つけた。

ルーテシアちゃんの支えになっていただろうアギトを横から掠め取って、自分達の方に付けた。

私のエゴが、ルーテシアちゃんを追い詰めてしまったんだ。

「ごめんなさい……、でも。」

白天王は未だに暴走している。その腹部には再び魔力がチャージされており、それが機動六課の隊舎へと向けられています。

このまま行くと数秒後には、魔力砲によって隊舎とそこにいる人は、みんな消し飛んでしまう。

「それだけは、駄目だから……。」

私は白天王を正面から見据えてユニゾンを解除。同時に残りの魔力を総動員して詠唱を開始する。

それはかつて学んだ、けれども一度しか唱える事の無かった（しかも間違えていた）術式。

私がル・ルシエの村を追放されるきっかけにもなったもの。

「天地貫く業火の咆哮、遥けき大地の永遠の護り手……。」

私の中の冷静な部分が、それで良いのかと聞いてくる。

「我が元に来よ、黒き炎の大地の守護者……。」

でも、そんな意見は一蹴して詠唱を続ける。

こうなった原因は、私が自分の事しか考えなかったから。

なのに、今なお我が身可愛さ優先で動くななんて事出来る訳が無い。こうなったはじめは、私自身がつけないといけないんだ。

「竜騎招来、天地轟鳴、来よ……。」

だから……、後悔なんて、絶対しない!!

「ヴォルテール……ール!」

召喚陣から出てくるのは、あの日にも見た大きな姿。

巨大口ボにも似たその姿が未だ暴走を続ける白天王の前に立ち塞がる。

「ヴォルテール、その子を止めて。皆を……守って!!」

魔力切れを霊力と妖力で補いつつ、朦朧とした頭でヴォルテールを制御する。

ここで私が倒れてしまつてヴォルテールが暴走したら元も子もない。

白天王が無力化されて送還されるまで、気を失う訳にはいかないから。

「行つて、ヴォルテール!!」

エリオが到着した時には全てが終わっていた。

六課の隊舎こそ無事なものの、周囲はひどい有様であった。

瓦礫やガジエットの残骸がそこら中に転がっており、中には真っ黒に炭化しているものもあった。

エリオはその臭いに顔をしかめながらも周囲の確認を続ける。そんな時だった。

「あれは……、キャロ？」

視線の先にいたのはキャロだった。しかし、その足取りはフラフラしており、いつ倒れてもおかしく無い状態であった。

それを見たエリオは周囲の探索をとりあえず中段して、キャロの元へと向かう。

「キャロー!!」

「エリオ……くん？」

「キャロ、一体何が」

「……い。」

「へ？」

「ごめんなさい」

そう呟いたように聞こえた次の瞬間、キャラはエリオの方へと倒れ込み、エリオがそれを受け止める。

突然のことに困惑するエリオと、その腕の中で眠るキャラ。その目元には、うつすらと涙が浮かんでいた。

白天王とヴォルテールの戦闘の際、ドサクサに紛れて六課に侵入したセツテがヴィヴィオを誘拐した事をキャラが知るのは、それから少し後の話である。

おまけ 61～64話まとめ 両陣営の被害報告

機動六課サイド

キャラ	健在
なのは	健在
フェイト	健在
はやて	健在
シグナム	健在
ヴィータ	健在
シャマル	軽症

ザフィーラ	重症
リイン	健在
スバル	健在
ティアナ	健在
エリオ	健在
アギト	健在
ギンガ	リタイア
シャッハ	健在
ロツサ	健在

備考

ヴィータとリインは原作通りにゼストと戦闘。

アギトの暴走が無かったので、何合か打ち合った後、時間切れでゼスト撤退。

フルドライブは使用されなかったので、リインとゼストは双方被害無しでした。

大きな被害を受けたのはザフィーラとギンガの二名で、他はほぼ無傷。

六課襲撃は物的被害こそ大きかったものの、人的被害はそう多くないという結果に。

ヴィヴィオ誘拐がどう響くか……。

スカリエツィサイド

スカリエツィ	健在
ウーノ	健在
ドゥーエ	健在
トーレ	健在

クアットロ	健在
チンク	リタイア
セイン	リタイア
セツテ	健在
オットー	リタイア
ノーヴェ	リタイア
ディエチ	リタイア
ウエンディ	リタイア
ディード	リタイア
ルーテシア	リタイア
ゼスト	健在

備考

ナンバーズの半分以上がリタイアする事態に。

ここから非戦闘員とドゥーエを除くとトーレとセツテの二人だけ。
正直な話、虫の息状態。

キャロは思いつきり後悔しているけど、泣きたいのはスカさんの方だと思う。

何とかヴィヴィオこそゲットできたもののゼストは最終局面では使えないし……、これ詰んでね？

第64話 その日、機動六課(4) - Happily ever after

訓練スペースの崩壊で皆への思いを自覚。ルールーに共感した事も重なって絶賛自己嫌悪中のキャロさんです。

でも、本当に泣きたいのは主力を片っ端から葬られたス力さんの方です。

ゆりかご戦どうするつもりでしょう？

ス力「そんなの私が知りたいよ！」

では、また次話で。

第65話 万年捨て子にご注意を（前書き）

今回はあまり動きがありません。

第65話 万年捨て子にご注意を

『ドクター、レポートが完成しました。今そちらに送信しますので』

「ああ、ご苦労。」

では、と通信を切るウーノを見送ってから、スカリエッティは送信されてきたデータに目を通す。

そこには、先日の地上本部並びに機動六課襲撃に関しての成果と被害が事細かに記されていた。

「ふむ……。」

最初に目に飛び込んできたのは地上本部での成果である。

複数のガジェットによって地上本部を囲い込んでの無力化。

いわばAMFの結界とも言えるそれは、予定通りの成果を発揮してくれた。

これにより、内部にいた高ランク魔導師はその戦力を無効化、ないし戦線復帰を遅らされることとなり、その間はガジェットの独壇場であった。

地上本部に来ていた管理局の高官達へのデモンストレーションという表向きの意味では、今作戦は大成功といえる。

「しかし……。困ったことになったね。」

だというのに、スカリエッティは少しも嬉しそうな素振りを見せる事無くレポートを読み進めていく。地上本部に関する章を読み終えると、続いて本作戦の真の目的、機動六課襲撃に関する部分に目

を通し始めた。

先程と違って、こちらは散々であった。なにしろ、作戦に参加したメンバーの殆どが撃破されて、管理局に逮捕される事になったからだ。

トーレ、チンク、セツテ、オットー、ノーヴェ、ウェンディ、デイド、ゼスト、ルーシアの計9名のうち、無事だったのはトーレ、セツテ、ゼストの3名のみ。そのうちの一人、ゼストは今後勝手に動く事が予想されるので頭数には入れられない。

とすると、現状こちらで戦力といえるのはたったの2名。まともな指揮官なら作戦失敗を宣言して逃亡しているレベルである。

「だが……。」

だからと言って引くのは無理だ、とスカリエッティは考える。

既に事は起こった後で、犯行声明も出した今、自分は立派なテロリストである。

こんな大それた事をやらかした以上、既に自分の後ろに道は無い。なら、前に進むだけである。

もし一旦隠れる事にした場合、最高評議会がどう動くのか分からない。

今回の事がきっかけで戦闘機人の有用性に疑問を持たれたりでもしたら、後ろ盾を失った自分達は瞬く間に逮捕されてしまうだろう。どちらにしろスカリエッティには、進む以外の選択肢は残されていないかった。

「ドクター、何やってるんですか？」

「ん、クアットロか。」

さて、どうしたものかと考えようとした矢先、クアットロが入室してきた。

クアットロはそのまま覗き込むようにして、スカリエッティのしているウィンドウを見始めた。

「いや何、これからの事について少し、ね。」

「成る程。それにしても皆だらしないですわねえ。たった一人の子供にここまで良いようにされるなんて。」

クアットロが心底馬鹿にした様に嘲るのに対し、スカリエッティは何も言わない。

こういう性格だと知ってるし、こういう性格になるように作ったのは自分だ。文句などある訳が無い。

「とはいえ、戦力が足りないのは事実でね。何か良い考えはあるかい？」

「そうですわねえ、うーん……。」

ドクターからの問いかけに、クアットロは手で顎を支えながら考え込む。

数秒は経っただろうか、クアットロはその手をぱん、と叩き

「そうだ！ 「アレ」がありましたわ！」

「えつと……、ここね。」

六課襲撃から数日後、ティアナはミッドチルダにある病院に来ていた。

今回の六課襲撃は、物的被害はともかく人的被害はさほど多く無かった。

戦闘員のうち殆どが無傷ないしは軽症で済んでおり、その殆どは治療の必要すら無かった。

ただ、完全にゼロとまではいかなかった。

六課でガジェットを食い止めていたシャマルはその際にいくつかの軽い傷を受けたし、セツテによってヴィヴィオが浚われた際、近くにいたアイナ、アルト、シャーリー他数名は命こそ取られなかったものの、セツテの攻撃によって体のどこかしらに怪我を負っていた。

また、軽傷の者ばかりという訳でもない。

ガリユーの攻撃によって危うくお腹に風穴が空く所だったザフィーラは、包帯が巻かれた痛々しい姿のまま眠り続けており、未だに目を覚まさない。峠こそ越えたものの、予断を許さない状況であった。

また、重症者はザフィーラだけではなく、もう一人いた。

こちらは既に意識も回復しており、状態も安定している。

なのに何故重傷者と言うのか？ それは

病院の廊下を歩いていたティアナは、ある病室の前で立ち止まる。

病室の前に架かっているネームプレートを見てお目当ての人を確認したティアナは、そのまま病室へと入っていった。

「失礼します。」

「あ、ティア。」

「お疲れ様です、ティアナさん。」

既に先に来ていたメンバーと軽く挨拶を交わしたティアナは、そのまま病室に入っていく。

病室にはベッドがいくつもあったがその中で使われているのは一台だけで、スバルはその隣に椅子を置いて座っており、エリオはその近くで立っていた。アギトはその周りをふよふよ浮かびながら、時々エリオの頭上に降りては休憩していた。

そのままスバル達の方へ近付いたティアナは、ベッドから身を起こして来客に対応している、この部屋の主へと声をかけた。

「それで、具合はどうですか、ギンガさん？」

「そうですね……。」

「基礎フレームの破損が見た目以上に酷いらしくてね。腕一本くらいなら何とかなるんだけど、基礎フレームを丸ごと交換となると結構大変らしくて……。」

日常生活に支障は無いらしいからそれだけが不幸中の幸いかな、

とギンガさんは苦笑する。

その右手からはジ……ジ……と機械フレームの動作音が聞こえてきて、その部分のパーツがまだ馴染んでいない事を示していた。

ギンガさんの正体は戦闘機人である。

機械部品にに適合するように調整された人造魔導師。それが戦闘機人だ。

そして、妹であるスバルも当然戦闘機人だったりする。

私はその事を知ってはいたけど、エリオ達にはまだ話してはいなかった。

色々とデリケートな問題だから、機を見て話すようにスバルと決めていたんだけど……。

「エリオとアギトもびつくりしたでしょ？ ごめんね、今まで黙ってた。」

「いえ、そんな。」

「気にすんなって。誰だって秘密の一つや二つ持ってるもんなんだからさ！」

どこか申し訳無さそうに言うスバルに対して、エリオとアギトは全く気にしていないと態度で応える。どうやら既にスバルの口から話したらしい。その様子を見ると、こんなにアツサリ受け入れしてくれるのなら、もっと早くに打ち明けても良かったのでは、と思わない事も無い。

「そういえば、六課の方はどうなりました？」

「大体終わったわよ。後は現場現場検証だけだから、シグナム副隊

長とヴァイス陸曹に代わってもらったわ。」

「そっか……。ごめんね、ティア。私が我俣言ったせいで……。」

「アンタはそんな事気にしないでいいのよ。」

家族が病院に運ばれたのならその傍にいてあげたいっていうのは当たり前的事だし、そんな事情を知りながら仕事を強要する程、私達は鬼じゃない。

まあ、逆に

「この大事な時に関わらず、仕事すっぱかす奴もいるんだけどね。」

「ティア？」

「ほら、コレ。」

そう言っつて、私は懷から一枚の紙切れを取り出す。
そこに書いてあったのは

機動六課の皆さんへ

一身上の都合により、しばらくの間六課を離れます。
何日かしたら戻るので、心配しないでください。

キャロ・シエル

この書き置きを見た私を除く全員が、固まっただかのようにフリーズした。

5秒経ち、
10秒経ち、
そして

「え、えええええええええええ！？」

病室にエリオの大声が　　つて、病室ではお静かに！！！！

「それ、一大事じゃないですか！　こんな大事な時期に抜けるなんて！　僕、ちよつと探して」

「待ちなさい！」

「ちよ、何で止めるんですか！早くしないと！」

「いいから、ちょっと落ち着きなさい！　大体、闇雲に探したって見つかる訳ないでしょ！？」　それに――

今にも飛び出しそうなエリオを抑えながら、私はその顔を病室の方へと向けさせる。

「他の皆は落ちていてるでしょ？ 慌ててるのはエリオだけよ。」

「言われてみれば……。」

エリオが視線を向けた先にいる3人は、一度フリーズこそしたも

のそれ以降は完全に平静な状態へと戻っていた。

ギンガさんとアギトは苦笑してるし、スバルからはため息が聞こえてきそうだ。

「前にも似たような事があったしね。」

キャロは以前にも一度、書き置きだけ残してなくなった事がある。

その時は数ヶ月程次元世界を旅行して、飽きたところに帰ってきたらしい。

もつとも勝手に出て行ったせいで、後でゲンヤさんからきついお仕置きを受けたとか。

ちなみに、何でこんな事を私が知っているのかというと、ギンガさんが六課に来た頃、ギンガさんから聞いたからだったりする。

「そんな事もあったな……。」

「そういえば、アギトはその時キャロに連れて来られたんだっけ。」

「へー、そうなんだ。」

「？ 何でスバルさんが知らないんですか？」

「スバルはその頃訓練校だったしね。私とお父さんで口止めしてたの。当時はちょっとした騒ぎだったんだから。」

「へえー。……ギン姉。」

「何？」

「その時の話、もっと聞かせてくれない？」

「そうね……、じゃあ、どこから話そうかな？」

その一言を切っ掛けに、スバルとギンガさんは昔話に花を咲かせていく。

エリオとアギトも一緒になってその話を聞いていて、満更じゃないみたい。

「にしても、あのちびっ子……。ギンガさんのお見舞いにも顔を出さないで、どこで何やってるんだか。」

「誰も見てないね。よい……。しょー！」

私は周囲に人影が無いのを確認してから、スキマから出て地面へと降ります。

最も、こんな所に人がいるとは思えないんですけどね。

「それにしても、ここも久し振りだよね。」

数年前とあまり変わっていない風景を見ながら、私はそう一人ごちました。

今私がいるのは第6管理世界アルザス、その山中です。

数年前に修行で来た以来だったりするので、どこか懐かしい気持ちになります。

「さつてと、じゃあ行こうか。」

「キュクルー!!」

久し振りにスキマから出て興奮気味なフリードを肩に乗せて、私達は移動を始めます。

本当は飛行魔法でささと移動したいんですけど、以前の?事件みたいな事があつたら困るので地上を移動します。

ダダダダダダダダダダダダ!!!!

「ギューーーーーー!!!!!!?」

まあ、モード「橙」で全力疾走な訳ですが。

走り続ける事数時間。辺りがすっかり暗くなり、途中で肩から落下して以降は尻尾を掴まれる事になったフリードの悲鳴が弱々しくなってきた頃、私達は目的地の集落へと到着しました。

本当なら直接移動したかったんですけど、もうずっと昔の事だから詳しくは覚えてないんですね。まあ、どっちみち夜まで待つつもりだったから良いんですが。

「藍、モード「玉兔」。」

私は「狂気を操る程度の能力」で存在の波長を薄くしてから既に守衛のいなくなっている門を潜ります。門を通り過ぎた後も誰にも気付かれる事無く、この集落内で一番大きい建物の前へと歩いていきました。

「モード「白狼」。」

「千里先を見通す程度の能力」で中を見たところ、中には人が一人だけいるみたいです。

丁度他の人は出払っているみたいです。

別に誰か居たところでは変らないんですけど、いないのなら好都合です。

私はそのまま建物の中に入っていく

「……！ まさか……、キャロ、なのか？」

「はい。お久し振りです、族長様。」

最後に見たときよりも一回りほど歳をとったように見える族長様に、6年振りの再会をしました。

「そうか、元気でやっておるか。」

「はい。色々ありましたけど、何とかやっていけています。」

「フリードも元気そうじゃの。」

「キュル―!!」

立ち話も何だという事で、私達は族長様の部屋に案内されました。私とフリードは族長様の反対側に座り、村を出てから今までにあった事を話しました。

「それで、今日はどうしたんじゃ？　こんな夜中に訪ねてきて、ただ世間話をしに来たわけでもあるまいに。」

「あのですね、少し、聞きたい事がありまして……。」

そう前置きして、私は

「私の両親について教えてほしいんです。」

今回の来訪の目的を切り出しました。

「……。」

私がそう言うと、族長様は何か考え事をするように黙り込んでしまいました。

私は両親の顔も名前も知りません。

小さい頃はル・ルシエの皆が家族だったし、私もそれで良いと思ってました。

けれど、事情が変わりました。

つい先日、チンクさんに歴史を還した時に見た白昼夢のようなヴ

イジヨン。そこには私の事を八雲桜と呼ぶ妖怪の姿がありました。もしあれがただの妄想だったのならそれで良し。でも、事実ならそこまで考えた私は事実を確かめるべく、当時の事を一番良く知っている人、すなわち族長様の所へ訪ねる事にしました。

「……キャロよ。」

「はい。」

「何を知っても、受け入れる覚悟はあるか？」

族長様、それ半分答え言ってるようなものですよ。

「はい。大丈夫です。」

「そうか……。」

なら、と前置きして、族長様は話し始めてくれました。

結論から最初に言うと、私は「捨て子」だったらしいです。

ある日ル・ルシエの集落の前に、タオルに包まれた状態で捨てられていた所を村人の一人が発見して、会議の結果、そのまま皆で育てる事になったそうです。

包まれていたタオル以外持ち物などは一切無く、親はともかく私の名前すらも分からない有様で、それを見かねた族長様が、キャロという名前とル・ルシエの姓を与えてくれたそうです。

「そうだったんですか……。」

「それとな……、一つ、どうしても謝っておきたい事があるんじゃない。」

「？」

「竜召喚の儀式……、あれを実行させたのはワシなんじゃ。」

「！？……って、アレ？ 何かおかしいような……。……あ！」

何でも何も、おかしすぎますよ！ だって

「さっきの話だと、私ル・ルシエの血は引いていないんですよ？
だったら何で私を巫女にしたんですか？」

「それも話しておかないといかん。さて、どこから話そうか……。」

そう言っ、族長様は再びぼつと話し始めました。

当時のル・ルシエの村では、表にこそ出ないものの、私の事を危険視する声があったそうです。

出自不明な上に類まれなる魔力の才能。（弾幕ごっこが原因）
アルザスのシンボルでもある竜と心を通わせる事もできた私は、
当時けっこう危険な立場だったらしいです。

「そこでだ、ワシは考えた。」

それらは、私がル・ルシエの血を引いていなかった事が一番の原

因でした。

竜召喚はル・ルシエに伝わる門外不出の秘術であり、それをこの馬の骨ともしれない子供が再現しているというのは皆のアイデンティティに関わります。

そこで族長様が考えたのは、「なら身内にしてしまえば良い」という単純なものでした。

ただ、当時の私は既に義理とはいえル・ルシエの一員で、それ以上、つまり血縁を伴った関係になるためには、誰かと結婚する必要があります。当時4歳にも満たない子供にそんな方法は取れないと、族長様は考えました。

そして考えに考えて出た結論は、「アルザスの巫女」というポジションを、血縁関係の代わりに宛がうというものでした。

族長がこれを言い出した当時、ル・ルシエは荒れたそうです。

いくら強い資質を持っていたとしてもル・ルシエの血を引かない人間を巫女にする事を反対する人達と、真っ向からぶつかり合ったそうです。

結局は族長様が「全ては竜が決める事だ」と反対派を押し切り、竜召喚の儀式を決定させたそうです。

「その時、ワシはこれで全て上手く行くと思ってた。だが……。」

ただまあその結果、私がワザと儀式を失敗したり（何度も挑戦させたのは、失敗すると立場が危うい私の為だったらしいです）、呼び出す竜を間違えるなんていう大ボカをやらかして、族長様の思惑を完全に粉砕してしまったと、そういう事らしいです。

「……そんな事情があったんですか。」

「聞いての通りだ。キャロが村を出て行かなければならなかった原

因は、ワシなんじゃ。本当に……すまなかった。」

その言葉を最後に話を締めくくった族長様は、私に対してあの日と同じように頭を下げてきました。

それに対し、私は

「族長様、お願いですから頭を上げてください。」『藍、モード「裁」。』

「……キャロ？」

「前にも言いましたけど、私はル・ルシエの皆を恨んでなんかいません。」

色んな事情があつたとはいえ、最終的に選んだのは私自身。自業自得な所もいっぱいあつた訳ですから、誰が悪いという物でもありません。

「いや、だが……。」

「それに、さっきの話を聞いて感謝すらしてるんですよ。」

捨て子なのにも関わらず、私にル・ルシエを名乗らせてくれた族長様。

自分の立場が悪くなるのにも関わらず、私の為に色々と動いてくれた族長様。

結果的に追放される事になったとはいえ、私の事を気にかけてくれた事に違いは無いです。

「族長様、私がキャロだってすぐに気付いてくれましたよね？」

それは、すぐに思い出せる位、私の事を忘れないでいてくれたという事。

それは、私を追放してしまった事をいつまでも気にしていたという事。

「族長様は、ずっと気に病んでくれていたんですよ？　なら、そろそろ楽になっても良いんです。」

そう言って、私は族長様の手に触れて

『族長様、貴方に罪はありません。』

「白黒はつきりつける程度の能力」を発動させながら、心の奥に届くように語りかけました。

「フリード、そろそろ帰るよ。」

「キュル？」

「ん？　大丈夫、平気だよ。」

心配そうにこっちを見てくるフリードに対し、私は平気だと声をかけます。

だって、この結果は半ば想像通りですから。

思えば、私が妖怪だっていう時点で気付くべきでした。

妖怪である自分が、ル・ルシエの皆と血縁関係がある訳が無いですからね。

それに気付いたのは、先日の事。
ちよつとだけしか思い出せなかったけど、私が八雲桜と呼ばれていた記憶。

あれが事実なら、私はル・ルシエに来る前は幻想郷にいた事になります。

「けど、今私はここにいる。」

幻想郷は全てを受け入れる。じゃあ、ここにいる私は一体何なんだろう？

そんなの、態々考えるまでも無いです。

「私は、幻想郷から追い出されていたんだね。」

幻想郷は全てを受け入れる。でも、そこにいる住民達が自分の事を受け入れてくれるとは限らない。

つまりはそういう事で。ル・ルシエで追放されるよりもさらに昔に、私は幻想郷から追放されていたという訳です。

そんな私の居場所なんて何処にも

「つと！！ 駄目駄目、こんな事考えてちゃ！！」

ぶんぶんと首を振って、頭に沸いてきた考えを吹き飛ばす。
今はこうやって時間があるけど、あと数日後には決戦なんだ。
余計なことは考えないようにしよう。

「じゃあ、そろそろ六課に帰ろうか。フリード、おいで。」

「キュルー!!」

私は目の前にスキマを開き、そこにフリードを放り込みます。
続いて、自分も入ろうとして

P i P i P i P i P i ……。

「通信用デバイスに受信あり? 一体誰だろ?」

ティアナさんはやてさん辺りでしょうか? と目星をつけながら、私はデバイスを取り出します。
にしても、一体誰だろ? ……?

「――。」

「!!!!!!!!!!!!!!?」

入るよ、キャロ。……アレ?

ん？ どうしたの、スバル？

キャロ、まだ帰ってきてないみたいなんだ。

そんなに心配しなくてもそのうち帰ってくるわよ。心配するだけこっちが損よ。

……うん。そう、だよな。

第65話 万年捨て子にご注意を（後書き）

キャラ口帰郷するの巻。まさかの族長様再登場という誰得な回でしたw

4話I Fの設定は一切関係ありません。大事な事なのでもう一回言いました。

次話は決戦前のお話。その次から最終決戦の予定です。

今回はQ&Aは無しです。では、また次話で。

第66話　そして一人いなくなるか？（前書き）

まず最初に、投稿遅れてごめんなさいです。
しかも繋ぎの回なので文も少ないです。

第66話　そして一人いなくなるか？

アースラ艦内　会議室にて

「　という訳で、六課の方針としては、あくまでレリック事件及び誘拐されたヴィヴィオの救出、って線で動く事になります。みんなもそれでええやろか？」

「「「「「はい！」「」「」「」

「うん、ええ返事や。捕獲した戦闘機人から手に入れた情報と今までの捜査情報を元に、ロツサとシャツハがスカリエツティのアジトを捜索中やから、私らはそれを待って出動する事になります。作戦決行はおそらく明日。皆はそれまでに準備を終わらせておくように。」

「

ほな解散、とはやて部隊長が締めくくって会議は終了した。

会議には隊長3名、ライン、はやて部隊長の副官のグリフィス、フォワード代表の私の計6名。他にも通信越しに数名が参加していたけど、会議の終了と共に皆それぞれの仕事へと散っていく。

私も自分の仕事に戻るうかと椅子から立ち上がった所で、なのはさんが声をかけてきた。

「ティアナ、皆は？」

あんな事があったというのに、なのはさんの様子は、少なくとも表面上はいつも通りだ。

自分の子のように可愛がっていたヴィヴィオが浚われて内心穏やかではいられないだろうに、こうやって私達の事も気にかけてくれ

る。

こんな時くらい少しは取り乱してもおかしくないのにと考えると同時に、これがなのはさんの強さなんだなあと思う。

「……どうしたの？」

つと、いけないいけない。質問されてたんだった。えーっと……。

「エリオは訓練場です。シグナム副隊長も一緒でしたから、おそらく今頃二人で打ち合ってるんじゃないかと。」

「そっか。スバルは？」

「スバルはギンガさんの所です。明日には戻るって行っていました。」

「ああ、そうだったね。ギンガも早く復帰できれば良いんだけど……。」

「そう、ですね……。」

とは言うものの、それは難しいというのは分かっている。

ギンガさんの怪我は基礎フレーム部分、つまり人間で言う背骨に該当する部分にまで影響している。

パーツ交換のおかげで、腕がもげても人口筋肉のフィッティングを含めて数日で復帰出来る戦闘機人ではあるけど、基礎に関わる部分はそうホイホイと付け替える事は出来ず、交換のための手術は結構な大仕事になる。少なくとも、この事件が片付くまでは落ち着いて治療も出来ないという訳だ。

「普通の人間なら一生かかっても治らないような怪我がどうにかな

るんですから、良い事なんですけどね。」

「そうだね。落ち着いてしっかり治してもらう為にも、私達が頑張らないとね。」

「はい。ギンガさんの分までやってみせます！」

そう言つて拳を握つて顔の辺りまで持つてくる、所謂ガッツポーズをする。

こうやつてすると何だかやる気が沸いてくる気になってくるから不思議なものだ。スバルに影響されてるんだろつか？

よし、頑張ろ

「あと、キャラはどうしてるのかな？ ティアナの方には何か連絡来ていない？」

うと決意を新たにしようとした矢先、出鼻をくじかれた。

……あえて考えないようにしてたのに。

「私の方には何も。あの子、どこで何やってるんでしょうね？」

「うーん……。一時的に六課の機能をアースラに移すつていう話は、もうしてあるんだよね？」

「はい。一昨日のうちにあの子の通信用デバイスに送っております。」

「ひょっとして、見てなかったりするかな？」

「だとしても帰ってきてるなら六課に戻る筈ですから、そこに残っ

てるスタッフから話を聞くと思いますよ。」

「それもそうだね。うーん……、どうしたんだろ？」

「心配しなくても、そのうちひょっこり帰って来ると思いますよ。」

むしろあの子に関しては、心配すればする程損をしそうな気さえしてくる。

どこまでも我が道を行く、それがキャロっていう子の本質だと思う。

その過程で周囲が巻き込まれても気にしない、それでいて結果が伴っているのだからお質が悪い。

そんな子に対していちいち心配するのは、余計なお世話という訳だ。

「そうだね。ありがと、ティアナ。それじゃあ、私ははやてちゃん
と話があるから。ティアナはこれからどうするの？」

「そろそろエリオの訓練が終わりそうなので、そつちに。」

「了解。それじゃ、何かあったら連絡してね。」

「はい。」

「うーん、そつか。まだ帰ってきてへんのか……。」

「ティアナは心配しないで良いって言ってたけど、そういう訳にも

いけないよね。」

「せやね。はあ……、もうちょい大人しくしてくれれば最高なんやけどなあ……。」

モニターに表示されている大量の情報とにらめっこしつつ頭を抱えながら、はやてはなのはの話を聞いていた。

なのはとの会話を続けつつはやてが端末を操作すると、画面が切り替わって先日捕獲したナンバーズについての情報が表示された。

「純戦闘タイプの機人が5体に召喚師の女の子と召喚虫。これほぼ全部キャロちゃん一人でやつつけた言うんやからなあ。」

「確か、ナンバーズ、だっけ？」

「メイドインスカリエッティの戦闘機人。ロッサが聞き出した話によると、戦闘タイプはあと二人しかおらへんみたい。」

「フェイトちゃんとエリオが戦った二人組だね。」

「せや。」

六課襲撃からスカリエッティのアジト搜索へと向かうまでの数日間、ヴェロッサは査察官としての権限を使い、捕獲したナンバーズに対して取調べを行っていた。

ナンバーズは全部で十二体。

そのうちの一体は先日レリックをめぐる戦闘時にこちらが確保しており、既に取り調べ済み。

これに加えて今回の事件で捕獲した五体と召喚師の少女。それらから得た情報によると、残り六体のうち一体はこちらの手

の及ばない所で撃破されており、二体は後方支援メインの性能なので戦闘能力は高くない。

作業員としてどこかに潜入している一体を除くと、スカリエツェイの持つ戦力は戦闘機人二体にガジェット、そして協力者と思われる魔導師が一名。

数こそ多いものの、質の面でこちらに大きなアドバンテージがあるのは間違いない事である。

「この情報が正しいのなら、向こうかて色々キツイ状況なのは間違い無いと思う。簡単に行くなんて思てへんけど、私らならきつと大丈夫。」

「うん。絶対、助け出してみせる。」

なのはとはやては決意を新たににして準備を進めていく。
最後の戦いはすぐそこまで迫っていた。

ミッドチルダ中央病院にて

「ふう……。」

病院内の一室。自分に割り当てられた部屋のベッドから身を起しながら、ギンガは軽いため息をついた。

つい先程まで、ギンガはスバルと一緒にだった。

身の回りの世話や昔話を交えた他愛の無い会話。そうやって一緒にいた二人であったが、スバルが六課に合流する時間となった。

まだまだ一緒にいたかったけど、スバルには大事なお仕事が待つ

ている。

絶対無事に戻ってくるように約束して、ギンガはスバルを見送った。

「スバル、ちゃんとやれるかな？」

誰に言うともなくギンガが呟くが、それに答えるのは誰もいない。当然である。今この部屋には「誰もいない」のだから。

「……そっか、そうだったね。」

ギンガもそれに気付いたのか、それっきり一言も発しなくなる。さて、これからどうしようかとギンガは考える。

まだ寝る時間には少し早いし、暇潰しをするにしても話し相手がいない。

そういえば、ティアナが持ってきてくれた本、まだ読んでなかったっけ、と、ギンガは近くに置いてある本棚に手を伸ばし、そこに立てかけられていた一冊を手にとってページを開く。

そんな時だった。

ドドドドドド……。

「？」

部屋の外から、何やら音が聞こえてきた。

誰かの足音みたいに聞こえるそれは段々大きくなってきており、その音の主がこちらに近付いてきている事を示していた。

お約束とでもいうべきか、案の定、音は自分のいる部屋の前で停止し

「ギンガ！ キャロはいるか！？」

「と、父さん！？」

「くそっ！ あの馬鹿、どこ行きやがった！？」

「ちよっ！ 落ち着いて……。」

部屋に入ってきたのはゲンヤだった。

どうやら相当に慌てていたらしく、いつもは完璧に着こなしている局の制服もよれよれであった。

いまいち事情が飲み込めないギンガはそれを落ち着かせようと頑張ろうとするが、それも空回りに終わってしまう。

結局、騒ぎを聞きつけたナースが注意しに来るまでの間、ギンガは苦労する事になった。

それから数分後……。

「落ち着いた？」

「ああ。悪かったな、格好悪い所見せちまって。……ほら。」

「ありがと、父さん。」

す、と差し出されたコーヒーを一口飲んで気を落ち着かせる。
対面のゲンヤもそれに習うように一口分だけ飲み込み、ほう、と大きなため息をついた。

「それで、何かあったの？ 随分慌てていたみたいだけど……。」

「それは……。」

「さっき、「キャラはいるか」って言ってたよね？ あの子、また何かやらかしたの？」

「……。」

さっきゲンヤが口走った台詞からキャラ関連だろうとギンガは当たりをつける。

ここで「やらかした」、つまり加害者側なのは、彼女の日頃の行いのせいだろう。

ゲンヤの様子はというと、先程までの熱も冷めて落ち着きを取り戻したのか、少なくとも見かけ上は普段の状態に戻っており、頭をかきながら何やら考え込む素振りを見せていた。

「……ちよつとコレ見てみる。」

そう言つて、ゲンヤは胸ポケットから一枚の紙切れを取り出した。その紙切れはつい先日も見たことがあるものだった。

「これ、キャラから？ でも、何で父さんの所に？」

「いいから、早く中身見てみる。」

六課でならともかくとして、キャラがゲンヤにこうやってメッセージを残す理由が分からない。

大体、紙切れを届けるくらいなら、直接会うか通信で済ませてしまえば良い訳だし、態々こんな事をする理由が無い。

（考えていても仕方ない、か。）

それ以上考えても答えが出そうに無かったので、ゲンヤの言葉に従って読み始める。

そこに書かれていたのは

ゲンヤさんへ

突然こんな手紙を受け取って混乱するかとは思いますが、どうしても伝えておきたい事があったのでこうして文にさせてもらいました。

私には、どうしてもゲンヤさん達ナカジマ家の皆さんに謝っておかないといけない事があります。

実は、私は皆に隠していた事がありました。

厳密に言くと、隠していたのではなくて何も聞かれなかったから、なんですけど。

でも、ゲンヤさんがそれについて知りたがっているのを分かっていた上で、それでも知らない振りをしていたので悪いのには変わり無いです。

内容は、8年前の「あの事件」についてです。詳細は同封しているストレージに纏めてあるので、そちらを参照してください。

最後になりましたが、もう一度改めてごめんなさい。そして、今までありがとうございます。

私の保護責任者になってくれたあの日から4年間、他に行く所が無かった私に居場所をくれた事、本当に感謝しています。

それでは、さようなら。

キャロ・シエル

第6話　そして一人いなくなるか？（後書き）

繋ぎの回。次話から最終決戦に入ります。

キ「ちよつと、何ですかコレ!？」

作「？」

キ「この手紙！　特に最後までどう考えても死亡フラグじゃないですか！」

作「いや、ソレ書いたの君でしょうに。」

キ「確かにそうなんですけど……。うつつ、これからどうなるんですか私……。」

作「どうなるんでしょうね？　それでは、また次話で。」

キ「さらっとスルーしないで下さい!!」

つつく

第67話 開宴「ゆりかご決戦」(前書き)

今回急展開です。いや、予想通りかも？

第67話 開宴「ゆりかご決戦」

アインヘリアル。

地上防衛の要として建設された兵器であり、その実態は超長距離射撃が可能な対空型魔力砲である。

ミッドチルダの高地に配置された二基が稼動しており、それらは地上の治安維持に貢献している。

また、新たに三基目も建造中であり、運用許可を申請している最中である（未完成ではあるが、危険性と責任者の首を度外視すれば発射は可能かもしれない）。

新暦75年9月19日、それが襲撃を受けた。

後の世に語られる「ゆりかご事件」、その序章であった。

アインヘリアル一号機

地上防衛のシンボルとしての存在感を示すかのように、地上部に大きく突き出た砲身部分。

しかしそれは今、襲撃者の手によってスクラップへと変わってしまっていた。

根元あたりからは火の手が上がっているが、それを消火しようとする人はいない。

「うつつ……。」

炎がパチパチと燃える音に紛れ、誰とも分からないうめき声があ

がる。

警備を任されていた魔導師のうちの誰かではあるはずだが、何十人と倒れている現状では、それが誰なのかを特定するのは難しい。

そんな中、立っているのはただ一人だけであつた。

水着を思わせるボディースーツに身を包んだ長身の女性。

彼女は目の前にあるアインヘリアルが完全に機能停止したのを確認した後、仲間との通信回線を開いた。

「こちらトーレ、一号機の無力化は完了した。そつちはどうだ？」

アインヘリアル二号機

「はい。トーレお姉さま、こちらクアットロとセツテ。こつちも無事制圧成功です。」

『そつか、残るは3号機だが……。』

「あちらも上手くいったみたいですよ。まあ、3号機は動くかどうかも分からない代物ですから、別に失敗しても良かったんですけど。」

『それでも動かないに越した事は無い。そろそろ帰るぞ。いつまでもこんな所にいても時間の無駄だ。』

「了解です。」

アインヘリアル三号機

「こちら――。三号機の破壊、完了しました。」

『御苦労。なら、すぐにこっちに戻ってきてくれたまえ。』

「……人遣いが荒いですね。」

『先の戦闘の影響でこちらでも人手不足なものでね。優秀な戦力を遊ばせておく余裕は無いんだよ。』

「……了解です。」

ミッド地下 とある施設

『き、貴様、まさかジェイルの！？』

「コードネーム「無限の欲望」、ジェイル・スカリエッティ。扱いきれない力は災いと呼ぶ。貴方達がそれを生み出した日から、すでにこの運命は決まっていたんですよ。」

『馬鹿な……、馬鹿なあああああ！！』

「では、さようなら。」

現状に抗おうとするものの、己の体は既に無く脳髓のみで生きている老人達に、迫り来る爪から逃げる手段など存在しなかった。

管理局最高評議会。

管理局内での最高クラスの権力を誇り影で管理局を操っていた存在がこの日、決して表に出る事の無いままに、影から影へと消えていった。

聖王教会領地下 スカリエッティのアジトにて

「アインヘリアルの一号機から三号機、全ての沈黙を確認しました。」

「

「ふむ、ガジェットは？」

「配置は完了しています。後は浮上後に展開するだけです。」

「そうか……。なら、始めようか。」

「……本当に宜しいのですか？」

「構わんよ。ここはひとつ、派手に行くでしょう。」

「了解しました。「ゆりかご」起動シーケンスに入ります。」

ウーノが手元の端末を操作して、最後の確認ボタンを押す。

ドン！ ドン！ ドン！

遠くの方から聞こえてくるのは爆発音。

予め配置されていた爆弾が爆発して、さほど頑丈ではない岩盤が粉々に吹き飛んでいく。

当初は地雷王の振動波で岩盤を破壊する予定であったが、ルーテシアのリタイアにより作戦変更をせざるを得なくなった。

とはいえ、そこはスカリエッティ。

ナイフを爆弾に変えるなんていうとんでもないISを作ってしまった
う彼が爆発物についての知識を持っていない筈が無い。

計画変更の数時間後には、必要分の爆弾の製造と設置は終わっていた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……。

そして、破壊された岩盤の下から出てくるのは巨大な影。

古代ベルカの遺産にして最強最悪の質量兵器。

「さあ、開宴だー！」

数百年の時を越え、聖王のゆりかが再び空へと舞い上がった。

古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よ
りかの翼が蘇る。

ミッドチルダ上空 アースラ会議室

「以上が現在の状況や。」

「聖王のゆりかご……、か。」

「古代ベルカの負の遺産。しかるべきポイントからなら、その主砲はミッド全域を射程に収めることだって可能。そして、多分それが向こうの目的。」

「そうなたら……。」

「ミッドにいる全ての人が人質、つちゆう訳やな。」

想定していた以上の状況に、会議室は重い空気に包まれる。

ロツサとシャツハからの知らせを待っていた最中に、突如飛び込んできた大事件。

後はアジトに乗り込んで解決、という流れを予想していた面々にとっては、この知らせは寝耳に水であった。

「向こうの戦力は？」

質問したのはなのである。

ゆりかご浮上の際、スカリエッティがミッド全域に流した声明にはゆりかごのコアにされて苦しんでいるヴィヴィオの姿も映っており、なのははその映像から目が離せなかった。

今こそ落ち着いているものの、その胸中では決して消えない炎が灯り続けていた。

「ゆりかご周辺は、航空型を中心に多数のガジェットが展開しています。それに加えて正体不明の魔導師が一名、地上本部に向けて飛行中です。」

「地上の状況は？」

「今のところ地上にガジェットが出現したとの情報は来ていませんが、万一に備えて陸戦魔導師が待機中です。」

「そっか……なら、本命は空だね。ゆりかご周辺の状況は？」

「これを見てください。」

はやての補助として説明役に回っていたグリフィスが端末を操作すると、モニターに映っている映像が切り替わる。そこにはゆりかごと思われる戦艦と、無数の赤い点が表示されていた。

「この赤い点がガジェットの部隊とってください。」

そう言いながら、グリフィスはある一部分を拡大させる。そこには

「ガジェットがない？」

「周辺はガジェットで一杯なのに、ここだけ穴が開いたみたいだね。これって」

「まず間違いなく、罠やろな。」

むしろそう考えない方がおかしい、あまりにもあからさま過ぎる誘いであつた。

「この空域の情報は？」

「ゆりかご側面部には機動兵器の射出口が二門、それと対空砲と思われる砲門が一門確認されています。」

「誘つておいて沈めるにはイマイチ戦力が足らへんな……、先行している部隊の状況は？」

「中に飛び込んだ部隊はありません。ガジェットに包囲殲滅される可能性を考慮したと思われます。」

ふむ、とはやては考える。

戦場は全部で三つ。ゆりかご上空、スカリエッティ一味のアジト、そして正体不明の魔導師。

地上は今の所被害無しみたいやから、いつでも対応できるようにしながらもとりあえずは保留。

肝心のゆりかごやけど、あからさまに誘つてると思われるポイントが一箇所。

その対空火力は思ったより怖くない。でも飛び込むと包囲される危険性。……なら！！

現在の状況と指揮官として培つた今までの経験を元に、はやては自分達の方針を決定した。

「よっしゃ、機動六課、出撃や！！」

ゆりかご外部

「フェイトちゃん、大丈夫かな？」

なのは達六課メンバーは現在、ゆりかごに向けて飛行中である。

「なのはちゃんは心配性やなあ。エリオとアギトも付いてるし、心配あらへんで。」

「そうそう。なのはは自分の事だけ考えてれば良いんだよ。」

「もう、ヴィータちゃん、素直じゃないんだから。」

「うっせー。」

なのはの横を飛んでいるのは、同じくゆりかご組に回されたはやととヴィータ、シャマル。それと

「スバル、大丈夫？」

「大丈夫です。」

「ここまで来た以上、止める気なんて無いけど無理だけはしないでね。状況を良く見て、無理ならすぐに後退すること。いい？」

「はい！」

四人に加えてもう一人、スバルがウィングロードを利用して空を駆けている。

スバルは飛行魔法を使えないが、ウィングロードの使用によって限定的ではあるが空戦を行える。

A M Fによる無効化というリスクから当初は地上で待機する予定であったが、スバルはそれを押し切って参加した。

「もうすぐ目標の空域に入る。みんな、準備はええか？」

「「はい（です）！」」

「うん！」

「ええ！」

はやて達五人はそのまま、ガジェットが配置されていない空域へと突入した。

「今のところは攻撃無しね……。」

「いつ何が来るか分からんから、警戒だけは続けてな。」

「りょーかい。」

あからさまな罠もとれる向こうの戦力の穴に対して、はやてが選んだのは少数精鋭での突入だった。

奇襲か、包囲か、またまた伏兵か。

向こうの思惑がどれであれ、個人レベルで対応できる人材で切り込んで、問題が無ければそこを起点に制空権を確保する。

万一包囲された場合でも、少数なら迅速に撤退できる。その場合は陽動を兼ねて自分たちがガジェットを引き付けて、その間に他の部隊が、手薄になった部分を攻めていけば良い。

そのままゆりかごへ接近していた5人だったが……。

「……む？」

「ヴィータ、どうしたん？」

「あそこ……誰がいる。」

ヴィータが指差した先、前方数キロメートル先に豆粒ほどの点が見える。

小さくて見えないが、おそらくは人影のようだ。
接近するに従って、その姿が大きくなっていき

「……ッ！ 全員防御！！」

「「「「！？」」「」」」

最初に気付いたのははやてだった。

相手の姿がまともに見えるようになるかならないかの所ではやては全員に防御の指示を出し、少し遅れて全員が障壁を展開する。

その直後、五人に光線が降り注いだ。

『伏兵？ やっぱり来た！！』

『みんな、大丈夫か？』

迫り来るレーザーを障壁で防ぎながらも、なのは達は念話で連携を取り合う。

レーザーはさっきの人影から発射されており、それが何条にも分裂してはなのは達に遅いかかる。

なのは達はそれぞれ、それらを防御、あるいは回避して凌いでいく。

『私達に対応して正解ね。CランクやBランクの魔導師だったら今ので落とされてた。』

『そうだね……。はやてちゃん、どうするの？』

レーザーのみでは仕留めきれないと感じたのか、攻撃のパターンが変化する。

新たにばらまき型の直射弾を加えた弾幕はさらに回避困難となり、なのは達は防御メインで凌ぐ。

『作戦に変更無し。なのはちゃん達はそのままゆりかごに。』

だけど、その程度で六課は止まらない。

こうやって空白部分に飛び込んだもう一つの狙い、それはなのは

とヴィータのゆりかご突入。

奇襲か、包囲か、伏兵か。どれが来てもそのプランは変わらない。
現に伏兵がいたが、逆に言えばここさえ突破できれば後はゆりか
ごまで一直線。チャンスなのには変わらなかった。

そして、反撃が始まる。

「レイジングハート!!」

Load cartridge .

「デイベイン・バスター!!」

絶え間なく襲ってくる弾幕の僅かな切れ目に、なのははカートリ
ッジをロードして砲撃を放つ。

カートリッジシステムの利点はその瞬発力と爆発力。
リミッターを解除された今、なのはのランクはS+へと戻ってい
る。

その馬鹿げた魔力から放たれた砲撃は弾幕を容易く消し飛ばしな
がらも突き進んでいく。

ドン!! ドン!! ドン!!

デイベインバスターによって相殺された弾幕がその構成を維持す
る事が出来ずに爆発していく。

一発二発ではなく、何十発もの弾幕が爆発し、辺りは轟音と爆煙
に包まれる。

『ヴィータちゃん!!』

『おう！！ はやて、行ってくる。』

『了解や、こっちは任しときー！！』

当然、そんな隙を逃がすなのは達では無かった。

なのはとヴィータは煙に紛れながら、ゆりかご内部へと突入していく。

途中、煙の中からレーザーが発射されたものの、見えていないのか、それらは一発として当たる事は無かった。

『シャマル、スバル。』

『ええ、分かってるわ。』

『ここから本番、だよ。』

残りの三人は警戒しながらも、敵がいる方向へと接近していく。

爆煙に紛れ、さらには距離の都合から良くは見えなかったが、砲撃が当たった手応えのようなものは感じなかった。まだ仕留めてはいないだろう。

一秒、二秒と経過するにつれ、徐々に煙が晴れていく。

三人はそれぞれの構えを取り、何があっても対応出来るように神経を集中させて

「全く、酷い目に遭いましたよ。」

へ？

「辛うじて避けられたから良いものの……。前の時といい今回と良い、なのはさんは疫病神です。」

何で？

「しかもヴィータさんまで通しちゃうし……。踏んだり蹴ったりです。」

どうして？

「……む、何ですかメガネさん。……え、何で通したのかって？

嫌ですねえ、いくら私でも五人相手なんて無理ですよ。」

なんで、そっち側にいるの？

信じられないものを聞いたスバルは、構えた状態のまま硬直する。でも動揺する心とは裏腹に、心に残っていた冷静な部分が現状を理解しようと動き続ける。

今思えば、最初向こうの攻撃に対応が遅れたのは、魔力反応を一切感じなかったからだ。

けど今、私達は煙の向こうにいる存在に確かな魔力反応を感じている。

魔導師でありながら魔力以外の力も使える存在で、なおかつ飛行能力があつて私達と互角以上に渡り合える存在。

心当たりが一人だけいる。けど

ねえティア、まだ帰ってきてない？

まだよ。まあそのうち帰ってくるわよ。

あの子は今どこかに行ってるだけで、また後でひょっこり戻ってくるに違いない。

だからこんな所にいる訳無い。

「言われなくても分かってますよ。ここは私が受け持ちます。中の事はそっちで何とかしてください。」

そう言い聞かせる私をあざ笑うかのように、煙の向こうから聞き慣れた声が聞こえてきた。

そして煙が晴れる。

そこにいるのは、桃色の魔力光を纏った一人の少女。
右手に建物のミニチュアのようなものを持っている、私の妹分。

「さあ、そろそろ始めましょうか？ 心配しなくても、すぐに終わらせてあげます。」

「……冗談、だよな？」

お願いだから、冗談って言うてよ。

「キヤ……口？」

「スバルさん。運命って……残酷なんですよ？」

死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、幻想の欠片、法の守護者に牙を剥く。

ゆりかご目標ポイント到達まで あと2時間45分。

第67話 開宴「ゆりかご決戦」(後書き)

連載開始時のゆるゆる路線はどこへやら、シリアス全開になって参りました。

読者のみなさんからの反響がどうなるのかドキドキの作者です。

以下、Q & Aです。

Q・今話で書かれなかったメンバーは？ まさか空気化？

A・忘れられている訳ではありません。むしろ……。

Q・六課にはキャラの手紙の情報は来ていない？

A・スバルへの影響を考慮してゲンヤが止めています。

事件に関する資料ですが戦局を左右するものではない為、この事件が終わってから打ち明けるつもりです。

では、また次話で。

6?話どうしよう……。この流れでネタ回とか……。ねえ？

第68話 桃髪の毘沙門天（前書き）

総合PV300万、ユニーク40万突破しました！！

すごく嬉しい反面、クオリティ落とさないようにしなければと恐々する作者です。

今回はキャラ戦その1。BGMは東方妖怪小町（ラストワード曲）でお送りします。

今の所、作者内でのキャラのイメージに一番合う曲がコレです。もし気が向いたら、この曲を聞きながら読んでやってください。

第68話 桃髪の毘沙門天

聖王教会領地下にて

コツ、コツ、と二人分の靴音が、洞窟内に反響する。

近くの壁を見ると等間隔で照明が設置されており、おそらく奥に電力を供給しているのだろうパイプが数本見える。

壊そうか、と思ったけど止めておく。仮にもここは“あの”スクリエッティの研究施設だ。

用心深い彼がそんな事を想定していない訳が無い。予備の供給ラインや非常用の電源くらいは確保しているだろう。

破壊して電力供給を止められる保障も無いし、電力供給が止まってもすぐにはシステムダウンしないかもしれない。それどころか、この事件の後で行われるであろう詳しい調査の際に、真っ暗な洞窟に入る羽目になる可能性だってある。

照明は魔法でどうにかなるかもしれないけど、態々そんな苦勞をする必要は無い。

私とエリオ、それとエリオにユニゾンしているアギトは周囲を警戒しながら、洞窟内を慎重に進んでいく。

「あの、フェイトさん？」

「どうしたの？ 何か見つかった？」

「いえ、そうじゃなくて……、変じゃないですか？」

「……そうだね。」

主語が抜けた言葉の意味を汲み取って肯定を返す。
エリオの言わんとすることは、私もよく分かっている。
それが何かと言うと

「一機も来ないっていうのは確かに妙だね。私達の侵入に気付いていない筈は無いんだけど……。」

そう、スカリエッティのアジトと思わしきこの洞窟に侵入してから、今まで一回も襲撃を受けていないのだ。

「いくらなんでも、ガジェットの一機も出てこないのは絶対変です。ひょっとして、ここじゃないとか？」

「シャッハとアコース査察官が直接調べたみたいだから、それは無いと思うけど……。」

『なら、もう引き払ったんじゃないのか？』

確かに。今の状況を見ると、アギトの推測が一番しっくり来る。スカリエッティを始めとした主要人物が全員ここを放棄してゆりかごに移動している可能性は、十分に有り得る話だ。

でも、まだそうと決まった訳でもない。

誰かが残っているにしろ何も無いにせよ、行ってみないと分からない。

その上で、残っているのなら確保。何も無いのなら、別ルートで侵入しているシャッハとアコース査察官に調査を任せて、私達は何の所の支援に回る。

そのどちらになるにせよ、今出来るのは奥に進む事だけだ。

「だとしても、やる事は変わらない。このまま奥に。行くよ、エリオ、アギト。」

「了解です。」

『おう。』

相変わらず何も出てこない洞窟内を、それでも警戒しながら進んでいく。

物音に反応して構えてみれば、ただ石が落ちてきたただけだったり水の流れる音だったり。

その度に律儀に反応してしまう自分達に苦笑しつつも、警戒のレベルだけは下げないようにキープする。

10分ほど歩いただろうか、終わりは唐突にやってきた。

前方数メートル先に見えるのは金属製の扉。

自然の洞窟を改造していた今までの様子と異なり、扉の周囲は機械の壁面で覆われており、ここから先のエリアが今までとは違う事を示している。

分かりやすく言うと、今までの通路が洞窟50、機械50であったのに対し、ここから先は機械100である。

内部に複数の魔力反応アリ。

「やっと本命……、かな？」

そのようですね。

さて、どうするかと一瞬だけ考える。とはいえ、やる事は決まっている。

「行くよ、エリオ。」

「はい！」

Z a m b e r f o r m .

バルディッシュが変形して柄と鍰になって手に収まり、そこから魔力刃が延びて大剣を形成する。

バルディッシュのサードフォームであるザンバーフォームだ。

私はそれを担ぐように構えて、目の前にある扉へと袈裟掛けに振り下ろす。

キン、と乾いた音とともに切れ目が入る扉を魔力弾で吹き飛ばして、私達は中へと潜入する。

中は開けた空間になっていた。

部屋の端から端まで、目算で25〜30メートル。

天井までも高さもそれと同じくらいあり、ドーム状の構造をしている。

その中で目を引くのは、部屋の奥にある一角。

そこにあるのは巨大なスクリーンと、おそらくはこの施設のメインシステムであろうコンピュータ。それに加え、二人分の人影が見える。

「こちらは時空管理局！ 騒乱罪の疑いで、貴方達を逮捕します！」

その一角に向けて呼びかけながら接近する。

向こうの様子はというと、二人のうち一人は椅子に座って背を向けており、もう一人はその傍に立ち、こちらに視線を向けている。

「ふむ、やっとお出ましか。」

椅子に座っていた方の人影が立ち上がり、こちらに振り返る。

「やあ。こつやって直接会つのは初めてだね、Fの遺産に古代ベルカの融合騎。キミ達の性能は、いつも見させてもらっていたよ。」

科学者や研究者の特徴である白衣を羽織った青年は私たちを視界に入れると、いかにも嬉しそうに言葉を続ける。

でも、私達が律儀にそれを聞く理由なんて無い。

「ジェイル・スカリエッティ、お前を逮捕する。」

バルディッシュを腰溜めに構えていつでも飛び出せるようにし、隣にいるエリオとタイミングを図る。

何故ガジェットが配置されてなかったのかという疑問は残るけど、今優先すべきはスカリエッティとその傍にいる戦闘機人の無力化だ。

そんな時だった。

「ウーノ。」

「はい。」

傍で控えていた戦闘機人がスカリエッティの指示に従い手元の端末のボタンを押す。

一体何を

ガアアアアアアン！！

「「!?!」」

後ろから聞こえてきた轟音に反射的に振り向くと、入り口の部分にシャッターが落ちていた。

周囲には落下の衝撃で埃が舞っているけど、今重要なのはそこじやなくて

（閉じ込められた!?!）

ロックされる可能性を考慮して扉を破壊したのだけど、その先を行かれてしまっていた。

こうなると、迅速にスカリエッティを逮捕したとしても、脱出にかかる時間がかかってしまう。

そして、それだけでは終わらなかった。

『うっうっうっ……。』

「アギト!?!」

『融合が……、あああつ!』

「くっ!」

ぼん、という音とともにエリオのユニゾンが解除されてアギトが飛び出す。

それだけじゃなく、バルディッシュが展開している魔力刃も弱々しくなっていき、その構成を霧散させてしまった。これは

「AMF!」

「ご名答。この施設そのものを利用した高濃度AMFだ。気に入ってもらえたかな？」

正直な所かなりきつい。

AMF内では魔力結合が阻害される為、無理矢理行使しようとするとかかなりの負担になる。

しかも、バルディッシュの魔力刃が霧散された所から見ると、今回のAMFはかなりの高ランクである事が分かる。

『バルディッシュ。』

AMF濃度推定A。Aランク以下の魔法は全て霧散すると考えてください。

『アギトはエリオの後ろに。』

『お、おう。』

バルディッシュの分析を聞きながらアギトを下がらせる。

ユニゾンが弾かれる状況は、こちらの戦力ダウンと魔法無しのユニゾンデバースを生み出す状況を生み出した。

こうなった以上、私達はうかつに突撃できない。

「おや、攻めてこないのかね？」

「……ッ！」

何を白々しい、この状況にしたのはお前じゃないかと逸る感情を押さえながら、今取れる手段とそのリスクをバルディッシュと念話で相談する。

「まあ、それでも構わないのだがね。丁度こちらも面白くなってきている所だし、こっちを見るのも悪くない。」

「何を言って……。」

言い終わるよりも早く、答えが眼前に示される。

ウーノと呼ばれた戦闘機人が端末を操作すると、今まで黒一色だったスクリーンが切り替わり、どこかの映像が大画面で表示される。そこに映っていたのは

「
嘘。」

「フェイトさん！　こんなの嘘です！　嘘に決まっています！」

「嘘じゃないさ。これは歴とした事実だよ。まあ、嘘であって欲しいという感情は理解できなくも無いけどね。」

何か言っているようだけど、頭に入ってこない。

スカリエッティがいる事も忘れて、私は映像を見続ける。

こんなの、何かの間違いだよね？

「キャ………口？」

ゆりかご上空

「宝塔「レイディアントトレジャー」。」

キャロのスペル宣言に従い手に持った建物のミニチュア 宝塔が輝き出し、そこから金色のレーザーが何条も伸びてはやて達に襲い掛かる。

「避けて！」

自分に向かつてきたレーザーを回避したはやての指示に従い、シヤマルとスバルの二人も回避行動を取る。

既に何度か見たせいかレーザーの発射タイミングが掴めてきた故の指示であり、妥当な判断である。

しかし、今回のスペルは少し違っていた。

「バースト。」

「くっくっくっく！」

はやて達に向けて放たれたレーザー。それらが突如破裂して、辺りに弾幕を撒き散らす。

ただの直射砲撃と思われていたそれは、実は凄まじい速度で途切れる事無く連射されていた弾の集まりであった。

なので当然、途中で軌道を弄ってやればバラバラになって撒き散らされる。

「くっ……、でも、これ位なら！」

ドン！ ドン！

一発一発の威力がそう高くない事に気付いたのか、シャルは障壁を展開して弾幕を防ぐ。

それが向こうの狙いだとは気付かずに

「シャル！」

「え？ ……ッ！」

シャルが気付いた時には、目の前にレーザーが迫ってきていた。弾幕を防いだ際にシャルは足を止めてしまい、更には着弾時の爆発で向こうの姿を見失っていた。

これがこのスペルの狙い。

ばら撒き弾で攪乱しつつ動きを鈍らせた所で、本命のレーザーを当てる。

レーザーが回避されたとしても、それを破裂させて弾幕をばら撒く事が出来る。以下ループ。

攻撃が次の攻撃への布石になる様、計算された弾幕であった。

レーザーはそのままシャルへと向かっていき

「キャッ!？」

命中するかと思われた刹那、そこに割り込んだ人影がシャルを突き飛ばした。

突き飛ばされたシャルは大したダメージも無く、すぐに戦線へと復帰する。

「助かったわ。ありがとうね、スバルちゃん。」

「いや！ そん！ なっ！」

助けた方であるスバルはというと、ウィングロードを使って弾幕を避けていた。

機動が見切られやすいという欠点から、ばら撒き弾に対しては素直に防御を、その代わりレーザーだけは喰らわないようにキャロの拳動に注意しつつ回避を続けていた。

シャマルもそれに倣い、レーザーをメインに警戒して弾幕を凌ぎ続ける。

残るはやてはというと

ダダダダダダ！！

キャロに右手を向け、直射型魔力弾「ブリーナク」をマシンガンの如き連射速度で打ち続ける。

ユニゾンしていないために精度は落ちているが、それを数で補うかのように連射する。

はやての回避能力はそこまで高くない。

魔導師ランクを空戦ではなく総合で取得している事からも分かるように、前線で戦うタイプではない。

人並みにはこなせるがあくまでそれだけ。キャロの弾幕を凌ぎ続けるには心許無い。

だから、回避ではなく己の土俵で勝負する。

ドン！ ドン！ ドン！

ブリーナクがキャロの放った弾幕とぶつかり相殺する。

SSランクという馬鹿げた魔力量、それがはやての武器である。

いちいち障壁を張ったり避けたりする位なら、その分を攻撃に回

して向こうの手を鈍らせる。

攻撃は最大の防御、とは良く言ったものである。

「バルムンク！」

弾幕を相殺して出来た僅かな余裕。その隙に、ブリューナクと並行してチャージしていた魔法を発動。するとはやての周囲に8本のダガーが出現し、それぞれ別々の軌道でキャロの方へと飛んでいく。

「よ……つと。」

それに対し、キャロは着弾の瞬間、体を一つ分だけ前に持つて行く事でそれを回避する。

キャロの正面では弾幕相殺による爆発が発生しており、それが一時的な安置を形成していた。

砲撃魔法でなら爆発を突き抜けて攻撃を通すことも可能だろうが、3人の中で砲撃が撃てるのははやてのみ。そのはやてがバルムンクを撃ってきた以上、正面からの砲撃は無い。

キャロの行動は、これらの思考を一瞬で済ませた結果であった。

「光符「アブソリ्यूトジャスティス」。」

今のスペルでは仕留めきれないと判断したのか、キャロは新たなスペルを宣言する。

再び宝塔が輝き、先程までとは違うパターンの弾幕がはやて達3人へと襲いかかる。

それを凌ぎながら、スバルはキャロに呼びかけた。

「キャロ、何でこんな……！」

「こんな、っていうのは勝手にいなくなった事ですか？ それとも、こっち側にいる事ですか？」

宝塔から等間隔に放たれたレーザーが行動を制限し、その隙間からばら撒き型の弾幕が降り注ぐ。

レーザーは一定感覚で発射されており、スバルはその切れ目にレーザーの射線に入ってばら撒き弾幕を避ける。

ばら撒き弾幕を避けきいたら即座に射線から退避。直後、ついさっきまでいた所をレーザーが通る。今のは少し危なかった。どうやら徐々にインターバルが短くなっているようだ。

「別に話す必要なんて無いです。話した所で、受け入れてはもらえないでしょうから。」

「それでも……、話してくれなきゃ分からないよ！」

「……。」

レーザーのインターバルはかなり短くなってきており、今では1秒もかからないで次のレーザーが放たれるようになった。

こうなってしまうては、今までのように切れ目を狙って回避する事はできない。

かといって律儀に防御してしまつては、キャロの思う壺だ。

「マツハキヤリバー！」

C u t b a c k ……

前方にあるウィングロードの軌道が変化して、垂直方向に伸びていく。

そのまま進んでいくと体が90度回転し、真上に向けて移動しながら弾幕を回避する。

でも、それも長くは続かない。

端から見れば壁を走っているようにしか見えない状態がいつまでも続く訳が無い。

事実、マツハキヤリバーとウイングロード間のグリップは無くなり、スバルは無重力状態のふわっとした感覚を味わう事になる。

Drop turn .

とはいえ、それも想定内。

スバルは慌てず、縦方向に180度、横方向に180度回転して落下軌道へと移る。

その視線は、ほぼ真下にいるキャロを真っ直ぐ見据えている。

Load cartridge .

ガショッ！ ガショッ！ と二発分がロードされ、リボルバーナツクルに魔力が充填される。

スバルはそのまま真っ直ぐに突進し、キャロに向けて拳を撃ち出す！

「うおおおおお！！」

「ッ！ 封魔陣！」

スバルの拳とキャロの障壁が拮抗して、ギギギギ、と構成に干渉し合う音が聞こえてくる。

このまま障壁を抜くには、あと少しだけ威力が足りない。

（行ける！）「マッハ」

「靈撃！」

「ッ！！」

カートリッジを追加して障壁を抜こうとしてきたスバルに対し、キヤロは懷から取り出した靈撃札でスバルを吹き飛ばす。

吹き飛ばされたただけなのでダメージの無いスバルは、きりもみ状態で飛んでいる己の体勢を立て直し、再びキヤロに向き直った。

「今のはちょっとびっくりしましたねー。カットバックドロップタイン、まさかマスターしてるとは思いませんでした。」

「誰かさんに鍛えられたからやる？」

「……。」

口を挟んできたはやての一言でキヤロは黙り込む。
実を言うと、あの技はキヤロ発案だったりする。

垂直方向への移動に難があるというウィンググロードの欠点を解消する為、とか言いながら教えてくれた技術だ。

その際片手に漫画本を持っていた事には突っ込まない方がいいだろう。

「最初は、キヤロちゃんがスカリエッティのスパイやないかって思った。」

「そんな！」

「でも、キャラちゃんが最初からそっち側やとするとスバル達を鍛える理由が分からへん。」

つまり、この数日の間で心変わりをするような何かがあったという事になる。それがはやての考えだった。

「教えてくれへんかな？ 何があったのか。」

現在、スバルによってスペルブレイクされたために一時的にだが戦闘は休止している。とはいえ、いつ再開するかも分からない緊張感が辺りに張り詰めていた。

「……はあ、仕方無いですね。」

そしてキャラは指先に霊力弾幕を出しながら、その理由を語り出した。

「別に今に始まった事じゃないですよ、ずっと考えてた事です。はやてさん達なら分かるんじゃないですか？ 管理局で「特別」な人間がどう扱われるのか？」

「それは」

「レアスキル持ちは保護しろ、高ランクは囲い込め、そして皆の役に立て、貴方は特別なんだから、ってね。はやてさん達は自分のやりたい事の方角性とバッチリ合っているから構わないのかもしれないですけど、中にはそうじゃない人もいます。」

「……。」

「レアスキル持ちだって一人の人間です。中にはそんなの関係無しにサラリーマンになりたい人だっているだろうし、何もせずにぐーたらして過ごしたい人だっているんです。それに、もし管理局で働かないで良かったとしても、何らかの形で監視、あるいは研究されます。ですよ、スバルさん？」

「……。」

それに対し、スバルは言い返す事が出来ない。

戦闘機人である自分はその体の維持のために、定期的に診断を受ける身である。もし管理局を辞めてもそれは続くだろう。

それを不快に思った事は無いが、そういった側面がある事くらいは理解している。

「私はそんなの御免です。『特別』であるだけで自分の行動が制限されるなんて絶対嫌です。じゃあ、『特別』な事は悪い事なのか……違いますよね？」

「……せやな。」

それに関してははやても同意する。

自分が夜天の書の主であるからこそ、守護騎士や多くの人に出会う事ができたし、やりたい事を見つけられた。その事が間違っているとは思えない。

「だったら悪いのは何なのか……、ここまで言えば後は分かりますよね？」

「そういう風になるルールを作ってる側、そう言いたいんか？」

「正解です。まあ、そこまで極端な思考は持ってないですけどね。」

良く出来ました、とキャラは説明を続ける。

「管理局の存在が治安維持に貢献してるのは事実ですし、それで助かる命が沢山あるのも理解しています。悲劇を減らすために日夜頑張る姿に、尊敬だっしてしてるんですよ？」

「なら」

「ただ」

どうして、と言おうとしたシャマルを遮り、キャラは話を続ける。
その口の端は僅かに吊り上がり、笑っている様にも見えた。

「私にとっては都合が悪かった。それだけの話なんですよ。」

そう言ってキャラは締めくくる。

別に管理局が憎い訳では無い。ただ利害が衝突してしまっただけ。
静かに暮らしたいキャラに対してその力を役立てたい管理局。

お互いの目的が全くの逆方向である以上、決して両立する事は無い。
い。

「だから、スカリエッティに協力して管理局を潰そうっていうんか？」

「まあ、そんな感じです。向こうも戦力不足だったみたいなので、

「二つ返事で了承してくれましたよ。」

「それで良いって、キャラは本気でそう思ってるんか？」

「仕方無いじゃないですか、それ位しか方法が無いんですから。」

「成る程な、良う分かったわ。」

ふう、と一つ深呼吸しては yet はキャラに向き直る。

シュベルトクロイツと夜天の書を構え直して、再び戦闘モードへと移行した。

「私はそんな認められへん。目的はどうであれ、キャラちゃんがやってる事は間違い無く犯罪や。だから、ここで絶対止める。」

「正解です。理由が何であれ、今の私はテロリストですからね。だから言ったでしょ？ 受け入れてもらえる訳が無い……って!!」

対するキャラも戦闘モードへと戻る。

間合いを取りながら発射された弾幕がはやて達3人を襲うが、3人はそれぞれバラけてそれを凌ぐ。

『シャル、スバル、話は聞いたな？ 何としてもあの子止める！ 取り返しのつかん事になる前に撃墜するで!』

『ええ!』

『ッ! はい!』

キャラの様子から説得は無理と判断したはやては、本格的に撃墜

を決意する。

このまま放置してしまえば、キャラは稀代のテロリストになってしまう。

何よりキャラの為に、そんな事はあってはならない。

それに、はやてには勝算があった。

（さっきの攻撃……、いくらキャラちゃんでも消耗はしてる筈。）

さっきまでの弾幕は凄まじい物であったが、裏を返せばそれだけの力を消費した事になる。

魔力じゃない力を使っているから詳しくは分からないが、決して無尽蔵という訳では無いだろう。

使えばその分減る、それが絶対的な法則である。

そう考えると、さっきまでの会話は消耗した分を回復する為のものだったのかもしれないと感じる。その真偽は置いておくとして、キャラが消耗しているのは事実であった。

このまま消耗戦に持ち込めば

「ふう、そろそろ一本目いきますか。」

「アレは……ッ!!」

「はやてちゃん!？」

キャラの取った行動に対し、その意味に唯一気付く事の出来たはやてがブリューナクを連射する。

キャラはそれをグレイズしながら、今さっき懷から取り出した瓶の中身を一気に口に流し込んで

「ご馳走様、つと。」

数秒もしない内に全部の中身を飲み終えて、空になった瓶をぱいっと投げ捨てる。

くるくると回転しながら落下していく瓶のラベルには「国土無双の薬 完全版」と書いてあった。

「さあ、第二ラウンドといきましょうか？」

薬の効果で全回復したキャラが戦闘続行を宣言する。
戦いは、まだまだ始まったばかりであった。

ゆりかご目標ポイント到達まで、あと2時間20分。

おまけ 今話で出てきた魔法解説

ブリユーナク、バルムンク（Brionac、Balmung）
魔法少女リリカルなのはA'sポータブル（以下なのはポ）ではや

てが使用する魔法で、ブリューナクは小粒のシューターを連射する射撃魔法、バルムンクは魔力で生成した短剣を数本同時に扇状に打ち出す魔法です。

なのポにはチャージショットが存在し、溜ブリューナクでは大玉を一発、溜バルムンクは誘導付きの短剣を8発同時に撃ち出します。今話で使用したのは溜無しブリューナクと溜バルムンクです。

同ゲームではそれぞれのコマンドが別々のボタンに割り振られており、一つを連射しながら残りをチャージする事が可能になります。

カットバックドロップターン（Cut back drop turn）

垂直方向への機動力に難があるというウィングロードの欠点を補うために編み出された、どっちかと言うと魔法というよりは技です。元ネタはサーフィンで空を飛ぶアレ。

意表を突いた垂直移動で相手の視界外に移動しつつ、反転後相手の頭上に強襲する攻防一体の技。

初見殺し要素が高すぎますが、キャラには知られていたので対応されました。

第68話 桃髪の毘沙門天（後書き）

キ「私はまだあと二回の国土を残している。その意味が分かりますか？」

は「な、何だってー!？」

ラスボスが連戦になるのは基本ですよ。はやて達超頑張れ。

Q・ちょ、スバル!?

A・電波を受信しました。ウィングロードで疾走してる姿とギンガ戦で見たアクロバット機動が、某タイプゼロにダブって見えたんです。あ、よく見るとタイプゼロ繋がりもありますねw

さて、次回は6?話ですが……。

ここで三択だ! このシリアスな流れの中でどうするか?

? 自重しないキャラは今までの流れを無視して暴れ出す。

? 無難に番外編で凌ぐ。

? ネタ回など無い。現実是非情である。

答えは次話で。では、また会いましょう。

第6?話 番外「カケラ拾い」(前書き)

タイトルがネタバレなのは仕様です。

第6？話 番外「カケラ拾い」

「という訳で始めました、番外編コーナー「カケラ拾い」。司会進行役を務めさせて頂きます古明地さとります。本日はよろしくお願ひします。ほら、二人も挨拶。」

「アシスタントその1の火焰猫燐よ。ほら、次お空。」

「うにゅ？ えーっと……、アシスタントその2の靈鳥路空よ。（キリッ）」

「という訳で答えは？です。無難すぎて面白みの欠片もありませんね。？や？を予想してくれた方は残念でした。作者からの伝言によると、「期待させて自分からハードル上げるとかMすぎた。今は反省している」との事です。」

「あと、3択のおかげで感想数増えたのも気にしましたよねー。
「本文の内容以外で稼いだからフェアじゃなかった。次からはやるとしても活動報告で」とか。全く、そんなの深く考えなくていいのに真面目というか馬鹿というか……。」

「（一番の理由は、それを指摘されるのが怖いから、なんですけどね。伝言を頼んできたのも予防線を張るためでしょうし。汚いさすが作者きたない）まあ今はそんな事どうだって良いです。ささっと始めてしましましょう。」

「はい！ ……あの、さとり様。」

「どうしたの？」

「結局何するんですか？」

「……。」

「……お燐、お空に台本を渡すようにお願いしておいた筈ですが……。」

「わ、私はちゃんと渡しましたよ!？」

「……嘘はついてないみたいね。となると……。」

「受け取った事を、忘れた？」

「……うにゅ？」

「「はあ……。」」

「仕方ないわね。お空。」

「はい？」

つ台本

「私の分の台本よ。これを見て何とかしなさい。」

「あ、有難うございます!!」

「さとり様は台本無しで大丈夫なんですか？」

「まあ、大体は頭に入っているので何とかなるでしょう（実はあんまり覚えていないんですが、お隣の心が読めるのでどうにでもなりますし）。じゃあ、早速始めましょうか。」

「はい。それじゃあ最初に、この番外編の目的ですね。さとり様、説明お願いします。」

「（少女読心中……）えー……、この番外コーナーでは本編に散らばっているカケラを拾っていく事が主な目的となっています。早い話、フラグですね。（あと、私達が司会役な理由は「本編に出番が無いから」らしいです。まあ出れるだけ他の方よりマシなんです）」

「中には誰からも気付かれる事の無かっただろうフラグもあるとか……。これ、フラグの意味あるんでしょうか？」

「無いですね。だからこそ、ここで爆破させようとしてるのでは？」

「ああ、なるほど。（ほら、次お空の番）」

「（あ、うん、えーっと……。あとそれに加えて、今までに出てきたフラグや設定を解説する、って書いてあります。」

「本編では最終決戦が始まったので、それに備えて設定の整理整頓をしよう、という訳です。あとお空、書いてあるは別に言わなくてもいいのよ？」

「そーなのかい。（えへへ、これ一回言ってみたかったんだい）」

「という事は、ネタバレがありますか？（余計な事考えてるねこれ

は……。まあ良いか、進行に支障が出ないなら。」

「そこまで露骨には無いですが、中には答えも同然のヒントがあったりするかもしれませんね。」

「そうになると、自力で読み解きたい人はこの先を見ない方が良いでしょう？」

「そうね……。では、本編の進行に関係の無い所から先に解説するようにしましょうか。」

「ネタバレゾーンに入る前に警告するって事ですね。お空も理解出来た？」

「……。うにゅ？（ふえ、何か言ってたの？ 台本読んでるうちに眠くなってたから良く分からないや）」

「分かってくれているみたいですね。では、早速一つ目行きましょう。（聞いてないようにしか見えませんがスルーしましょう。こんな所で尺を取れませんし）」

「はい。（良いのかなあ……。）」

1・キャロル妖怪フラグについて

「最初はコレです。」

「本作最大の魔改造ですよネコレ。確か初出は24話でしたっけ？」

「妹紅さんのモノログ「まさかまだ「外」の世界で妖怪が生きるなんて」、ですか？」

「そうです。」

「……ぶぶー。」

「え？」

「ハズレよ。確かに確定したのはその話だけど、フラグ自体はもつと前からありました。」

「え？ そうなんですか？」

「キャラ〓妖怪という前提で、この話を読んでみなさい。」

つ22話

「えーっと……。」

少女読書中（Now reading）……

「さとり様、読み終わりました。」

「で、分かりましたか？」

「正直な所サッパリ……。こうなったら、さとり様に丸投げで何とかしてもらうしか！（はい、何とか。それではさとり様、解説をお

願います！）」

「お隣、逆、逆。」

「……あ”。」

「まあ良いわ、答え合わせと行きましょう。ここです。」

つ「実は、民間協力者としてテロリストやらマフィアやらをボコリ初めてから、微妙に力が上がってる感じがします。そのせいで手加減をミスることが出てきました。」

「えーつと……、答え出されても分からないんですが。（こんなの分かる訳無いでしょおおおおお！！ 馬鹿なの！？ 死ぬの！？）」

「私もそう思います。じゃあ、詳しく解説しますね。」

「あ、はい。」

「この少し後に蓬莱人二人と修行を始めますが、キャラはその時に妖力を自覚します。けど、自覚していないだけで実は普通に使っていたんですね。」

「あー、という事は……。」

「霊力の時と同じで、魔力や霊力に混じってました。威力が上昇している分は、漏れ出た妖力分ですね。微妙にしか上がっていないのは、意識していないからです。本来なら霊、魔、妖力で合計1+1+1=3な所が、1+1+0・1=2・1という風に考えてもらえ

れば良いかと。」

「そーなのかー。（えへへ……。実は私もコレ言って見たかったんだー）」

「そーなのかー。」

「え？」

「え？」

「えっと……。とにかく、22話時点で既にフラグがあったと。さとり様がボケた……。だと!?!」

「です。（私がボケたら收拾つきませんね）」

「それでは次に……。アレ、さとり様ー？」

「どうしたの？」

「台本に「不発弾」っていう項目があるんですけど？」

「ああ、それを忘れてたわね。不発弾というのは、所謂フラグの出来損ないよ。」

「と言うと？」

「そもそも前提となる基礎設定が曖昧なので、フラグの意味を為していない物ね。今回の場合だと……。」

つ11話

「ここにキャラ〃妖怪の不発弾が隠れているので探してみなさい。」

「ええと……、あ、コレはなんとなく分かりました。ここですか？」

つ「人を幸運にする程度の能力は」私自身を対象にすることが出来ませんでした。どうやら「人」っていうのは他人のことらしいです。」

「正解。これはキャラの勘違いで、「因幡」が自分に適用できないのはキャラが妖怪だから、ね。」

「はあ……。」

「唯、「人を幸運にする程度の能力」自体その詳しい効果が分からないのが、コレが不発弾になった原因ね。」

「（台本を見て）これを執筆した時、作者は同時期に読んでいたSで「幸運の能力は人間限定」という記述を見たらしいです。」

「それが二次設定に過ぎないとも知らずに、ね。その後花映塚で（ネタバレ）を見て誤解に気付いたものの時既に遅し。不発弾は投下されてしまっていたと、そういう話よ。」

「何事も自分で確かめないので鵜呑みにするのはいけないという話ですね。」

「そうね。じゃあ、次の項目に行きましょうか。……お隣。」

「はい？」

「お空に毛布持ってきてあげて。」

「……あ、声が聞こえないと思ったたら寝てるし。（結局こつなるんだね。全く、幸せそうな顔して寝てくれちゃって……）」

「……zzz」

2・キャロとナカジマ家の関係

「結論から言いますと「微妙」です。」

「さとり様、ソレ結論になってないです。」

「そう？　なら、順を追って説明するわね。」

「そうして下さいお願いします。」

「まず、スバルさんとギンガさんとの関係だけど……。」

「義姉妹じゃないんですか？」

「……ぶぶー。」

「え？」

「甘い。その認識は表面に捕らわれ過ぎています。」

「と言うと？」

つ呼称

「えーっと、「スバルお姉ちゃん」、「GINGAお姉ちゃん」じゃ？」

「……あ。」

「分かった？」

「はい。良く見るとさん付けだったりお姉ちゃんだったりで安定してないです。（ちなみに私達の口調が安定していないのはキャラが固まっていらないからなんだよ。適当だよな。）」

「そうね。良く見れば分かるんだけど、スバルさんに対して「お姉ちゃん」をつける場合、大抵はからかっている時。GINGAさんに対しては「お姉ちゃん」がデフォルトだけど、慌ててる時とか戦闘時、あと地の文ではさん付けになってる事が多いわね。」

「って事は。」

「ぶっちゃけると家族、という認識はあんまり無いわ。」

「うわぁ……。」

「ただ誤解しないで欲しいのは、だからと言って大切に思っていない、という事ではないという事ね。あくまで「家族」という括りでは無いだけ。」

「かと言って他人や友人とも違う。だから微妙、という事ですか。」

「正解。あとゲンヤって人についても一緒ね。お父さんって言うて甘えたりする事があるけど、あくまでスキシップの一環であり、そういう認識は無いわ。保護責任者になってくれてた事には感謝してる（18話、66話参照）から、恩人、っていうのが正解ね。」

「うーん、何か複雑なんですね。いつそ完全にナカジマ家に入った方が色々楽な気がします。」

「人の心は複雑な分、色々余計な事を考えてしまう物よ。貴方達と違ってね。」

「それ、褒めてますか？」

「もちろん。素直で正直な性格の方が、最終的には得ですから。」

3・藍の考察

「Caution! Caution! Caution! ……
zzz」

「うわ、お空!？」

「起きて!? ……いえ、まだ寝てますね。」

「なんつー寝言ですか……。」

「とにかく、警告です。この先の考察はかなりのヒントになるので、自力で読み解きたい方はここでお戻りください。」

「世の中知らない方が良い事も多いですからね。お兄（姉）さん、引き返すなら今のうちだよ?」

.....。

.....。

.....。

「ん？ 残る事にしたの？ お兄（姉）さんも物好きだね!」

「自分で決めたのならこちらからは何も言いません。では、早速解説に入りましょうか。題材はコレです。」

つ58話

「えーっと……。ああ、健康診断がきっかけで妖怪って気付く回ですね。」

「そう。この後半部分に藍のパートがあるんだけど、そこで色々漏らしてます。」

「確かに。でも誰も見ていないからって喋りすぎじゃないですか？」

「ストレスが溜まってるのかもね。表面には全く出さないけど、意外と溜まってるのかも。」

「そうなんですか？」

「さあ？ 私は彼女じゃないから分かりません。」

「そーなのかー。（うわあ、適当だ。そんなんの良いのかな？）」

「そうなのよ。それに、そこは大して重要じゃないからどっちだって良いんです。それじゃあ、該当部分のセリフを抜き出しながら解説に入ります。」

つ「にしても、マスター、いや、あの子が気付いていないのは以外だったな。てっきり自覚しているものだとばかり思っていたが。」

「キャラが自分の種族について把握していなかった事に対しての台詞です。」

「それに気付いていなかったこの人もこの人ですよ。それでさと

り様、どこがポイントなんですか？」

「……」

つ【マスター、いや、あの子が】

「えーっと……。 (冷静になって推理するとコレは……、うわ、答え辛い。)」

「さらに、後の文からもう一つ。」

つ【それが私と主の間で交わされた命令。】

「……何となく分かったんですけど、コレ言ってる良いんですか？」

「良いわ。既に警告は済ませてますから。」

「なら……。 えっと…… 「実は、藍はキャラの事を主人とっていない」、ですか？」

「正解よ。」

「うわあ……。」

「読めば分かるけど、藍は「主」の命令でキャラに付いてます。「主」っていうのは……、まあ言わなくて良いでしょう。元からバレバレですし。」

「パープルな人ですね。」

「パープルな人です。」

「何だかキャラちゃんが哀れに見えてきました……。」

「ああ、誤解してはいけないわ。」

「？」

「ここで言いたいのは、あくまで「主という括りではない」というだけ。これを見て。」

つ【「だけどそれ（命令）を抜きにしても、私はこの子を守るつもりだ。」】

「大事に思っているのは間違い無いの。どっちかというと、主と従者というより子供と保護者ね。」

「成る程。（どっちが保護者なのかは、言わない方が華なんでしょうね）」

「です。それでは次の話題に」

「あ、ちょっと待ってくださいさとり様。」

「どうしました？」

「ちょっと気になったんですが……。」

つ13話 藍「私のデータにある情報はここまでです。製作者に

ついでの情報も探してみたのですが、残念ながら存在しませんでした。」

「これは」

「嘘よ。」

「うわあ、やっぱり……。」

つ43話 輝夜「貴方、夢幻珠の作成に一枚噛んでるでしょ？」

「ここで語られているように、「主」と「製作者」はイコール。なのに知らない訳有る筈が無いですね。」

「という事は……。」

「おそらく「主」が口止めしているわね。その理由までは分かりませんが。」

「成る程……。」

「他に聞きたい事は残ってない？ …… ああ、無いみたいね。じゃあ次行きましょうか。」

つ【この調子だと、能力についても気付いていなさそうだな。】

つ【もし気付いていたのなら積極的に使っているだろうし、私の負担も減っている。】

つ【もし下手に制御しようとして暴走させてしまった場合、あの子の命自体が危うくなってしまう。無意識の状態で安定している以上、下手に干渉するのは下策である。】

「これは……能力フラグですか？」

「その通りよ。でも、ただそれだけじゃなくて、能力の内容についても少しは出ているわね。」

「サッパリ分らないので解説をお願いします。」

「お願いされました。では、まずはここ。」

つ【もし気付いていたのなら積極的に使っているだろうし、私の負担も減っている。】

「ここで大切なのは、藍の役割。お燐、戦闘における藍の役割は？」

「えーっと……。」

つ？ 話【藍が外で手綱を握り、ユニゾンを安定させているという訳です。】

「50点。」

「え？」

「それだけじゃ足りないわ。あとコレとコレも必要ね。」

つ13話

「この話での夢幻珠への解説をプラスすると「藍が外で手綱を握り、分霊体との融合を安定させている」、となります。」

「ふむふむ……。」

「さらに「レ」。」

つ58話【戦闘中の能力行使は私がサポートする】

「ここから読み取れるのは、あくまでメインはキャラという事。あとこれは現時点では裏設定だけど、夢幻珠がキャラにしか扱えない理由でもあるわ。では、ここに注目。」

つ【私の負担も減っている。】

「これを素直に考えると、「キャラが能力を使うと藍の負担が軽減される。」となります。お燐、以上の内容を一文でまとめてみなさい。」

「えっと、（少女思考中……）『キャラが能力を使うと分霊体との融合が安定する』……！？」

「正解です。」

「うわあ……。これネタバレじゃないですか？」

「そんな事は無いわ。あくまで、現時点の手がかりのみで辿り着けるレベルだから。」

「と言つと？」

「あくまでこれは能力の一端。「魂と融合する程度の能力」なんて

いう安直な正解ではないわ。」

「そうなんですか？（そう思ってた……）」

「その通り。他にも手がかりがあるから、そっちの説明に入るわね。」

つ【あの子の能力は非常にデリケートだ。もし下手に制御しようとして暴走させてしまった場合、あの子の命自体が危うくなってしまう。無意識の状態で安定している以上、下手に干渉するのは下策である。】

「以上から読み取れるのは3つね。お隣。」

「はい！ えっと、「デリケートな能力」「暴走させると命の危険」「下手に干渉しない方が良い」です！（これは正解だよねー！！）」

「66点。いつこ間違えましたね。」

「にゃ！？ 嘘、どこですか！？」

「最後の一つですが、これはダミーです。というよりはデコイですね、本命から気を逸らすための。」

「むう……。じゃあ、正解は？」

「1つちよ。」

つ「無意識の状態で安定している」

「……さっぱりなので解説をお願いします。」

「ええ。ここで重要なのは「無意識で安定」という言葉と二つ目の「暴走すると命の危険」の二つ。お燐、これらをさっきの要領で合わせるとうなりますか？」

「えっと……「無意識状態でも不安定になると命の危険」、ですか？」

「よろしい。つまり、「ミスると意識無意識関係なく命の危険がある能力」という事になります。……変だと思いませんか？」

「？」

「危ないのなら能力を切れば良い。そう思わない？」

「……あ、確かに。」

「ここから、能力のON/OFFが出来ないという事が分かります。」

「常時発動タイプという事ですか？」

「その通り。以上が藍の会話から分かる情報よ。お燐、今までのまとめを。」

「は、はい。えと……。」

・藍はキャラの事を主人とってない（大事ではある。主人と従者ではなく子供と保護者）

・キヤロが能力を使うと分霊体との融合が安定する（しかし、「魂と融合する程度の能力」ではない）

・能力は常時発動していて、暴走すると命の危険がある。

「お疲れ様。それじゃあ、次、行きましょうか。」

「はい！ ……アレ？」

「……ああ、台本終わりですね。それじゃあ、後は付属の資料の内容だけ言って終わらせますか。」

「そんな適当で良いんですか？」

「良いのよ。これを説明したら本当にネタバレになるから。それじゃあお願い。」

「はい！ えと……「キヤロの能力についてのヒント」、ええと……」

- ・東方Projectにおける転生の設定との矛盾。
- ・妖怪という種族の生態。
- ・魂と肉体の関係。
- ・？話の内容。

「以上ね。これ以上詳しくは言えないから、私達の仕事も終わりね。お隣、お空を起こして。最後に挨拶してからお茶にするわよ。」

「はい。ほら、お空、起きて。」

「うー……にゅ？ アレ？」

「という訳でこれを持ちまして番外編コーナー「カケラ拾い」は終了です。皆さん、また会いましょう!」

「さようなら。(と言っても、もう出番無いですけどね。)

「うーんと……、またね。(キリッ」

お しま い

「ん？ あ、コレお空の台本だ。こんな所に……。あ、本の間から紙が。なになに……。」

『この小話はキャラが保護される前の話で、本編において中々に重要な意味があります。ですが、どうしても入れるタイミングに恵まれずにお蔵入りになった、そういう経緯があります。丁度良い機会なので、ここで公開しちゃってください。』

「……うん。私は何も見なかった、そうだよね。」

「あ、お兄（姉）さん丁度良い所に。え、今帰り？ 丁度良かった。この本だけどさ、こっそり持ち帰って処分してくれないかな？ あ、あと中身は読んでも良いけど、さとり様には絶対バレないようにお願いね。」

番外編 とつつあんの頑張る理由

「うつつ、はやてえ〜……。」「

「ああはいはい、今日はどうしたんや？」「

「えっとね、今日仕事でキャロに会ったんだけど、また。」「

「逃げられたんか？」「

「……うん。」「

「フェイトちゃんも飽きひんなあ……。」「

はやてとフェイトは現在、ミッドにある料理店に来ていた。

最近は珍しくも無くなったフェイトの方からの誘いを受けて、はやてはリインと一緒に料理に口をつけながら、フェイトの話を聞いていた。

ちなみに、「桃髪の子鬼」の出現とフェイトからの誘いが増加した時期は一致しているのだが、詳しい因果関係は不明という事になっている。

そして今日も今日とて、はやてはフェイトの愚痴を聞く事になった。

二次被害的な意味では、はやてもこの頃からキャロの被害者だったのだ。

「それでね……、結界破壊したと思ったらもうその場にはいなくてね……。」

「うーん……転移魔法とかかなあ？」

「なのかなあ？ 予兆も痕跡も全然無いんだけど……。」

「なにそのホラー。」

最近恒例となったフェイトの話を聞くはやて。

最近の話題は主にキャロについて。はやてとしては、フェイトとの接点が増えるのは有り難いけど愚痴はあんまり聞きたくない。そんな状態であった。

しばらく二人で話していたのだが、ふと、食事に専念していたリインが会話に参加してきた。

「あの、フェイトさん。」

「ん？ どうしたの、リイン？」

「ちょっと気になったんですけど、フェイトさんはどうしてそこま
で、キャロちゃんを捕まえようと頑張ってるんですか？」

「え？ 可笑しい、かな？」

「何となく、ですけど。はやてちゃんは どう思います？」

「うーん、そうかも。」

「はやてまで!？」

「うーん、何と云うか……。聞いた感じやと、キャロちゃんってあ
んまり保護欲そそるタイプや無いやろ？ 確かに犯罪起こしてるな
ら止めんとアカンけど、そこまで一生懸命になるかなあって。」

常に飄々としながら仕事をこなして自分の我儘を通し、Sランク
魔導師からも逃げ切つてみせる。

フェイトから聞いた話を元にはやてが脳内にイメージしたキャロ
は、おおよそ保護とは正反対の人物像になっていた。

「なんかその子、一人でもたくましく生きていけそうやし。執務官
として捕まえる必要があるのは確かやけど、それはあくまでお仕事
としてやん？ フェイトちゃんが子供を助けてるのって、お仕事つ
てだけや無いやろ？」

人間誰しも感情がある。感情がある以上私情もあるのは確かで、
フェイトの場合、それは「自分と似た境遇の子供を減らす」事だ。

執務官の道を選んだのもそれが大きい。

その点で言うと、日々たくましく生きているキャラはその対象から外れる。

仕事として捕まえないといけない理由はあるが、モチベーションが上がる理由がはやてには思い付かなかった。

「うーん、何でだろ？」

「何で、って私に聞かれても分かる訳ないやん。」

「今まで考えた事無かったから。」

うーん、と顎に手を乗せながら唸っているフェイトは周囲の視線を集めている事に全く気づいていない。

一見完璧なのに、偶に隙がある所が男性局員からの人気の秘密となっているのだが、当然ながらその事にも気付いていない。

「あ、アレ、かな？」

そう言うと、フェイトは持っていた鞆から何かを取り出して机の上に置いた。

どうやらメモ帳を千切った紙切れらしいが……。

私にはすっかり構ってないで、“いい人”でも探したらどうですか？
小さな子供ばかり構っているせいで、「行き遅れ」とか「未婚の母」とか言われるようになってでも知りませんよ？

「えっと、コレは？」

「あの子の書き置きシリーズ。取り逃がした現場にいつも落ちてる

んだ。」

最初に見たものの他に「あばよ、とつつあ〜ん!!」とか（これを見たはやては「フェイトのとつつあん……ププ」と笑いを堪えた）「真・ソニックフォーム、確かに撮影しました。写真はばら撒いておくのでご安心を」（結局そんな事件は無かったらしい）とか、兎に角フェイトを挑発するものばかりであった。

「成る程なあ、何となく分かったわ。そりゃ、ここまで言われたら逮捕したくもなるわなあ。」

自分も同じ目に遭ったらそうする。そう思っただけの発言だったが

「うーん、それとも少し違うかも。」

「ほえ？　どういう事ですか？」

「そりゃ、最初は怒ったけど、何であの子がこんな事してるのか想像してみたら、ね。」

「何で、って、挑発して冷静さを失わせるためやないんか？」

「そうかもね。でも、それは犯罪者にとって、「執務官に狙われ続けるデメリット」と引き換えにしてまで必要なのかな、って。」

「……ああ、そういう事。」

「……うーん、どういう事なんですか？」

「要するにやな。キャラちゃんが態々こんな事してるのは「構って

欲しいから」「やないかつちゅうことや。やる、フェイトちゃん？」

「うん。」

フェイトとはやてがしたのは発想の転換。

普通に考えると、犯罪者にとってフェイトに狙われるのはデメリットにしかない。

そこで、逆に「フェイトに狙われるのがメリットになる状況」を考えてみた結果である。

「これは私の想像でしかないんだけど、キャラちゃん、心の奥底では捕まりたいって思ってるんじゃないかな、って。じゃないと、態々自分が不利になる事する訳が無いから。」

それが、フェイトがキャラを追いつける理由。

助けを求められているのなら、フェイトは迷う事は無い。

むしろ表に見えない分余計に過去の自分とダブってしまい、モチベーションが上昇していた。

「でも、聞いた感じやとキャラちゃんは自覚してへんやろなあ。」

「多分。あの子は頭が良いから、自覚したら止めてる筈だし。」

「フェイトちゃんも大変やなあ……。まあ、頑張りい、私も応援してるさかい。」

「リインも応援するですよー！」

「ん。ありがと、はやて、リイン。はやてやリインの事も応援してるよ。」

「ほんなら、次は私の話でも聞いてもらおか。」

「うん、いいよ。」

「えつとな、」

キャロの話題はここで一端打ち切り。

3人はそれから美味しい食事を肴に、会話に花を咲かせていった。

ここからしばらく後、はやては実際にキャロと会い、それをきっかけに色々と振り回される事になる。その過程で、はやてのキャロに対するイメージは再び変化する。

新暦75年現在、日々苦勞を背負わされている彼女の頭からは、この日話した内容はすっかり記憶の片隅に追いやられ、完全に忘却されていた。

第6?話 番外「カケラ拾い」(後書き)

正解は?でした。

?を望む声が一番大きかったのですが、さすがにハードルが高すぎました。

皆、釣り針って分かって喰いにきたでしょおおおお……orz

その代わりと言っては何ですが、?内に解説やQ&A、閑話、ネタ等色々な要素を突っ込んでみました。

突っ込みすぎて闇鍋になっているのは否定しません。

次話から本編に戻ります。それでは、また。

第70話 因果「バタフライエフェクト」(前書き)

最近の話と比べると文字数少ないです。

まあ、あくまで最近と比べるとであって、平均くらいはあるんですが。

第70話 因果「バタフライエフェクト」

ゆりかご周辺部

「何か向こうは大変な事になってるみてえだな。」

ウィンドウに映る映像を見ながらヴァイスが呟く。

主戦場から少しだけ離れたポイントで、彼の操縦するヘリが空を飛んでいた。

六課襲撃の際、幸運にも難を逃れたヘリは六課の機能移転の際にアースラへと積み込まれ、今こうして出撃の機会を得ていた。

ヘリの内部にはカートリッジと救急セットが積み込まれており、空中戦における補給ポイントの機能を担っていた。

「ヴァイス陸曹、機首を右方向に。独り言言っていないで仕事してください！！」

「はいはい。可愛げがねえなあ、っと！！」

ヴァイスの呟きに口を挟んだのはティアナである。

今回の決戦にあたり、飛行手段を持たない彼女は、当初は地上に残る事になっていた。

しかし、いくら時間が経っても地上にガジェットが出現する兆候が現れないことから作戦は変更。

補給の要であるヘリの護衛として、こうして乗り込むこととなった。

「ランスター、二時の方向から一機、それと四時の方向から二機接

近中だ。」

「分かってます！！ クロスファイヤー・シュート！！」

ヘリの右側のハッチが開かれ、ガジェットが三機、ティアナの視界に入ってくる。

それらが射程内に入ると同時に誘導弾を発射。誘導弾は一つとして外れる事なくガジェットに吸い込まれていき、ヘリに接近してきたガジェットは撃ち落とされた

「おいおい、少し張り切りすぎじゃねえか？ そんなんじゃ保たねえぞ。」

「そんな事、ありません。」

「……おい、ランスター。」

「何ですか？」

「クロスミラージュ、左右逆に持ってるぞ。」

「ッ、嘘！？」

「嘘だよ。大体、逆も何も無いだろう、それ。」

「……。」

キャラがスカリエツティ側に付いたという情報は、映像付きでティアナの所にも伝えられていた。

そんなの関係無いと一蹴したティアナであったが、どうにも気に

なっているらしく精神的な余裕が失われてきている。

そうでもなければ、ヴァイスからの引っ掛けに掛かったりなどしない。

「気になるのは分かるけどよ。向こうは向こうに任せて、今はこっちに集中してくれや。」

「気になんて、してません。」

「そうか？ すまねえ、余計なお世話だったみてえだな。」

「……。」

「次、八時と十時から二機ずつ。ハッチ空けるぞ。」

ヘリのリーダーが感知した情報を元に、ヴァイスはヘリを操作して左側のハッチを開放する。

先程と同様にヘリに接近してきたガジェットは、さっきと同じようにティアナの射撃で打ち抜かれ、墜落していった。

「お見事。上手くなってるじゃねえか。」

「……ヴァイス陸曹。」

「ん、何だ？」

「心配じゃ、ないんですか？」

「……。」

「……あ、すいません、変な事言っちゃって。気にしないで」

「そりゃあ、心配さ。」

「え？」

「どうしてそんな事になっているのか、何が起きているのか、心配したらキリがねえわな。特に今回の場合、味方だと思ってた奴が敵に回ってるんだからな。操られてるのか、最初から向こう側だったのか。どんな理由にしろ、仲間同士で戦ってるんだ。心配にならねえ訳が無え。」

「……。」

「ランスターの考えてる事当てやろうか？ 『出来るなら今すぐ駆けつけたい。飛行魔法が使えるればあっちに参加できたのに』……違うか？」

「そんな事、思っていないです。」

「そうか？ また余計なお世話だったみてえだな。……次、三時と九時から一機ずつ。……いちいち開閉するのは面倒だな。ランスタ―！ これからずっと開けっ放しにするけど落ちるんじゃないぞー！」

「……。はい！！」

左右のハッチが開かれて風通しの良くなった機内から、ティアナは三度弾丸を放つ。

左右に二発、計四発の弾丸がガジェットボディを貫通し、その

機能を停止させた。

「……無責任な言い方に聞こえるかもしれないけどよ、あつちはあつちで何とかしてもらうしか無えんだ。ここで俺たちが悩んだ所で何にもならねえ。」

「本当に無責任に聞こえますね。」

「ちよつと無責任な位で良いんだよ。人間、一人で出来る事なんてたかが知れてるんだ。余計な荷物まで背負って元から背負っていた物ごと潰れたら、笑い話にもなんねえしな。」

「分かりました分かりました。要するに、今出来ることに集中しろってことでしょう。」

「分かつてるじゃねえか。出来ない事は仲間に任せれば良い。どうしても自分でやらないといけないのなら、手伝ってもらってやれば良い。その代わり、自分で出来る事は確実にこなす。助けを求められたのなら出来る範囲内で助ける。お前みたいなタイプは、その位の心構えで丁度良いんだよ。」

「はいはい。つと、ヴァリアブル・シユート!!」

ヴァイスの言ってる事はティアナにも理解できた。

要するに「変な事に悩んでいるせいで俺様のへりを落としたら承知しねえぞ」と言ってるのだ、この男は。

新たに来たガジェットに対して、再び射撃を浴びせかける。

軽口を叩きながら射撃したせいか、さっきまであった動きの硬さは取れていた。

ゆりかご内部通路

「アイゼン!!」

「レイジングハート!!」

Schwalbefliegen.

Accel shooter.

ドン! ドン! ドン!

ヴィータから四発、なのはから六発。計十発の魔力弾が前方のガジェット向けて襲い掛かり、その機体を破壊する。

機能停止になったガジェットの上を、二人は飛行しながら通過していった。

新たにガジェットの反応あり。通路の先におそらく十機、待ち伏せが予想されます。

「うん。……シュート!!」

向こうに先んずる形で、まずはなのはが先制する。

先程よりも多い計十二発分の誘導弾を、待ち伏せが予想されるポイントに撃ち込む。

誘導弾は通路を曲がった先にいるガジェットに襲い掛かり、なのは達の耳に爆音が聞こえてきた。

全ターゲットのうち半数を撃破。残りは推定六機です。

「ヴィータちゃん、残りお願い!!」

「任せろ!!」

ガショッ! という音と共に、アイゼンにカートリッジがロードされ、ラケーテンフォルムに変化する。後々の事を考えてか、ロードは一回のみである。

「ラケーテン・ハンマー!!」

曲がり角に差し掛かった辺りで急加速。そのままガジェットに突っ込んでいき、残りの機体を鉄屑に変えた。

「お疲れ様、ヴィータちゃん。」

「ふう……つたく、こんなにうじゃうじゃいたんじゃ鬱陶しくて仕方がねえ。」

周辺にガジェットがないのを確認してから、ヴィータはふう、とため息をついた。

体力、魔力ともにまだまだ余裕があるが、今までの状況を考えるため息の一つもつきたくなるものだ。

「予想以上に数が多いね。予定では、この辺りで別行動なんだけど……。レイジングハート?」

その通りです。サーチの結果、動力炉と中枢部の位置は正反対と

判明しました、ここからは完全に別行動になります。

「とは言っても、こうも敵が多いとなあ。何とかならねーのか？」

固まって行動した場合、おそらく間に合いません。

「だよなあ……。」

ヴィータが心配しているのは、単独行動の危険性である。

当初の予定では、各々別行動で目的を果たすつもりだった。

しかし予想に反してガジェットの出現数が多く、二人で戦っていた時でさえ、その物量には閉口していた。

とは言つものの、なのは達に選択肢は無い。今更なのだ。

だからと言って確実に無茶をするであろうなのはを心配しないほど、ヴィータは薄情ではなかった。

「……なのは、言っても無駄だろうから無茶するなとは言わねーけど、ぜってー帰ってこいよ。」

「うん、約束。ヴィータちゃんもね。」

「おう。じゃあ、行ってくる。」

「うん。」

なのはに背を向けたヴィータは、そのまま通路の奥に向けて飛んでいく。

曲がり角に入りその姿が見えなくなるまで見送ってから、なのはは180度逆の方向を見据えて表情を引き締めた。

「それじゃ、私達も行くのか。」

All right.

「と、その前に……。レイジングハート。」

W・A・S

「これで良し。……待っててね、ヴィヴィオ。」

なのはと別れたヴィータは現在、動力炉に向けて移動していた。動力炉に向けての道中何十体ものガジェットに襲われたが、それらを悉く返り討ちにした。

ある時は誘導弾、またある時はアイゼンでガジェットを潰している。

「これで!!」

そしてまた一機、新たにスクラップの仲間入りが増えた。周囲にいたガジェットを片付け終わり、荒れた息を整える。

「あと、もうちょっとだ。」

サーチ結果によると、動力炉までは残り数百メートル。妨害が無ければ、一息で辿り着ける計算になる。

「カートリッジも、まだある。」

この先に待っている動力炉の破壊に備え、カートリッジの残りをチェックする。

アイゼンに入っている三発と手元にある三発の計六発。自分自身の残り魔力は六割、七割程度。

動力炉がどの程度の耐久度なのかは分からないが、これだけ残っていれば何とかなる。

状態確認は済ませた、このままさつさと動力炉に行ってしまおう。そう考えた時であった。

「……チツ!？」

前方で何か光ったと思った直後、ヴィータの方に何かが飛来してくる。

ヴィータはすぐに気持ちを切り替え、再び意識を戦闘モードに戻す。

飛来して来ているのはおそらく刃物で数は1、長さはアイゼンより少し短い程度。

それが高速回転しながら、ヴィータ目がけて飛んでくる。

何となく嫌な感じがしたヴィータは、とりあえず回避せずに障壁を張って様子を見る。

障壁に当たった刃はギギギギギ、と音を立てながら回転を続けるが、突如その軌道を変えて来た方向へと戻っていく。

とりあえず奇襲は防げた事に安心するヴィータであったが、その瞳はまっすぐ前を見据えてきた。

「防がれましたか。やはり、簡単には行かないようですね。」

「誰だ、てめえ……。」

通路の向こうから、コツ、コツと足音が聞こえ、声の主が姿を現す。

その腕の部分には先程飛んできた刃が取り付けられていた。

「ナンバー？、セツテ。ここを防衛するように命令されています。それと……。」

その言葉に続くように、新たに別の足音が聞こえてくる。

こちらはセツテに比べると幾分か機械じみており、しかも複数聞こえてくる。

「ガジェット？型も相手です。」

人型を思わせるほっそりとしたボディに鋭い刃が取り付けられた形状のガジェット？型。

それらが十数機、セインと共に歩いてきていた。

しかし、ヴィータにとってはそれ所ではなかった。

「アイツは……。」

ヴィータはガジェット？型の容姿に見覚えがあった。

忘れもしない、8年前になのはが生死を彷徨ったあの事件。

その時に戦った戦闘機械と全く変らない機体が、今目の前に存在していた。

「そうか、そういう事が……。」

ヴィータの中で点と点が繋がって線になる。こんなの推理するまでも無い問題だ。

なのはを襲ったのはこいつら。それだけ分ければ、後はなんだつて良い。

「アイゼン！！ カートリッジロード！！」

J a g w o h l .

カートリッジを一発ロードし、ヴィータは突進していく。
ここに、ヴィータ対セツテ&ガジェット？型十数機という戦いが幕を開けた。

「アクセル・シュート！！」

ヴィータと別れた後、なのはの側にもガジェットの群れが立ち上がった。

主に？型で構成されたそれらを蹴散らしながら、なのはは先に進んでいく。

強さ自体は大した事が無いものの、とにかく数が多い。

撃墜数が五十を超えた辺りから、なのはは数えるのを止めていた。

「いちいち相手してられない！！ レイジングハート！！」

マスター、今ので二百機です。消耗が心配されてきていますので、ACSは控えてください。

「うつ……、分かったよ。……ありがと。」

Don't worry.

レイジングハートからの突っ込みに、なのはは血が昇りかけていた頭を冷やす。

レイジングハートの言う通り、誘導弾で対処できる相手に大技を使う必要は無い。

今まで自覚していなかっただけで、なのはは相当焦っていたようだ。

マスター、この先に大きな空間があります。恐らく敵の待ち伏せが予想されます。

「分かった。」

レイジングハートと会話しながら、マルチタスクを駆使して誘導弾をガジェットに当てていく。

進路上にいたガジェットを悉く撃破したなのはは、勢いのままその先にある部屋に入ってしまった。

「ここは……？」

なのはが入った空間は、レイジングハートからの情報通りであった。

広さは縦横高さ30メートルといった所だろうか？

決して狭くはないが空戦をやるには窮屈に感じる、そんな広さであった。

そして、その部屋の中央にいた人影が、なのはに向けて声を掛けてきた。

「誰が来るのかと思えば……、お前か、エース・オブ・エース。」

「貴方は……?」

「ナンバー?、トーレ。ドクターの悲願のため、お前はここで死んでもらう。」

「そんな事させない!! 私は絶対、ヴィヴィオを助け出してみせるんだから!!」

その通りです。

なのははレイジングハートを握り直し、自分の周りに複数のシューターを待機させる。

トーレは腕の部分から魔力刃を出し、IS発動のタイミングを伺う。

エース・オブ・エースと最強の戦闘機人との戦いが、今ここに始まった。

第70話 因果「バタフライエフェクト」(後書き)

Q・地上やスカさんのアジトに配置される予定だったガジェットは？

A・全部ゆりかご内です。

Q・残りの前線タイプのナンバーズは？

A・二人ともゆりかご内です。

Q・明らかに原作よりも敵が減っているのに一部で難易度が上昇している不思議。どうしてこうなった？

A・原作でスカさんが負けた原因の一つが、余裕ぶっこいて戦力を分散させた事でした。ゆりかご浮上でできれば勝ちなのに、空も飛ばない陸戦魔導師を相手にする意味なんて無いです。最も、スカさんの目的の一つに戦闘機人の実力証明があったので、全員に戦場を用意した結果でもあるんですが。

しかし、こちらではスカさんサイドは虫の息。そんな余裕はありません。

ゆりかご防衛に専念した結果こうなっていました。

では、また次話で。

第71話 不屈「倒れ逝くその時まで」(前書き)

誰得回その2。

今まで空気だった人が主役です。

第71話 不屈「倒れ逝くその時まで」

「はあ、はあ、はあ……。」

自らのデバイスを杖代わりにしながら、少女は息を整える。

身に纏っているバリアジャケットは所々切れており、ここであった戦いの激しさを物語っている。

少女の周囲にあるのは大量の残骸。ほんの数分前までガジェット？型と呼ばれていたもの、その成れの果てである。

あるものは、脳天からハンマーを叩きつけられて潰された。

あるものは、飛んできた鉄球でボディに風穴を開けられた。

そして全体のうちの半分以上は、巨大化したハンマーでまとめて数十体ジャンクにされた。

それら全てが機能停止に追い込まれ、プスプスと煙を上げていた。そして、もう一人

「……。」

ガジェットの傍に倒れているのは、戦闘機人ナンバー？、セツテであった。

ガジェットとともに数の暴力で倒そうとした彼女であったが、それに対し、ヴィータはフルドライブで応戦。ギガント化したハンマーで独楽のように回転しながらガジェットの群れに突っ込まれ、ガジェットは片っ端からジャンクにされてしまった。

彼女自身も固有武装を叩き割られた後に腹部にハンマーを叩き込まれ、その意識を刈り取られた。

（？型しか連れてこなかったのは明らかに失敗でした。接近戦しかできないのでは相性が悪すぎます。）

気絶する直前、彼女はそんな事を考えていたそう。

ヴィータによって意識を刈り取られた彼女はそのままバインドで拘束され、今もなお気絶中である。

ヴィータは万一意識を取り戻した時に逃げられないように、多重バインドでセツテを縛りつける。

起きない方が都合が良いので締め付け具合はそこそこに、その代わり、決してブレイクされないように構成に気を付けてバインドを施す。

「こんなもんか。たく、手間かけさせやがって。ま、私とアイゼンの敵じゃなかったけどな。」

……。

「じゃあ、そろそろ行くか。動力炉はすぐそこだ。こんなさつさと終わらせて、なのは達の援護に回るぞ。」

……。

「……言われねーでも分かってるさ。」

アイゼンの沈黙の意味を察したのか、ヴィータはポケットを探ってカートリッジを取り出す。

手の上にあるのは一発分。ついさっきまで三発分あったのだが、セツテ達を撃破する際に二発消費してしまった。

これとアイゼンに装填されている分を合わせると、ヴィータが使えるのは残り四発である。

「確かに厳しいかしんねー。けど、ここまで来て「出来ませんで

「じゃはやてに合わせる顔がねえ。だろ？」

Ja.

ヴィータの任務はゆりかご動力炉の破壊。それが出来ると信じているからこそ、はやてはヴィータをこちらに回した。

主であるはやてが信じてくれている。ヴィータにとって、それは一番シンプルで、だからこそ決して譲れないものである。

出来る出来ないじゃない。やる。唯それだけ。

ヴィータの辞書に、諦める等という言葉は存在していなかった。

「行くぞ、アイゼン！！ 動力炉なんぞ、全力全開でぶっ潰す！！」

J
a
w
o
h
l
.

「はあっ！！」

「くっ！！」

Round Shield.

ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
！
！

向こうの魔力刃と私の障壁が衝突して、鏑迫り合いのような音が聞こえてくる。

何とか一撃目は防げたけど、このまま接近戦を続けられるのは不味い。なら

Barrier Burst.

防御に使っていた障壁を爆発させて、その爆風を利用して距離を取る。

「アクセル……。」

「させるか――！」

「ッ!？」

Protection.

シューターを発射しようとした矢先、それを潰すかのように突進を受ける。

レイジングハートがオートで障壁を張ってくれたおかげでダメージは無い。けど

「どうした？ これで終わりが、エース・オブ・エース――！」

「まだ……、まだ――！ シュート――！」

完成していた誘導弾を三発、零距离から発射する。

読んでいたのか、向こうは即座に間合いを取って誘導弾を回避する。

回避されたものは軌道を変え、それぞれ別方向から襲い掛かる。

「ふっ!!」

回避を続けるのは得策じゃないと判断されたのか、向こうは肘に付けられた魔力刃で、シューターを切り払っている。

一回交差する度に一発。三回交差する頃には全弾が切り払われてしまった。

今のうちに……。

「甘い!!」

「!？」

「チャージなど、させるものか!!」

デイバインバスターを発射しようとした所で再び突撃を受け、砲撃がキャンセルされる。

シューターと違い、砲撃は途中で潰されたら意味が無くなる。

こうなった以上間合いを離すための手段は、バリアバースト位しか無くなる。

B a r r i e r B u r s t .

障壁に裂いていた魔力と引き換えに、再び距離を取る事に成功する。さつきからずっとこの調子。

障壁はまだ抜かれていないんだけど、この千日手に近い状況はどうにかしないと……。

とは言うものの、状況はそう優しいものじゃない。

今私が戦っているのは、縦横高さが30メートルの室内空間。

この広さだと、空戦するには少し狭い。かと言って砲撃一発で全範囲をカバーできる程広い訳でもない微妙な大きさ。重要になるのは、最高速度じゃなくて瞬発力。

そんな中、戦う相手は高機動の接近戦型。私とは正反対に、このフィールドに最も適しているタイプ。この戦闘における主導権は、完全に向こうに握られていた。

幸い、向こうの攻撃は防げるので大事にはなっていないんだけど、それは向こうも同じ。

ヒットアンドアウェイで立ち回られて、こっちの攻撃の出鼻を確実に潰してくる。

せめて設置型バインドが使えるれば良いんだけど、無いものねだりなんてしてられない。

……アレしか無い、かな。

「ごめんね、レイジングハート。ちょっとだけ……、無理するよ!」

All right . Blaster Mode .

(予定通り……と言った所か。)

作戦通りに事が運んでいる事に、私は内心安堵していた。

明らかに戦力が少ない状態でのゆりかご浮上。プランの変更を余

儀なくされた状態でドクターが選択したのは、「ゆりかごへの戦力一極集中」であった。

その結果地上に向かうはずの戦力は全てカットされ、その分がゆりかご内部に回された。

ゆりかご内部に限定するのなら、当初のプランよりも戦力は多い。

（だが、それだけでは……。）

しかし、当然ながら良い事ばかりでは無い。

本来ならゆりかご内部に配置される筈のデイエチは既にリタイアしており、回せるナンバーズは自分とセツテの二人しかない。となれば、自分達がここに配置されるのは当然といえる。

何が言いたいのかというと、アジトに残ったドクターが完全にノーガード状態なのだ。

ウーノの直接戦闘能力は皆無なので、護衛としては期待できない。せめてガジェットを配置するように進言したが

「あのオモチャでは、ここは保たないよ。ここに配置して無駄に消費される位なら、ゆりかごに回した方が余程マシさ。」

と一蹴されてしまった。

なら、ゆりかごに乗り込んでくださいと進言したが

「それは出来ない相談さ。私がここで何人が引き受けないと、そちらの負担が大きくなるからね。」

と、これも受け入れられなかった。

管理局側にとって、ドクターの身柄は何としても押さえておきたい物であり、囷としてはこれ以上の適任もない。

管理局もキング自らが囃役をする等とは夢にも思わないだろうから、この作戦は確実に成功する。

ドクターの身柄と引き換えに。

（いや、もう考えるのは止そう。こんな事を考えた所でどうにもならない。）

既に作戦は始まっている以上、いくら私が悩んだ所で何も変わらない。

元より自分は戦闘機人。戦いこそがその使命。

考える事はドクターに任せてひたすら戦い続ける、そういう存在である。

気を取り直し、今戦っている相手へと意識を戻す。

エース・オブ・エース、高町なのは。

彼女との戦闘は、地の利もあってか終始こっちが主導権を握って戦闘を展開している。

とはいえ、未だに彼女の持つ強固な障壁を破る事ができず、お互いに決め手に欠けた状態で千日手の様相を呈してきていた。

今は持ち前のスピードで圧倒出来ているが、これから先もこうなるかは分らない。

保有している魔力量から、長期戦になった場合は向こうが有利なのは間違い無い。

さて、どうやってその防御を崩そうか……、そんな事を考えていた時だった。

All right . Blaster Mode .

デバイス音声が出た直後、向こうの魔力が急激に増加するのをセンサーが捉える。

モード、という単語から予想されるのは、向こうのパワーアップ、
ないしはデバイスの形態変化。

そう判断してから、私の行動はすぐであった。

「させるか！！」「ライドインパルス！！」「」

ISによる急加速による突撃で、一気にクロスレンジに持ち込む。
向こうの様子はというと、モードチェンジ中なのか動きが無い。
そして

（予想……、通りだな！！）

いつもならオートで発動している防御魔法も、発動する気配が全
く見えない。

モードチェンジ中に別タスクをする余裕が無いからなのか、兎に
角、勘は大当たりであった。

（もらった！！）

モード移行時に生まれる一瞬の間。

その隙を見逃さず、私はエース・オブ・エースの体に魔力刃を突
き立てる。

刺した所から血が噴出し、真っ赤な花が空に咲いた。

「捕まえ……た。」

「!？」

「これでもう……、逃げられない……、よね？」

仕留めたと思った。現に、魔力刃は今もお刺さっており、傷口からは血が流れている。

しかし、目の前の相手は我関せずとばかりに、右手で私の腕を掴んでおり、離そうとしない。

「くっ!？」

「!？ うあああああ!！」

刃を引き抜こうとして、力ずくで腕を引っ張る。

その動きが傷口に触るのか、絶叫が響き渡る。

でも、いくら絶叫しようとも、その右手だけは私の事を掴み続けていた。

「……でいいん」

残った左手で持っているのは己のデバイス。

いつの間にか魔力チャージされたそれが、私の腹に押し当てられる。

そして

「ばす、たー……。」

今にも消えそうな声とは真逆の馬鹿げた威力の砲撃が、私の意識を刈り取っていった。

マスター。

「大丈夫、まだ動ける。」

レイジングハートとやりとりをしながら、簡単な応急手当を進める。

傷口を消毒してから薬を塗り、包帯を巻いてからバリアジャケットを再構成する。

刺されたのは右肩で、動かそうとすると結構痛い。
利き手じゃないのが不幸中の幸い、かな？

「ごめんね、レイジングハート。こんな作戦しか思いつかなくて。」

現状を考えるとこれが最善でした。むしろ、マスターにこの行動を取らせた原因は、私の力不足です。

「そんな事ないよ。レイジングハートには、いつでも助けてもらってるもん。」

マスター……。

「それよりも……。行くよ、レイジングハート。あの子が、ヴィヴィオが待ってる。」

とりあえずだけでも応急手当も終わった今、いつまでもここに留まっている意味は無い。

少しでも早く、ヴィヴィオの所に行かないと……ッ!?

マスター!?

「大丈夫。ちょっと、傷口が引き攣っただけ。」

正直言っただけ結構痛い。けど、だからと言ってここで休むなんて出来ない。

それに、ヴィヴィオは今、これの何倍もの痛みを受けている筈だ。この程度の痛みでへこたれてたら、あの子に顔向けなんて出来ない!!

「待っててね、ヴィヴィオ。なのはママが、絶対助けてあげるから。」

痛みを気合で誤魔化しながら、私とレイジングハートは中枢部へと向かっていく。

その行き先を示すかのように、私達が通った跡には赤い点がぽつぽつと落ちていた。

「はあっ!?!」

「くっ!!」

ギイン!! ギイン!!

ミッド上空、地上本部から数キロメートル離れた地点でデバイスがぶつかり合い、その余波で辺りに魔力が発散される。

その中心で戦っているのは、二人の魔導師と一基の融合騎であった。

「『紫電……一閃!!』」

そのうちの片方、シグナムと、シグナムとユニゾンしたリインは、強化したレヴァンティンで斬撃を放つ。

「……ッ!!」

もう片方の魔導師、ゼストは器用な槍捌きでそれを受け流す。
今の状態でまともに受けたら、デバイスが破損してしまうが故の判断であった。

ギイン!! ギイン!! ギイン!!

「くっ……ッ!!」

「はあっ!!」『行けるです!!』

だけど、それも長くは続かない。

戦闘開始から既に数分。その数分で、ゼストの体は急激に消耗していた。

元々、不完全なレリックウェポンである己の体。

「死体が執念で動いているだけ」と自嘲する彼の体がそう長く保たない事は、彼自身よく分かっている。

その上、ロクな調整を受けないでの放浪生活。どのみち長くないからと、スカリエツティのアジトにも殆ど顔を出す事は無かった。

例えるのなら、砂時計の端に僅かにこびりついている欠片。その程度しか、彼の命は残されていない。

（恐らく、あと少しも持つまい。……だが！！）

ここまで来て諦めるなんて選択肢は存在しない。

死んだ筈の自分がこうして動いている、それは、たった一つの心残りから。

我が友が今胸に抱いている思いは、あの頃誓った物と変わってしまっただのか。

それを確かめるまでは、死んでも死にきれない。

（アレしか無い……か。）

「うおおおおー！！」

今まで守備に回っていたのが一転、咆哮を上げながら、己のデバイスを力任せに突きつける。

対するシグナムは、それを剣で防御。防御しきれない部分は鞘を使って凌いでいく。

ひとときわ力の籠った突きを防御したシグナムであったが、その勢いで間合いを離される。

「フルドライブー！！」

Explosion.

「……ッ!! レヴァンティン!!」

Explosion.

大きな負担と引き換えに絶大な破壊力を叩き出すゼストのリミットブレイク、フルドライブ。

間合いを離れた一瞬の猶予を使い、それが放たれる。

それに気付いたのか、シグナムもレヴァンティンを構え、ゼストの持っている槍を狙って切りつける。

「おおおおおおっ!!」

「『紫電、一閃!!』」

その刹那、ゼストが見たのは己の槍とシグナムのレヴァンティンが真正面から打ち合っている光景。そして

レヴァンティンによって叩き折られ、中ほどから先が無くなってしまった己のデバイスであった。

「勝負あり、です。」

（まさか、フルドライブが打ち負けるとはな……。）

己の持つ最大の一撃、それが通用しなかった。

（いや、そうではないか。）

違う。フルドライブ本来の威力なら、カートリッジ一発分程度の攻撃等は相手にならない。

だというのに打ち負けた。それは

（俺の体はとつくに限界を迎えていた。そういう事か。）

肉体的な限界。

いくら精神が強かろうが、魔力を込めようが、結局の所それを行
使するのは己の肉体。

それが壊れてしまっていては、全力など出せる訳が無い。
今いるこここそが、ゼストの限界であつた。

（無念……。）

筈だつた。

『聞こえるか、ゼストグランガイツ？』

『……誰だ、お前は？』

『誰だっていいだろう？ 手短に要点だけ伝える。今から三つ数えたらそこを離脱して地上本部に飛べ。援護してやる。』

『待 』

『ではな。』

唐突に届いた念話に、ゼストは眉をしかめる。
それに気付いたのか気付いていないのか、シグナムがこちらに接近してくる。

「……何か言ったらどうですか。」

……1……。

「だんまり、ですか。仕方ありませんね。」

……2……。

「ゼスト・グランガイツ、貴方を逮捕する。じっくり話を聞かせて
『シグナム、上！！』ッ！！」

……3。

「ガアアアアアアッ！！」

「なっ！？ 竜！？」

『何でこんな所に！？ ……ッ！！』

Panzerschild.

突如襲い懸かってきた乱入者が、その口からプレスを吐き出してシグナムを攻撃する。

シグナムは反射的にシールドを展開してプレスを防ぐ。

「……ッ！！」

『シグナム、ゼストが！！』

「分かってる！！ この！！」

『ガアアアアアア！！』

これを好機と見たか、ゼストはシグナムに背を向けて地上本部へと向かって飛んでいく。

阻止しようとしたシグナムであったが、プレスの弾幕の前に行動を制限され、防御を余儀なくされる。

けど、それで黙っている程、シグナムは大人しくはない。

「邪魔、するな！！ レヴァンティン！！」

Schlangeform.

「飛竜……一閃！！」

レヴァンティンをシュランゲフォルムに変更して、砲撃級の斬撃

を放つ。

斬撃はドン！ ドン！ と進路上の弾幕を爆発させながら、竜のいる方向へと飛んでいく。そして

「キュ！？」

先程までの咆哮とは一転、やけに可愛い鳴き声を上げて、襲撃者は墜落していった。

『やったです！！』

「いや、ギリギリで避けられた。ショックで気絶しただけだろう。」

『……追います？』

「……いや、地上本部に行く。優先順位を間違える訳にはいかないからな。」

『はいです！！』

地上本部 レジアスの執務室

「オーリス、お前はもう下がれ。」

「それはあなたと同じです。指揮権限が無い以上、ここに居る意味は無い筈です。早く避難を。」

正体不明の魔導師の襲来。

その報を受けてなお、この部屋の主は動こうとはしなかった。

「今更どこに逃げる？ 逃げ場などあらんよ。」

「しかし……。」

「それに、だ。ワシはここにおらねばならんのだよ。」

部屋の主、レジアスは何かを待っているかのように椅子に座り続けている。

どこか悟ったようなその表情は、これから起きる事を予想しているようだった。

室内にはレジアスとオーリスの他にも秘書が一人いたが、事態の変化についていけていないのか、沈黙を保っていた。
そして、その時が訪れる。

ガアン！！

金属がぶつかり合う音がして、執務室の扉が内側へと倒れる。
その後ろから部屋に入ってきたのは、デバイスが折れ、今にも限界を迎えそうなゼストであった。

「手荒い来訪で済まんな、レジアス。」

「構わんよ、ゼスト。」

「ゼスト……さん？」

侵入者に対し、レジアスを庇うように立っていたオーリスだが、

その正体に気付いたのか表情が崩れる。

一步、二歩とレジアスの方へと近付いてくるゼストに、終には横にどいて道を空ける。

レジアスの事が心配なのは変わらないのか、その表情は緊張したままであった。

「聞きたい事がある。」

「……何だ。」

「8年前、俺と俺の部下達を殺させたのは、お前の指示で間違いなのか？」

「……。」

「共に語り合った、俺とお前の正義は、今はどうなっている？」

その問いかけにレジアスは俯き、ゼストはその答えを待つかのよう、真っ直ぐにレジアスの事を見続けていた。

だからこそ、気付く事が出来なかった。

（地上本部中将、レジアス・ゲイズは、正体不明の魔道師によって殺される、それが運命。）

秘書に擬態してレジアスの傍に控えていた戦闘機人ナンバー？、ドゥーエが、その任務を果たすべく動き出す。

即ち、ゼストが引き起こした混乱に紛れてのレジアスの暗殺。

（貴方に恨みはないけど、死んでくれないとドクターが困るのよね

え。）

最高評議会は既に始末した。完全に管理局と袂を分かった今、自分達の事を知っているこの男は、ただただ邪魔なだけであった。

IS「ライアーズマスク」による偽装は完璧で、二人には未だに気付かれていない。

ドゥーエは二人にばれないように、こっそりとレジアスの背後に回りこむ。そして

「さようなら。」

無防備な背中目がけて、固有武装「ピアシングネイル」を振り下ろした。

「悪いな。お前はここでゲームオーバーだ。」

部屋の中央には二人の人影。

ゼストとレジアスの姿があり、沈痛な顔をしたオーリスが傍に控えている。

もう自力で立つ事もできないのか、座り込んだゼストの背中をレジアスの腕が支えていた。

「どうやら、ここまでのようだ。」

「ゼスト!？」

「元々、死体が執念で動いているようなものだったんだ。もう少しもしないうちに、俺は仲間の所に行く事になるだろう。」

「そんな!？」

「助からない、のか？」

「元より二度目の生等には興味無い。ここまで来たのも、お前の本心が聞きたいという、それだけの理由だ。」

「……。」

「なあ、レジアス。」

「……何だ。」

「あの時二人で誓い合った俺達の正義。地上の平和は自分たちが守る」。今でもお前は、同じように思ってくれているのか？」

限界が近付いているのか、段々小さくなってきた声でゼストが問いかける。

弱々しい声とは逆にその眼光は鋭く、少しの嘘や誤魔化しも許さない、と雄弁に語っていた。

それに対し、レジアスは

「あれから何年も経ったな。ワシは今でも、あの時の事を思い出す。」

「

「……。」

「あれから色々あった。ここまでのし上がるために、汚い事も一杯やってきた。」

「……。」

「ワシのやってきた事を考えると、地獄に落とされても文句は言えん。だが、な」

あの時の誓いは決して破ってはいないと、それだけは胸を張っていえる。

それが嘘偽りの無いレジアスの本心。

アインヘリアルの建造を推し進めたのも、不本意とはいえスカリエッティに協力したのも、全ては地上の戦力不足を憂いたが故の行動。

強引だったかもしれない、やり方を間違えたかもしれない。

だけど、その根底にある思いだけは、決して裏切る事はしなかった。

それを聞いたゼストは、力を抜いて目を細める。

腕にかかる重さが増したのを感じたレジアスは、慌ててゼストを揺らす。

「ゼスト!？」

「どうやら、ここまでのようだな……。なあ、レジアス。最後に一っだけ、約束してはくれぬか？」

「……言ってみろ。」

「もう二度と、俺達のような者を出さないと。俺達みたいな事、あってはならないんだ。」

「……ああ、分かった。ワシはもう、二度と道を間違えん。」

「そう、か……。」

返答は一言だけだったが、何となく満足しているように感じられる。

ふと何かを思い出したのか、ゼストはその首だけを動かして部屋の一角に目を向ける。

そこにいるのは、全身をバインドで拘束され気絶している金髪の戦闘機人、そして

「まだ礼を言ってなかったな。お前のおかげで、こうして友と語る事が出来た。感謝する。」

「気にするな。こっちの都合でやっただけだ。」

「その声、さっきの……そういう事か。……ありがとう。」

「だから、礼は良いと言ってるんだが。」

「そうか、なら、お前のマスターにでも伝えておいてくれ。」

「……ああ、承ったよ。」

ドゥーエを拘束した張本人である、金髪の女性。

身長30／＼40センチの体に法衣を纏い、頭には獣の耳。

そしてなにより目に付くのは、後ろから九本生えている大量の尻尾であつた。

その外見から使い魔、あるいはユニゾンデバイスと判断したのか、ゼストは彼女に命令をしたであろうマスターに感謝する。

これでもう、思い残す事は無い。

「……ッ！？　ゼスト！！」

レジアスの腕に、今まで以上の負荷がかかる。

ゼストの体から力が抜け、最後の時が来た事を示している。

慌てるレジアスとは裏腹に、ゼストの内心は穏やかであつた。

元々失われた筈の命。

唯々彷徨い続けるだけだつた日々だったが、最後に、今もなお変わらぬ友の本心を聞くことが出来た。

そして、最後にはこうして友の腕の中でその幕を閉じる事が出来る。

ああ

「悪く……ない。」

それが、ゼスト＝グランガイツの最後の言葉だつた。

シグナム達が到着した時には、全てが終わっていた。

ゼストは既に事切れており、目を閉じられた状態で仰向けに寝かされている。

レジアスはゼストの顔を見下ろしながら、嗚咽を漏らすオーリスに胸を貸している。

そして

「む、シグナムか。遅かったな。」

「お前は……。」

「……そうか、こうやって会うのは初めてだったな。」

「……誰だ？」

「そうだな、まずは自己紹介から行こうか。私は藍、キャラの使い魔みたいなものだ。」

「ッー!!」

キャラ、という単語に反応して、シグナムは警戒の構えを取る。

キャラがスカリエッティについたという情報は、シグナム達にも伝わっている。

「……とりあえず、その殺気をしまってくださいないか？ でないと落ち着いて話も出来ん。」

「話、だと？」

「ああ。」

不意に出てしまった殺気を抑え、それでも最低限の警戒心はキープしながら、シグナムは構えを解く。

元々自分達が戦っていたのは、事情を聞き出すためだ。向こうから話してくれるのなら、聞くのもやぶさかではない。

しかし、藍の口から出てきたのは、予想外の一言であった。

「あの子の事を、助けてやって欲しい。」

第71話 不屈「倒れ逝くその時まで」(後書き)

Q・アレ？ こっちに藍がいるって事は……。

A・実はキャラ口にとつてのハードモードでした。

夢幻珠無しであの3人抑えるとか無理ゲーすぎます。

キャラ「持ってて良かった宝塔」

では、また次話で。次回も超展開ですw

第72話 キャロ・ル・ルシエ（前書き）

まず最初に、投稿遅れてすいませんでしたI o r z
色々理由はあるんですけど、最大の原因は作者の自堕落です。

第72話 キャロ・ル・ルシエ

「○○さん、お薬の時間です……。ッ!! ドクター!!」

「ど、どうしたというんだね、そんなに慌てて!？」

「あ……。す、すいませんでした……。」

「それで、一体何があったというんだね？」

「それが……。」

スカリエッティのアジトにて

「くっ……。」

「どうした、それで終わりかね？」

「そんな訳……あるか!!」

「そうです、まだやれます!!」

高濃度AMFによってあらゆる行動が阻害された状況下、私とエリオ、アギトの3人は未だ健在だった。

スカリエッティ魔力弾を放ってくるが、それぞれバラバラに動いて回避する。

「はあああああ！！」

弾幕に生じた僅かな切れ目。その隙に、ストラーダを構えたエリオが突撃する。けど

[illegible]

「!!」

「エリオ！」

エリ才渾身の一突きは、スカリエツティの障壁によつて阻まれる。その硬直を狙つてバインドが飛んでくる。

血のように赤い魔力光をしたそれは、言うなればAMFの塊。捕まってしまうと、1発でアウトなシロモノだ。

それに気付いたエリオは、バックステップでその場を離脱。

直後、さっきまでエリオがいた地点に何本もの赤い線が交差した。

「おや、避けられてしまったか。てつきり当たったのかと思ったんだが。」

スカリエツティは引き続き、こちらに対して魔力弾を放ってくる。防御に絶対の自信があるからなのか、その表情には余裕が張り付いていた。

向こうの魔力弾はこちらに当たらず、こちらの攻撃は防がれる千日手に近い状況。

どちらの方が不利かと聞かれれば、私達の方と言わざるを得ない。どんな人間でも集中力が欠ければミスをする。

避け続ける事はそう難しくはないけど、いつ事故が起きてもおか

しくは無い。

そして万が一が起きて捕まってしまったら、その時点でアウトなのだから。

こうなったら、真・ソニックフォームで勝負に出るしか……。

スカリエッティが話しかけてきたのは、そんな事を考えている時だった。

「ふむ、Sランクオーバーといえど、この状況下ではこんなものか。それに、今ひとつ集中出来てないみたいだね。そんなに後ろの映像が気になるのかな？」

「くっ!!」

認めたくは無いけど、スカリエッティが言ってきた事は図星だ。スカリエッティの背後にあるモニター。そこには、ゆりかご外部での戦闘映像が映し出されていた。

はやて、シャマル、それにスバル。そして、その3人と戦っているのは、私達の仲間である筈の少女。

「どうしてあの子がこちら側についているのか分からない、そんな顔をしてるね。」

「当たり前です!!」

魔力弾を避けながらエリオが反論する。

それを聞いたスカリエッティは、まるで面白い事を聞いたかのようになにその笑みを深める。

「ふふふ、当たり前、か。逆に聞かせてもらっけど、どうして君達

はこの子の事を信用しているのかな？ 最初からこちら側だったという可能性も、考えられるんじゃないのかい？」

「そんなの決まってる！！ キャロは僕達の仲間だから、信じるのは当たり前だ！！」

私が言い返すよりも早く、エリオが私の気持ちを代弁してくれた。私もエリオと同じ気持ち。

キャロが裏切るなんていう事、とてもじゃないけど考えられない。にも関わらず、スカリエッティの顔は醜く歪んだままだった。

「信じる、か。……下らないね。」

「何！？」

「キミ達がどう考えているのかなんて知らないけど、信じる事と裏切られない事はイコールではないのだよ。そもそも信頼というもの自体、お互いの感情に根ざした不確かなものだ。利害が衝突すれば、それだけで失われる。その位脆いものなのだよ。」

「そんな事！！」

「無い、と言い切れるのかい？ 現に君達の間で起きてるじゃないか。そう、君達とキャロ・シエル、……いや。」

「キャロ・ル・ルシエとの間でね。」

「え？」

「おや、知らなかったのかい？ フッフ……、そうか、そうだったのか！ あの子は君達にすら打ち明けていなかったと？ 信頼も君達からの一方通行だったと？ これは傑作だ！！」

スカリエッティが腹を抱えて笑い続ける。

さつきまで私達を襲っていた弾幕も止み、隙だらけの状態で立っていた。

けど、今の私はそれどころじゃなかった。

「スカリエッティ！！」

「……ああ、済まない。君達には何の事だか分からないんだっただね。」

「何を言って……。」

「けど、運が良かったね。今の私は気分が良い。特別に教えてあげても構わない。」

スカリエッティは相変わらず隙だらけで、今攻め込むべきなのはと考える私がいる。

けど同時に、ここで情報を手に入れておくべきでは？ と考える私、それと、聞いてはいけない事ではないかと感じる私もいて、それらが絡まりあい、行動する事を許さない。

エリオとアギトも同様なのか、戦闘姿勢こそ崩さないものの、斬

りかかる気配は無い。

「かかって来ないのかね？　そうか、そんなに聞きたいのか！！
良いだろう、教えてあげよう。」

あの子の名乗っている、キャロ・シエルというのは唯の偽名だ。
本当の名前はキャロ・ル・ルシエ。第6管理世界アルザスに存在する少数民族ル・ルシエ。そのル・ルシエに代々伝わる秘術、竜召喚を受け継いだ竜の巫女、それがあの子の正体だ！！」

「「！？」」

どういう……事？

いや、まだそれが事実だと決まった訳ではない。
スカリエッティが口から出任せを言っている可能性だって

「嘘だつ！！　そんなの出任せに……「嘘じゃねえと思う」ッ、ア
ギト！？」

「私がキャロと二人旅してた時、アイツいつも肩に小さい竜を乗っけてた。多分、本当だ。」

「今までそんな事一言も」

「口止めされてたからな。……悪かった。」

「そんな……。」

私の希望を代弁してくれたエリオを否定したのは、他でもないアギトだった。

研究所から救出されてからしばらくの間、アギトはキャロと二人

で行動してたらしい。

その時の事を考えると、色々と辻褃が合う。いや、合ってしまう。

「ほう、知っている者もいたのか。だが口止めされていた所を見るに、やはり君達の事は全く信用していなかったみたいだね。」

「そんな、事……。」

「事実、あの子はこちら側についた、君達を裏切ってね。いや、見限った、という方が正しいのかな。強大な力を持っている者は、管理局が存在する社会ではその自由が失われる。あの子には、それが我慢ならないのだよ。」

エリオの反論が段々弱くなっていくのとは正反対に、スカリエツティは笑顔のままだ。

話の内容は信じられないものばかりだけど、事実には元付いている以上、否定出来ない。

……いや、本当にそうなのか？

「……違う。」

「何が違うというのかね？ 現に彼女はこちら側についている。それこそが証拠だよ。」

「違う。」

「諦めが悪いね。どれほど否定した所で、事実は変わらないというのに。」

「そうじゃない。スカリエツティ、お前は、キャロに何をした？」

「……ほう。」

スカリエッツィの話に感じたのは僅かな違和感。
話の内容は事実なのかもしれない。けど

「お前の言った事が全部事実だったとしても、それであの子がそっちに付く理由にはならない。」

「「……あ。」」

あの子は賢い子だ。

もし全部が事実で、それ故に管理局が邪魔になったとしても、それでスカリエッツィに付くとは思えない。

仮にスカリエッツィに付いて成功した所で、それで自由になれるかは別問題なのだから。

「キャラの出自がどうなのかは知らない。けど、今それはそれほど重要な事じゃない。……話を逸らすな、スカリエッツィ。」

バルディッシュをスカリエッツィに向けて威圧する。

スカリエッツィの様子はというと、それに一切動揺する事なく余裕のままだ。

「フエイト。キミは本当に賢い子だね。」

「……。」

「……まあ、良いだろう。そこまで言うのなら、話してあげても構わない。あれは」

あれは数日前の事だ。

決戦を前にして六課から離れていたマスターだが、その時訪れていたのは第4管理世界だった。

先程も説明した通り、マスターの故郷、ル・ルシエは第6管理世界のアルザスに存在する。

このタイミングで帰郷したのはとある事情からなのだが、まあ、それは今は関係ないので置いておくとしてだ。

そこでの用事が済んで六課に帰ろうとした、その時だった。

P i P i P i P i P i ……。

「通信用デバイスに受信あり？ 一体誰だろ？」

帰ろうとした矢先、マスターのデバイスに着信が届いた。

大方、八神部隊長かスバル辺りだろうと予想し、マスターは相手も確認せずに着信に出た。

……ここからは、直接聞いてもらった方が早いな。
証拠ログがあるから、これを見てくれ。

「もしもし、誰ですか？」

『やあ。』

「!? ……どちら様でしょうか？」

『おっと、そういえば、名乗るのを忘れていたね。初めまして、ジエイル・スカリエツティだ。』

「……色々突っ込みたいんですけど、とりあえず置いておきますね。それで、そのジエイルさんが何の用ですか？」

『そんなに急かさないでくれないかい？ 僕としては、もう少し君との会話を楽しみたい所なんだが。』

「どこの誰が敵対してるテロリストの親玉と仲良く会話するって言うんですか？ 用事が無いなら切りますよ？」

『せっかちなのは嫌われるよ。親に習わなかったのかい？』

「その台詞、貴方には言われたくないですよ。」

『段々と余裕が無くなってきているみたいだね。ひょっとして、そっちが本来の君かな？』

「うるさいです。で、用件は何ですか？ 降参するっていうのなら、連絡ははやて隊長の方にしてあげてください。ぶっちゃけ処理が面倒なので。」

『ふふふふふふ。中々面白い事を言うね。でも、残念。これは君に言わないといけない事なんだよ。』

「だから、何ですか？ 私だって暇じゃないんです。勿体ぶってる暇があるならさっさと言うてくれませんか？」

『おっと、すまない。用件は一つだけだ。……こちら側に、付く気は無いかい?』

「……はあ? それ本気で言ってます?」

『先日の一件で、こちららも戦力不足でね。このままでは計画に支障が出るんだよ。君の素性は調べさせてもらった。管理局を崩壊させる事は君の利益にも繋がる。悪い話ではない筈、だろう?』

「……話になりませんね。どこの誰が犯罪者になるリスクを負ってまで、手負いのテロリストに協力するっていうんですか。」

『いやはや、手厳しいね。』

「事実でしょう?」

『では、どうあっても協力する気は無いと?』

「当たり前です。というか、協力してもらえなくても思ってたんですか?」

『どうだろうね。とにかく、協力してもらえないのなら仕方が無い。竜召喚の力を持つル・ルシエの末裔である君には是非ともこちらに来て欲しかったのだが、諦めるしか』

「待ってください。」

『……何だい?』

「何で貴方が、知ってるんですか？」

『その事、とは何の事かな？ キャロ・ル・ルシエ君。』

「ッ！！」

『素性は調べた、と言っただろう？ 今、君は第4管理世界にいるようだが、ひよっとして里帰りでもしていたのかい？ だとしたら、時間を取らせて悪かったね。』

「……昔の話です。私はもう追放されてますし、今日は聞きたい事があつたから来ただけです。」

『そうか。では、帰り道には気を付けたまえ。』

「?」

『最近、その辺りに正体不明の機動兵器が出没するらしい。今の所、里や人に被害は出ていないらしいが、用心するに越した事はないからね。』

「……脅迫、ですか？」

『君が何を言ってるのか、理解不能だよ。私が言っているのは、「機動兵器がル・ルシエの里を襲撃するかもしれない」という事だけだ。言うなれば、雷が落ちたり嵐に巻き込まれたりといった偶発的な現象と同じレベルの話だ。』

「調べたのなら知ってると思いますけど、私はもう、ル・ルシエを追放された身です。あそこに住んでいる人がどうなるのが知った事

「じゃありません。」

『そうか、余計なお世話だったみたいだね。既に君はあそこは縁が無い。なら、あの里が壊滅しようがどうなるうが、関係の無い話だったね。』

「……………」

『……………』

「……………はあ。で、私に何をさせたいんですか？」

『おや、どうしたんだい？』

「気が変わりました。協力してあげても良いです。」

『ほう。さっきまでは取り付くシマも無かったというのに、何か心境の変化でもあったのかな？』

「白々しいですよ。で、どうすれば良いんですか？」

『そうだね。今から座標を送るから、とりあえずそのポイントまで来てくれないかな？ あと、分かっているとは思っけど』

「管理局とコンタクトは取るな、でしょ？ それくらい分かっています。」

『理解が早くて助かるよ。もしそんな事をされたら混乱のあまりに、つい手元のボタンを間違っって押してしまって、ガジェットを暴走させてしまうかもしれないからね。』

「……死ねばいいのに。」

『何か言ったかな？ では、そろそろ失礼させてもらうよ。指定したポイントに到着したら新しい指示を出すから、とりあえずはそこに向かってくれ。それでは、さようなら。』

「……はあ。」

以上が、あの日にあった会話の全てだ。

自分一人とル・ルシエの命、マスターが選んだのは、後者だった。今までお前達を騙していた事、隠し事をしていたのは事実で、それに関しては何を言われても仕方が無いと思っている。だが、その上で改めて頼みたい。

あの子の事を、助けてやって欲しい。

第72話 キャロ・ル・ルシエ（後書き）

予定の半分まで書いた所で5000字超え。

長くなりそうだし内容的にもキリが良かったので切りました。

なので、超展開は次話に持ち越しです。

Q・ル・ルシエが人質に取られたというのなら、藍かフリードでも置いておけば良かったのでは？

A・その辺りには理由があります。論理的な理由と心理的な理由が一つずつあって、その結果、こういう形になりました。

では、また次話で。

第73話 終焉「Phantasm to Phantasm」(前書き)

今話には鬱成分が含まれています。

嫌な予感を感じたひとはブラウザバック推奨です。

第73話 終焉「Phantasm to Phantasm」

『……藍。』

『困った事になりましたね。これからどうするつもりですか?』

『とりあえず、私は向こうの言う通り動く事にするよ。それで、藍とフリードにやって欲しい事があるんだけど……。』

『何でしょうか?』

『ゼストさんのサポート、お願いして良いかな? レジアスさんを
囿にして、ドゥーエを誘い出して欲しいんだ。』

『成る程、そういう事ですか。分かりました、こっちは私とフリー
ドで何とかしてみます。』

『お願いね。』

(うん。これで、良いんだ。)

『? 何か言いましたか?』

『ううん、何も。』

(そういう事、だったんだ。)

自分の事をキャラコの使い魔だと言った藍さんの話は、シグナム隊長を通して私達にも伝わっていた。

まさか、そんな事になってたなんて……。

「キャラコ スバル、ストップ！！」ッ！！」

思わずキャラコに呼びかけようとした矢先、はやてさんから飛んできた念話で遮られる。

「気持ちは分かるけど、それはアカン。藍って人の話が本当なら、会話も聞かれてるかもしれへんしな。」

「あ……。」

確かにその通りだ。

人質なんて方法でキャラコを操っている連中だし、裏切り防止のため何らかの方法で監視する位はやっていると思う。

「キャラコの事考えるなら、私らは何も知らん振りして通すしか無い。あの人かてそう言ってたやろ？」

そうだった。思わず台無しにしてしまう所だった。

藍さんは私達に今までの経緯を話してくれた。

その最後、キャラコについての事も頼まれたんだった。

「助ける、と言っても、何も特別な事をしてもらおう訳じゃ無い。方法は単純明快、全力全開であの子を落としてくれれば、それで良い。」

かなり乱暴な言い方だと思うけど、これにだってちゃんとした理

由があるらしい。

ル・ルシエの人達を人質に取られている現状では、キャラがスクリエッティを裏切る事は出来ない。

かと言って、このまま放置してテロリストの片棒を担ぐなんていうのはもつてのほかだ。

だったら、強制的に行動不能に追い込む。

私達がキャラを撃墜すれば、スクリエッティに協力出来ないのは不可抗力になる訳で、裏切りにはならない。

そもそも、ル・ルシエを楯にして脅迫しているのは戦力として協力させる為。

戦力にならない状態にしてしまえば、脅迫する意味自体無くなってしまう。

それが、結果的にキャラの為になる。

そうと決まれば、迷う事は無い。

私達に出来る全力でキャラを倒してこっちに戻って来させる。

戻って来たのなら、まずは思いつきり叱る。

何で私達を頼ってくれないのか、何でも一人でやろうとするのか、言いたい事は山程あるんだから。

そのためにも、今は私に出来る精一杯をするだけだ。

『で、や。無力化するっていつでも、具体的にどうしたら良えと思う？』

『そうねえ……。』

はやてさんとシャルマルさん、それに私は、キャラが放つ弾幕を凌ぎながら念話を交わす。

当然の事だけど、こっちが何もしなくてもキャラの方は攻撃してくる。

藍さんの話を聞いてる間もずっと、キャラ口やその後ろで監視しているだろう人物に気付かれないうちに戦闘を継続していた。

『藍って人の情報によると、今のキャラ口は高速機動に瞬間移動、魔力変換、その他諸々が使えへんらしい。』

『でも驚異的な回避能力と接近戦能力は健在。』

『広範囲魔法で落とすにしても、そうそうチャージさせてはくれへんやろうし……。』

こうやって考えてみると、いかにキャラ口を落とすのが困難なのか良く分かる。

つい攻撃力に目が行きがちになるけど、シャルさんの言う通り、キャラ口の実力を支えているのはその2つ。

この2つが揃っているせいで、遠近ともに守備に穴が無い。

『いつそ、消耗戦に持ち込むのはどうかしら？』

『確かに、それも良い案なんや。あの薬かてもう二本飲んでる。けど、後の事を考えたら、ここで時間かけるのは得策とは言えへん。』

『そうなのよね……。』

キャラ口が飲んでたあの薬、はやてさんが言うには、どうやら制限があるらしい。

飲んですぐに体力と魔力が回復するなんていうとんでもないシロモノだけど、服用量には上限がある。

キャラ口が持っている瓶に換算すると3本分、それが限界。

もちろん改良されている可能性もあるだろうけど、そうそう数が

増える物でもない……箒。

だけど、それが尽きるのを待つてはいられない。
私達の目的は、あくまでゆりかご周辺の制空権の確保で、キャロを落としてそこで終わり、という訳にはいかない。

『勝つためには、何とかしてあの防御を攻略しないといけないのよね。』

『そうなんや。何とか隙だけでも作れたら、私の広域魔法で何とか出来ると思うんやけど……。』

はやてさんとシャルさんも私と同じく、答えが出せずに悩んでいる。

隙、かあ……。

スバル、……

ッ……！ そうだ、アレなら……！

『はやてさん……！』

「どうしました？ もう攻めて来ないんですか？」

弾幕の向こうからキャラ口の声が聞こえてくる。

「この程度で終わりですか？ 大した事無いですねえ。E A S Y モードが許されるのは小学生までですよー？」

攻めてこない事が疑問なのか、こつちを馬鹿にするような挑発も言ってくる。

さっきまでの私は、それを聞いて戸惑い半分、悲しみ半分くらいの気持ちになっていた。

けど、藍さんの話を聞いて、今のキャラ口が演技だっていうのが分かった今、戸惑いの代わりに別の気持ちが沸いてきた。

怒り、なんだと思う。

たぶんだけど、私は怒ってる。

一つはキャラ口に対して。

私やギン姉の事をお姉ちゃんって呼ぶんだったら、こういう時からい力になりたかった。

私達じゃ頼りないのなら、父さんに相談するのでも良い。とにかく頼りにして欲しかった。

キャラ口に事情があるのも、言えない理由があつたのも分かってるけど、それでも言って欲しかった。

そして、もう一つは私達自身。

キャラ口はあんな性格をしてるから、悩みなんていう物とは無縁だ

と思つてた。

トラブルに見舞われるよりも率先して首を突っ込む方だし、むしろトラブルを作る側だったから。

だから、気付く事が出来なかった。

いつもあんな調子だからつい忘れそうになるけど、キャラはまだ、たった9歳の子供なんだ。

子供が困った時、それを助けるのは大人の役目。

私はまだまだ半人前だし、大人なんて口が裂けても言えないけど、姉貴分としては真っ先に気付いてあげるべきだったんだ。

気付くのが遅すぎたのかもしれない。もう手遅れなのかもしれない。

けど、だけど、それでも……。

「マツハキャリバー!!」

All right.

弾幕が止むのを見計らい、私ははやてさん達と離れてキャラの後ろに回り込む。

でも、当然というか何というか、キャラはしっかりそれに気付いて後ろに振り向いてきた。

「全く、しつこいですねえ。なら、次のスペルは……。どういうつもりですか?」

「勝負だよ、キャラ。」

私が取った行動が意外なのか、キャラは弾幕を止めてこつちを見てくる。

それを見ながら、私は自分の持つてる最高の切り札を切る。

「行くよ、マツハキヤリバー!!」

A・C・S・stand by・

電子音声と一緒に、ローラーブーツの両端から魔力放出用のフィ
ンが出現する。

莫大な突進力を生むために左右の足それぞれに生えたそれは、ま
るで一对の翼に見える。

それを見たキャロの表情は、相変わらず笑みを浮かべたままだっ
た。

「ACS、アサルトチャージシステムですか。」

「ギア・エクセリオン。私の切り札だよ。」

「その技のタネは知ってます。もし突っ込んできても返り討ちに遭
うだけですよ?」

「かもね。でも、そうならないかもしれないよ?」

「これで一人目の撃墜者はスバルさんに決定ですね。まあ、心配し
ないでください。残り二人もすぐに送ってあげますから。」

キャロがしてくる挑発。その裏に込められた意味について深く考
えないようにしながら、上体を屈めて左手を前に、右手を後ろに持
つていき、スタートの姿勢を取る。

やるって決めた。なら、後はそれだけを考える。

「心配いらないよ。勝つのは私達だから。」

「良く言いますよ。今まで一度だって勝てた試しが無いじゃないですか。」

対するキャラは右手を下に、左手を上にした構えを取る。

アレが何を意味するか、何度もやられた経験のある私には良く分かる。

だけど、今日は、今日こそは破ってみせる！！

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……！！」

「おおおおおおお！！」

「魔王「天地魔闘」！！」

地は防御

「封魔陣！！」

ギギギギギギギギギ……！！

キャロが目の前に展開した障壁に、思いつきり左の拳を叩き込む。拳に込められた魔力と障壁が干渉しながらも、少しずつ拳が進んでいく。

けど、これだけじゃ足りない。

障壁張って終わり、なんていう程度で済む程、キャロは甘く無い。だから、私も切り札を切る。

「一撃……必倒……。」

天は攻撃

「デイベイン・バスタアアアアアア！」

「破山砲……！」

零距离からのカートリッジ3発分の砲撃魔法。

キャロはそれに合わせるように、真正面から拳を叩き込んでくる。アサルトチャージャーシステム、略してA・C・S

初撃で相手の障壁に穴を開けて、零距离から砲撃を叩き込む二段構えの必殺技。

事実上、これが今の私に出せる最大出力！！

零距离で拳と砲撃が衝突した瞬間、私達を中心に小さな爆発と閃光が起きる。

そのせいで、私は一瞬とはいえキャロの姿を見失う。

対応されたとはいえ、あの威力を零距离から叩き込んだ。

アレなら、いくらキャロでも……。

「恋符……。」

そして魔は魔力の使用

でも、キャラは倒れていなかった。

さすがに零距离での砲撃は堪えたらしく、右手はだらしなく垂れ下がっている。

だけど左手は、魔力を集中させながら掌をこっちに向けられている。

「正直危なかったです。けど、ここで終わりです。」

魔力のチャージは既に完了してるらしく、このままだと後コンマ数秒もしない内に、私は砲撃に飲み込まれる。

最初から分かった。

私のギア・エクセリオンは二段攻撃、対するキャラは三段攻撃。ディバインバスターが相殺された以上、私だけでこの状況を打開する事は出来ない。

私とマッハキャラバーは、ここが限界なんだ。

だから、力を貸して。

ギン姉。

スバル、これ……。

へ？ ……いいの！？

本当なら、私もスバル達と一緒に戦いたかった。だから、せめてこの子だけは一緒に連れて行ってあげて欲しいんだ。

ギン姉……。

あ、勘違いしないでね、あくまで貸すだけだから。無事この戦いが終わったら、ちゃんと返しに来る事。約束だよ。

そう言って、ギン姉は約束と一緒にこの子を託してくれた。

言ってみれば、この子はギン姉の代わり。

もしギン姉がここにいたら、何があってもキャラを助けると思う。

「マスター……。」

リミットは近い。このままだと、私達は何も出来ないで落とされる。

けど、そんなの受け入れられる訳が無い。

絶対にキャラを助ける。そうでもしないと、私はギン姉に顔向け出来ない。

だから……応えて！！

「ブリッツキヤリバー！！」

All right .

私の左手にもう一つのリボルバーナックルが装着され、それと同時にカートリッジが一発分だけロードされる。

キャロは私の手の内を全て知ってる。だから、今の今までブリッツキャリバーの事は隠し通した。

これが本当に最後のチャンス。……これで決める！！

「これは！ ギン姉の分だあああああ！！」

「スパーク！！」

さつきとは真逆の光景。

砲撃魔法を撃ってくるキャロに対し、私はそれに目掛けて拳を叩き込む。

拳と砲撃がぶつかり合い、一瞬拮抗する。直後

均衡は破られて、砲撃の余波が私を襲った。

うん、分かった。

ギア・エクセリオンに本来あり得ない抜き打ちの3段目。

ブリッツキャリバーのおかげで無理矢理実現させたものの、その威力はカートリッジ一発分。キャロの砲撃を受けるには、もう1〜2発分足りない。

砲撃を喰らって堕ちていく私とそれを見下ろすキヤロ。
それが、どうやっても揺るぎよしの無い事実なんだ。

はあ……勝ちたかったなあ。

でも、良いか。

私は、私に出来る全力を出す事が出来た。私の手でキヤロを助ける事は出来なかったけど、それでも役割だけはちゃんと果たす事が出来た。

だから、後の事は任せます。

シャマルさん、はやてさん。

「ッ！！ バインド！？」

「捕まえ……た！！」

キャラちゃんとスバルちゃんのぶつかり合い。その直後、キャラが見せた一瞬の隙に長距離バインドをかける。

一見無敵に見えるキャラちゃんだけど、あの子だって人間。必ずどこかに欠点はある。

まず一つ目。キャラちゃんの使うあのカウンター技。

一瞬で三連撃を叩き込むという性質上、技後硬直が必ず発生する。それが欠点。

だけど、それを誘うには誰かがカウンターに突っ込む必要があった。

その役目はスバルちゃんがしてくれた。そして、私の役目はその一瞬でキャラちゃんにバインドをかける事。

「くっ！！」

キャラちゃんはバインドブレイクを試みているけど、私が全力で施している多重バインドから逃げられない。

これが二つ目。実はバインドに弱い。

以前、ギンガちゃんとキャラちゃんの間にこんな話があったらしい。

「そつえばさ、キャラ。」

「何ですか？」

「バインドブレイク、あれから少しは上達した？」

「あー……。」

「その反応、ひょっとして……。」

「べ、別に良いじゃないですか！！ 相手が居なかったんです！！
練習出来なかったんですよ！！」

「いや、そんな開き直られても。」

「ふん、別に良いんですよーだ。バインドなんて避ければ良いんです。当たらなければどうという事は無いんです。偉い人にはそれが分かるんですよ。」

結局キャラが拗ねてしまったため、この話題はここで終わり。
実際、キャラちゃんは脅威的な回避力でバインドや魔力弾を回避する事が出来る。

そのため、今までこれが問題になる事は無かった。
でも、だからこそ今の状況がある。弱点を放置してきた結果がこれ。

多重バインドにより、キャラちゃん的位置は完全に固定されている。

さあ、最後の仕上げをお願い。

はやてちゃん!!

「ありがとな、スバル、シャル。……!!」

シュベルトクロイツを頭上に掲げて、詠唱を開始する。
ここまでお膳立てしてもらたんや。このチャンス、絶対にモノにする。

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ」

数ある魔法の中、私が選んだのは砲撃魔法。

一撃でキャラを落とせる火力を持ち、それでいて出力、範囲共にある程度融通が利く使い易さ。

その二つを兼ね備える魔法の中では、コレが一番慣れている。精密性に若干の難アリやけど、この距離なら問題無い。それに

「はやてちゃん!!」

シャルの声がすると同時、キャラのいる方向から魔力弾が飛んで来る。

キャラの様子を見てみると、バインドに拘束された状態でありながら右手をこっちに向けて来ている。

どうやら、右手部分だけバインドブレイク出来たみたいや。

迫って来る魔力弾に対し、私は防御も回避もせえへん。いや、できへん。

今は魔法の詠唱中。元々超遠距離での使用を想定しているそれは、詠唱ないし使用中は移動できず、完全に無防備になる。

キャロもそれが分かってるから、発射を潰すためにシューターを撃ってきた。

シューターと私の距離は瞬く間に縮まっていく。

このまま行くと、私はこのシューターで墮とされる事になる。

けどな、そんな事には絶対ならへん。

せやる？

ザフィーラ！！

「おおおおおおおー！！」

シューターが私に当たる寸前、そこに割り込んできたのは青い影。シューターが次々と着弾して爆発が起きる。でも

「主、大丈夫ですか！？」

爆発が収まった時、そこにいるのは青色の狼。
盾の守護獣ザフィーラの張った障壁は、一発たりともキャロの攻撃を通さなかった。

「私は大丈夫や。と言うか、怪我人のザフィーラがそれを言う？
たしか私、おとなしく病院で休んどきって言ったやんな？」

「うっ、それは……。」

「まあ良えわ。助けられたのは事実やからな。……ありがとうな、
ザフィーラ。」

「いえ……。」

こんな会話をしながらも、ザフィーラはキャロの放つシューター
を全て防ぐ。

盾の守護獣に守られて、私の所には一発も通される事は無かった。
そして、その時がやってきた。

「詠唱完了。……行くで!!」

スバルが、シャマルが、そしてザフィーラが繋いでくれた。

六課の隊長として、八神はやてとして、何としてもそれに報いる。
そして、何よりもキャロのために。

この子の悪夢、ここで全部終わらせる!!

「フリース……ヴェルグ！」

私がキャラロに向けて杖を向けると同時、頭上に展開している魔法陣から砲撃が放たれる。

砲撃は射線上にある魔力弾を飲み込みながら、真っ直ぐにキャラロの方へと進んでいく。そして

キャラロの体を、純白の魔力光が包み込んだ。

「ん……あれ？」

現状が分かってないのか、どこか寝ぼけた声でキャラロが呟く。

「私たちの勝ちやね。」

その様子を見下ろしながら、私は私の腕に抱かれているキャラロに声をかける。

スバルのことをシャマルに任せ、私は砲撃によって墜落したキャラロの方に向かい、落ちる途中の所をキャッチした。

今はティアナ達がいるヘリに向かっている途中で、キャラロを所謂お姫様抱っこで運んでいる所や。

「ああ、そう、ですね。」

キャロに抵抗するような素振りはない。でも何を考えてるのがイマイチ良く分からへん。

やっぱり、監視が気になってるんやろか？ …… そうや！！

『なあ、キャロちゃん。念話やったら大丈夫かな？』

『ッ！？ え、と……。はい。』

『その様子やと大丈夫みたいやな。藍って人から聞いたで。何もかも。』

『そうですか。はあ、お喋りなんだから……。後でお仕置きですね、これは。』

『主思いの良い使い魔やん。』

念話のため息をつくなんていう器用な事をするキャロを見ていると、やっとこちら側に戻せたという実感が湧いて来る。

何はともあれ、キャロを助ける事は出来た。

後はこの空域を基点に、ゆりかご周辺の制空権を確保できれば

そっか、そういう事かあ。…… まあ、良いか。

へ？

『キャロ、今何か言った？』

『いいえ、何にも。』

そう答えるキャロの様子は、さっきまでと殆ど変わらない。

でも、何でやる？

どうしようもなく嫌な予感がして来るのは。

『ねえ、はやてさん。』

『何や？』

『藍とフリードの事、お願いできますか？ あの子達は私の命令に従っただけ。罪を被せるのなら、私に全部被せてください。』

『へ？ 何を……ッ！？』

変化が起きたのはその時。

うつん、変化と言っても目に見える物やない。

けど、私の腕に抱かれているキャラオを見ると、どうしようもなく嫌な予感がする。

それと、キャラオの体から何か大事な物が抜けていく感覚が、本能的に理解できた。

「何が起きて……！？」

「Phantasm to Phantasm」

「！？」

「塵は塵に、灰は灰に、そして、幻想は幻想に。元々、妖怪は人間に退治される者。居ちゃいけない者。だから、これで良いんです。」

「何言ってるん？ キャロちゃんの言ってる事、何も分からへん！」

いつの間にか念話じゃなくなっている事にも構わず、私はキャラに呼びかけ続ける。

何でかは良く分からないけど、今とても不味い事が起きようとしているのだけは分かる。

「最後に、一つだけ。」

だというのに、キャラの表情は安心しきったまま。

今から起きる事を理解しているのか、慌てたりといった素振りはない。

だけど、それを見ても安心なんて出来ず、逆に不安が増えていくだけ。

そして

私の事は忘れてください。

「……!?!」

「む、どうした、藍?」

「まさか……ッ!」

「お、おい!?!」

「どうしたですか!?!」

「あの子が……………ッ、桜あー!!」

元々居ちゃいけない存在だったんです。イレギュラーだったんです。

「……………!? キュルー!!」

「うわ!? こいつ急に動き出して!?!」

「撃ち落せ!!」

「駄目です、逃げられます!!」

「キュクルー……!!」

だから、私はここで終わりです。

「今まで、ごめんなさい……………」

その言葉を最後に、キャロの全身から力が抜けてその目が閉じられた。

「嘘や……………」

私の頭によぎるのは最悪の結末。

けど、それに至る経緯が分からない。

魔力弾、砲撃共に非殺傷設定。威力だってしっかり手加減した。

だから、こんな事ある訳が無いのに。

「嘘や、嘘や、嘘や、嘘や……。」

否定したくてたまらないのに、私の腕にかかる重みがその事実を押し付けてくる。

誰か、嘘って言ってえな。

キヤロが……「死んでしまった」なんて。

「嘘やあああああああああ……！」

ゆりかご目標ポイント到達まで
あと1時間40分

第73話 終焉「Phantasm to Phantasm」(後書き)

超 展 回!! (誤字にあらず)

予め言っておきますが、はやてさんは一切悪くありません。

次話も微妙に鬱入るかもです。それを抜ければ一安心なんです。
が、
では、また次話で。

第74話 たましのゆくえ（前書き）

前回から間が空いてスイマセンでした。
今話にあんまし動きは無いです。

第74話 たましいのゆくえ

「ん……、アレ？」

目を開けると、そこは知らない天井で
つていやいやいや、そんなネタやってる場合じゃない。えっと……

「スバルちゃん！？」

「シャルル、さん？」

まだ寝起きで頭が上手く働いていない、そんな状態の私に気付いたシャルルさんが、私のいる所へとやって来た。

「スバルちゃん、大丈夫？ どこか気分悪かったりしない？」

「あ、その、大丈夫です。」

「そう、良かった。」

そう言っ、シャルルさんはほっとため息をついた。

えーっと、一体何がどうなってるの？

とりあえず、未だマトモに働いていない頭のスペックを総動員してこうなった原因を考えてみる。

えーっと、確か、私はゆりかご決戦に参加してた筈。

はやてさん、シャルルさんと一緒に出撃して、そこで……ッ！？

「シャルルさん……！」

「きゃっ!!」

そうだ！ キャロが敵側に回って出てきたんだっ！

色々あつて脅されてたつて事が分かったけど、私が覚えてるのはそこから少し先の事だけ。

結局どうなったのかを知る前に、私はリタイアしてしまったんだつた

「あの子は、キャロはどうなったんですか!？」

「スバル、気が散る!! 起きたんなら静かにしてて!!」

「ティア!？ えっと、何がどうなってるの?」

「ちょ、ちょっと！ 順を追って説明するから、とりあえず落ち着いてー!？」

「と、いう訳なのよ。」

「えーっと……。さっきはすいませんでした。」

「気にしないで。私もスバルちゃんの気持ちは分かるから。」

そう言いながらもどこか疲れた様子のシャルルさんを見ると、何だか申し訳ない気持ちになってくる。うつつ……。本当にごめんなさい。

シャルルさんによると、私はキャロとの対決の際、撃墜された拍

子に気絶してしまつたらしい。

重力に従い落下していく所をシャルさんが拾つてくれて、ここに運んでくれたみたい。

で、今私がいる場所っていうのが、六課が所有しているヘリだったりする。

ヘリの中には、カートリッジ等の補給物資の他に簡単な医療器具（応急処置程度）も積み込まれていて、それらを利用して、シャルさんが私の治療をしてくれたという訳らしい。

「ティアもごめんね。私が寝てる間も頑張ってくれてたのに、うるさくしちゃって。」

「別に良いわよ、そんな事。さっきのは少し気が立ってただけだし。それより、アンタは本当に何もないのよね？」

「うん。」

「そ。なら……ッ！　そこ！！」

「お見事。お喋りしながらでも集中力は切らしてないみたいだな。」

「当たり前です。ヴァイス陸曹こそ、ヘリの操縦ミスなんて止めてくださいね？」

「当然。俺を誰だと思ってる？」

私が寝ていた所から少しだけ離れた所で、ティアはクロスミラージユを構えている。

開けっぱなしになってるハッチから周囲を警戒して、ヘリに近付いてきたガジェットを片っ端から撃ち落してる。

ティア、私が寝てる間もずっとヘリを守ってくれてたんだ……。

「とにかく良かった、スバルちゃんに何も無くて。魔力ダメージだけみたいだから心配はしてなかったけど、それでも、ね。」

そう言っただけで再びほっとため息をつくシャルルさんを見ると、何だか申し訳ない気持ちになってくる。

あそこで気絶しちゃうなんて、私もまだまだなあ……、って、そうだ……！

「シャルルさん、キャロはどうなったんですか!？」

まだ一番重要な事を聞いてない事に気付いて、私はシャルルさんへと詰め寄る

私が覚えているのは砲撃魔法を喰らって気絶する所までで、そこから先どうなったのかは知らなかった。

シャルルさんがここにいてるって事は、作戦は成功したと思うんだけど……。

「……。」

「えーっと……。」

「え？ 何？」

どういう訳か、私がキャロの事を聞くなりシャルルさんは気まずそうになり、残りの二人は黙り込む。

ひょっとして、聞いちゃいけない事だった？ ……まさか!？

「もしかして、逃げちゃった、とかですか？」

「うっん、作戦は成功したわ。」

けど……、と、シャルさんはどこか齒切れが悪い。
成功したんだよね？　なら、どうして？

「実際に見てもらう方が早いわね。こっちよ。」

そう言っで、シャルさんはヘリの後部、私が寝かされていたよりも奥の暗がりへと移動する。

私もそれに倣って付いていく。

そこにあつたのは私が寝かされていたのと同タイプの簡易ベッド。それと、そこで寝ているキャロの姿だった。

私はベッドの傍へと移動して、キャロの顔を覗き込む。

そこにあつたのは、歳相応のあどけない顔で目を閉じている私の妹分だった。

「キャロ……。」

敵だつて言われた時、どうしたら良いのか分からなかった。
それが演技だつて知った時、絶対に助けてあげたいと思った。
そんなキャロが、今は私のすぐ傍にいる。

まだ戦いは続いているんだけど、とりあえず、これで一安心。

「あの、スバルちゃん……。」

「シャルさん？」

「言いくいん話なんだけど……。」

え？

「 という訳なの。 」

「 そんな……。 」

シャマルさんがしてくれた説明。それは、私にとっては信じたくないものだった。

「 最初この状態のキャラちゃんを見た時、はやてちゃんは死んだと思っただけだ。 」

「 え！？ 」

慌てて私は、キャラの顔を覗き込む。
死んだ、なんて言われても信じられない。だって

「 でも、息、してますよね？ 」

「 ええ、呼吸も脈拍も正常。でも、言っただけなの。
…… クラールヴィント。 」

シャマルさんの指示を受け、デバイスから立体映像が出力される。
画面にはキャラの姿といくつかの数字が映ってる。

数字が何を表してるのかは良く分からないけど、キャラの状態についての事だっというのは何となく分かった。

「他の数値はてんでデタラメ。はつきり言っつて、測定機器の異常って言われる方がよっぽど納得できる位よ。後は……、コレね。」

そう言っつて、シャルさんが画面の一部を指差す。

そこには数字が表示されていて、何を表しているかは分からないけど、「0」と表示されていた。

「この数字は？」

「キャラちゃんの魔力量の現在値よ。」

「えつと……、魔力切れっつて事ですか？」

「それよりも酷い状態ね。キャラちゃんの場合、完全にゼロなの。リンカーコアがある以上、たとえそれが損傷していたとしても、ほんの一刻からも魔力が無いのは可笑しいの。リンカーコアが有るのに魔力が生成されない、それはつまり、死んでるっつていう事とイコールだから。」

「え？ でも……。」

「うん。息もしてるし心臓も動いてる、だから、間違い無く生きてはいるの。でも、だからこそ分からないのよ、今のキャラちゃんはどういう状態か。正直に言っつて、私にはこれ以上は何も出来ないわ。」

「そんな……。」

キャラは相変わらず目を閉じたままで、傍目には眠ってるようにしか見えない。

けどシャルさんが言った事が本当なら、今キャラの体には異常が起こっている。もしかすると、このまま目を覚まさないなんて事もあるかも知れない。

一体、キャラに何が起きて……。

「やはりこうなっていたか。全く、悪い予感ほど良く当たる。」

「「!?!」」

今の声、誰!?

シャルさんの方を見ると、私と似たような反応をしている。声で何となく分かったけど、シャルさんじゃ無いらしい。とはいえ、ティアでもなさそう、なら、誰が?

私は、声のした方向、ティアがいるヘリのハッチ部分へ視線を向ける。

そこには、リイン曹長と同じ位の大きさの、金髪の女の子が浮かんでいた。

「えつと……。」

「藍だ。キャラの使い魔みたいなものをやらせてもらっている。」

「じゃあ、貴方がさっきの?」

「ああ。そういえば初めましてだな。それよりも、だ。」

ハッチから入ってきた藍さんは、私達の視線位の高さをふよふよ

浮きながら私達の方に飛んでくる。良く見ると、右手に何か持っている。

あ、投げた。

「キュ!？」

「ちょ!？　これ、まさか竜!？」

「キャラのペットだ。害を及ぼすようなものじゃ無いから心配しないで良い。今は気絶しているから、その辺に転がしておいてくれ。」

藍さんはそのまま、まっすぐにキャラの傍まで来て着地した。

放り投げられた竜？　は目を回したままヘリの隅っこに転がされてる。

……良いのかなあ？

「シャル、キャラの容態は？」

「えっと……。」

シャルさんの説明を受けながらも、藍さんは自分でキャラの事を調べてる。

とは言っても、私には藍さんが何をやってるかなんて分からないから、多分、としか言えないんだけど。

「と、いう訳なの。ところで藍さん、キャラちゃんの状態に、何か心当たりは無いかしら?。」

「それは、どういう意味でだ?。」

「藍さんなら、キャラちゃんの事も良く知ってるかな、って、それだけよ。」

「……そういえば、貴方とはやては、色々気付いていたのだったな。」

「それじゃあ……。」

「まあ、その話は今は良いだろう。それで、この子の事についてだったな。」

「藍さんには、今のキャラがどんな状態が分かるんですか？」

途中からよく分からない話になったせいで付いてこれてなかったけど、キャラの話に戻ってきたっぽいのですかさず口を挟んだ。

「予め言っておくが、あまり良い話では無いぞ。もし知った所で何が出来るといふ事も無いしな。それでも良いか？」

「お願いします。」

「そうか、なら説明するぞ。信じ難い部分もあるだろうが、とりあえずは最後まで話を聞いてくれ。あの子は今」

ゆりかご外部

『47部隊、22部隊の援護に回ってください。38部隊は今から20秒後に現空域から退避してください。一発でかいの撃ち込みます!』

念話を通して周辺部隊へ指示を出しながら、私は詠唱に入る。

眼前に見えるのは、空戦魔道師部隊とガジェットとの戦闘風景。

『はやてちゃん、照準はOKです。』

「よっしゃ、なら行くで!」

私とユニゾンしているラインが、より多くのガジェットを巻き込める座標を計算、照準を微調整してくれる。

既に詠唱は終わつとる、なら、後は解き放つだけ!

「3……、2……、1……、ディアボリックエミッション!」

カウントが終わり、局員が退避したのを確認してから広域魔法を発動させる。

ガジェット群の中心地点から発生したそれはあつという間に広がって、幾つかの部隊を丸々飲み込んでいった。

「命中確認! 撃ち漏らしはありませんです。」

「そか。」『この空域は制圧完了しました。38部隊は引き続き、残りの部隊の援護をお願いします。』

ユニゾンアウトしたラインの報告を受けてそれを元に部隊を動かしながら、私はふう、とため息をついた。

今現在、ゆりかご外部における戦闘の大勢は、既に決しつつあつ

た。

開戦当初、空戦魔道師とガジェットの数の比率は40対60程度。一般的な空戦魔道師の能力とガジェットの持つAMF、これらを踏まえても、実際の戦力比は数のそれとあんまり変わらへん。ここに極一部の高ランク魔道師を加えてようやく五分五分、といった所やった。

けど、今は私達が押している。

その理由は、キャラが担当していた空域にある。

元々あの空域にはキャラしか居らず、そのキャラがリタイアしてしまった今、周辺には一機のガジェットもない。後は、この空域を足がかりに残りの空域を制圧していくだけ。

均衡を崩されたガジェット部隊は各個撃破されていき、順調に数を減らしていつている。

「大丈夫ですか、主はやて？ 消耗が激しいのなら、一端休んでは？」

「大丈夫や、まだやれる。」

ため息に気付いたのか、私の傍にいたシグナムが声を掛けてきた。シグナムはついさっき、ラインと一緒に私の所に来てくれた。

「シグナムこそこんな所に居てて良いんか？ 藍さんの方がどうなってるんか、気になってるんと違う？」

あと、それと一緒に藍さんも来てくれた。

正確には、こっちに向かってきた藍さんをシグナム達が追いかけてきたらしいんやけど。

にしても、さっきは驚いた。いきなり現れた竜が鳴き声を上げながら、私の方に突進してきたんやから。幸い、私に当たる直前に藍

さんがその竜を蹴り飛ばして気絶させてくれたおかげで大事は無かったんやけど、それでもちよつと怖かった。

話によるとその竜はキャロの相棒みたいな存在で、突進してきたのはキャロの臭いがしたかららしい。さっきまでキャロを抱っこしてたから、臭いはその時に付いたんやと思う。

「ですが……。」

「じゃあ命令や。ヘリに行つて藍さんの監視、お願いできるか？」

「それは……。」

「情報提供には感謝するけど、あの人はあくまで正体不明のアンノウン。警戒せんといかん。」

我ながら最低な事を言つてると思う。

キャロの事を知らせてくれた人に対して、その信用を踏みにじるも同然の事を言ってるんやから。

でも……。

「……分かりました。」

「ごめんな、嫌な仕事させてしもて。」

「いえ。」

では、とシグナムは私に背を向ける。そして

「主はやても後でヘリに来て下さい。その左手、放っておく訳にはいきませんから。」

その言葉を最後に、ヘリの方へと飛んでいった。

「嘘が下手ですよ、はやてちゃん。」

「何のことや?」

「リインに誤魔化しは効かないですよ? 本当はキヤロちゃんが心配だからシグナムに向かわせたんじゃないですか?」

「さあ、どうやるなあ?」

「あと、左手もです。さっきまでユニゾンしてたんですから、はやてちゃんの状態は良く分かってるんです!」

「あっちゃあ……。そっちは盲点やったなあ。」

「左手、血が出ちゃってるです。何かあつたんですか?」

「ちょっと強く握ってしただけや。大丈夫……痛ッ!!」

「あーもう! 大丈夫ですか!?」

平気な所をアピールしようと手を振ってみると予想よりも痛かった。

これは、思ってたより深いかも分からんなあ……。

「へーきへーき。こんな放つといっても大丈夫やて。」

「駄目です!! 応急処置しますから、手を出してください!!」

準備を始めるリインに苦笑しながら、私は左手を開いてリインの前に差し出す。

掌には爪が喰い込んだような跡がいくつかついていて、私はそれを見ながら、切っ掛けになった出来事を思い出す。

「今のキャロの状態だが、生きていても死んでいても言えない。というのも、体自体は普通に活動しているのだが、肝心の魂がここには無いからだ。」

「魂？」

「ああ、魂だ。普通ならこんな事は起きない。弱ってこそいるが体は生きている。魂だけが抜ける事は有り得ない。」

「なら、何で……？」

「キャロの体は少々特殊でな。だが、通常の状態ならまずこんな事にはならない。詳しい説明は省くが、霊力、魔力、妖力のいずれかが少しでも残っていれば、こうはならなかった。」

「霊力？ 妖力？ いや、それよりも魔力が残ってれば、って？」

「言葉通りだ。そういう意味では、キャロが受けた魔力ダメージは原因の一つではある。だが、それだけではこんな事にならないし、直接的な原因でもない。例えるなら、桶屋が儲かったのを風のせいにするようなものだ。」

それから藍さんの説明は続いたけど、正直に言っただけには良く分かんかった。

最後には、お前が責任を感じる事は無い、とも言ってくれた。けどそう思おうとしても、私の腕の中でキャロが言った「ごめんなさい」を思い出す度に、罪悪感がふつふつと湧き上がってくるのを感じた。

結局私に出来たのは、やり場の無い思いに耐えるために左手をぎゅっと握る事くらいやった。

「やっぱり、私のせいなんやろなあ……。」

「はやてちゃん？」

「何でもあらへんよ。リイン、終わった？」

「はいです！ でも、あんまり強く動かしたら駄目ですよ。」

「わかった。ありがとな、リイン。」

応急処置を済ませた左手を開いて、私は夜天の書を手に取った。気にならない訳が無い。けど、今はまだ戦闘中。

今やれる事をやらないで後悔する、それだけは絶対に嫌やから。

「反省も後悔も全部後回し。今自分が出来る事を全力で。行くで、リイン！」

「はいです!!」

そう自分に言い聞かせて、後悔のループに入りそうな思考を無理矢理押さえ込む。でも

「世界はいつもこんな筈じゃなかった事ばかり」

ずっと昔にクロノ君から聞いた言葉が、なぜか頭から離れへんかった。

第74話 たましいのゆくえ（後書き）

この話本当ならもつと続くんですが、長くなりすぎるのでここでカットしました。後編にあたる75話は、なるべく早くに上げたいとは思っています。その影響で、完結までの話数がまた+1されました。書いても書いても終わらないですw

以下、Q&Aです。

Q・ちよつと藍しやまが冷静すぎるように見える。前話ではもう少し動揺してたのに……。

A・短い時間の間に色々把握した影響です。とりあえず、内面を隠せる程度には持ち直したみたいです。

Q・ぱつと出の藍を皆が信用しているのに違和感を感じるんですが……。

A・信用しているというよりは、目まぐるしく事態が動いているせいでそんな余裕が無いただけだったり。

はやてとシヤマル、それとシグナムは一応疑ってますが、そんな事を気に掛ける位なら今やるべき事をやる、という思いの方が強いです。

Q・アレ？ 誰か忘れて……。

A・ザファイラさんは別方面の部隊と合流して戦闘中です。

では、また次話で。

第75話 絶望「全人類のナイトメア」(前書き)

タイトル通り鬱展開全開です。

第75話 絶望「全人類のナイトメア」

ゆりかご跡地 スカリエッティのアジト地下

「はああああっ!!」

「ククク……ハハハハハ!!」

無防備な格好で笑い声を上げるスカリエッティに、私はバルディッシュの魔力刃を振り下ろす。

案の定、魔力刃はスカリエッティに当たる直前、発生した障壁によつて止められる。

障壁と拮抗してギギギ、と音がするが、時間が経つにつれ、高濃度AMFにより魔力刃の構成が脆くなっていく。

「無駄だよ、その刃は私達には届かない。今まで何度も試したじゃないか。なのに、まだそんな無駄な行動を続けるというのかね？」

「うる……、さい!!」

「八つ当たりは見苦しいよ？ まあ確かにキミからすれば、アレはなかなか衝撃的な結末だったのだろうね。現実逃避したい気持ちも分からないでもない。」

「!？」

「凶星かい？ おお、怖い怖い。」

私達が戦っている部屋、そのスクリーンには六課とキャロの戦闘

映像がリアルタイムで中継されていた。

戦闘開始から決着、落とされたキャラと、そのキャラを腕に抱きながら絶叫するはやて。

その一部始終を私とエリオ、それとアギトは見ているだけしか出来なかった。

スカリエッティの口を塞ぐかのように、私は何度も魔力刃を叩きつける。

構成の脆くなった部分は魔力で補いながら、この状況を打開する為に頭を巡らせる。

このままだと、AMFのせいでジリ貧は確実。……なら！！

『バルディッシュ、オーバードライブ。』

Sir?

『このままじゃ無理。だから、多少無茶してでも強引に突破する。いいね?』

Yes Sir.

今からやろうとする事は半ば賭けに近い。

でも、このままだと待っているのは確実に魔力切れ。そうになるとこちらに勝ち目は無くなる。

無茶な事には変わらないけど、このまま手をこまねいてはその無茶すら出来なくなる。それだけは避けたいから。

「行くよ……。バルディッシュ!!」

Sonic drive get set.

結果から言うと、私達は賭けに勝った。

残っていた魔力を振り絞って作り上げたライオットザンバーは、スカリエッティの張った障壁を打ち貫いた。返す刀を無防備状態のスカリエッティに叩き付け、反対側の壁まで吹き飛ばした。戦闘機人の方は、私にタイミングを合わせて突撃してくれたエリオの手で気絶させられた。

壁に叩きつけられたスカリエッティは意識こそ失ってはいたものの、壁に背を預けてうずくまり、最早戦える様には見えない。

戦闘機人をエリオとアギトに任せ、私は周囲を警戒しながら、スカリエッティへと近付いていく。

「これで終わりです。ジェイル・スカリエッティ、貴方を逮捕する。

」

バルディッシュの先端を突きつける。

魔力の節約のため、バルディッシュから魔力刃は出していない。

何はともあれ、これでスカリエッティは確保できた。

筈なんだけど

「……何がおかしい？」

絶体絶命の状況だというのに、スカリエッティの表情からは絶望といったものを感じない。

それどころか、ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべている有様だ。

「いや、済まない。つい、ね。それよりも、キミ達はこれで終わりと、本気で思っているのかな？」

「……どういう意味だ？」

もう決着はついた筈。冷静に現状を省みても、今のスカリエッテの発言は負け惜しみもいいところだ。ただど

「疑問に思わなかったかい？ ここに来るまでにガジェットが一体も配備されていなかった事、ウーノ以外の戦闘機人がいない事、そして何より、私がここに残っている事。」

「それは……、まさか！？」

「気付いたようだね。でも、もう少し遅かったね。」

スカリエッティは相変わらず俯いたままで、私はそれを見下ろしている。

でも、何故だろう？ むしろ見下ろされているのは私の方じゃないかと感じるのは。

「私は唯の罔だよ。キミのようなSランクオーバーの魔道師を一人でも多く足止めする為のね。敗れはしたものの、役割は果たした。後は本命が何とかしてくれるだろう。そう、僕達の本命は。」

ゆりかご最深部 コントロールルーム

「あらあらあら、ついにドクターもやられちゃいましたか。」

眼前に映る幾つものウィンドウ、そのうちの一つを見ながら、女性には全然残念そうに見えない様子のため息を一つ。そのため息には、失望と呆れが半々に混じっていた。

「まあ、仕様がないですわね。ウーノ姉様とドクターだけじゃ、防御は出来てもロクな攻撃は出来ませんし。」

彼女にとって、今まで起きた事は全て想定の範囲内。

当初は決行自体が危ぶまれた作戦。しかしそれは彼女のアイデアを切っ掛けに、今や十分に実現可能なものとして息をふき返していた。

「Sランクオーバーのうち、一人はゼストさんに、もう一人はドクターによって抑える事に成功。一人は未だにゆりかごの外。そして最大の脅威は、お仲間達と戦って同士撃ち。こうまで上手く行くなんて、自分の才能が恐ろしいですわ。」

自分の立てた作戦が上手く行っている実感から、彼女 クアット口の気分は否応無しに上がって行く。

今クアット口を支配しているのは、まるで世界が自分を中心に回っているかのような万能感。

伊達で付けていたメガネを放り投げ、マントを翻す。

ゆりかごのコントロールは、聖王の器を介してクアット口の元にある。

今この場において、クアット口はかの聖王と同等の力を持っているのに等しい。

その事実がクアット口を更に後押しする。笑いが止まらないとはこの事だ。

「後はゆりかごに進入したお馬鹿さん達を掃除するだけだけど、そ

れもあと少しの事。まあ、精々頑張ると良いですわ。もがけばもがく程、こちらに取っては最高の見世物になるんですから。」

そう言つて、クアットロは別のウィンドウに顔を向ける。

ゆりかごに進入したメンバーが希望を胸に必死に戦う姿、そして、それが絶望に変わる瞬間。

その一瞬を見逃さないように、クアットロはウィンドウから目を離そうとはしなかった。

「片やセツちゃんのおかげでガス欠寸前。片やトーレ姉様のおかげで満身創痍。しかも現在は陛下と戦闘中。いつまで意地を張られるか見物ですわね。」

ゆりかご内部動力炉

「よし、粗方片付いたな。」

ゆりかごの飛行能力を支えているメインエンジン。

その正面に立っているヴィータは、自分に課せられた任務を思い出しながら、正面にある動力炉を見つめていた。

彼女の周囲にはいくつものガジェットの残骸が落ちている。それから全てが、彼女の鉄槌によって打ち抜かれた成れの果てである。

周囲に反応無し。ただし、先程のステルス機は警戒してください。

「言われねーでも分かってるよ。今のうちにやるぞ、アイゼン。」

J a w o h l .

アイゼンのカートリッジシステムが回転し、中からカートリッジが一発排夾される。

ヴィータは手元に残っていたカートリッジを一つ、新たにアイゼンに挿入する。

「今一発使ったから、残り三発か……。リミットブレイクは使えねーか。」

そう一人ごちながら、ヴィータは動力炉の直前へ向かって飛んでいく。

アイゼンの間合いや取り回しを考えた上で最適な位置に移動した後、アイゼンを構える。

（ギガントシユラークだと少し厳しいか？）

出来る事なら、己の最大の力をもって当たりたかった。けど、現実はそのはいかない。

ゆりかご内部での連戦により、カートリッジは残り3発にまで減少している。

この状態だと、ヴィータに選べる手段からリミットブレイクが除外されてしまう。

（……けど、だからって、諦めるなんて真似は絶対しねえ！！）

カートリッジが足りない？ リミットブレイクが撃てない？

例えそうだとしても、それらはヴィータが止まる理由にはならない。

はやてが自分に任せてくれた。はやてが自分を信じてくれた。主の信頼に応える事。夜天の主に仕える鉄槌の騎士にとって、それは誇りそのものだから。

「行くぞ、アイゼン!!」

G i g a n t f o r m .

ガシヨツ、ガシヨツとアイゼンの機構が作動し、カートリッジに充填されていたなけなしの魔力が全て開放される。

そしてアイゼンの形態も変化。槌の部分が動力炉と同サイズにまで巨大化する。

その姿は、巨人の名を冠するに相応しいものであった。

「轟天、爆碎……。」

ここでヴィータは深呼吸を一つ。

これから自分が行うのは、真正正銘の一発勝負。

今から出す一撃に全てを賭ける気持ちで、ヴィータは神経を集中させる。

「ギガント・シュラーーーーーーク!!」

渾身の力で振り下ろされた鉄槌が、動力炉に叩き込まれる。

アイゼンと動力炉の障壁が衝突し、互いに干渉し合う。

ここまで来れば、後は純粋な力勝負のみ。

ギギギギギギギギギギ……!!

「まだ……、まだあああああつ!!」

ヴィータの体から、残りの魔力が振り絞られる。

それら全てがアイゼンに注ぎ込まれ、動力炉を破壊するための力に変換される。

後の事なんて考えない全額ベット。現状においてヴィータに繰り出せる、正真正銘最大の一撃だった。

そんな彼女に足りないものがあつたとするのなら

「あ。」

それは、あまりにも呆気ない幕切れ。

アイゼンに供給される魔力が切れ、巨大化が解ける。

呆然とするヴィータの眼前には、未だその機能を失っていない動力炉が、悠然と佇んでいた。

「嘘、だろ……。」

その呟きとは裏腹に、ヴィータに残っている冷静な部分は事実を正確に認識していく。

己の一撃は届かなかった。それだけではない、今の一撃で、残りのカートリッジを全て消費してしまった。

今以上の威力が求められる状況であるにも関わらず、今の一撃に肩を並べるレベルの攻撃すら不可能であるという事実を、ヴィータ

は理解してしまった。

「……畜生。」

ヴィータの胸に去来するのは絶望と、それよりも大きな……悔しさ。

「畜生、畜生……。」

自分の鉄槌が届かなかった。はやての期待に応えることが出来なかった。そして何より、本当の意味での全力を出せなかった。

もしもカートリッジの予備があと数発あれば、ギガントよりももう1段階上のリミットブレイクが撃てた。その上で、アイゼンの強度限界ギリギリのレベルの攻撃を叩き込んだら、あの動力炉だって破壊できたかもしれない。いや、間違いなく破壊できていた。

けど事実として、ヴィータに許されていたのは3発分のカートリッジのみ。

全力を出す事を許されないままに、ヴィータの運命は決定された。

「ちつくしよおおおおおお!!」

ゆりかご内部 聖王の間

マスター……。

『大丈夫だよ、レイジングハート。』

レイジングハートに答えて、なのはは壁にめり込んでいた自分の体を起こす。

その拍子に、壁の破片がいくつかこぼれ、地上に落下していった。その直後、自分の元に飛んできたシューターを障壁で防ぎながら、負けじと牽制のシューターを撃ち返す。

シューターの向かう先にはレリックによって聖王としての力を解放されたヴィヴィオが、怒りの形相でこちらを睨んでいた。

（強い……。これが、ヴィヴィオの力だっているの？）

数分前、聖王の間へと到着したなのはを待ち受けていたのは、レリックを埋め込まれ、ゆりかごの核となったヴィヴィオであった。

レリックの魔力によって強制的に体を成長させられ、クアットロの制御の元、固有レアスキル「聖王の鎧」を展開させたヴィヴィオは、なのはに対して牙を向けた。

聖王モードでの圧倒的な戦闘力を振るうヴィヴィオに対し、流石のなのはも苦戦していた。

聖王の鎧の強固な防御の前に、アクセルシューターは牽制以外の意味を見出せなかった。

ブラスタースピット総掛かりで施したバインドは、クリスタルケージと併用してさえ、ほんの数秒の足止めにしかなかった。

頼みの綱の砲撃は、発射を見切られて手痛い反撃を喰らう事になってしまった。

なのはの予想では、ヴィヴィオの制御には体内に埋め込まれたレリックが鍵になっている。そして、その予想は大当たりであった。

だとすると、なのはのやるべき事は決まっている。

非殺傷設定、純粹魔力ダメージによるレリック破壊。聖王の鎧の防御を貫ける、最大火力での一撃を直撃させれば良い。

勝利条件は分かっている。後はそれを実行するだけ。なのだが

『くつつ、やっぱり、キツイ……。』

ヴィヴィオの隙を突いてバインドに成功するものの、ものの数秒で解かれてしまう。

こんな短時間では、いくらなのはであろうとも目標とする火力をチャージする事など出来やしない。

ゴールは分かっているのだが、そこに到達する道が見えてこない。今のなのはは、そんな状況であった。

だけど、そこで終わりにする程、エース・オブ・エースは甘くない。

マスター、エリア4までサーチ完了。残り1エリアです。

『うん。出来るだけ急ぎでお願い。』

All right.

なのはとレイジングハートの操作により、この戦場と遠く離れた地点で、サーチャーが飛んでいく。

ワイドエリアサーチ、略してW・A・S。

ヴィータと別れた直後に出しておいたそれは、なのはとヴィータとは別のルートをこっそり通ってゆりかご内部をサーチしていた。

今現在、サーチャーが探しているのはヴィヴィオを操っている張本人、クアットロの居場所である。

それさえ見つける事が出来れば状況は変わる。

場所さえ分かれば、なのはは壁抜き砲撃でクアットロを撃ち抜ける。

ロストロギアを消滅させるならともかくとして、壁を抜いて戦闘機人ひとり昏倒させる位なら、数秒のチャージとカートリッジ数発で事足りる。もし制御を司っているのがクアットロではなく周辺の機械群であったとしても、砲撃で空けた穴から乗り込んでいつて破壊すれば問題無い。

コントロールさえ解除してしまえば、ヴィヴィオと戦う事も無くなる。万一、制御を離れてもなお聖王モードのままである場合も、まともに戦闘する事は不可能だから、拘束しての最大火力でレリックを破壊してしまえば良い。

勝利へのたった一つの道のり。そのための準備は既に済ませてある。

後はその道が目の前に出てくるまでひたすら耐え続ける。それが今のなのはに出来る最善だった。

そんな彼女に、一つだけ不幸があったとするのなら

……！！ Caution！！ Caution！！

『レイジングハート！？』

対象エリアに高濃度AMFを確認。サーチャーの反応、……消失しました。

「嘘！？　ここまで来て!？」

それは様々な要因によってもたらされた全くの偶然。

本来、地上部隊への攻撃に出される筈だったガジェット?型が、作戦変更によりお荷物になってしまった事。

お荷物になったガジェットが、全てゆりかご内部に運び込まれた事。

その中でも配備に漏れた極一部のガジェットが、ランダムにゆりかご内を巡回していた事。

そしてそのガジェットのうちの一体に、サーチャーが不幸にも鉢合わせしてしまった事。

それらは全て、意図して行われた事ではない。

しかし事実として、それらはなのはの頭上に伸びていた、たった一本の糸を切ってしまう結果へと繋がってしまった。

ガジェット?型の出したAMFにより、頼みの綱のW・A・Sは失敗してしまった。

そしてその情報は、クアットロの元にも送信される。

「あらあら……。バインドばかり攻めてこないと思ってたら、こんな事を企んでたんですか。でも、残念でした。」

内心では冷や汗ひとつ。それを意識しないようにしながら、クアットロは気を取り直す。

正直言っただけだったが、既にその脅威は取り除かれた。

「ふふふふ……。」

既に勝敗は決した。まだ抵抗が続いてはいるものの、それも時間の問題。

「心が軽い。こんな幸せな気分は生まれて初めて。」

あと1時間もすれば、ゆりかごは目標ポイントに到達する。

そうなってしまうえば時空管理局も恐るるに足らず。世界中を敵に回しても勝利できる力が手に入る。

そう

「もう何も怖くない

！！」

ゆりかご目標ポイント到達まで　あと1時間と10分。

???

「……アレ？」

何で私、こんな所にいるんだろう？

記憶が確かなら、私はゆりかご上空ではやてさんと戦ってた筈なんだけど……。

このまま寝転んでいても仕方ないので、とりあえず体を起こす事にする。

「うわあ。」

目の前に広がる光景に、私は息を飲みました。そこにあつたのは、一面の赤色。彼岸花の花が、辺り一面に咲き誇っていました。

どうやら彼岸花の花畑、その中心で、私は気を失っていたみたいです。

「いつの間にか、服装まで変わってるし……。」

服を見てみると、いつもの普段着でも萃香タイプのバリアジャケットでもなくなっていて、何故か真っ白な着物になってました。

あと、夢幻珠が無いのは仕方ないとして、左腕に付けていたペスカトーガも無くなっていました。

「藍、らん……、いないみたいですわね。」

現状について何か知ってるかとも思い藍を呼んでみるものの、返事がありません。

どうやらここには、私一人しかいないみたいです。

「……でも、そっちの方がいいかもね。」

服装をチェックした際に気付いた事が一つ。

もしその予想が当たっていたのなら、藍はこんな所には居ない方がいいですからね。

とりあえずいつまでもこんな所にいても仕方ないので、適当に方向決めて歩いてみますか。

「フリードもないけど……、まあ、向こうには藍もいるし大丈夫でしょ。」

ゆりかご決戦後に藍達の扱いがどうなるか正直心配ですけど、出来るだけの事はしておきましたからね。

藍達を私の元から離れさせて、直接の関わりを断ち切らせた。

その上で、ドゥーエさんを排除するついでに藍からレジアス中将に恩を売る事が出来た。

加えてスカさんとした約束もありますから、そう酷い事にはならないでしょう。

後は六課の皆さんが口裏を合わせてくれれば、どうにでもなります。

「この辺はこれ以上わたしが考えても仕方ないですね。それよりも」

今はそれよりも自分の事。

歩いているうちに段々と思い出してきた、ここに来る直前の私の状況。

それと今の自分の状態を見て、何となく予想がついてきました。

歩く事数分。私は彼岸畑を抜けて、砂利の地面を踏みしめながら歩き続けています。

いつの間にか、周囲には霧が出てきて、遠くから水の流れる音が聞こえてきました。

私は水音が聞こえる方に向けて、更に歩いていきます。

そこから更に数分。今私の目の前に流れているのは巨大な川。

やっぱり川霧だったか、と予想が当たっていた事を確認しながら、私は周囲を見回します。

「ここなら……。あ、やっぱりいましたね。」

ここでも自分の予想が当たっていた事を確認して、私は見つけたものの近くへ歩いていきます。

歩いた先にいたのは、岩に背を預けて、シエスタ的な意味で船を漕いでいる女の人でした。

どうしようかと考えるものの、このままでも仕方無いので、とりあえず起こしてみる事にする。

大丈夫、既に覚悟は決めてある。

私がここに来るまでの状況、それと、「左前に着付けられた真っ白な着物」。

その2つから導き出される結論には、とっくに気付いているから。

「あのー、すいませーん。起きてください、小町さん。」

「……ん？ 何だい、折角人が良い気持ちで寝てたっていうのに。」

ふああ、と欠伸を掻きながら女の人 小野塚小町さんが起き上がります。

その手に持っている鎌が彼女の職業、つまり、死神である事を分かりやすく示していて

「何、じゃありませんよ。仕事です仕事。そんな風にサボってて、閻魔様に怒られても知らないですよ。」

「サボリじゃない、ちよつと休憩してただけだって。程良い休憩によつて、むしろ効率が上がるってもんさね。にしても、まさか死人の方から催促されるなんてねえ。珍しい事もあるもんだ。」

そう言っ てカラカラと笑う小町さんを見ながら、私はこれについても自分の予想が外れていなかった事を理解しました。
ああ、やっぱりそうだったんだ

「私、ほんとに死んじやってるんですね。」

第75話 絶望「全人類のナイトメア」（後書き）

ゆりかごメンバー大ピンチの回。そして、クアットロさん大暴走の回でした。

Q・ちょ！？ クアットロ、そのセリフは……。

A・何も言わないで見守ってあげましょう。

Q・キャラが藍やフリードと離れた理由は？

A・今回語られた通り。レジアスに恩を売りつつ、自分との関わりを切らせる為。藍に説明したのは前者までで、後者はキャラだけの秘密でした。

Q・花の異変でもないのに彼岸花が咲いてるのは？

A・彼岸花の開花時期は9月中旬、そして、ゆりかご決戦の日時は9月19日です。正直言って完全に偶然です。むしろ書いててこっちが驚きました。これが運命……ッ！！

Q・キャラって一応女の子だから、服が左前って普通じゃない？

A・和服と洋服で違います。洋服では男性は右前、女性は左前となっていますが、和服の場合、男女とも右前が普通です。なので死装束の場合、男女問わず左前になります。

では、また次話で。次回、「あのお方」の登場です。キャラは今までのツケを清算する時が来たようです。

第76話 彼岸帰港（前書き）

タイトルは誤字にあらず。

いつの間にかPV400万、ユニーク50万、お気に入り登録2500突破してました。……解せぬ。

いや、凄い嬉しいんだけど……ねえ？

いつも読んでくださる読者様、この小説を面白いと感じてくださる皆様に感謝感謝です。比較的马ジで。

第76話 彼岸帰港

「……ふうん。で、結局その後どうなったんだい？」

「何とか脱出は出来ましたよ。じゃなきゃ、四年ほど早くこのお世話になってますから。」

「はは、違い無い。」

「けどそんな私と入れ違うようにフェイトさんが最深部に突入しちゃって。あの時は大変でしたねえ。」

「またフェイトさんかい？ 何というか、その人も大変な目に遭ってるんだねえ。まさか、態とじゃないだろうねえ？」

「うーん、どうなんでしょう？ 確かに原因は私ですけど、決してそういう風にしようなんて意図は誰も持ってませんでしたよ？」

「不幸な行き違い、って奴かい？ 成程、災難だ。」

「どっちが、ですか？」

「両方、だよ。お互い適切な接し方が分かってないからそんな事になる。距離感さえ掴めれば、もう少し上手くやれたと思うんだけどねえ。」

「そついつものですか？」

「そついうもんさね。」

此岸と彼岸の境界に流れている三途の川。その川辺にある岩場の一角で、私は小町さんと世間話中です。

私が小町さんを起こしたのは、死神である彼女にしか出来ない事があつたから。

船に乗せてもらつて向こう岸に行こうと思つてたんですけど、いつの間にかこうやって昔にあつた笑い話（主にフェイトさんオチ）をネタに井戸端（川端？）会議を開催している自分がいました。誘導されたような気がしますけど、まあ良いです。小町さん聞き上手だし、話してて楽しいのは事実ですから。

「ま、結局こうなっちゃったんですけどね。」

「何がさ？」

「今こうしてここにいますですよ。好き勝手やってた訳だから自業自得なんですけどね。」

「聞いた感じ、随分とまあ面白い人生だったんだねえ。でも、少し意外だな。」

私の話を聞いた小町さんは呆れ半分といった感じで苦笑しています。

客観的に見たら、私の人生ってコントそのものですからね。今思い返してみても、自分の事ながらそう思う。

「あはははは……、やっぱり、そう思います？　で、意外って何が

ですか？」

「いやさ、アンタまだ若いんだから、もっと長生きしたかったんじゃないかって。ここに来る奴って現世に未練たらたったり、そもそも自分が死んだ事に気付いてなかったりする奴ばかりだから。」

「ああ、そういう事ですか。」

言われてみれば確かにそうかも。

キヤロとして生きるようになってから今年で10年目。人間の寿命と妖怪のそれ、どっちで考えたとしても、人生はまだまだ始まったばかり。

楽しい事も辛い事も、これから沢山出会う筈だったんだろうから。

……でも

「まあ、なっちゃったものは仕方ないですからね。死んだら三途の川を渡って閻魔様の裁きを受ける、そういうシステムなんですから。」

言外にそろそろ仕事してくれませんかと訴えながら、私は小町さんの疑問に答える。

死んでも話が出来るのは意外だったけど、だからと言って何が変わる訳でもない。

こうして死んでしまっている今、私が出来事なんてそれ位しか無いんですから。

「……。おっと、ちょっとばかり話し込んでしまったね。悪いね、船を用意するから付いてきてくれ。」

「はい。ありがとうございます。」

そう言って、小町さんは川辺に泊めてあった小船の方へと歩いていきます。

最初に小町さん、次に私が船に乗り込んだ後、岸辺の杭に括り付けてあった縄が回収されて、小船がぶかぶかと三途の川に浮かんでました。

「はいよ、これで準備OKさね。」

「ありがとうございます。」

「礼なんていらないよ。こっちはこれが仕事なんだから。」

船に積んであったオールを手に、小町さんが船を発進させます。あとは彼岸に着いて裁きを受けて輪廻の輪をくぐって、それで本当におしまい。

今の記憶を失って、どっかの誰か、いや、ひよっとすると人間以外の何かに転生するんでしょうね。

……アレ？ そういえば何で私、前世の記憶なんて持ってたんでしょう？

「ロ、キャロ。」

「え？」

「どうしたんだい、ぼーっとして？」

「いえ、何でもないです。」

いけないいけない、つい上の空になってたみたいです。
でも実際、船の上は暇なんですよねえ。

「小町さん小町さん。」

「ん、何だい？」

「ちょっと気になったんですけど、後どれくらいで着くんですか？
霧のせいで向こう岸が全然見えないんですけど。」

「そうさね……、あ。」

「！？」

「そういえば、まだアンタから貰ってなかったね。」

船を漕ぐ手を一端止めて、小町さんはこちらに手の平を差し出してきました。

「えーっと、この手は？」

「三途の川の渡し賃、まだ領収させてもらってなかっただろ？」

ああ、そういえばまだでしたね。

確か、この時に渡す金額で川の長さが変わるんだったっけ？
善行を積んでれば金額が多く、逆に悪行三昧だと少なくなるとか、
どういうシステムなんですかね？

誰かがこっそり懐にお金を入れて回ってたり……、どう考えても
新種の妖怪ですねありがとうございました。

まあとりあえず、お金、お金……と。

なん……だと？

「小町さん小町さん。」

「お、見つかったかい？」

「いや、それが……。」

「ん、大した金額が無かったのかい？ それは諦めるしかないね。とは言っても、そのうち着くから心配する事でも」

「無いんです。」

「……へ？」

「持ち物全部見てみたけど、一銭も無くて。この場合、どうなるんですか？」

「……辿り着けない。」

「えっ？」

「ここだけの話、金額と距離は反比例してるんだ。二倍の金額だと距離は半分、っていう風に。さて、ここで問題。分母にあたる金額がゼロの場合、距離はどうなると思う？」

「えーっと、無限、じゃなくて、解無し？」

「正解。」

「つまり、このままだと私は永遠に川を渡り続ける事になると？」

「ああ。そして私はその職務上、永遠に船を漕ぎ続ける事になる。」

「……。」

「……。」

「小町さん!!」

「はいよ!!」

この瞬間、私と小町さんは完全にシンクロしていたと思う。

即座にUターンして元の場所へと漕ぎ出す小町さん。

目的地までの距離は無限でも実際に漕いだ距離が有限だったおかげで、行きに掛かった時間とほぼ同じだけの時間をかけて、私達はさっきの岸に戻ってきました。

「はあ、はあ……、危なかった……。」

「お疲れ様です。いやー、災難でしたねえ。」

「原因はアンタだろうに……。フェイトさんの気持ちがちよつとだけ分かった気がするよ。」

「むづ……。確かにそうですけど、事前に確かめなかった小町さん

にも非はあると思いますよ。」

「うつ、それを言われると弱いねえ。でもさ、誰がこんな事予想できるかい？」

「そうですね、誰にも予想できませんよね。なら当然、私にも責任は無いですよね？」

「まあそうなるね。全く、口の減らない子だね。」

「いやー、それほどでも。」

「褒めてないって。」

とりあえず戻って来れた事に安心して、私と小町さんは軽口を叩き合う。

さっきまで息を切らしてたのにもうケロっとしている辺り、やっぱり小町さんも妖怪なんだなあと思う。

「うーん、でも困ったな。このままだとアンタを彼岸に運んでやれない。」

「何とかならないですか？」

「そうだねえ……、仕方無いか。」

「？」

「特別だ、タダで乗つけてやるよ。関わっちまった以上、見捨てるのも寝覚めが悪いからね。」

「良いんですか!？」

「駄目に決まってるだろ？ まあ、そこは面白い話を聞かせてもらったお礼って事で。お金に関しては、まあ後で適当に帳尻を合わせるさ。」

「小町さん……。」

なんて良い人なんでしょう。小町さんの優しさは本当に天井知らずやでえ……。

……アレ？ そういえば……。

「乗せて貰えるのは嬉しいんですけど、本当に大丈夫なんですか？ 具体的にはちゃんと向こう岸に着けるのかとか。」

「その辺は心配無いよ。あくまで距離を決めてるのは私達死神だからね。」

「そーなのかー。……あ。」

「ん？ どうした？」

「だったらさっきこちに帰って来る時も、距離を操ってばっくと戻れば良かったんじゃない……。」

「……………あ。」

「……………」

「……。そ、それじゃそろそろ行くのか？ さあさあ乗った乗った
！！」

「はい。ありがとうございます。」

誤魔化されておこう。多分それが一番良い。
どこか慌てた様子の小町さんに促されて、私は再び船に乗り込

「その必要はありません。」

「！？」

いきなり後ろからかけられた声に、私と小町さんは揃って振り向き
きました。

そこにいたのは

「四季様！？」

「無賃乗船は感心しませんね。小町、前にも良かったですよね？ 船
頭にとっては金を稼ぐ事が善行に繋がる、と。」

「いや、忘れてた訳じゃないですよ？ ただ……。」

「小町。」

「！！」

「その行動が優しさ故のものだというのは分かっています。私は貴女の優しさを否定するつもりは無い。けど、それは時と場合を選んで発揮されるべきものです。その結果成績が下がり、貴女の評価が下がってしまう事は、私も望んではいけないのですよ。」

「……はい。」

「いいですか？ 大体貴女は普段から」

「うわぁ……。」

がつくりと肩を落とした小町さんに説教を続けているのは、四季様、と呼ばれた女の人。

背は私と小町さんの中間くらいで髪の毛は緑色、装飾の着いた帽子を被り、右手には何やら変な文字が書かれてる木製の板。幻想郷の閻魔様、四季映姫・ヤマザナドゥその人です。

「四季様！！ もう分かりました、分かりましたから！！」

「いいえ、まだまだ言っておきたい事は沢山あります。そもそもですな」

で、コレいつになったら終わるんでしょうか？

第76話 彼岸帰港（後書き）

盆休み前ラストの駆け込み投稿。

えーき様が登場した所で終了。閻魔様のターンは次話からです。
キャラがツケを払うのは次話ですね。

今回はQ&A無しです。では、また次話で。

第77話 十年目の東方裁判 ｛F a t e o f t e n y e a r s｝（前書

分割したものの後編です。

結果的に5000字越え。量的にも内容的にも、分割して正解でした。

今話はシリアス99%です。では、本文どうぞ。

第77話 十年目の東方裁判 〔Fate of ten years〕

気付いた時には、私はキャロ・ル・ルシエになっていました。

平凡な人生を送っていた私がどうしてそんな事になったのか、今になって分かりません。

けど、それは間違いなく現実で。だからこそ、私は運命に立ち向かうって決めました。全ては私自身の為。厄介事を乗り越えて、平穏な暮らしを手に入れる為に。

手段を選んでなんて居られませんでした。

故郷を離れ、身寄りがいない四歳の子供が真つ当な職業に就ける訳が無い。

どうしても仕方が無くなって、盗みを働いた事もありました。

「借りただけ」なんてあの時はうそぶいてたけど、そうでもして自分を誤魔化さなければ、罪悪感に苛まれてたのは間違い無かったと思う。

それからずっと、そんな事を続けてきました。

お金の為に黒い仕事を受けて、間接的とはいえ悪事に加担した事もありました。

私を逮捕しにフェイトさんが追いかけてきた時は、心のどこかで「やっぱりなあ」なんて思ったり。

もし色々背負っているものが無かったら、あの時に保護される未来もあったかもしれないです。

自首、のちに保護観察処分になった後、ゲンヤさんの所にお邪魔する事になった時は嬉しかった。

犯罪者生活なんて続けてると、何だかんだでストレスが溜まりますから。

あんな仕事をしてたのはあくまで手段だし、やらないで済むならそれに越した事はありません。

それに、それだけじゃない。

ゲンヤさんとギンガさん、それとスバルさん。

仲良さそうにしている三人の家族の姿は、かつて私がル・ルシエで見ていたものと同じもので。

それを見ているだけで、私は何か大切なものを取り戻せた気になりました。

今思えば、この時に気付くべきだったのかもしれないです。

そこで終わってれば万々歳だったんでしょうけど、現実はそのような訳ではない訳で。

やがて来るであろう未来の為に、自分を鍛える日々。

その過程で、私は色んなものを踏み台にしてきました。

ゲンヤさんの手伝いをしようと思ったのは、恩返しでも何でもない、実践経験の為。

アギトちゃんを助けたのは戦力強化の為。つまりは戦力目当て。

よくよく考えると、私とあそこの研究所の職員の間、大した差は無いですね。

輝夜さんと妹紅さんの時だってそう。

あの時私がやった事といえば、帰還手段を盾にした要求。つまりは遠回しな脅迫。

向こうの事情を聞いた上で、それすらも利用した「お願い」。輝夜さん達に選択権なんかありませんでした。

機動六課設立にあたっての事は、もはや完全に弁解不能。

厄介事を避けたい、それだけの理由で私は六課入りを拒みました。

確かにそれは事実でした。けど、私だけ特別という訳ではありませんでした。

プロジェクトFにより生み出されたフェイトさんとエリオ君に、戦闘機人のギンガさんとスバルさん。

皆が皆、色んな事情も持ちながら、それでも戦い続ける事を決めた。

そんな中私ひとりだけ、いつでも逃げられるように仕組みました。それでいて、アギトは六課に関わらせるように誘導して。

本当、外道ですよ。今振り返ってみてそう思います。

JS事件に入ってから、それは全く変わりませんでした。

任務においても、何より優先したのは自分の都合。

ある程度の顛末を知っているアドバンテージと六課の皆さん。それらを利用しながら、私は好き放題にやりました。

想定外の事は起これどそれでも自分の思惑通りに物事が進んでいく様子に、今思えば、あの時の私は浮わついていたと思います。

全ては自分の為、平穩の為に。

状況に合わせて柔軟に、けれどその根本は変える事無く生きてきました。

ル・ルシエを出た私が頼れるのは自分自身だけ。周りは全て敵、とまではいかないまでも線の外側。そういう考えが染み付いてしまっていました。

だから、あんな結果になったんでしょうね。

私がそれを自覚できたのは、六課襲撃事件の時でした。

白天王の攻撃によって崩れ落ちていく訓練場。

その光景を見た私の脳裏に浮かんだのは、様々な思い出でした。

いつも振り返ちに遭いながらも、それでもまっすぐ私にぶつかっ

てくるスバルさんとエリオ君。

頭を回転させ、お互いの裏をかこうと頭脳戦を展開したティアナさん。

そんな三人の間を埋めるように臨機応変に対応していたアギト。そうやって私達が訓練している様子を、苦笑しながら見ていたなのはさん、フエイトさん、ヴィータさん、シグナムさん。

色んな思い出が、そこには詰まっっていて。それが壊されて初めて私は気付きました。

私の世界は、とつくの昔に広がっていた。

召喚師の事や夢幻珠の秘密。それらは確かに、明かしては不味い事です。

だけどその事と、私がみんなの事をどう思うのかっていう話は全くの別問題。

そんな事当たり前だっというのに、私は気付きもしませんでした。私自身の為、それは昔からずっと変わらない。

けど、いつのまにか「私自身」の中に内包するものが増えていた。つまりはそういう事だったんです。

それが切っ掛け。決定的になったのは、スカさんがル・ルシエを人質にした時でした。

私はそれに逆らえなかった。追放されたとはいえ、ル・ルシエの皆の事は今でも大切に思っているから。

この事をル・ルシエの皆に打ち明けようとも思いました。けど、そんな事は出来なかった。

可能不可能の問題じゃなく、迷惑をかけたくない、その一心で。私がスカさんに協力して丸く収まるのなら、それでも良いかなって思ったから。

「だからこうなるって分かった時、正直ホッとしたんです。」

私は目の前にいる映姫様を見ながら、自分の罪を告白していく。口がスラスラと動くのを、内心誰かに聞いて欲しかったんだな、と他人事のように感じています。

「これ以上六課の皆に、ル・ルシエの皆に迷惑かけないで済むって。」

小町さんの説教が済んだ後、映姫様は「この子は私が対応する」と言って小町さんを仕事に戻らせました。

そして状況に耐えかねた私は、いつの間にか自分から話し始めていました。

「それに、良く考えるとスカさんだけじゃない。私がキャロ・ル・ルシエとして生きている限り、厄介事は起きるんです。そしてその度、誰かに迷惑を掛ける事になるんです。自分の事だけが大切ならそれでも良いのかもしれないですけど、今さらそんな風には考える事が出来ませんから。」

だというのに、それに気付かないで進み続けた。それが私の失敗。私という存在は、皆にとっては重石にしかない。昔ならともかく、今の私にはそんなの耐えられない。

「だから、もう良いんです。」

そう締め括って、私は告白を終えました。

実際に口に出して、言葉にしてみても改めて分かった、私の我侭が

どれだけの人に迷惑を掛けてきたか。

元々拾ったような命。だったら、この辺で幕引きにするべきなんですから。

「本当にそれで良いのですか？」

「はい。これ以上生きたって、迷惑にしかありませんから。」

だからもう、私なんて……

「いえ、少し違いますね。『それで良いと、貴女は本当に思っているのですか？』」

え？

「私に嘘は通じません。自覚があるにしろ無いにしろ、自分を偽るというのは感心しませんね。」

「そんな事！」

「無い、とは言わせませんよ？ 私は知っていますから。貴女が嘘つきさんだつていう事くらい。」

「違……。」

「貴女が生きているだけで周りに影響が出る、確かにそれは事実でしょう。けれど、それは言わば当然の事。そもそも、私達は生きているだけで罪を重ねる存在なのですから。お互いに関わりあい、迷惑をかけ合つて、皆そうやって生きています。貴女だけが特別ではないのです。」

「むう……。」

「人に迷惑を掛けるのは確かに悪行です。けど、中にはその人を頼った結果というものもある。それらを混同しては困ります。困った時、信頼できる人に頼るといふのは、決して悪い事ではないのですから。」

「それは……。」

否定出来ない。

映姫様が言つてゐる事はどこまでも正しい。否定なんて出来やしない。

例えばその内容が私を批判するものであつたとしても、反論なんて出来ない。

「『皆の事が好き、だから迷惑を掛けたくない』、その思いは尊ぶべきものです。けれど、だからこそ、貴女は打ち明けるべきだった、周りに助けを求めるべきであつた。事は既に、貴女一人の問題では無くなつてゐるのですから。自分一人で何とかしようというのは、

結局の所一人よがりの自己満足でしかないですよ。」

「ッ!!」

言い返したい。けど、言い返せない。
だって

「凶星、という顔になっていきますね。賢い貴女の事です。本当はこんな事、私に言われるまでもなく気付いていたのではないですか？」

「……。」

「沈黙は肯定と見なしますよ？」

耳に痛いっていうのは、まさに今の事を言うんだと思う。

映姫様の言葉は私の行いを痛烈に批判していて、それでいて、とっても分かりやすく頭に入ってくる。

だって、本当は気付いていたから。気付いていない振りをしていただけで、私の中にあつたものだから。

だからでしょう。この先に言われるべき言葉も、何となく予想できてしまうのは。

「では何故、貴女は最後まで一人でやる事を選択したのでしょうか？ 一人でも十分だと思った？ 六課襲撃において、それで失敗しているのに？」

「……めて。」

「一人で出来る事の限界を貴女は知った。そんな貴女が、『迷惑を掛けたくない』なんて理由で周囲の助けを借りなくなる程愚かには

見えない。だとすると、原因は他にある。」

「……めて。……もう止めて!!」

私は耳を押さえてその場にうずくまる。

この先の事を聞きたくない、その一心で。けど、そんな努力は無駄でしかない。

慌てて耳を塞いだところで、聞こえてくる音を閉め切るなんて出来やしない。

映姫様の声はしっかりと届いてきた。

「貴女は恐れている。人を頼ること、人を信じる事に。何でも自分一人で行うとするのはその裏返し。一見親しげに接していても、その裏ではいつも裏切られる事に怯えている。そう、貴女は少々、他人を信じなさ過ぎる。」

「仕方ないじゃ、ないですか……。」

もう駄目だ、おしまいだ。

感情に引つ張られて、悲鳴混じりの言葉が出てくる。今まで我慢してたのが押さえられない。

「私だってそれ位分かってるんですよ！でも、仕方ないじゃないですか!？」

「……。」

「怖いか、って？ ええそうですよ、怖いですよ!!」

だって、そうでしょう？

「いくら好きでも、いくら大切に思っているでも、裏切られる時は裏切られるんです!! 好意と信頼はイコールじゃないんです!!」

いつの間にか、私の目には涙が浮かんでいた。

自分で言っていて悲しくなってくる。けど、ここまで言ってしまったら最後まで止まらない。

「だって……、じゃなかったら、そうじゃなかったら……。」

「ル・ルシエの皆もスキマ妖怪も、私の事を捨てる訳無いじゃないですか!!」

ついに言ってしまった本音、出来る事なら、ずっと隠しておきたかった私の本心。

ル・ルシエを追放された時、私はそれを受け入れた。皆の事が大好きだったから。

けど、だからこそ。大好きな皆と一緒にいたいと思う私は確かに存在していて。

その私はずっと泣いていた。「何で私だけそんな目に遭うの」って。

ル・ルシエにおける私の危険性。それをいくら理性で納得していても、どうしても消えることの無い私がいた。

「幻想郷から追い出されて、ル・ルシエからも追放されて……。もうそんなの嫌なんですよ!!」

ル・ルシエに来る前、幻想郷にいた頃の事は今でも良く分からない。

けど、たぶん似たような事があっただと思う。

私の存在は幻想郷に受け入れられる事は無かった。それが真実なんだから。

そうして私は一人ぼっちになった。だから、ずっと一人で生きてきた。

今になって分かる。ゲンヤさんに引き取られた時、何でキャロ・ナカジマにならなかったのか。

きつと怖かったんだ、そうやって距離を詰めるのが。

ある程度の距離を保っていないと、裏切られた時に怖いから。

「だから、もう良いんです！ これ以上生きていても、苦しいだけなんですから！」

今まで我慢していたもの、その全てを私は映姫様にぶつけました。お願いです、もう終わらせて欲しい。

人は一人じゃ生きていけない。けど、私はそれが怖くて仕方が無い。

こんなのは、もう……。

「……。それが原因ですか。全く、この借りは高くつきますよ」

「……ふえ？」

「いえ、何でも。……キャロ・ル・ルシエ、いえ、八雲桜。」

「！？……はい。」

「貴女の言いたい事は分かりました。今まで苦労してきましたね。」

「そんな事……。」

「貴女の境遇には同情の余地があります。そのような経験があるのなら、そう考えてしまうのも仕方ない事なのかもしれません。しかし、あえて言います。『貴女は知るべきだ』と。」

「何を……。」

そう言つと、映姫様は何かを取り出して、私の方へと向けました。向けられたのは直径15センチく20センチ程度の手鏡。

映姫様が持つてる鏡、つまり

「浄玻璃の鏡……。」

「おや、知っていましたか。なら話が早いです。」

罪人の過去を覗き、罪を暴く手鏡、それが私に向けられる。浄玻璃の鏡は一瞬だけ光り、やがて、映像を映し出す。

「これは……？」

「これを見てどう思うか、それは貴女の自由です。けど、無かった事にする事だけは許しません。それは、今もなお貴女に向けられている思いを否定する事に他ならないのですから。」

幻想郷の南西部、再思の道を抜けた先に、無縁塚という場所が存在する。

その名前から分かるように、ここには外の世界で忘れ去られた、つまり、無縁となったものが漂流してくる事がある。

そして、この場所はその特性上、外との境界が曖昧になりやすい。つまり、結界にほころびが発生しやすい。それ故、結界の管理を役目とする者は定期的にここを見回るようにしている。

だからこそ、この出会いはある意味必然だったといえるのかもしれない。

今から10年前のある日。全てはここから始まった。

無縁塚に見回りに来ていた八雲藍が、赤子を拾ったその時から。

裁判、というより懺悔の回でした。えーき様マジカウンセラーw
今話はこのSSの根幹に関わる話なので、上手く表現できていれば良いのですが……。

今まで表に出る事が無かったキャラの思い、皆さんに伝わってくれば幸いです。

Q・こんなのキャラじゃねえ!!

A・キャラ設定参照。シエルの姓はル・ルシエの事を諦めきれない証拠。結局の所、ずっと引きずっていました。仕方無いです、人間なもの。

Q・え？ 妖怪じゃ？

A・揚げ足を取らないでください。

Q・説教が足りない!! こんなのえーき様じゃねえ!!

A・作者内イメージ+とある事情から、聞き上手になってもらいました。その辺りは後で補足するつもりです。

Q・野菜王子はカエレ

A・作者の病気です。

では、また次話で。次話はネタバレ+答え合わせ回の予定です。

第78話 八雲 桜（前編）（前書き）

前話から日が開いてしまい、すいませんです。

しかも予定の所まで書いてない、思ったより量が増えたのでまた分割です。

では、本編どうぞ。

第78話 八雲 桜（前編）

○月×日 八雲 藍

今日、結界の見回りをしていた際に子供を見つけた。

靈力は弱々しく、どうやら生まれた直後らしい。

食われたり野垂れ死ぬのならそれまで、と言いたい相手はまだほんの赤子。

このまま見捨てるのも何となく寢覚めが悪くなりそうなので、とりあえず拾う事にした。

明日あたり人里に行つて、受け入れ先を探す事にするか。

○月×日 八雲 藍

予定が変わつた、というのも昨日拾つた子供について。

短刀直入に言つと、紫様があの子に興味を示した。

私にはタダの子供にしか見えないのだが。

今晚のおやつにでもするのだろうか？

子供の肉は柔らかいし、あながち有り得ない話でもない。

とりあえず、いつ捌けと命令されても良いように包丁を研いでおくしよう。

同日 ???

目が覚めたら、いきなり赤ちゃんになつてた。

混乱する私の目に飛び込んできたのは、どこかで見た事のある格好の女の人達だった。

何が何だか訳が分からず泣こうとしたけど、その寸前で思わず息を飲み込む。

お尻の辺りから大量の尻尾を生やした人が、鉈のような肉切り包丁を研いでいたから。

尻尾？ それにあの格好……。じゃあひょっとして、ここ東方の

世界！？　　つてか転生！？　　しかも、私いきなり食べられちゃうの！？

有り得ない、そう思いたいけど、私の体が赤ん坊なもの、目の前にいる人がどう見ても八雲藍にしか見えないのも事実な訳で。加えて言つと、さつきから私を抱いている人が八雲紫にしか見えないのも、どうしようも無い事なんです。

これから私、どうなっちゃうんでしょうか？

シャツ！！（包丁を研ぐ音）
ひっ！！

同日　八雲紫

昨日、藍が赤子を拾ってきた。

おそらくは外の世界から幻想入りしてきた子供。

子供、大人を問わず幻想入りした人間の末路は大きく分けて三つある。

妖怪の餌になるか、運良く人里に入る事が出来るか、外の世界に戻れるか。

この子は二つ目。なまじ生まれてきたばかりの弱々しい姿だからこそ藍の目に留まった。

弱さは時には武器になり得るという事ね。

……と、本来はそうなる筈のだけど、私はこの子から奇妙なものを感じていた。

境界を操る妖怪だからこそ分かる、この子の違和感。

既に物心がついているのか、目はぱっちりときき、その表情からは喜怒哀楽があるのが読み取れる。

感じるのはちっぴけな霊力と魔力、そして妖力。

人間なのか妖怪なのかその辺りもよく分からない、存在自体にちぐはぐな印象を受ける。

まだ調べ足りないので、当分の間は家で預かるとしよう。

久し振りに面白い事になりそうだ。

……藍、何を勘違いしているのか知らないけどこの子は食べないわよ。

包丁を研ぐ音が聞こえる度、この子が震えるのが面白いから指摘しないけど。

○月×日 八雲紫

あの子について色々調べてみた結果、色々面白い事が判明した。初めてあの子を見た時に感じた違和感、その正体はあの子の魂と肉体にあった。

詳しく調べてみた所、あの子の体は人間のそれではない。各種データが普通の人間のそれとは明らかに異なっており、どちらかと言えば私達妖怪に近かった。

しかしその中身、つまり魂は間違いなく人間そのものであった。藍がこの子を人間と判断したのも、これが原因。

通常、これは有り得ない事。

人間の体には人間の、妖怪の体には妖怪の魂、それがこの世の法則。

その点からすると、この子は例外に該当する事になる。明日辺り、藍には彼岸に行ってもらうとしましょうか。とりあえず今日は、もう少しこの子の事を調べよう。

○月×日 八雲 藍

紫様の指示で彼岸へ出かける事になった。

いつものように眠りこけている死神を起こし、閻魔様宛ての手紙を預けた。

何の手紙かと訝しんでいる様子であったが、それはこっちが知りたいくらいだ。

ここ最近の紫様は、つい前に拾ってきた子供に付きっ切りである。となると、この手紙も恐らくはあの子に関連する事なのだろうが、何についてなのか見当がつかない。

前に聞いた時は「まだ調べ終わっていない」と有耶無耶にされてしまったが、つまりは調べる必要の有るような何かがある、という事になる。

あの時は追求しなかったが、今日帰ったらもう一度詳しく聞いてみよう。

同日 八雲紫

お使いから帰ってきた藍が、あの子の事について聞いてきた。最近の私があの子に付きつきりなのが気になっているみたい。藍には悪いけど、この件に関してはある程度調べが付いてから言うつもり。

今日は何を調べようかしら？

……そうね、頭の中でも見てみますか。

仕草や視線を見た感じ、この子は明らかに知性を持っている。

妖怪ならまだしも、この子の魂は人間のもの。

となると、知性の元となる経験は一体どうやって会得したのかしらね？

○月×日 ???

紫さん（おそらく確定）が私を抱きながらブツブツ言っている。いきなり怖い顔になったと思ったら次は笑い出して、それが落ち着くといつも胡散臭い微笑みに戻っていた。

ちよっと前から気になってたけど、これ明らかに私の事調べてま

すよね？

「あなたは一体何者かしらね」って、知りたいのはこっちの方ですよ。

結局の所唯の赤ん坊に過ぎない私には、何も出来ないんですけどね。

○月×日 八雲 藍

いつもの見回りを終えた後、私は一通の手紙を携えて紫様の所へと向かう。

手紙の送り主は閻魔様。まだ封を開けてはいないが、おそらくは先日頼んでおいた件についての返答があるのであろう。

私に手紙を頼んでから今日までの間、紫様はあの子を付きっきりで世話している。

小さな体を腕の中に抱いて可愛がる姿は、まるで本当の母親のようだ。

この前これを指摘したら、無言で弾幕が飛んできた、解せぬ。

どうしてそこまで拘るのか今まで聞きだせなかったが、いい加減教えて貰っても良い頃だと思う。この手紙を渡す時に、それとなく聞いてみよう。

○月×日 八雲 藍

まちですか？

同日 ???

昨日、紫さんと藍さんが何やら話し合っていました。

詳しい内容までは分からなかったけど、どうやら私に関係するこ

とみたい。

時々漏れて聞こえてくる単語から判断するに、どうやら私はこれからもここで生活する事になりそうです。

○月×日 八雲 藍

今日は色々忙しい日だ。

というのも、本来なら昨日のうちに片付けておくべき仕事が終わっておらず、その分の皺寄せがかかってきているからである。

昨日は丸一日、まともに仕事をこなすことが出来なかった。

何をするにしても上の空で集中できず、どうでもいいミスを連発していた。

まさか、あんな事になっていたとは予想だにしていなかったな。

……と、いかんいかん、また考えてしまっていた。

まずは目の前の仕事に集中しよう。

同日 八雲 紫

あの話をしてから一日明けて、ようやく藍は平常運転に戻った。

全く、あれ位の話で動揺するなんて修行が足りないわね。

見た所まだ消化しきれていないみたいだけど、それも時間が解決してくれるでしょう。

となると、後はこの子。

手足こそまだ満足に動かせないものの、この子に知性があるのは確認済み。

だとするとこの子にも権利がある。藍にした話を自分も聞く権利が。

「ねえ？ ちょっと聞いてくれるかしら？」

「？」

ちよこん、と顔をこちらに向けた赤子を抱いて、私は語りかける。

「貴女は知りたいかしら？　自分がどうなっているのか、どういう存在なのか？」

返事を待たず、私は語り始める。こんな問いかけは愚問でしかないのだから。

事実、この子は私と目を合わせ、一語一句聞き逃すまいと目で訴えてきている。

こうまで真剣に聞いてもらえると、話し手冥利に尽きるわね。

「いい？　貴女は」

同日　　？？？

なあにそれえ！？

……うん、落ち着いた、もう大丈夫。

いきなりな話で動揺したけど、一応は理解できた。

正直な話、まだ自分の中で消化しきれてはいないんだけど。

とりあえず整理する意味も含めて、一つずつまとめていこう。

まずは、私の状態から。

紫さんが言うには、今の私は妖怪の肉体に人間の魂が入っているらしいです。

普通、こんな事は有り得ない事らしいです。

人間の体には人間の魂、妖怪の体には妖怪の魂、そうでないと「合わない」。

生き物としてあるべき姿に収まっていない歪な命、それが今の私らしいです。

P 3にスー アミのROMが刺さってる感じかな？ なんて考えてたら

「大体合ってるわね。フフフ……。」

ですって。サトラレたよ、畜生！！

……閑話休題。

次に、そんなややこしい事になった経緯について。

あくまで推測に過ぎないけどねと前置きして話してくれた内容は、これまた突拍子も無い話でした。

まず前提として、この世界には輪廻転生の概念があります。

人間、妖怪問わず、死を迎えた生き物の魂は肉体から離れていきます。

そして三途の川を渡り、閻魔様の裁きを受け、記憶云々といった情報をリセットされた上で新しい命へと生まれ変わる、それが輪廻転生の基本的なシステムです。

この際、当たり前前の事ですが、前世と同じ種族になるとは限りません。

人間であったり、他の動物であったり、虫だったり妖怪だったり。この世界に生息している生物の種類だけ、その可能性はあります。

そうになると、問題になるのは先ほど言ってた魂と肉体の関係。

転生先が異なる種族になる場合、双方の間で不具合が発生する事になります。

なら、その問題は どうする のか？

結論から言うと、転生の輪を潜る際に、新しい肉体に馴染むように調整するのだとか。

記憶をリセットすると同時に魂のマツチングをする、もつと厳密に言えば、魂を調整する際、記憶の消去が半ば必須になっているらしいです。

記憶、言い換えればその生物に蓄積された情報はその存在の定義に関わるものなので、違う生物のそれが残っていると色々と不具合があるみたいです。

まあ、それを抜きにしても転生の際には記憶を消す、というのが常識となっている為にそこまで深く考えなくてもいいんですが。

と、ここまですが前置き。言い換えると常識の確認。

そして、ここからが本題。なら、私は一体何なのか？

私にはちゃんとした記憶がある。ここに至るまでの十数年の経験がある。

それを元にして考えると、むしろ今の状況は夢だとか言われた方がよっぽど説得力がある。

そして、その事と紫さんの話の内容は明らかに矛盾しています。転生時に記憶を失うのなら、こうして考えている私は何なのか。もし転生していないとするのなら、今の私は一体何なのか。

輪廻転生と記憶保持、それらは一部の例外を除き、決して両立する事が無い筈なのに。

稗田阿求のような例外もいますが、それだって生前から準備をしたり、死後に閻魔様の手伝いをしたり、短命になったり、拳句の果てに、そこまでやっても全部の記憶は受け継がれないといったデメリットを乗り越えて初めて獲得できるものであり、そんな事をした心当たりなんて無い私には、当然無関係です。

ふと思っただんですけど、阿求さんが人間にしか転生できないのつて、魂と肉体の関係のせいなのかもしれませんね。

同じ種族への転生なら比較的簡単にマッチング出来るとしたら、それでもどうしようの無い部分がある為に記憶の欠損が起こるのだとしたら、色々辻褄が合いますから。

そもそもただ記録を残したいというのなら、長命な種族になる方が効率が良い筈。

幻想郷縁起は人間の視点で書かれるべきだ、という事もあるのかもしませんが、もしかするとそれは建前で、人間視点でしか書く事が出来ないのだとしたら？

これは勝手な推測でしかありませんが、記憶という情報に縛られているせいで長命な種族になれない、という可能性は否定できませんね。

……閑話休題。完全に関係無い話でしたね。

とにかく、私はこんな準備をした覚えはありません。

だったら、私は何なのか？

その答え（仮説って言ってましたけど確定でしょう。だって紫さんだし）は、これまた突拍子も無い事でした。

「最初に感じた違和感はその存在。魂と肉体が歪に絡まり、それでありながら一つの命として完結している奇妙な状態。」

ここまでは今まで説明してもらった通り。

今まで考えないようにしていましたが、どうしてそんな状態でありながら私は生きていられるのか、以後の説明には、それに対する答えも含まれていました。

「次に感じたのは貴方の記憶。記憶を保持している事も驚きだけど、それよりも重要なのはその内容ね。私達の事を「作品内の人物」として認識している。もっと言うなら「観測者」としての視点、次元から、私達の事を知っている。」

やっぱり言うか何と言うか、紫さんには私の記憶は筒抜けになっ
っているみたいです。

前からそんな素振りがあったので覚悟はしてましたけど。

……これが原因で歴史が変わったら私の責任ですか？

「当然じゃない。」

……そこは嘘でも、「大丈夫だ、問題無い」とか言ってくれる場
面じゃないんですかねえ？

「輪廻転生の法則がある以上、記憶の保持は有り得ない。魂と肉体
で種族が違うなど有り得ない。ましてやそんな歪な状態で、一つの
命として安定するなど有り得ない。けど、ここに貴方の記憶を放り
込むと話が変わってくる。貴方の記憶に嘘偽りが無いとして、「観
測者」の次元、世界が存在していたら？ そこから何らかのイレギ
ュラーで、魂だけがこちらの世界に来てしまったとしたら？」

そんな事はあるんでしょうか？ って言いたくなっただけど、それ
も今更だと思って黙って話に集中します。

おそらくはこの先に、私の知りたい答えがあるから。

「そうやって、貴方は現世に降り立った。輪廻の輪を潜っていない
以上、記憶の欠損など起こる訳が無い。こんな方法で記憶保持に成
功するなんて、稗田家の者が知ったら怒り狂うかもしれませんわね。

「

それは勘弁、なんて考えながら、話の内容を反芻していく。
……うん。確かにそれなら説明は付くかもしれないです。
でも、それだけじゃ足りない。だって

「だけど、そのままだと貴方は剥き出しの魂のまま。当然よね、輪廻の輪を通っていない以上、新しい肉体を手に入れる術は無いのですから。」

ですよねー。

だとすると、この体はどうしたんでしょうか？

「ここからは本当に荒唐無稽な話。様々な事象に対して妥協点を見出す為に考えた、ある意味辻褄合わせにも似た推論。それでも宜しくて？」

いちいち勿体振らないでください。こっちは最初から聞くつて決めてるんです。

紫さんの推論なら、それは限りなく正解に近い筈ですから。

「貴方が魂だけの状態で降り立ったとして、それは有り得る事、言い換えると、「有り得ても良い事」では無かったとしたら？ もっと具体的に言うなら、世界がそれを認めなかったら？」

紫さんの言った事を噛み砕いて考えてみる。

難しい事は分からないけど、要するに「魂だけとかありえないから！」って事でしょいか？

「その通り。そこで法則に沿うように、世界からの働きかけが起き

る。つまり、魂に合う肉体を見繕うことになる。けど、ここでも一つのルールが邪魔をする。曰く「何も無い所から人間は生まれない」。

確かにその通りです。

幻想郷だからといってキャベツ畑からコウノトリが運んでくる、なんて事は無くて、あくまで人間の子供が生まれるのは【ニヤーン】と【ニヤーン】が【ニヤーン】した結果であると。

「……続けますね？」

あ、紫さんちよつとだけ赤くなってる。

勝手に人の心読んだりなんかするからそうなるんですよ？

「だとしたらどうすれば良いのか、世界は考える。その答えが発想の転換。曰く「何も無い所から発生する生物は妖怪である」。」

……うん、大丈夫、理解できた。

紫さんが突飛だと前置きしていたのはこれですか。

確かに強引だとは思っけど、現に私がそうになっている以上、安易に反論できません。

「そして世界の修正力とでもいえるものが働いた結果、貴方は妖怪の肉体を得るに至った。けど、まだ問題は残る。人間の魂に妖怪の肉体、このままだと、一つの命として成立してないままになってしまう。S3にFCのROMが刺さっている、というのは言い得て妙ね。」

……結局はそこですか。

前提がおかしい以上、いくら辻褄合わせをしても矛盾は残る、そ

ういう事なんでしょう。

あと、蒸し返さないでください。さっきの仕返しですか？

「このままだとどうやっても矛盾が残ってしまう。ならどうすればいいのか？ 世界が行ったのか、それとも貴方の生存本能が、その状態に適応するために編み出したのか、いずれにせよ目的は一つ。存在を確定させるために「それ」が為されたと私は考えているわ。」

そして紫さんは、私の存在が安定している理由を語ってくれました。

それはある意味、今日聞いた話の中で、最も衝撃的な内容でした。

「要因はどうかであれ、貴方は能力を手に入れた。それは「矛盾を受け入れる程度の能力」。言い換えるなら「境界を無視する程度の能力」それを使い、貴方は無意識のうちに人間と妖怪の境界を誤魔化しているわ。矛盾を解消する為に更なる矛盾を重ね、最後にとびつきりの能力で^{インデキ}ラッピングされた存在。それが貴方よ。」

紫さんの顔は胡散臭そうに笑っていて、それでいて心から笑っているようにも見えて。

「経緯は異なっているけど、貴方には力がある。私と同じ境界に関わる力が。言うなれば貴方もスキマ妖怪。今までスキマ妖怪は一人一種だったから、貴方は私の子供って事になるのかしらね？」

スキマ妖怪は一人一種。紫さんから見れば、私は生まれて初めて出会えた同族という事になる訳で。

貴方はどう思う？ と言った紫さんの顔が、今でも鮮明に頭に焼き付いています。

おまけその1 能力解説

矛盾を受け入れる程度の能力

キヤロがこの世界に誕生した時に獲得した能力。

獲得した経緯については不明。世界からの働きかけか、それとも現状への適応行動なのか、恐らくはそのどちらかだと考えられる。

キヤロがその存在を保っていられるのは、この能力で人間の魂に妖怪の体という矛盾を誤魔化しているおかげである。

また、この能力は言い換えるなら「境界を無視する程度の能力」でもある。

人間と妖怪の境界を無視する事により存在を維持していると解釈してもいい。

この時のポイントは、あくまで境界は無視しているだけであり、境界自体は依然として存在するという事。

境界を操ったり消している訳ではないので、物事概念が揺らいだり混ざったりする事は無い。これが「境界を操る程度の能力」と比較した際の最大の相違点である。

重なってるのに混じっていない、例えるなら、コーヒにミルクを入れてもいつまでも混ざらないようなもの。正しく矛盾している。

と、一見凄い能力に見えるが万能とはほど遠い。

東方キヤラの能力の多数が「を操る程度の能力」であるのに対し、この能力は「受け入れる」事に限定されている。

早い話効果範囲は自分だけ、他者への干渉は不可能、能動的な行使も不可能と、これ単体では何の役にも立たなかったりする。ぶっ

ちやけ戦闘においては「花を操る程度の能力」以下。

応用次第では夢想天生モドキも出来るかもしれないが、今のレベルじゃ使えないのは明白。

唯一覚える特技の習得Lvが80越えとか色々終わってる。

藍が隠してたのはこれも理由。使いこなしても戦闘力には殆ど影響しない上、調子に乗って暴走させると命がマツハときたら誰だつて教えない。

もつともこれは今現在の話であり、これから先、キャラの成長により能力が発展する可能性も十分に有り得る。が、それも数十年、数百年先の話。あと1時間ちよいで最終決戦が終わってしまう本編には一切関係の無い話である。

おまけその2 デバイス解説（真）

夢幻珠

キャラが持つているデバイスで待機状態は数珠。

一応、一般に出回っているデバイスの機能も搭載されているが、それは本体ではなく外付けのオマケ程度。

その性能からユニゾンデバイスのようなもの、と説明されてきたが、中身は別物である。

中には分霊体が入っており、それと融合する事で基礎能力アップ、技能の習得、「程度の能力」の付与といった恩恵が受けられる。これらが可能になるのは、言葉の通り融合した状態になっているから。「キャラ」であり「チルノ」なのだから、「冷気を操る程度の能力」が扱えるのは当然である。

また、これは技能習得にも有用である。分霊体の情報に含まれて

いる各種経験を気づかないうちにダウンロードしているおかげで、能力に依存しないスキルなら高速で学習、修得できる。

ちなみに性格変化が発生するのもこの影響。大かれ少なかれ何らかの影響は受ける。

チルノ？ あれは例外。

ただし、そうそう良い事ばかりではない。

融合騎とはいうものの、ユニゾンデバイスが実際に行っているのは対象とデバイス間の同調、調和（unison）であるのに対し、こちらは完全に融合（fusion）である。言うなれば、フュージョンデバイスといったところか。言い換えれば融合事故発生率100%。普通の魔道師がこれを使ったら、まず間違いなく自我を侵食されて精神的な死を迎える事になる。

唯一の例外がキャロ。自身の能力で魂の境界を無視する事により「融合してるのに混ざっていない」という矛盾でこのデメリットを解消している。

もっともキャロにその自覚は無く、実際に手綱を握っているのは藍である。キャロの能力に干渉し、その能力で融合を制御するなんという何とも面倒な事が出来るのは、彼女が彼女の主くらしいものであるう。

受け入れるだけで何一つ戦闘に転用できないキャロの能力。

性能は凄いが誰にも扱う事の出来ないキ ガイデバイス。

どちらも単体では何一つ役に立たないが、それが揃った結果は御覧の通りである。

第78話 八雲 桜（前編）（後書き）

ネタバレ回そのいち、能力についてでした。

ありきたりな能力ですいません。

結構前の感想に「キャ口隙間妖怪化？」とありましたが、元からスキマ妖怪でしたw

では、また次話で。

第79話 八雲 桜（後編）（前書き）

自分で設定した×切を二回ほどぶっちぎりました。申し訳ない。
今回はネタバレ回その2です。

第79話 八雲 桜（後編）

○月×日 八雲 藍

あの子がうちに來てから、今日で一週間になる。

その経緯や出自に最初の頃こそ戸惑ったものの、一週間もすれば慣れてくる。

年齢に似合わぬ知識や特殊な記憶を除外すれば、あの子は唯の赤ん坊である。

むしろ無闇に泣いたりしない分、普通の赤ん坊を世話するよりも楽だ。

こうやって世話をしていると、式になったばかりの橙の事を思い出す。

あの子は手間のかかる子で、当時は（ry

○月×日 八雲 藍

今日、閻魔様から連絡があつた。どうやら頼んでいた調査が完了したようだ。

幻想郷だけでなく他の管轄部署とも連携して調査した結果、あの子と思われる魂が輪廻の輪を通つた記録は何処にも存在しなかったらしい。

あの子の魂がこの世界のものではないという推測。最初は眉唾物であつたが、こうやって物的証拠が揃つてくると信じざるを得ない。

それに付随して、あの子の死後の処遇も決定した。

あの子の魂はどこの管轄でもなかった。

その状態で万が一の事が発生した場合、魂がどこに行くのか、どうなってしまうのかは誰にも分からない。もし行き場を失つたまま

亡霊になつて災厄を振り撒かれてもしたら堪つたものではない。

けど、その件に関してはもう大丈夫。閻魔様の取り計らいで、あの子の魂を幻想郷の管轄にしてもらう事が出来たからだ。

これにより、あの子が死亡した場合は一般的なケースと同様に、裁きを受けて輪廻の輪を潜る事が出来るようになった。

調査といいこの処置といい、随分と閻魔様に借りが出来てしまった。

紫様がここまでするなんて、やはり同属が出来たのが嬉しいのであろうか？

この事を報告すると、「そう」と気の無い返事がひとつ。

あそらくは予想していた通りなのだろう。調査ではなく確認作業という認識なら、いちいち驚いたりしない。

……ですけどね、紫様。少しくらい驚いてあげてもいいのでは？
じゃないと、この数日間部下の死神を巻き込んでずっと調査してくれていた閻魔様に申し訳無いです。

後で借りを返すのに困つても知りませんからね？

同日　　？？？

衝撃的な事実を知つてから数日、だからといって何かが変わる訳でなく、私は赤ちゃんライフを過ごしています。

当たり前と言えば当たり前なんですけどね。能力持ちだと分かつた所で、私が唯の赤ん坊なのは変わらないんですから。

私の周りはというと、藍さんはいつも忙しそうに飛び回っていて、紫さんは藍さんのいない時は私の世話を、それ以外では何か調べ物をしています。

橙ちゃんにはまだ会ったことがありません。ここには住んでおらずマヨヒガでひとり修行中なのだと、藍さんが自慢気に話してくれ

ました。

そのうち会わせてくれるらしいので楽しみです。

同日 八雲 紫

今日、閻魔様から連絡があった。あの件について調査が完了したようだ。

内心を隠してそっけない返事を一つ。藍の前で情けない姿は見せられない。

大丈夫だと思っではいたけど、予想通りの結果に一安心である。

その結果に気を良くした私はあの子の世話を藍と交代し、奥の間に移動してからスキマを開いた。

あの子の記憶の内容を反芻しながら境界を操作する。

眼前にあるスキマはTVのように、時々どこかの映像を映し出している。

何故私がこんな事をしているのかというと、あの子の記憶で少し気になる事があったからだ。

あの子の記憶では、私達は物語上の架空の人物として認識されていた。

それに対して色々思う所もあるが今はとりあえず置いておいて、ここで私はひとつの可能性に気付いた。

この子の記憶において物語上の存在とされていた我々であるが、つまりそれはこの子の記憶にある存在の中に、私達と同様に実在するものがあるという事にはならないか？

それは余りにも荒唐無稽な話。けど、有り得ないなんて事は有り得ない。現に私達という前例がある以上、その可能性は安易に否定できるものではない。

今までそんな事考えもしなかったけど……、面白くなってきたわね。

幻想郷の管理人として外の脅威に備えておきたいという気持ちと、あとは純粋な興味本位。

本当、あの子が来てから退屈しないわね。

あら、そういえば

「藍、ちょっといいかしら？」

「どうしました、紫様？」

「この子の事なんだけど……。」

○月×日　　????

昨日、ひとつ良い事がありました。

本格的にここで暮らす事が決定した記念にと、紫さんが私の名前を考えてくれました。

今まで私は「あなた」とか「おまえ」とか「あの子」とか呼ばれてたので、名前を貰えるのはとっても嬉しかったです。

名前は私の髪の毛の色から「桜」。危うく「桃」になる所でしたが、語呂が悪いつていう理由で却下されました。

紫さんの事だから、色にちなんだ名前を付けるとは予想していたけど、少しだけ予想外だったり。

というのも、紫、藍、橙、八雲家の皆さんの名前はいずれも色にちなんだ物なのですが、それに加えて、虹に含まれている色から取った名前だったりします。ここから考えると、桜色って微妙に仲間外れなんですよね。

うーん、やっぱり家族じゃなくて居候って扱いなんでしょうか？

「そういう訳でもないんだけどね。」

あ、心読んでました？ 丁度良いです。だったら何で？

「あなたは式じゃないもの。つまりはそういう事よ。」

すみません、全然分かりません。

「ふふっ……。」

解説してくれる気はないんですねわかります。

「今は分からなくてもそのうち分かるわ。一度自分で考えてみたらどう？ 時間は有り余ってるんだし、暇潰しには丁度良いんじゃない？」

むっ……。

○月×日 八雲 藍

あの子改め桜がうちに来てから一ヶ月。今日は私がメインで世話をする日だ。

紫様はというと、ずっと部屋に籠ってスキマを開いている。聞いた所によると、桜の記憶の中にあつた世界の一つを発見したらしい。

まだ境界が安定しておらず実際に移動する事は出来ないが、それも時間の問題だ、との事。

「流石ですね紫様。それで、どんな世界なんですか？」

「ミッドチルダって言ってね、なかなか興味深い世界よ。今まで気付かなかったけど、どうやら地球との交流もあるみたいね。面白いのは、魔法と科学が混在して社会を支えている所ね。魔法を科学で制御するなんて、なかなか斬新な考えだと思わない？」

「……紫様、悪巧みは程々に、顔に出てます。何をなさるつもりで？」

「ひどいわねえ乙女に向かつて。別に何もしないわ。余計なちよっかい出してここの事が知られたら、厄介事にかなりませんもの。」

「本当、自重してくださいね？」

○月×日 八雲 藍

今日は、というか今日も私が桜の世話を担当する事になった。

紫様を起こしに行ったもののそこには誰もおらず、代わりに「ちよつと観光に行ってくるから桜の事よろしく」の書き置きがあった。今日は紫様の番だったのに……。私に結界管理の仕事を押し付け、もとい任せてくれているのだから、その辺りはちゃんとしてほしいものである。

「どうしたものか……。」

私にも結界の見回りという大事な仕事がある。地味な仕事ではあるが幻想郷の維持そのものに関わってくるので欠かす訳にはいかない。

かといって、生後一月程度の赤ん坊を放置する事など出来やしない。

「……仕方ない、か。」

桜も連れて行こう。それしかない。

途中でマヨヒガに寄る事があるから、そこからは橙に世話を頼むのも良いかもしれない。

橙には既に桜の事は話してある。会ってみたいと言ってたし、丁度良い機会にだろう。

同日 八雲 桜

今日はあの日以来初めて、外に出られる事になった。

藍さんの背中におぶられて幻想郷の空を飛びまわり、色んな所に行く事が出来た。

途中に立ち寄ったマヨヒガで、橙ちゃんと初めて会いました。

橙ちゃん可愛いですねー、と感想を抱く一方で、その橙ちゃんに世話される事に何だか複雑な気持ちになったり。早く成長したいです。

今日は良い一日でした。また近いうちに行ってみたいです。

○月×日 八雲藍

どうしてこうなった。そうしか言えない。

いや、原因は分かっている、私のせいだ。仕方の無い事とはいえ、全くもって迂闊だった。

とにかく、こうしていても始まらない。早急に対処しなければ、面倒ごとになってしまう。

全く、やれやれだ。

同日 八雲 桜

何だか藍さんの様子がおかしい。

ご飯を食べた後、新聞を読んだ所までは普通だったのに、読み終わるや否や紫さんの寝室に飛んでいきました、文字通り。

それから既に数時間。まだ話し込んでいるらしく、二人ともなかなか部屋から出てきません。

一体何があっただんでしょうか？

.....。

.....。

.....。

あ、やっと出てきました。

「桜。」

紫さん？

「貴女に大事なお話があるの。聞いてくれる？」

はい、いいですよ。で、どうしたんですか？

「桜。貴女を外の世界に送り出すわ。」

え？

数時間前

「……と、いう事なのです。」

今回の件の報告を締めくくり、私は正面にいる紫様に頭を下げる。紫様は渡された新聞を読みながら、その話を聞いていた。

「『大スクープ！ 八雲の式に隠し子疑惑！？』ね。なかなか上手に撮れてるじゃない。」

新聞の一面には、一枚の写真が掲載されていた。

そこに写っているのは桜を背負い、幻想郷の空を飛行している私の姿だ。

「疑惑っていう点がポイントね。少なくとも嘘は吐いてないわ。取材無しで書いたのは、他の天狗仲間に先んじて記事にするのを重視したからかしら？ となると、他の天狗が近い内に取材に来るかもしれないわね。」

「悠長に記事の分析してる場合ですか！ それよりも、今は対処法を考えるのが先です。……原因を作った私が言う事ではないのです。」

「心配要らないわ。既に手は考えてある。」

新聞を読み終えたのか、紫様は新聞紙を折りたたんで私に返してきた。

それを受け取り元の場所に戻した所で、紫様が再び口を開いた。

「あの子は外の世界で生きてもらっわ。」

「ちょ！？ どういう事ですか？」

私が馬鹿なのだろうか？ いや、そういう訳ではあるまい。

今の紫様の思考をトレースできる者がいるとしたら、すぐにでも名乗り出て欲しい。

長年紫様の式をやっている自分が分からないのだ。そんな奴は恐らくいまい。

「言葉の通りよ。あの子にはここから出て行ってもらっわ。」

「いや、だから何でそうなるのか分かりません。一つずつ順を追って説明してください。」

「分からないのは分かってないからよ。もっと頭を働かせなさい。……と、言いたいんだけど。」

「？」

「時間が無いのも事実なのよね。いつここに天狗が来るかも分からない状況だし、のんびりなんてしてられないわ。……藍。」

「はい。」

「今から言う事をやってくれるかしら？ 説明は作業中にするから。」

」

「……分かりました。」

「実はね、この計画自体は前から考えてたわ。」

私は紫様の指示に従い、魔法陣を作成していく。
転移の術式と……これは記憶消去、いや、保護か？

「藍、貴女にとって、桜はどんな存在？」

「そうですね……。手のかからない子供、でしょうか。でも、それがどうかしました？」

「うーん、私にとっては少し違うのよね。」

「と、言いますと？」

「子供、っていう点には同意するけどね。けど、私はあの子を自分の下に置く気は無いの。」

「だから追い出す、ですか？」

「不満？」

「そういう訳ではないのですが……。そもそも、初めは人里にでも預けるつもりでしたしから。妖怪である事が判明した以上、それは

難しくなったのですが。けど、どうして態々外の世界に？　ここで育てる訳にはいけないのですか？」

「分からない？」

「結果に至るまでの過程が説明されていない状態では仕方の無い事だと思いますが。」

「藍もまだまだね。いい？　この子が幻想郷で暮らすと仮定する。その場合、桜は何処で育てられる事になると思う？」

「……パワーバランス、ですか？」

「正解。優秀な素質をもってる子だから、勢力争いに興味のある奴等には戦力的な意味での将来性を期待される。知識人や魔法使いにとって、その能力は格好の研究材料になる。どちらにしろ引く手数多になるのは簡単に予想が付く。」

言われてみれば確かに。

比較的勢力争いとは縁の遠い幻想郷であるが、だからといってゼロという訳ではない。

一社会を構成している山の妖怪や信仰獲得に余念の無い神様を初め、今は大人しくしているものの何を起こすか分からない奴等はゴロゴロ存在する。そんな状況で桜の受け入れ先を募集した場合、何が起こるか分からない。

「ならばなおの事、私達の手で育てるべきでは？　そういった輩から遠ざけるには、それが一番妥当だと思えるのですか？」

「駄目よ。幻想郷の管理人なんてものをやっている以上、弱みを増

やす訳にはいかない。ちょっと極端な話だけど、もし桜が誰かに浚われて、それを盾に理不尽な要求をされたとした場合、私に求められるのは桜を見捨てる事。そんなの互いの為にならないわ。」

言ってる事は分かる。紫様には幻想郷の管理者として振舞う事が要求されている。

そして、幻想郷の管理者としての視点から判断した場合、あの子を育てる事はデメリットが多い。

「……ですが！」

けど、だからといって納得出来るものでもない。

「紫様はそれで良いんですか？ 生まれ方が特殊だとはいえ、千年以上生きてきて初めて出会えた同族なのでしょう？」

紫様にとって、桜は言ってみれば初めて出来た娘のような存在。

理屈の面で言えば、確かに紫様の言ってる事は正しい。

「紫様、あんなに嬉しそうに桜の事抱っこしてたじゃないですか！
？ なのに離れ離れになって良いんですか？」

けど、納得なんて出来ない。

そもそも私が反対している一番の理由は、ここに桜が来てからの紫様が、本当に嬉しそうにしていたから。

一人一種とは言い換えれば孤独な存在。永遠にそのままだと思っていた所に突如現れた、娘にも近い存在。紫様の受けた衝撃は、私には予想がつかない。

だというのに、自らの手の中から離れていくのを是とする。理解できる訳が無い。

「良いも悪いも無いわ。例え私達が育てるとしても、あの子の存在が知られたら、それを利用しようとする輩は必ず出てくる。実行するかどうかは別としてもね。そうなった時、あの子では抗えない。」

「なら、私達が守ってあげれば良いじゃないですか！」

桜を手放したくない。それは紫様も同じ気持ちの筈。だというのに、口から出てくるのは悲観的な言葉ばかり。

今のあの子が無力な存在だというなら、私達が守ってあげれば良い。それ位の事、紫様だって気付いている筈なのに。

「子供を守るのは親として当たり前前の事です！桜を傷つけたくないのなら、私たちが頑張れば良いじゃないですか！？」

「守るといっても限界があるわ。私たちは神様でも何でも無い、ただの妖怪よ。それに、もうすぐ天狗が来る。桜の存在を隠しておくのは無理よ。」

「そんなの幾らでも何とかあります！天狗なんて追い返せば良いじゃないですか！仮にその存在が広まったとしても、私達のうち一人が常に付いていれば大丈夫です！」

「無茶言わないで。管理者としての役目を放り出すつもり？」

「なら桜の存在を秘密にして、ここから出さないようにすれば……。」

「

「そうやって、桜を籠の小鳥に貶めるつもり？」

「……あ。」

沸騰していた頭が一気に冷えた。

「この家に囲って、どんな外敵も寄せ付けず、関わらせない。それがあの子の幸せかしら？」

「違……。」

「違わないわ、藍が言ってるのはそういう事よ。それが、理不尽に對抗出来るようになるまでという期限付きであつたとしても、やる事は変わらないわ。悪魔の妹を知ってるでしょ？ 徹底的にするなら、あのレベルで守らないと意味が無い。そしてそれは、桜の為に言っても到底許される事じゃない。」

「あ、ああああ……。」

「藍、意地悪言ってごめんなさいね。貴方を責めるつもりは無いの。出来るなら、私達の元で育ててあげたい。けどその選択は、桜から自由を奪ってしまう。」

「そういう事、でしたか……。」

納得できた。いや、せざるを得なくなつた。

私は紫様の事しか考えていなかった。だから桜の為と言いながら、何としても紫様の傍に置いておこうと考えた。

けど、紫様は桜の事だけを考えていた。

だからこそ、自分の手で育てるという選択肢すら捨ててみせた。
自分の存在が害となるから、躊躇わずに放棄してみせた。

「あらゆる外敵を排除されたただ守られるだけの存在。言い換えるなら高級な絵画や壺のように、そこに飾られるだけの調度品。この子は、桜の価値は決してそんな下らない物なんかではない。同じスキマ妖怪として、そんな無様な姿になる所だけは見たくない。だからこそ、桜には外に行ってもらう。幻想郷という世界がこの子にとって害になる位なら、外の世界で自由に生きる道を与えてあげる。結局の所、勢力争い云々というのはただの建前。私は桜に、自由を与えてあげたいのよ。」

「……本当によろしいのですか？」

「当たり前じゃない。……と、これでいいわ。」

作業が終って紫様が立ち上がり、桜を連れてくるために歩いていく。

紫様は桜を腕の中に抱いたまま、こちらへ戻る為に振り向いて

「子供の幸せは親の幸せ。この子が元気に生きてくれるのが、私には一番嬉しい事なんだから。」

いつもの胡散臭い笑顔に、一粒の雨が降っていた。

桜、あなたは外で幸せに生きなさい

私達の事は忘れさせておくわ。その方が早くそっちに適応できるでしょうから

忘れたくない？ 安心して。時期が来れば自然と思い出すようになっているわ

幻想郷は、貴方にとっては優しくない世界だった。全てを思い出した時、私を恨んでも構わない

けど、もしも貴方が私を求めてくれるなら、幻想郷に戻りたいと思ってくれるなら

強くなりなさい。貴方に害を為すものに、世の中の理不尽に決して負けない位に

その時は、もう一度

「そういう事、だったんだ……。」

ル・ルシエで拾われるまでに何があったのか。浄玻璃の鏡はその全てを映し出しました。

それを見て、私も思い出す事が出来た。紫さんと藍……さんに出会った記憶と、桜の名前を貰った思い出。

……けど。

「映姫様。」

「どうしました？」

「紫さんの選択についてどう思いますか？ 閻魔としての意見を正直にお願いします。」

「言語道断です。いくら事情があつたとはいえ、八雲紫が貴方を捨てた事実に変わりは無い、育児放棄は立派な罪です。貴方に自由を与えたいという気持ちも理解できますが、だからといって極端すぎる。放任主義などというレベルではありません。」

「……本当に遠慮無いですね。私も同じ意見ですが。」

確かに、紫さんの考えを理解はできるんですよ？
けど、だからって全部を肯定はしたくない。

「状況的に仕方なかった部分はあるし、私の事を考えてくれたっていうのは理解できます。でも、それでも一緒にいたかったっていうのは私の我儘でしょうか？」

「子供が親、ないし保護者と一緒にいたいというのは当たり前的情感です。少なくとも、間違つてはいません。だとすると何が間違っていたのか。強いて言えば、その感情が『子供の我儘』にならざるを得なかった環境です。」

「むう、分かるけど分かりたくないです……。」

獅子は我が子を千尋の谷に落とすって言うけど、私のケースはまさにそれです。

守るばかりが愛じゃない、時には突き放して困難を与えるのも愛の形の一つである、って事なんでしょうけど、谷底に落とされた子

が親に感謝するか？　って、する訳ないです。

「……ああ、何かだんだん腹立ってきました。」

きっかけさえ掴めれば後は早いもので。

ひとつの記憶が思い出される度、それに関連した記憶も連鎖的に思い出してきました。

それと同時に、当時の私が抱いていた感情も想起されています。

「なーにが私の為、ですかあのババア。そんな事言いながら、私の事なんてガン無視してたじゃないですか。」

あの時、紫さんは一人で考え一人で結論を出した、当事者である私に聞きもせずに。

話した所で結論は変わらなかったのかもしれない、けど、それでも聞いて欲しかった。

「私の問題なのに勝手に決めて、こんな一方的な押し付けじゃないですか。映姫様もそう思いませんか？」

「おそらくですが、彼女にとってはそう思われるのも考慮の内なのでしょう。彼女なら「その位で何とかなるなら安いものですわ」と言うでしょうね。」

「あー、簡単に想像つきました。確信犯とか余計にタチ悪いですね。」

「全くです。この幻想郷には、罪を突きつけても悪びれない者が多すぎます。」

想像つくのが嫌ですけど。

映姫様の言った通り、もし私が直接弾劾したとしても、反省はしても後悔は絶対にしなさそう。

もつとも今更謝られた所で何が変わる訳でもなし。ならばそれで良いんでしょうけど、それだと何だか納得いかない。だからといって謝罪されたいのかと聞かれたら、それも何か違う気がしますし。うーん……。

……………。

……………。

……うん、決めた。

「映姫様。」

「何か用ですか？」

「スキマ妖怪に伝言を頼めますか？」「全部終わったらブン殴りに行くから、首を洗って待っててください」って。」

「その心は？」

「スキマが全部悪い。うん、たぶん、きっとそうです。」

八つ当たり？ いえ、そんな事は無いです。

経緯はどうであれ私を放り出したのは事実な訳ですし、それに対し私が反発するのは正当な権利です。ちょっと考えすぎてました。物事はシンプルに行かないと。

「スキマ妖怪は愛情の与え方まで回りくどくなるものなんですかね？ そのせいでこっちは良い迷惑ですよ。捨てられたと思って自棄になったあげく、似合わない自己犠牲なんてやらかしちゃったんですから。」

「後者は自業自得です。」

「う……。ですけど、きっかけは中途半端に戻った記憶です。つまりスキマのせいなのは確定的に明らかです。」

本当、放任主義もいい所です。

段階を踏んで記憶を戻すなんて言っておきながら実際は虫食い状態でしたし、タイミングだって悪意を感じる絶妙なタイミングでしたし。

これで誤解しない方がおかしいですよ。うん、やっぱりスキマが悪い。

……でも。

「紫さんは私を愛して……。いえ、やっぱり良いです。……映姫様。」

「また伝言ですか？ 私はメッセンジャーではないのですが。」

映姫様に聞こうとして途中で止める。

あの人の気持ちはあの人にしか分からない。白黒はつきりつける閻魔様でも、分からない事はある。

なら、どうすればいいか？ そんなの、答えは一つです。

「聞きたい事が沢山あります。覚悟しててください」。さっきのに、そう追加してもらえますか？」

「その心は？」

「十年分のツケを払ってもらいます。絶対逃がしません。」

回りくどい、分かりにくい、胡散臭いの三重苦だけど、それでも大切に思っはくれてたんだろっなとは思えるから。

映姫様に言われた通り、私は怖がりなのかもしれない。

幻想郷とル・ルシエでの経験から、愛情や信頼というものを無条件で信じられなくなってしまったんだと思う。

スバルさんやはやてさん達との人間関係も、どこかで壁を一つ作って依存しないようにと考えてきた。裏切られるくらいなら、最初から一人でやった方がずっとマシだから。

なにもかも一人で全部やろうとして失敗して、結局は後の事を皆に押し付けてこんな所にいる。

自分の事ながら救えないです。

でも、記憶を取り戻して今まで忘れてた事を思い出した。

紫さんの行動は、結果的に私を追放する事になった。

けど、それは情と現実を切り離して考えた結論じゃなくて、情が介入したが故の結論、だと思う。

もっともこれは私の考えで、都合の良いように考えた妄想に過ぎないのかもしれませんが。

でも……。

「信じるのは、自由ですよね？」

もう少しだけ信じてみるものいいかもしれない。紫さんの事、それと私が出会った人達の事。

今まで無意識に恐れてたけど、勇気を出して少しずつ踏み込んでいくのも良いかもしれない。

まだ吹っ切れた訳じゃないけど少しだけ、ちょっとだけなら頑張っても良いかな、と思う。

「映姫様、有難うございました。半ば自棄になつてた私の話を聞いてくれて、道を間違えないように導いてくれて、本当に感謝しています。」

「私は務めを果たしたまでです。礼を言われるような事ではありません。」

「それでも、です。なら、私の方で勝手に感謝しておきます。それじゃ、そろそろ行きますね。」

さあ、もう良いでしょう。もう十分過ぎる程に休みました。今まで腹に溜まっていた物も、懺悔を通して全部吐き出しました。だとしたら、もう私はここに居るべきじゃない。

賢い振りして全部諦めて逃げて、そんなのはもう終わり。

私には、帰るべき場所がある。

今もなお戦っている人たちの所に、帰らなきゃいけないんですから！！

「待っててね、藍、フリード、それと……、皆！！」

.....あ。

「あー、映姫様。」

「どうしました？」

「私、どうやったら元の所に帰れるんでしょうか？」

「.....。」

「.....。」

「まさか、知らないのにあんな事を？」

「わー！ わー！ わー！」

「『待つててね、藍、フリード、それと.....、皆！』、なんて啖
呵を切っておきながら、見当もついていなかったのですか？」

「くぁwせdrftgyふじこlp!？」

言わないでください恥ずかしい！！

ああんもう、何口走ってるですか数秒前の自分！！

知らないですか、って？ ええ知りません知りませんとも！！

大体ですね、こういう所ってA' Sの時のフエイトさんみたく、

何かしらの結論が出たら勝手に戻るものじゃないんですか！？

御都合主義さん空気読んでくださいよおお！！

.....。

.....。

.....。

「落ち着きましたか？」

「はい、すごく落ち着きました。」

嘘ですけど。うつつ、まだ顔が赤いです、さっきのは黒歴史認定です.....。

「そろそろ本題に戻りましょうか？ 桜、貴女の希望は元の肉体に戻る事ですね？」

「はい。」

今サラッて言われたけど、今の私は肉体と分離してるらしいですね。

ぶっちゃけた話、元居た場所に戻る事しか考えてませんでした。

.....うん、死んでるのすっかり忘れてた。

「あの……、やっぱり駄目ですか？」

つまり、今の私は魂そのまま、肉体を持たない霊体です。

「さつき戻るって言っちゃったけど、映姫様的にNGだったりします？」

そして映姫様は死者を裁く閻魔様。

映姫様にとって私の『戻る』発言は言わば脱走宣告と同じ訳です。

「いえ、そういう訳ではありません。あなたが何処へ行こうと、私は邪魔をするつもりはありません。もっとも、貴女の方からこちらへ来るのなら話は別ですが。」

「遠慮します。にしても、うーん……。」

本当に困りました。どうすれば良いんでしょうかね。

「……ヒントをあげましょう。」

「映姫様？」

「そもそも、貴女はどうしてここに来たのか分かりますか。」

「それはガス欠で……む、そういえば何ででしょう？」

「おそらくですが、『矛盾を受け入れる程度の能力』が関係しているのではないかと考えられます。その能力は生命維持にも関わっています。それが弱った結果魂と肉体が不具合を起こし、魂が追い出されたと推測できます。ここまでは良いですか？」

「はい。続けてください。」

「それに加え、貴女は妖怪でもあります。妖怪は精神的なものに大きく影響されます。自己のアイデンティティが揺らぎ不安定であったが為に、「死」の側に引き寄せられたのでしょう。」

「むむむ……。」

「本来なら、そのまま一人の死者として三途の川を渡る事になる。けど、ここでも疑問が発生します。桜、『あなたは宵越しの銭を持つていませんか?』」

「あ、はい。」

「金額の差はあれ、死者なら誰もが持っている銭を所持していない。それはつまり、貴女が死者ではないという事になります。」

「何か変ですね、死んでるのに死んでないとか……、まさか!？」

「おそらく想像の通りです。『矛盾を受け入れる程度の能力』の影響で、今の貴女は生者と死者の境界が無視されています。死因のひとつになった能力ですが、今そうしてられるのはその能力のおかげ。皮肉な話ですね。」

「うーん……。」

「やばいです、話についていけなくなってきました。」

「けど、ここで更に疑問が発生します。『矛盾を受け入れる程度の

能力』はあくまでも受け入れるだけ。物事の境界に干渉する事は出来ません。だというのに、貴女は死者になる事のないまま中途半端な状態をキープしています。能力が関係無いのだとすると、それは何故か？」

「ごめんなさい、限界です。結論だけ三行でお願いします。」

「……良いでしょう。」

話を戻しますけど、そもその本題は私が元の肉体に戻る為の方法ですから。

なのに何でこんな回りくどい事を……、どこぞの育児放棄親じゃあるまいし。

「心が弱つたくらいで
『人間』は死にませ
ん。

……二行で十分でしたね。」

……ごめんなさい、前言撤回です。全部の話がしっかり関係して
ましたね。

成る程、何となくですけど分かりました。

「映姫様、本当にありがとうございます。また今度菓子折りでも
持ってお礼に来ます。」

「礼には及びません。どうかお元気で。」

「はい！ では、また！」

映姫様に背を向けて、私は行動を開始する。

目指すはミッドチルダ、今もなお、皆が必死に戦っているであろう戦場へ。

……では、改めて。

霊力を全開に、それとは逆に妖力を抑える。

新たに自覚した『矛盾を受け入れる程度の能力』、それを自分の存在が消えない程度に、最小限に維持する。

直後、私を襲った浮遊感に予測が外れていないのを確信して、そのままその感覚に身を委ねました。

藍、フリード、それと皆！ 待っててください、今行きます！！

第79話 八雲 桜（後編）（後書き）

7?話じゃないのかって? 素で忘れてたYO!!
こんな所にネタ挟める度胸はありませんでした。

これにてキャラ復活。次回から、舞台は再びミッドに戻ります。
以下Q&Aです。

Q・全ては天狗の仕業だったんだよ!!

A・天狗の件はあくまできつかけ。遅かれ早かれこうなっていました。
ちなみに藍を撮影したのは文ではなくその他の一般天狗。
この少し後、仲間の新聞でこれを知った文が八雲家に乗り込みますが……

その後文がどうなったかは本編57話参照。

Q・桜（キャラ）の名前が微妙に仲間外れな理由は?

A・以下裏設定

紫はキャラを自分と同列の存在として見ています。

藍、橙は式に付けた名前です。つまり

虹の色から取った名前＝式の名前＝自分の「下」のものにつける名前

という公式が成り立ちます。なので紫的にはNGです。

かといって、全く自分達と違う名前を付けるのも嫌。

桜という名前は、そういった妥協点の産物です。

Q・62話でいきなり記憶が再生された理由は?

A・記憶の領域に対して不正規な手段でアクセスしたからです。
今話で説明した通り、元々記憶は成長につれて一定の順番で思い出すようになっていました。

紫のやった事は記憶の保護。イメージ的には、自分達に関する記憶を抜き出して、それをいくつかの金庫に分けてロックを掛けた感じです。

ロックの強さは金庫毎に違い、それで順番が調整されていました。ここで重要になってくるのがロックを解除する方法、つまり鍵の存在。結論から言うと、「矛盾を受け入れる程度の能力」が鍵になってました。能力の成長に伴い、記憶の境界を無視して情報を取り出せるようになっていました。あとこれは余談ですが、6話で藍がキャラの記憶を覗いたのは、ロックの確認のためです。

では、62話で起こったのは何だったのか？

あの時、キャラはモード「白沢」を選択しており、歴史、記録といった記憶に係る物との親和性が高い状態でした。ですが、融合は藍しやまが制御しているので暴走はしません。だったら原因は何なのか？

思い出してみてください。あの直前、キャラは何をしていましたか？

～証拠ログ～

「んくつ、んくつ……。ぷはーっ！」

もうお分かりいただけたでしょうか？ 原因はコレです。

あの時、キャラは国土無双の薬をがぶ飲みしています。しかも

～証拠ログ～

薬の効果はすぐに発揮され、先の戦闘で消費した分のエネルギーは回復。何だか色々漲ってくる感覚がしてきます。

漲ってますwww

大して消耗してないのに使ったせいで、回復量がオーバーして軽

いブースト状態になっちゃってます。

このせいで『矛盾を受け入れる程度の能力』が無意識レベルで強化され、「白沢」の能力を行使した際にうっかり記憶の錠を開けてしまったというのが真相です。全面的にキャラが悪く見えるのは錯覚です。だって能力の事知らなかったし。

Q・今話の最後にキャラがやった事は？

A・一言で言うところ「世界の修正力の逆利用」です

ではTF系の仕事があるのでこの辺で。

次は二週間以内には更新したいです。

裏7?話 やくもけ 浄玻璃の鏡が映さなかった真実 (前書き)

80話かと思つたか? 番外編だよ!!

C a u t i o n!! C a u t i o n!!

この話は裏話です。しかも?話です、これでマトモな訳がないです。
前話を読んでイイハナシダナーと感じた人は、読まない方が良いでしょう。

それでも良いという奇特な方だけ、続きをどうぞ。

裏？話 やくもけ 浄玻璃の鏡が映さなかった真実

「紫様、紫様？」

私、八雲藍はいつもの見回りを終えて家路についた後、これまたいつものように晩飯の準備をする。

メニューは人里で買ってきた山菜の和え物に鯖の煮付け、それと豆腐と油揚げの味噌汁。

記念日でもない日はこんなものだ。毎日宴会なんてしてたら身がもたない。

粗方の準備が終わり紫様を呼びに行く所で、冒頭へと話が戻る。

「開けますよ、紫様。」

部屋の前に立ち、そう前置きしてから襖を開ける。

予想通り、私の主はそこにいた。

「やはりここでしたか。聞こえてるならちゃんと返事してください。」

「あら、藍じゃない。どうしたの？」

「どうしたの？ じゃないですよ。ご飯ですよご飯。冷めてしましますから早く来てください。」

「もうちょっとだけ待ってくれない？ 今いい所だから。」

「それ昨日も言っていましたよね？」

またか、と呆れた視線を送るも何のその。紫様は少しも悪びれる事無く微笑んでいる。

背後にはスキマが開いており、そこにはとある光景が映っていた。

「ほら、あの子、指を立てて何かするみたいよ。……今の見た！？あの子まだ一歳なのに弾幕撃ったわよ！」

「はいはい分かりました分かりました。その辺にして切り上げてください。」

「何でそんなに落ち着いてるのよ。藍にはあの凄さが分からないっていうのかしら？」

「紫様のせいですよ……。」

確かに凄いと思う。私も初めて見た時は驚いたし、今も現在進行形で感心している。

けど、だからといって繰り返し聞いていればうんざりもする。

同じ事ばかり何度も何度も聞く身にもなっただけなものだ。

部屋から出てきた紫様といっしょに居間へ。ちょっとだけ遅くなった夕食を摂る。

むう……、少し冷めてしまってるな。

「桜を送ってから毎日毎日、良く飽きないものですね。」

「飽きないわよ。一見同じように見えても、良く見れば昨日と今日で少しずつ変化している。子供が成長していく姿を見るのはこの上無い娛樂ね。」

嫌味を言っても軽く流された。こっちの言いたい事なんて理解しているでしょうに。

やはり直接的に言わないといけないか。

「娯楽も結構ですが程々にしてくださいと言っているのです！ 結界管理の仕事だって私一人でやってるじゃないですか！」

バン、と机を叩きながら強めの語調で叫ぶ。

別にそれほど怒っている訳ではないが、この位やらないと真面目に聞いてくれない。

「何で冬場でもないのに私がフルで動かなきゃいけないんですか！」

「ら、藍？ 落ち着いて」

「私は落ち着いています！」

あれからというものの、紫様は暇があればスキマを開いて桜の様子を見ている。

別にその事自体には何も言う事は無い。

気になるのは当たり前だし、かくいう私も時々様子を見ていたりする。

けれど、それを言い訳に結界管理の仕事を丸投げされるのは納得いかない。

冬眠は不可抗力だがこちらは完全にサボりだ。どこぞの死神じゃあるまいし。

「きよ、今日はたまたまよ。」

「昨日も同じ事言って結局私にやらせたじゃないですか！ とにか

くちゃんとしてください。このままだと私が保ちません。」

「わ、分かったから。明日はちゃんとするから。」

「本当にお願ひしますね、でないと私の身が保ちません。」

はあ、とため息を一つついてから食事に戻る。

このやりとりも今日が初めてではない。

しばらくは真面目にしてくれるだろうが、きっとそのうち似たような事になるだろう。

本当、どうしてこうなった。

表面上の態度からは一見そうと分らないが、紫様はとても愛の深い御方だ。

その事は式になりたての頃に色々してもらった私が良く知っている。

そもそも、幻想郷という一つの世界を丸ごと愛するような人だ。

これで薄情な訳が無い。

なら、その愛情が一点に集中したらどうなるか？ そんな事態々言うまでもない。

紫様はよく私の事を過保護だと言うが、紫様にだけは言われたくない。

「藍は冷たいわねえ。桜を追い出すのを反対してた頃の貴女は一体どこに行ったのかしら。」

「間違いなくあなたのせいです。私だって気にかけてはいますが、紫様は行き過ぎです。」

妖怪の賢者は、親馬鹿を通り越して馬鹿親であった。

「デバイス、ですか？」

「ええ。今すぐっていう訳じゃないんだけど。」

私の願いが通じたのか、あれから紫様は真面目に管理の仕事を行ってくれるようになった。

サボる事なく私と交代で行ってくれるため、私の負担も大幅に減少し、大助かりである。

「親がニートだと知ったら桜はどんな顔しますかね？」の一言が効いたのかもしれない。

そういう事もあり最近は大人しくしていたので一安心だったのだが、そんな事を考えていたとは。

「あの子の知識が本当だと、およそ四年後には一人で生きていく事になるわ。そうなった時に生き抜く為の力として、ね？」

「過度な干渉はしないのではなかったんですか？」

「そんな大層な事じゃないわ、あくまで最低限の自衛の為よ。命あつての物種、って言うでしょ？」

「まあ、そういう事なら……。」

私だって桜の事は大切だ。

私達の都合で放り出して、それで野垂れ死なれでもしたら申し訳無さすぎる。

最低限のフォロー位なら構わないだろう。それと

「決まりね。なら、どんな物にしましょうかしら？　こつやつて考えるのも楽しみの一つね。フフ……。」

確かあの子がル・ルシエを出る事になるのは6歳になった直後だった筈。

誕生日プレゼントに送るというのも悪くないのかもしれない。

「じゃ、藍。留守番お願いね。ちょっとミッドチルダに言ってくるから。」

「あ、ちょ、紫様？　……行ってしまったか。」

この日の晩、紫様はデバイスを1機購入して戻ってきた。

「まだ数年先の話ですよ。少しばかりせつかちじゃないですか？」

「良いのよ。今のうちから、ね。」

また馬鹿親か、と呆れる私はその言葉の意図する事に気付く事が

出来なかった。

どうしてこうなった？

「ほ、本当に良いんですか、こんなの貰っちゃって!？」

「構わないわ。その代わり……。」

「な、何でございましょうか？」

「別に大した事じゃないわ。ちょっとした約束とお願いよ。「この技術を天狗含め外部に漏らさない」「成果内容を定期的に私へ上げる」大まかにはこんな所ね。研究者なら誰もが守るような当たり前の事ですわ。」

「お願いというのは？」

「ある程度技術が煮詰まってきたら、それを使って作ってもらいたい物がありますの。そちらにとつても悪い話ではないと思いますが？」

「……ちょっとだけ時間を頂けますか？ 仲間と相談したいので。」

「構わないですわ。返事は急がなくてもいいから、しっかり意見を一致させてからにして頂戴。これは置いていくけど、勝手に弄ったりしないように。」

河童との交渉を終えた紫様が戻ってきた。

その背後では交渉に当たっていた河童がこちらを見送りながら、置いてきたデバイスをチラチラ見ている。

すぐにでも触りたいのだろうが、それはこちらの要求を飲んでから。

相談するとは言ったものの、返事はすぐにでも返ってくるだろう。

「帰るわよ、藍。」

「何でデバイスなんか買ってきたと思ったら、こついつ事でしたか。」

「やっぱり店売りの物よりも手作り品よね。」

「バレンタインのチョコじゃないんですから……。にしても宜しいので？ 河童に技術を漏洩して。」

「蛇の道は蛇。最高の物を作るなら、それに見合った人材に任せるのが一番ですもの。もちろん、私も一枚噛ませてはもらっけどね。」

「……自衛用じゃありませんでした？」

「もちろん自衛用よ。最高の、ね。」

河童からの返答は、言わずもがなであった。

「なあ、橙。」

「どうしました、藍様？」

「自衛って、何なんだろうな？」

「私にも分からなくなってきました。」

結界補修の仕事の傍ら、私について作業を手伝ってくれている橙に話しかける。

これは最近ではよくある光景で、少し前から橙に少しずつ仕事を教えていつている。

正直に言ってまだ早いのでは、と思っていたがこれがなかなか。失敗こそあるものの、橙はそれを無駄にせず少しずつ出来る事を増やしていった。

今では監視と簡単な補修くらいなら、一人で任せても良いくらいだ。

まだ一人前とまではいかないが、四分の三人前くらいの働きはしてくれる。

どうしていきなりそんな事を始めたのかというと……紫様が反面教師なの言うまでもない。

あんな過保護になつてたまるか。

「夢幻珠、でしたっけ？」

「ああ。あの仕様書、橙も読んだら？ 正直どう思った？」

「えーっと、ちょっとやりすぎじゃないかなー、って。」

「私もそう思うよ……。」

河童への技術提供からはや数ヶ月。

河童は上手くやっているようで、与えられたサンプルから技術のノウハウを吸収し、既存の知識とすり合わせて自らの物にしていく過程が定期的にあがってくるレポートから読み取れた。

魔法術式のプログラム化についてはまだ解析中との事。それさえ終われば独自にデバイスを作る技術力を手に入れるだろう。

その成果を見た紫様はかねてからの「お願い」を依頼した。要求する仕様を纏めた書類を持って、私と橙は河童の集落へ向かった。

その際、私と橙も仕様書に目を通したのだが……。

「デバイスとしての機能に加え分霊体を用いた融合システム。なんとまあ、とんでもないシロモノになったものだ。紫様は、一体何を考えておられるのか……。」

「実は何も考えてなかったり……、って、紫様に限ってそんな事は無いですよー？」

「それは無い……、と思う。うん、無い。……無いよな？」

「うにゃあ……。」

「ただいま戻りました、紫様。」

「あら、お帰り。橙もお帰りなさい。」

「ただいまです、紫様。……あれ？ その刀って妖夢さんの？」

「影打よ。埃を被ったままなのも勿体無いから、って幽々子が譲ってくれたわ。」

「……何となく予想はつきますが、夢幻珠ですか？」

「ええ。融合だけじゃ宝の持ち腐れになる形態だもの。」

「「……。」」

ニコニコと笑う紫様の顔を見ると、先ほど会いにいった河童の顔が想起される。

仕様書を渡した時、彼女達は皆顔を輝かせていた。

想定される作業量に顔を顰める者など一人もおらず、自分達の技術の粋をぶつけるのが楽しみで堪らないといった風に。

山という一つの社会に所属してはいるものの、河童はどちらかと言えばギークという感じである。

納期を決めて計画的にやるのではなく、気の赴くまま興味の向くまま、己の趣味に最大限の力を発揮する連中だ。最高級のオモチャを与えられた河童は、一種の暴走機関車だ。

そして、それを支援するのは紫様。ブレーキを掛けるどころか、ギアを上げてアクセルを思いっきり踏んでくる。

双方共に、自重などという単語はスタート地点に置き忘れている。

馬鹿親とマッドの超融合には、どんな効果も割り込めない。

「それは、お払い棒ですか？」

「お払い棒よ。この位なら構わないでしょ？」

「まあ、それ位なら。」

「紫様、それは？」

「レプリカ八卦炉ね。緋緋色金を提供したら、喜んで作ってくれたわ。」

「……。」

「えーっと……、何ですか、その筒？」

「制御棒ね。河童に作ってもらったわ。」

「そんな物何に使うんですか……。」

「仕方ないじゃない。「核融合を操る程度の能力」を使うには、どうしても必要なのよ。」

「ちょ、何ですかそのトンデモ能力!？」

「この前怨霊騒ぎあったでしょ？ その時の地獄烏が持ってたのよ。」

「そんなあの子に持たせるつもりですか!？」

「大丈夫よ、問題無いわ。一番良い装備を作ってあげないとね」

「……はははははは!！」

「藍様？」

「もうどうにでもなれ」

「ら、藍しゃまああああー!？」

こうして私は匙を投げた。

「あらあら、困った事になったわねえ。」

「予定よりも二年早いですね。」

「どうするんですか、紫様？」

スキマを開きながら相談しているのは私と紫様、それと橙。

スキマの向こうでは桜改めキャロが、竜召喚の儀式に挑んでいる。

「色々頑張りすぎたせいで時期が早まっちゃったのね。さすがは桜ね。」

「関心している場合ですか！？ まだ夢幻珠は完成してないんですよ？」

「ですよね……。」

研究開発が始まってから今日で約三年。

技術自体はほぼ完成しており、内部に格納する分霊体、各種装備を含め90%完成している。

だが、100%ではない。

「河童に納期変更の連絡を。それに対する向こうの反応を今日中にまとめて頂戴。」

「いいんですか？ 間違いなく反発が来ますよ。どうするんですか？」

「誠心誠意謝るしかないわね。今回の件、非は完全にこちら側だから。技術提供の「貸し」があるから堂々としても良いんだけど、

そのせいで向こうのモチベーションが下がるのは下策だからね。」

「分かりました。では、行ってきます。」

「悪いわね。損な役割押し付けて。」

「トップの代わりに謝るのも、部下の仕事ですから。」

この日から数日後。

私の土下座と河童の悲鳴と私達全員の睡眠時間を犠牲にして、夢幻珠は完成した。

またこれは完全な余談だが、その後河童は徹夜明けのおかしいテンションのまま宴会に突入。

ナチュラルハイにアルコールが備わり、酒の勢いに任せて大暴れした。

その際、たまたま通りがかった哨戒天狗に喧嘩を吹っかけてしまった者がいたが、仲間の河童はそれを止めるどころか便乗。誤解が誤解を呼び、ついにはこの話が天狗に伝わってしまい「河童がクーデターだと!？」と妖怪の山始まって以来の大惨事に発展した。騒ぎは徹夜明けの河童がぶっ倒れ、正氣に戻った彼女達が全力で頭を下げるまで続いた。

この際、河童は約束を覚えてくれたのか私達の事は口に出さなかった。

この出来事は当時の文々。新聞に詳しく記載されているので、バツクナンバーを持っている人がいれば読んでみると良いだろう。

お山の事情からガセネタ扱い（というか黒歴史認定）されているが、歴とした事実である。

酒一杯にして人、酒を呑み

酒二杯にして酒、酒を呑み

酒三杯にして酒、人を呑む。

酒の魔力は人妖問わず惑わせる。

用法、用量を守らねばどうなるか、この話がいい例だ。

「で、現物がコレです。」

「ご苦労様。何とか間に合ったわね。」

「ですが、これはまだ未完成品です。この仕様で間に合わせるよう指示を出したのは紫様ですからその辺りは分かっていられるとは思いますが、どうなさるつもりですか？」

いくら研究熱心な河童とはいえ、年単位で取り組んでいたものをたった数日で仕上げるなんていう事は出来ない。研究が90%しか進んでいない状態で作れば、完成度も90%になってしまうのは当たり前前の話である。

「分霊体の封入、装備品の格納部分は既に完成しています。けど」

「肝心要の融合管制システムが未完成です。これだけは難易度が桁違いだって河童さんがぼやいてました。」

「……。仕方ないと言えば仕方ない話なんだけどね。融合管制システムなんて言っておきながら、実際は「矛盾を受け入れる程度の能力」の間接操作になるんだから。」

橙と紫様の言ったように、残りの10%は融合管制システムだ。

そしてその真の実態は、桜の能力の間接的な制御である。

河童には、桜とその能力に関しては告げていない。

そのうえ本人もいない状態では、研究が滞るのも無理の無い話で

ある。

「一応、私の人格を摸したAIは完成しています。ですが、肝心の中身が未完成では……。」

それでもとりあえず出来る所は作っておこうという事で、管制用の人格については出来ている。

このマニュアル「幻想演義」のコードを解除した際には、この人格が起動してテストを行う事になっている。それに合格すれば、晴れて夢幻珠を入手できるという訳だ。

普通に入手させれば良いのに態々余興をこしらえる辺り、紫様の人となりが出て見える。

「このままではその辺のガラクタと同じですよ。どうするおつもりで？」

こんな状態では、桜（今はキャロと呼ばれているらしい）に渡せない。

紫様は、一体どうするつもりなのか……。

「大丈夫よ。要するに、融合管制システムさえどうにかなってくれば良いんだから。」

「そこが一番困ってる所じゃないですか……。」

「……ねえ、藍。お願いがあるんだけど、聞いてくれる？」

「……何でしょう。」

私は紫様の式だ。

お願いされなくても、命令されればその意に沿うように動くのは当たり前である。

だというのに、態々お願いするという事は……。

この時のわたしは、正直言って嫌な予感しかなかった。

「ちょっと、人柱になってくれない？」

「そういう事ですか……。」

「？」

橙は分かっているようにだが、私には紫様の意図する事が理解出来た。

ああ確かに。その方法なら大丈夫だろう。

私はこの時、一つの悟りを得た。

理解できようが出来なかつたが、無茶振りは変わらない。

「……そろそろね。藍、準備は出来た？」

「はい。もう覚悟は済ませました。」

「藍しゃまあ……。」

「橙、そんな顔をするな。別に一生の別れてわけじゃないんだから。」

そう言つて、橙の頭を撫でてやる。

納得済みとはいえ、やはり別れというのは少しだけ辛い。

「あちらも大詰めみたいね。……藍、そろそろこっちに来なさい。」

「はい。」

そう返事をして、橙と一緒に紫様の元へと歩いていく。

紫様の傍にはスキマが一つ開いており、そこには弾幕戦を繰り広げる二人と一匹の姿が映っていた。

『竜魂召喚…… スペルカード、召竜「フリードリヒ」……!』

カードを掲げスペル宣言をする少女と、それに従う一匹の竜。それに対するは、体長30cm程の尻尾を生やした女性だ。

「桜、頑張ってますね。もう体もボロボロでしょうに。」

「キャラよ。向こうに行ったら、絶対間違えちゃ駄目よ。」

「……あ、終わったみたいです。桜ちゃん、気絶しちゃいましたね。」

「橙、名前名前。」

「橙はいいのよ、私共々こっちに残るんだから。」

「……でしたね。」

そんな話を話している間にも、スキマの向こうでは状況が進んでいく。

これから少しして、さく……キャロの勝利で弾幕戦は終了した。

「じゃ、そろそろ時間ね。行くわよ、藍。貴女とアレを入れ替える。」

「はい。」

ついにこの時が来た。私は心を落ち着けて、その時が来るのを待っている。

珠は珠であり魂である。
珠は珠であり呪である。

スキマの向こうから、私を模したAIの声が聞こえてくる。

これが終わったと同時に、私はあの子に成り代わる。

あのAIには融合管制システムは実装されていない。今のままでは、融合を使用する事が出来ない。

それを解決するための唯一の方法は、誰かがあのAIの代わりになって直接能力行使をサポートする事。紫様が人柱と言ったのはそういう意味。

機械で出来ない部分をマンパワーで補う。何とも単純で強引な話である。

ここに、夢幻の呪^{まじない}となつて主と魂の契約を為す。

もつとも、人柱と言ってもその言葉のニュアンスのような酷い事にはならない。

夢幻珠に宿っている限り行動の自由こそ制限されるものの、それ以外は今と変わらない。

能力行使のサポートだって、将来キャラが成長し、能力を使いこなせるようになれば必要なくなる。云わば補助輪的な機能だったりする。

むしろ結界管理の仕事に追われない分、今よりもずっと自由が増えるというものだ。

「紫様、私がいけないからって結界の管理サボったりしないでくださいね。橙は落ちてるものを無闇に食べない事、お腹を出したまま寝ない事、知らない人にホイホイついていかない事、それから……。」

「私はどこの子供ですか……。」

「あらあら。ふふ……。」

「あと、無理だけはしないように。疲れたらちゃんと休む事。良いか?」

「……はい!」

ここを離れるのは少しだけ不安だが、紫様と橙がいる。

紫様は言つに及ばず、橙も最近はかなり逞しくなってくれた。こ

の分なら安心して任せられる。

本当なら、この役目は私じゃなくて紫様がやりたかったに違いない。

けど、それは出来ない。幻想郷の管理人として、そんな無責任は許されない。

なら私は、私に任せられた事を全うしよう。それが、紫様の望みだから。

藍の名のもと、マスター、キャラ・ル・ルシエとの契約を承認する

こうして、私はキャラと一緒に歩む事になった。

おまけ 21話裏話

「はうっ！ す、すいません！」

「あらあら。私は気にしてないから、今すぐ家族の所に行ってあげなさいな。待たせると怒られるわよ。」

翠屋から出る際にぶつかってしまった相手に対し、キャラが頭を下げる。

すぐに許してもらえたのが嬉しかったのか、キャラは相手の顔を確認せずにゲンヤさん達の方へと走っていく。

私はその様子を見ながら、翠屋に入っていった金髪の女性に念話を繋げた。

『紫様、こんな所で何やってるんですか。』

『あら、藍じゃない。久し振りね。』

『久し振りとかどの口がそんな事行ってるんですか白々しい。暇さえあればしょっちゅう見てるじゃないですか。』

『それでも、こうやって会うのは久し振りよ。出会いは大切にしないとね。』

『……はあ。で、何しに来たんですか？』

『ちよつとした観光よ。それと桜の様子を見に、ね。』

『ね、じゃないです。大体、結界管理の仕事はどうしたんですか？まさかサボってないでしょうね？』

『大丈夫よ、問題ないわ。』

『何を以ってそんな事を言ってるんですか？』

『全部橙に押し付けてきたから』

『ちえええええええええええん!?!?』

裏7?話 やくもけ ー浄玻璃の鏡が映さなかった真実ー(後書き)

この後、橙は疲労でダウンしました。

疲れた体で食べた翠屋のシュークリームは生涯最高のご馳走だったらしいです。

この話で、キャラの知り得ない情報も解禁されました。これでたぶん100%です。全部回収できて良かった。

以下Q&Aです。

Q・藍しゃまエ……。

A・オタクの作ったAI 藍(本物)の分霊体 実は本物だったんだよ!

本作品において一番の嘘つきさんです。この人でせいでミスリードした人も多いのではないのでしょうか?

8話、よく見ると藍しゃまの口調が何度か変化してるんですねえw

Q・おい河童、お前ら何やってんだ。

A・57話でちよろつと出した話です。輝夜さん、四個中二個が正解のヒントとかサービスすぎ。

もつとも、文はそんな事気付きもしなかったみたいですが。

自作デバイス(自分用の作れるくらいは研究進んでいた)で砲撃ぶっぱなす河童vs高速飛行で回避しながら接近を仕掛ける天狗とまるでどこぞの無印みたいな展開(しかも集団vs集団)になったらしいです。

ナニコレコワイ。

では、また次話で。

第80話 幻想のカケラ ｝Flowering Cherry｝（前編）（前

分割したうちの前編。久し振りのリリカルサイド。
話はあるに進みません。

第80話 幻想のカケラ ｝Flowering Cherry｝（前編）

ゆりかご内部 動力炉にて

ガン！ ガン！ ガン！

「くそ！ くそ！ くそ！」

巨大戦艦「聖王のゆりかご」のとある一区画に金属音が響き渡る。その区画は開けた空間になっており、周囲には哀れにも鉄屑に姿を変えたガジェットがそこら中に散乱している。

魔力弾で撃ち抜かれたものもいれば鉄槌によってボディを潰されたものもいる。

それら全てが、たった一人の少女の手によって行われたものである。

少女 ヴィータが今いるのは部屋の中心部。

ヴィータの眼前には、ゆりかごの動力を司る魔力炉が今もなお悠然とそびえている。

「こん、のおおお！！」

ガキイイイ！！

連打から一転、息を整えた後、ヴィータは渾身の一撃を動力炉へと叩き込む。

しかしそれも、動力炉の展開している障壁に阻まれて傷一つつける事が出来ない。

なけなしのカートリッジを使った渾身の一撃、ギガントシュライクは失敗に終わってしまった。

手持ちのカートリッジを全て使ってしまった今、ヴィータに許されているのは自身の魔力のみの強化で行う攻撃のみである。

だから叩く、ひたすら叩く。それしか出来ないのなら、迷う必要など何処にも無い。

今もお戦っている皆の為に、この動力炉を破壊する。それがヴィータを信頼して任せてくれた、皆に報いる事になるのだから。

だが……。

「畜生！ 畜生！ 畜生――！！」

《……》

いくらアイゼンを叩き付けようと、動力炉はびくともしない。ヴィータの必死さを嘲笑うかのように立ちはだかるそれには、傷の一つも付いていない。

雨垂れ石を穿つという諺がある。

どんなに小さい力だろうが効き目がなかるうが、決して諦めずに続ければ、いずれは大きな成果になるという例えである。

その理屈で行けば、今ヴィータがやっている事は決して無駄ではないのかもしれない。

このまま続けていけば、いずれは動力炉を破壊できるかもしれない。

しかし

《離脱限界まで30分を切りました。お急ぎを。》

「分かってるよ！ くそっ！！」

ゆりかごは今も上昇を続けている。当然の話だ、動力炉がこうして健在なのだから。

ヴィータが動力炉に到達してから既に数十分、無情にもタイムリミットは刻一刻と迫っている。

カートリッジは切れ自身の魔力も心許ない。唯一の可能性も、時間という制限が邪魔をする。

あらゆる手段を封殺されたヴィータには、どうする事も出来ない。

この状況を引っくり返すためのジョーカーは、まだ彼女の手には無い。

同時刻　ゆりかご最深部　聖王の間

「レイジングハート！　ブラスター、リミット2！！」

《All right》

ガショツ、とカートリッジが排出され、開放された魔力がなのはを包む。

ブラスターシステム。ブースト魔法の際の余剰魔力を応用し、限界を超えた強化を可能にするのはの切り札である。

《Axel Shooter》

レイジングハートからの電子音声とともに生成されるシューター、その数20。

ほぼノータイムで生成されたそれを、なのはは正面に撃ち出した。

それに対するはクアットロの手によって操られているヴィヴィオ。固有スキル「聖王の鎧」の恩恵で大したダメージを受けないのを良いことに、弾幕など歯牙にもかけずに真正面から突っ込んでいく。

「あああああ!! ……!？」

《Restrict Lock》

あと一足飛びでなのはに接近出来る寸前、ヴィヴィオの身体がつのめる。

見ると右腕部分にバインドが施されており、それがヴィヴィオの自由を奪っていた。

《Chain Bind》

それだけではない。

気付くと右腕だけでなく、左腕に両足、それに胴体にも鎖型のバインドが巻きついた。

空中に停止した一瞬の隙を突いて、追加のバインドが施される。

そして、まだこれで終わりという訳でもない。

《Crystal Cage》

バインドに絡まって身動きが取れなくなったヴィヴィオを、駄目押しとばかりに閉じ込める。

三角錐の形をした檻に捕らえられ、ヴィヴィオはまともに動く事

が出来なくなつた。

《Master》

「うん、行くよ!!」

一定の距離をキープした所で停止したなのは、レイジングハートをヴィヴィオに向けてチャージを始める。

ヴィヴィオの身体にはレリックが埋め込まれている。ヴィヴィオを無力化するという事は、彼女の中にあるそれをどうにかするのと同義である。そして、ロストロギアであるレリックは、生半可な方法では破壊出来ない。

なるべくヴィヴィオを傷つけず、レリックだけを破壊する方法。それが

（純魔力による大火力攻撃。これしかない!!）

チャージと共に、周囲から魔力が集まってくる。

砲戦魔道師として強大な火力を持つのはであっても、ロストロギアの破壊となると取れる手段は限られてくる。

現状、それを可能とする手札はたった一枚。全力全開の集束砲、スターライトブレイカーのみである。

《10.....9.....8.....》

強力な攻撃というのはその分だけ時間がかかる。そして

《7.....6.....Master!!》

「くっ!!」

その間に逃げられてしまつては、全く意味が無くなつてしまう。
レストリクトロックにチェインバインドにクリスタルケージ、三種類のバインドによる拘束を振りほどいてヴィヴィオが突っ込んでくる。

それを予測して早目にブレイカーをキャンセルしていたのはこれを障壁で防御。即座に障壁に回していた魔力を爆発させて距離を取る。拘束と追撃防止を兼ねて爆発の寸前に腕にバインドをかけて逃げる辺り、経験の高さが伺える。

「三重バインドでもあの位しか足止め出来ないか。分かっちゃいたけど、ちよつとキツイね。」

《正確には6・5秒です。攻撃を通すには、あと5秒程足りません。

》

「バインドの重ね掛けは」

《今の時点ではあの強度が限界です。仮にブレイクされる度に掛け直した場合、ブレイカーの制御が甘くなります。》

「うん、分かつてる。」

レイジングハートの言う通り。ブレイカー中にバインドを掛け直せば良いのだろうが、そうは上手くいかない。

ブレイカーのチャージ中、なのはのリソースはほぼ全てがそちらに裂かれる。

かといって完全な無防備ではない。最低限の防御や飛行に割り振っている残りのリソースを使えば、バインドをかける位は出来る。けど、そこまでもバインドの効力は当然通常時よりも落ちる。

バインドブレイクをサボっていたどこぞの幼女ならともかく、今のヴィヴィオ相手には足止めにもなり得ない。

今なのはに要求されているのは「10カウント以上のバインド」もしくは「6カウント以内のブレイカー発射」。

より長く拘束するか、より早くチャージを済ませるか、もしくはその両方が。

そしてそれは言うまでも無く、実現不能な難題であった。

《Master……》

「大丈夫、まだやれる。」

だけど、なのはは諦めない。不屈の精神で支えられた体は、決して膝を付く事は無い。

機動六課の一員としてゆりかごを止める。ヴィヴィオの母親として、操られている娘を助け出す。

それを為しうるまで、なのはは決して止まらない。
だが

『いいですわ。その調子ですよ陛下。そのままどんどん消耗させちゃってください。』

その戦闘を映像越しで見ている女性　クアットロは、既に勝ちを確信していた。

『プラスターシステムなんて大層な名前がついていますけど、実際は限界を超えた自己ブースト。放っておけば勝つてに自滅するような、そんな不完全なシロモノなんですから。』

クアットロの言っている事は残酷だ。なぜならそれは事実だから。ブラスターは自己の限界を超えた強化を可能にしている。そう、限界を超えてだ。

そして限界を超えた代償は、余剰魔力による肉体への負担や過剰放出による急速な魔力消費となって現れる。

ブラスターを続けければ続ける程、なのはの体に負担が溜まり、魔力は急激に失われていく。

いくらなのはが不屈の精神を持っていようと、物理法則には逆らえない。

負担が増えれば体は鈍る、魔力を使えばその分減る。

なのはの命は蠟燭のように燃えながら、少しずつ身を削られていく。

この運命を乗り越える為のカードを、彼女は持ち合わせていなかった。

ゆりかご目標ポイント到達まで あと45分

同時刻 ゆりかご外部

「リン、なのはちゃん達から連絡は？」

「まだ来てないです。」

「不味いな……。」

ガジェットの群れに対して広域魔法を撃ち込みながら相談するはやてとリン。

未だに連絡がつかない状況に、二人は眉をひそめていた。

ゆりかご内部はA M Fの影響により長距離の念話が出来ない。

そのため外部にいるはやて達にはなのは達の様子は一切伝わって来ない。

既に任務が完了し帰還している最中であるのなら良いが、もしそうでなかった場合は？

そう考えると、未だに連絡のつかないこの状況は、決して放置して良いものではない。

「こつちは大分減つてきとるけど……。」

はやてを初めとした空戦魔道師の奮闘の甲斐あって、ガジェットは順調にその数を減らしていつている。

この調子で押し込んでいけば、間違い無くゆりかご周辺の制空権はこちらが確保できるだろう。

だがここで自分が抜けた場合、少なからず戦力低下が発生する。そうなると折角ここまで押し込んでいた勢いが弱まる事になる。現時点での戦力差から考えれば逆転される可能性はまずないが、

戦闘が長引いたせいで被害が増えるのは間違いない。

ゆりかご内部に突入するか、外部で殲滅戦を続けるか。

八神はやてという魔道師がいかに強力な力であっても、二つの事を同時にはこなせない。

なら自分はどうするべきか？ そんな事を考えていた時であった。

『……て、……やて、……はやて！』

『ん、その声……フェイトちゃん？ 無事やったんか？』

『うん、何とか、ね。スカリエッティをシャッ八達に引き渡して、今そっちに向かってる所。そっちは？』

『とりあえずごお疲れ様やね。……つと、危なっ！』

『はやて！？』

『あー、大丈夫大丈夫。空気読まへんのがいただけやから……つと
！！』

念話中に飛んできた流れ弾に当たりそうになったはやてだったが障壁が自動でガードする。

不意打ちとはいえ、流れ弾一発程度でははやての障壁を抜ける訳が無い。

お返しに撃ち込んだ砲撃でまた一つ、空に汚い花火が上がった。

『で、こっちの状況やんな？』

『うん。なのは達、まだ帰ってきてないの？』

『えつとな……。』

ここで二人は、お互いに状況を整理すべく情報を交換する。

フェイトからは、スカリエッティの研究所に突入してから今までの経緯が語られる。

最深部に突入してスカリエッティと対面したものの、閉じ込められた上にAMFの妨害で苦戦した事。

それに加えキャ口を利用して精神的に揺さぶりを掛けられたが、

エリオとアギトと協力し、何とかそれを撃破。スカリエッティとも
う一人の戦闘機人を確保した事。

今まで連絡がつかなかったのは脱出に手間取っていたからで、今
はこちらに向かっている途中との事である。

ちなみにスカリエッティ達の身柄は、脱出の際、その場に居合わ
せていたヴェロッサとシャツハに引き渡してある。

彼らはスカリエッティの研究所を発見した後は、内部での挟み撃
ちを防ぐために入り口付近に残ってフェイト達のサポートをしてい
た。

もつとも彼等の予想していたような事態は発生しなかったため、
非常に拍子抜けする事態になっていたのだが（某シスターは、どこ
ぞの幼女に不意打ちホームランされて以来鍛えてきた腕を振るう事
が出来ず消化不良気味であつたらしい）。

フェイト達がこの時間に脱出する事が出来たのは、この二人のお
かげであつたりする。

次に、はやてからはゆりかご周辺での出来事について。

外周部の敵の配置を見て、不自然に開いている穴を発見した事。

罠の可能性を考慮して少数精鋭で飛び込んだ事。

案の定待ち伏せされていたが、何とか予定通りなのはとヴィータ
を送り出せた事。

それから戦闘になったのだが、待ち伏せしていた相手が……キャ
口だった事。

シグナムにキャ口の使い魔を名乗る人から接触があり、そこでキ
ャ口の事情 故郷の集落を人質に取られているのが判明した事。

そしてやむなく、六課メンバー四人がかりでキャ口を撃破した事。
今はキャ口と戦闘した空域を起点にガジェットを制圧している途
中である事が、はやてから伝えられた。

『そんな事になってたんだ。……大丈夫？』

キヤロを撃破したというのはフェイトも知っていた。
はやての砲撃がキヤロに直撃する所を、フェイトは映像越しに見ていたからである。

キヤロにトドメを刺したのははやてだ。はやてが六課メンバーの事をどれだけ大切に思っているかはフェイトも知っている。その対象を自らの手で落とさないといけなかったはやての心中を考えると心配せずにはいらなかった。

それを聞いたはやての心中も、また複雑だった。

先程の情報交換で、はやては意図的にフェイトに知らせていない事がある。

フェイトが映像で把握出来たのはキヤロが撃墜された事だけで、その後起きた事についてはあまり良く知らない。

フェイトとの会話中、それに気付いたはやてはその後の経緯、キヤロの状態についてはばかして説明する事にした。この事をフェイトに言っても動揺させるだけでメリットが無いから、という理由で現状において自分達に求められている事を冷静に判断した結果ではあるが、人の生死に関わる事をメリット・デメリットで判断している自分に、はやては内心自己嫌悪していた。

そういった内面を押し殺してあくまで冷静に、はやては今すべき事を思考する。

『フェイトちゃん、あと何分でこっちに着く？』

『そんなに時間はかけないよ。あと5分もあれば。』

『……よっしゃ。なら、私と一緒に来てくれるか？』

『うん、そう言うと思った。』

目的語が欠けた念話の意図をフェイトは正確に察する。即ち

『私とフェイトちゃんの二人で内部に侵入。外の守りがちょっと心配やけど、そっちはシグナム達に任せれば何とかなるやる。』

二人のプランは、自分達のゆりかご侵入となのは達の救援。

中で何か起きているとするのなら、踏み込むタイミングは今を置いて他に無い。

外の状況も不安ではあるが、それに拘って本命を逃す訳にはいかない。

『了解。すぐにそっちに向かうね。』

『なるべく急ぎでお願いな。』

そんな彼女達に、足りない物があつたとするのなら

『……さん、……イトさん！ 待ってください、フェイトさん！』

『エリオの言う通りだって！ ああ、もう！ ……はやて部隊長！』

『その声……、アギトか？』

『ああ。それより、今はフェイト隊長の事だ。はやて部隊長、フェ

イト隊長を止めてくれ!!」

「ちょっと、アギト!? 私なら大丈夫だから」

「そんな事言つて!! 私もエリオも、それにフェイト隊長も、まともに戦える状態じゃないだろ!? 戦闘と脱出で消耗したせいで、ロクに魔力残ってねーじゃねーか!!」

「アギト、止め」

「フェイトちゃん、それ、ホンマの話?」

「……うん。」

フェイトの魔力は既により残されてはいなかった。

AMF内での戦闘はフェイトの魔力を容赦なく消耗させていき、フルドライブの使用によりそれは決定的になった。

それについて責める事はできない。AMFという強大なハンデを背負わされた状況は、そうでもしなければ打開する事は出来なかっただろう。真・ソニックフォームの使用は、あの時点で取れるベストの選択肢だった。

しかし、スカリエッティはその上を行っていた。

いくらAMFというハンデがあるとはいえ、ろくに鍛えていない一介の科学者である自分が、管理局の一線で戦い続けているランク魔道師に勝てる道理が無い。自分に出来る事が精々時間稼ぎしかないと知っていた彼は、自分からは攻勢に出ずに防御に専念した。

状況を利用し、言葉巧みに攻撃を牽制しながら消耗を誘う。その結果、自分とウーノの命運と引き換えにフェイトの魔力の大半を消費させる事に成功した。

試合に負けて勝負に勝つ。大局的に見ると、アジト内の戦闘はス

カリエツティの作戦勝ちだったのだ。

『ごめん、はやて。』

『それは黙ってた事に対してやんな？　じゃなかったら怒るで。とにかくそんな話聞いた以上は、フェイトちゃんには任せられへん。』

『……ごめん。』

『もう良えよ。今は私もちょっと意地悪やったし。となると……シグナム、シャル。』

『どうされましたか、主ははやて。』

『はやてちゃん？』

『シャル、キャロちゃんの具合は？』

『依然変わらず、ね。何かあったの？』

『そか……。実は、ちょっと相談したい事があるんやけど……。』

当初、はやてはフェイトと自分の二人で突入するつもりであったが、こんな話を聞いた後で同じ選択をする気にはなれなかった。救出に向かう側に万一の事があつては本末転倒。ミイラ取りがミイラになるなんて笑えない。

なのは達の事も心配だが、フェイトの事も大切だ。そんな死地に向かう真似はさせられない。

止めるのに多少キツイ良い方をしてしまったけど、そうでもしないとフェイトは本当に行ってしまうかねない。

私一人が嫌われる事で止められるなら安い物、いや、フェイトちゃんなら分かってくれてる、やんな？ 等と覚悟と甘えが入り混じった思考をしながらも、はやては並行して作戦を練る。

フェイトの代わりに誰かを連れて行くのなら誰にすべきか、シャルとシグナムを連れていった場合、外部の戦力をどうするか。特に自分の代わりとなる指揮官は、誰に代わってもらうか。

（リインを残す？ いや、それやと私の戦力が心許ない。なら、私とリインが外に残ってシャルとシグナムが中に……アカン。シャル単独にするなら私が単独で突入するのと変わらへん。なら、リインを……。）

はやてはいくつものパターンを脳内で考えるが、そのどれもが不安要素や欠陥を孕んでおり、なかなか結論に至らない。

こんな時ついつい頭をよぎるのは、「こういう時〇〇があれば」というある意味現実逃避にも似た思考。

最初の時自分も突入してれば、フェイトちゃんの魔力がもう少し残っていれば……

スバル達をもっと温存できていれば、ザフィーラが怪我していなかったら……

無駄だと分かっているでも考えてしまう。はやてはそれに囚われないうち自分律しながら、自分達がとるべき行動のみに集中していた。

キヤロちゃんが私達と一緒に戦ってくれていたら……

第80話 幻想のカケラ ｝Flowering Cherry｝（前編）（後

現状整理回。しばらく東方サイドばかりだったので決戦前にまとめました。

本格的に動き出すのは後編からです。

……というか現状整理だけで7000字超えるとか夢にも思っていなかったです。

では、また後編で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5810o/>

幻想幼女リリカルキャラ口Phantasm

2011年10月23日18時03分発行